仙台市文化財調査報告書第344集

養種園遺跡第２次
保春院前遺跡

発掘調査報告書

－都市計画道路「南小泉茂庭線」－
関連遺跡調査報告書Ⅱ

２００９年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第344集

養種園遺跡第２次
保春院前遺跡

発掘調査報告書

－都市計画道路「南小泉茂庭線」－
関連遺跡調査報告書Ⅱ

２００９年３月

仙台市教育委員会

序　文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、ご理解、ご協力をいただき誠に感謝申し上げます。仙台市内には約800箇所の遺跡が現在確認されています。これらの遺跡は先人達の知恵と努力によって今日まで伝えられてきたものであり、遺された貴重な文化遺産を保護し保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私達にとって大きな責務であると考えております。当教育委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、貴重な文化財を保存し後世に伝えるように努めているところであります。

さて、仙台市の東部に位置する南小泉周辺は市内でも遺跡が数多く分布しているところで、国史跡の遠見塚古墳をはじめとし、市内有数の規模を誇る南小泉遺跡、藩祖伊達政宗の晩年の居城となる若林城跡など、各時代を代表する遺跡がみられます。今回の報告は、都市計画道路「南小泉茂庭線」の建設に先立ち調査を行った養種園遺跡と保春院前遺跡の調査成果をまとめたものです。弥生時代の土器棺墓をはじめとし、奈良時代から近世にわたる人々の生活の跡を発見しています。とりわけ、中世から近世の集落跡や屋敷跡の発見は南小泉地域周辺の歴史を考えるうえで貴重な発見と言えます。本書に掲載した調査成果が、地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために多少なりともお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にご協力、ご指導いただきました多くの皆様や関係機関各位に心より感謝申し上げるとともに、文化財保護行政に対しまして、今後とも市民の皆様のご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成21年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒井　　崇

例　言

1．本書は、都市計画道路「南小泉茂庭線」の建設工事に伴い、平成８年７月から平成14年10月にかけて実施した仙台市若林区南小泉、文化町、保春院前丁、六十人町に所在する養種園遺跡（第２次）及び保春院前遺跡の発掘調査の成果を収録したものである。

2．本書の執筆・編集は渡部弘美が担当した。

3．陶磁器類の産地同定は文化財課 佐藤洋が行った。

4．陶器類の同定に関して、井上喜久男氏、藤澤良祐氏、前川要氏、森村健一氏から御指摘・御助言をいただいた。

5．製鉄類に関して、赤沼英男氏、五十川伸矢氏、越田賢一郎氏から御指摘・御助言をいただいた。

6．陶磁器類の実測・写真の一部は国際航業株式会社（現 国際文化財株式会社）に委託した。

7．本書に関わる図面・写真・遺物等の資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1．本書中で使用した地形図は国土地理院発行の５万分の１「仙台」の一部を使用した。

2．本書中の土色の記述は『新版標準土色帳』（小山・竹原：1973）による。

3．図中の座標値は平面直角座標系Ｘでの値である。高さ表示は海抜標高値である。

4．遺構番号は確認年度で分け、種別毎に３桁表示とした。平成10年度(98年)は200番台、平成11年度(99年)は300番台、平成12年度(2000年)は400番台、平成14年度(2002年)は500番台とし、通し番号を付した。

5．出土遺物は下記の略号を使用し、登録番号を付している。

Ａ：縄文土器　Ｂ：弥生土器　Ｃ：土師器　Ｄ：土師質土器　Ｅ：須恵器　Ｆ：古代瓦
Ｇ：近世瓦　Ｈ：瓦質土器　Ｉ：陶器　Ｊ：磁器　Ｋ：石器・石製品・礫石器
Ｌ：木器・木製品　Ｎ：金属製品　Ｐ：土製品　Ｒ：その他

6．土師器の実測図で内面の網は黒色処理を表している。

7．掘立柱建物跡及び柱列の柱間は柱痕跡の芯々間で計測したが、未確認時には柱穴底面の凹面ないし柱穴中央部で計測している。

目　次

序文
例言
凡例

Ⅰ　養種園遺跡・保春院前遺跡調査の概要…… 1
1　調査に至る経緯…… 1
(1) 調査に至る経過　(2) 調査要項
2　遺跡の立地と環境…… 1
(1) 地理的環境　(2) 歴史的環境

Ⅱ　調査の成果…… 7
1　中央調査区…… 7
(1) 98年調査区…… 7
1）建物跡　2）柱穴・ピット　3）溝跡　4）竪穴跡　5）土坑　6）土器棺墓
(2) 2000－2区の調査……59
1）溝跡　2）土坑
(3) 2000－3区の調査……62
1）溝跡
(4) 2000－4区の調査……64
1）溝跡　2）土坑
(5) 小結……65
2　西側東調査区……72
(1) 99－1区の調査……72
1）建物跡　2）柱列跡　3）土坑　4）溝跡　5）竪穴跡
(2) 2000－1区の調査……80
1）溝跡　2）土坑
(3) 99－2区の調査……84
1）土坑　2）溝跡
(4) 2002－2区の調査……85
1）建物跡　2）柱列跡　3）土坑　4）溝跡　5）竪穴跡
(5) 小結……103
3　西側西調査区……107
(1) 99－3区の調査……107
1）柱穴・ピット　2）土坑　3）溝跡　4)窯跡　5）竪穴跡
(2) 2002－1区の調査……132
1）土坑　2）溝跡　3）石敷遺構

(3) 99－4区の調査……146
1）建物跡　2）土坑　3）溝跡　4）竪穴跡
(4) 小結……178
4　東側調査区……180
(1) 2000－5・8区の調査……180
1）竪穴跡　2）炉跡　3）土坑　4）溝跡　5）柱穴・ピット
(2) 小結……189

Ⅲ　まとめ……189
1　遺構の構成……190
2　まとめ……190

Ⅳ　同定・分析……191
養種園遺跡・保春院前遺跡出土の金属類分析……191
養種園遺跡・保春院前遺跡より出土した木製品の樹種……212

写真図版
遺構写真
遺物写真
報告書抄録

Ⅰ　養種園遺跡第２次・保春院前遺跡調査の概要

１．調査に至る経緯

(1) 調査に至る経過

仙台市では、交通網の整備として各地区で都市計画道路の建設・整備が進められているが、当調査もこの一環で実施に至ったものである。南小泉茂庭線として、ＪＲ貨物線の西側の若林区六十人町から南小泉二丁目の宮城萩大通までの約900m区間が建設工事地となり調査対象地となる。道路計画自体は古くから立案されており地域住民を含め懸案の路線であった。路線上には南小泉遺跡、養種園遺跡が位置しており、これまでの調査で縄文時代から近世にいたる遺構及び遺物が確認されている。年次計画のもと２遺跡の調査を進めたが、南小泉遺跡分に関しては第28次発掘調査報告書として刊行しているので参照されたい。平成８年度に養種園遺跡東側（中央調査区地点）の確認調査を実施し、柱穴・幅広の溝跡・土器棺墓等を確認した。植木穴が数多く掘られ撹乱坑が散見されたが遺存状況は全体的に良好であった。平成10年度から本格的な調査に入ったが、ＪＲ貨物線の西側へ遺構群が広がることが確認され、平成11年度に遺跡範囲の拡大を行っている。さらに七郷堀の西側でも遺構・遺物が発見され、新規の遺跡として保春院前遺跡を登録している。平成14年度に調査を終了した。

(2) 調査要項

1　遺跡名称　養種園遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号01349）
　　保春院前遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号01555）

2　調査地点　仙台市若林区南小泉一丁目、文化町地内　　仙台市若林区保春院前丁、六十人町地内

3　調査理由　都市計画道路「南小泉茂庭線」建設工事

4　調査主体　仙台市教育委員会

5　調査担当　仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

　担当職員　平成８年度(96年)　主任　渡部弘美　文化財教諭　三塚　靖（確認調査）
　　平成10年度(98年)　主任　渡部弘美　文化財教諭　伊東真文　文化財教諭　松本知彦
　　平成11年度(99年)　主任　渡部弘美　文化財教諭　伊東真文
　　平成12年度(2000年)　主任　渡部弘美　文化財教諭　伊東真文
　　平成14年度(2002年)　主任　渡部弘美　文化財教諭　三塚博之

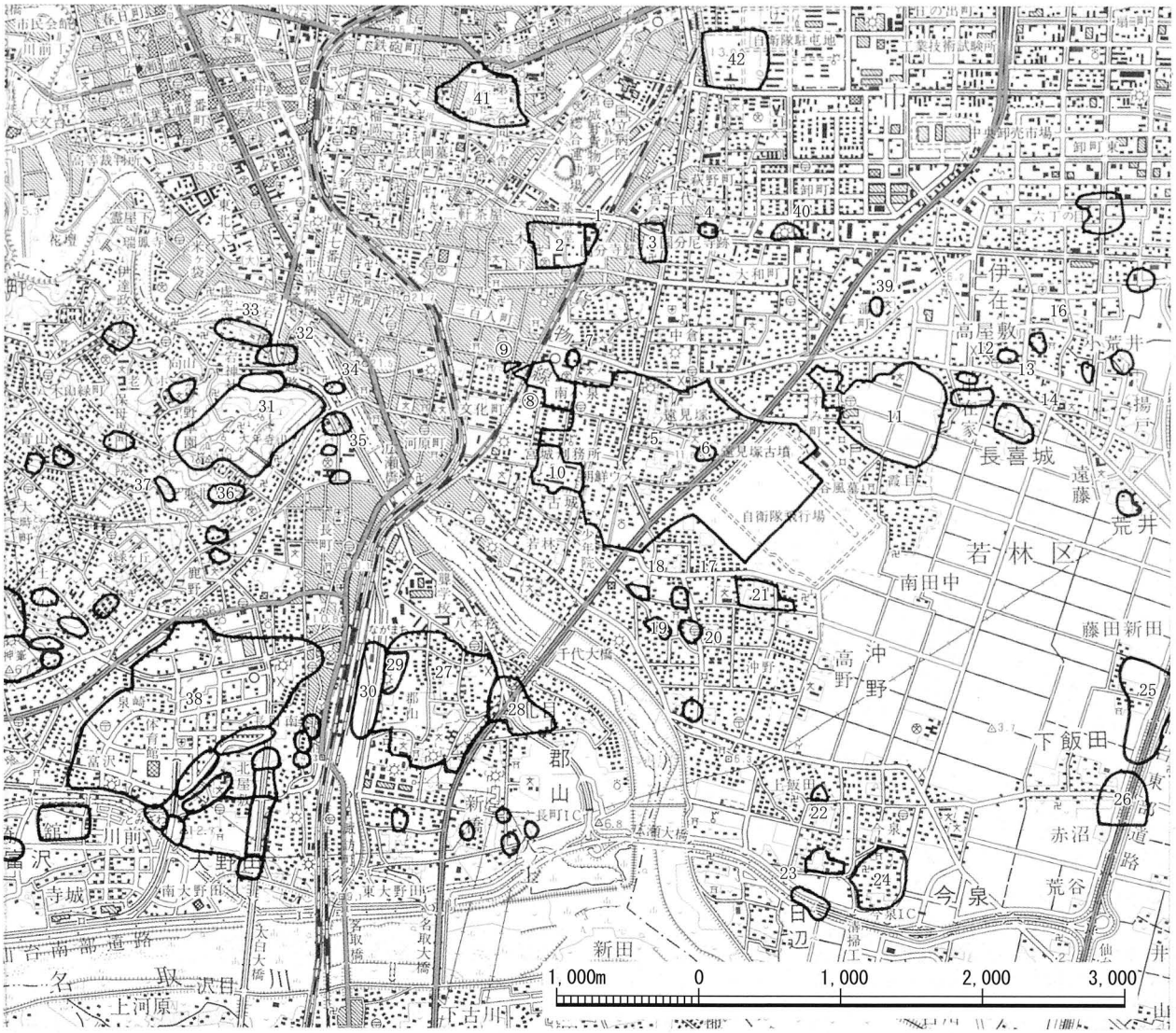
6　調査期間　平成８年度(96年)　平成８年７月29日～８月28日
　　平成10年度(98年)　平成10年６月10日～平成11年３月８日
　　平成11年度(99年)　平成11年４月12日～８月12日
　　平成12年度(2000年)　平成12年７月17日～10月11日
　　平成14年度(2002年)　平成14年６月３日～10月18日

7　調査面積　養種園遺跡　　約4,630㎡（調査対象面積約10,400㎡）
　　保春院前遺跡　約837㎡（調査対象面積約1,600㎡）

２．遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

養種園・保春院前遺跡はＪＲ仙台駅の南東約2.5kmの地点、若林区南小泉一丁目、保春院前丁に所在する。市内最大規模をもつ南小泉遺跡の北西端に位置し、伊達政宗晩年の居城となる若林城は南方約500mの地点に位置する。



番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代	番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	国分寺東遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世・近世	22	高田A遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
2	陸奥国分寺跡	寺院跡	自然堤防	古代・中世	23	高田B遺跡	河川跡・水田跡他	後背湿地	縄文～近世
3	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	自然堤防	古代	24	今泉遺跡	集落跡・城館跡	自然堤防	縄文～近世
4	志波遺跡	散布地	自然堤防	古代	25	藤田新田遺跡	集落跡・水田跡他	浜堤	弥生～古代
5	南小泉遺跡	集落跡他	自然堤防	縄文～近世	26	下飯田遺跡	集落跡・屋敷跡	浜堤	古墳～中世
6	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	27	郡山遺跡	官衙跡・寺院跡	自然堤防	縄文～古代
7	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	28	北目城跡	城館跡	自然堤防	縄文～近世
⑧	養種園遺跡	集落跡他	自然堤防	縄文～近世	29	西台畑遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代
⑨	保春院前遺跡	集落跡他	自然堤防	古代・中世・近世	30	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代
10	若林城跡	城館跡他	自然堤防	古墳～近世	31	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世
11	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	古代	32	大年寺山横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳～古代
12	中在家遺跡	包含地	自然堤防	古代	33	愛宕山横穴墓群	横穴墓	段丘・丘陵	古墳～古代
13	中在家南遺跡	河川跡・水田跡	後背湿地	弥生～近世	34	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳～古代
14	長喜城館跡	城館跡	自然堤防	中世	35	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
15	高屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	36	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳～古代
16	押口遺跡	河川跡・水田跡	後背湿地	弥生～近世	37	二ツ沢横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳～古代
17	神柵遺跡	官衙？	自然堤防	古代	38	富沢遺跡	水田跡他	自然堤防・後背湿地	旧石器～近世
18	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	39	曽利松明神古墳	円墳	自然堤防	古墳
19	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	40	谷地館跡	城館跡	自然堤防	中世
20	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生～古代	41	国分鞭館跡	城館跡	段丘	中世
21	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世	42	南目城跡	城館跡	自然堤防	中世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

広瀬川の愛宕堰付近から取水され東流する七郷堀が養種園遺跡の北側で高砂堀・仙台堀として分岐し北と東へ流れている。当遺跡が位置する仙台市東部は「宮城野海岸平野」に区分され、北は宮城郡七ヶ浜町から南は亘理郡山元町まで約40kmにわたって広がりをみせている。南方３kmの地点では広瀬川と名取川の合流点がみられ、両河川周辺には自然堤防・後背湿地が発達し旧河道も観察される。当遺跡は自然堤防上に立地し、標高は12～14mである。

(2) 歴史的環境

南小泉遺跡第28次調査の報告文で述べており参照されたい。ここでは概略を述べるにとどめる。

〔縄文時代〕

当地区で縄文時代の遺跡として確認されるのは養種園遺跡と南小泉遺跡の２遺跡である。南小泉17次・19次調査では土器や石器が少量出土しており、養種園１次調査・南小泉28次調査では縄文時代前期前葉の繊維土器が下層の黒色粘土層から発見され、今回調査の養種園遺跡では黒色粘土層よりも上位の黄褐色土シルト層から後期・晩期の遺物が出土しており注意される。各調査とも遺構は確認されていない。

〔弥生時代〕

当時代の遺跡として確認されるのは縄文時代同様に養種園遺跡と南小泉遺跡のみである。南小泉遺跡では昭和14～16年の霞目飛行場拡張工事の際に、大量の土器と石器が出土し、合口土器棺が15組確認されている。住居跡の発見こそないが、南小泉遺跡は弥生時代中期を主体とする集落遺跡の存在が窺われる。今回調査の養種園遺跡でも土器棺墓が確認されている。

〔古墳時代〕

周辺地域には遠見塚古墳・法領塚古墳・猫塚古墳の高塚の古墳が分布し、若林城内古墳のように上部が削平されたものもある。遠見塚古墳は４世紀末に築造された主軸110mを測る東北地方を代表する前方後円墳である。昭和50年から62年かけて環境整備に伴う調査が行われた。主体部は後円部に一辺約11mの排水施設をもつ方形の土坑内に南北方向に2基の割竹形木棺が埋設されていた。副葬品として碧玉製管玉・ガラス玉・竹製黒漆塗り竪櫛が出土している。周溝や周溝外側の自然流路からは祭祀に使用された土師器・須恵器・石製模造品が発見されている。４世紀中頃から7世紀にまでおよぶ遺物群で長期間に渡る祭祀が確認される。法領塚古墳は直径32m、高さ６mを測る円墳である。横穴式石室が確認され７世紀前半頃の築造である。青銅器製品・鉄製品・土師器・須恵器が出土している。若林城内古墳は推定直径22m程の円墳である。周溝底面・堆積土から円筒埴輪が多量に出土している。大野田古墳群や裏町古墳から出土する円筒埴輪に類似し５世紀後半から６世紀初頭頃の年代が考えられる。

集落跡の様相は各次調査で徐々に明らかとなってきている。前期の遺構は発見例が少なく、南小泉20次調査で竪穴住居跡が１軒確認されるのみである。中期になると、遠見塚古墳を囲むように広い範囲に住居跡群が確認される。南小泉12次調査ではカマドが設置されない住居跡が確認され、炉からカマドへの移行期が確認されている。南小泉16次調査では石製模造品の製作工房と考えられる住居跡や粘土溜めをもつ竪穴遺構が確認され、集落内の生産を担った地点と考えられている。南小泉17次・30次調査では中期から後期にかけての遺構が密集しており、30次調査では住居跡が21軒確認され集落の中心と考えられている。

〔飛鳥時代〕

養種園遺跡の南西２kmの地点、広瀬川右岸に郡山遺跡（官衙）が造営される。官衙跡は２期（Ⅰ・Ⅱ期）に区分され、Ⅰ期官衙が７世紀半ば～７世紀末、Ⅱ期官衙が７世紀末～８世紀初頭の時期となる。Ⅰ期官衙の規模は南北600m・東西400m程の範囲となり、大規模な掘立柱建物跡や総柱の建物跡群、掘立柱建物跡と竪穴建物跡とが共存する地点など各ブロックに分かれ構成されている。規模や遺構等から城柵と考えられている。Ⅱ期官衙はⅠ期官衙とほぼ同位置に造営される。規模は方四町（428m）となり造営基準方向は真北となる。一町隔てた南側には寺院が付属する。材木列跡や大溝跡が四方を巡り、南辺中央では南門、南半部では中枢の建物跡群が確認されている。Ⅱ

期官衙は多賀城以前の国府と考えられている。南小泉22次調査では当時期の集落跡が確認されている。関東系土器が一定量出土しており、移民に関わる集落の可能性が指摘されている。

〔奈良時代〕

陸奥国分寺は昭和30年～34年にかけて学術調査が実施され、昭和47年からは史跡公園の環境整備として調査が進められている。東西800尺（242m）、南北は北辺が不明となるが800尺以上、築地塀で囲まれた大規模な寺院であることが判明している。伽藍配置は法起寺と同じで中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧坊と並び、金堂の東には回廊の巡る七重塔が配される。大量の瓦が出土しており、「柴」・「行」・「標」・「会」など陸奥国の郡名を記した刻印瓦なども出土している。陸奥国分尼寺は昭和39年に調査が行われ「観音塚」と呼ばれる土壇状の高まりから礎石立の建物跡が確認されている。やや規模が小さい建物跡であるが金堂跡と考えられている。平成８年・13年の調査で金堂跡北側で大規模な掘立柱建物跡が確認された。伽藍配置等から尼坊跡と考えられている。建物跡は金堂と尼坊のみにとどまっており、全体像については未だ不明な点が多い。

南小泉地区では仙台東郊条里跡と呼ばれる真北を基準とする土地割りがみられた。現在は圃場整備等で現況は失われているが、二ノ坪・三の坪・尼ノ坪など条里に関わる地名が残っている。隣接する神柵遺跡では塀跡や堀跡の方向が条里型土地割りと一致し、８世紀中頃には条里制が施行されていた可能性が考えられている。当時期の集落の様相は不明な点が多かったが、養種園１次・南小泉28次調査で数多くの住居跡が確認されている。瓦が出土する住居跡もあり、北方に位置する陸奥国分寺・尼寺に関わる集落の可能性も考えられる。

〔平安時代〕

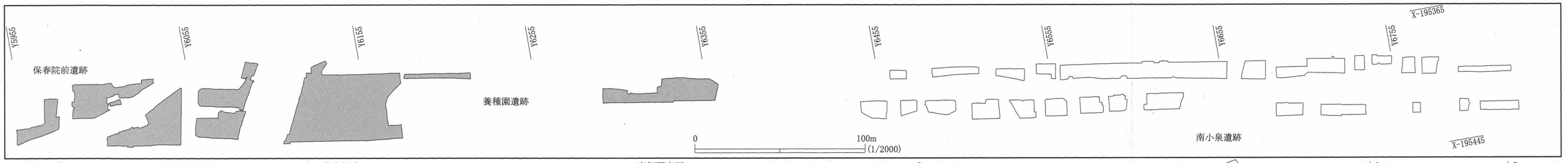
南小泉遺跡中央部～西部にかけての広い範囲で９世紀代を中心とする住居跡群が散在的に確認される。古墳時代中期の集落跡が東側で数多く確認されるのと対照的である。南小泉6次調査では床面積60㎡となる極めて大型の住居跡が確認され、大量の墨書土器の出土、石製の巡方の存在、一般集落とは性格を異にすると考えられる。若林城周辺の調査（南小泉４次・６次・７次・９次・11次調査）では30軒以上の住居跡が確認され、周辺地域が平安時代前半頃の中心域と考えられる。11～12世紀後半にかけては遺構の発見例が激減し様相が不明となる。住居形態の変化や土器から木器への変容が一因と考えられている。

〔中世・戦国時代〕

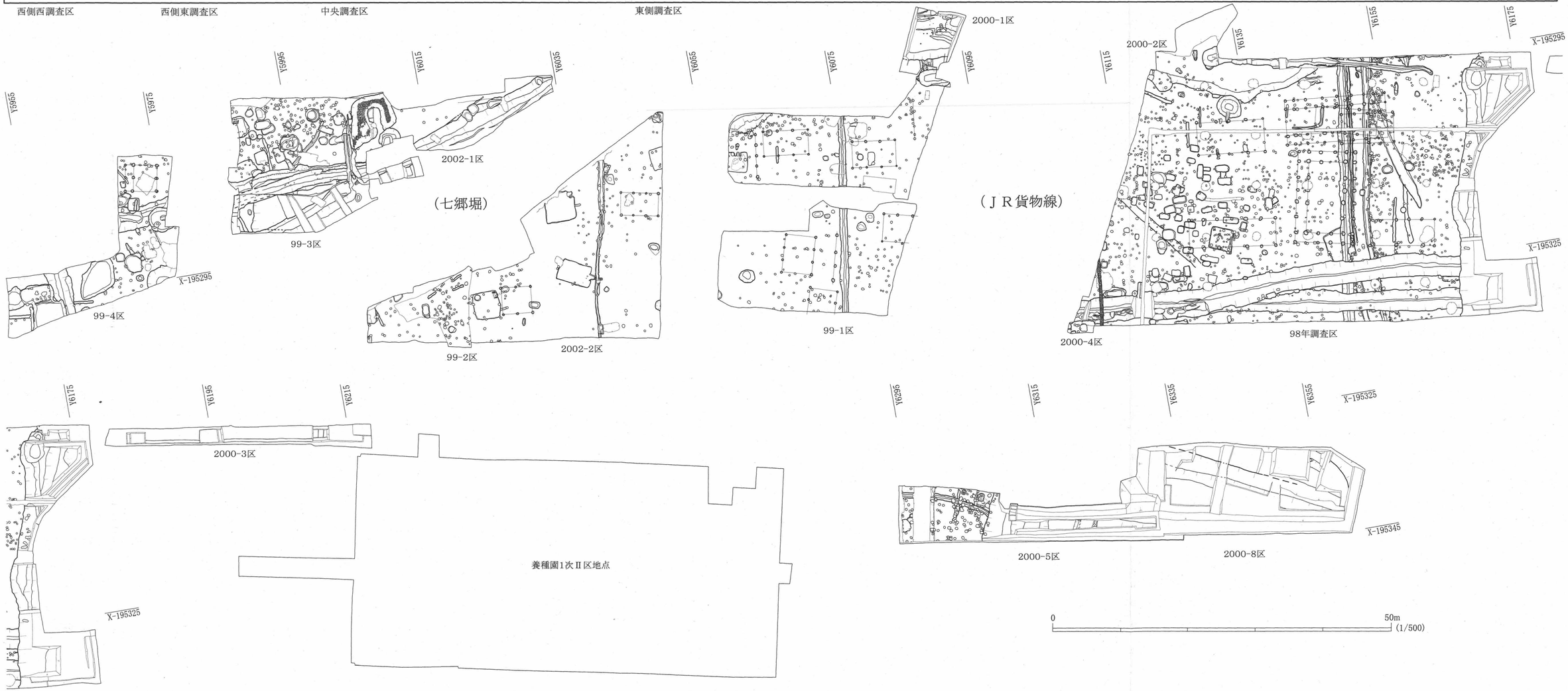
南小泉４次調査で初めて中世の遺構（15世紀頃の屋敷跡）が確認され、南小泉17次調査では12世紀後半頃の原始的な中世的屋敷が確認されている。南小泉16次調査では14世紀後半頃の巨大な堀と土塁が巡り、大規模な館に発展している。戦国時代の宮城県は北に葛西氏と大崎氏、南に伊達氏という勢力構造となる。留守氏、粟野氏などの小規模な国人領主が割拠し、南小泉周辺を含む宮城郡西部は国分氏の統治領となる。15世紀末～17世紀初頭にかけて養種園遺跡地内に大規模な遺構群が出現する（養種園１・２次調査）。これらの遺構群は規模等から家臣クラスの居住地と考えられており、若林城跡ないしそれに隣接する地点に存在が推察される国分氏居城の小泉城下町として考えられている。北方に位置する陸奥国分寺南側には国分日町という市町が存在しており、一連の城下町を形成していたものと考えられる。

〔近世〕

慶長５年（1600）に伊達政宗は青葉山の地に縄張りを行い、仙台城の築城を開始する。寛永４年（1627）、政宗は「屋敷」新築の願いが許可され若林城の造営に着手する。城下範囲は東西2.5km・東西1.5km程とみられ、若林城周辺の町並みは城下町の町割りを基本的に踏襲している。政宗の死去にともない若林城は解体されたが、養種園遺跡地内に二代藩主忠宗が「御仮屋」を、四代藩主綱村が「別荘」を造営する。南小泉28次調査では若林城下町期の土坑が確認され、養種園１次調査では御仮屋に付属する溝跡・土坑、別荘の堀跡等が確認されている。



西側西調査区　西側東調査区　中央調査区　東側調査区



第２図　調査区全体図

Ⅱ　調査の成果

養種園遺跡・保春院前遺跡の発掘調査は確認調査を含め平成８年から平成14年までの間で計５回実施した。計画道路幅は36m及び40mで遺跡内での長さは約480mとなる。今回調査の東側部には平成３～５年に調査を実施した養種園遺跡第1次調査のⅡ区・Ⅳ区・Ⅵ区・Ⅶ区がある。現況は宅地及び農園・指導農場の養種園跡地で、広瀬川から引かれた七郷堀が東流し、西側には南北にＪＲ貨物線の路線が延びる。部分的に撹乱坑も散見されたが全体的には遺構の残りは良好であった。発見遺構には掘立柱建物跡、溝跡、土坑墓、土坑、竪穴住居跡等がある。近世から中世の遺構群が主体を占め、奈良時代・平安時代の遺構が散見される状況である。東側に位置する南小泉遺跡分の調査成果とは対照的である。なお、全体調査区は七郷堀・ＪＲ貨物線・１次調査地区で分断され４ブロックに分かれる。便宜的に中央調査区、西側東調査区、西側西調査区、東側調査区の四地区とし、区毎の調査順に記述する。

１．中央調査区

98年調査区、2000年２区、2000年３区、2000年４区からなる。ＪＲ貨物線と養種園１次Ⅱ区地点の間に位置する。養種園跡地内である。発見遺構には掘立柱建物跡、溝跡、道路跡、竪穴建物跡、竪穴住居跡、土坑等がある。極めて遺構密度の高い地点である。基本層位は98年調査区で４層確認した。全体的に盛土がなされ下部に養種園時の耕作土と判断される層が広がる。壁面での観察ではあるがⅡ層及びⅢ層上面が遺構確認面となるがすべての遺構はⅣ層面で確認している。調査面積は約2,396㎡（98年調査区2,132㎡、2000－２区142㎡、2000－３区106㎡、2000－４区16㎡）である。

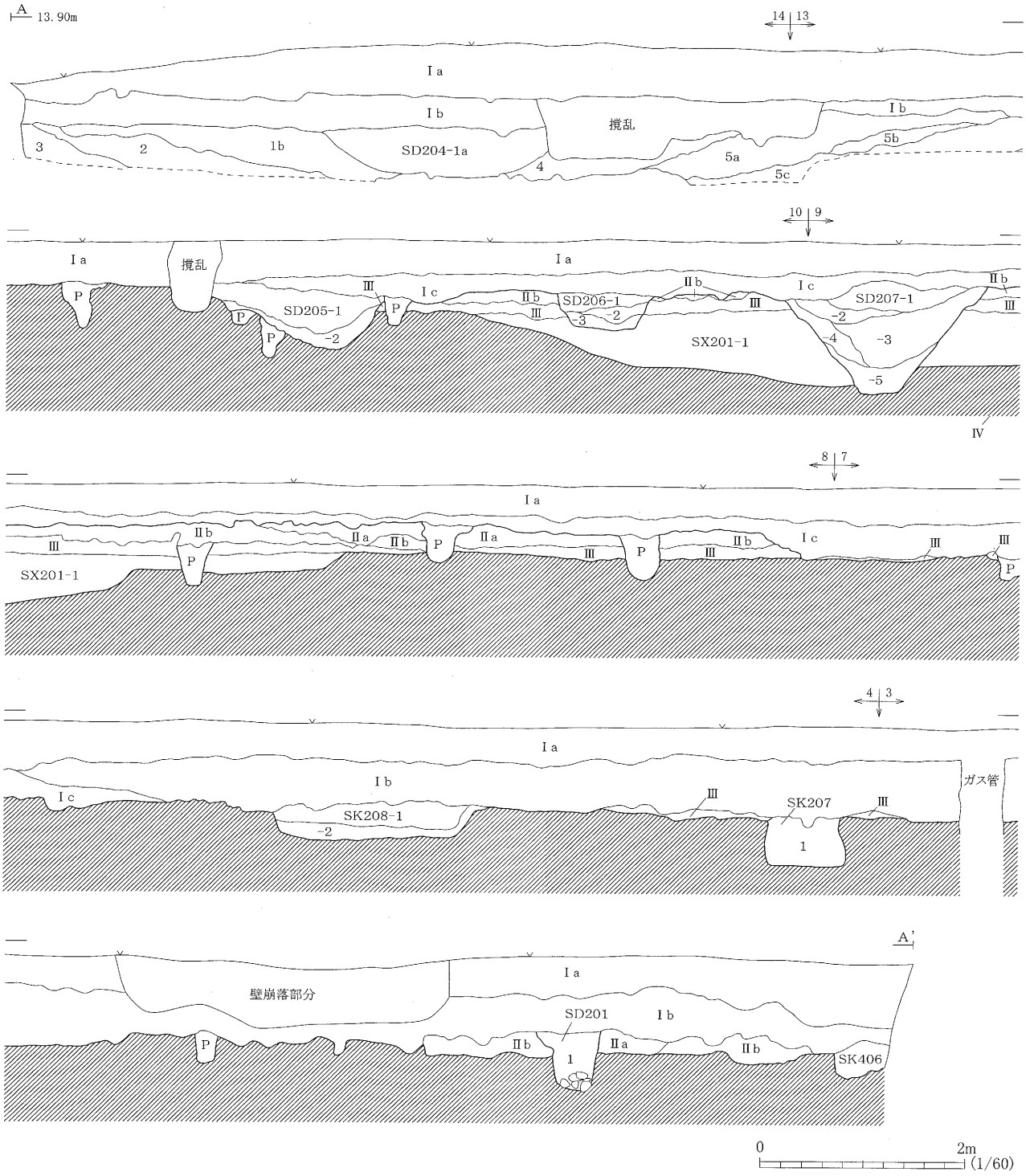
(1) 98年調査区

検出遺構は掘立柱建物跡７棟、溝跡22条、道路跡１条、竪穴建物跡１軒、竪穴住居跡１軒、土坑墓・土坑91基、土器棺墓１基、柱穴・ピット多数である。

１）建物跡

SB201掘立柱建物跡　E～G－８～10区に位置する。溝跡（SD206・SD207・SD212）と重複関係にあり建物跡が新しい。桁行５間、梁行３間で四面に庇が付く南北棟の掘立柱の建物跡である。建物方向は身舎西側でN－12°－Eを測る。身舎には２ヶ所に間仕切りがあり、北側から１間×３間・２間×３間・２間×３間の３室に分けられる。柱間間隔に違いがあり２間分でも南側が広い。なお、身舎西側の南から２個目と身舎北妻の東から２個目の柱穴が確認されていない。柱穴の平面形は円形を基調とするが方形状のものもみられる。大きさは長軸45～70cmを測るが、全体的に身舎部の柱穴は大きく、庇部はひとまわり小さい。深さは庇部に浅いものが確認されるが、全体的にみて底面高に大きな違いはみられない。P413が最も深く約65cmを測る。柱痕跡はほぼすべての柱穴で確認された。径10～16cmの円形で大きさに身舎部と庇部の違いは確認されない。柱間は身舎部と庇部がほぼ同間隔となり柱筋はすべて直線的に通る。柱間寸法は身舎の東側柱列（P979・P980・P424・P418・P9001・P410）で北側から2.38m＋1.88m＋（1.76）m＋（2.26）m＋（2.26）mの計10.5m、南妻側（P413・P412・P411・P410）で西側から1.83m＋1.76m＋1.79mで計5.38mを測る。庇の東側柱列（P959・P960・P601・P423・P417・P415・P409・P403）は北側から1.44m＋2.42m＋1.79m＋1.87m＋2.27m＋2.28m＋1.43mの計13.5m、南側柱列（P408・P407・P406・P405・P404・P403）で西側から1.44m＋1.81m＋1.76m＋1.92m＋1.47mで計8.4mを測る。なお、柱痕跡の堆積土中に炭化物・焼土を含むものが数多く確認されており、さらに焼土塊を含む柱穴も17基ある。16基の柱穴から土師器及び須恵器が出土しており、P413からは鉱滓も出土している。

SB202掘立柱建物跡　C・D－９～11区に位置する。建物跡（SB206・SB207）及び溝跡（SD205・SD206・SD207・SD211・SD214）と重複関係にあり、建物跡とは直接的な柱穴の重複がなく新旧は不明となるが溝跡よりは新しい。桁



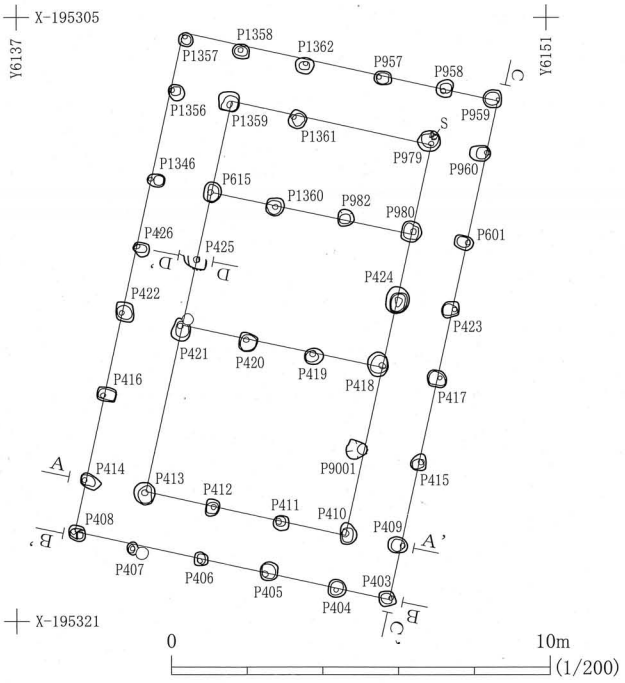
	層位	色調	性質	備考
	Ia	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	上部に砕石、下部は養種園時の耕作土
	Ib	褐色 10YR4/4	シルト	養種園時の耕作土
	Ic	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	養種園時の耕作土
	IIa	黒褐色 10YR3/2	シルト	やや粘土質、部分的にグライ化
	IIb	暗褐色 10YR3/4	シルト	やや粘土質、黄褐色土粒を斑に含む
	III	褐色 10YR4/6	シルト	暗褐色土粒をまだらに含む
	IV	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	下部につれてシルト質砂となる
SD204	1	褐色 10YR4/4	シルト	人為堆積、斑の層、小礫を含む
		暗褐色 10YR3/4	シルト	9ブロックに分けられる
SD205	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	
SD206	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	2	暗褐色 10YR3/4	シルト	
	3	暗褐色 10YR3/3	シルト	

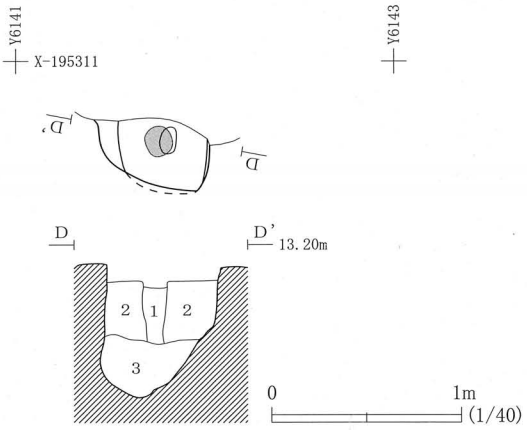
	層位	色調	性質	備考
SD207	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化物粒・黄褐色土粒を斑に含む
	2	褐色 10YR4/4	シルト	
	3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	互層状、
		暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	
	4	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
	5	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	下部はグライ化
SX201	1	にぶい黄橙色 10YR6/4	粘土質シルト	南側に展開する落ち込み
SK207	1	褐色 10YR4/6	粘土	暗褐色土を斑に含む
SK208	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	人為堆積？
	2	褐色 10YR4/4	粘土	
SD201	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	混成層、暗渠の埋土
		黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	
SK406	1	褐色 10YR4/4	粘土	98年時落ち込みとして確認。混成層
		暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	

第3図　98年調査区南壁断面

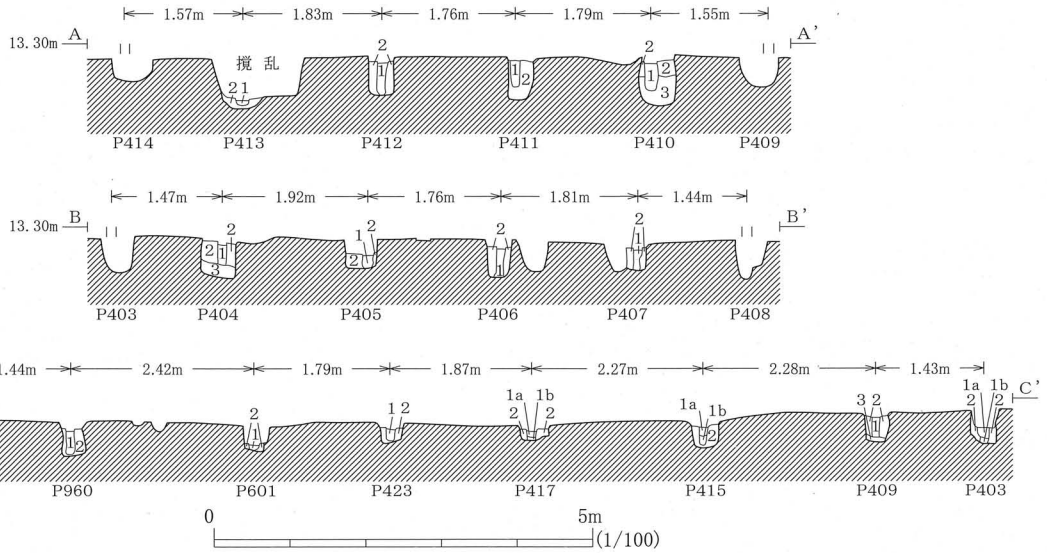
第４図　中央調査区遺構全体図

第５図　中央調査区掘立柱建物跡





層位	色　調		性　質	備　考
1	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	柱痕跡、焼土・炭化物を含む
2	褐色	10YR4/4	砂質シルト	互層状、炭化物粒を含む
	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	
3	黒褐色	10YR2/3	シルト	版築状になり固くしまっている

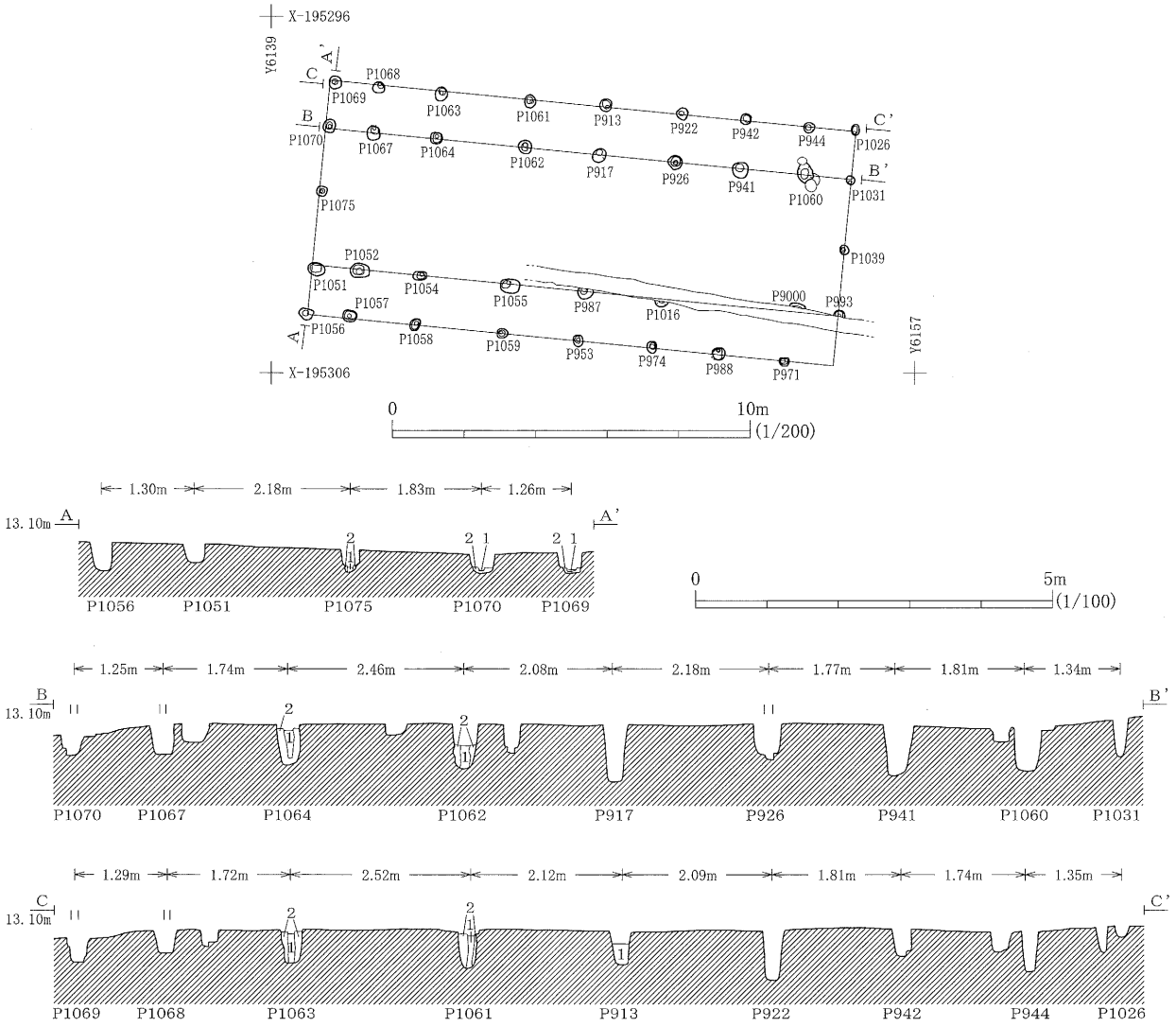


	層位	色　調		性　質	備　考
P413	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、黄褐色土粒を斑に含む
	2	褐色	10YR4/6	砂質シルト	暗褐色土粒を斑に含む
P412	1	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	柱痕跡、炭化物粒・焼土粒を多量に含む
	2	褐色	10YR4/6	砂質シルト	混成層、焼土・炭化物を含む
		暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	
P411	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、焼土粒を斑に含む
	2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	暗褐色土を含む
P410	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、焼土・炭化物を含む
	2	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	黄褐色土粒を斑に含む
	3	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	
P404	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	柱痕跡、焼土塊を含む
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	焼土粒を少量含む
	3	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	焼土粒を少量含む
P405	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	柱痕跡、焼土塊・炭化物粒を含む
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む
P406	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、下部に焼土塊あり
	2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	暗褐色土ブロックを含む
P407	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、焼土粒・炭化物粒を含む
	2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	
P959	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡
	2	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	暗褐色土をスジ状に含む
P960	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、焼土粒を斑に含む

	層位	色　調		性　質	備　考
P960	2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	混成層
		暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	
P601	1	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	柱痕跡、暗褐色土を含む
	2	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	
P423	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、焼土粒・炭化物粒を少量含む
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	混成層
		褐色	10YR4/4	粘土質シルト	
P417	1a	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、炭化物粒を少量含む
	1b	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	
	2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	
P415	1a	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、焼土塊・炭化物粒を含む
	1b	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	混成層
		褐色	10YR4/4	粘土質シルト	
P409	1	褐色	10YR4/4	砂質粘土	柱痕跡、焼土粒を含む
	2	暗褐色	10YR3/4	砂質粘土	
	3	暗褐色	10YR3/4	砂質粘土	混成層
		褐色	10YR4/4	砂質粘土	
P403	1a	暗褐色	10YR3/4	砂質粘土	柱痕跡、焼土塊・炭化物粒を含む
	1b	褐色	10YR4/4	砂質粘土	
	2	暗褐色	10YR3/4	砂質粘土	混成層
		褐色	10YR4/4	砂質粘土	

第6図　SB201掘立柱建物跡

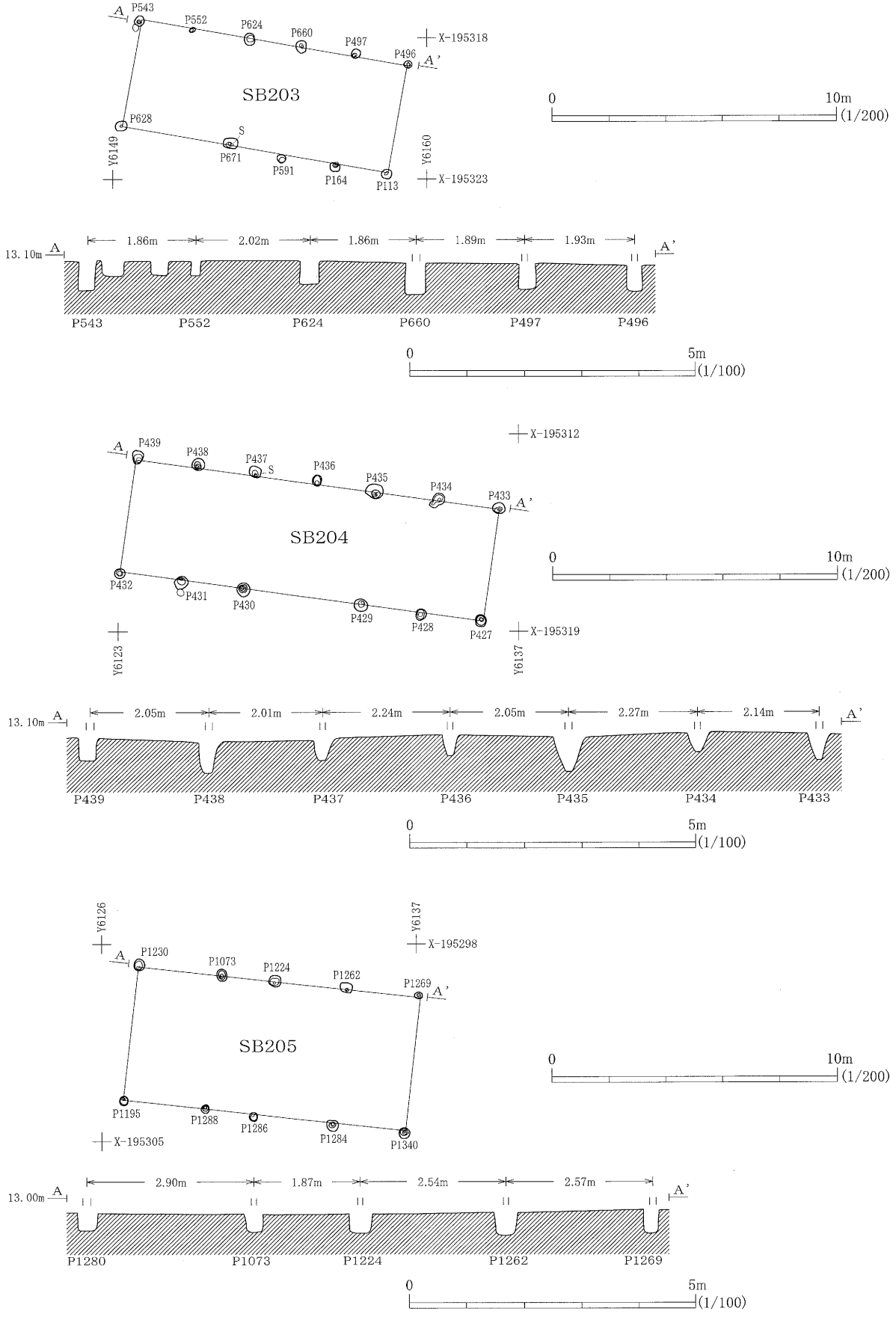
行８間、梁行２間で南北二面に庇が付く東西棟の建物跡である。建物方向は西妻側でN－６°－Eを測る。なお、身舎の南側柱列の東から３個目と庇の東南端の柱穴が撹乱等で確認されていない。柱穴の平面形は円形を基調とする。一辺60cmを測るものもあるが、径30～40cmのものが主体を占める。全体的にみて身舎部の柱穴は庇部に較べてやや大きい。深さは部分的に深い柱穴がみられるが大きく深さの違いはない。P917が最も深く約80cmを測る。柱痕跡は径10～15cmの円形で身舎部と庇部での大きさに違いは確認されない。なお、SB201同様に柱痕跡堆積土中に焼土・炭化物を含むものが確認されている。柱間は身舎部と庇部がほぼ同間隔となり柱穴・柱筋はすべて直線的に通る。柱間寸法は身舎の北側柱列（P1070・P1067・P1064・P1062・P917・P926・P941・P1060・P1031）で西側から1.25ｍ＋1.74ｍ＋2.46ｍ＋（2.08）ｍ＋（2.18）ｍ＋（1.77）ｍ＋（1.81）ｍ＋（1.34）ｍの計14.63ｍ、西妻側（P1069・P1070・P1075・P1051・P1056）で北側から1.26ｍ＋1.83ｍ＋（2.18）ｍ＋（1.30）ｍの計6.57ｍを測る。なお、身舎西妻から東へ３個目と４個目の柱間が他に較べて広い。P944で土師器・焼土塊、P953で炉壁・鉱滓、P1061で土師器・



	層位	色調	性質	備考
P1075	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、黄褐色土を少量含む
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
P1070	1	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	柱痕跡、暗褐色土を少量含む
	2	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	
P1069	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、炭化物少量含む
	2	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土、焼土粒・炭化物粒を含む
P1064	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、黄褐色土・炭化物粒を含む
	2	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	混成層
		黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	

	層位	色調	性質	備考
P1062	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、炭化物粒・黄褐色土粒を含む
	2	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	炭化物少量含む
P1063	1	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	柱痕跡、炭化物粒少量含む
	2	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	黄褐色土を含む
P1061	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	柱痕跡、炭化物粒・焼土粒を含む
	2	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	混成層
		褐色 10YR4/4	粘土質シルト	

第７図　SB202掘立柱建物跡

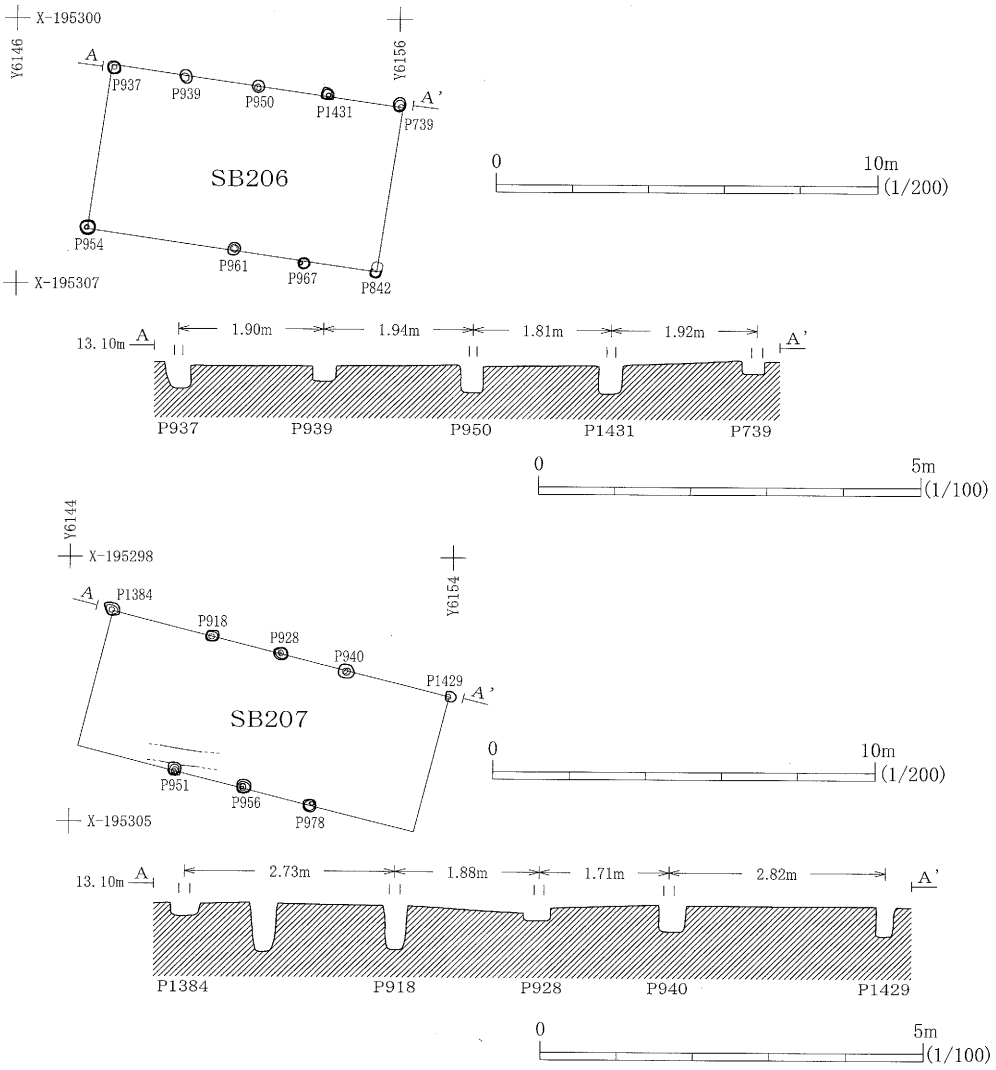


第８図　SB203・204・205掘立柱建物跡

骨片、P1067で骨片が出土している。

SB203掘立柱建物跡　G･H－11･12区に位置する。SD201の南東側2.5m東に位置する。溝跡（SD205･SD209･SD210･SD211）と重複しており建物跡が新しい。桁行５間、梁行１間の東西棟の建物跡である。建物妻側に柱穴・ピットが位置するが、柱間が不定であること対峙する柱穴が確認されないことから梁行は１間とした。建物方向は西妻側でN－９°－Eを測る。なお、南側柱列の西側から２個目の柱穴は確認されない。柱穴の平面形は円形を基調とする。大きさは径33～50cmを測る。深さはまばらである。P660が最も深く約55cmを測る。柱痕跡は径10～13cmの円形である。柱間はほぼ同間隔で柱筋は直線的に通る。柱間寸法は北側柱列（P543・P552・P624・P660・P497・P496）で西側から（1.86）m＋（2.02）m＋（1.86）m＋1.89m＋1.93mの計9.56m、東妻側（P496・P113）で（3.89）mを測る。４基の柱穴（P543・P591・P624・P628）から土師器及び須恵器が出土している。

SB204掘立柱建物跡　F･G－５･８区に位置する。SD201の南西側2.7m西に位置する。土坑（SK215･SK219･SK235･SK255）及び竪穴跡（SI203）と重複しており建物跡が新しい。桁行６間、梁行１間の東西棟の建物跡である。建物東妻側に柱穴・ピットが位置するがSB203同様に梁行は１間とした。建物方向は西妻側でN－８°－Eを測る。なお、南側柱列の中央の柱穴は確認されない。柱穴の平面形は円形及び方形のものがみられるが全体としては円形を基調する。大きさは径38～45 cmを測る。深さはまばらで、P435が最も深く約60cmを測る。柱痕跡がすべての柱穴で確認され径13cm前後の円形である。柱間はほぼ同間隔に並び柱筋は直線的に通る。柱間寸法は北側柱列（P439･P438･



第９図　SB206・207掘立柱建物跡

P437・P436・P435・P434・P433）で西側から2.05m＋2.01m＋2.24m＋2.05m＋2.27m＋2.14mの計12.76m、東妻側（P433・P427）で3.98mを測る。P430で鉱滓、P431で瀬戸美濃の皿（大窯）、P433・P436で土師器が出土している。

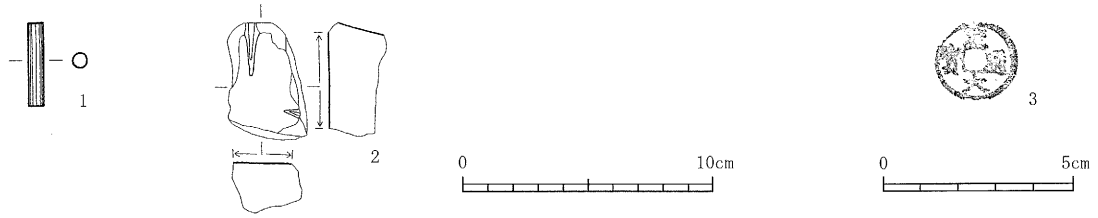
SB205掘立柱建物跡　C・D－6～8区に位置する。土坑（SK291・SK292）及び溝跡（SD213・SD215・SD221）と重複関係にある。土坑及びSD221とは直接的な重複がなく新旧は不明となるがSD213・SD215よりは新しい。桁行4間、梁行1間の東西棟の建物跡である。建物東西妻側に柱穴・ピットが位置するがSB203同様に梁行は1間とした。建物方向は梁西妻でN－6°－Eを測る。なお、西妻側から2個目と3個目の柱間が他に較べ狭くなっている。柱穴の平面形は円形及び方形のものがみられるが全体としては円形を基調とする。大きさは径30～42cmを測る。深さはほぼ同一で、最も深いP1269が43 cmを測る。確認された柱痕跡は径10～12cm程の円形である。柱間はほぼ同間隔に並び柱筋は直線的に通る。柱間寸法は北側柱列(P1230・P1073・P1224・P1262・P1269)で西側から2.90m＋1.87m＋2.54m＋2.57mの計9.88m、東妻側(P1269・P1340)で4.93mを測る。P1073で土師器、P1224で土師質土器が出土している。

SB206掘立柱建物跡　D・E－10～12区に位置する。建物跡（SB202・SB207）及び溝跡（SD205・SD206・SD207・SD211）と重複関係にある。建物跡とSD205・SD206とは直接的な重複がなく新旧は不明となるがSD207・SD211よりは新しい。桁行4間、梁行1間の東西棟の建物跡である。建物両妻側に柱穴・ピットが位置するがSB203同様に梁行は1間とした。建物方向は梁西妻でN－9°－Eを測る。なお、南側柱列の西から2個目の柱穴が確認されない。柱穴の平面形は円形を基調する。大きさは径30～40cmを測る。深さはまばらで最も深いP1431が36 cmを測る。確認された柱痕跡は径13～15cm程の円形である。柱間はほぼ同間隔に並び柱筋は直線的に通る。柱間寸法は北側柱列（P937・P939・P950・P1431・P739）で西側から1.90m＋1.94m＋1.81m＋1.92mの計7.57m、西妻側（P937・P954）で4.38mを測る。P842で土師器・鉱滓、P961で鉱滓が出土している。

SB207掘立柱建物跡　D－9～11区に位置する。建物跡（SB202・SB206）及び溝跡（SD205・SD206・SD207・SD211）と重複関係にある。建物跡とSD205・SD206とは直接的な重複がなく新旧は不明となるがSD207・SD211よりは新しい。桁行4間、梁行1間の東西棟の建物跡である。建物西妻側に柱穴・ピットが位置するがSB203同様に梁行は1間とした。南側柱列の東西妻部南側の柱穴が撹乱により確認されない。建物方向は西側の柱穴間（P918・P951）でN－15°－Eを測る。柱穴の平面形は円形を基調とする。大きさは径27～40cmを測る。深さはまばらで、最も深いP918が58 cmを測る。確認された柱痕跡は径12～14cm程の円形である。柱間はほぼ同間隔に並び柱筋は直線的に通る。柱間寸法は北側柱列（P1384・P918・P928・P940・P1429）で西側から2.73m＋1.88m＋1.71m＋1.82mの計8.14m、西妻側から1個目の柱穴間（P918・P951）で3.62mを測る。P951・P1429で土師器が出土している。

2）柱穴・ピット

大小の柱穴・ピットが調査区内で数多く確認されている。遺物も少なくさらに細片での出土となり時期不明のものが大半となる。この中で柱痕跡を有するものは建物跡ないし塀跡に関わるものと判断されるが、建物跡は上記に記載した建物跡7棟に留まる。建物跡は柱筋が直線上に並び平面形も矩形となり歪んだものはみられない。塀跡も偶然の帰結で一直線状となるものの存在が考えられた。柱穴の数及び散在した状況から建物跡・塀跡の存在は十分



	遺構・層位	種　別	特　徴	登録	写真
1	P170　埋土	棒状銅製品	円柱形、長さ34mm、径6mm、重さ8ｇ	N175	17-24
2	P648　埋土	砥石	下部・側面・裏面が欠損、2面の砥面確認、残存長46mm、残存幅30mm、残存厚20mm、砂岩	K160	
3	P1347　埋土	古銭	至大通宝、元　至大3年(1310)	N177	17-12

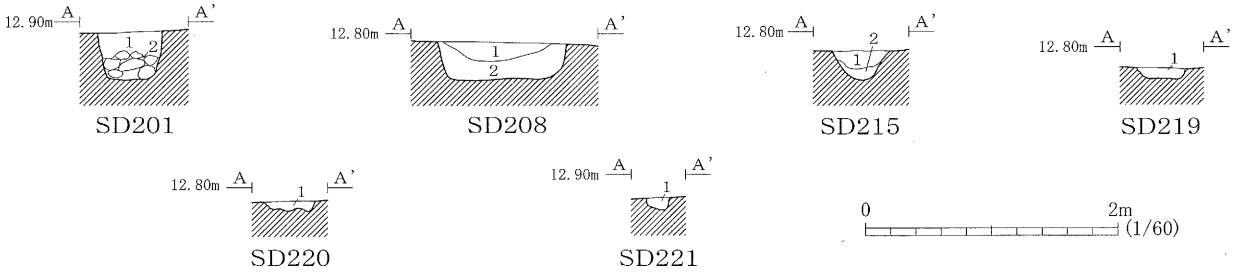
第10図　98年調査区柱穴・ピット出土遺物

に考えられたが不定とした。

3）溝跡

SD201溝跡　G～I－2区に位置する。SD202を切る。南北方向に直線的に延び確認長は9.9mを測る。軸方向はN－7°－Eである。底面に石組列を配した暗渠溝である。掘り方となる溝跡は上端幅45～50cm、下端幅30～32cm、深さ最大で45cm程を測る。壁面はきつくたち上がり断面は逆台形ないし矩形である。底面はほぼ平坦であるがゆるいU字状となる地点もある。石組は底面両脇に10～20cm大の河原石を一段分列状に並べ、蓋となる河原石を被せ、さらに一・二段分河原石をのせ、上部に土を充填した構造である。河原石に囲まれた中空部は幅10cm程、高さ8cm程となる。底面高は南側に向かい低くなっている。土師器、須恵器、陶器が出土している。

第11図　中央調査区西側溝跡



	層位	色調	性質	備考
SD201	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	人為堆積
	2	褐色 10YR4/4	粘土	グライ化
SD208	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	褐灰色土・酸化鉄粒をまばらに含む
	2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	暗褐色土粒を含む

	層位	色調	性質	備考
SD215	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	黄褐色土ブロックを含む
	2	褐色 10YR5/8	粘土質シルト	暗褐色土を小ブロックで含む
SD219	1	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	
SD220	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	暗褐色土を斑に含む
SD221	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土をスジ状に含む

第12図　中央調査区西側溝跡断面

SD208溝跡　E～G－3～5区に位置する。SK217・SK219・SK233に切られる。北西方向に直線的に延び確認長16.6mを測る。軸方向はN－40°－Wである。上端幅95～100cm、下端幅78～86cm、深さ最大で30cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面は逆台形ないし矩形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認した。土師器、須恵器、中世陶器が出土している。

SD213溝跡　D－6区に位置する。SB205に切られる。やや不整な溝で確認長1.6mを測る。軸方向はN－1°－Eである。上端幅30～45cm、下端幅12cm前後、深さ最大で25cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面は逆台形ないし矩形である。底面はほぼ平坦であるがゆるいU字状となる地点もある。堆積土は1層確認した。古銭が出土している。

SD215溝跡　C－7区に位置する。SB205に切られSK294を切っている。北側部は撹乱で壊され確認長は1.54mに留まる。南北方向に延び軸方向はN－19°－Eである。上端幅47cm、下端幅15cm、深さ最大で24cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面は逆台形である。底面はほぼ平坦であるが皿状となる地点もある。堆積土は2層確認した。

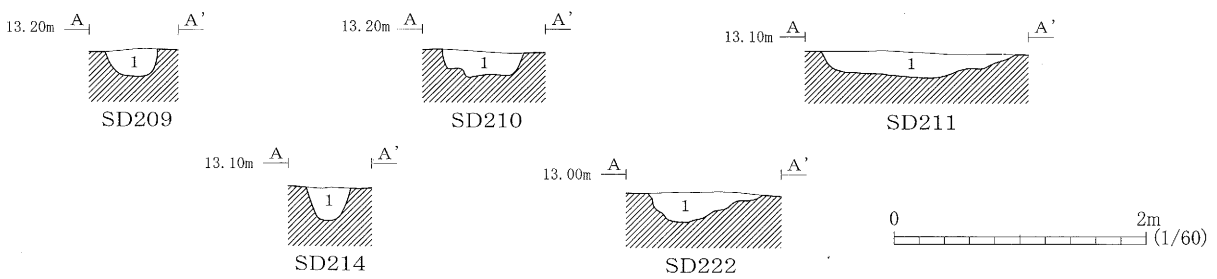
SD219溝跡　B・C－5区に位置する。直線的に延び確認長4.3mを測る。軸方向はN－58°－Wである。上端幅38～47cm、下端幅25～35cm、深さ最大で11cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面は逆台形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層の確認である。土師器が出土している。

SD220溝跡　C・D－6区に位置する。直線的に延び確認長3.77mを測る。軸方向はN－8°－Eである。上端幅28～40cm、下端幅15～25cm、深さ最大で8cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面はやや不整の逆台形である。底面はやや凹凸面となる。堆積土は1層の確認である。土師質土器鉢、中国産白磁皿が出土している。

SD221溝跡　C－6区に位置する。SB205と重複関係をもつが直接的な切り合いがなく新旧は不明である。南北方向に直線的に延び確認長3.04mを測る。軸方向はN－8°－Eである。上端幅18～24cm、下端幅14～17cm、深さ最大で10cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面はやや不整の矩形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層の確認である。

SD209溝跡　F～H－11区に位置する。SB203に切られる。南北方向に直線的に延び確認長6.5mを測る。軸方向はN－11°－Eである。上端幅27～46cm、下端幅22～28cm、深さ最大で21cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面は逆台形ないし矩形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層の確認である。土師器、須恵器が出土している。

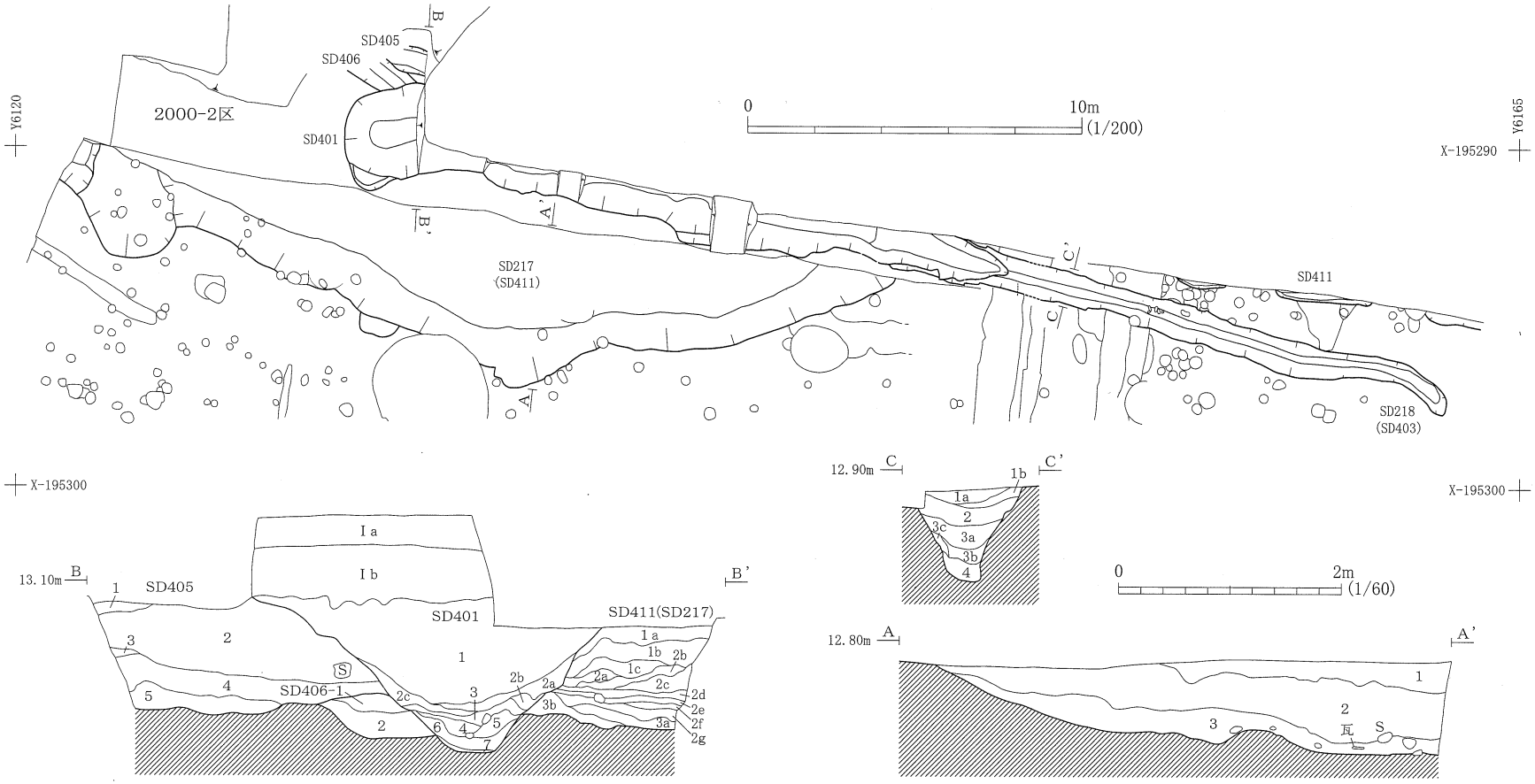
SD210溝跡　F～H－12区に位置する。SB203・SK269・SD211に切られる。南北方向に直線的に延び確認長8.79mを測る。やや屈曲しており軸方向はN－4～6°－Eである。上端幅46～70cm、下端幅45～54cm、深さ最大で19cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面は逆台形である。底面はほぼ平坦であるが凹凸面もみられる。堆積土は1層の確認である。土師器が出土している。



	層位	色　調	性　質	備　考
SD209	1	褐色　10YR4/4	シルト	黄褐色土粒を含む
SD210	1	暗褐色　10YR3/3	シルト	黄褐色土粒を含む
SD211	1	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	黄褐色土粒を含む

	層位	色　調	性　質	備　考
SD214	1	黄褐色　10YR5/6	粘土質シルト	暗褐色土ブロックを含む
SD222	1	暗褐色　10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土をスジ状に含む

第13図　中央調査区東側溝跡



	層位	色調		性質	備考
	Ia				砕石・盛土の層
	Ib	褐色	10YR4/4	シルト	盛土及び養種園時の耕作土
SD217	1	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	焼土粒を少量含む
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	部分的に灰黄褐色土をスジ状に含む
	3	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	全体的に薄い層状、大小の礫を含む
SD218	1a	褐色	10YR4/4	砂質シルト	明黄褐色土粒を少量含む
(SD403)	1b	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
	2	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	酸化鉄集積スジ状に入る
	3a	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	黄褐色土(壁崩壊土？)をまばらに含む
	3b	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	
	3c	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	黄褐色土をスジ状に含む
	4	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	底面に酸化鉄集積面あり
SD401	1	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	人為堆積層、細かく10層程に分かれる
		暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	2層との境に炭化物層がみられる
	2a	褐灰色	10YR4/1	粘土	炭化物をスジ状に含む

	層位	色調		性質	備考
SD401	2b	褐灰色	10YR5/1	粘土	層下部に酸化鉄集積面あり
	2c	褐灰色	10YR6/1	粘土	層下部に酸化鉄集積面あり
	3	褐灰色	10YR6/1	粘土	
	4	灰色	7.5Y4/1	粘土	グライ化
	5	暗緑灰色	5G4/1	粘土	グライ化
	6	灰色	5Y4/1	粘土	植物遺体を含む、グライ化
	7	暗青灰色	5G4/1	粘土	粗砂を含む、グライ化
SD405	1	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	にぶい黄橙色ブロックを含む
	2	褐灰色	10YR5/1	シルト	酸化鉄を斑に含む
	3	灰黄褐色	10YR6/2	粘土質シルト	酸化鉄を斑に含む、炭化物を含む
	4	にぶい黄橙色	10YR7/2	粘土質シルト	酸化鉄を斑に含む
	5	灰黄褐色	10YR6/2	砂質粘土	底面に酸化鉄集積面あり
SD406	1	黄灰色	2.5Y6/1	粘土質砂	細砂、酸化鉄を斑に含む、グライ化
	2	黄灰色	2.5Y5/1	粘土	互層、底面に酸化鉄集積面あり
		褐灰色	10YR6/1	粘土	

	層位	色調		性質	備考
SD411	1a	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	混成層、酸化鉄を斑に含む
(SD217)		褐灰色	10YR5/1	粘土質シルト	
	1b	灰黄褐色	10YR5/2	粘土質シルト	酸化鉄を斑に含む
	1c	灰黄褐色	10YR5/2	シルト質粘土	酸化鉄を斑に含む
	2a	褐灰色	10YR5/1	粘土	酸化鉄を斑に含む
	2b	灰黄褐色	10YR6/2	砂質粘土	酸化鉄を斑に含む
	2c	黄灰色	2.5Y6/1	砂質粘土	酸化鉄を斑に含む
	2d	褐灰色	10YR5/1	粘土	酸化鉄を斑に含む
	2e	褐灰色	7.5Y5/1	粘土	粗砂・酸化鉄を層的に含む
	2f	褐灰色	7.5Y6/1	粘土	粗砂・酸化鉄を層的に含む
	2g	褐灰色	10YR5/1	粘土質砂	粗砂・酸化鉄を斑に含む
	2h	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	3a	灰黄褐色	10YR6/1	粘土	粗砂・酸化鉄を含む
	3b	灰黄色	2.5Y6/2	粘土質砂	細砂

第14図　中央調査区北側溝跡

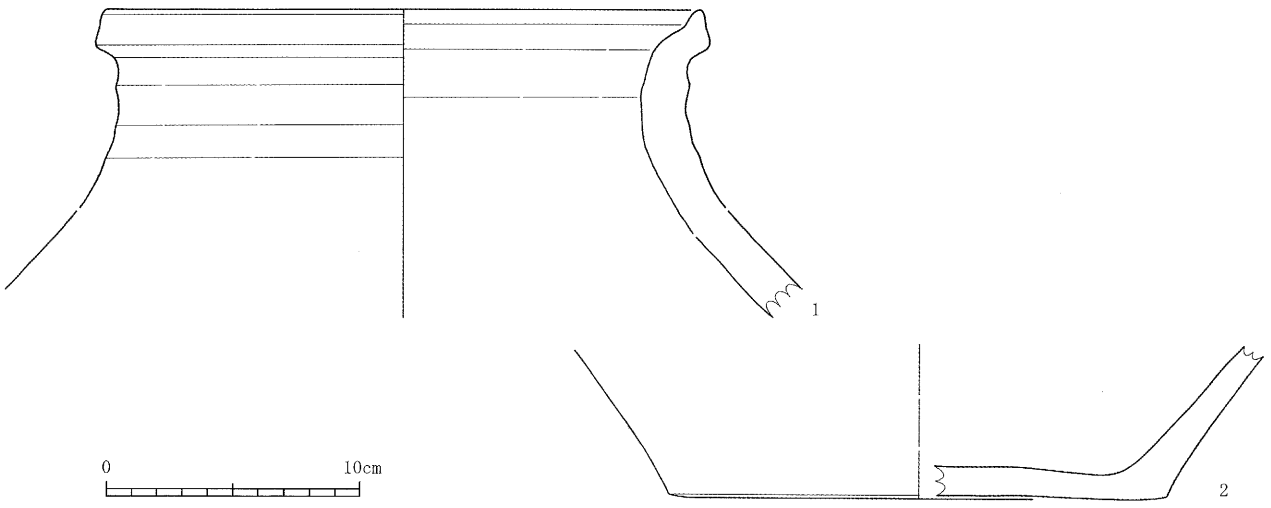
SD211溝跡　C～G－11・12区に位置する。SB202・SB206・SB207・SK279・SD205・SD210と重複関係にあり、SD210を切り他遺構に切られる。やや幅広のもので確認長19.35mを測る。軸方向はN－13°－W前後である。上端幅160cm前後、下端幅70～85cm、深さ最大で18cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面は皿形である。底面はほぼ平坦であるがゆるいU字状となる地点もある。堆積土は1層確認した。弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

SD214溝跡　C・D－9・10区に位置する。SB202・SB207と重複関係にあり、SB202に切られSB207とは直接的な切り合いがなく不明である。L字状に屈曲するもので南辺と東辺が確認される。南辺側確認長4.2m、東辺側確認長2.75mを測る。東側辺の軸方向はN－12°－Eである。上端幅25～49cm、下端幅12～22cm、深さ最大で28cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面はきついU字形ないし逆台形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層確認した。位置・規模から推察してSD216は一連の遺構の可能性がある。出土遺物はない。

SD216溝跡　C･D－8区に位置する。SB202に切られる。南北方向に直線的に延び確認長1.97mを測る。軸方向はN－13°－Eである。上端幅24～32cm、下端幅14～22cm、深さ最大で10cmを測る。壁面はきつくたち上がり断面はきついU字形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層の確認である。

SD222溝跡　C－9・10区に位置する。SD217に切られる。東西方向に延びるやや不整な溝跡で西側は北側へ屈曲する。確認長3.35m程を測る。東西軸方向はE－1°－Sである。上端幅99～133cm、下端幅72～105cm、深さ最大で23cmを測る。壁面は南側がきつく立ち上がるが北側はややゆるい傾斜面となる。断面はややきつい皿形となる。底面は平坦面もみられるがゆるい凹凸面となる。堆積土は1層の確認である。出土遺物はない。

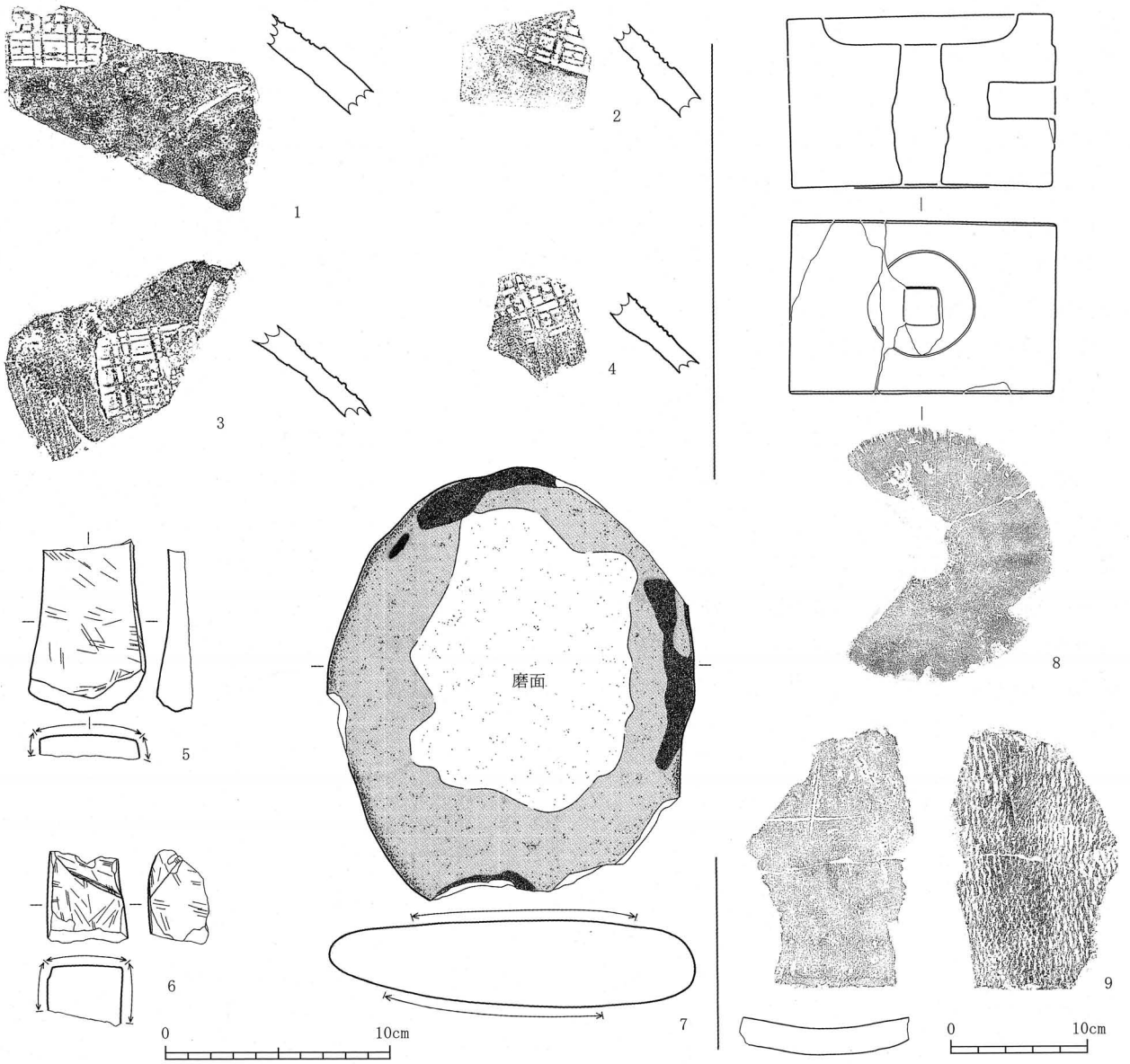
SD217溝跡　A～C－5～10区に位置する。2000－2区調査も含めてみると、土坑（SK294・SK298・SK401・SK402・SK403）及び溝跡（SD205・SD207・SD208・SD212・SD222・SD401）と重複関係にあり、SK298・SD222より新しく他の遺構より古い。東西方向へ延びており南辺のみの確認である。南辺は北側へ「く」の字状に屈曲し、壁面はゆるい立ち上がりとなる。10～13ラインの北壁で堆積土断面及び落ち際が確認され、ゆるやかなに蛇行しながら東へ延びているものと判断される。深さは最大で90cmを測る。98年調査での確認長は24.7mを測るが、壁部を含めると約45mとなる。底面はゆるい大小の筋状の凹凸面がみられる。堆積土は大きく3層に分けたが全体的に薄い層の集まりで構成されている。堆積土状況及び底面状況から判断して北側に位置する2000年調査のSD405・SD406は同一の溝跡の可能性がある。弥生土器、古瓦、常滑の甕・壺、古瀬戸の灰釉三足盤、龍泉窯の青磁椀、茶臼、砥石、板状の銅製品、フイゴの羽口、坩堝、円礫が出土している。



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　甕	埋土	口縁部受け口状となり口唇部断面三角形、口径235mm、常滑	I1239	
2	陶器　甕	埋土	底部片、底径（195）mm、全体的に灰黄色、常滑（中世前半）	I1245	

第15図　SD217溝跡出土遺物1

SD218溝跡　B・C－10～13区に位置する。西側部は2000－2区調査での確認となる。SD217・SD401に切られSD205・SD206・SD207・SD212・SK295を切っている。東西方向へほぼ直線状に延び東端部でやや屈曲し立ち上がる。確認長は15.4mを測る。東西軸方向はE－15°－Sである。上端幅72～82cm、下端幅13～23cm、深さ50cm前後を測る。壁面はきつく立ち上がり断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は大別で4層確認した。縄文土器、土師器、古瓦、礫が出土している。



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	陶器　甕	埋土	体部片、格子状の押印有り、常滑	I1247a	
2	陶器　甕	埋土	体部片、格子状の押印有り、常滑	I1244	
3	陶器　甕	埋土	体部片、格子状の押印有り、常滑	I1247b	
4	陶器　甕	埋土	体部片、格子状の押印有り、常滑	I1249	
5	砥石	埋土	平面は長方形、裏面欠損、長さ(76)mm、幅(50)mm、厚さ(16)mm、3面の砥面確認、安山岩質凝灰岩	K152	
6	砥石	埋土	平面は長方形、裏面欠損、長さ(40)mm、幅(33)mm、厚さ(26)mm、3面の砥面確認、安山岩質凝灰岩	K153	
7	円礫	埋土	扁平な礫、上下面が平滑な磨面、全面に煤付着、長径(190)mm、短径(161)mm、厚さ39mm、重さ1970ｇ	K151	
8	石臼	埋土	茶臼の上臼、直径192mm、高さ127mm、挽き手孔面に円形の凸面装飾有り、安山岩	K150	17-29
9	古代瓦　平瓦	埋土	凸面：縄叩き(縦位)、凹面：布目痕、端部にヘラケズリ、色調：灰白色、凹面に「＋」の線刻あり、厚さ19mm	F19	

第16図　SD217溝跡出土遺物2

SD202溝跡　H・I－2～13区に位置する。調査区南側を東西方向に貫く溝跡である。各遺構と重複関係をもつがSD201・SD204・SK201より旧く、他の遺構群より新しい。ゆるやかな蛇行をみながら延び、確認長は約58.5mを測る。底面での軸方向はE－4°－S前後となる。一条の溝跡と判断していたが断面観察時にSD202を切る溝跡を西側で確認しSD202Aとした。SD202Aは上端・断面状況から判断すると6区より西側に位置し直線的に延びている。両溝跡は深さには違いがみられるがほぼ重なり合っている。

SD202Aは上端幅3.5～3.65m、下端幅70～90cm、深さ120～135cmを測る。壁面は南面がきつく立ち上がり北面はややゆるく立ち上がり壁面長に違いが見られる。断面形は変形した逆台形となる。I－5区東側で壁面を削り出し一段低い底面が西側へ続いている。東側の底面はやや丸みをもつがI－5区以西では凹凸面とはなるが面が確認される。堆積土は大別で4層確認した。1層が人為堆積層で溝埋め戻しの土である。2層以下は自然堆積層で全体的にグライ化している。

SD202は上端幅3.15～4.19m、下端幅15～32cm、深さ180cm前後を測る。壁面はきつく立ち上がり断面はV字形となる。底面は極めて狭く、底面高は全体的にほぼ同じで東西に差はない。堆積土は大別で7層確認した。下部はレンズ状堆積となり自然堆積が確認されたが、上部は人為堆積となりSD202A同様に溝は埋め戻されている。11区の北壁では鍛造剥片が密着した状態で大量に検出されている。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、古瓦、土師質土器擂鉢、瓦質土器（鉢・擂鉢）、中世陶器（甕・擂鉢、在地の甕）、常滑（甕・壺）、古瀬戸（折縁皿・盤・卸皿）、瀬戸美濃の皿、瀬戸の天目茶碗、龍泉窯系の青磁碗、景徳鎮窯（染付皿・碗）、中国の白磁（皿・碗）、石鉢、石臼（粉挽き臼・茶臼）、砥石、礫、剥片石器、古銭（永楽通宝・皇宋通宝）、鉄製品、銅製品、鍛造剥片、漆皮膜（赤・黒）、フイゴの羽口、坩堝、炭化米、骨片が出土している。

SD203溝跡　I・J－5～13区に位置する。直線的に東西方向に延びる。SD202・SD204に切られ、道路跡（SD205・SD206）・SD207を切る。確認長は37.8mを測る。東西軸方向はE－9°－Sである。上端幅3～3.4m、下端幅20～30cm、深さ130cm前後を測る。壁面はゆるく立ち上がり断面は逆三角形状となる。堆積土は大別で3層確認した。1層は人為堆積土で埋め戻し土である。9区ではレンズ状堆積となる焼土層（2b層）が確認されている。土師器、古瓦、土師質土器、瓦質土器鉢、常滑の甕、石鉢、石臼（粉挽き臼・茶臼）、板碑、砥石、石鏃、勾玉、古銭（永楽通宝）、釘、刀子、鉱滓、骨片が出土している。

A－A'	層位	色	調	性　質	備　考
SD202	1	褐色	10YR4/4	シルト	人為堆積、層的に堆積がみられる
A		暗褐色	10YR5/3	粘土質シルト	
		にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土	
	2a	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	2b	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	グライ化
	3	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	4a	褐灰色	10YR5/1	粘土	
	4b	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	グライ化
	4c	にぶい黄橙色	10YR6/3	粘土	グライ化
SD202	1a	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	1b	褐灰色	10YT4/1	粘土質シルト	
	2a	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	2b	黄灰色	2.5Y4/1	粘土	グライ化
	3a	にぶい黄橙色	10YR6/3	粘土	下部に酸化鉄が集積
	3b	にぶい黄橙色	10YT6/3	粘土	下部に酸化鉄が集積

B－B'	層位	色	調	性　質	備　考
SD202	1	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	人為堆積
A		灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土	
SD202	1a	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	1b	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	グライ化
	1c	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	グライ化
	2	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土	
	3a	褐灰色	10YR5/1	粘土	グライ化
	3b	黒褐色	10YR3/1	粘土	底面・側面に酸化鉄が集積
	4a	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	グライ化
	4b	褐灰色	10YR6/1	粘土	底面に酸化鉄が集積
SD203	1	暗褐色	10YR3/4	粘土	

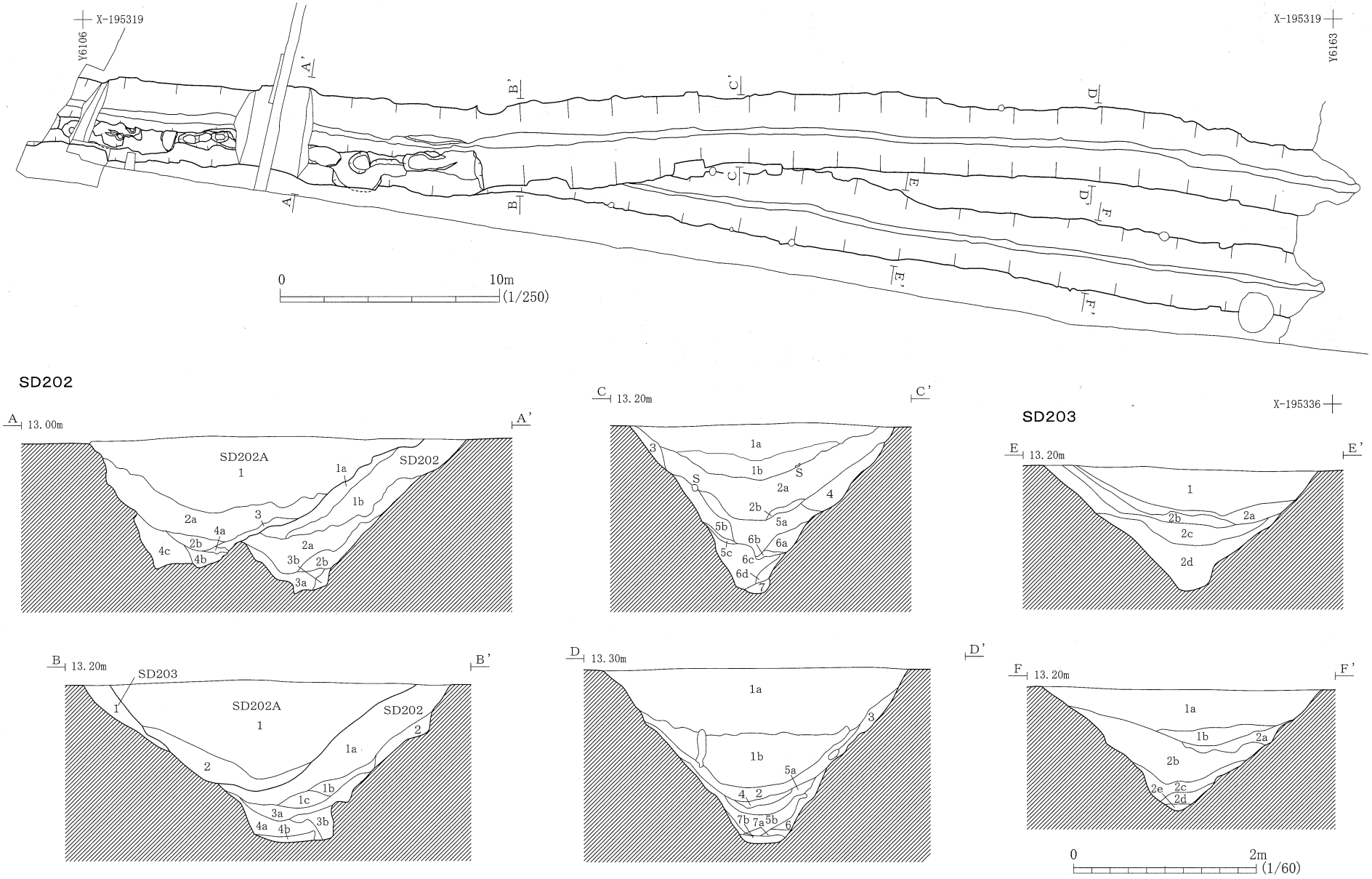
E－E'	層位	色	調	性　質	備　考
SD203	1	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	人為堆積
	2a	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	焼土を少量含む
	2b	明赤褐色	2.5YR5/6	粘土質シルト	焼土層
	2c	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	炭化物を少量含む
	3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土	

C－C'	層位	色	調	性　質	備　考
SD202	1a	褐色	10YR4/4	シルト	人為堆積
	1b	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	人為堆積、層状となる
		褐灰色	10YR4/1	シルト質粘土	
	2a	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	
	2b	褐灰色	10YR4/1	シルト質粘土	
	3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	
	4	褐色	10YR4/6	粘土	
	5a	褐灰色	10YR5/1	粘土	
	5b	褐灰色	10YR5/1	粘土	
	5c	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	6a	にぶい黄橙色	10YR6/3	粘土	
	6b	灰黄褐色	10YR5/2	細砂	下部に酸化鉄の集積面あり
	6c	にぶい黄橙色	10YR6/3	粘土	
	6d	にぶい黄橙色	10YR6/3	粘土	
	7	褐灰色	10YR6/1	細砂	

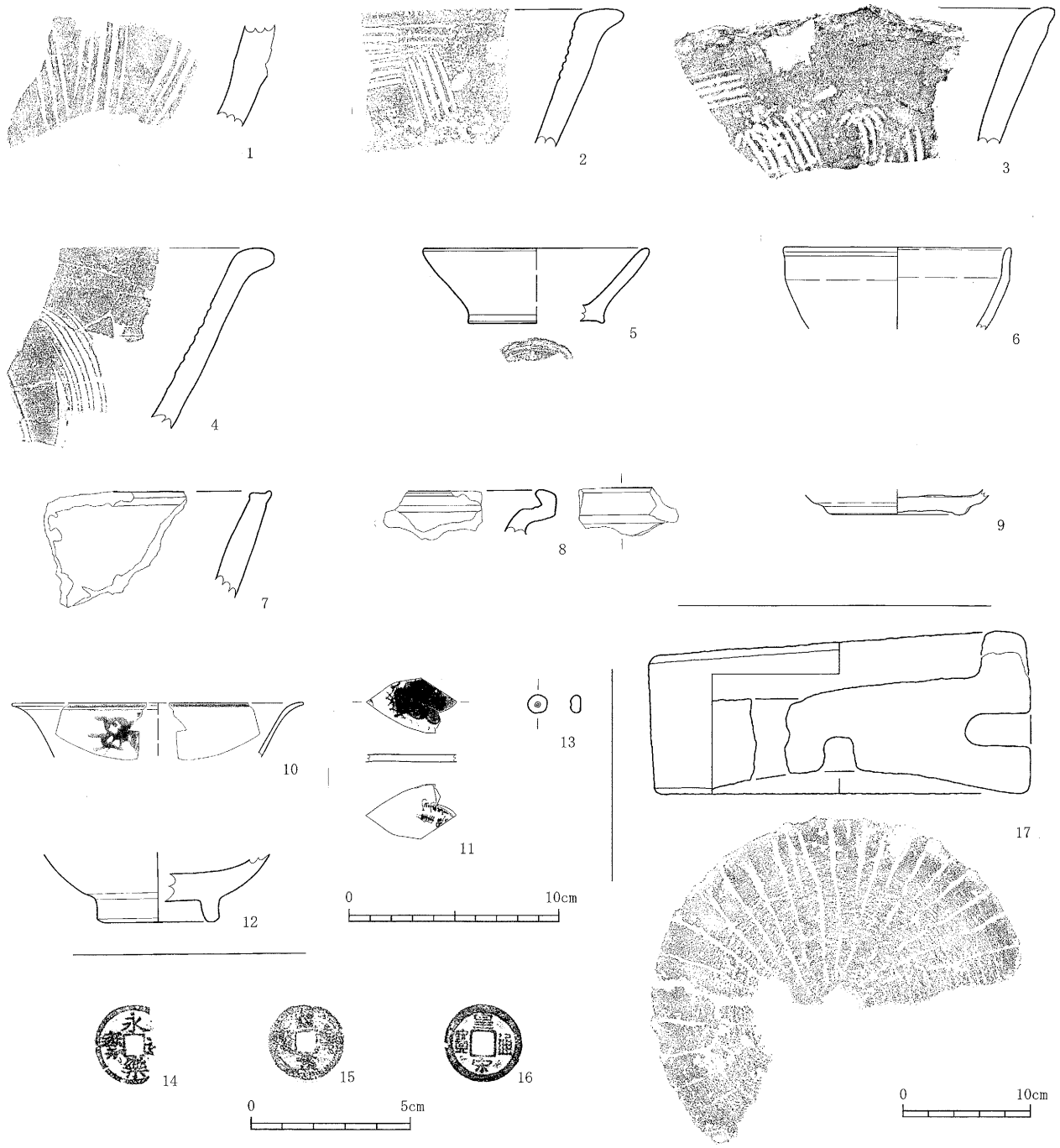
D－D'	層位	色	調	性　質	備　考
SD202	1a	にぶい黄褐色	10YR4/3	粗砂	人為堆積
	1b	褐色	10YR4/6	シルト質粘土	人為堆積
		にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト質粘土	
	2	褐灰色	10YR5/1	粘土	細砂が互層状に入る
	3	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	壁崩落土？
	4	灰黄色	2.5Y6/2	細砂	やや粘土質、グライ化
	5a	黄褐色	2.5Y5/3	粘土	グライ化
	5b	灰黄色	2.5Y6/2	粘土	グライ化
	6	褐色	10YR4/6	砂質粘土	
	7a	灰黄褐色	10YR6/2	砂質粘土	
	7b	黄褐色	2.5Y5/3	砂質粘土	底面に酸化鉄面が広がる、グライ化

F－F'	層位	色	調	性　質	備　考
SD203	1	褐色	10YR4/4	シルト質粘土	人為堆積
	2a	褐灰色	10YR4/1	シルト	やや粘土質
	2b	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
	3a	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	
	3b	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	
	3c	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土	やや砂質

第17図の堆積土註記



第17図　SD202・SD203溝跡

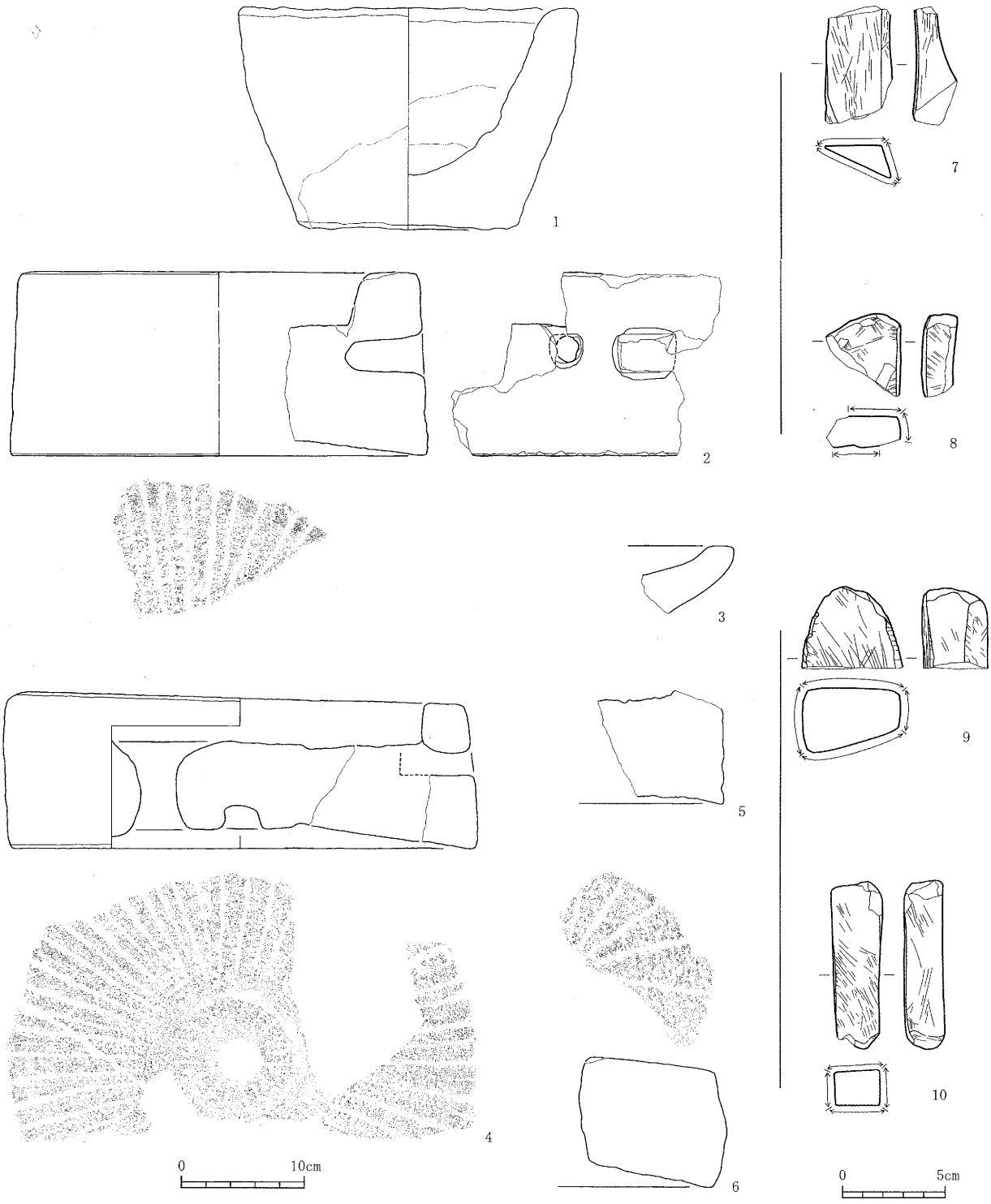


	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土師質土器　擂鉢	2層	体部片、外面に径4cm程の円形の剥離面があり取っ手様のものがつく？、被熱	D65	
2	土師質土器　擂鉢	埋土	口縁部は短く外傾、口縁下部に横方向の櫛目が一単位巡る	D66	
3	土師質土器　擂鉢	埋土	口縁部は極めて短く端部は丸くおさまる、口縁下部に横方向の櫛目が一単位巡る、被熱	D67	
4	瓦質土器　擂鉢	埋土	口縁端部がきつく短く折れ曲がりまるくおさまる、櫛目は幅広	H86	
5	瓦質土器　皿？	2層下部	底部からきつく外傾気味に立ち上がる、底部に回転糸切り痕様のスジを確認、口径(108)mm、器高35mm、底径65mm、被熱	H85	
6	陶器　天目茶碗	2層	口径(107)mm、鉄釉、瀬戸美濃、大窯。	I1204	18-4
7	陶器　鉢	埋土	口縁上部が平縁で外側端部が短く三角形状に突出し受け口状となる、常滑、15c代	I1192	
8	陶器　甕？	2層下部	口縁部きつく外反し直立気味に立ち上がる、端部は内傾し上部は平坦気味、外面自然釉、常滑、13c中頃	I1188	
9	陶器　皿	2層下部	灰釉丸皿、底部片、底径60mm、瀬戸美濃、大窯3、被熱	I1203	
10	磁器　碗	2層下部	口縁部片、端反の碗、染付、景徳鎮？、16c前半	J623	
11	磁器　碗	1層	底部片、染付、高台銘「富貴佳器」、明、16c末	J622	
12	青磁　碗	2層下部	底部片、高台径(58)mm、明、15c前半	J619	
13	銅製品　玉	2層	銅製の扁平な玉、9×9×5mm、重量2g、片面に小さな凹面あり、	N155	
14	古銭	2層	永楽通宝、明 永楽6年(1408)	N152	
15	古銭	2層下部	判読不能	N154	17-13
16	古銭	2層	皇宋通宝、北宋 宝元2年(1039)	N153	17-14
17	石臼	2層下部	粉挽き臼の上臼、径300mm,高さ129mm、安山岩	K126	17-30

第18図　SD202溝跡出土遺物１

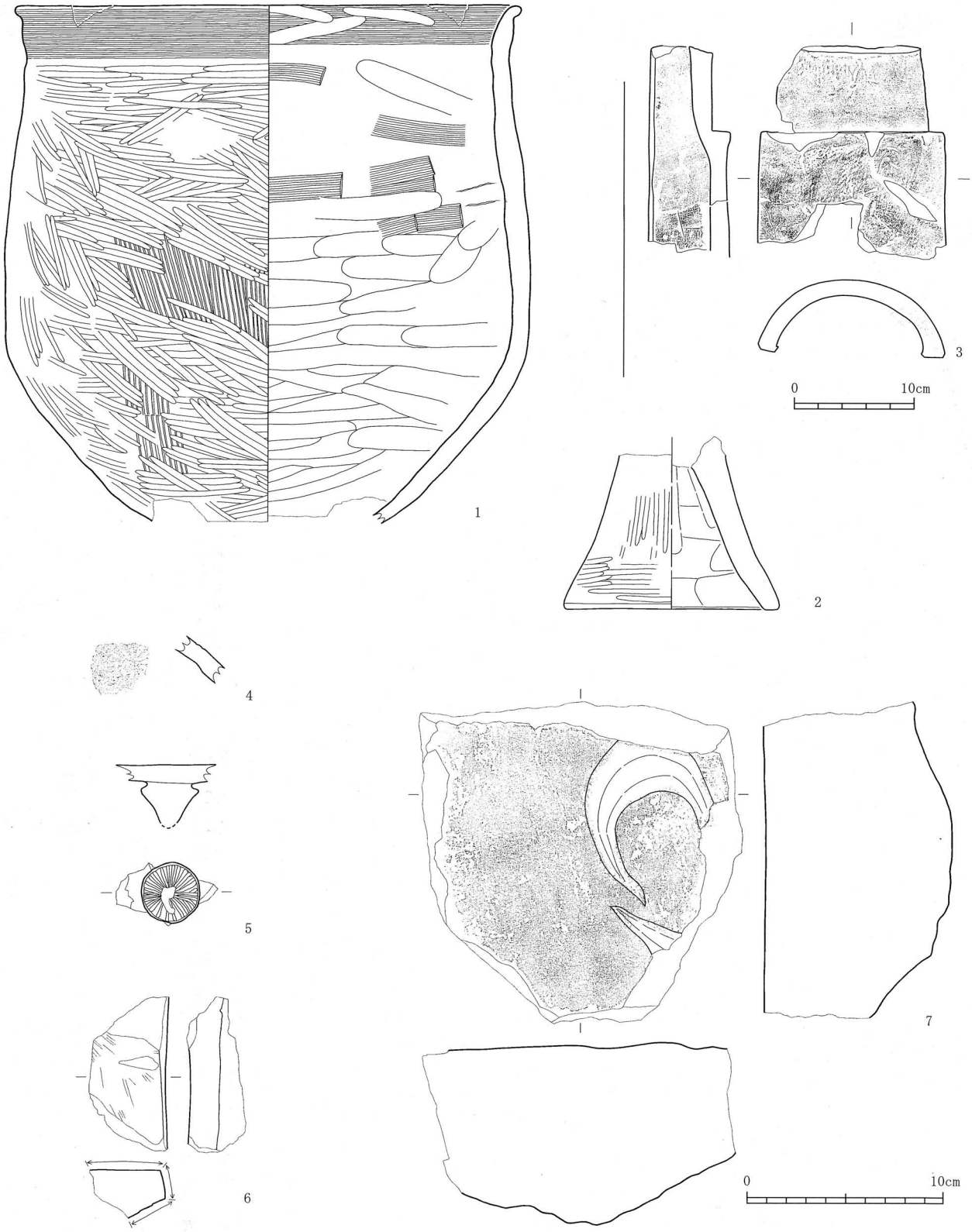
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	砥石	埋土	上面と側面の2面が砥面、折れているが多角形に成形、長さ197mm、幅(140)mm、厚さ43mm、砂岩	K209	
2	砥石	2層下部	平面は長方形、側面・下部が欠損、断面は長方形？、長さ(120)mm、幅(80)mm、厚さ53mm、3面の砥面確認、安山岩質凝灰岩	K134	
3	砥石	2層下部	平面は長方形、両端部が欠損、断面は五角形となる、長さ(106)mm、幅57mm、厚さ43mm、端部を除きすべて砥面、安山岩質凝灰岩	K135	
4	円礫	埋土	扁平な円礫、径89mm、厚さ57mm、重さ651ｇ、ススが付着、安山岩	K132	
5	るつぼ	SD202A-2層	丸底の皿形、内面にタール状の黒色膜と赤褐色の膜が付着、口径100mm、高さ27mm	R4	
6	るつぼ	SD202A-2層	丸底の皿形、内面に褐色の膜と赤褐色の膜と炭化物が付着、口径100mm、高さ35mm	R6	18-2
7	るつぼ	SD202A-2層	丸底の皿形、内面にタール状の黒色膜と赤褐色の膜が付着、口径72mm、高さ30mm、完形品	R8	18-3
8	るつぼ	SD202A-2層	口縁部片、内面にタール状の黒色の膜が付着	R3	
9	るつぼ	SD202A-2層	口縁部片、内面にタール状の黒色の膜と粒状になる赤褐色の膜が付着	R5	
10	るつぼ	SD202A-2層	口縁部片、内面にタール状の黒色の膜と粒状になる赤褐色の膜が付着	R7	
11	須恵器　甕	埋土	口縁部片、外傾気味に立ち上がり端部は上下方に短く三角形状に突出	E23	

第19図　SD202溝跡出土遺物２



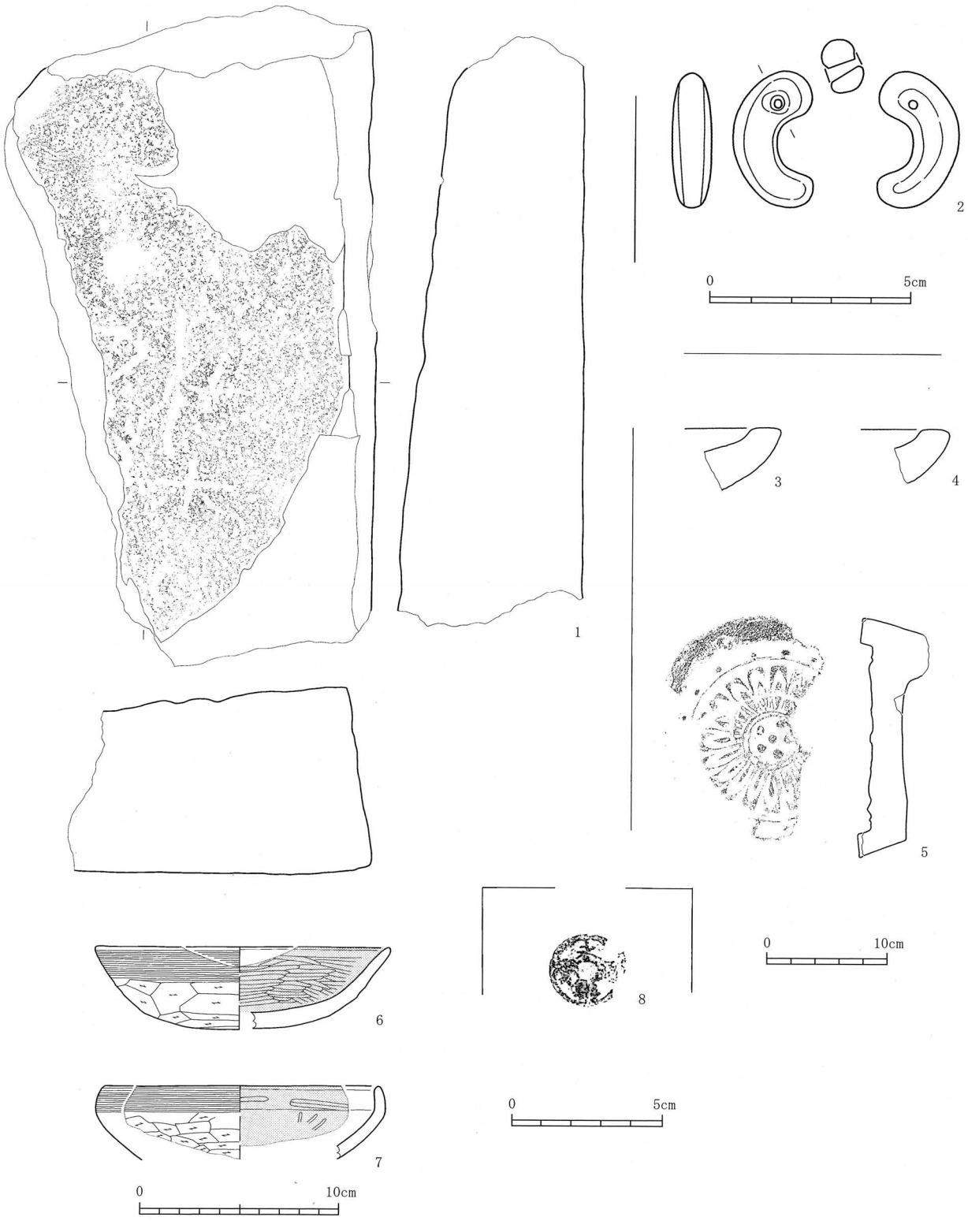
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	石鉢	2層	口径(276)mm、底径182mm、器高182mm、厚さ45mm前後、敲打で成形、底面周辺は滑面となる、凝灰岩、被熱	K125	17-31
2	石臼	2層下部	粉挽き臼の上臼、径(340)mm、高さ150mm、差込穴の脇に径25mm程の上部に抜ける貫通穴あり、安山岩、被熱	K127	17-32
3	石臼	2層下部	茶臼の下臼つば部片、径420mm程、厚さ25～35mm、割れ面に漆付着(漆継ぎ)、安山岩	K131	
4	石臼	2層下部	粉挽き臼の上臼、径382mm、高さ126mm、安山岩	K128	17-33
5	石臼	2層下部	粉挽き臼の上臼片、安山岩	K130	
6	石臼	3層	粉挽き臼の上臼片、安山岩	K129	
7	砥石	2層下部	平面は長方形、断面は三角形、上部欠損、3面が砥面、残存長52mm、幅33mm、厚さ15mm、凝灰岩	K136	
8	砥石	2層下部	上部欠損、平面は長方形？、断面は四角形、全面が砥面、残存長39mm、幅36mm、厚さ14mm、凝灰岩	K137	
9	砥石	埋土	下部欠損、上部丸く成形、断面は四角形、全面が砥面、残存長40mm、幅49mm、厚さ31mm、凝灰岩、被熱	K133	
10	砥石	3層	平面は長方形、断面は四角形、全面が砥面、長さ82mm、幅25mm、厚さ17mm、重さ59ｇ、凝灰岩	K138	

第20図　SD202溝跡出土遺物３



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師器　甕	2層	底部欠損、外傾気味に立ち上がり体部上部はほぼ垂直に立ち上がり口唇部でゆるく短く外傾しておさまる、外面は口縁部がヨコナデ、体部はハケ目の後ヘラミガキ、内面は口縁部がヨコナデ・ナデ、体部はヘラナデ・ナデ	C43	17-2
2	土師質土器　脚	2層下部	上部欠損、ハの字状に開く、内外面ともナデがみられる、脚裾面は平坦面、残存高88mm、裾径110mm	D41c	
3	古代瓦　丸瓦	2層下部	玉縁付、凸面はロクロナデ、丸瓦部に縄叩き、端部にヘラケズリ、凹面に布目痕、丸瓦部幅156mm、厚さ14mm	F17	
4	陶器　甕	SD203　1層	体部小片、押印あり、常滑	I1231	
5	瓦質土器	SD203　2層	器の脚部、円錐形に成形し底部に貼り付け、高さ22mm、径30mm	H84	
6	砥石	SD203　1層	平面は長方形、上部と側面が欠損、断面は多角形、残存長80mm、残存幅48mm、残存厚23mm、凝灰岩	K143	
7	板碑	SD203　2層	欠損品、上下が不明で種子も判読不能、平滑面となり再利用が考えられる、残存長162mm、残存幅160mm、残存厚97mm、安山岩、スス付着	K196	

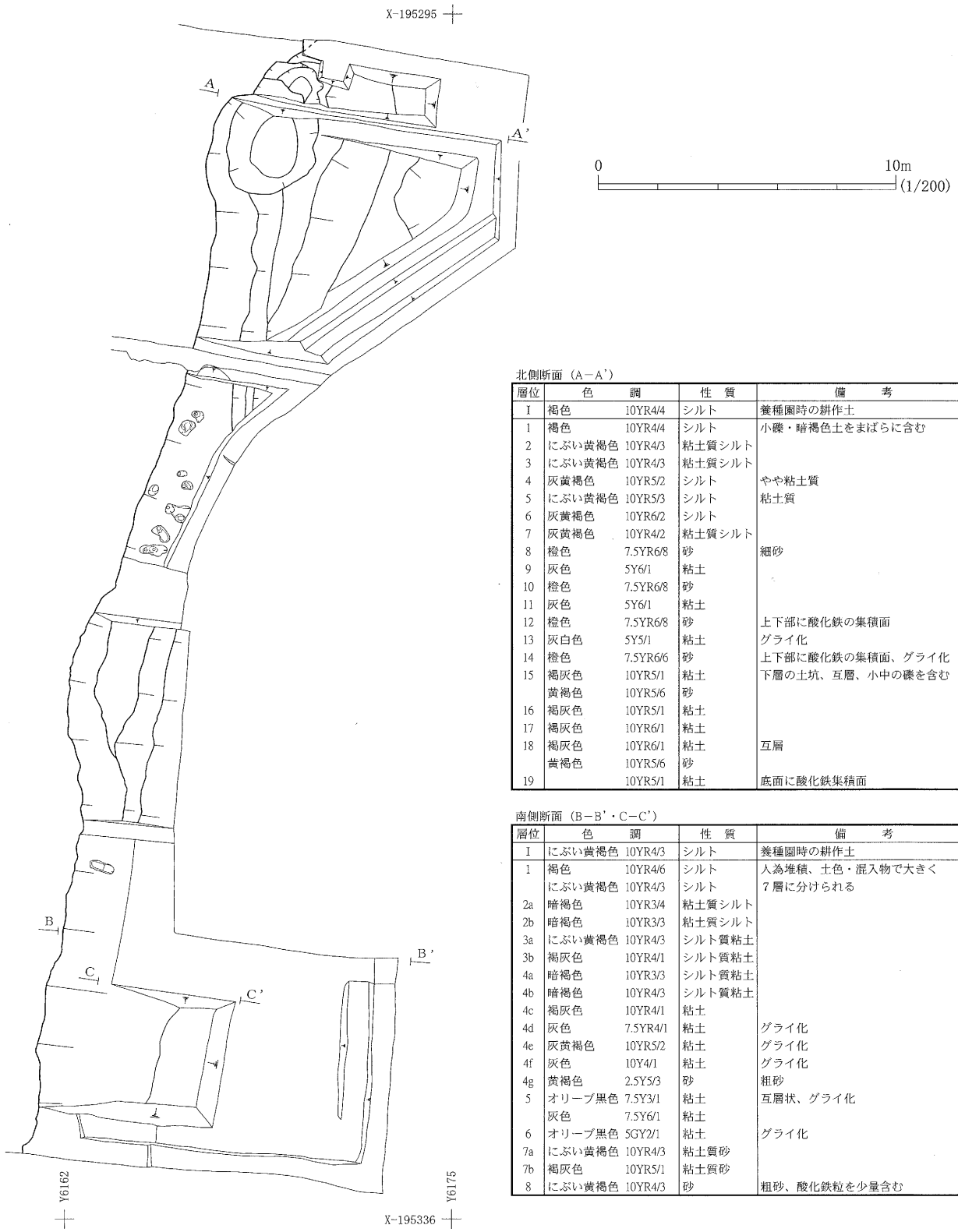
第21図　SD202溝跡出土遺物４・SD203溝跡出土遺物１



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	方格の礫	2層	判読不能の線刻あり、残存長333mm、残存幅181mm、残存厚99mm、安山岩、被熱	K197	
2	石製品　勾玉	1層	長さ35mm、厚さ10mm、重さ8g、碧玉	K144	17-34
3	石臼	2層	茶臼の下臼つば部片、径440mm程、厚さ25～35mm、安山岩	K140	
4	石臼	2層	茶臼の下臼つば部片、径360mm程、厚さ25～30mm、安山岩	K141	
5	古代瓦　軒丸瓦	2層	細弁蓮華文軒丸瓦、多賀城分類410	F18	17-7
6	土師器　坏	埋土	丸底、ゆるく内弯気味に立ち上がる、外面は口縁部がヨコナデで体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ、口径(148)mm、器高41mm	C39	
7	土師器　坏	1層	外傾気味に立ち上がり口縁部は直立気味に立ち上がる、外面は口縁部がヨコナデで体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ、口径(137)mm	C40	
8	古銭	埋土	永楽通宝、明 永楽6年(1408)	N157	

第22図　SD203溝跡出土遺物2

SD204溝跡　C～J－13～16区に位置する。調査区東端を南北方向に延びる。溝西辺のみの確認である。SD202・SD203を切る。確認長は39mを測る。2000－２区調査で溝が東側へ傾きだすことが確認されている。西辺方向はN－12°－Eである。東辺は確認されないがＩ区では上端幅11.4mまで確認し、深さ2.75mを測る。壁面はややきつく立ち上がり底面は平坦である。断面は逆台形である。堆積土は大別で７層確認したが、１層が人為堆積土となり溝埋



北側断面（A－A'）

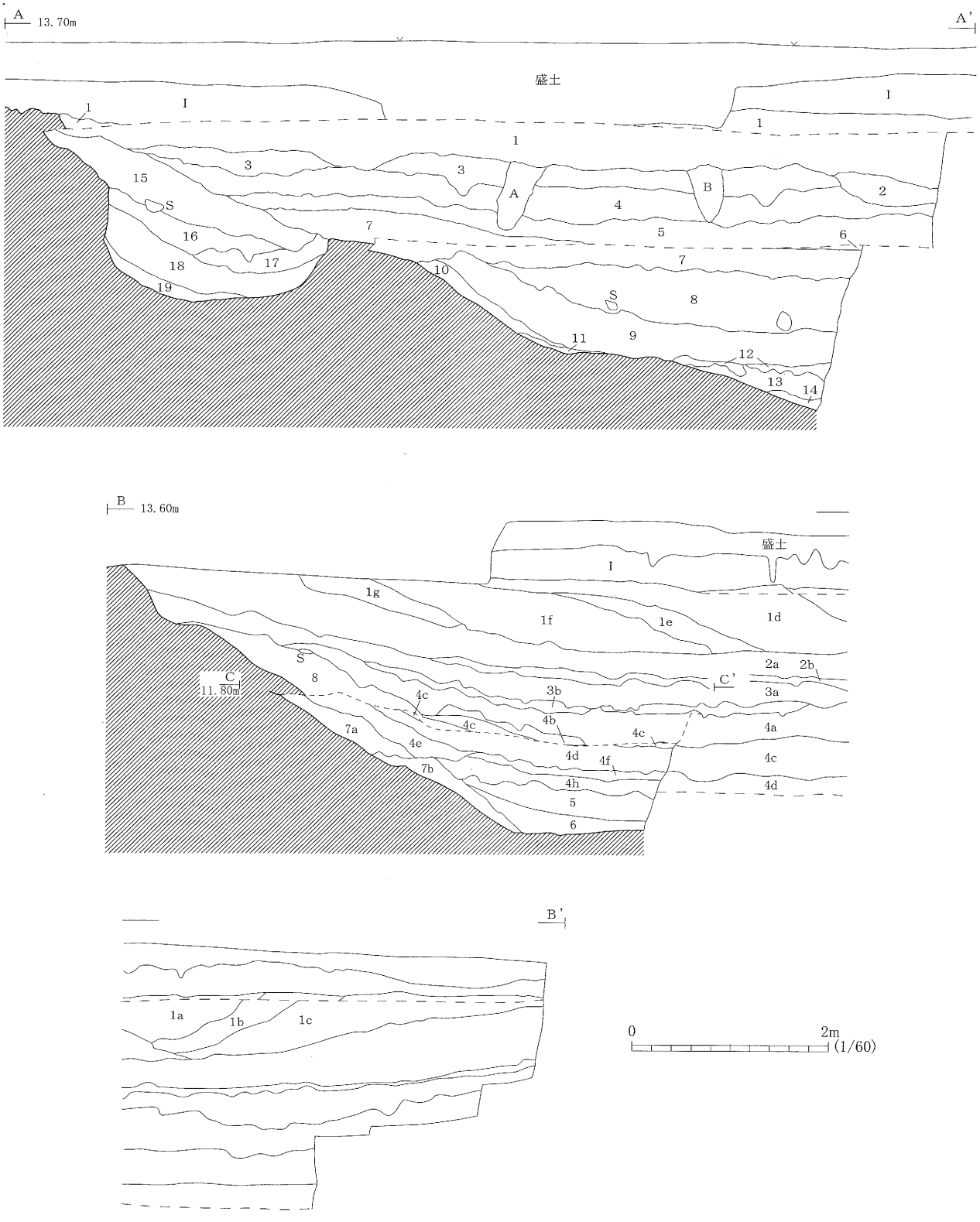
層位	色調		性質	備考
Ⅰ	褐色	10YR4/4	シルト	養種園時の耕作土
1	褐色	10YR4/4	シルト	小礫・暗褐色土をまばらに含む
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	
4	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	やや粘土質
5	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	粘土質
6	灰黄褐色	10YR6/2	シルト	
7	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	
8	橙色	7.5YR6/8	砂	細砂
9	灰色	5Y6/1	粘土	
10	橙色	7.5YR6/8	砂	
11	灰色	5Y6/1	粘土	
12	橙色	7.5YR6/8	砂	上下部に酸化鉄の集積面
13	灰白色	5Y5/1	粘土	グライ化
14	橙色	7.5YR6/6	砂	上下部に酸化鉄の集積面、グライ化
15	褐灰色	10YR5/1	粘土	下層の土坑、互層、小中の礫を含む
	黄褐色	10YR5/6	砂	
16	褐灰色	10YR5/1	粘土	
17	褐灰色	10YR6/1	粘土	
18	褐灰色	10YR6/1	粘土	互層
	黄褐色	10YR5/6	砂	
19		10YR5/1	粘土	底面に酸化鉄集積面

南側断面（B－B'・C－C'）

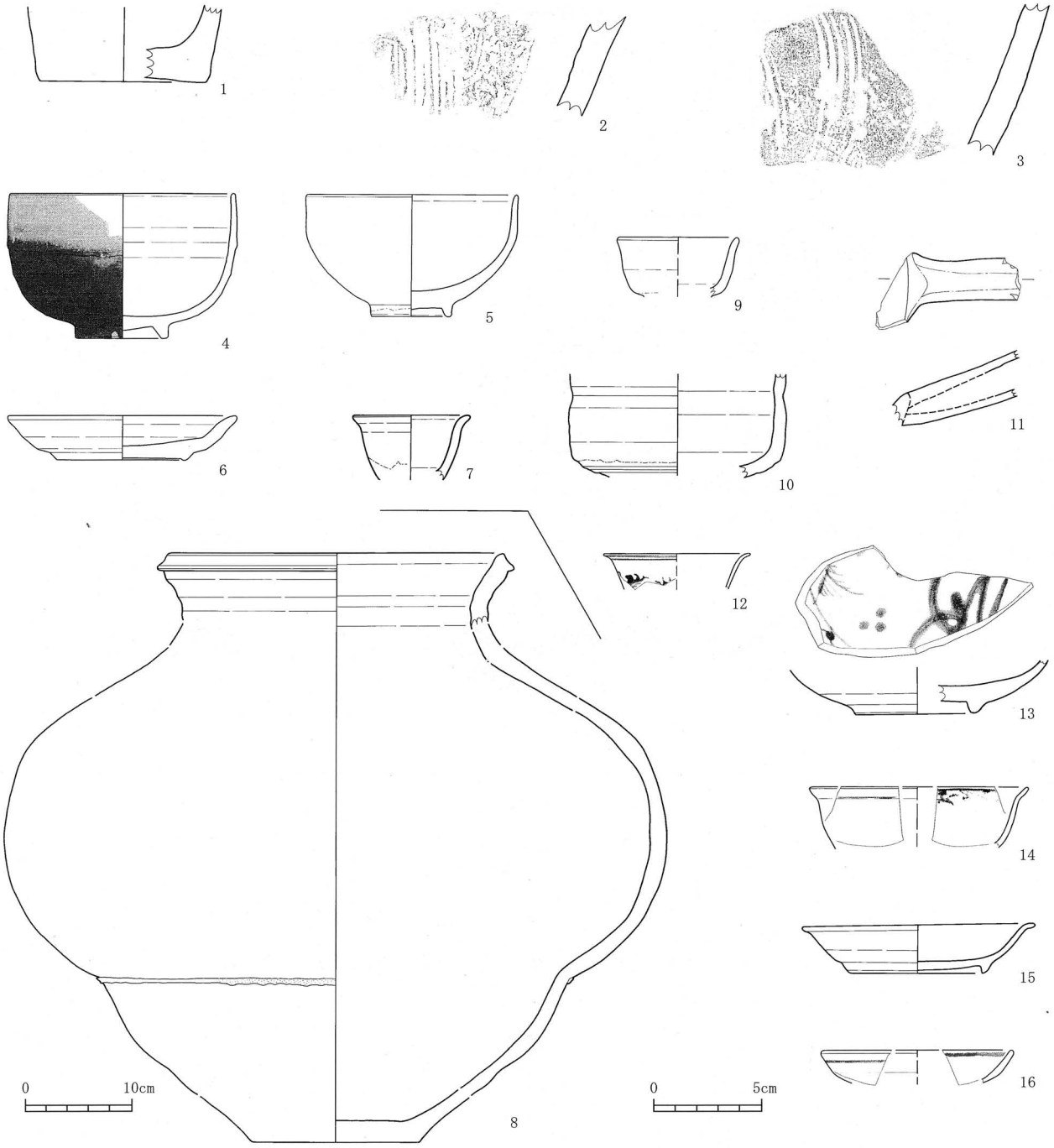
層位	色調		性質	備考
Ⅰ	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	養種園時の耕作土
1	褐色	10YR4/6	シルト	人為堆積、土色・混入物で大きく
	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	７層に分けられる
2a	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	
2b	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
3a	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	
3b	褐灰色	10YR4/1	シルト質粘土	
4a	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	
4b	暗褐色	10YR4/3	シルト質粘土	
4c	褐灰色	10YR4/1	粘土	
4d	灰色	7.5YR4/1	粘土	グライ化
4e	灰黄褐色	10YR5/2	粘土	グライ化
4f	灰色	10Y4/1	粘土	グライ化
4g	黄褐色	2.5Y5/3	砂	粗砂
5	オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土	互層状、グライ化
	灰色	7.5Y6/1	粘土	
6	オリーブ黒色	5GY2/1	粘土	グライ化
7a	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質砂	
7b	褐灰色	10YR5/1	粘土質砂	
8	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂	粗砂、酸化鉄粒を少量含む

第23図　SD204溝跡

め戻し土となる。下層はゆるやかなレンズ状の自然堆積層となる。全域で１層の埋め戻し土が確認される。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、古瓦、土師質土器鉢、瓦質土器擂鉢、近世瓦（軒平瓦・平瓦・丸瓦）、白石窯の甕、常滑（中世・近世の壺及び甕）、瀬戸美濃（平茶碗・碗・皿・小坏）、志野の皿、大堀相馬（碗・土瓶）、堤の焙烙、中国（青磁碗・染付皿・染付碗・染付小坏・白磁皿・白磁碗？）、肥前（染付皿・染付袋物・染付瓶）、石鉢、茶臼、剥片石器、漆器（椀・鉢）、折敷、古銭（永楽通宝）、キセル、鉛玉、釘、炭化米が出土している。

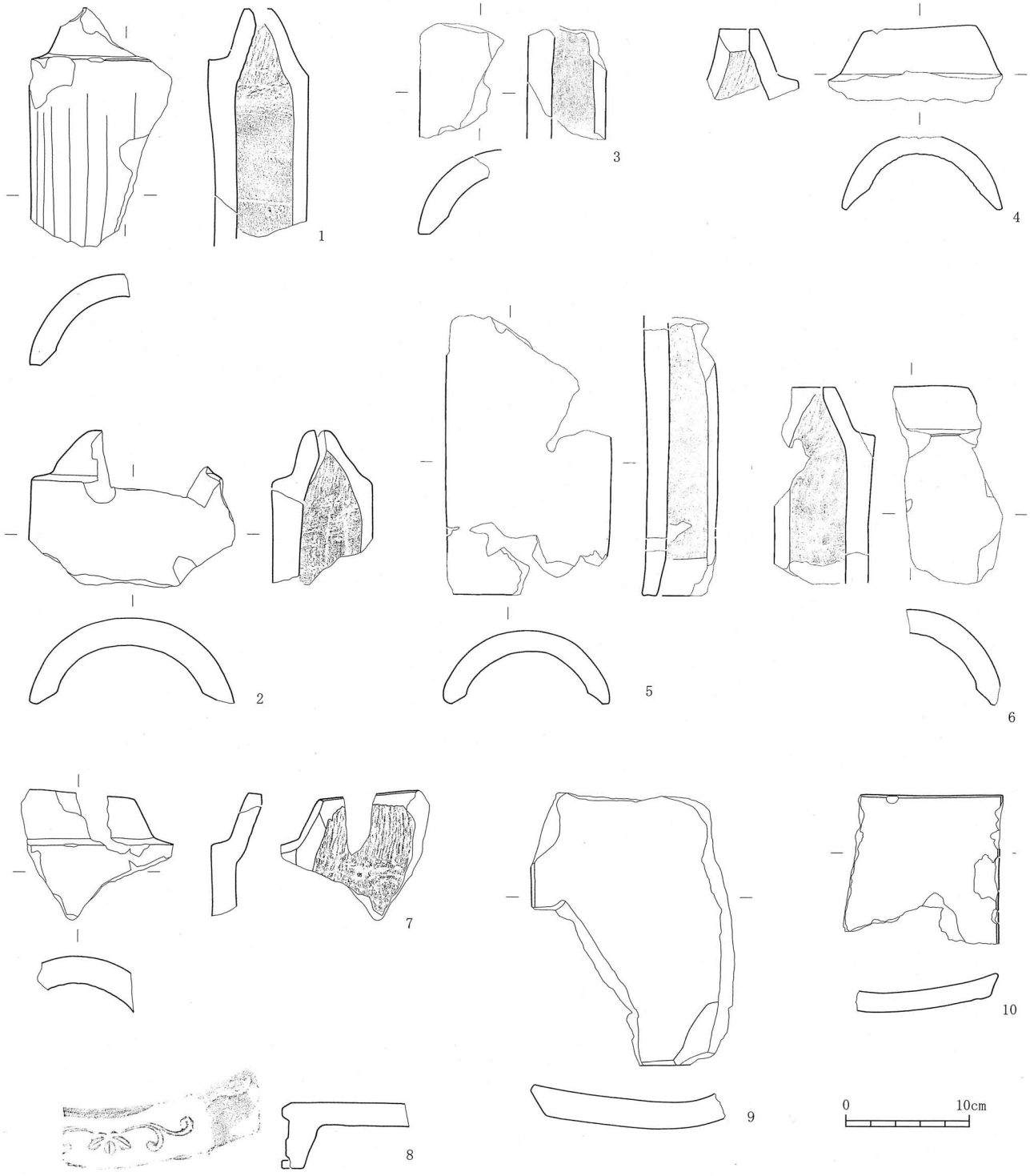


第24図　SD204溝跡断面



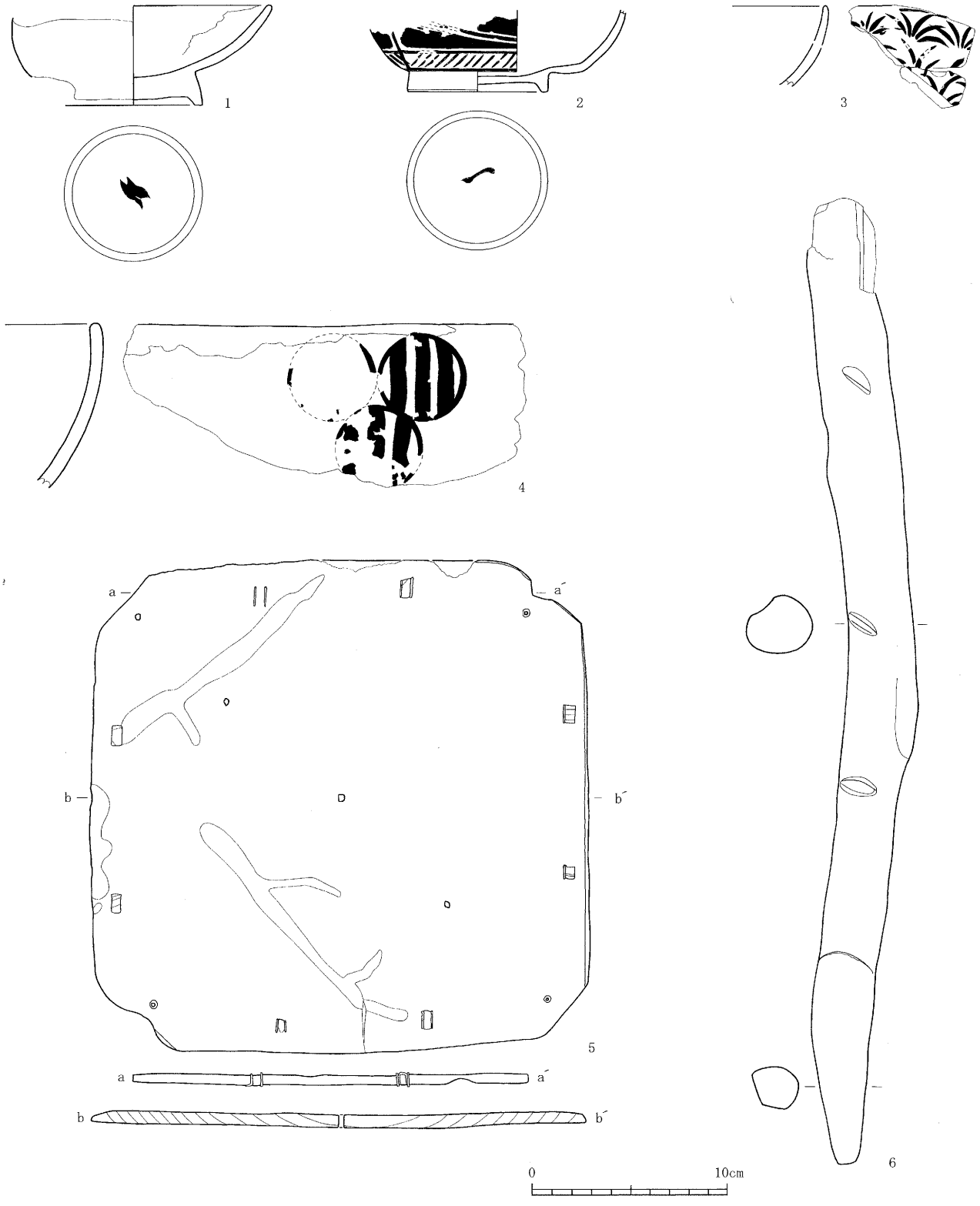
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	瓦質土器　鉢	3層	底部片、底部から直立気味に立ち上がる、底径78mm、被熱	H88	
2	瓦質土器　擂鉢	3層	体部片、内面にやや幅広の櫛目あり	D201	
3	瓦質土器　擂鉢	埋土	体部片、内面に間隔をもったやや幅広の櫛目あり	D202	
4	陶器　碗	埋土	掛け分け、上部に灰釉、下部に鉄釉、口径106mm、底径43mm、器高68mm、大堀相馬、18c後半	I1222	
5	陶器　碗	埋土	灰釉、口径100mm、底径37mm、器高58mm、大堀相馬、18c中頃	I1221	
6	陶器　皿	2層	志野丸皿、灰釉、削り出し高台、口径108mm、底径60mm、器高21mm、瀬戸美濃、登窯2、被熱	I1218	
7	陶器　小坏	2層	黄瀬戸小坏、口径(56)mm、残存高31mm、瀬戸美濃、大窯4	I1219	
8	陶器　甕	3層	大甕､底部から内弯気味に立ち上がり頚部でゆるく外反､口唇部は三角形状となり上下方に短く突出､体部下部に重ね焼きの痕跡あり、口径(333)mm、底径158mm、器高560mm、体部最大幅616mm、常滑、16c後半～17c初	I1205	
9	陶器　小坏	3層	底部欠損、鉄釉、口径(56mm)、残存高28mm、瀬戸美濃？、	I1227	
10	陶器　碗	埋土	鉄釉、体部径(100)mm、産地不明	I1228	
11	陶器　焙烙	1層	焙烙の取っ手、中空、残存長55mm、幅19mm前後、堤、19c前半	I1225	
12	磁器　小坏	1層	口縁部片、端反、染付、口径(68)mm、残存高16mm、中国、16c代	J630	
13	磁器　皿	3層	底部片、染付、底径(58)mm、残存高22mm、肥前、17c中頃	J635	18-5
14	磁器　碗	3層	口縁部片、端反、染付、口径(103)mm、残存高28mm、中国、16c前半	J626	
15	白磁　皿	3層	端反、口径110mm、底径64mm、器高22mm、中国、16c前半	J633	18-6
16	磁器　碗	3層	口縁部小片、染付、口径(88)mm、残存高16mm、中国、17c初	J627	

第25図　SD204溝跡出土遺物１



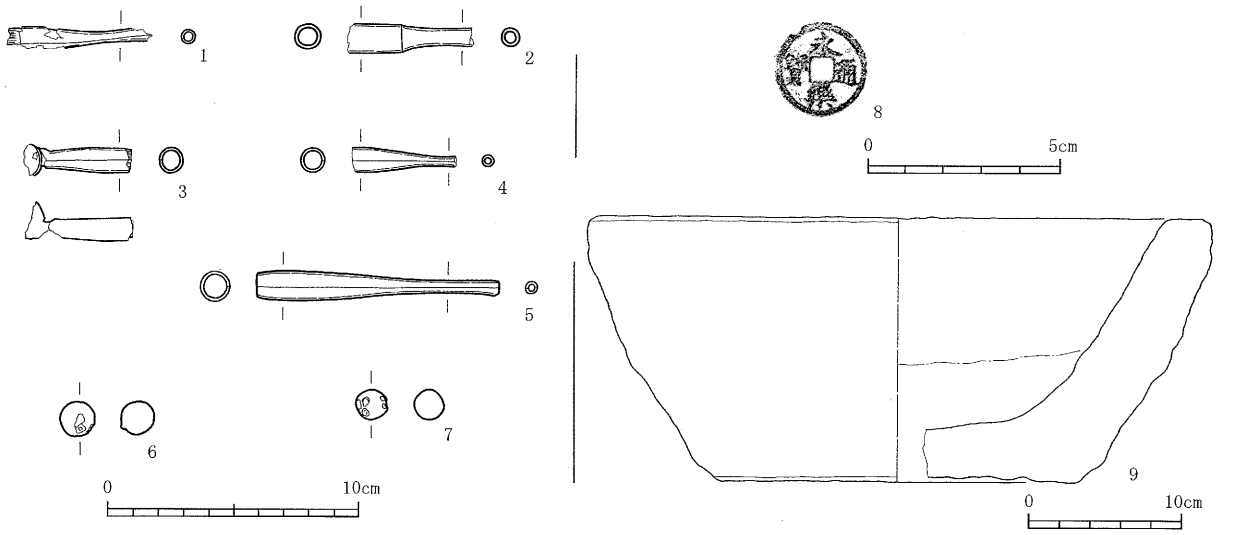
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	近世瓦　丸瓦	埋土	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ19mm、コビキ痕、玉縁長40mmで厚さ15mm	G191	
2	近世瓦　丸瓦	埋土	凸面：摩滅で不明、凹面：面取り、布目痕、厚さ22mm、幅165mm、玉縁長36mmで厚さ16mm、軟質	G197	
3	近世瓦　丸瓦	埋土	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ21mm、コビキ痕	G192	
4	近世瓦　丸瓦	埋土	玉縁長40mmで厚さ14mm	G194	
5	近世瓦　丸瓦	埋土	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ20mm、コビキ痕、幅135mm	G198	
6	近世瓦　丸瓦	埋土	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ19mm、コビキ痕、玉縁長35mmで厚さ14mm	G189	
7	近世瓦　丸瓦	埋土	凸面：ナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ19mm、玉縁長38mmで厚さ15mm	G190	
8	近世瓦　軒平瓦	埋土	雪持笹文、凹面・凸面ともナデ、厚さ19mm、軟質	G165	17-8
9	近世瓦　平瓦	埋土	凸面：ナデ、面取り、凹面：コビキ痕、砂が付着、厚さ23mm	G166	
10	近世瓦　平瓦	埋土	凸面：ナデ、面取り、凹面：コビキ痕、厚さ16mm	G167	

第26図　SD204溝跡出土遺物２



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	漆器　椀	4層	上下部とも欠損、外面は黒漆塗り、側面に赤漆での文様あり、内面は赤漆塗り、底部中央に赤漆での文様あり	L23	
2	漆器　椀	4層	上下部とも欠損、外面は黒漆塗り、側面に赤漆で全面に文様が描かれる、内面は赤漆塗り、底部中央に赤漆で「…」が描かれる	L24	
3	漆器　椀	4層	口縁部片、外面は黒漆塗りで草文を赤漆で描く、内面は赤漆塗り	L22	
4	漆器　鉢	4層	口縁部片、内外面とも黒漆塗り、外面に赤漆で三引両文（伊達家家紋）を上に2個・下に1個の計3個描かれる	L25	
5	折敷	4層	白木、隅切り、25.4cm四方で厚さ6mm、各辺に桜皮を通した穴が2ヶづつ、クギ穴が各隅に1ヶあり、対角線上に一列のみ等間隔に3ヶの穴	L26	
6	木杭	底面	長さ50cm、径3～4cmの丸材、先端部のみに粗い加工痕	L27	

第27図　SD204溝跡出土遺物３

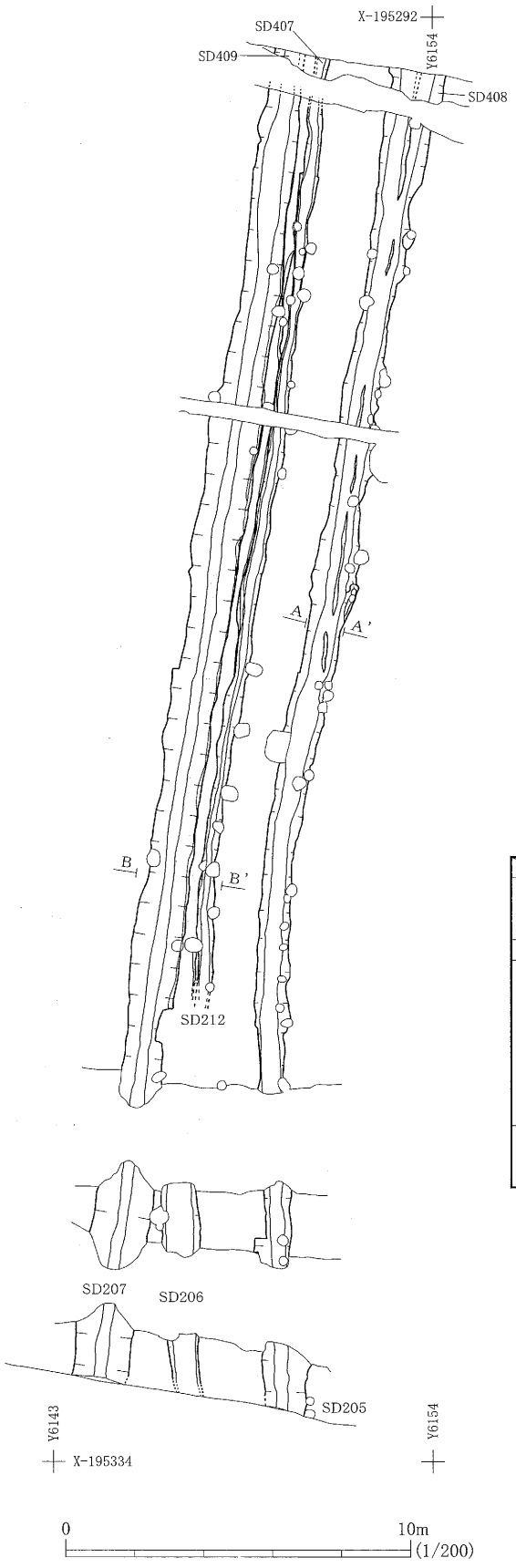


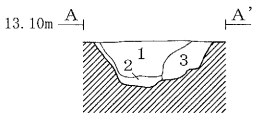
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	キセル	2層	吸口と羅宇、残存長55mm、羅宇側径8mm	N164	
2	キセル	2層	吸口と羅宇、残存長50mm、羅宇側径11mm	N165	17-20
3	キセル	3層	雁首、残存長42mm、羅宇側径10mm、	N166	
4	キセル	埋土	吸い口、残存長41mm、羅宇側径10mm、口付側径4mm	N167	17-22
5	キセル	埋土	吸い口、残存長95mm、羅宇側径11mm、口付側径5mm	N168	17-21
6	鉛玉	埋土	径13mmの球形、白くなっている、重さ12g	N169	17-25
7	鉛玉	埋土	径12mmの球形、白くなっている、重さ8g	N170	17-26
8	古銭	4層	永楽通宝、明 永楽6年(1408)	N163	17-15
9	石鉢	3層	口径(410)mm、底径(237)mm、器高175mm、厚さ42～48mm、敲打で成形、底面周辺は滑面となる、凝灰岩	K146	

第28図　SD204溝跡出土遺物４

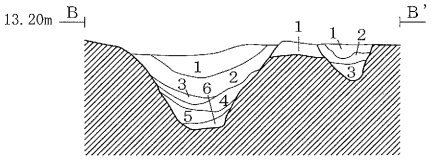
SD205・SD206・SD212溝跡　〔道路跡〕B・J－10・11区に位置する。３条の溝跡はほぼ一定の間隔を保ち南北方向に直線的に延びており、調査区南側では２条の溝跡がゆるく共に東側へ曲がっている。このことから道路跡の可能性を考えた。住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土坑と重複関係をもち、SI201・SD211・SK295・SK297を切り、東側に位置する掘立柱建物跡５棟・SD202・SD203・SD207・SD218・SK268に切られる。３条の溝跡が側溝となり中央部が路盤となる。波板状圧痕や硬化面等は確認されない。確認長は約39mである。北半部の直線状となる南北軸方向はN－９°－Eとなり、南半部の南北軸はN－２°－Wである。東側に位置するSD205は上端幅80～97cm、下端幅45～50cm、南壁での深さ68cmを測る。断面形はやや不整な逆台形となるが、南壁側では不整な逆三角形となっている。中央部から北側では底面に突起状の高まりがみられ断面観察でも掘り直しが確認され、最低１回の改修が想定された。堆積土は３層確認した。SD206は両側に位置するSD207・SD212に切られている。南側では単独となるが中央から北側では両端が確認されず底面のみの確認となるものが大半である。南側での上端幅は100cm程、下端幅70cm程、深さ最大で20cm程を測る。断面形は逆台形である。堆積土は南壁で３層確認した。SD212は上端幅40～50cm、下端幅20～30cm、南壁での深さ35cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈するが底面幅の狭い地点では逆三角形状となっている。南半部では削平もあり溝跡が確認されない。堆積土は３層確認した。側溝の組み合わせとしてSD212とSD205の１・２層部、SD206とSD205の３層部が側溝として妥当かと判断される。路幅は新段階が1.5m程、古段階が２m程となる。SD206・SD212は土師器、須恵器のみの出土であるが、SD205では弥生土器、土師器、須恵器、古瓦、土師質土器、常滑の甕、瀬戸美濃の灰釉小皿(大窯２)、土製品、骨片、剥片石器が出土している。

SD207溝跡　B・J－９～11区に位置する。道路跡西脇に位置しSD206を切るが、他の重複関係は道路跡とほぼ同じとなる。南北方向に直線的に延び確認長は約39mを測る。軸方向はN－９°－Eである。上端幅120～136cm、下端幅27～35cm、南壁での深さ109cmを測る。壁はきつく立ち上がり断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦である。土師器、須恵器、古瓦、土師質土器、中世陶器甕、常滑の甕、古銭（咸平元宝)、骨片が出土している。

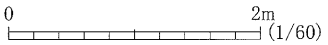




SD205

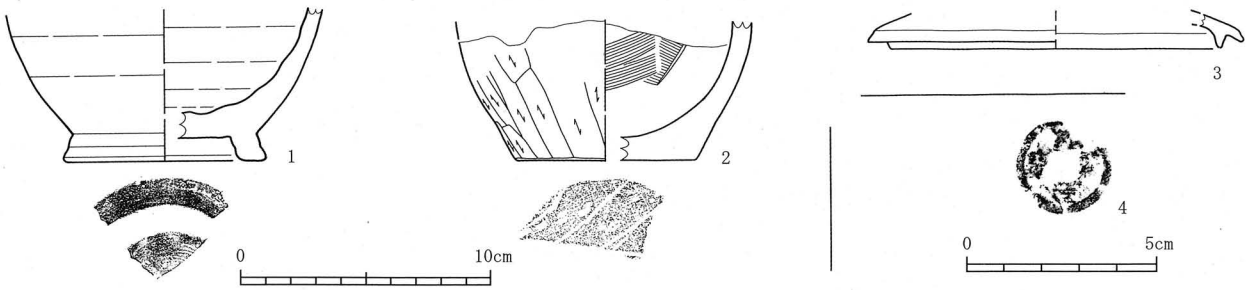


SD207　SD206　SD212



	層位	色調	性質	備考
SD205	1	褐色 10YR4/4	シルト	
	2	暗褐色 10YR6/6	シルト	
	3	暗褐色 10YR3/4	シルト	部分的にグライ化
SD206	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	
SD207	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	
	4	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	混成層
		黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	
	5	黄褐色 10YR5/8	粘土質シルト	混成層
		褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	
	6	褐灰色 10YR4/1	粘土	酸化鉄粒をまばらに含む
SD212	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
	2	褐灰色 10YR4/1	シルト	酸化鉄粒をまばらに含む
	3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	

第29図　道路跡及びSD207溝跡

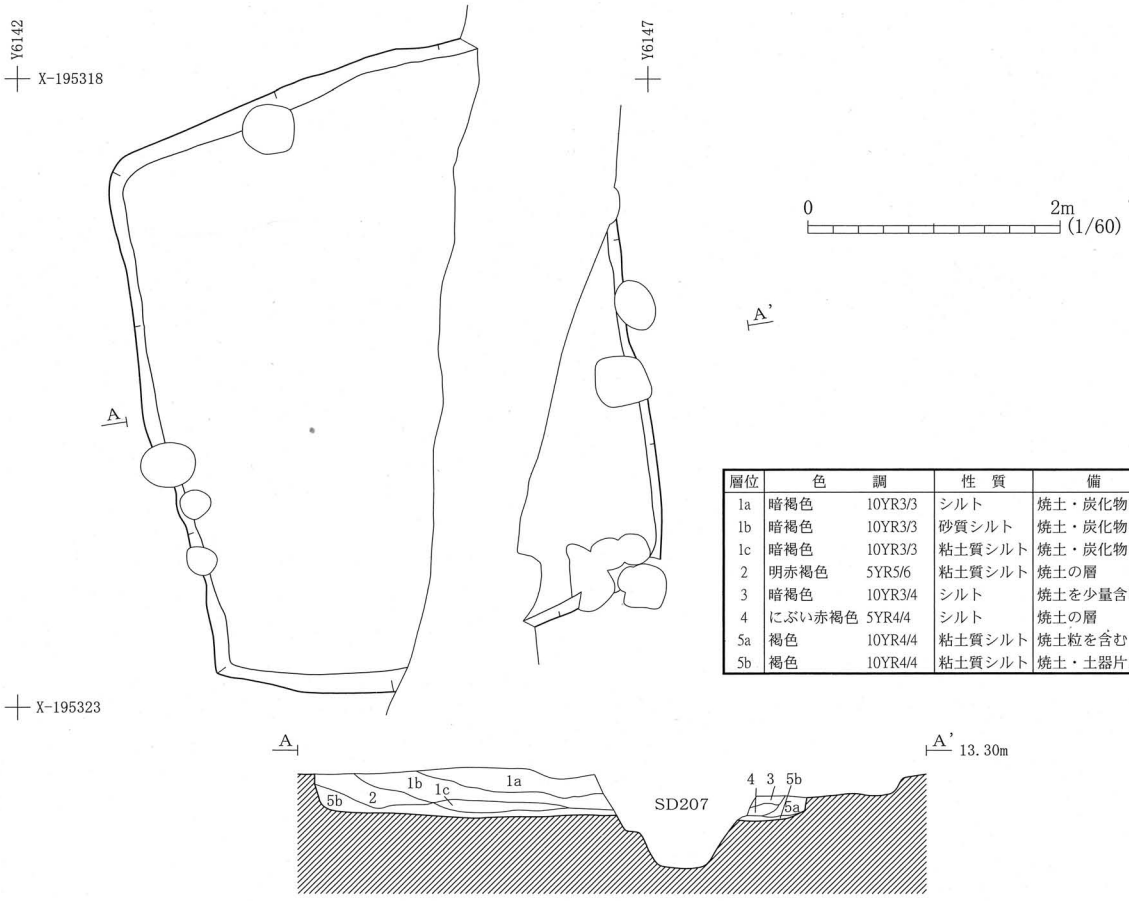


	遺構・層位	種　別	特　　徴	登録	写真
1	SD205　埋土	須恵器　壷	底部から内弯気味に立ち上がる、高台は幅広でハの字状に立つ、付高台、切り離しは回転糸切り、、高台径(80)mm	E24	
2	SD209　埋土	土師器　甕	底部から内弯気味に立ち上がる、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ、底部に木葉痕あり、底径72mm、被熱	C38	
3	SD212　埋土	須恵器　蓋	カエリをもつ蓋、口径(150)mm	E25	
4	SD213　埋土	古銭	判読不能	N173	

第30図　SD205・209・212・213溝跡出土遺物

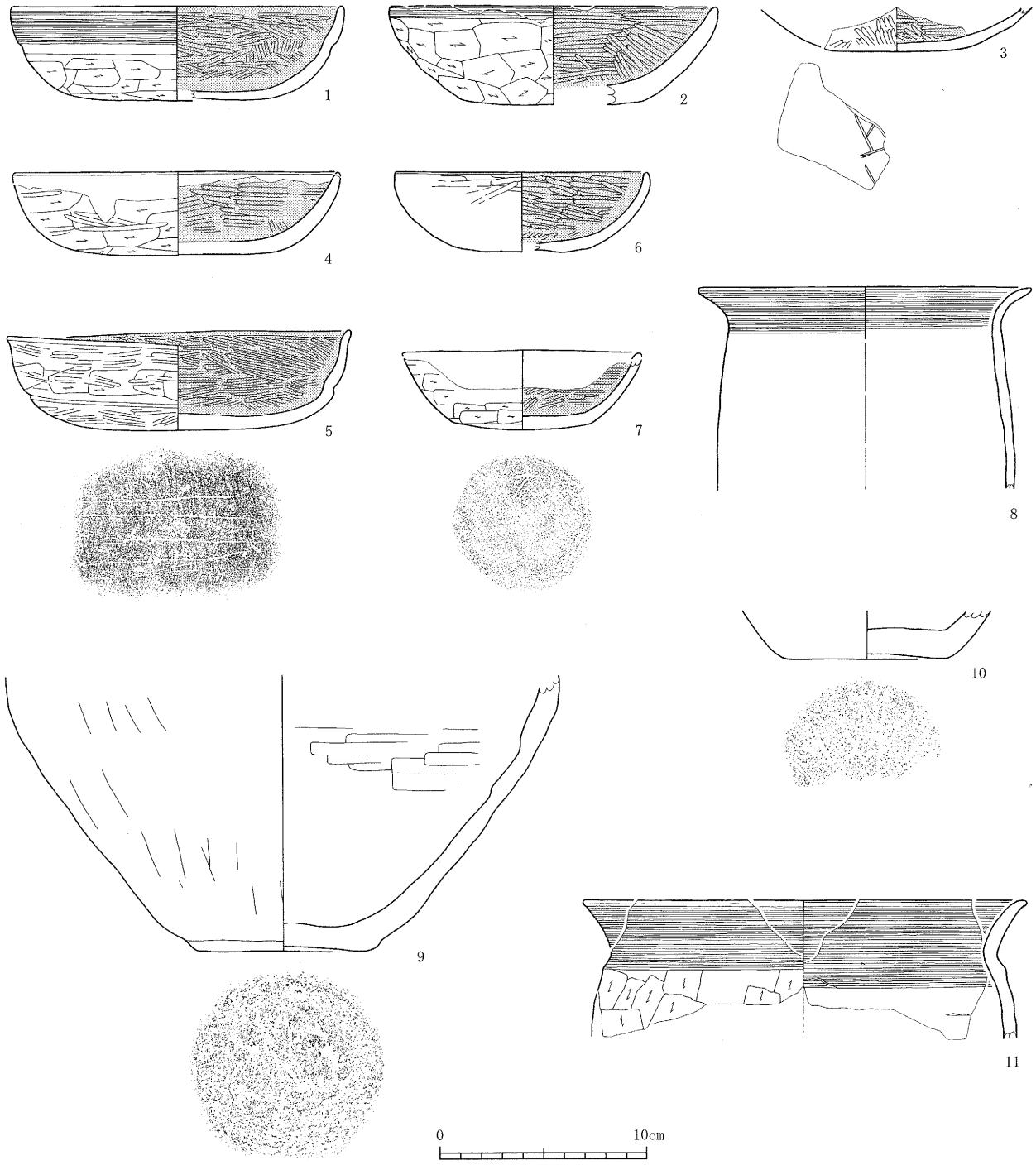
4）竪穴跡

SI201竪穴住居跡　G・H－9・10区に位置する。平面形は隅丸の長方形である。SB201・SD206・SD207に切られる。大きさは南北軸中央で4.8m、東西軸中央で3.89m、深さ38cmを測る。西辺方向はN－13°－Wである。堆積土を大別で5層確認した。全体的に焼土を含み2層は焼土層となっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面上において施設は一切確認されない。床面及び堆積土から土師器（坏・甕）、須恵器（坏・高台付坏・甕）、古瓦、鉄製品（刀子・筒状鉄製品）が出土している。土師器類はすべてロクロ不使用である。



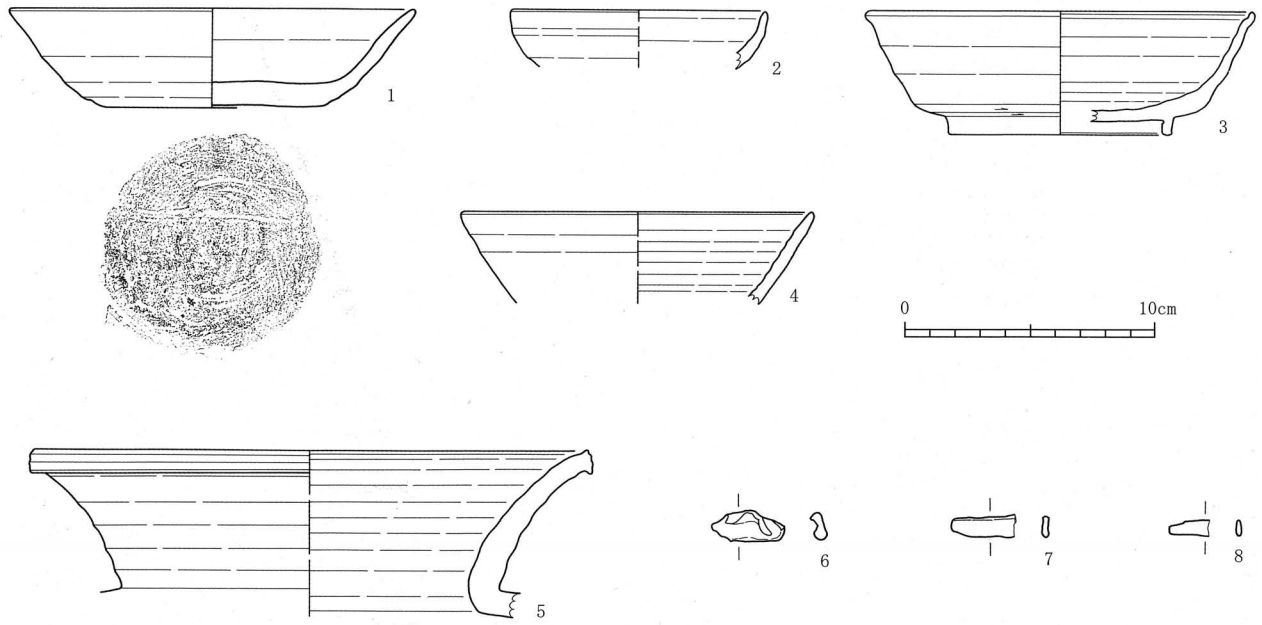
層位	色　　調	性　質	備　　考
1a	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土・炭化物を少量含む
1b	暗褐色　10YR3/3	砂質シルト	焼土・炭化物を少量含む
1c	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む
2	明赤褐色　5YR5/6	粘土質シルト	焼土の層
3	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土を少量含む
4	にぶい赤褐色　5YR4/4	シルト	焼土の層
5a	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	焼土粒を含む
5b	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	焼土・土器片を含む

第31図　SI201竪穴住居跡



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師器　坏	床面	平底風丸底、境に浅い沈線、外面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径160mm、器高45mm、被熱	C27	17-3
2	土師器　坏	床面	平底、外面は口唇部がヨコナデ、体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径158mm、底径84mm、器高47mm	C32	17-4
3	土師器　坏	埋土	平底風丸底、外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、底径(60)mm、底部に「上」？の線刻	C33	
4	土師器　坏	埋土	平底、外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径157mm、器高38mm、被熱	C29	17-5
5	土師器　坏	埋土	平底風丸底、境に浅い段、外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径166mm、器高42mm、底部に線刻、被熱	C28	
6	土師器　坏	埋土	平底、外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(122)mm、器高38mm、底径(38)mm	C31	
7	土師器　坏	埋土	平底風丸底、外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(115)mm、器高(36)mm、底部に「大」？の線刻	C30	
8	土師器　甕	埋土	体部はほぼ垂直にたち上がり、口縁部はゆるく外反、口縁部は内外面ともヨコナデ、口径(160)mm	C35	
9	土師器　甕	埋土	底部から外傾気味に立ち上がる、摩滅のため調整不明瞭、外面はケズリ？、内面はナデ？、底径86mm、線刻の木葉痕？有り	C34	
10	土師器　甕	埋土	底部から外傾気味に立ち上がる、調整不明、底径80mm、線刻の木葉痕有り、,被熱	C36	
11	土師器　甕	埋土	頸部にかるい稜、口縁部は外傾気味に立ち上がる、外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ、内面はヨコナデ、口径(212)mm	C37	

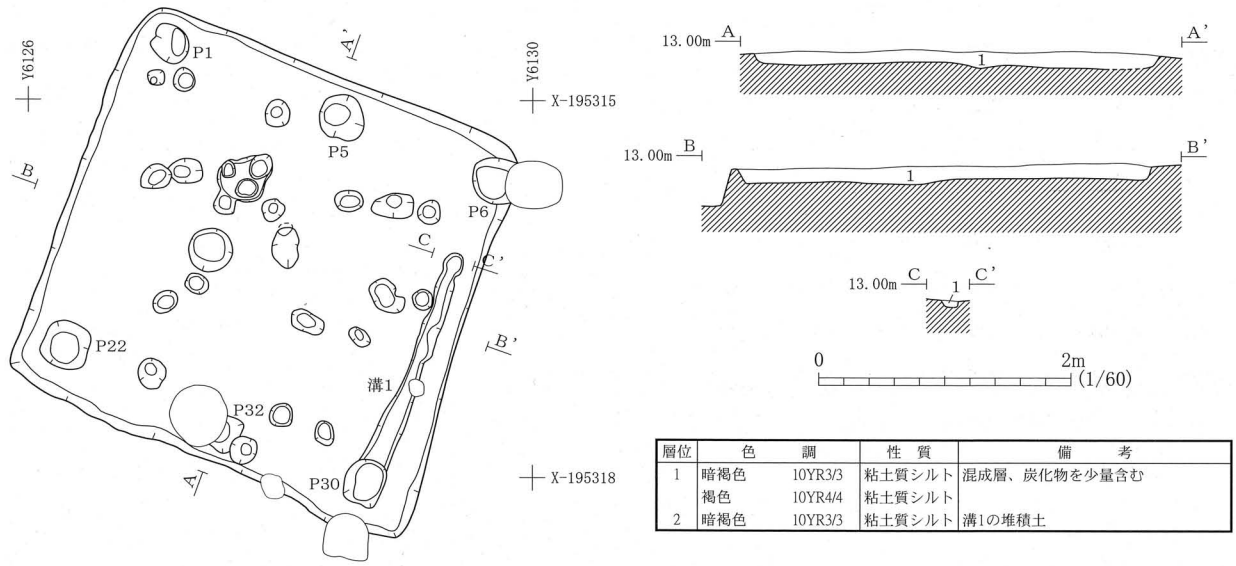
第32図　SI201竪穴住居跡出土遺物１



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、底部にあらい回転ヘラケズリ、口径161mm、底径82mm、器高39mm	E19	
2	須恵器　坏	埋土	内弯気味にたち上がり口縁部で垂直に立ち上がる、口径(102)mm	E17	
3	須恵器高台付坏	埋土	外傾気味にきつく立ち上がる、口唇部でゆるく外反し内面は受け口状、高台は付高台で高さ6mm、口径153mm、器高49mm、高台径88mm	E18	17-6
4	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、口径(140)mm	E16	
5	須恵器　甕	埋土	口縁部は外反気味に立ち上がる、口縁端部は上下に小さく三角形状に突出し周縁帯となる、口径(208)mm	E20	
6	筒状鉄製品	埋土	折り曲げて筒状となる、残存長29mm、	N138	
7	刀子	埋土	小片、残存長26mm、幅8mm、厚さ3mm	N140	
8	刀子	埋土	小片、残存長15mm、幅7mm、厚さ2mm	N141	

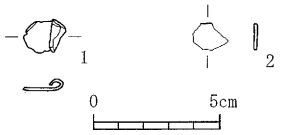
第33図　SI201竪穴住居跡出土遺物２

SI203竪穴建物跡　F・G－６区に位置する。平面形は隅丸の正方形である。SB204に切られSK274・SK275を切っている。大きさは南北軸中央で3.23m、東西軸中央で3.31m、深さ10cmを測る。西辺方向はN－21°－Eである。床面上で堆積土を１層確認した。暗褐色土と褐色土の混成層で人為堆積が考えられた。床面で溝跡１条とピット類を29基確認している。溝１は東辺に並行して延びており幅14～20cm、深さ５cmを測る。周溝と判断したがやや内側に位置している。ピット類は大小があるが位置及び大きさ等からP１・P５・P６・P22・P30・P32の6基が柱穴と考えられ、北辺側に３基、南辺側に３基の配置構成となる。堆積土から土師器、須恵器、銅製品が出土している。



層位	色　　調	性　質	備　　考
1	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	混成層、炭化物を少量含む
	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	
2	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	溝1の堆積土

第34図　SI203竪穴建物跡



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	銅製品	1層	破片、1mm程の銅板を折り曲げている	N142	
2	銅製品	1層	破片、板状となる、厚さ1mm程	N143	

第35図　SI203竪穴建物跡出土遺物

5）土坑

SK201土坑　H－3区に位置する。平面形は円形である。径83～85cm、深さ22cmを測る。底面は弧状となり断面形は皿形である。堆積土は2層確認し自然堆積と判断した。SK245・SD202を切る。瓦質土器鉢片が出土している。

SK203土坑　H－2・3区に位置する。平面形は楕円形である。長軸は東西方向で334cm、短軸は162cmまで確認、深さ56cmを測る。底面はゆるい皿状で断面形は逆台形である。堆積土は4層確認し自然堆積と判断した。南側でSD202と重複しており切っていると判断した。長軸方向はE－9°－Sである。土師器、土師質土器擂鉢、瓦質土器、瀬戸の天目茶碗、中世陶器甕、龍泉窯の青磁碗、鉛製の玉、土玉が出土している。

SK204土坑　I－6区に位置する。平面形は長円形である。長軸は南北方向で96cm、短軸51cm、深さ22cmを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり断面形は矩形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。長軸方向はN－4°－Eである。土師器が出土している。

SK205土坑　H－7区に位置する。平面形は長円形である。長軸は東西方向で71cm、短軸45cm、深さ10cmを測る。底面はゆるい弧状となり断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。長軸方向はE－14°－Sである。SD202を切っている。出土遺物はない。

SK206土坑　H－5区に位置する。平面形は不整な方形である。長軸は南北方向で105cm、短軸67cm、深さ51cmを測る。底面は平坦で壁はきつく立ち上がり断面形は矩形である。堆積土は2層確認した。人為堆積と判断した。長軸方向はN－27°－Eである。SD202に切られる。石器、土師器、古瓦が出土している。

SK207土坑　I－4区に位置する。平面形はやや不整な長方形である。長軸は東西方向で104cm、短軸は75cmまで確認、深さ44cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。長軸方向はE－5°－Sである。SD202に切られる。温石が出土している。

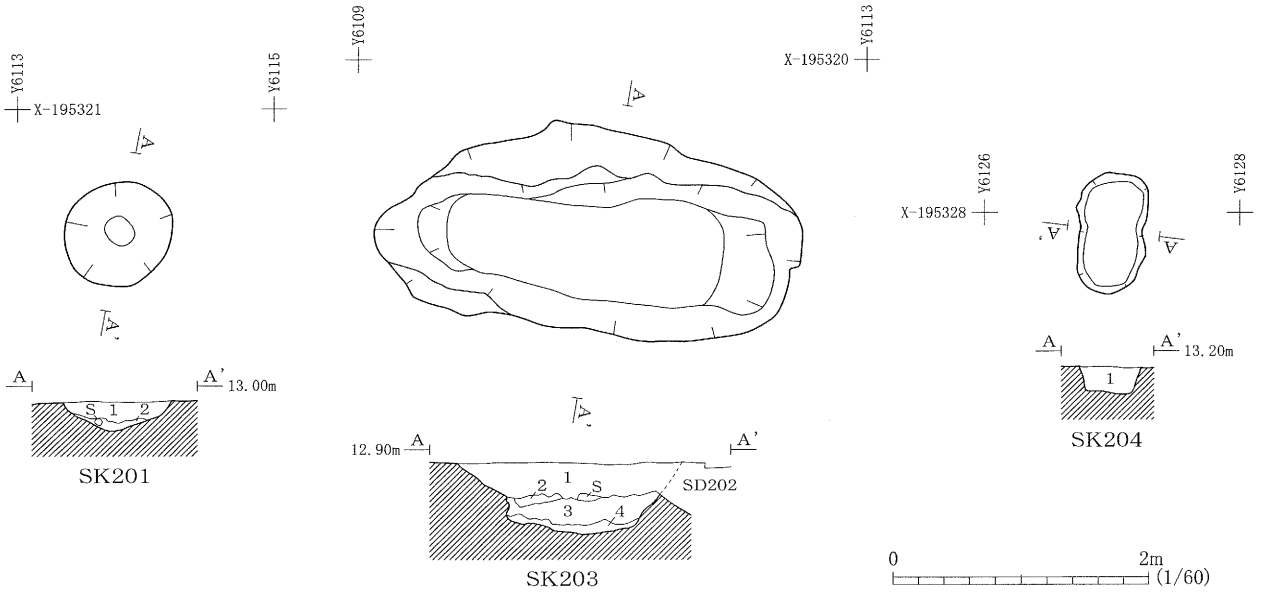
SK208土坑　I－4・5区の南壁に位置する。平面形は長方形と判断される。東西軸200cm、南北軸45cmまで確認、深さ30cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は2層確認し人為堆積と判断した。東西軸方向はN－85°－Eである。土師器が出土している。

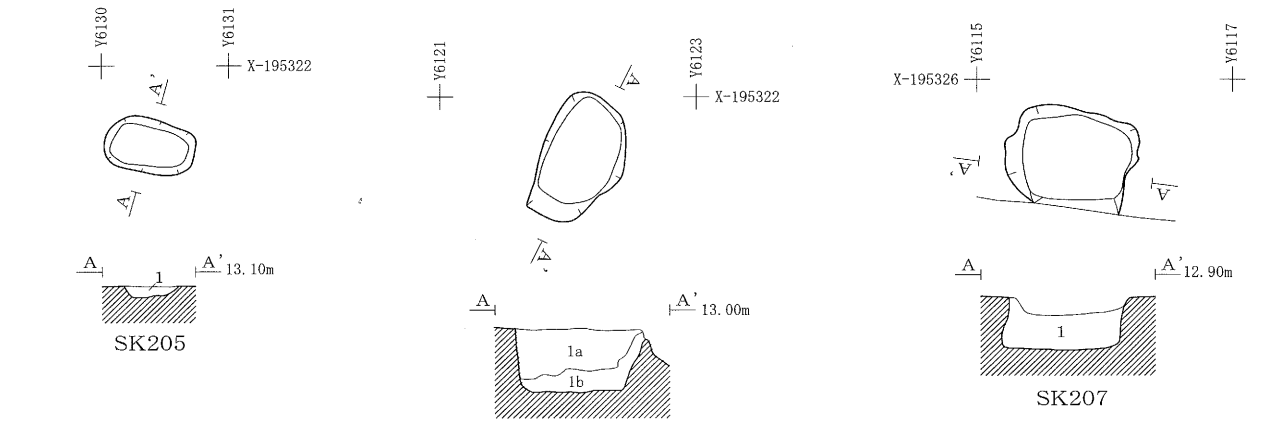
SK209土坑　E－4・5区に位置する。平面形はやや不整な長方形である。長軸は東西方向で116cm、短軸は76cm、深さ8cmを測る。底面は平坦であるが深さが浅く断面形は皿形となる。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。長軸方向はE－11°－Sである。出土遺物はない。

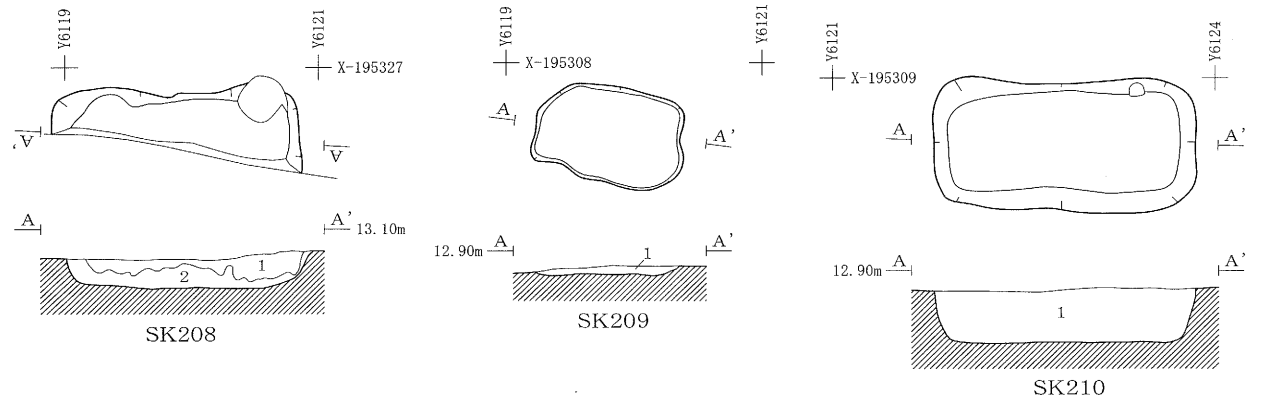
SK210土坑　E･F－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で206cm、短軸は102cm、深さ43cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。長軸方向はN－89°－Eである。北壁側で浅い落ち込み（遺存不良で性格不明）を切っている。土師器、須恵器が出土している。

SK211土坑　F－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で170cm、短軸は117cm、深さ52cmを測る。底面はやや凹凸面で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。長軸方向はN－87°－Eである。SK250・251を切っている。土師器、中世陶器甕、骨片が出土している。

第36図　中央調査区土杭群分布







	層位	色調	性質	備考
SK201	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	灰黄褐色土を斑に含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	
SK203	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	褐灰色土・明黄褐色土を薄く含む
	2	明黄褐色 10YR6/8	粘土質シルト	褐灰色土をスジ状に含む
	3	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土をブロック・スジ状に含む
	4	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	褐灰色土をスジ状に含む
SK204	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土粒をまばらにに含む
SK205	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物粒を少量含む

	層位	色調	性質	備考
SK206	1a	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	暗褐色土・炭化物を含む
	1b	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	暗褐色土ブロックを含む、人為堆積
SK207	1	褐色 10YR4/6	粘土	混成層、炭化物を少量含む
		黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	人為堆積
SK208	1	暗褐色 10YR3/3	シルト質粘土	褐色土・炭化物ブロックを少量含む
	2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	暗褐色土ブロックを含む、人為堆積？
SK209	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土・炭化物を含む、人為堆積？
SK210	1	黒褐色 10YR3/2	粘土	混成層、人為堆積
		黄褐色 10YR5/8	粘土	

第37図　98年調査区土坑１

SK212土坑　F－5区に位置する。平面形は正方形である。東西軸104cm、南北軸97cm、深さ34cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－29°－Sである。土師器、砥石、刀子、骨片が出土している。

SK213土坑　F－5区に位置する。平面形は正方形である。東西軸99cm、南北軸91cm、深さ11cmを測る。底面はやや凹凸面で、深さが浅く断面形は皿形となっている。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－7°－Sである。土師器、須恵器が出土している。

SK214土坑　E･F－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で142cm、短軸は114cm、深さ40cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は2層確認した。1層は混成層である。人為堆積と判断した。長軸方向はE－39°－Sである。骨片が出土している。

SK215土坑　F－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で170cm、短軸は100cm、深さ35cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はE－15°－Sである。SB202の柱穴に切られている。土師器が出土している。

SK216土坑　F－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で113cm、短軸は95cm、深さ42cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はN－19°－Eである。出土遺物はない。

SK217土坑　F･G－4・5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で190cm、短軸は165cm、深さ98cmを測る。底面は部分的に凹面があるが平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はE－12°－Sである。SD208を切っている。土師器、須恵器が出土している。

SK218土坑　F･G－4区に位置する。平面形はやや不整な長円形である。長軸は南北方向で220cm、短軸は140cm、深さ46cmを測る。底面は段状となり北側が20cm程低くなっている。底面はゆるい凹凸面で断面形は段をもつがおおきく皿状である。堆積土は細別で2層確認した。自然堆積と判断されるが判然としない。長軸方向はN－10°－Eである。土師器、須恵器、瀬戸美濃の皿、釘、骨片、礫、土壁？が出土している。

SK219土坑　G－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で153cm、短軸は98cm、深さ24cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は2層確認した。2層は混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はE－13°－Sである。SB202の柱穴に切られ、SD208を切っている。土師器、礫、在地の中世陶器甕が出土している。

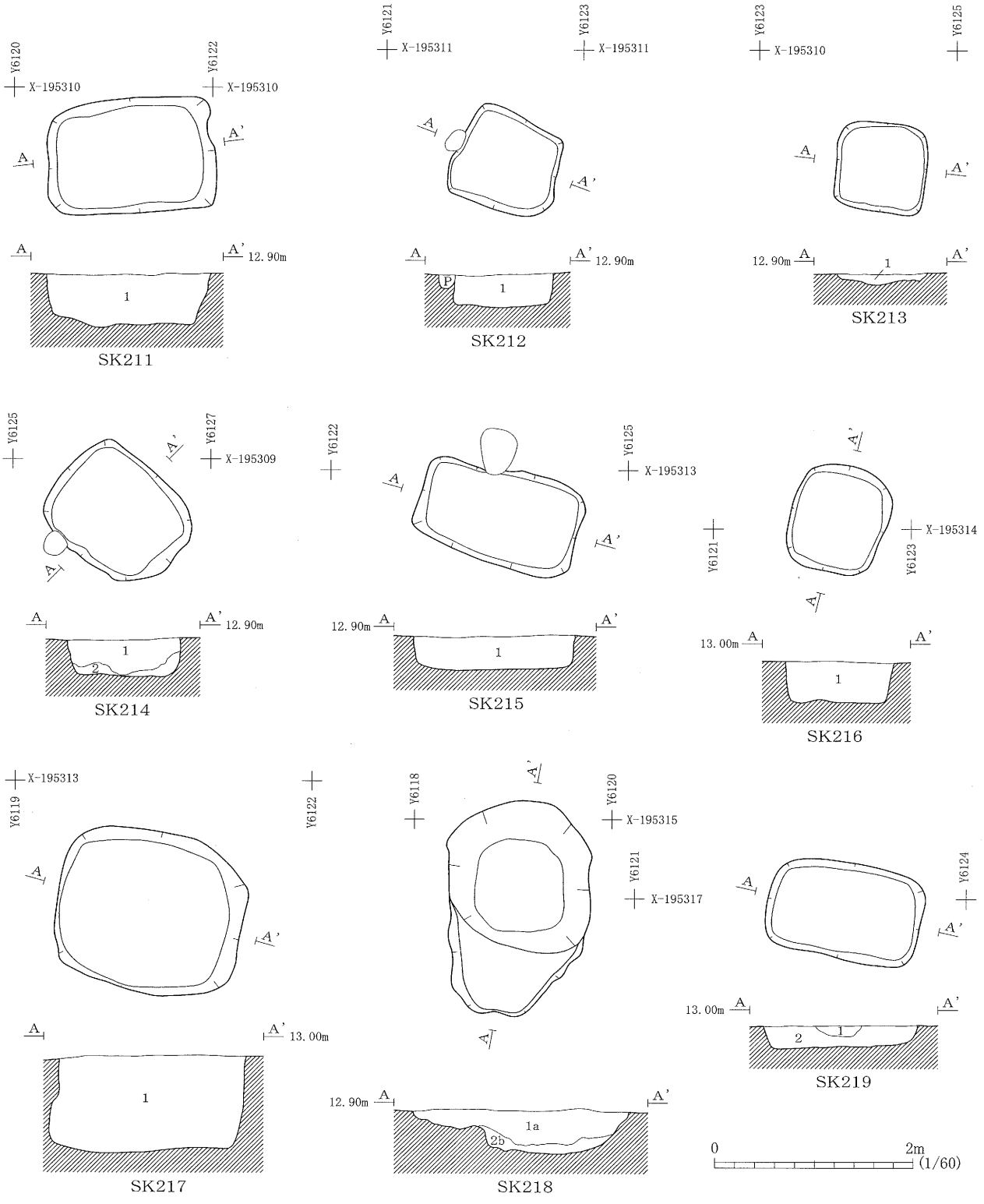
SK220土坑　G･H－4区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で133cm、短軸は105cm、深さ64cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はN－6°－Eである。SK248を切っている。土師器が出土している。

SK221土坑　H－4区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で131cm、短軸は100cm、深さ63cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は細別で2層確認し混成層である。人為堆積と判断した。長軸方向はE－35°－Sである。土師器、土壁？が出土している。

SK222土坑　G・H－4・5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で135cm、短軸は88cm、深さ68cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はE－13°－Sである。土師器が出土している。

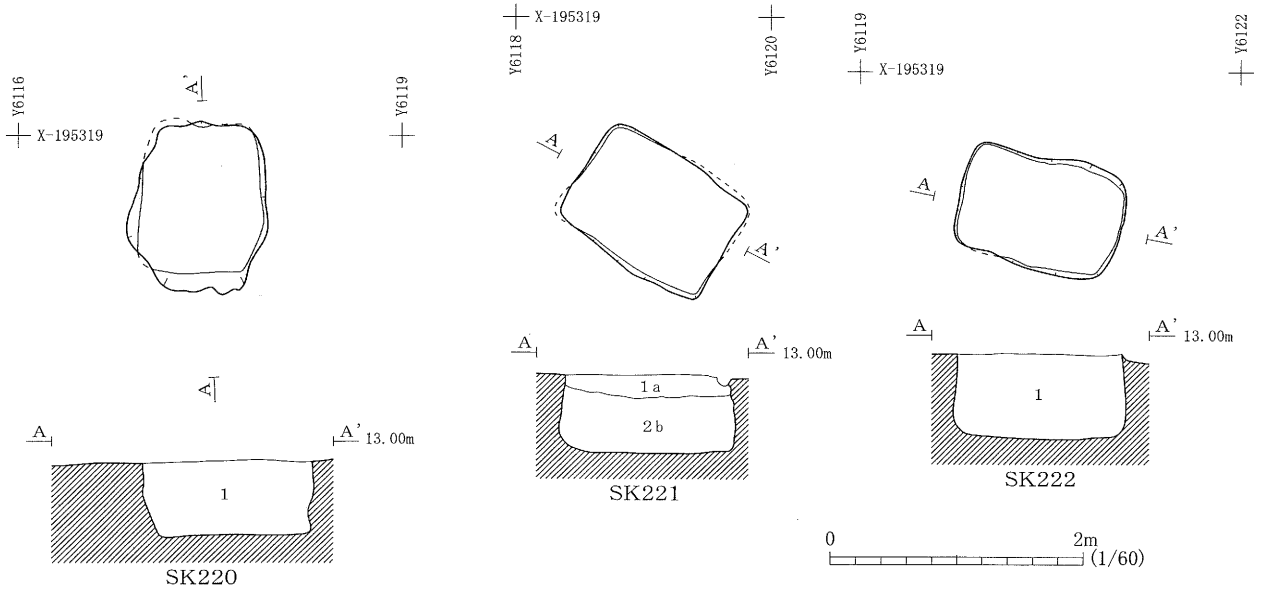
SK223土坑　H－4・5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で216cm、短軸は84cm、深さ33cmを測る。底面は平坦であるが西側部に方形状の凹面がみられる。断面形は逆台形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か判然としない。長軸方向はE－2°－Sである。SK238に切られる。須恵器が出土している。

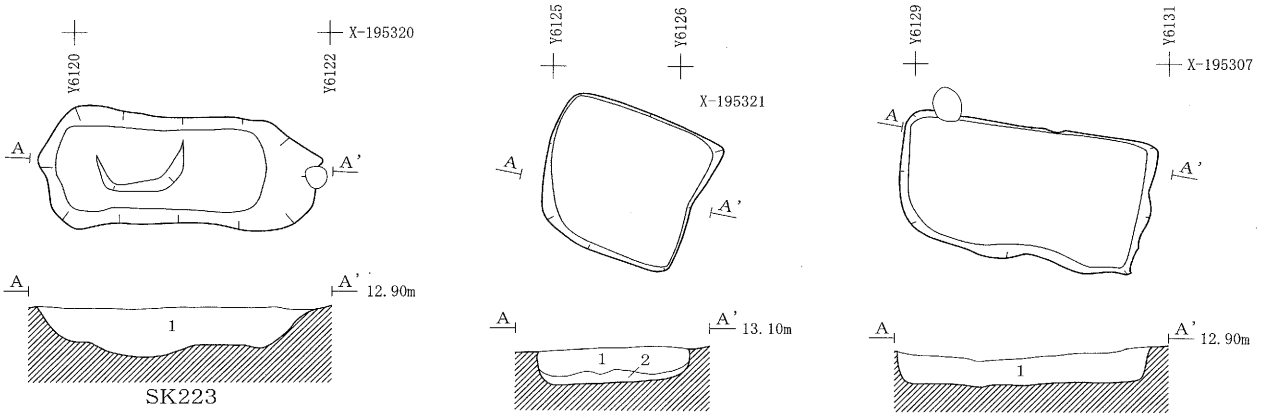
SK224土坑　H－5・6区に位置する。平面形は正方形である。東西軸128cm、南北軸119cm、深さ27cmを測る。

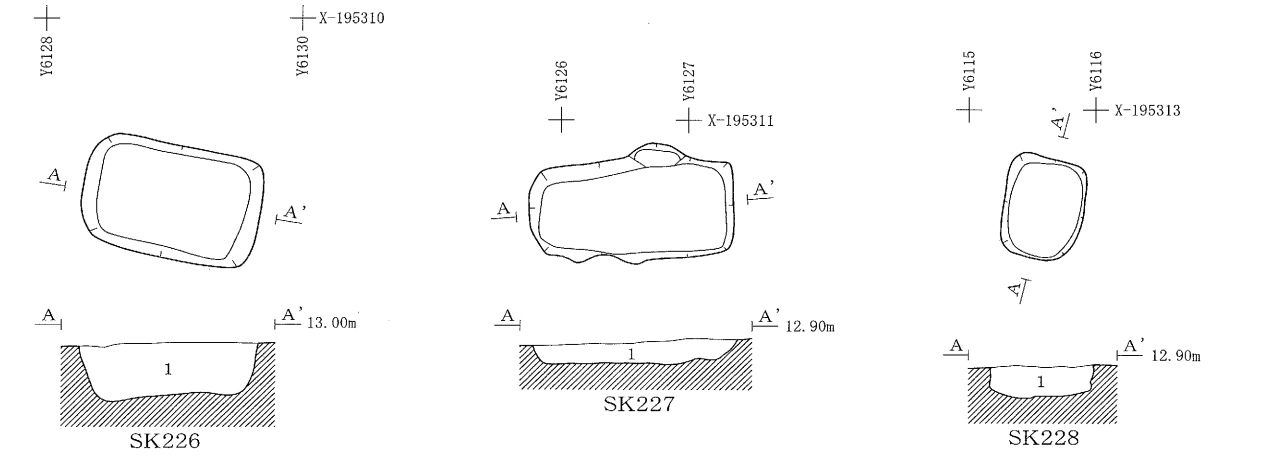


	層位	色調	性質	備考
SK211	1	暗褐色 10YR3/3	粘土	混成層、人為堆積
		褐色 10YR4/4	粘土	黒色土をブロック状に含む
SK212	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		明黄褐色 10YR6/6	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒を斑に含む
SK213	1	暗褐色 10YR3/4	粘土	混成層、人為堆積
		黄褐色 10YR5/6	粘土	炭化物を少量含む
SK214	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		明黄褐色 10YR6/8	粘土質シルト	炭化物をまばらに含む
	2	褐色 10YR4/4	粘土	炭化物粒・暗褐色土をまばらに含む
SK215	1	暗褐色 10YR3/4	粘土	混成層、人為堆積
SK215	1	黄褐色 10YR5/6	粘土	炭化物を少量含む
SK216	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	混成層、人為堆積
		黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	炭化物をまばらに含む
SK217	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	西側部では互層状
SK218	1a	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒をまばらに多く含む
	1b	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	やや灰色がつよい
SK219	1	暗褐色 10YR3/4	粘土	炭化物・黄褐色土を含む、人為堆積
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	混成層
		褐色 10YR4/4	粘土	

第38図　98年調査区土坑２







	層位	色調		性質	備考
SK220	1	暗褐色	10YR3/4	シルト	混成層、人為堆積
		明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	炭化物をスジ状及び点で含む
SK221	1a	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		褐色	10YR4/6	粘土	炭化物を多く含む
	1b	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		褐色	10YR4/6	粘土	炭化物を少量含む
SK222	1	黒褐色	10YR3/2	シルト	混成層、人為堆積？
		褐色	10YR4/4	粘土質シルト	炭化物を点で少量含む
SK223	1	暗褐色	10YR3/4	粘土	褐色土をブロックで含む

	層位	色調		性質	備考
SK224	1	黒褐色	10YR3/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		褐色	10YR4/4	粘土	炭化物・焼土を少量含む
	2	褐色	10YR4/6	粘土	灰黄褐色土を霜降り状に含む
SK225	1	暗褐色	10YR3/4	粘土	混成層、人為堆積
		褐色	10YR4/4	粘土	炭化物粒・焼土粒を少量含む
SK226	1	暗褐色	10YR3/3	粘土	混成層、人為堆積
		褐色	10YR4/4	粘土	炭化物を少量含む
SK227	1	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
SK228	1	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	黄褐色土・炭化物粒を含む、人為堆積

第39図　98年調査区土坑３

底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は2層確認した。1層は混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－23°－Sである。土師器が出土している。

SK225土坑　E－6・7区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で195cm、短軸は105cm、深さ28cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はE－11°－Sである。SK288を切っている。出土遺物はない。

SK226土坑　F－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で142cm、短軸は90cm、深さ41cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はE－12°－Sである。土師器、須恵器が出土している。

SK227土坑　F－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で161cm、短軸は85cm、深さ19cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はN－87°－Eである。出土遺物はない。

SK228土坑　F－4区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で85cm、短軸は64cm、深さ24cmを測る。底面は平坦で断面は矩形である。堆積土は1層確認した。人為堆積と判断した。長軸方向はN－12°－Eである。土師器が出土している。

SK229土坑　F－3区の西壁に位置する。平面形は長方形と判断される。南北軸131cm、東西軸52cmまで確認、深さ38cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－11°－Eである。龍泉窯の青磁碗が出土している。

SK230土坑　G－2・3区に位置する。平面形は正方形である。南北軸105cm、東西軸97cm、深さ38cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層確認した。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－18°－Eである。土師器、須恵器が出土している。

SK231土坑　F－3区の西壁に位置する。平面形は長円形と判断される。東西軸60cmまで確認、南北軸70cm、深さ26cmを測る。底面はゆるい皿状で断面形はやや深い皿形である。堆積土は細別で2層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。東西軸方向はE－35°－Sである。須恵器が出土している。

SK232土坑　F－3区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で86cm、短軸は71cm、深さ69cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はE－8°－Sである。土師器が出土している。

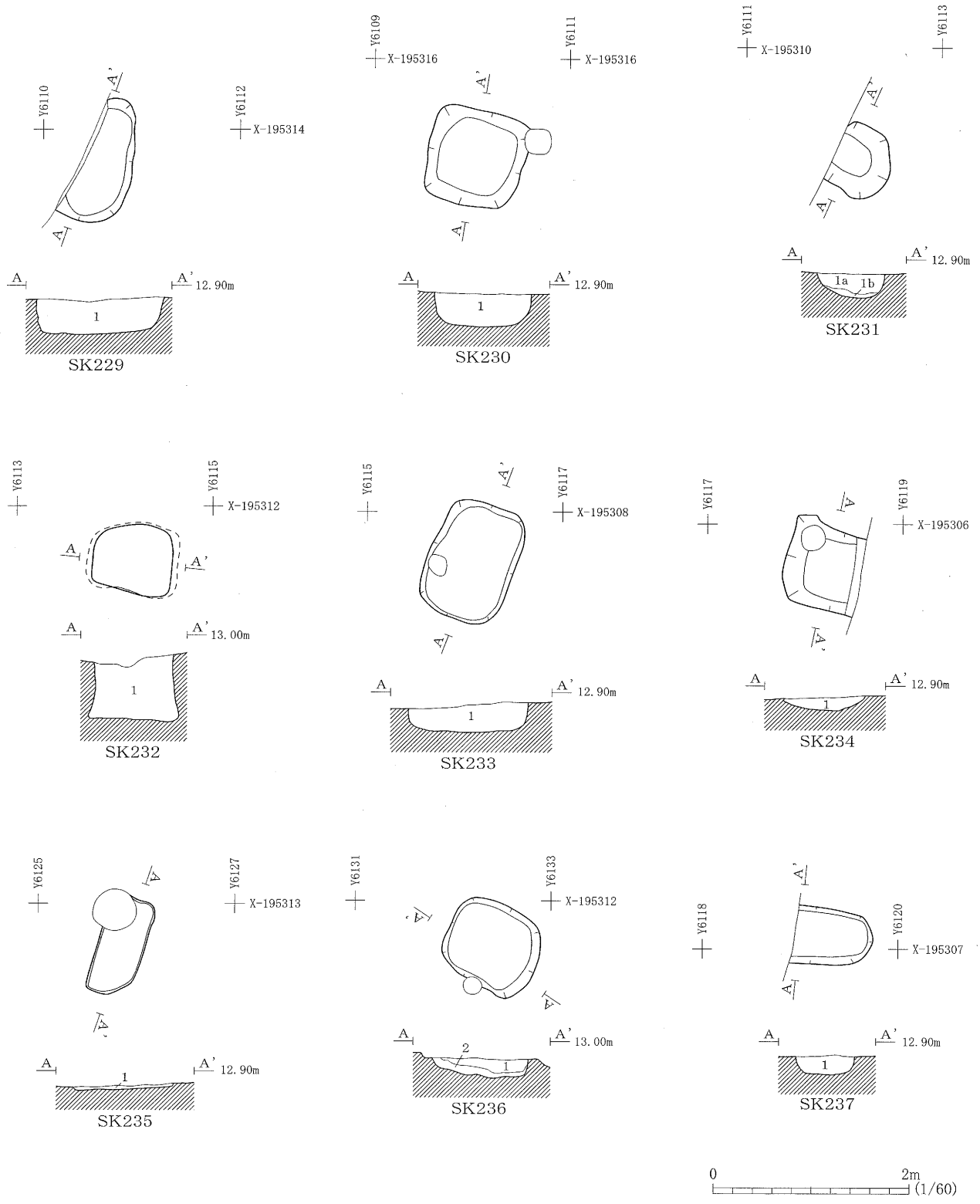
SK233土坑　E－4区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で127cm、短軸88cm、深さ29cmを測る。底面は平坦で断面は矩形である。堆積土は1層確認し人為堆積と判断した。長軸方向はN－21°－Eである。土師器、須恵器、炉壁が出土している。

SK234土坑　E－4区に位置する。埋設管に東側部が削平されている。平面形は長方形と判断される。長軸は東—西方向で83cmまで確認、短軸は80cm、深さ15cmを測る。底面は皿状で断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。長軸方向はE－15°－Sである。SK259を切っている。出土遺物はない。

SK235土坑　F－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で106cm、短軸は48cm、深さ4cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。長軸方向はN－16°－Eである。SB202の柱穴に切られている。出土遺物はない。

SK236土坑　F－7区に位置する。平面形は正方形である。東西軸97cm、南北軸86cm、深さ20cmを測る。底面はやや凹凸面で傾斜している。断面形はやや不整な矩形となる。堆積土は2層確認した。人為ないし自然の堆積か判然としない。東西軸方向はE－29°－Sである。土師器、須恵器が出土している。

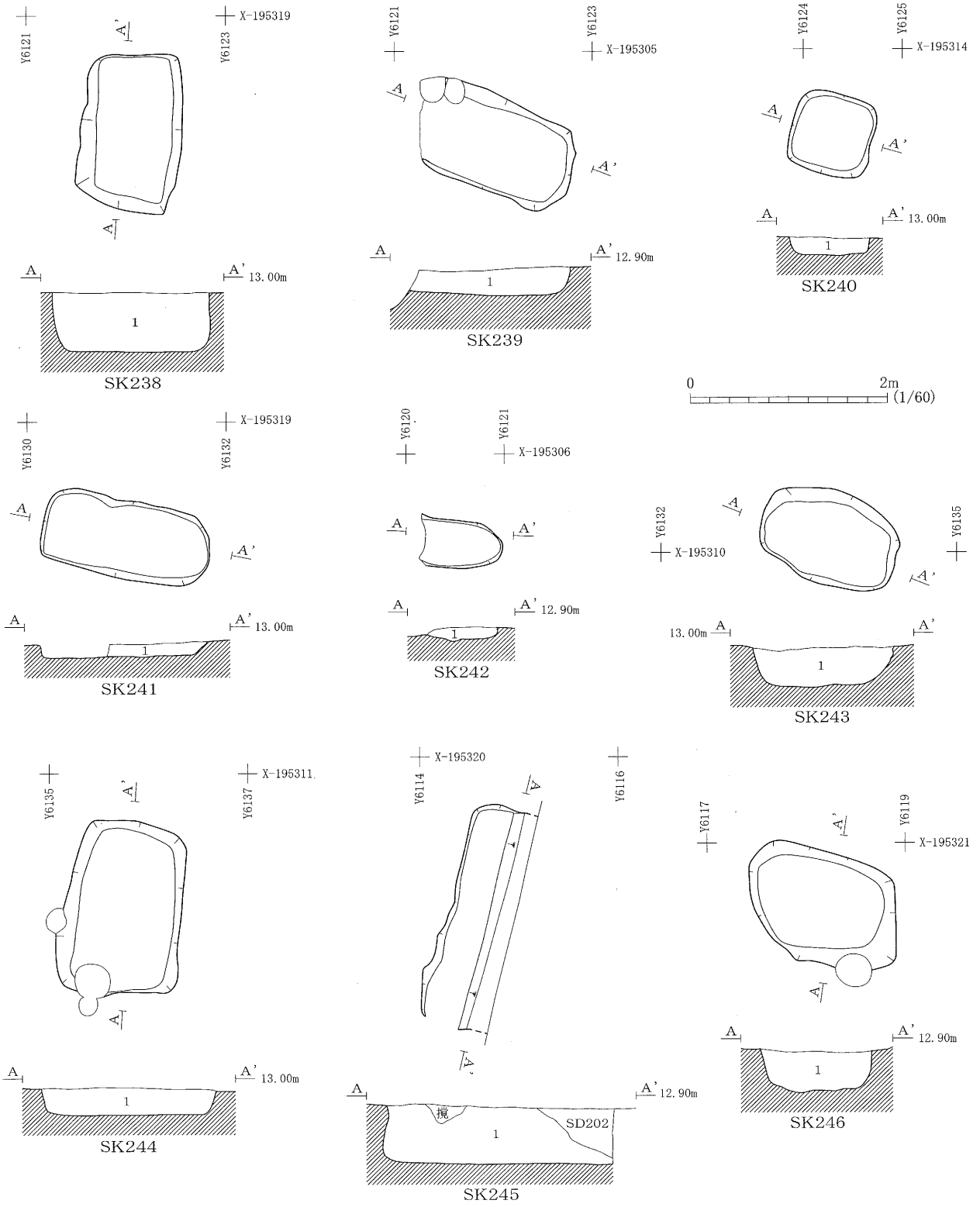
SK237土坑　E－4区に位置する。埋設管に西側部が削平されている。平面形は長円形と判断される。長軸は東



	層位	色調	性質	備考
SK229	1	褐色 10YR4/4	粘土	互層状、人為堆積
		黒褐色 10YR3/2	粘土	炭化物をスジ状に含む
SK230	1	褐色 10YR4/4	粘土	黒褐色土を斑に含む、人為堆積
SK231	1a	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	黄褐色土・炭化物粒を含む
	1b	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	人為堆積？
SK232	1	黒褐色 10YR3/2	粘土	混成層、人為堆積
		褐色 10YR4/4	粘土	炭化物を少量含む

	層位	色調	性質	備考
SK233	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土・炭化物・焼土を含む、人為堆積
SK234	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物粒を斑に含む
SK235	1	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	
SK236	1	黒褐色 10YR3/1	粘土	
	2	褐色 10YR4/4	粘土	黒褐色土ブロックを少量含む
SK237	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	炭化物を含む

第40図　98年調査区土坑４



	層位	色	調	性 質	備 考
SK238	1	暗褐色	10YR3/3	粘土	混成層、人為堆積
		褐色	10YR4/4	粘土	炭化物・焼土を少量含む
SK239	1	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		褐色	10YR4/6	粘土	炭化物・焼土を含む
SK240	1	黒褐色	10YR3/2	粘土	混成層、人為堆積
		褐色	10YR4/4	粘土	炭化物・焼土を含む
SK241	1	暗褐色	10YR3/3	粘土	混成層、人為堆積？
		褐色	10YR4/4	粘土	
SK242	1	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐色土・炭化物を含む

	層位	色	調	性 質	備 考
SK243	1	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	混成層、スジ状の堆積、人為堆積
		暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒をまばらに含む
SK244	1	褐色	10YR4/4	砂質シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色	10YR3/4	シルト	炭化物粒を点的に含む
SK245	1	褐色	10YR4/6	粘土	混成層、人為堆積
		暗褐色	10YR2/3	粘土質シルト	
SK246	1	褐色	10YR4/6	粘土	混成層、人為堆積
		暗褐色	10YR2/3	粘土質シルト	

第41図　98年調査区土坑５

一西方向で80cmまで確認、短軸は66cm、深さ20cmを測る。底面は平坦で断面形はやや深めの皿形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。長軸方向はE－5°－Sである。SK259を切っている。須恵器が出土している。

SK238土坑　G・H－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で166cm、短軸は103cm、深さ62cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。長軸方向はN－2°－Eである。SK233を切っている。土師器、須恵器、在地の中世陶器甕が出土している。

SK239土坑　E－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で165cmまで確認、短軸は93cm、深さ29cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形となる。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。長軸方向はE－26°－Sである。SK261に切られる。土師器が出土している。

SK240土坑　F・G－5区に位置する。平面形は正方形である。東西軸86cm、南北軸84cm、深さ18cmを測る。底面は平坦で断面は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－17°－Sである。出土遺物はない。

SK241土坑　H－7区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で171cm、短軸81cm、深さ15cmを測る。底面は平坦で断面は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。方向はE－11°－Sである。出土遺物はない。

SK242土坑　E－5区に位置する。平面形は長円形と判断される。長軸は東西方向で80cmまで確認、短軸は50cm、深さ12cmを測る。底面はやや凹凸面で断面形は矩形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。東西軸方向はE－8°－Sである。SK261を切り、西側部は攪乱坑で削平されている。出土遺物はない。

SK243土坑　E・F－7区に位置する。平面形はやや不整な長方形である。長軸は東西方向で148cm、短軸は93cm、深さ40cmを測る。底面はやや凹凸面で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－18°－Sである。須恵器、古銭（元豊通宝）が出土している。

SK244土坑　F－8区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で182cm、短軸は119cm、深さ29cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－7°－Eである。SK252・SK256を切っている。土師器が出土している。

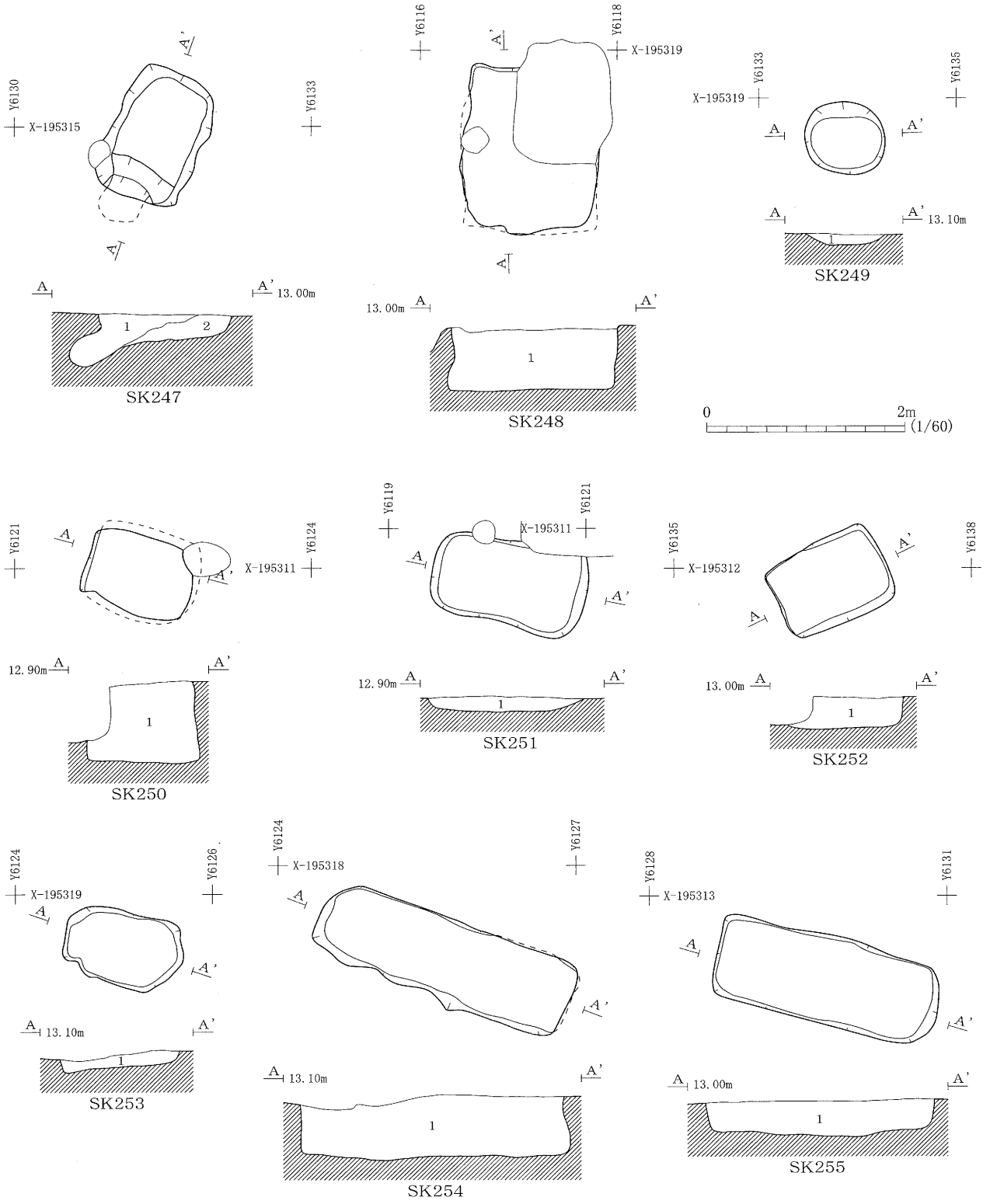
SK245土坑　H－3区に位置する。埋設管に削平されるが、平面形は長方形と判断した。長軸は南北方向で230cmまで確認、短軸は51cmまで確認、深さ60cmを測る。底面は平坦で断面は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－13°－Eである。SD202に切られる。土師器、中世陶器甕が出土している。

SK246土坑　H－4区に位置する。平面形は不整な方形である。長軸は東西方向で153cm、短軸は119cm、深さ45cmを測る。底面はやや凹凸面で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－15°－Sである。土師器、古銭が出土している。

SK247土坑　F・G－7区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で138cm、短軸は90cm、深さ26cmを測る。底面はゆるやかに南側へ傾斜し南壁中央に袋状のピットが斜め方向に掘られている。断面形は矩形である。堆積土は2層確認した。人為ないし自然の堆積か判然としない。南北軸方向はN－30°－Eである。土師器が出土している。

SK248土坑　G・H－4区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で165cm、短軸は140cm、深さ67cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か判然としない。南北軸方向はN－5°－Eである。SK220に切られる。土師器が出土している。

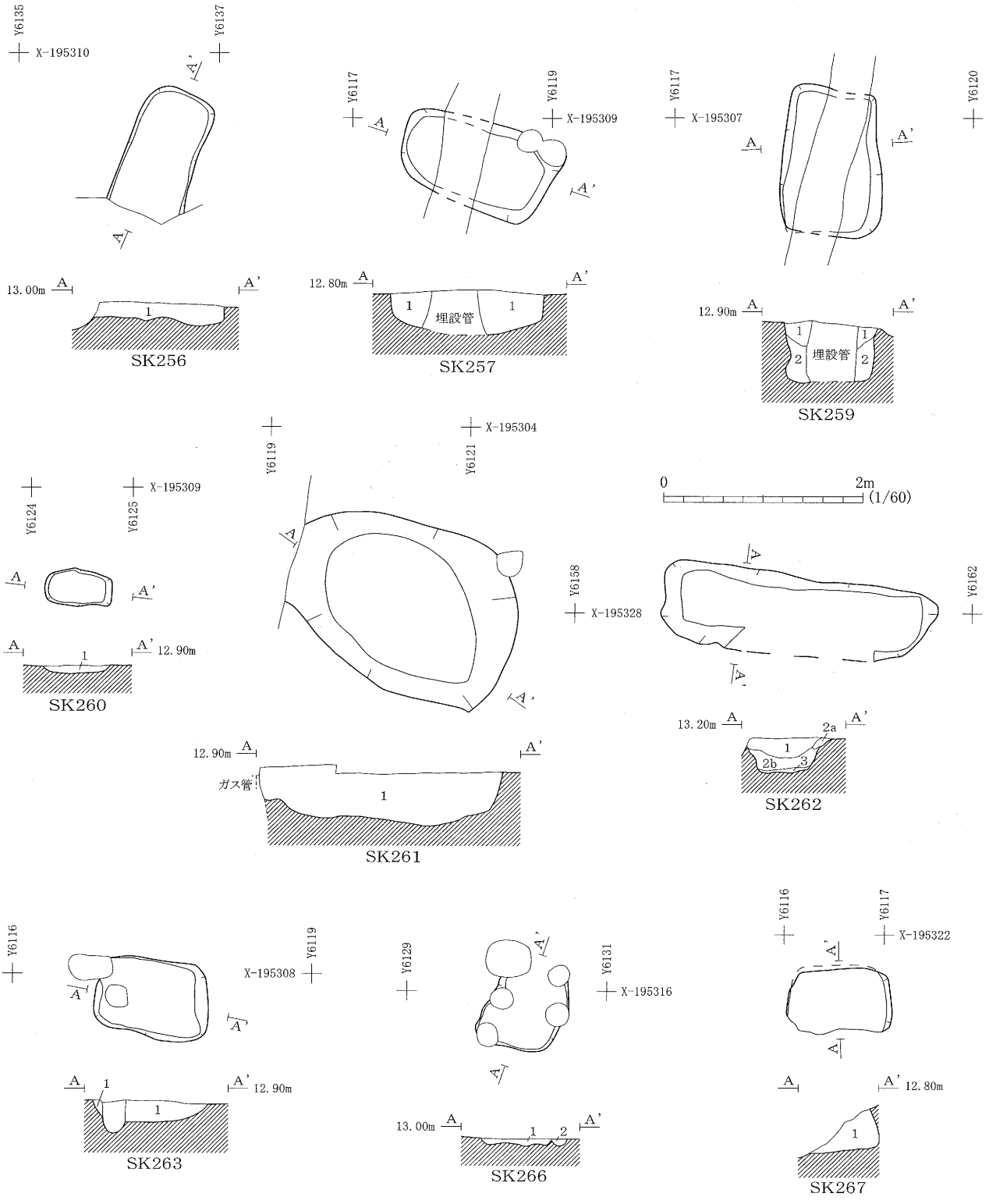
SK249土坑　G・H－7区に位置する。平面形は円形である。径75～95cm、深さ12cmを測る。底面は弧状となり断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。出土遺物はない。



	層位	色調	性質	備考
SK247	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	褐色土を薄く含み互層状
	2	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	暗褐色土を斑に含む
SK248	1	褐色 10YR4/6	粘土	黒褐色土・炭化物を少量含む 人為堆積？
SK249	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	褐色土を含む、人為堆積？
SK250	1	黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	黄褐色土・焼土・炭化物を含む
SK251	1	褐色 10YR4/6	シルト質粘土	混成層、人為堆積？
		黒褐色 10YR2/2	シルト質粘土	

	層位	色調	性質	備考
SK252	1	褐色 10YR4/4	砂質粘土	混成層
		暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	
SK253	1	暗褐色 10YR3/4	粘土	混成層、人為堆積？
		褐色 10YR4/4	粘土	炭化物・焼土を含む
SK254	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		褐色 10YR4/6	粘土	焼土・炭化物を含む
SK255	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	混成層、人為堆積
		褐色 10YR4/6	粘土	炭化物・焼土を少量含む

第42図　98年調査区土坑６



	層位	色調	性質	備考
SK256	1	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	
SK257	1	褐色 10YR4/6	粘土	混成層、人為堆積
		暗褐色 10YR3/3	粘土	焼土・炭化物を少量含む
SK259	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を多く含む、人為堆積
	2	褐色 10YR4/6	粘土	混成層、炭化物を少量含む
		暗褐色 10YR3/3	シルト	
SK260	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	黄褐色土を小ブロックで含む
SK261	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		黄褐色 10YR5/6	粘土	炭化物・焼土を含む

	層位	色調	性質	備考
SK262	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	黄褐色土粒を細かく斑に含む
	2a	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	黄褐色土粒を含む
	2b	黒褐色 10YR2/3	シルト	黄褐色土ブロックをスジ状に含む
	3	黄褐色 10YR5/6	シルト	暗褐色土を少量含む
SK263	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	混成層、人為堆積
		褐色 10YR4/6	粘土	
SK266	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	混成層
		褐色 10YR4/4	シルト	
SK267	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	混成層、炭化物粒を斑に含む
		褐色 10YR4/4	粘土質シルト	

第43図　98年調査区土坑７

SK250土坑　F－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で114cm、短軸は80cm、深さ84cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－18°－Sである。SK211に切られる。須恵器が出土している。

SK251土坑　F－4・5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で165cm、短軸は83cm、深さ15cmを測る。底面は弧状となり断面形は皿形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－16°－Sである。SK211に切られる。土師器、骨片が出土している。

SK252土坑　F－8区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で117cm、短軸は88cm、深さ33cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はN－66°－Eである。SK244に切られSK256を切っている。土師器が出土している。

SK253土坑　G・H－5・6区に位置する。平面形は不整方形である。長軸は東西方向で126cm、短軸は75cm、深さ15cmを測る。底面は平坦であるが西側へ傾斜している。断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－20°－Sである。SK254を切っている。土師器が出土している。

SK254土坑　G・H－5・6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で266cm、短軸は90cm、深さ39cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－15°－Sである。SK253に切られる。土師器、須恵器が出土している。

SK255土坑　F－6・7区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で226cm、短軸は90cm、深さ39cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－15°－Sである。土師器、須恵器、古瓦、石製品、骨片が出土している。

SK256土坑　F－8区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で133cmまで確認、短軸は73cm、深さ16cmを測る。底面はやや凹凸面で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－11°－Eである。SK244・SK252に切られる。土師器が出土している。

SK257土坑　E・F－4区に位置する。中央部を埋設管に切られている。平面形は長方形である。長軸は東西方向で156cm、短軸は90cm、深さ45cmを測る。底面はゆるい皿状となるが断面形は矩形に属する。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－20°－Sである。出土遺物はない。

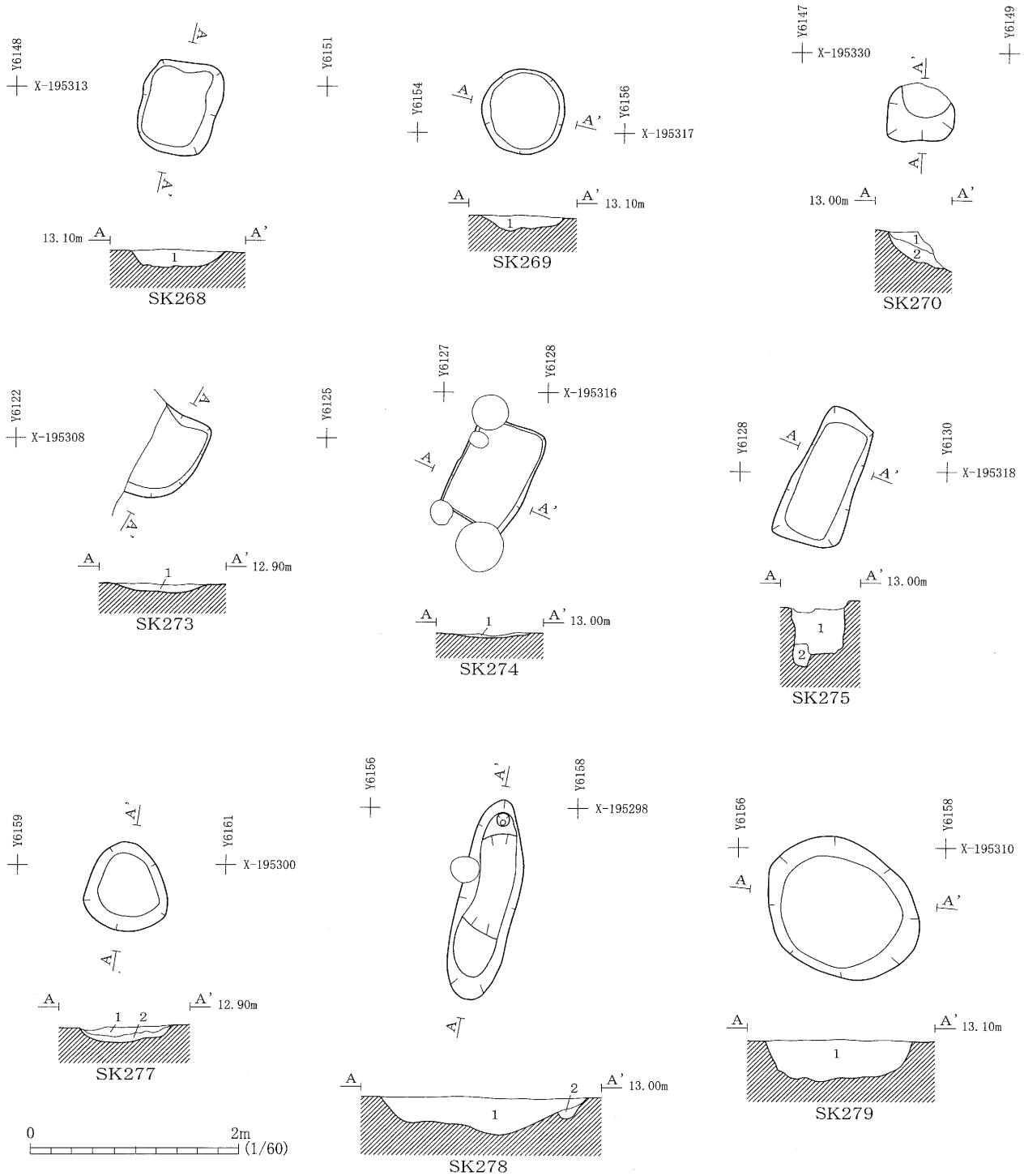
SK259土坑　E－4区に位置する。中央部を埋設管に切られている。平面形は長方形である。長軸は南北方向で150cm、短軸は104cm、深さ64cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は2層確認した。ともに混成層である。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－7°－Eである。SK234・SK237に切られる。鉄製品・骨片が出土している。

SK260土坑　E・F－5区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で67cm、短軸は39cm、深さ7cmを測る。底面は平坦で断面形は皿形となる。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。東西軸方向はE－6°－Sである。出土遺物はない。

SK261土坑　D・E－4・5区に位置する。平面形は不整の長円形である。長軸は東西方向で250cmまで確認、短軸は173cm、深さ55cmを測る。底面はゆるい凹凸面で断面形は矩形に属する。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－41°－Sあたりとなる。SK242に切られSK239を切っている。土師器、須恵器、中世陶器甕が出土している。

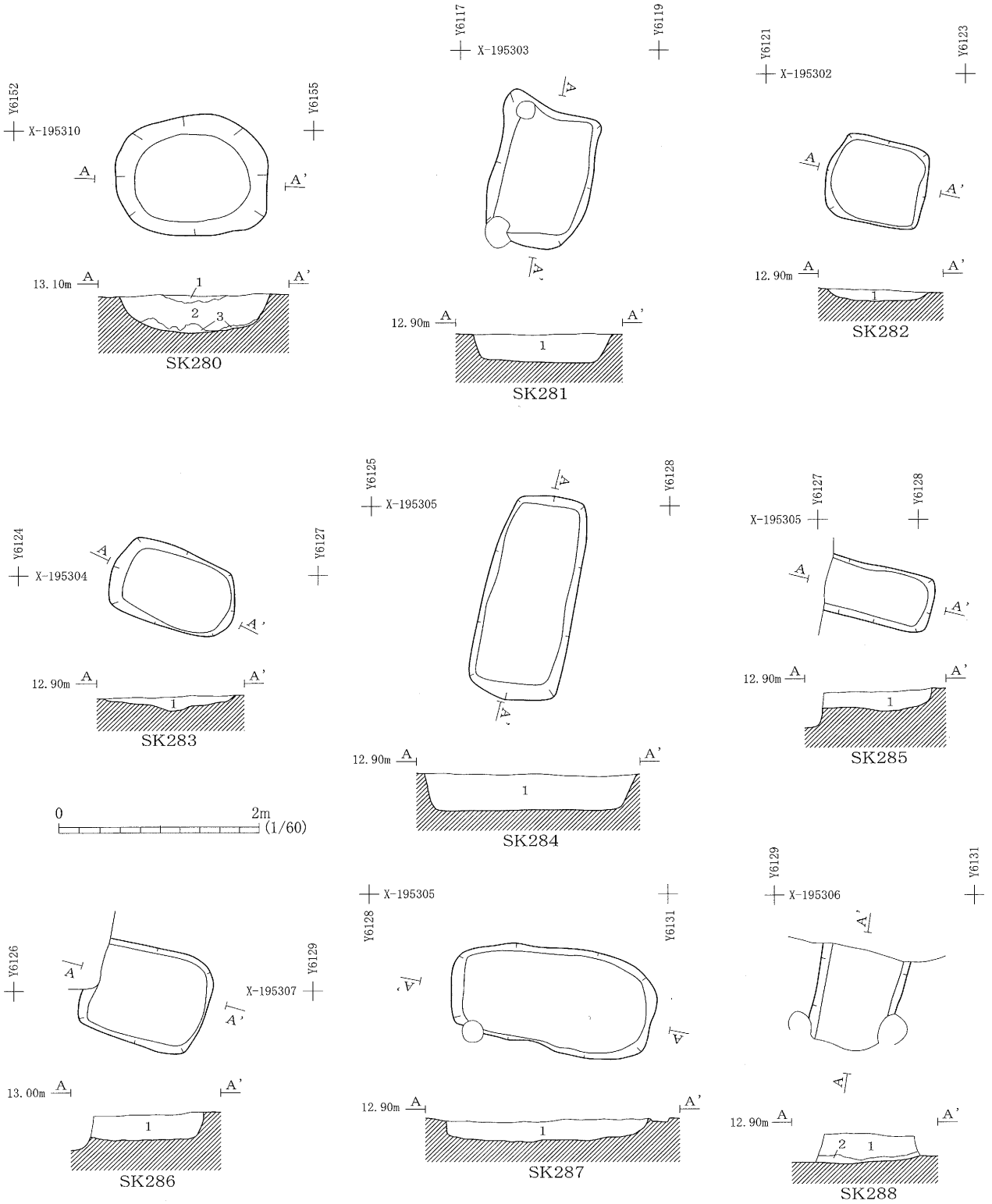
SK262土坑　I－12・13区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で276cmまで確認、短軸は83cm、深さ36cmを測る。底面は平坦で断面形は逆台形形である。堆積土は3層確認した。人為堆積とも判断されるが判然としない。東西軸方向はE－9°－Sである。SD202に切られる。土師器、骨片が出土している。

SK263土坑　E－4区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で118cm、短軸は77cm、深さ22cmを



	層位	色調	性質	備考
SK268	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	馬頭骨埋葬
SK269	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積？
		褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
SK270	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	褐色土スジ状に含む
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	褐灰色土・黒褐色土をスジ状に含む
SK273	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	混成層、炭化物を少量含む
		褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
SK274	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	混成層、焼土・炭化物を少量含む
		褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
SK275	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	混成層、人為堆積
SK275		にぶい黄橙色 10YR7/3	砂質粘土	
	2	黒褐色 10YR2/2	粘土	にぶい黄橙色土・褐色土を含む
SK277	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積？
		暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	砂を斑に含み焼土を少量含む
	2	褐色 10YR4/4	砂	暗褐色土粒を斑に含む
SK278	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	混成層、人為堆積
		褐色 10YR4/4	シルト	
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	
SK279	1	黄褐色 10YR5/6	シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物を少量含む

第44図　98年調査区土坑８



	層位	色調	性質	備考
SK280	1	褐色 10YR4/4	シルト	混成層、明黄褐色土を斑に含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・焼土粒をまばらに含む
	3	明黄褐色 10YR6/6	粘土質シルト	褐色土を斑に含む
SK281	1	黄褐色 10YR5/8	粘土	混成層、焼土・炭化物を含む
		暗褐色 10YR3/3	粘土	
SK282	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土・焼土・炭化物を含む
SK283	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	混成層、人為堆積？
		暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	炭化物・焼土を部分的に含む
SK284	1	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色 10YR3/3	シルト	焼土・炭化物を少量含む

	層位	色調	性質	備考
SK285	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		褐色 10YR4/6	粘土質シルト	
SK286	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
SK287	1	褐色 10YR4/6	粘土	混成層、人為堆積
		暗褐色 10YR3/3	粘土	焼土・炭化物を少量含む
SK288	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		褐色 10YR4/6	粘土	焼土・炭化物を含む
	2	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	混成層
		暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	

第45図　98年調査区土坑９

測る。底面はゆるい弧状で断面形は皿形である。堆積土は１層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－10°－Sである。須恵器が出土している。

SK266土坑　G－６・７区に位置する。平面形は長方形と判断される。北側壁が遺存しない。長軸は南北方向で85cmまで確認、短軸は75cm、深さ７cmを測る。底面はゆるい凹凸面となり断面形はおおきく矩形と判断される。堆積土は1層で混成層となる。遺存が不良で人為ないし自然の堆積か不明である。南北軸方向はN－16°－Eである。出土遺物はない。

SK267土坑　H－４区に位置する。SD202壁面での確認で南側が遺存しない。平面形は方形と判断される。東西軸で104cm、南北軸で63cmまで確認、深さ50cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形と判断される。堆積土は１層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－０°－Sである。土師器が出土している。

SK268土坑　F－10区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で94cm、短軸は73cm、深さ16cmを測る。底面は平坦で断面形は逆台形である。馬の首が確認され、埋納したものと判断した。土師器、須恵器が出土している。南北軸方向はN－14°－Eである。

SK269土坑　G－11・12区に位置する。平面形は円形である。径80～83cm、深さ16cmを測る。底面は弧状で断面形は皿形である。堆積土は１層で混成層である。人為堆積と判断されるが判然としない。SD210を切っている。出土遺物はない。

SK270土坑　J－10区に位置する。SD203肩部での確認で北側部が遺存しない。平面形は方形と判断される。東西軸65cm、南北軸57cmまで確認、深さ37cmを測る。底面は弧状となり断面形は皿形である。堆積土は２層確認し自然堆積と判断した。南北軸方向はN－１°－Eである。出土遺物はない。

SK273土坑　E－５区に位置する。平面形は方形と判断される。南北軸96cm、東西軸54cmまで確認、深さ８cmを測る。底面は弧状で断面形は皿形である。堆積土は１層で混成層となる。人為堆積と判断されるが判然としない。南北軸方向はN－25°－Eである。土師器、古瓦が出土している。

SK274土坑　G－６区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で102cm、短軸70cm、深さ５cmを測る。底面は弧状で断面形は皿形である。堆積土は１層で混成層となる。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－27°－Eである。SI203に切られる。骨片が出土している。

SK275土坑　G－６区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で138cm、短軸60cm、深さ45cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は２層確認した。人為堆積と判断される。南北軸方向はN－26°－Eである。SI203に切られる。土師器が出土している。

SK277土坑　C・D－12・13区に位置する。平面形は不整円形である。径75～90cm、深さ15cmを測る。底面は弧状で断面形は皿形である。堆積土は２層確認した。１層は混成層となる。人為ないし自然の堆積か判然としない。出土遺物はない。

SK278土坑　C－12区に位置する。平面形は長円形である。長軸は南北方向で200cm、短軸56cm、深さ36cmを測る。底面はゆるくおおきな凹凸面となり断面形は逆台形状となる。堆積土は２層確認した。１層は混成層である。人為堆積と判断される。南北軸方向はN－10°－Eである。出土遺物はない。

SK279土坑　E・F－12区に位置する。平面形はやや不整の円形である。径124～153cm、深さ37cmを測る。底面はゆるい凹凸面となり断面形は深めの皿形である。堆積土は１層で混成層となる。人為堆積と判断した。土師器、土師質土器擂鉢、炉壁、古銭、漆の皮膜が出土している。

SK280土坑　E・F－11区に位置する。平面形は不整の円形である。径124～153cm、深さ37cmを測る。底面は弧状で断面形は皿形である。堆積土は３層確認した。自然堆積である。土師器、鉄製品（釘？）が出土している。

SK281土坑　D・E－４区に位置する。平面形は不整の長方形である。長軸は南北方向で150cm、短軸は100cm、

深さ28cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－15°－Eである。須恵器が出土している。

SK282土坑　D－5区に位置する。平面形は正方形である。南北軸105cm、東西軸86cm、深さ12cmを測る。底面はゆるい弧状となり断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。東西軸方向はE－12°－Sである。出土遺物はない。

SK283土坑　D－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で121cm、短軸81cm、深さ13cmを測る。底面は凹凸面となり断面形は皿形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積かと判断されるが判然としない。東西軸方向はE－19°－Sである。石器が出土している。

SK284土坑　E－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は南北方向で211cm、短軸93cm、深さ36cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－12°－Eである。SK285・SK286を切る。土師器、中世陶器甕、骨片が出土している。

SK285土坑　E－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で109cmまで確認、短軸57cm、深さ16cmを測る。底面はやや凹凸面となり断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－15°－Sである。SK284に切られる。出土遺物はない。

SK286土坑　E－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で126cm、短軸100cm、深さ26cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－16°－Sである。SK284に切られる。出土遺物はない。

SK287土坑　E－6・7区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で217cm、短軸100cm、深さ20cmを測る。底面はやや凹凸面となるが断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断した。東西軸方向はE－8°－Sである。SK288を切る。出土遺物はない。

SK288土坑　E－6・7区に位置する。平面形は長方形と判断される。長軸は南北方向で104cmまで確認、短軸81cm、深さ31cmを測る。底面はやや凹凸面であるが断面形は矩形である。堆積土は2層でともに混成層となる。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－13°－Eである。SK225・SK287に切られる。出土遺物はない。

SK289土坑　B－6区に位置する。平面形は不整円形である。径63～65cm、深さ15cmを測る。底面は弧状となり断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。自然堆積と判断した。SK293を切る。出土遺物はない。

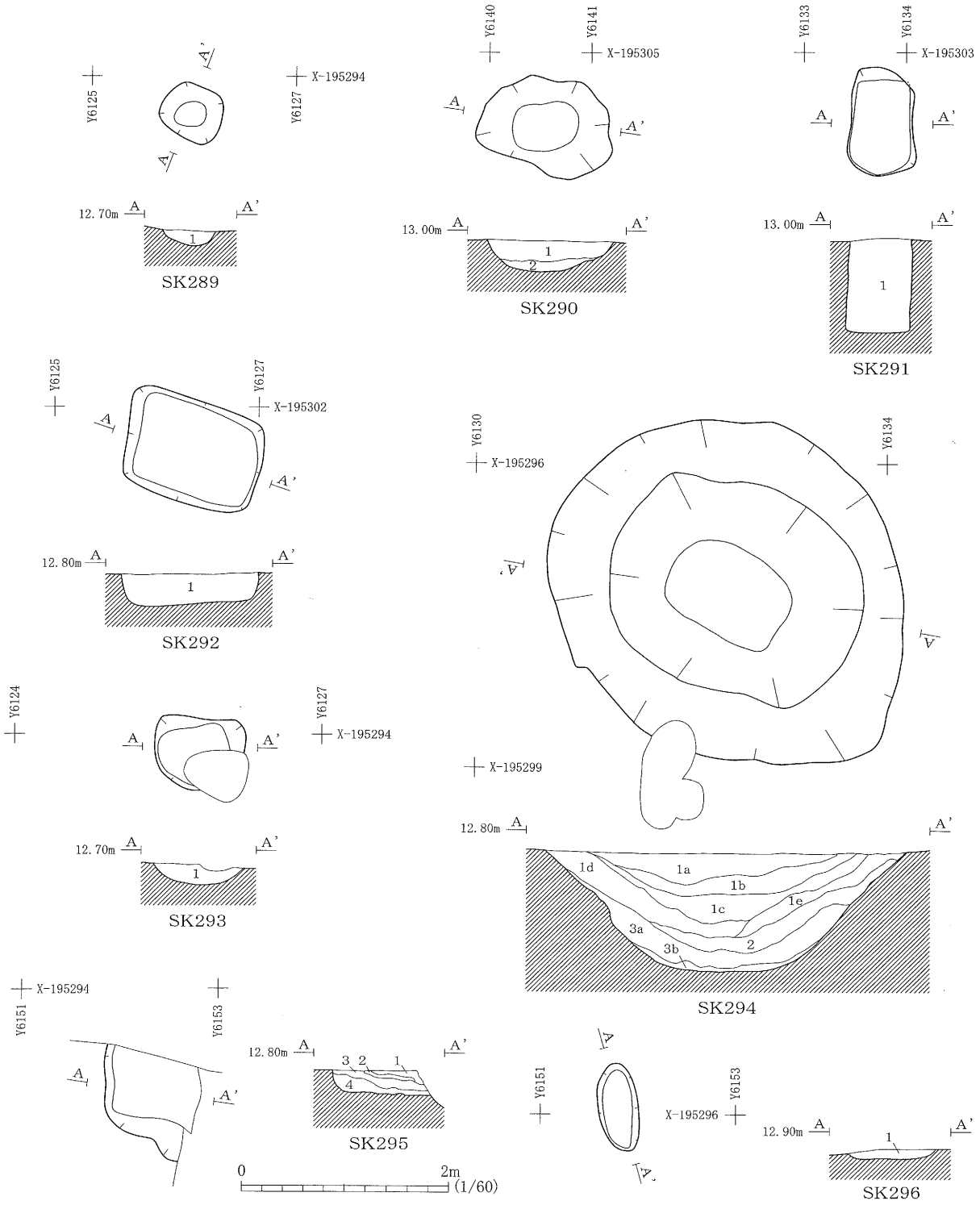
SK290土坑　E－8・9区に位置する。平面形は不整円形である。東西軸131cm、南北軸100cm、深さ30cmを測る。底面は弧状で断面形は皿形である。堆積土は2層確認し下層は混成層となる。人為ないし自然の堆積か不明である。土師器、須恵器が出土している。

SK291土坑　D－7区に位置する。平面形は方形である。長軸は南北方向で106cm、短軸67cm、深さ94cmを測る。底面は平坦で断面形は深い矩形となる。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。南北軸方向はN－1°－Wである。土師器、須恵器が出土している。

SK292土坑　D－6区に位置する。平面形は長方形である。長軸は東西方向で139cm、短軸100cm、深さ30cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層で混成層となる。人為堆積と判断される。東西軸方向はE－20°－Sである。出土遺物はない。

SK293土坑　B－6区に位置する。平面形は不整円形である。径80～90cm、深さ20cmを測る。底面は弧状となり断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。自然堆積と判断した。SK289に切られる。出土遺物はない。

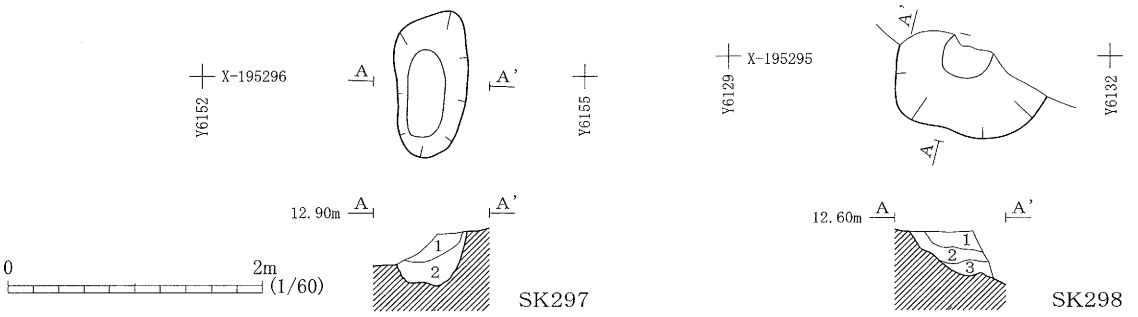
SK294土坑　C－7区に位置する。平面形は円形である。東西軸370cm、南北軸322cm、深さ115cmを測る。底面は平坦面となり断面形は深い皿形となる。堆積土は大別で3層確認しレンズ状堆積を呈している。自然堆積と判断した。SD215・SD217に切られる。須恵器、中世陶器甕が出土している。



	層位	色調	性質	備考
SK289	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土	灰黄褐色土ブロックを含む
SK290	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土を小ブロックで含む
	2	黄褐色 10YR5/6	粘土	混成層
		暗褐色 10YR3/3	シルト	
SK291	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	混成層、人為堆積
		黄褐色 10YR5/6	砂質粘土	焼土・炭化物を少量含む
SK292	1	黄褐色 10YR5/6	粘土	混成層、人為堆積
		黒褐色 10YR3/2	粘土	
SK293	1	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	褐色土・焼土・炭化物を少量含む
SK294	1a	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土をスジ状及び点で含む
	1b	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物粒を斑に含む

	層位	色調	性質	備考
SK294	1c	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	混成層
		黄褐色 10YR5/8	粘土質シルト	
	1d	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物粒を細かく含む
	1e	黄褐色 10YR5/8	粘土質シルト	暗褐色土を斑に含む
	2	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土ブロックをまばらに含む
	3a	暗灰黄褐色 2.5Y4/2	粘土質シルト	酸化鉄を粒状にまばらに含む
	3b	黄褐色 2.5Y4/1	粘土	
SK295	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	黄橙色土を斑に含む
	2	黄橙色 10YR7/8	粘土	褐色土を少量含む
	3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	褐灰色土をスジ状に含む
	4	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	暗褐色土をまばらに含む
SK296	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む

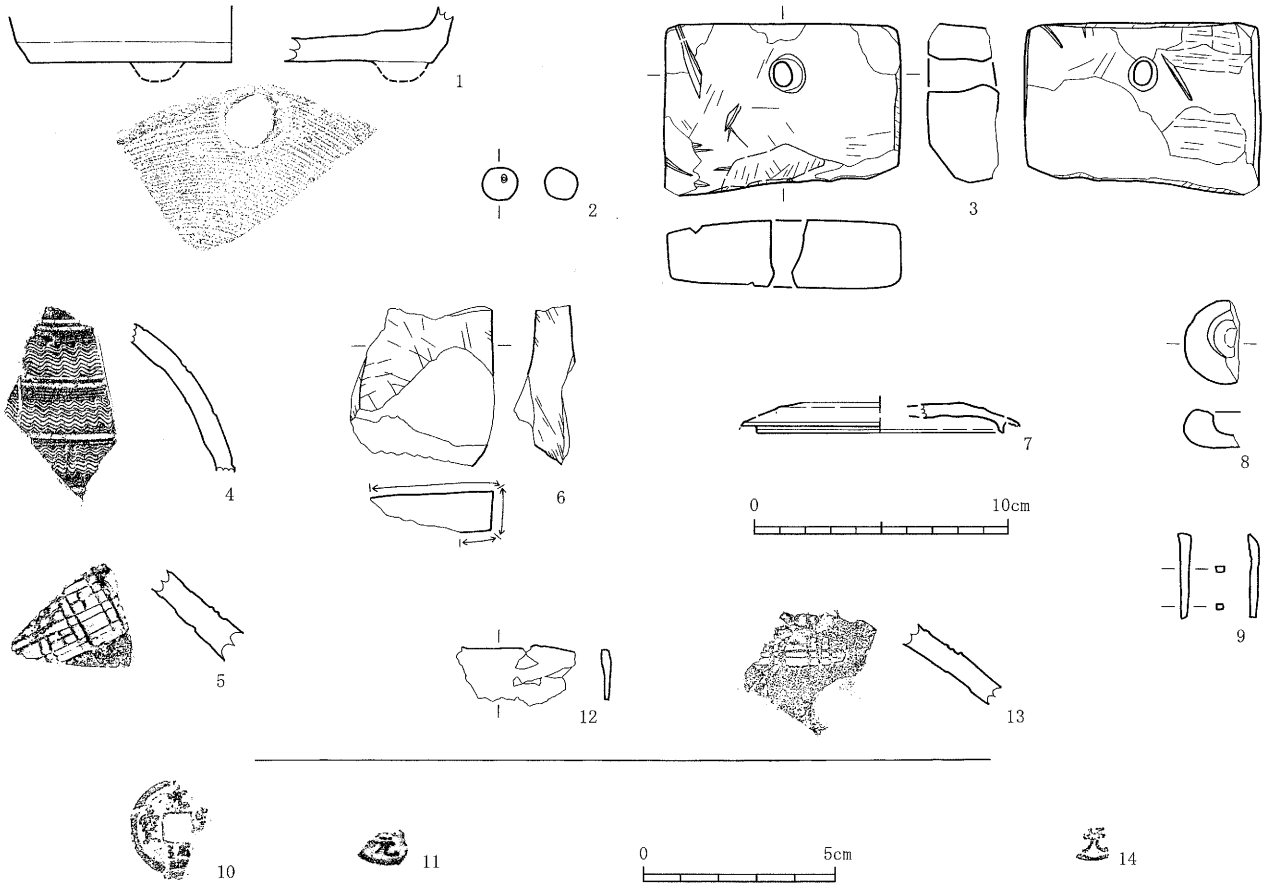
第46図　98年調査区土坑10



	層位	色調	性質	備考
SK297	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	黄褐色土をスジ状に含む
	2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	黄褐色土をまばらに含む

	層位	色調	性質	備考
SK298	1	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	暗褐色土を斑に含む
	2	黄褐色 10TR5/6	粘土質シルト	暗褐色土・褐灰色土を斑に含む
	3	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	黄褐色土ブロックを含む

第47図　98年調査区土坑11



	地点・層位	種別	特徴	登録	写真
1	SK201 2層	瓦質土器 鉢	底部片、脚付、切り離しは回転糸切り、底径(158)mm	H79	
2	SK203 確認面	鉛玉	13×14mmの球形、全体が白くなっている、重さ12g	N144	17-27
3	SK207 1層	石製品 温石	四角形、中央上部に径10mm程の孔が1ヶ貫通、長さ68mm、幅93mm、厚さ27mm、重さ340g	K155	17-35
4	SK210 1層	須恵器 壺	壺体部片、外面に4条の沈線、沈線間に細かい波状沈線が巡る	E30	
5	SK211 1層	陶器 甕	体部片、格子状の押印有り、常滑	I1258	
6	SK212 1層	砥石	平面は長方形、裏面欠損、長さ(62)mm、幅(48)mm、厚さ(16)mm、全面砥面確認、凝灰岩、被熱	K156	17-36
7	SK216 1層	須恵器 蓋	小片、カエリをもつ、口径(119)mm	E31	
8	SK218 埋土	窪みをもつ礫	小型品、扁平な円盤状に成形、中央に径15mm程の孔あり、径33mm、高さ15mm、凝灰岩	K157	
9	SK218 埋土	鉄製品 釘？	上下欠損、断面四角形、下部に向かい細くなる、長さ(34)mm、上部幅4mm、下部幅2mm	N146	
10	SK243 1層	古銭	元豊通宝、北宋、元宝元年(1078)	N147	
11	SK246 1層	古銭	□元□□	N148	
12	SK259 埋土	鉄製品	板状となる、長さ(47)mm、幅(24)mm、厚さ最大8mm	N149	
13	SK261 1層	陶器 甕	体部片、格子状の押印有り、常滑	I1264	
14	SK279 1層	古銭	□元□□	N150	

第48図　98年調査区土坑出土遺物

SK295土坑　B・C－11区に位置する。平面形は方形と判断される。東西軸91cmまで確認、南北軸79cmまで確認、深さ22cmを測る。底面は平坦で断面形は矩形と判断される。堆積土は4層確認し自然堆積と判断した。南北軸方向はN－6°－Eである。SD205・SD218に切られる。出土遺物はない。

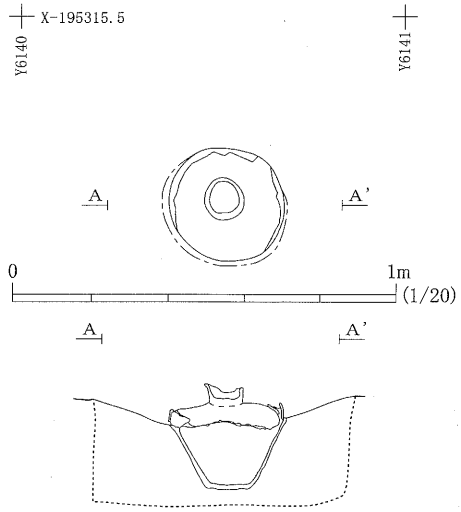
SK296土坑　C－11区に位置する。平面形は長円形である。長軸は南北方向で88cm、短軸38cm、深さ9cmを測る。底面は弧状で断面形は皿形である。堆積土は1層確認した人為ないし自然の堆積か不明である。南北軸方向はN－4°－Wである。出土遺物はない。

SK297土坑　C－11区に位置する。平面形は長円形である。長軸は南北方向で112cm、短軸56cm、深さ45cmを測る。底面は平坦で断面形は逆台形である。堆積土は2層確認し自然堆積と判断した。南北軸方向はN－1°－Eである。SD205に切られる。出土遺物はない。

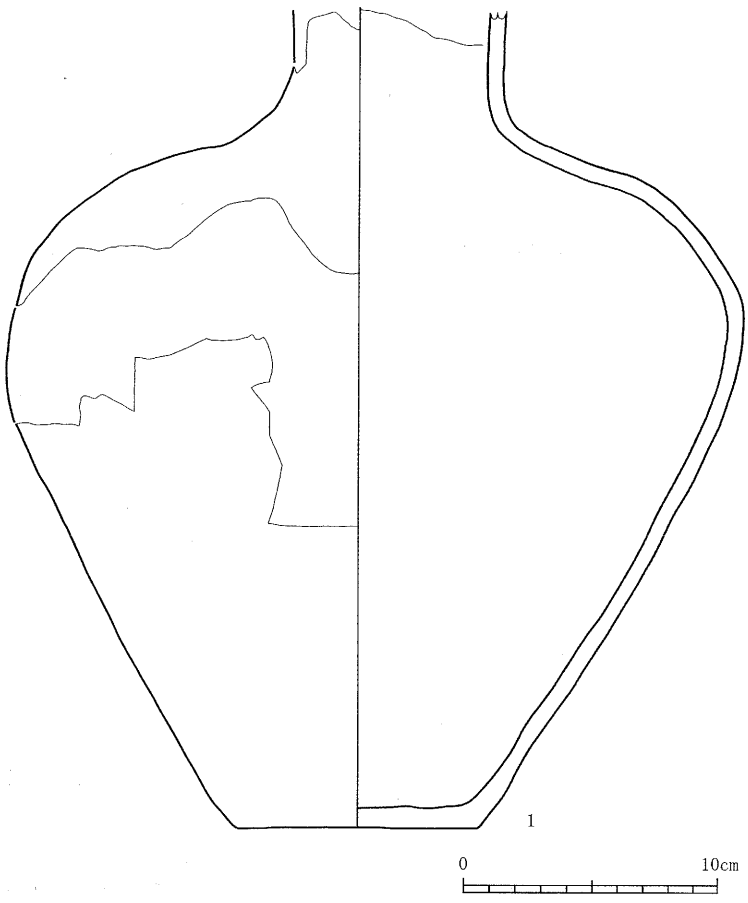
SK298土坑　B・C－7区に位置する。平面形は不整円形と判断した。東西軸122cm、南北軸78cmまで確認、深さ35cmを測る。底面は弧状で断面形はややきつい皿形である。堆積土は3層確認し自然堆積と判断した。SD217に切られる。出土遺物はない。

6）土器棺墓

G－9区に位置する。1基単体での確認である。弥生土器壺が正位体で埋設されていた。口唇部は欠損するがほぼ完全な形で出土している。土器内からの遺物出土はない。穿孔はしていない。掘り方は土器とほぼ同じ大きさである。壺は桝形囲式である。

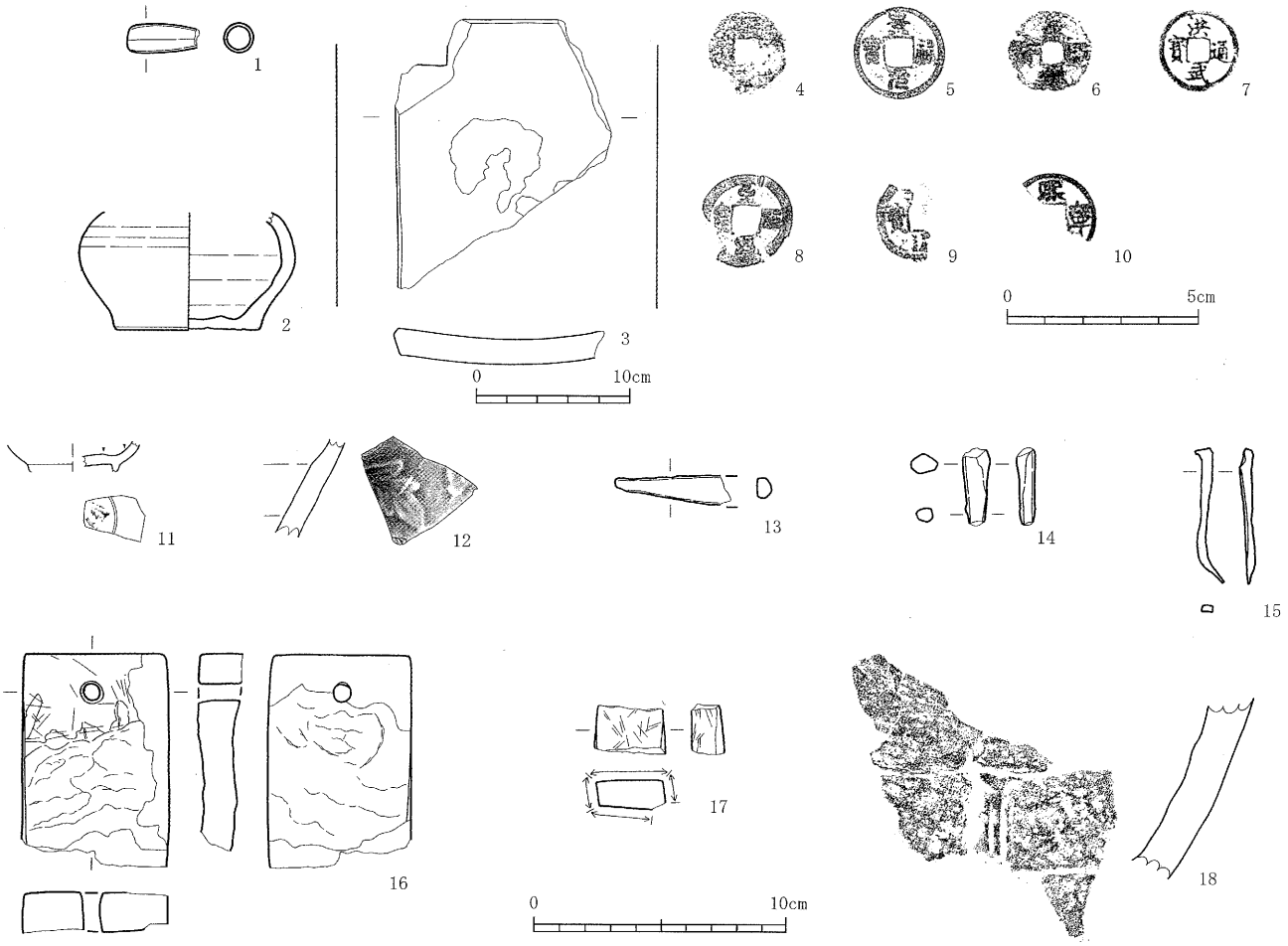


第49図　土器棺墓



	種別	特徴	登録	写真
1	弥生土器　壺	口縁端部欠損、底部から外傾気味に立ち上がり肩部で丸く頸部につづく、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる、外面はすべてヘラミガキ、内面は摩滅のため不明、残存器高325mm、底径96mm、肩部幅286mm,桝形囲式	B17	17-1

第50図　土器棺（弥生土器）



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	キセル	精査	吸口、残存長27mm、羅宇側径11mm	N187	
2	陶器　壺	粗掘り	口縁部欠損、小壺、底部から算盤玉状に丸くおさまる、残存器高47mm、底径56mm、赤褐色を呈す、中世陶器、在地	I1275	
3	近世瓦　桟瓦	粗掘り	切り込み有り、厚さ16mm	G164	
4	古銭	粗掘り	判読不能	N179	17-16
5	古銭	粗掘り	景祐元宝、北宋 景祐元年(1034)	N180	17-17
6	古銭	粗掘り	判読不能	N181	
7	古銭	粗掘り	洪武通宝、明 洪武元年(1368)	N185	17-18
8	古銭	粗掘り	皇宋通宝、北宋 宝元2年(1039)	N182	17-19
9	古銭	粗掘り	□□□宝	N183	
10	古銭	粗掘り	熙寧元宝、北宋 熙寧元年(1068)	N184	
11	磁器　小坏	粗掘り	底部～体部片、染付、蛇ノ目釉ハギ、底径32mm、中国、16c～17c初	J646	
12	青磁　香炉	粗掘り	体部片、牡丹唐草文？、中国、14c代	J652	
13	刀子	粗掘り	茎のみ、残存長45mm、厚さ6mm	N188	17-28
14	棒状鉄製品	粗掘り	刀子の茎？、断面は多角形となる、残存長31mm、11×7×7mm	N189	
15	鉄製品　釘	粗掘り	折り曲げた頭を確認、断面四角形、残存長53mm、幅4×2mm	N190	17-23
16	温石	粗掘り	平面形は長方形、上部中央に6mm程の貫通孔あり、長さ(84)mm、幅56mm、厚さ15mm、粘板岩	K164	18-1
17	砥石	粗掘り	上下部欠損、平面は四角形、残存長17mm、幅26mm、厚さ11mm、凝灰岩	K163	
18	土師質土器擂鉢	粗掘り	体部片、内面に櫛目確認、被熱	D68	

第51図　中央調査区遺構外出土遺物

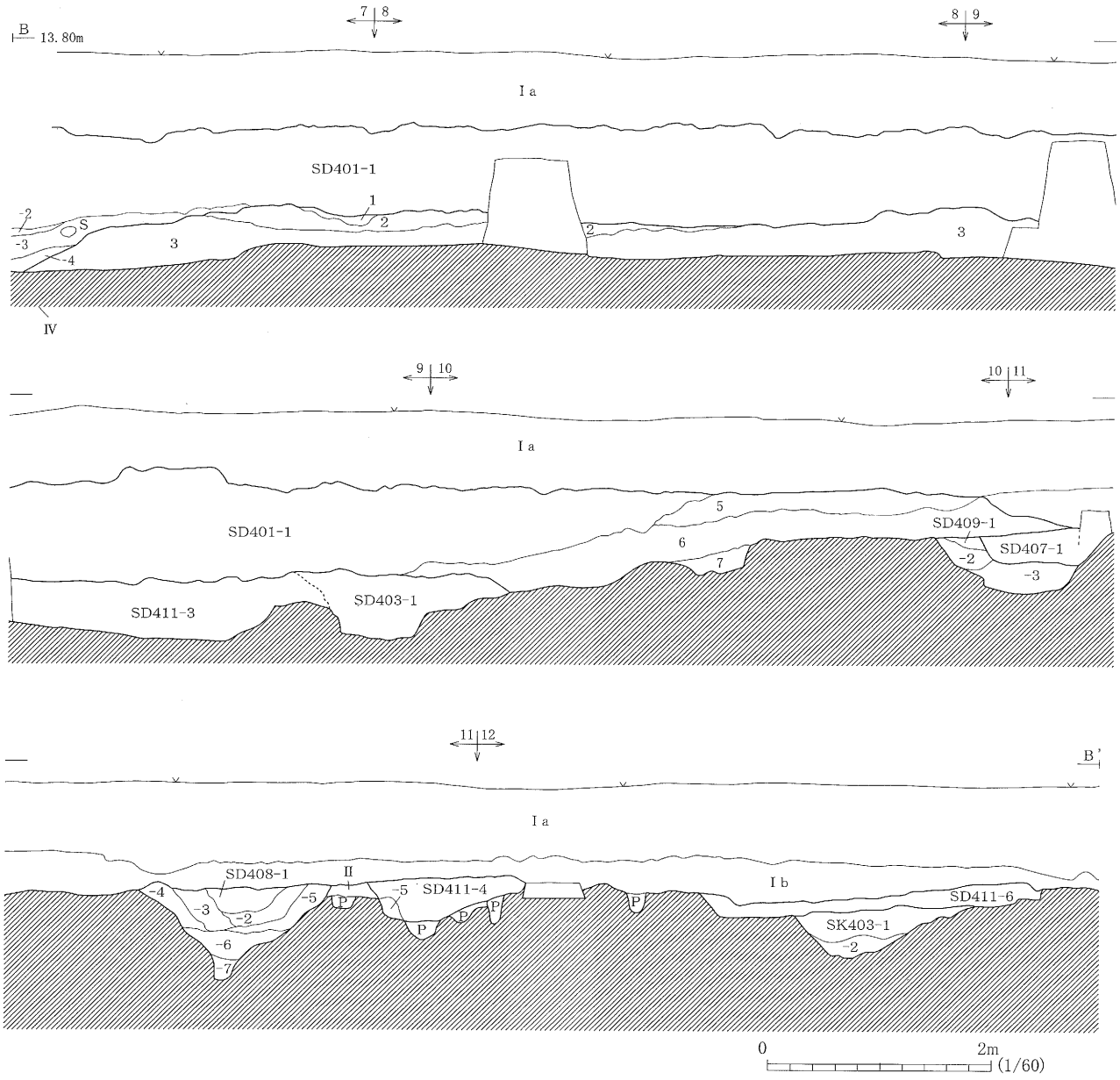
(2) 2000－2区の調査

検出遺構は溝跡９条、土坑３基、柱穴・ピット多数である。溝跡は98年調査で確認されたものが大半で北側の延長となる。SD403がSD218、SD405・406がSD411の底面の凹凸面、SD407がSD211、SD408がSD205、SD409がSD207、SD411がSD217となる。なお、調査区東端ではSD204を確認している。(第４図・14図・36図)

１）溝跡

SD401溝跡　B－７～10区に位置する。SD217･SD218を切る。東西方向に延び、両端部が確認される。確認長20.4

mを測る。東西軸方向はE－14°－Sである。北壁に接しており全体が不明となるが、西端側では上端幅2.68m、下端幅54cm、深さ壁面で135cmを測り、東端側では上端幅1.28m、下端幅51cmを測る。東側へゆるく立ち上がっている。底面はやや凹凸面となるが東西の底面高はほぼ同じである。壁面はややきつく立ち上がり底面は丸みをもつ地点も



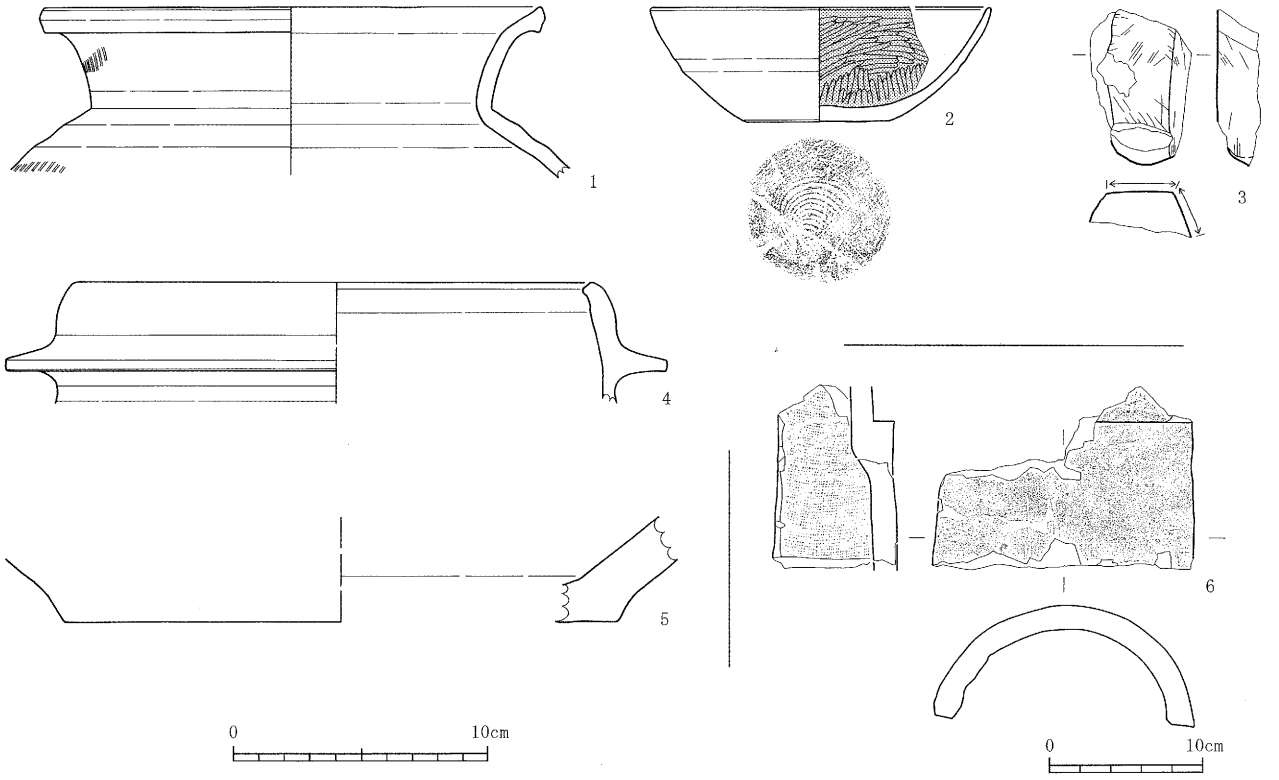
	層位	色調		性質	備考
	Ia				盛土・砕石
	Ib	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	養種園時の耕作土
	II	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや粘土質
	IV	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	やや砂質
SD401	1	黄褐色	10YR5/8	砂質シルト	人為堆積、混成層
		にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	
	2	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
	3	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
	4	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	
	5	褐灰色	10YR4/1	粘土	炭化物を層状に含む
	6	暗緑灰色	5G4/1	粘土	グライ化
	7	灰色	5Y4/1	粘土	グライ化、植物遺体を含む
SD411	1	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	
	2	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質シルト	グライ化
	3	灰黄褐色	10YR5/2	砂質粘土	グライ化
	4	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	
	5	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	

	層位	色調		性質	備考
SD411	6	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
SD403	1	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	酸化鉄粒を斑に多く含む
SD407	1	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	
SD409	1	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	
	2	黄褐色	10YR5/8	粘土質シルト	
	3	黒褐色	10YR2/3	粘土質シルト	
SD408	1	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
	2	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	
	3	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	褐灰色土を斑に含む
	4	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	
	5	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
	6	褐色	10YR4/4	砂質シルト	斑の層でスジ状になる
		褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	
	7	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	
SK403	1	暗褐色	10YR4/3	粘土質シルト	
	2	明黄褐色	10YR6/6	砂質シルト	

第52図　2000-2区北壁断面

あるが断面形はV字形である。堆積土は大別で7層確認した。1層は人為堆積土で全域にみられる。下層はゆるい自然堆積層となる。縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器擂鉢、瓦質土器羽釜、陶器皿、磁器染付片、フイゴの羽口、鉱滓、焼土塊が出土している。溝跡東側にSD403（=SD218）が同方向を向きほぼ重なり合っている。下層の別遺構としたが堆積層の違いだけで同じ遺構の可能性がある。同一とすると東西長約34mを測り、両端部はゆるく南側へ折れている。別遺構としても同じ性格をもつものと判断される。

SD405・SD406溝跡　SD401北辺に位置し切られている。溝跡としていたが断面等の観察からSD411（=SD217）の底面凹凸と判断した。SD405からは土師器、須恵器、古代瓦、瓦質土器羽釜、中世陶器の甕、砥石、石臼、鉱滓、骨片が出土している。



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	須恵器　甕	埋土（下層）	頸部からきつく立ち上がり端部は上下方に三角形状に短く突出、外面に平行叩き、内面はロクロ痕、口径195mm	E15	
2	土師器　坏	埋土（下層）	ロクロ成形、内弯気味に立ち上がる、回転糸切りの後に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径132mm、底径58mm、器高45mm	C20	
3	砥石	埋土（上層）	平面は長方形、縦に欠損、長さ(59)mm、幅(40)mm、厚さ(16)mm、2面の砥面確認、安山岩質凝灰岩	K111	
4	瓦質土器　羽釜	埋土（下層）	内弯気味に口縁部におさまる、幅18mm・厚さ5mm程の羽(縁)が回る、口径(206)mm、羽幅径(260)mm	H71	
5	陶器　甕	埋土	底部片、底径(218)mm、中世陶器、在地	I 1168	
6	古代瓦　丸瓦	埋土（下層）	玉縁付、凸面はロクロナデ、玉縁部に縄叩き、端部にヘラケズリ、凹面に幅20～25mmの粘土紐痕、布目痕、丸瓦部幅170mm、厚さ15mm	F15	

第53図　SD405溝跡出土遺物

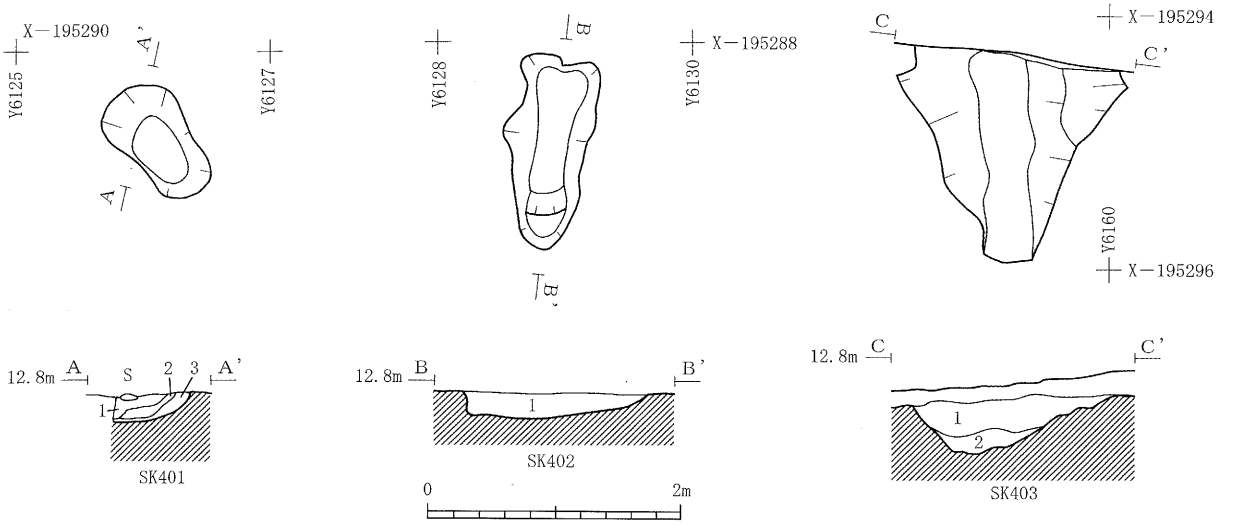
2）土坑

SK401土坑　B－6区に位置する。平面形は不整の長円形である。SD411（=SD217）堆積土での確認である。長軸は南北方向で100cm、短軸51cm、深さ20cmを測る。壁はゆるやかな立ち上がりで断面形は皿形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層確認し自然堆積層と判断した。南北軸方向はE－51°－Sである。陶器の皿が出土している。

SK402土坑　A－6区に位置する。平面形は不整の長円形である。SD411堆積土での確認である。長軸は南北方向で154cm、短軸60cm、深さ20cm程を測る。壁はややゆるやかに立ち上がり断面形は不整な逆台形である。底面は平坦であるが南から北へゆるい傾斜をもつ。堆積土は1層確認し自然堆積と判断した。南北軸方向はN－7°－Eである。炭化米、礫、焼土塊が出土している。

SK403土坑　B・C－12区に位置する。北壁面での確認で平面形は判然としないが方形と判断される。SD411下層

での確認となる。長軸は南北方向で170cmまで確認、短軸180cm、深さ55cmを測る。東壁がゆるく長くなっており、断面形は不整の逆三角形となる。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認し自然堆積層と判断した。南北軸方向はN－２°－Wである。土師器、石臼、骨片が出土している。



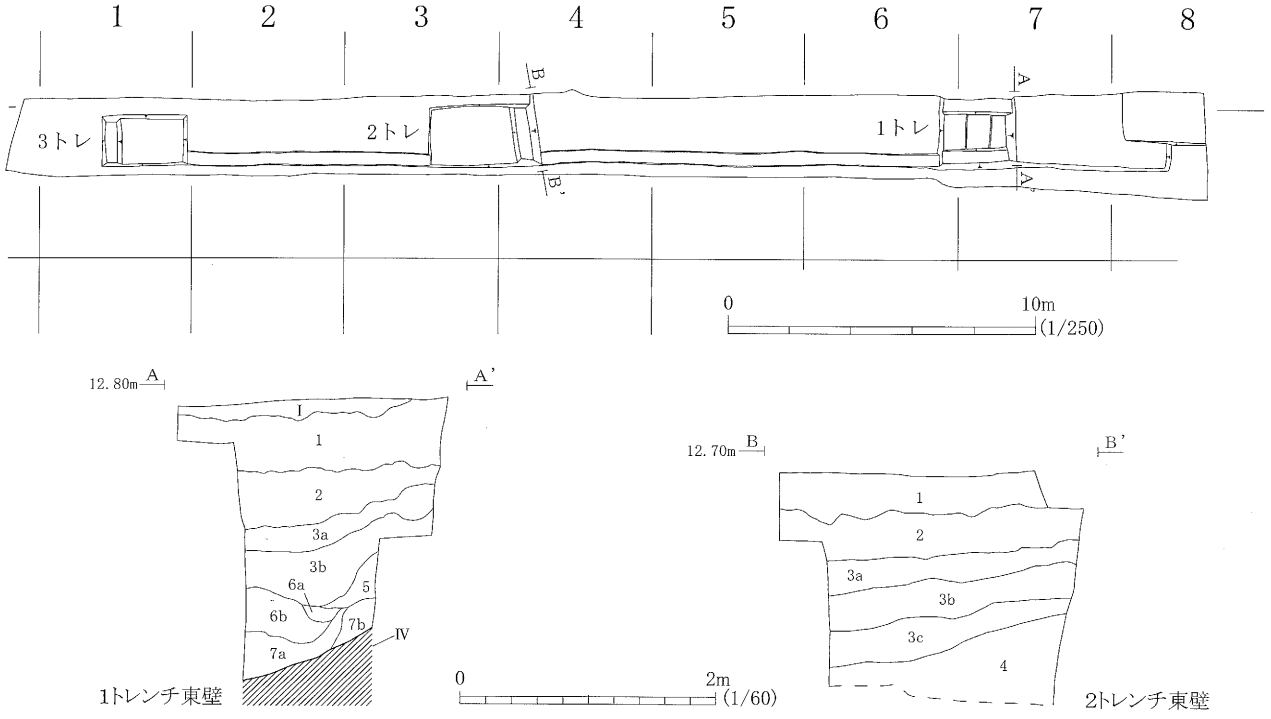
	層位	色調		性質	備考
SK401	1	暗褐色	7.5YR3/3	粘土質シルト	炭化物・焼土・礫を含む
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	混成層
		褐色	10YR4/4	シルト	炭化物・焼土を含む
	3	褐灰色	10YR4/1	粘土	混成層
		褐色	10YR4/4	シルト	炭化物・焼土を含む

	層位	色調		性質	備考
SK402	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物粒を含む
SK403	1	暗褐色	10YR4/3	粘土質シルト	黄褐色土・褐灰色土を斑に少量含む
	2	明黄褐色	10YR6/6	砂質シルト	

第54図　2000-2区土坑

(3) 2000－3区の調査

東西に長い細長の調査区で安全確保のため調査区内に小トレンチを３ヶ所設置し状況を把握した。検出遺構は溝跡１条である。



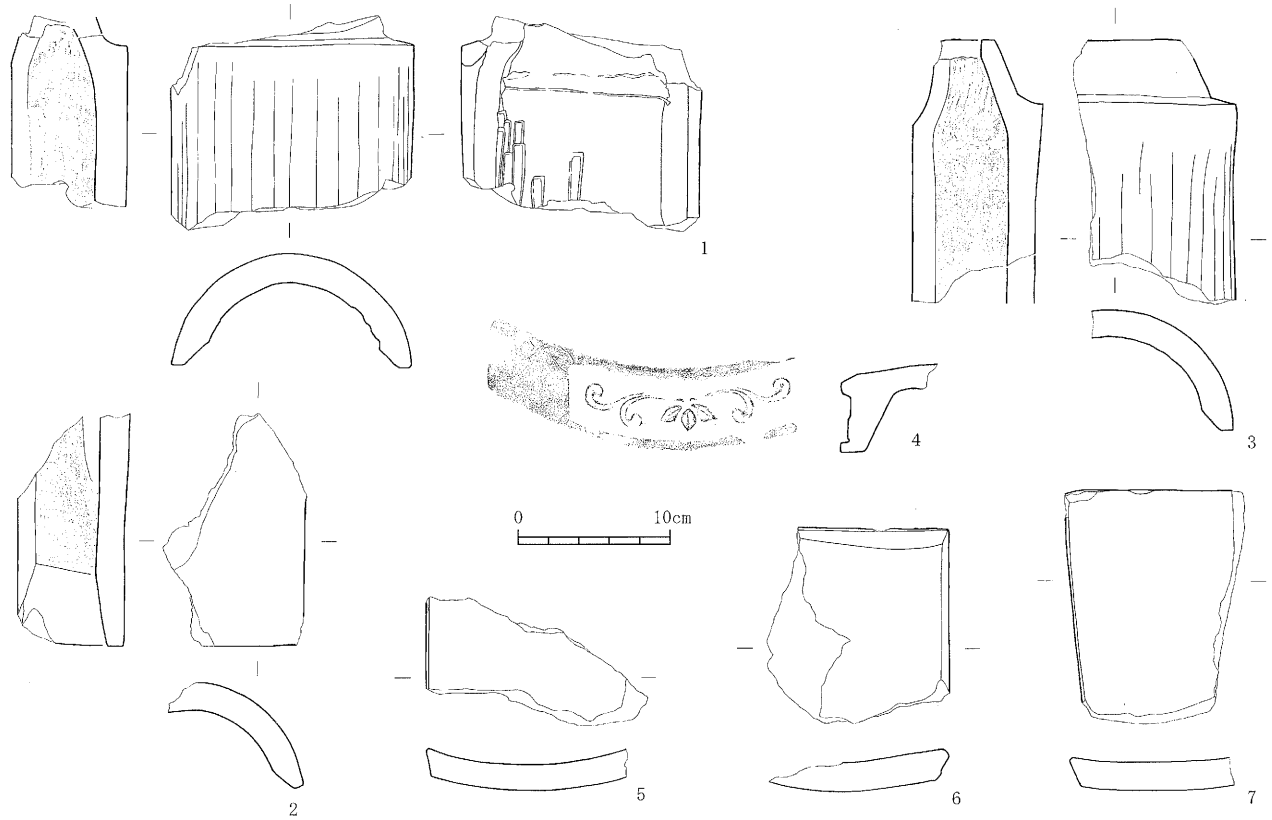
第55図　2000-3区全体図及び壁断面

	層位	色　調	性　質	備　考		層位	色　調	性　質	備　考
	I	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	盛土・砕石の層、下部は耕作土	SD401	3c	灰黄褐色 10YR5/2	砂	ややグライ化
	IV	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	やや砂質		4	黒色 10YR2/1	粘土	砂を含む、ややグライ化
SD401	1	褐色 10YR4/4	砂質シルト	養種園時の耕作土?		5	明黄褐色 10YR6/6	砂	
	2	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	混成層、人為堆積		6a	褐灰色 10YR5/1	粘土	砂を含む
		黒褐色 10YR3/2	砂質シルト			6b	褐灰色 10YR4/1	粘土	砂を含む
	3a	灰黄褐色 10YR5/2	粘土	3a層から下部はしまりなし		7a	灰黄褐色 10YR5/2	粘土	黒褐色土をブロックで含む
	3b	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土	砂がスジ状に入る		7b	黒褐色 10YR2/2	粘土質シルト	灰黄褐色土を小ブロックで含む

第55図の堆積土註記

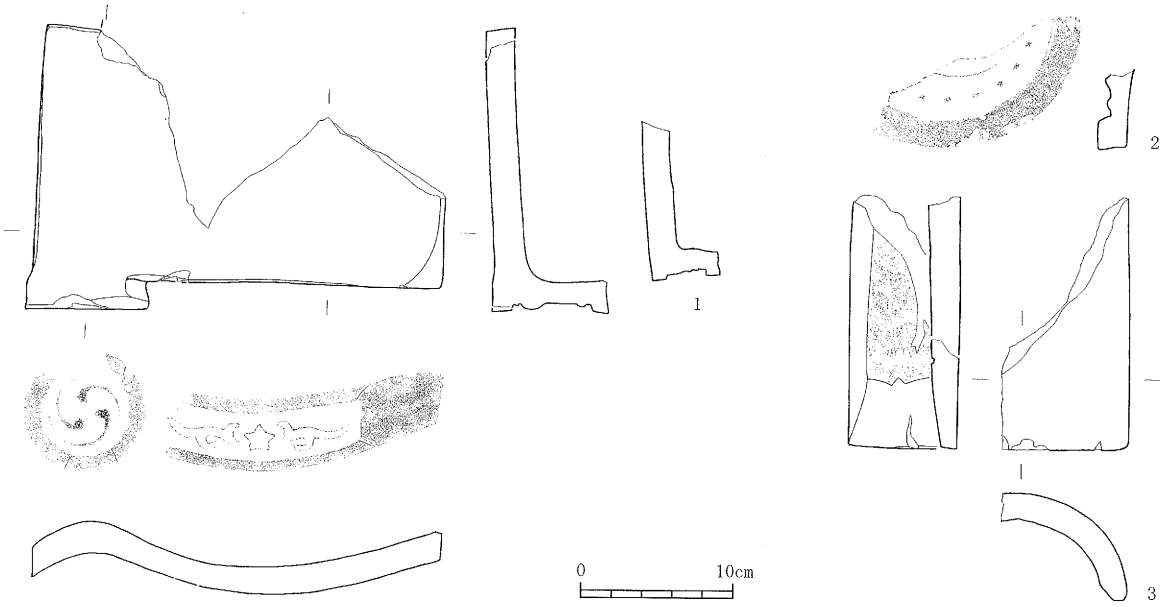
1）溝跡

SD410溝跡　調査区全体が溝跡の中に納まっているが、1トレンチ下部で東西方向に延びる壁面を確認している。2000－2区東端でSD204が東側へ傾き出すことが確認されており、部分的な確認ではあるが堆積土状況及び出土遺物から98年調査のSD204の続きと判断される。調査区北側で大きく東へ曲がり2000－3区上を東進するものと考えられた。二辺の確認からSD204は方格を呈するものと判断され、SD410が北辺の溝跡となる。堆積土は細別で7層確認した。2層が人為堆積で3層以下は自然堆積となる。土師器、須恵器、中世陶器甕、陶器豆甕、近世瓦（軒平瓦・平瓦・丸瓦）、石鉢、鉱滓が出土している。



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	近世瓦　丸瓦	2トレンチ　1層	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ19mm、幅156mm、コビキ痕、ヘラ状の縦位のケズリ、玉縁は欠損	G148	
2	近世瓦　丸瓦	2トレンチ　1層	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ19mm、コビキ痕	G147	
3	近世瓦　丸瓦	2トレンチ　4層	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ18mm、コビキ痕、玉縁長36mmで厚さ13mm	G149	
4	近世瓦　軒丸瓦	1トレンチ　3層	雪持笹文、凹面・凸面ともナデ、厚さ14mm	G146	17-9
5	近世瓦　平瓦	2トレンチ　3層	凸面：ナデ、面取り、凹面：ナデ、厚さ18mm	G145	
6	近世瓦　平瓦	2トレンチ　3層	凸面：ナデ、面取り、凹面：ナデ、厚さ19mm	G140	
7	近世瓦　平瓦	2トレンチ　1層	凸面：ナデ、面取り、凹面：ナデ、厚さ19mm	G143	

第56図　SD410溝跡出土遺物



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	近世瓦　軒桟瓦	表採	桔梗+唐草文、幅274mm、厚さ17mm、切り込みあり	G151	17-10
2	近世瓦　軒丸瓦	粗掘	連珠三巴文(左巻き)、瓦当部径(170)mm、厚さ22mm	G163	17-11
3	近世瓦　丸瓦	粗掘	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、厚さ19mm、コビキ痕	G162	

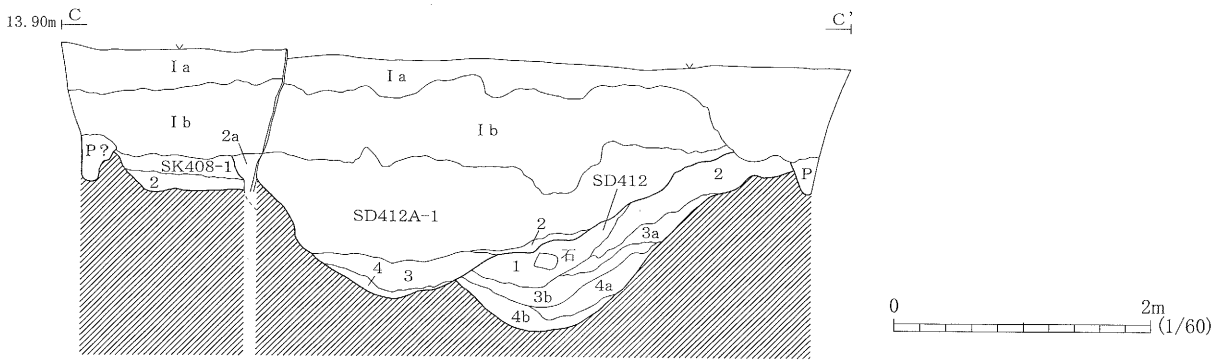
第57図　2000-3区遺構外出土遺物

(4) 2000－4区の調査

中央調査区西南端に位置する。検出遺構は溝跡1条、土坑3基、柱穴・ピット少数である。(第4図)

1）溝跡

SD412溝跡　東西幅1m程の確認である。東から続くSD202A・SD202である。SD202Aは南辺部でSK408を切っている。南壁での上端幅は3.92m、深さ1.2mを測る。南壁面はきつく立ち上がるが北壁面はゆるい立ち上がりである。堆積土は4層確認した。1層は人為堆積で下層は自然堆積である。SD202は南壁での深さ1.43mを測る。断面形はややゆるいV字形である。堆積土は4層確認した。自然堆積土のみ確認した。剥片石器、土師器、中世陶器片、炉壁が出土している。



	層位	色　調	性　質	備　考
	Ia	暗褐色　10YR3/4		盛土
	Ib	褐色　10YR4/4	シルト	養種園時の耕作土？
SD402 A	1	褐色　10YR4/4	粘土	人為堆積、混成層
		暗褐色　10YR3/4	粘土質シルト	
	2	黄褐色　10YR5/6	粘土質シルト	褐灰色土を斑に含む
	3	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	
	4	にぶい黄橙色　10YR6/4	粘土	

	層位	色　調	性　質	備　考
SD402	1	灰黄褐色　10YR4/2	粘土質シルト	黄褐色土粒・酸化鉄粒を斑に含む
	2	にぶい黄褐色　10YR5/4	粘土質シルト	
	3a	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土質シルト	
	3b	灰黄褐色　10YR4/2	粘土質シルト	
	4a	灰黄褐色　10YR5/2	粘土質シルト	
	4b	灰黄褐色　10YR5/2	粘土	酸化鉄粒を細かく含む
SK408	1	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	中世陶器片出土
	2	黄褐色　10YR5/6	粘土質シルト	炭化物粒を含む

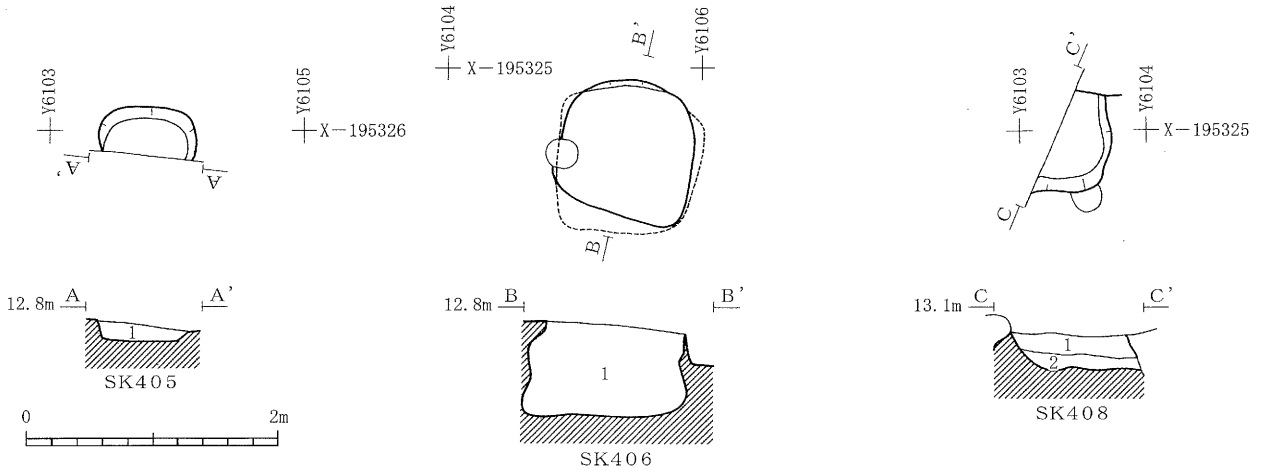
第58図　2000-4区西壁断面

2）土坑

SK405土坑　I－1区に位置する。南壁に接しており全体が不明となるが平面形は方形と判断される。東西軸76cm、南北軸35cmまで確認、南壁断面での深さ35cmを測る。底面はほぼ平坦で断面形は矩形である。堆積土は1層確認した。人為堆積と判断した。北辺方向はE－3°－Sである。土師器、鉱滓が出土している。

SK406土坑　I－1・2区に位置する。平面形はやや不整の方形である。南北軸105cm、東西軸95cm、深さ80cmを測る。底面は平坦で壁はオーバーハングとなっている。断面形はおおきく矩形である。堆積土は1層で混成層である。人為堆積と判断した。底面がほぼ正方形となっており南北軸方向はN－2°－Eである。出土遺物はない。

SK408土坑　H・I－1区に位置する。西壁に接しSD412に切られているが平面形は方形と判断される。南北軸80cmまで確認、東西軸47cmまで確認、西壁での深さ32cmを測る。底面はやや凹凸面となる。壁面がややゆるく立ち上がり断面形は逆台形状である。堆積土は2層確認した。人為ないし自然の堆積か不明である。中世陶器が出土している。



	層位	色　調		性　質	備　考
SK405	1	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	暗褐色土・炭化物粒を含む
SK406	1	褐色	10YR4/4	粘土	人為堆積、混成層
		暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	

	層位	色　調		性　質	備　考
SK408	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	炭化物を含む、中世陶器片あり
	2	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	炭化物粒を含む

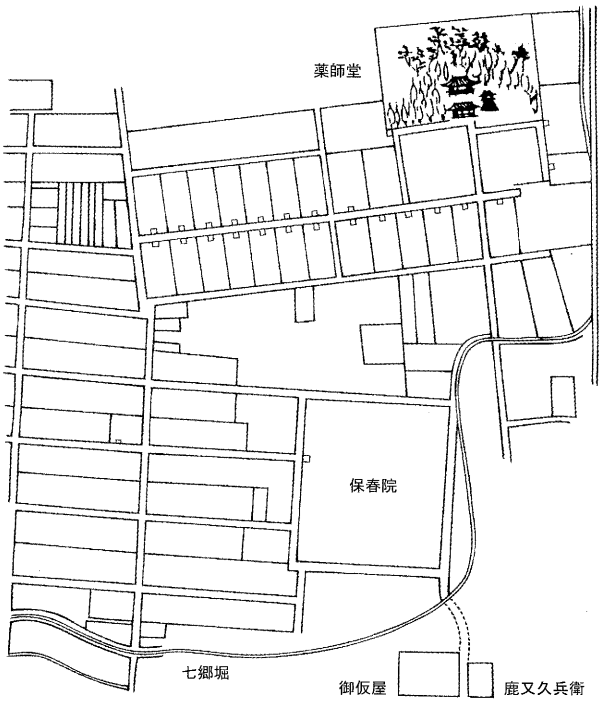
第59図　2000-4区土坑

(5) 小結

掘立柱建物跡　7棟の確認である。一地点に集中して確認され建物方向からも大きく一連の建物跡群と判断され、さらに桁行が4間以上のもので構成されており大型の建物跡群である。多くの遺構と重複関係をもつがほとんどの遺構より新しい。北側の建物跡（SB202・206・207）は柱穴間での直接的な重複関係はもたないが重なり合っている。群の中で最低3時期の変遷が判断される。建物跡はSB201が唯一南北棟となり、他は東西棟である。この中でSB201とSB202が庇を有する。SB201は4面に庇をもちSB202は南北の2面である。SB201は身舎が3間×4間で間仕切りをもち3室が確認される。庇部を含め南北長13.5m、東西長8.4mを測る。SB202は身舎が2間×8間で南北長は庇部を含め6.6m、東西長は14.6mを測る。両建物跡は極めて近接しており同時期存在は考えられない。規模等から判断して2棟の建物跡は周辺の建物跡を含めた主屋と判断され、2時期の存在が窺われた。周辺の建物跡群は付属建物跡と判断されるが、建物方向が近似しておりSB203・204・205の3棟は属種が不明である。SB207はSB201との組み合わせが考えられるが、SB206は現段階では単体の存在となる。なお、SB201・202の柱穴柱痕跡内に焼土・炭化物を含むものが数多く確認され、火災を受けたものと判断される。出土遺物は絶対量が少ないがSB204の柱穴から瀬戸美濃の皿が出土している。建物跡群を一連の遺構群と判断すると戦国期末頃の時期が考えられる。なお、付属

建物跡とした５棟（SB203～207）はすべて梁行が１間となっている。偶然の帰結で柱筋上にピットが乗るものもあるが規模等から判断し組み合わせから除いている。１間が４～５ｍ程と柱間隔が広い特徴がみられる。主屋の梁行は２ｍ前後で倍の違いがある。西側東調査区の99－１区・2002－２区でも平面規模は小さいが４ｍ前後を測る梁行１間の建物跡が７棟確認されている。主屋との対比からも特徴的である。

溝跡　33条の確認である。規模や位置から堀跡と判断されるものが３条となる。他の溝跡は重複関係から古い時期のものもみられるが、規模が小さいものが多く性格が不明となるものが多い。SD201は布掘りを行い拳大の河原石を組んで作った石組みの暗渠である。短い範囲での確認ではあるが南北方向に直線的に延びている。周辺状況をみると、北側に七郷堀が東流し、南側には養種園遺跡第１次調査で確認された伊達家別荘に付属する池跡が位置している。堤？と判断される陶器が掘り方内より出土しており、江戸期に七郷堀より池へ水を引いた配水施設と判断される。SD202とSD203は東西方向にほぼ直線的に延びるもので、北側に位置する建物跡群との関係が強く窺われる。両溝跡は重複しておりSD202が新しく、土坑墓・土坑・溝跡等とも重複関係をもつがSK201・SD204の２遺構のみより古くほとんどの遺構より新しい。両溝跡を建物跡群を中心とした区画帯となる堀跡の可能性が考えられた。位置から判断するとSB201とSD203が組み合い、SB202とSD202が組み合うものと思われる。SD202の断面はきつい壁面で深さをもつＶ字形で、SD203はゆるい壁面でやや浅いＶ字形と違いがみられる。両堀跡とも下部は自然堆積状況を示すが上部は人為堆積となり埋め戻されている。両堀跡からは多種に上る遺物が出土しており、特に鉄及び銅生産に関わるものが多い。常滑、古瀬戸、瀬戸美濃等と各時期にわたる陶器類も出土している。戦国期頃の時期が考えられる。SD207は調査区を南北方向に直線的に縦断する。西側に位置する道路跡（SD205・206・212）とほぼ並行している。SD206を切ることと出土遺物から戦国期頃と判断され区画溝と思われる。なお、SD207同様に南北方向に延び区画溝と判断される溝跡が西側に２条確認される。ほぼ同方向を向き間隔にも規則性が認められる。時期が下る他の遺構にも並行及び直交するものがあり、起源は不明であるが土地割りを踏襲している可能性がある。SD217は調査区北側を東西に延びる大型の溝跡である。各種の遺物が出土しているが新しい時期のものでも中世におさまる。溝底面に東西方向に延びる短い凹凸線がみられ流れの削り痕跡と判断される。堆積土状況も含め堀跡と考えるよりも流路跡と考えたい。SD218・SD401は同一の遺構の可能性が考えられたが、東西方向に直線的に延び両端が確認されSD203とほぼ並行関係をもつ。SD202Aも調査区内で東側部が終結することが確認されており、両溝跡は中央に位置する建物跡群との関連が窺われる。SD204は江戸期の堀跡と判断される。ほぼ直線的に南北方向に延びるが調査区北側でゆるく東側へ曲がり始めることが確認され、2000－３区は堀跡内の調査区となる。南壁が一部確認されており、堀跡の西辺と北辺の二辺が確認された。近世瓦や伊達家紋が描かれた漆器が出土しており、伊達家に関わる施設の堀跡と判断された。養種園遺跡第１次調査では伊達家別荘（小泉屋敷）の



仙台城下大絵図　推定 延宝六年～八年(1678～1680)
の一部分をトレース・加筆

第60図　御仮屋・別荘の位置

堀跡や御仮屋期と判断される遺構が確認されている。第60図に御仮屋と別荘が描かれた絵図を示したが、鹿又久兵衛と書かれた別荘の東側に御仮屋が位置している。出土遺物を含めて御仮屋の堀跡と考えるのが妥当と判断した。第１次調査Ⅱ区で確認されたSD2は位置関係からではあるが当堀跡の延長部分の可能性がある。絵図では二者の別荘が道を挟み描かれている。当堀跡は堀幅が最大11.4ｍまでの確認に留まっているが堆積土の状況から幅広のものと考えている。第１次調査Ⅱ区と2000－５区の間に堀跡が延びることとなるが難があると思われる。今後の調査に委ねられるが、当初の遺構は二者が連結する複郭を呈していた可能性を考えたい。なお、当堀跡は最終的に埋め戻されている。出土遺物の中に18世紀後半代となる大堀相馬の碗などがある。存続期間の問題もあるが廃絶後の使われ方等留意される。

道路跡　３条の溝跡で構成され２時期の変遷を考えた。側溝はほぼ並行し直線的に延びるが調査区南側でゆるく東側へ屈曲している。路盤幅は1.5ｍ・２ｍ程を測る。建物跡群・堀跡よりも古い。時期は戦国期と判断される。

竪穴建物跡　１棟の確認である。一辺３ｍ強を測りほぼ正方形である。柱穴は北側と南側に３基対で確認され計６本の柱で構成される。堆積土は１層で人為堆積と判断し埋め戻し土とも考えたが貼床土の可能性もある。重複関係をみると一つの群として把握される７棟の掘立柱建物跡の中のSB204より旧く、土坑墓群より新しい。時期は大きく中世としておきたい。

竪穴住居跡　１軒の確認である。単体で存在している。溝跡に切られ遺存不良となるが、５ｍ×４ｍ程の南北軸が長い隅丸方形のものである。カマドや柱穴が確認されなかったが焼土層や土器類の検出状況から住居跡と判断した。国分寺下層式期である。

土坑墓　60基の確認である。平面形が長方形及び正方形を呈し不整形なものは殆ど確認されない。堆積土状況が

第61図　中央調査区土坑墓分布

不定となるものは土坑墓から除いている。規模は大小の２種がみられ、極めて深さをもつものもみられる。調査区西側に集中し円形の配置がみられるが西側と南側が調査区外となり全体形は不明である。土坑墓間の重複がみられ、近接したものも数多くある。長軸が東西方向を向くものが多くほぼ同方向となる。南北方向を向くものでもほぼ直交するものが多い。異方向を向くものもあるが全体としては方向に限定されるが規格性がみられる。墓の重複・近接関係からみて長期間にわたる墓地の営みが窺われる。副葬品はほとんどなく、陶器片などは埋葬時の入り込みと判断される。古い溝跡も存在するが殆どの遺構よりも古い。時期は中世と判断され庶民の墓地と思われる。

土坑　37基の確認である。平面形は円形を基調とするが長円形や不整形となるものが多く、性格・時期が不明となるものも多い。SK294は径が３ｍを超す円形の大型の土坑である。中世陶器甕が出土している。性格は不明となるが中世と判断される。SK268は一辺が１ｍを切る土坑であるが、馬の首が確認され埋納と判断した。馬頭に関わる祭司かと判断される。

土器棺墓　１基の確認である。弥生時代中期、桝形囲式期である。他の地区からも若干量ではあるが弥生土器が出土しているが、遺構として確認されたものはこの土器棺墓のみである。群とはならず単体での存在もありうるとは考えうるが削平等で消失している可能性が高い。

	地区	平面形	断面形	底面	長軸	短軸	深さ	底面高	長軸方位	堆積状況	備　　考
SK201	H-3	円形	皿形	皿状	85	83	22	12.64	—	自然	SK245、SD202を切る
SK203	H-2・3	楕円形	逆台形	皿状	334	(162)	56	12.24	E-9°-S	自然	SD202に切られる
SK204	I-6	長円形	矩形	平坦面	96	51	22	12.88	N-4°-E	不明	
SK205	H-7	長円形	皿形	皿状	71	45	10	12.89	E-14°-S	不明	SD202を切る
SK206	H-5	不整方形	矩形	平坦面	105	67	51	12.33	N-27°-E	人為	SD202に切られる
SK207	I-4	長方形	矩形	平坦面	104	(75)	44	12.38	E-5°-S	人為	SD202に切られる
SK208	I-4・5	長方形	矩形	平坦面	200	(45)	30	12.64	N-85°-E	人為	
SK209	E-4・5	長方形	皿形	平坦面	116	76	8	12.71	E-11°-S	不明	
SK210	E・F-5	長方形	矩形	平坦面	206	102	43	12.31	N-89°-E	人為	
SK211	F-5	長方形	矩形	やや凹凸面	170	117	52	12.22	N-87°-E	人為	SK250・251を切る
SK212	F-5	正方形	矩形	平坦面	104	97	34	12.41	E-29°-S	人為	
SK213	F-5	正方形	矩形？	やや凹凸面	99	91	11	12.55	E-7°-S	人為	
SK214	E・F-6	長方形	矩形	平坦面	142	114	40	12.36	E-39°-S	人為	
SK215	F-5	長方形	矩形	有段平坦面	170	100	35	12.28	E-15°-S	人為	SD202に切られる
SK216	F-5	長方形	矩形	平坦面	113	95	42	12.38	N-19°-E	人為	
SK217	F・G-4・5	長方形	矩形	平坦面	190	165	98	11.79	E-12°-S	人為	
SK218	F・G-4	長円形	皿形	有段凹凸面	220	140	46	12.36	N-10°-E	不明	やや不整な長円形
SK219	G-5	長方形	矩形	平坦面	153	98	24	12.66	E-13°-S	人為	SB202に切られ、SD208を切る
SK220	G・H-4	長方形	矩形	平坦面	133	105	64	12.21	N-6°-E	人為	SK248を切る、壁オーバーハング
SK221	H-4	長方形	矩形	平坦面	131	100	63	12.19	E-35°-S	人為	壁オーバーハング
SK222	G・H-4・5	長方形	矩形	平坦面	135	88	68	12.17	E-13°-S	人為	
SK223	H-4・5	長方形	逆台形	平坦面	216	84	33	12.39	E-2°-S	不明	SK238に切られる
SK224	H-5・6	正方形	矩形	平坦面	128	119	27	12.67	E-23°-S	人為	
SK225	E-6・7	長方形	矩形	平坦面	195	105	28	12.53	E-11°-S	人為	SK288を切る
SK226	F-6	長方形	矩形	平坦面	142	90	41	12.44	E-12°-S	人為	
SK227	F-6	長方形	矩形	平坦面	161	85	19	12.59	N-87°-E	人為	
SK228	F-4	長方形	矩形	平坦面	85	64	24	12.56	N-12°-E	人為	
SK229	F-3	長方形	矩形	平坦面	131	(52)	38	12.39	N-11°-E	人為	
SK230	G-2・3	正方形	矩形	平坦面	105	97	38	12.45	N-18°-E	人為	
SK231	F-3	長円形？	皿形	皿状	(60)	70	26	12.49	E-35°-S	不明	
SK232	F-3	長方形	矩形	平坦面	86	71	69	12.13	E-8°-S	人為	断面は逆台形状
SK233	E-4	長方形	矩形	平坦面	127	88	29	12.48	N-21°-E	人為	
SK234	E-4	方形	皿形	皿状	(83)	80	15	12.58	E-15°-S	不明	SK259を切る
SK235	F-6	長方形	矩形	平坦面	106	48	4	12.71	N-16°-E	不明	SB202に切られる
SK236	F-7	正方形	皿形	皿状	97	86	20	12.62	E-29°-S	不明	
SK237	E-4	長円形	矩形	平坦面	(80)	66	20	12.56	E-5°-S	不明	SK259を切る
SK238	G・H-5	長方形	矩形	平坦面	166	103	62	12.21	N-2°-E	人為	SK233を切る
SK239	E-5	長方形	矩形	平坦面	(165)	93	29	12.52	E-26°-S	人為	SK261に切られる
SK240	F・G-5	正方形	矩形	平坦面	86	84	18	12.64	E-17°-S	人為	
SK241	H-7	長方形	矩形	平坦面	171	81	15	12.79	E-11°-S	人為	
SK242	E-5	長方形	矩形	やや凹凸面	(80)	50	12	12.63	E-8°-S	人為	SK261を切る
SK243	E・F-7	長方形	矩形	平坦面	148	93	40	12.45	E-18°-S	人為	
SK244	F-8	長方形	矩形	平坦面	182	119	29	12.62	N-7°-E	人為	SK252・256を切る
SK245	H-3	長方形	矩形	平坦面	(230)	(51)	60	12.23	N-13°-E	人為	SD202に切られる
SK246	H-4	不整方形	矩形	やや凹凸面	153	119	45	12.37	E-15°-S	人為	
SK247	F・G-7	長方形	不整形	南へ傾斜	138	90	26	12.61	N-30°-E	不明	南壁下方へ袋状の穴有り
SK248	G・H-4	長方形	矩形	平坦面	165	140	67	12.17	N-5°-E	不明	SK220に切られる
SK249	G・H-7	円形	皿形	皿状	90	75	12	12.82	—	不明	
SK250	F-5	長方形	矩形	平坦面	114	80	84	11.95	E-18°-S	人為	SK211に切られる
SK251	F-4・5	長方形	皿形	皿状	165	83	15	12.56	E-16°-S	人為	SK211に切られる
SK252	F-8	長方形	矩形	平坦面	117	88	33	12.56	N-66°-E	人為	SK244に切られSK256を切る

（単位はcm、m）

表１　中央調査区土坑一覧１

	地区	平面形	断面形	底面	長軸	短軸	深さ	底面高	長軸方位	堆積状況	備考
SK253	G・H-5・6	長円形	矩形	西に傾斜	126	75	15	12.73	E-20°-S	人為	SK254を切る
SK254	G・H-5・6	長方形	矩形	平坦面	266	82	62	12.28	E-15°-S	人為	SK253に切られる
SK255	F-6・7	長方形	矩形	平坦面	226	90	39	12.51	E-15°-S	人為	
SK256	F-8	長方形	矩形	やや凹凸面	(133)	73	16	12.71	N-11°-E	人為	SK244・252に切られる
SK257	E・F-4	長方形	矩形？	皿状	156	90	45	12.28	E-20°-S	人為	
SK259	E-4	長方形	矩形	平坦面	150	104	64	12.01	N-7°-E	人為	SK234・237に切られる
SK260	E・F-5	長方形	矩形？	平坦面	67	39	7	12.68	E-6°-S	不明	
SK261	D・E-4・5	不整長円形	矩形	凹凸面	(250)	173	55	12.25	E-41°-S	人為	SK242に切られSK239を切る
SK262	I-12・13	長方形	逆台形	平坦面	(276)	83	36	12.72	E-9°-S	不明	SD202に切られる
SK263	E-4	長方形	皿形	皿状	118	77	22	12.56	E-10°-S	人為	
SK266	G-6・7	長方形	矩形	やや凹凸面	(85)	75	7	12.81	N-16°-E	不明	
SK267	H-4	方形	矩形	平坦面	104	(63)	(50)	12.17	E-0°-S	人為	SD202壁面で確認、壁オーバーハング
SK268	F-10	長方形	逆台形	平坦面	94	73	16	12.83	N-14°-E	人為	馬の首埋設
SK269	G-11・12	円形	皿形	やや凹凸面	83	80	16	12.82	—	不明	SD210を切る
SK270	J-10	方形	皿形	皿状	65	(57)	37	—	N-1°-E	自然	SD203に切られる
SK273	E-5	方形	皿形	皿状	96	(54)	8	12.65	N-25°-E	不明	
SK274	G-6	長方形	不明	平坦面	102	70	(5)	12.74	N-27°-E	人為	SI203底面で確認
SK275	G-6	長方形	矩形	平坦面	138	60	45	12.32	N-26°-E	人為	SI203底面で確認
SK277	C・D-12・13	不整円形	皿形	皿状	90	75	15	12.66	—	不明	
SK278	C-12	長円形	皿形	凹凸面	200	56	36	12.55	N-10°-E	人為	
SK279	E・F-12	不整円形	皿形	皿状	159	124	37	12.59	—	人為	
SK280	E・F-11	不整円形	皿形	皿状	153	124	37	12.61	—	自然	
SK281	D・E-4	長方形	矩形	平坦面	150	100	28	12.48	N-15°-E	人為	
SK282	D-5	長方形	皿形	皿状	105	86	12	12.62	E-12°-S	不明	
SK283	D-6	長方形	皿形	皿状	121	81	13	12.61	E-19°-S	不明	
SK284	E-6	長方形	矩形	平坦面	211	93	36	12.39	N-12°-E	人為	SK285・286を切る
SK285	E-6	長方形	矩形	やや凹凸面	(109)	57	16	12.59	E-15°-S	人為	SK284に切られる
SK286	E-6	長方形	矩形	平坦面	126	100	26	12.5	E-16°-S	人為	SK284に切られる
SK287	E-6・7	長方形	矩形	やや凹凸面	217	100	20	12.56	E-8°-S	人為	SK288を切る
SK288	E-6・7	長方形	矩形	やや凹凸面	(104)	81	31	12.53	N-13°-E	人為	SK225・287に切られる
SK289	B-6	不整円形	皿形	皿状	65	63	15	12.39	—	自然	SK293を切る
SK290	E-8・9	不整円形	皿形	皿状	131	100	30	12.49	—	不明	
SK291	D-7	方形	矩形	平坦面	106	67	94	11.92	N-1°-W	人為	
SK292	D-6	長方形	矩形	平坦面	139	100	30	12.49	E-20°-S	人為	
SK293	B-6	不整円形	皿形	皿状	90	80	20	12.35	—	自然	
SK294	C-7	円形	皿形	平坦面	370	322	115	11.42	—	自然	SD215・217に切られる
SK295	B・C-11	方形	矩形	平坦面	(91)	(79)	22	12.39	N-6°-E	自然	SD205・218に切られる
SK296	C-11	長円形	皿形	皿状	88	38	9	12.63	N-4°-W	不明	
SK297	C-11	長円形	逆台形	平坦面	112	56	45	12.28	N-1°-E	自然	SD205に切られる
SK298	B・C-7	不整円形	皿形	皿状	122	(78)	35	12.18	—	自然	SD217に切られる
SK401	B-6	不整長円形	皿形	平坦面	100	51	20	12.43	E-51°-S	自然	SD411堆積土上で確認
SK402	A-6	不整長円形	逆台形	平坦面	154	60	20	12.52	N-7°-E	自然	SD411堆積土上で確認
SK403	B・C-12	方形？	逆三角形	平坦面	(170)	180	55	12.04	N-2°-W	自然	SD411下層確認
SK405	I-1	方形	矩形	平坦面	76	(35)	35	12.51	E-3°-S	人為	
SK406	I-1・2	不整方形	矩形	平坦面	105	95	80	11.90	N-2°-E	人為	
SK408	H・I-1	方形	逆台形	やや凹凸面	(80)	(47)	32	12.59	N-1°-E	不明	SD412に切られる

（単位はcm、m）

表２　中央調査区土坑一覧２

中央調査区では上記の遺構を主とし各時代の遺構・遺物が確認された。中心を占めるものは中世末から近世の遺構群となる。ここでは調査成果をもとにおおまかな時期区分を記しておく。

1a期：縄文時代　遺構の確認はないが各地点から少量ではあるが土器、石器が出土している。

1b期：弥生時代　土器棺墓が１基確認された。単体での確認となる。周辺地域では初の遺構の確認となる。土器片は数多く出土するが、遺構確認面となる褐色土層からも出土している。

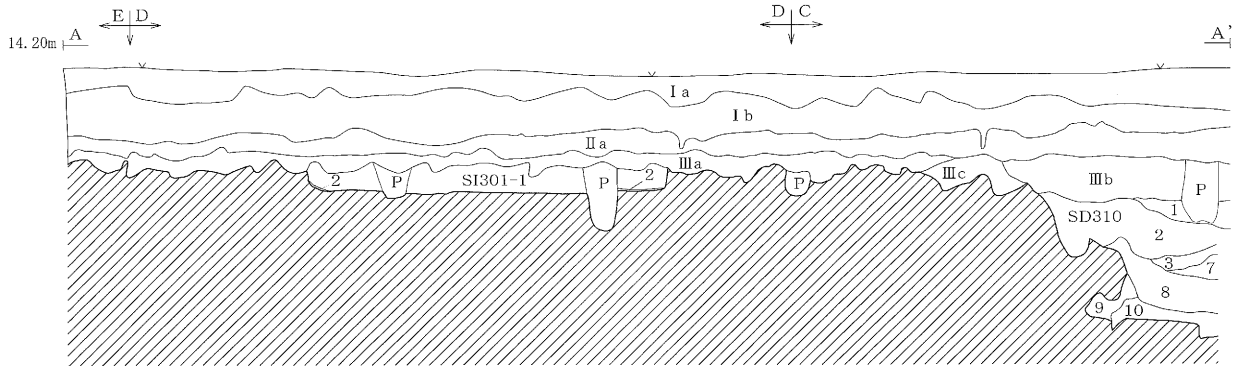
２期：奈良時代　竪穴住居跡が１軒確認された。他の調査区からも同期の住居跡が確認されているが散在した分布となる。東側に位置する南小泉遺跡28次調査の成果とは対照的である。

3a期：中世　土坑墓群を中心とする。SD217は自然流路の可能性がつよいが同時期と判断され土坑墓群より前出するものと思われる。

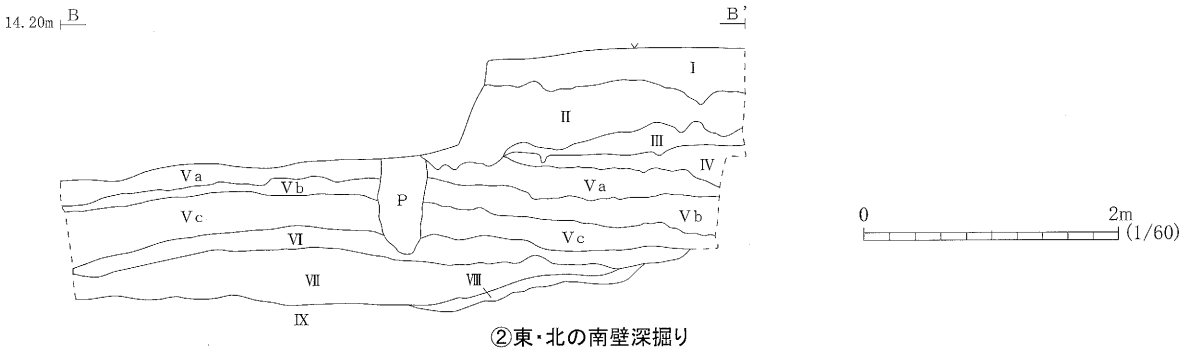
3b期：中世（戦国期）　道路跡、南北に延びる溝（区画溝）、掘立柱建物跡群及び南側に位置する堀跡を中心とする。各遺構群には重複関係が認められ時間差が存在する。掘立柱建物跡群が最も新しい遺構となるが火災を受けており特徴的である。

4期：江戸時代　伊達家御仮屋の堀跡と伊達家別荘の池に関わる暗渠施設である。

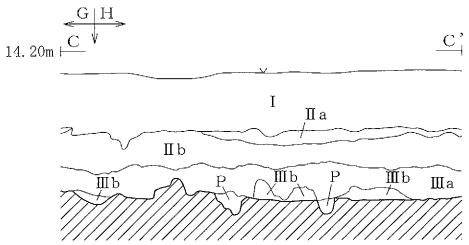
第62図　西側東調査区全体図



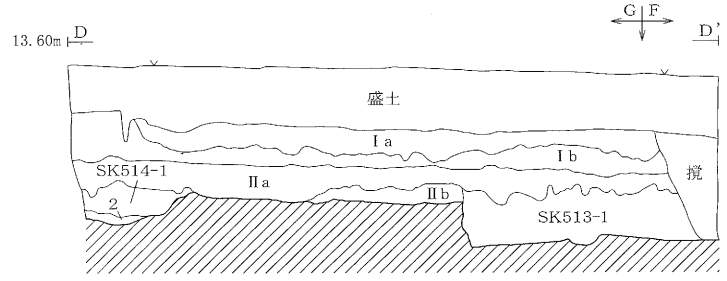
①東・北の西壁



②東・北の南壁深掘り



③西・99-2区東壁



④西・西壁

	層位	色調	性質	備考
①	Ⅰa			盛土
	Ⅰb	灰オリーブ色 5Y4/2	シルト	耕作土
	Ⅱa	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	耕作土
	Ⅲa	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	耕作土
	Ⅲb	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	
	Ⅲc	褐色 10YR4/4	粘土	
SD310	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	褐色土を斑に含む
	2	褐色 10YR4/4	粘土	黒褐色・にぶい黄褐色土を含む
	3	暗褐色 10YR4/6	粘土	褐灰色土を含む
	7	暗褐色 10YR4/6	砂	粗砂、層下部に酸化鉄集積
	8	灰黄褐色 10YR5/2	砂質粘土	細砂を挟む
	9	灰黄褐色 10YR6/2	砂質粘土	
	10	にぶい黄橙色 10YR6/3	粘土質砂	細砂、底面に酸化鉄集積
SI301	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	褐色土を斑に含む
	2	黒褐色 7.5Y2/2	粘土	炭化物を含む
②	Ⅰ			盛土
	Ⅱ	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	旧耕作土
	Ⅲ	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	褐色土を斑に含む
	Ⅳ	褐色 10YR4/4	粘土	
	Va	褐色 10YR4/6	粘土	
	Vb	黄褐色 10YR5/6	粘土	
	Vc	黄褐色 10YR5/6	砂質粘土	
	VI	褐色 10YR4/4	砂	粗砂
	Ⅶ	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂	粗砂
	Ⅷ	明黄褐色 10YR6/6	粘土質砂	粗砂
	Ⅸ	暗褐色 10YR3/3	砂	砂礫層
③	Ⅰ			盛土
	Ⅱa	灰オリーブ色 5Y5/2	シルト	
	Ⅱb	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	Ⅲa	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物粒・焼土粒をを含む
	Ⅲb	暗褐色 10YR5/6	シルト	
	Ⅳ	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	
④	Ⅰ	暗灰黄色 2.5Y4/2	砂質シルト	耕作土
	Ⅱa	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化物粒・焼土粒をを含む
	Ⅱb	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	Ⅲ	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	
SK513	1	黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒を斑に多く含む
SK514	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	2	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	焼土粒・炭化物粒・鋳型片を含む

第63図　西側東調査区壁断面

2．西側東調査区

99年１区、2000年１区、99年２区、2002年２区からなる。七郷堀とＪＲ貨物線の間に位置する。発見遺構には建物跡、柱列跡、土坑、溝跡、竪穴跡等がある。中央調査区に較べて遺構の分布は薄い。調査面積は約1,577㎡（99－１区701㎡、2000－１区64㎡、99－２区66㎡、2002－２区746㎡）である。

（1）99－１区の調査

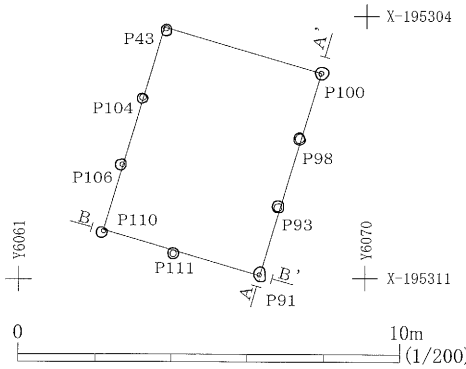
検出遺構は掘立柱建物跡５棟、柱列跡３条、土坑14基、溝跡４条、竪穴住居跡１軒、柱穴・ピット多数である。基本層位は西辺北側と中央部の深掘り地点で９層確認した。Ⅳ層が遺構確認面となる。Ⅳ層下部は砂質及び砂となり、Ⅸ層は10cm大の礫を多量に含む砂礫層となっている。

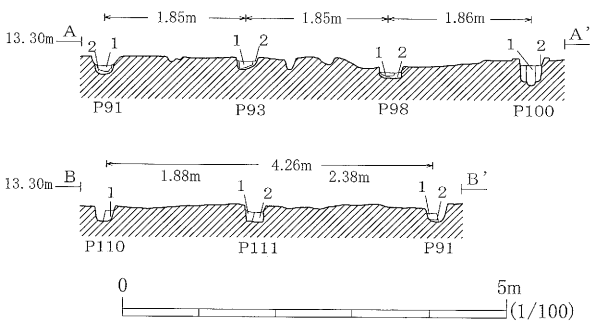
１） 建物跡

SB301掘立柱建物跡　F～H－13・14区に位置する。梁行１間、桁行３間の南北棟の建物跡である。建物方向は西側桁部でN－16°－Eを測る。柱穴は西側柱列に４基（P43・P104・P106・P110）、東側柱列に４基（P100・P98・P93・P91）となる。P111が南妻のライン上に位置するが対面となる北妻には柱穴がなく、他の建物跡との比較からも構成外と判断した。柱穴は径30cm前後の円形を基調とする。柱痕跡が確認されたものが６基あり径15cm程の円形である。柱痕跡が確認されないものもあり、柱間寸法は柱痕跡が確認されないものは柱穴中央で計測した。北妻で4.24m、南妻で4.26m、桁西側は北から1.90＋1.84＋1.83mで総長5.57m、桁東側は北から1.86＋1.85＋1.85mで総長5.56mを測る。出土遺物はない。

SB302掘立柱建物跡　D・E－16・17区に位置する。梁行１間、桁行３間の東西棟の建物跡である。建物方向は西側梁部でN－７°－Eを測る。柱穴との重複関係はないが建物内にSK316・SK317が位置する。柱穴は北側柱列に４基（P328・P332・P388・P343）、南側柱列に４基（P325・P337・P347・P353）となる。柱穴は径26～35cm前後の円形を基調とする。柱痕跡が１基で確認され径12cm程の円形である。柱間寸法は西妻で3.88m、東妻で3.85m、桁北側は西から2.06＋2.09＋2.20mで総長6.35m、桁南側は西から2.17＋2.18＋2.22mで総長6.57mを測る。出土遺物はない。

SB303掘立柱建物跡　C・D－13～15区に位置する。梁行１間、桁行３間の東西棟の建物跡である。建物方向は西側梁部でN－８°－Eを測る。SK313・SD313と重複関係にあり、SK313とは直接的な切り合いはないがSD313を切る。柱穴は北側柱列に４基（P247・P266・P280・P289）、南側柱列に４基（P236・P270・P273・P295）となる。柱穴は径25～30cm前後の円形を基調とする。柱痕跡が２基で確認され径12～15cmの円形である。柱間寸法は西妻で3.66m、東妻で3.65m、桁北側は西から2.12＋2.20＋2.20mで総長6.52m、桁南側は西から2.16＋2.14＋2.16mで総長6.46mを測る。P270から土師器が出土している。

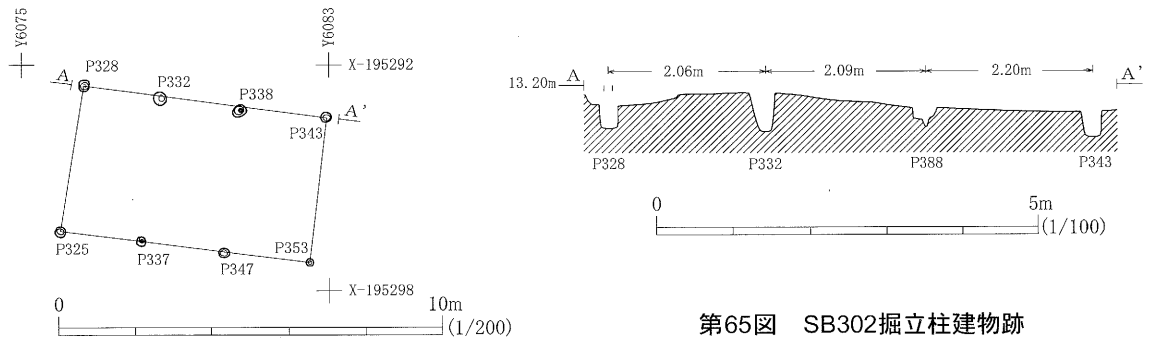




	層位	色調	性質	備考
P91	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	柱痕跡
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土を斑に含む
P93	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡
	2	黄褐色 10YR5/6	粘土	暗褐色土を粒状に含む
P98	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡
	2	黄褐色 10YR5/6	粘土	暗褐色土を粒状に含む

	層位	色調	性質	備考
P100	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	柱痕跡、炭化物を少量含む
	2	にぶい黄褐色 10YR3/4	粘土質シルト	黄褐色土・褐黄色土を斑に含む
P110	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物・焼土を斑に含む
P111	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色土を粒状に含む

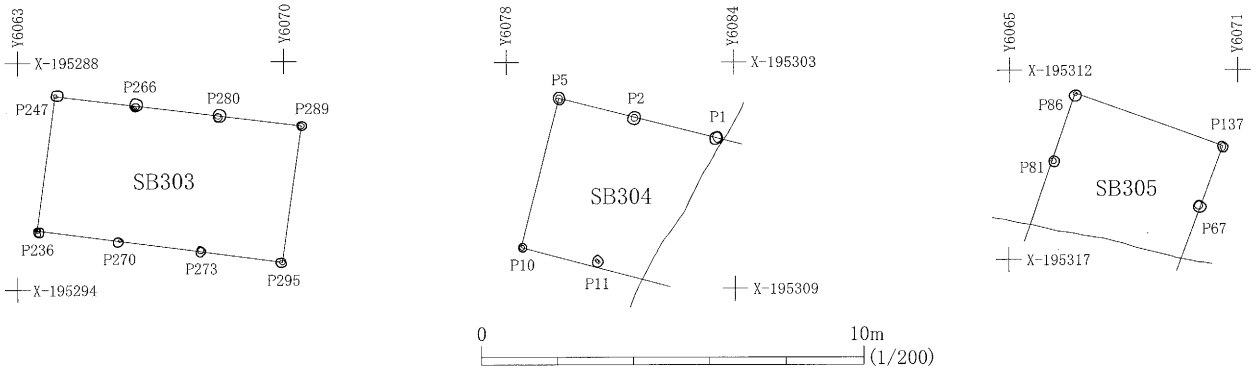
第64図　SB301掘立柱建物跡



第65図　SB302掘立柱建物跡

SB304掘立柱建物跡　F・G－16・17区に位置する。梁行１間、桁行２間以上の東西棟の建物跡である。建物方向は西側梁部でN－15°－Eを測る。柱穴は北側柱列で３基（P５・P２・P１）、南側柱列で２基（P10・P11）確認した。柱穴は径20～30cmの円形を基調とする。柱痕跡が２基で確認され径15～18cmの円形である。柱間寸法は西妻で4.03m、桁北側は西から2.00＋2.20mで4.20mまで確認、桁南側は2.04m分を確認した。P２から陶器が出土している。

SB305掘立柱建物跡　H・I－14・15区に位置する。梁行１間、桁行２間以上の南北棟の建物跡と判断される。建物方向は西側桁部でN－19°－Eを測る。柱穴は西側柱列で２基（P86・P81）、東側柱列で２基（P137・P67）確認した。柱穴は径25～30cmの円形を基調とする。柱間寸法は北妻で4.08m、桁西側は1.82m分確認、桁東側は1.70m分確認した。出土遺物はない。



第66図　SB303・304・305掘立柱建物跡

２）柱列跡

SA301柱列跡　C・D－18区に位置する。４基（P383・P369・P362・P356）の柱穴で構成される。SB302の北東側に位置し南北ラインはほぼ並行している。柱列方向はN－７°－Eを測る。柱穴は径25～30cmの円形である。確認長は5.61mで北から1.72＋2.02＋1.87mとなる。出土遺物はない。

SA302柱列跡　C・D・E－13区に位置する。５基（P400・P237・P235・P234・P233）の柱穴で構成される。SB303の西脇に位置し南北ラインはほぼ並行している。柱列方向はN－８°－Eを測る。柱穴は径35～42cmの円形を基調とする。確認長は6.27mで北から1.52＋1.60＋1.55＋1.60mとなる。P400から天目茶碗（瀬戸美濃・大窯４前）が出土している。

SA303柱列跡　G・H－15区に位置する。４基（P60・P62・P63・P65）の柱穴で構成される。SB301の東側に位置し南北ラインはほぼ並行である。柱列方向はN－15°－Eを測る。柱穴は円形を基調とする。南端のP65が長軸57cm程を測るが他は径40cm程である。柱痕跡が２基で確認され径13～16cmの円形である。確認長は6.64mで北から2.50＋2.03＋2.11mとなる。出土遺物はない。

３）土坑

SK301土坑　H－11区に位置する。西壁に位置し全体が不明であるが平面形は円形を基調とする。南北辺146cm、東西辺57cmまで確認、深さは安全確保のため10層までの掘り込みに留め136cmまで確認した。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが北側部は段状となり抉られた状況がみられた。基本的には円筒状である。堆積土は10層まで確認したがゆるいレンズ状の堆積状況である。土師器、灰釉反り皿？（瀬戸美濃・大窯３後～４前）、鉱滓、炉壁、円礫、礫、炭化物が出土している。形状から井戸跡と判断される。

SK302土坑　G・H－12区に位置する。平面形は不整な円形である。東西軸234cm、南北軸191cm、深さ131cmを測る。壁面及び底面は凹凸面の連なりで断面形は逆台形を基調とする不整形となる。堆積土は７層確認した。全体的にレンズ状堆積を呈する。土師器、須恵器、古代瓦（平瓦）、灰釉端反皿・灰釉丸皿？（瀬戸美濃・大窯１・２）、石臼、炉壁、円礫、骨片が出土している。井戸跡の可能性が考えられる。

SK303土坑　F･G－16区に位置する。平面形は不整な円形である。東西軸141cm、南北軸132cm、深さ32cmを測る。底面からゆるい立ち上がりとなり断面形は皿形である。堆積土は２層確認した。土師器が出土している。

SK304土坑　F－16区に位置する。平面形は隅丸の方形である。長軸は南北方向で135cm、短軸118cm、深さ16cmを測る。底面はほぼ平坦であるが断面形は皿形である。堆積土は１層確認した。ピットに切られる。土師器、須恵器、灰釉端反皿？（瀬戸美濃・大窯１か２）が出土している。

SK307土坑　F－14･15区に位置する。平面形は長円形である。長軸は東西方向で156cm、短軸83cm、深さ14cmを測る。壁面はゆるい立ち上がりで底面もゆるい皿状である。断面形は皿形である。堆積土は１層確認した。出土遺物はない。

SK308土坑　F－15区に位置する。平面形は不整な円形である。東西軸86cm、南北軸60cm、深さ31cmを測る。壁面はきつい立ち上がりで底面は皿状である。断面形は逆台形状である。堆積土は２層確認した。出土遺物はない。

SK312土坑　C－13区に位置する。平面形はやや不整な長円形である。長軸は東西方向で116cm、短軸55cm、深さ76cmを測る。壁はきつい立ち上がりで底面は皿状となるが断面形は逆三角形状となる。南側の底面には径30cm程のピット状の落ち込みがあり一段下がっている。堆積土は４層確認した。砥石が出土している。

SK313土坑　C－13・14区に位置する。平面形は不整な円形である。南北軸94cm、東西軸83cm、深さ45cmを測る。壁はきつく立ち上がり底面は皿状で中央に一段低いピット状の落ち込みが見られる。断面形は矩形にちかい。堆積土は３層確認した。ゆるいレンズ状を呈する。SB303と重複関係をもつが直接的な切り合いはない。ピットに切られる。土師器が出土している。

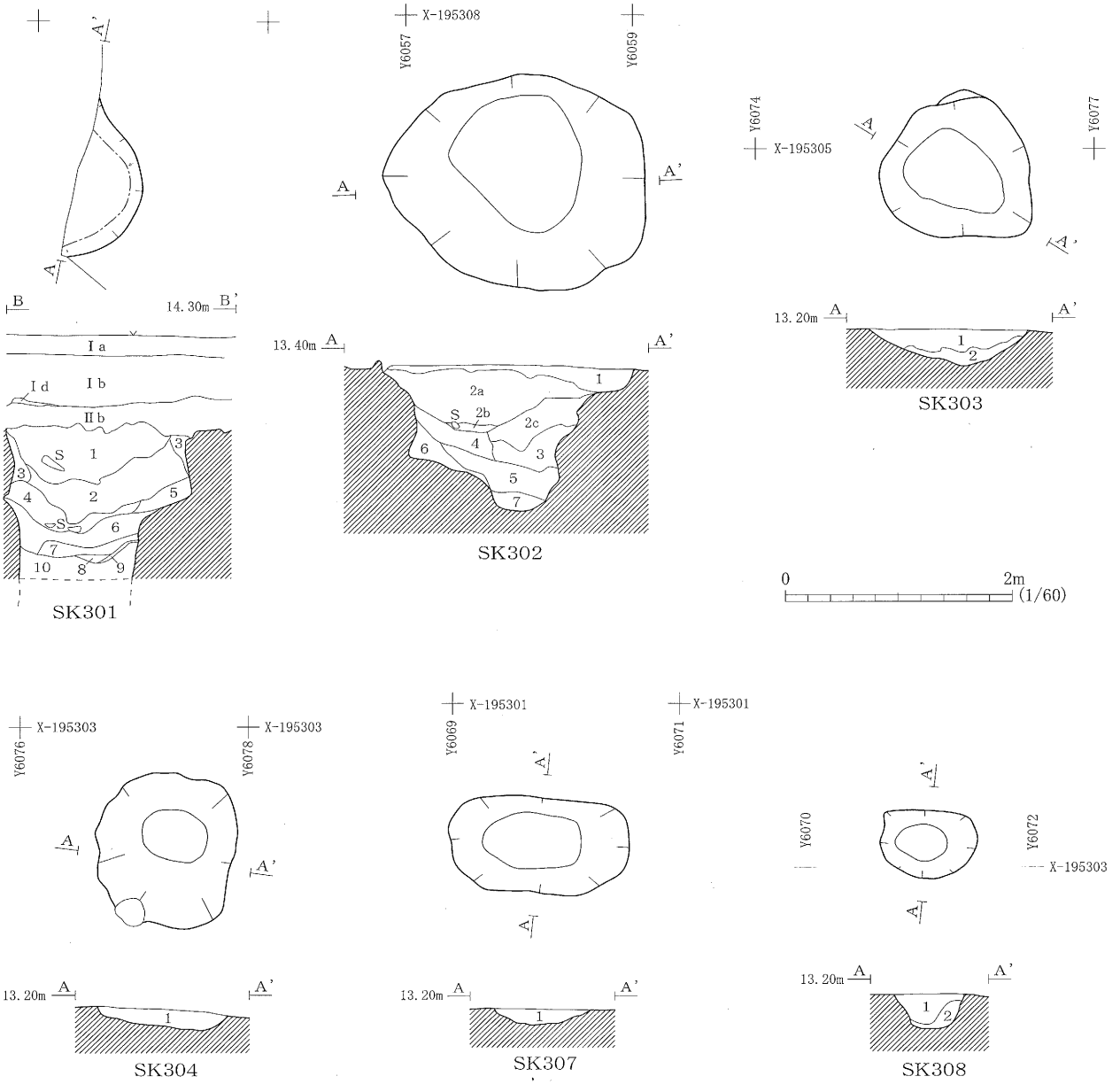
SK314土坑　D－15区に位置する。平面形は不整な円形である。東西軸85cm、南北軸70cm、深さ31cmを測る。壁はきつい立ち上がりで底面は皿状となる。断面形は皿形である。堆積土は３層確認した。ゆるいレンズ状堆積である。炉壁が出土している。

SK315土坑　D－15区に位置する。平面形は不整な長円形である。長軸は東西方向で86cm、短軸55cm、深さ５cmを測る。遺存が不良で断面形等は不明である。堆積土は１層確認した。出土遺物はない。

SK316土坑　D･E－16区に位置する。平面形は円形である。径91～94cm、深さ17cmを測る。壁は全体的にゆるい立ち上がりで底面は平坦面である。断面形はゆるい逆台形状である。堆積土は２層確認した。SB302と重複関係をもつが直接的な切り合いはない。出土遺物はない。

SK317土坑　D･E－16区に位置する。平面形は長方形を基調とする。南側が一段細くなっておりやや不整となる。長軸は南北方向で195cm、短軸102cm、深さ20cmを測る。壁はきつく立ち上がり底面はほぼ平坦面である。断面形は矩形である。堆積土は１層確認した。人為堆積と判断した。SB302・ピットと重複関係をもつ。ピットには切られるがSB302とは直接的な切り合いはない。須恵器、中世陶器が出土している。

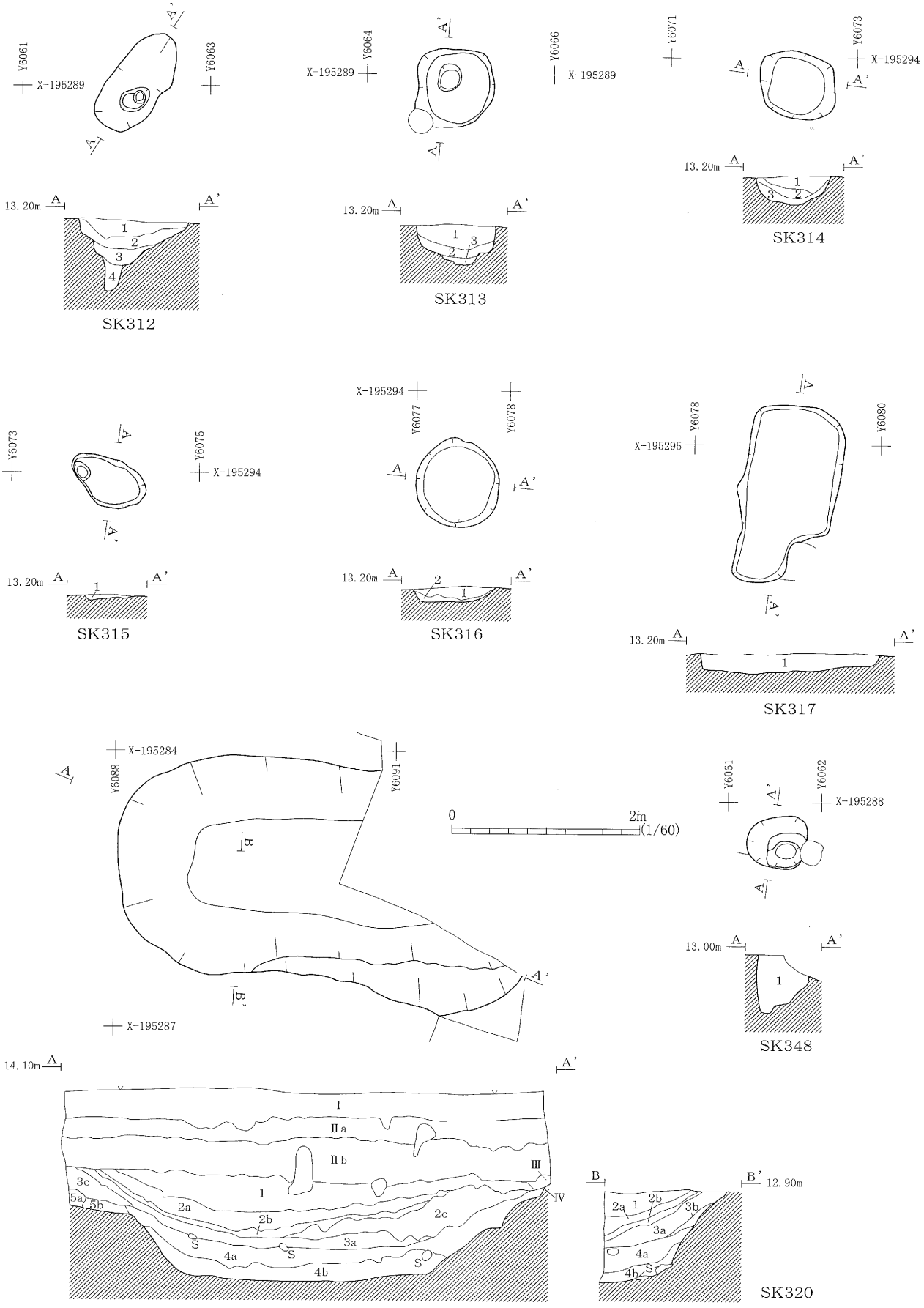
SK320土坑　B・C－18・19区に位置する。東壁に接しているが平面形は長円形と判断される。長軸は東西方向で



	層位	色調	性質	備考
SK301	Ⅰa			盛土
	Ⅰb	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	シルト	
	Ⅰd	褐色 10YR4/6	シルト	
	Ⅱb	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	旧耕作土
	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	炭化物を多量に含む
	2	黒褐色 10YR2/2	粘土	
	3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
	4	黒褐色 10YR3/2	粘土	
	5	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物を少量含む
	6	黄褐色 10YR5/6	粘土質砂	炭化物を少量含む、一部グライ化
	7	暗褐色 10YR3/3	粘土	
	8	褐色 10YR4/4	粘土	
	9	褐色 10YR4/4	粘土	炭化物を層状に含む
	10	暗褐色 10YR3/3	粘土	炭化物を少量含む
SK302	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	

	層位	色調	性質	備考
SK302	2a	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	黄褐色土粒・炭化物粒をまばらに含む
	2b	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	灰白色土を粒状に含む
	2c	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	砂をブロック及び粒で含む
	3	明黄褐色 10YR6/8	砂	
	4	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	焼土粒・炭化物粒をまばらに含む
	5	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	砂をスジ状及び粒で含む
	6	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	砂をスジ状に含む
	7	褐色 10YR4/4	砂	
SK303	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
	2	にぶい黄橙色 10YR6/4	シルト	
SK304	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	
SK307	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
SK308	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物・焼土を少量含む
	2	黄褐色 10YR5/6	粘土	

第67図　99－1区土坑1



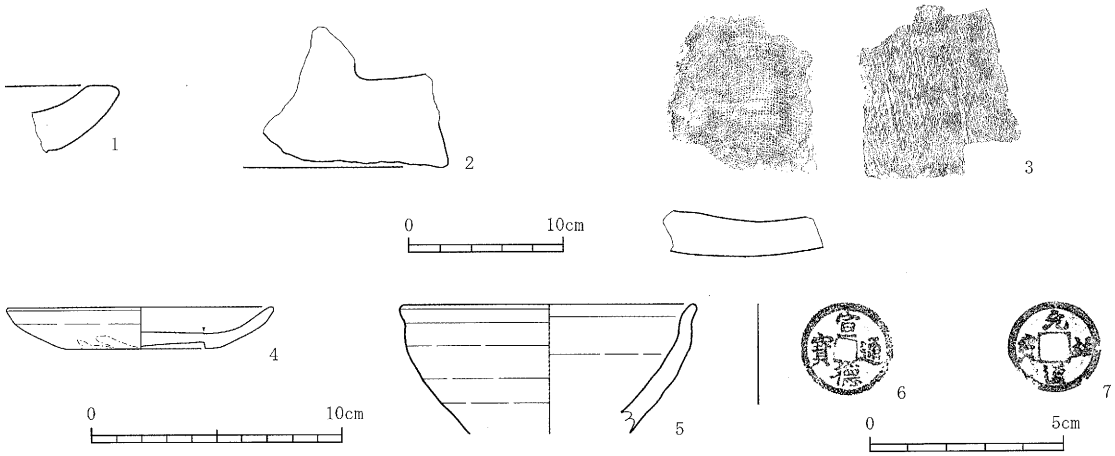
第68図　99－1区土坑2

	層位	色　調	性　質	備　考
SK312	1	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	
	2	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土	にぶい黄褐色土・炭化物を含む
	3	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	
	4	暗褐色　10YR3/4	粘土	杭の痕跡？
SK313	1	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土・炭化物を少量含む
	2	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土	一部グライ化
	3	黄褐色　10YR5/6	砂質粘土	
SK314	1	黒褐色　10YR3/2	粘土	焼土・炭化物を少量含む
	2	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土	
	3	褐色　10YR4/4	粘土	
SK315	1	暗褐色　7.5YR3/3	シルト	焼土ブロックを多量に含む
SK316	1	灰黄褐色　10YR4/2	シルト	
	2	褐色　10YR4/4	粘土	
SK317	1	黒褐色　10YR2/2	粘土質シルト	焼土・炭化物を含む、人為堆積？
SK320	I			盛土
	IIa	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	
	IIb	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	
	III	暗褐色　10YR3/3	粘土	
	IV	褐色　10YR4/4	粘土	
	1	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	炭化物を少量含む
	2a	褐色　10YR4/6	粘土質シルト	鉄滓を含む
	2b	黒褐色　10YR3/2	粘土質シルト	鉄滓を含む
	2c	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土	炭化物・焼土を多量に含む
	3a	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	鉄滓を含む
	3b	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	鉄滓を含む
	3c	黒褐色　10YR3/2	粘土	
	4a	灰黄褐色　10YR4/2	粘土	
	4b	灰黄褐色　10YR4/2	粘土	
	5a	暗褐色　10YR3/3	粘土	
	5b	暗褐色　10YR3/3	粘土	褐色土を斑に含む
SK348	1	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む

第68図の堆積土註記

433cmまで確認、短軸は229cm、深さ106cmを測る。壁はきつい立ち上がりで底面はほぼ平坦面である。断面形は逆台形状である。堆積土は大別で５層確認した。ゆるいレンズ状の堆積状況を呈する。土師器、土師質土器、瓦質土器、中世陶器鉢（白石産）、灰釉端反皿・灰釉内禿皿・天目茶碗・鉄釉丸碗？（瀬戸美濃）、染付碗・白磁皿（中国）、砥石、古銭、炉壁、鉱滓、炭化物、骨片が出土している。特に鉱滓は大量に出土しており廃棄状況を呈していた。

SK348土坑　C－13区に位置する。平面形は円形である。SD310に切られる。径61～64cm、深さ65cmを測る。壁はきつく立ち上がり南壁はほぼ垂直となる。底面は不定で小さな凹凸面となる。断面形は不整な三角形状である。堆積土は１層で混成層である。人為堆積と判断される。SD310に切られる。出土遺物はない。



	遺構・層位	種　別	特　徴	登録	写真
1	SK302　5層	石臼	茶臼の下臼片、受け部の鍔部分、厚さ25mm、安山岩	K89	
2	SK302　埋土	石臼	茶臼の下臼片、安山岩	K90	
3	SK302　埋土	古代瓦　平瓦	凸面：縄叩き（縦位）、凹面：布目痕、端部にヘラケズリ、厚さ23mm,凸面に磨面あり	F12	
4	SK320　埋土	陶器　皿	灰釉内禿皿、口径106mm、底径62mm、器高17mm、瀬戸美濃、大窯3後	I1073	19-15
5	SK320　埋土	陶器　天目茶碗	口径（114）mm、瀬戸美濃、大窯4後	I1077	19-16
6	SK320　埋土	古銭	宣徳通宝、明　宣徳8年（1433）	N59	19-5
7	P318K　埋土	古銭	元祐通宝、北宋　元祐元年（1086）	N60	19-6

第69図　99－1区土坑・柱穴出土遺物

４）溝跡

SD301溝跡　C～I－15・16区に位置する。直線的に延び確認長29mを測る。SK315に切られる。軸方向はN－９°－Eである。上端幅105～115cm、下端幅25～35cm、深さ70cm程を測る。壁面はきつく立ち上がり底面はゆるい皿状となるが、断面形は逆台形である。堆積土は中央部で７層確認した。全体的に粘土及び粘土質シルトでゆるいレンズ状の堆積状況を示す。古代瓦、中世陶器甕、灰釉端反皿・灰釉丸皿（瀬戸美濃）、染付碗・白磁？（中国）、砥石、古銭、刀子、炉壁、鉱滓が出土している。

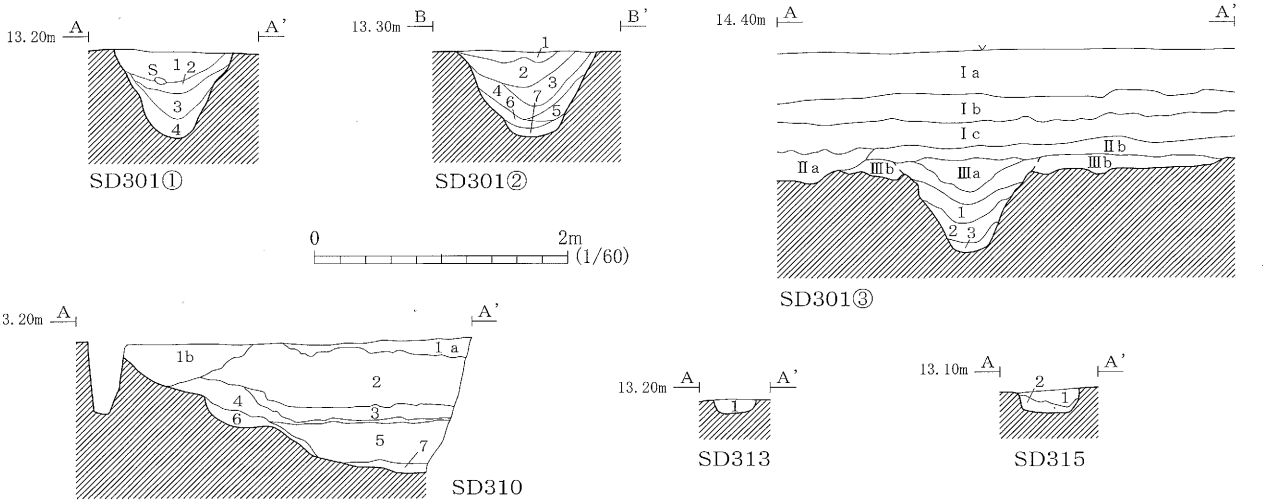
SD310溝跡　C－12～14区に位置する。調査区北西壁に接し南辺はゆるい弧状になり東西方向に延びている。SK348を切っている。東西確認長は7m、南北確認長は2.8m、深さ最大で1.08mを測る。壁はゆるい立ち上がりであ

第70図　99－1区溝跡

る。堆積土は7層確認した。1層は凹凸となるが下層はゆるい自然堆積となり最下層は砂層となる。土師器、須恵器が出土している。

SD313溝跡　D－14区に位置する。直線的に南北方向に延びる。SB303に切られる。方向はSD301とほぼ並行である。南北長2.5m、上端幅30cm、下端幅15～20cm、深さ12cm程を測る。壁はややきつく立ち上がり底面はほぼ平坦である。断面形は矩形となる。堆積土は1層確認した。出土遺物はない。

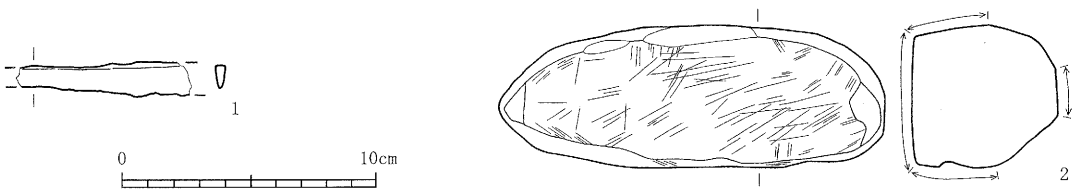
SD315溝跡　C・D－16区に位置する。両端部を撹乱坑で壊され部分的な確認である。SD301に対しほぼ直角に位置する。東西確認長1.5m、南北幅45～60cm、深さ最大17cmを測る。壁はきつく立ち上がり断面形は矩形となる。堆積土は2層確認した。出土遺物はない。



	層位	色調		性質	備考
SD301	1	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト	暗褐色土を含む、人為堆積？
①	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
	3	褐色	10YR4/4	粘土	
	4	褐色	10YR4/4	粘土	
②	1	褐色	10YR4/4	シルト	
	2	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒を斑に含む
	3	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	
	4	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒を少量含む
	5	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	
	6	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	
	7	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土	
③	Ⅰa				盛土
	Ⅰb	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1	シルト	
	Ⅰc	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	
	Ⅱa	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	
	Ⅱb	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	

	層位	色調		性質	備考
	Ⅲa	褐色	10YR4/6	シルト	
	Ⅲb	褐色	10YR3/3	シルト	
	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	炭化物を少量含む
	2	褐色	10YR4/6	粘土質シルト	炭化物を少量含む
	3	褐色	10YR4/6	粘土	細砂を含む
SD310	1a	暗褐色	10YR3/3	シルト	
	1b	暗褐色	10YR3/3	シルト	
	2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	炭化物を少量含む
	3	灰黄褐色	10YR5/2	砂質粘土	酸化鉄を層状に含む
	4	黒褐色	10YR3/1	粘土	
	5	灰黄褐色	10YR5/2	砂質粘土	酸化鉄を斑に含む
	6	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	
	7	褐色	10YR4/6	粘土質砂	粗砂
SD313	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	暗褐色土を斑に含む
SD315	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
	2	褐色	10YR4/4	粘土	

第71図　99－1区溝跡断面



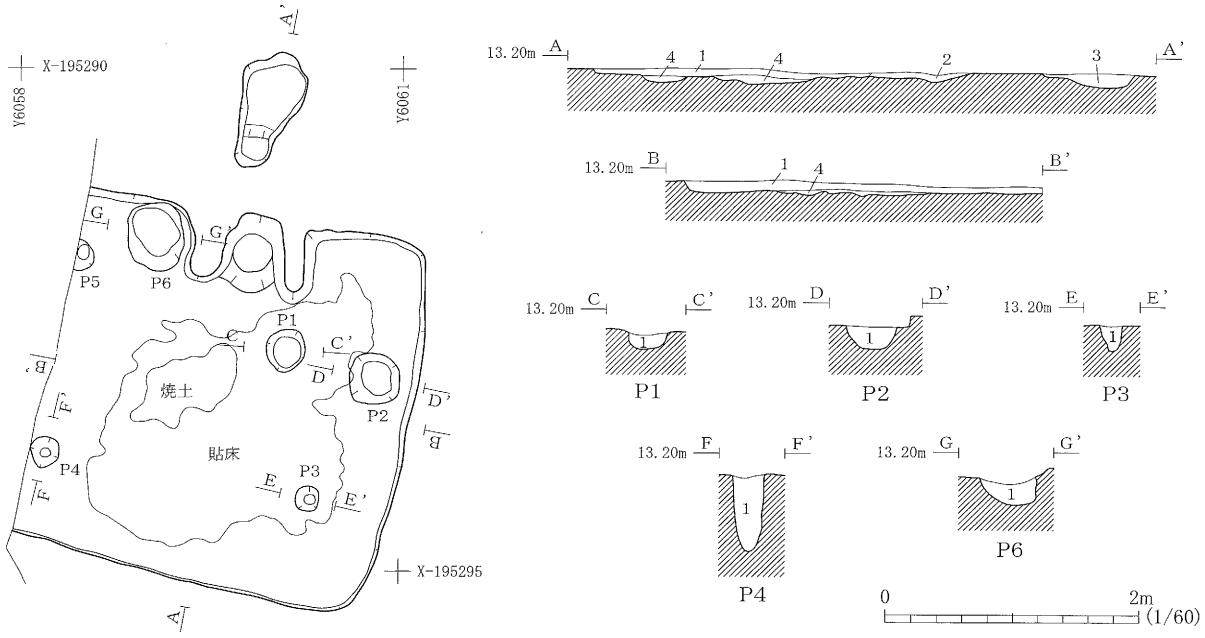
	種別	地点・層位	特徴	登録	写真
1	刀子	埋土	断面三角形、平棟平造、残存長69mm、幅14mm、厚さ3mm、	N58	19-9
2	砥石	埋土	平面は長円形、断面は四角形を基調とする多角形、4面が砥面、長さ152mm、幅56mm、厚さ57mm、凝灰岩	K91	

第72図　SD301溝跡出土遺物

5）竪穴跡

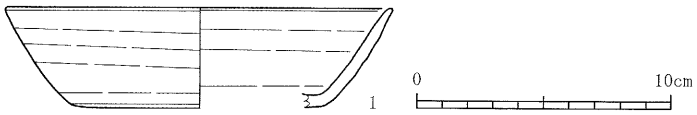
SI301竪穴住居跡　D－12・13区に位置する。住居西側部が調査区外となるが平面形は隅丸方形と判断される。小ピットに切られる。東壁はやや丸みをもつが東辺方向はN－15°－Eである。大きさは南北軸が3.05m、東西軸は2.85mまで確認した。壁は深さ10cm程の残存である。堆積土は4層確認した。1層は混成層で住居全域を覆っている。2層はカマド燃焼部、3層はカマド煙道部の堆積土である。焼土・炭化物が確認されている。4層は住居中央部付近のみでの確認で貼床土である。下部に酸化鉄の集積がみられた。床面はほぼ平坦で基本層Ⅳ層と貼床で構成され、貼床は不整形な広がりとして確認された。貼床の下部は全体的に浅い凹凸面となっている。床面でカマド、焼土・炭化物、ピットを確認した。柱穴及び周溝は確認されない。カマドは北壁に設置され燃焼部と煙道部が確認された。燃焼部は2本の側壁のみの確認で下端幅35cm程を測る。底面の内法幅は最大で50cm、奥行きは50cm程を測る。焼土・炭化物が多量に見られたが明確な硬化面は確認されない。底面はほぼ平坦で奥壁でゆるく立ち上がり煙道部へ続く。煙道は一部削平され途切れているが長さ1.25m程を測る。北側に向かい幅広となり深くなっている。端部付

近で幅50cm、深さ13cmを測る。焼土・炭化物はカマド南側の貼床面で確認された。長軸１ｍ、短軸50cm程の不整なものである。明確な焼面は確認されないが、住居ほぼ中央に位置しカマドからも離れており、施設の可能性も考えられたが判然としない。ピットは３基（Ｐ１・Ｐ２・Ｐ６）確認した。平面形はすべて円形で全体的に浅い。Ｐ６はカマド西脇に位置しており貯蔵穴の可能性も考えられたが、Ｐ１同様に堆積土は焼土及び炭化物が大半で廃棄穴と判断される。土師器、須恵器が出土しているが絶対量は少ない。



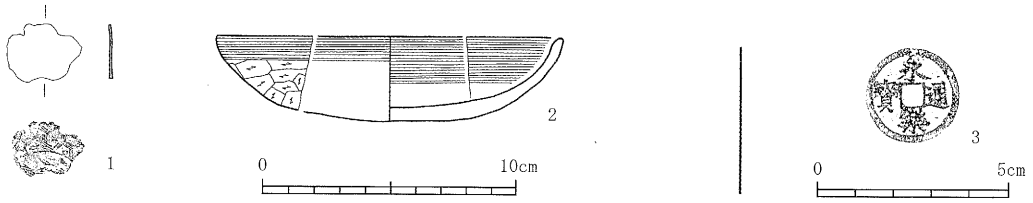
	層位	色調	性質	備考
SI301	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト質粘土	混成層
		暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
	2	黒褐色 10YR3/2	粘土	焼土・炭化物を多量に含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト質粘土	炭化物を多量に含む
	4	にぶい黄橙色 10YR7/3	粘土	貼床土、底面に酸化鉄集積

	層位	色調	性質	備考
P1	1	暗赤褐色 5YR3/2	粘土	焼土・炭化物の層
P2	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	
P3	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	炭化物を少量含む
P4	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	炭化物を少量含む
P6	1	黒褐色 7.5YR3/2	粘土	炭化物・焼土を多量に含む



	種別	地点・層位	特徴	登録	写真
1	須恵器 坏	床面	外傾気味に立つ、体部下端は回転ヘラケズリ、口径152mm、底径100mm、器高40mm	E13	18-20

第73図　SI301竪穴住居跡



	種別	地点・層位	特徴	登録	写真
1	銅製品	粗掘	飾り金具？、板状の薄板、鳥の文様あり、29×23×1mm	N65	
2	土師器 坏	天地返し	底部から丸く立つ、外面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリ、内面はヨコナデ、口径(136)mm、器高33mm、関東系土器	C17	18-7
3	古銭	天地返し	永楽通宝、明、永楽6年（1408）	N66	19-7

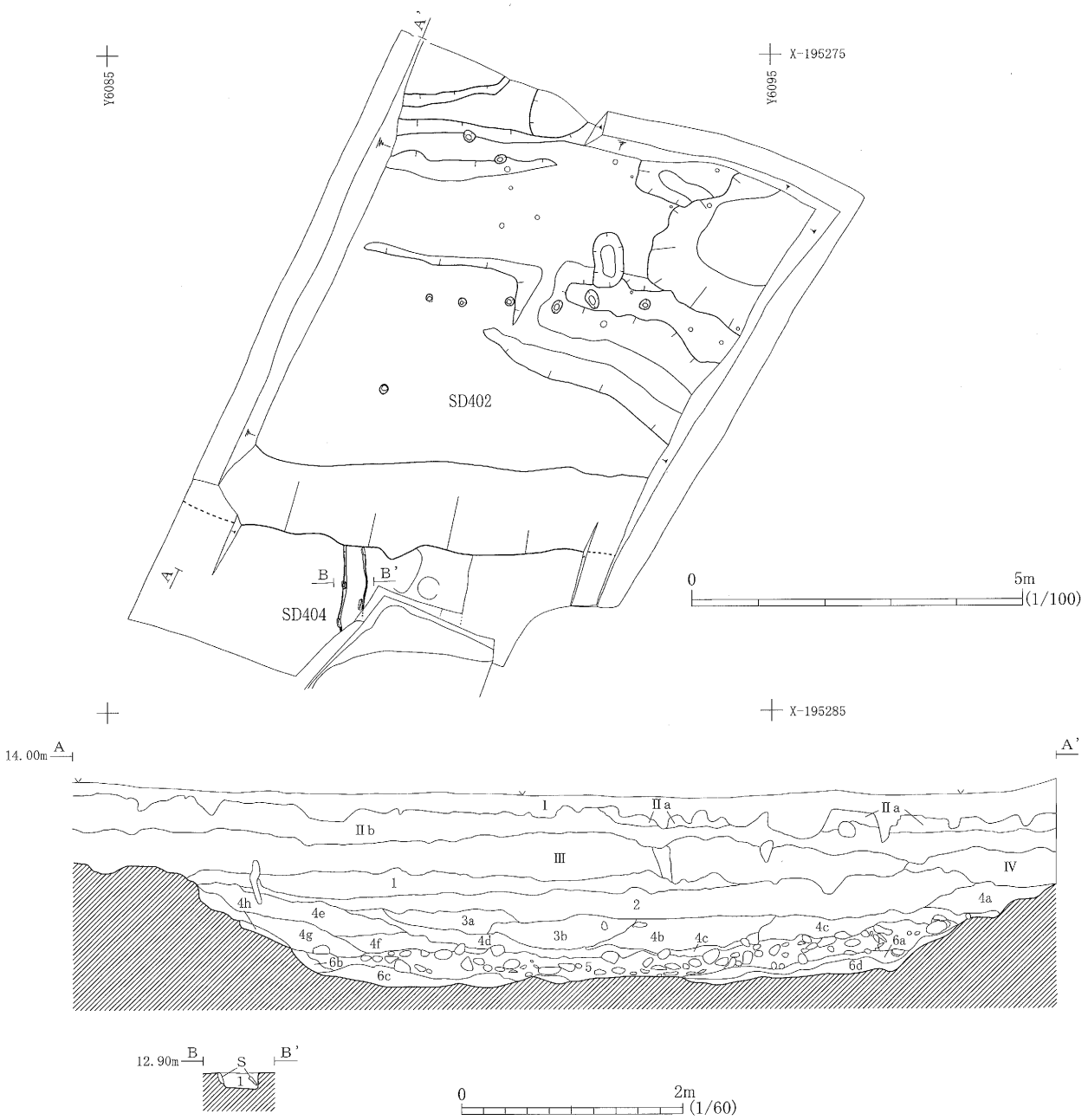
第74図　99－1区遺構外出土遺物

(2) 2000－1区の調査

検出遺構は溝跡２条、土坑１基である。小トレンチ調査となり調査区ほぼ全域が溝跡となっている。基本層位は５層確認した。Ⅰ～Ⅳ層は耕作土となり・ 層が遺構確認面となる。

１）溝跡

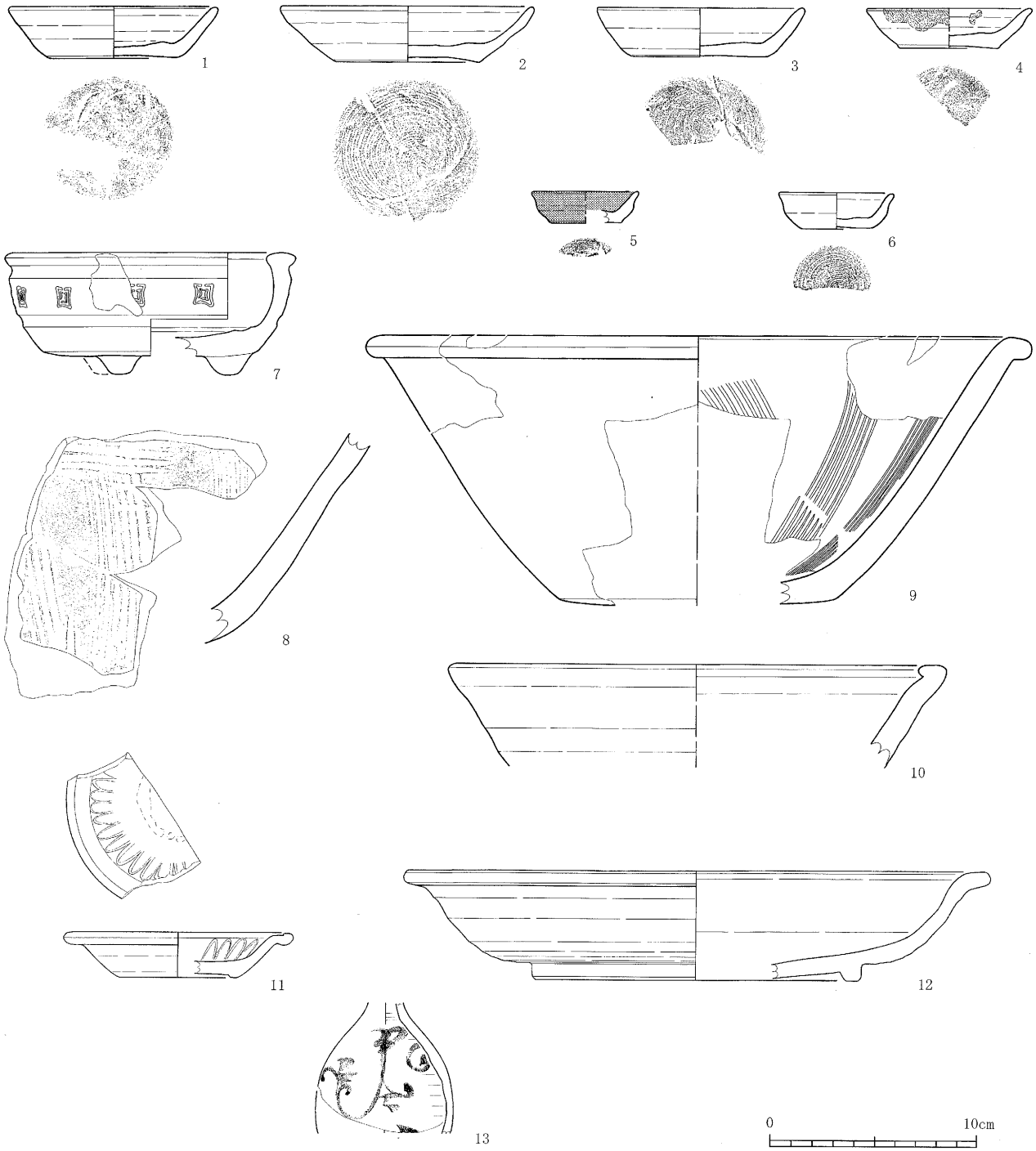
SD402溝跡　A・B－18・19に位置する。東西方向に延びている。東西確認長10.8m、南北幅7.9m、深さ1.1mを測る。底面はゆるい凹凸面となり底面幅は5.5m程である。底面には列及び単体で10～15cmのピットが確認され杭痕と判断された。壁はゆるい立ち上がりで断面形は逆台形である。堆積土は大別で6層確認した。1層は溝埋め戻し土で2層以下は自然堆積となる。5層には大量の礫とともに陶磁器等の遺物が出土している。土師器、須恵器、古



	層位	色　調	性　質	備　考
	Ⅰ			盛土
	Ⅱa	褐色　10YR4/4	シルト	耕作土
	Ⅱb	褐色　10YR4/4	シルト	耕作土
	Ⅲ	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土質シルト	耕作土
	Ⅳ	灰黄褐色　10YR4/2	シルト	耕作土？
	Ⅴ	暗褐色　10YR3/3	粘土	
SD402	1	褐色　10YR4/4	粘土	混成層
		灰黄褐色　10YR4/2	粘土	
	2	褐灰色　7.5YR5/1	砂質シルト	酸化鉄粒を含む
	3a	灰黄褐色　10YR6/2	細砂	粗砂・酸化鉄粒を含む
	3b	灰黄褐色　10YR6/2	粘土質砂	酸化鉄粒を含む
	4a	褐灰色　10YR4/1	シルト	酸化鉄粒を含む
	4b	褐灰色　10YR5/1	砂質粘土	酸化鉄粒を含む

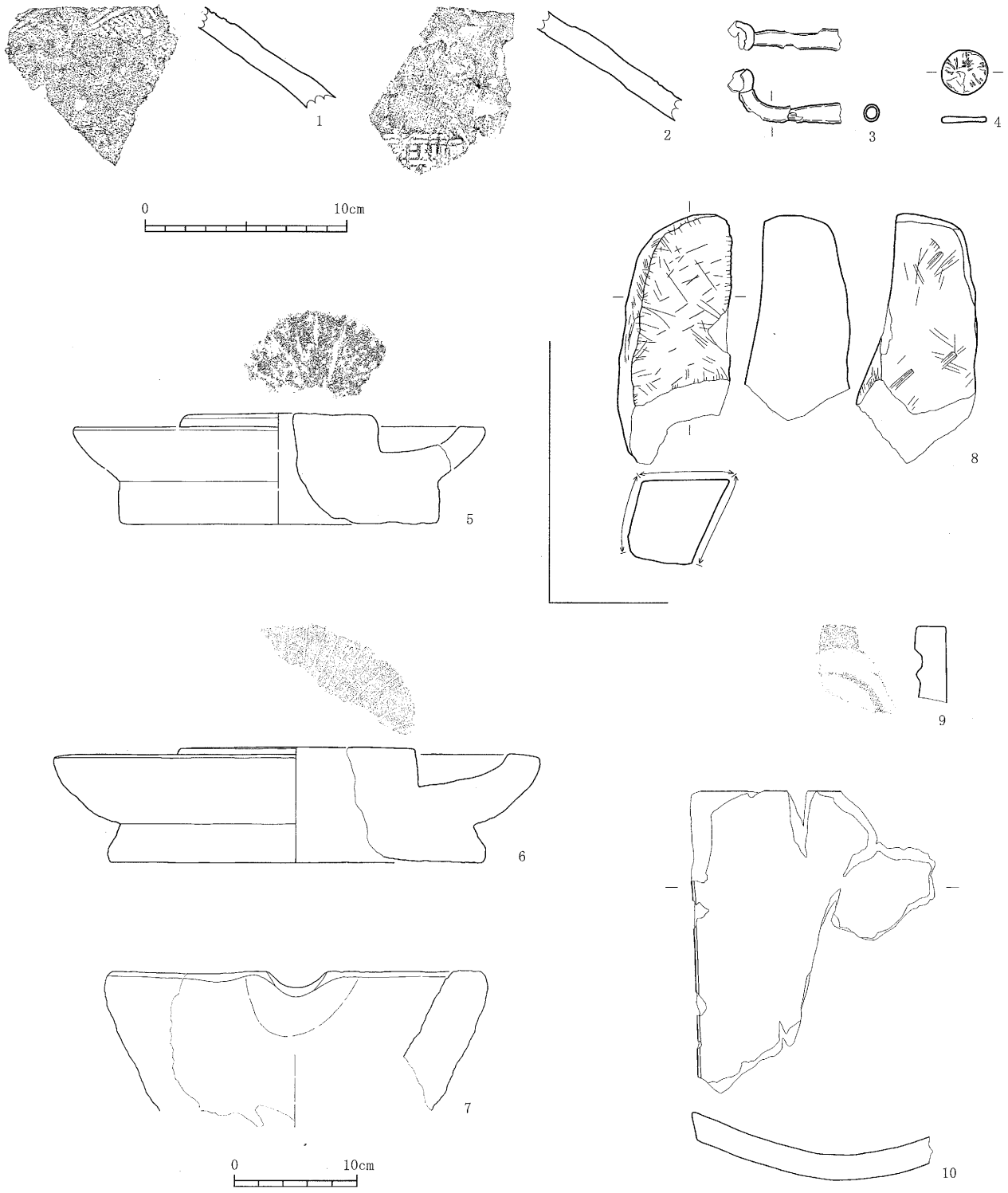
	層位	色　調	性　質	備　考
SD402	4c	褐灰色　10YR5/1	砂質粘土	炭化物・酸化鉄粒を含む
	4d	褐灰色　10YR4/1	粘土	酸化鉄を斑に含む
	4e	褐灰色　10YR5/1	粘土	細砂をを層状に含む
	4f	褐灰色　10YR5/1	粘土質砂	粗砂・酸化鉄を層状に含む
	4g	褐灰色　10YR4/1	粘土	粗砂・酸化鉄を層状に含む
	4h	灰黄褐色　10YR6/2	粘土	褐灰色土を斑に含む、グライ化
	5	褐色　10YR4/4	細砂	粗砂、大量の礫に遺物類が混じる
	6a	明赤褐色　5YR5/8	砂質粘土	酸化鉄集積層
	6b	灰黄褐色　10YR6/2	細砂	グライ化
	6c	褐灰色　10YR5/1	粘土	互層
		にぶい赤褐色　5YR4/4	細砂	底面に酸化鉄集積
	6d	褐灰色　10YR4/1	シルト質粘土	植物遺体あり、下部に酸化鉄集積
SD404	1	褐色　10YR4/4	砂質シルト	黄褐色土を斑に含む

第75図　SD402・404溝跡



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土師質土器　皿	5層	ロクロ成形、外傾気味にきつく立つ、切り離しは回転糸切り、口径102mm、底径62mm、器高25mm	D45	
2	土師質土器　皿	5層	ロクロ成形、外傾気味にきつく立つ、切り離しは回転糸切り（2度切りがみられる）、口径122mm、底径68mm、器高27mm	D47	
3	土師質土器　皿	5層	ロクロ成形、外傾気味にきつく立つ、切り離しは回転糸切り、口径100mm、底径65mm、器高24mm	D46	
4	土師質土器　皿	5層	ロクロ成形、外傾気味にきつく立つ、口縁部内外面にタール付着、口径（80）mm、底径（48）mm、器高19mm	D52	
5	土師質土器　皿	5層	ロクロ成形、外傾気味にきつく立つ、内外面に墨様のもの塗られる、切り離しは回転糸切り、口径(52)mm、底径(34)mm、器高15mm	D55	
6	土師質土器　皿	5層	ロクロ成形、外傾気味にきつく立つ、切り離しは回転糸切り、口径55mm、底径36mm、器高17mm	D54	
7	瓦質土器　香炉	5層	体部中央に方形のスタンプが巡る、ヘラケズリとヘラミガキで調整、乳頭状の脚(3ヶ)が付く、口径140mm,底径104mm、器高59mm	H53	19-2
8	瓦質土器　擂鉢	5層	体部片、内面に幅広の櫛目、上部には横方向に櫛目が一条巡る	H54	
9	瓦質土器　擂鉢	5層	外傾気味に立つ、口縁部は短く丸く屈曲する、内面に幅広の櫛目、口径（320）mm、底径（134）mm、器高130mm	H55	
10	瓦質土器　鉢	5層	口縁部片、口縁端部が内側に短く丸く屈曲、口径（240）mm	H57	
11	陶器　皿	5層	鉄釉折縁皿、ソギ皿、瀬戸美濃、大窯4前、口径112mm、底径56mm、器高22mm	I1105	19-17
12	陶器　鉢	5層	黄瀬戸、摩滅及び剥落が著しい、瀬戸美濃、登窯1、口径（280）mm、底径（156）mm、器高55mm	I1095	19-18
13	磁器　瓶	6層	体部片、染付け、草文、産地不明	J597	19-19

第76図　SD402溝跡出土遺物1



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　甕	5層	体部片、格子状の押印あり、常滑	I1130	
2	陶器　甕	5層	体部片、格子状の押印あり、常滑	I1127	
3	キセル	5層	雁首（火皿・脂返し）、脂返し部の径8×7mm、	N117	
4	鉛板	5層	円盤状、22×22×3mm	N116	19-10
5	石臼	5層	茶臼の下臼、径（262）mm、上部径（160）mm、高さ92mm、安山岩	K93	
6	石臼	5層	茶臼の下臼、径（400）mm、上部径（190）mm、高さ96mm、安山岩	K94	19-13
7	石鉢	5層	片口、口径310mm、厚さ39～42mm、安山岩	K92	
8	砥石	5層	平面は変形の長円形、下部欠損、断面は平行四辺形、砥面は3面、残存長124mm、幅54mm、厚さ58mm、凝灰岩	K95	19-14
9	近世瓦　軒丸瓦	5層	三巴文（左巻）、厚さ25mm	G56	
10	近世瓦　平瓦	5層	凸面：ナデ、面取り、凹面：ナデ、厚さ20mm	G57	

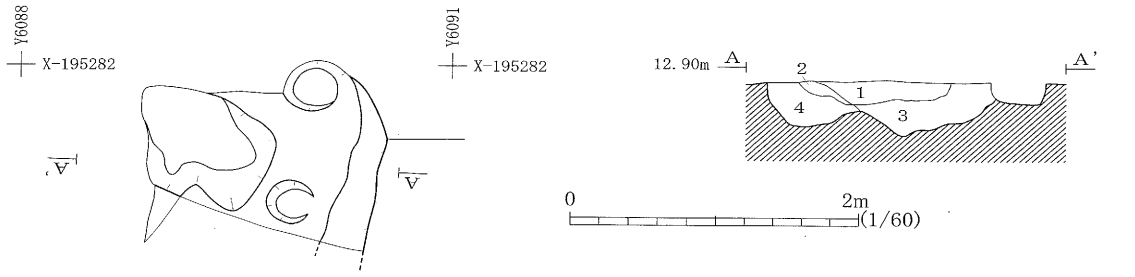
第77図　SD402溝跡出土遺物2

代瓦、中世陶器甕、土師質土器皿、瓦質土器（香炉・鉢・擂鉢）、黄瀬戸鉢、赤織部向付、天目茶碗・鉄釉折縁禿皿・鉄絵皿（瀬戸美濃）、染付瓶・皿・小杯、青磁？、近世瓦（三巴文軒丸瓦・平瓦）、石臼、石鉢、キセル、鉛板、炉壁、鉱滓、骨片、礫が出土している。

SD404溝跡　B－18区に位置する。SD402南辺にほぼ直角に接し、さらにSK404を切る。南北確認長1.6m、上端幅30cm、下端幅25cm、深さ14cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり断面形は矩形である。堆積土は2層確認した。両壁面に間隔をおき扁平な礫が2個ずつ配されている。樋などの施設の裏オサエかと思われる。出土遺物はない。

2）土坑

SK404土坑　B－18・19区に位置する。方形を基調とする不整形である。SD402・SD404に切られる。東西確認長1.65m、南北確認長1.48m、深さ最大44cmを測る。壁はきつく立ち上がるが底面は凹凸面となり断面形は不整形である。堆積土は4層確認した。出土遺物はない。



層位	色調	性質	備考
1	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	
3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
4	褐色 10YR4/4	砂質シルト	斑の層
	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	

第78図　SK404土坑

(3) 99－2区の調査

検出遺構は土坑1基、溝跡3条、柱穴・ピット多数である。SK510は99－2区内に存在するがピットと判断しており、2002－2区調査時に土坑と確認された。基本層位は細別で6層確認した。Ⅰ～Ⅲ層は耕作土と判断され下部の、層が遺構確認面となる。

1）土坑

SK310土坑　G－3区に位置する。平面形は不整な方形である。長軸は南北方向で110cm、短軸96cm、深さ最大28cmを測る。壁はきつい立ち上がりで底面中央部がV字状となる。断面形はやや不整な矩形となる。堆積土は3層確認した。ゆるいレンズ状堆積を呈する。土師器、須恵器が出土している。

2）溝跡

SD306溝跡　F－3・4区に位置する。ピットを切っている。直線的に延び確認長1.75mを測る。軸方向はN－76°－Eである。上端幅26cm、下端幅12cm、深さ最大で14cmを測る。壁面はきつく立ち上がり断面は逆台形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認した。出土遺物はない。

SD307溝跡　F－4区に位置する。ピットに切られる。直線的に延び確認長1.3mを測る。軸方向はN－64°－Eである。上端幅28cm、下端幅14cm、深さ11cm程を測る。壁面はややきつく立ち上がり断面は逆台形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認した。出土遺物はない。

SD308溝跡　F－3区に位置する。直線的に延び確認長1.55mを測る。軸方向はN－64°－Eである。上端幅25cm、下端幅23cm、深さ9cm程を測る。壁面はきつく立ち上がり断面は矩形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層の確認である。出土遺物はない。

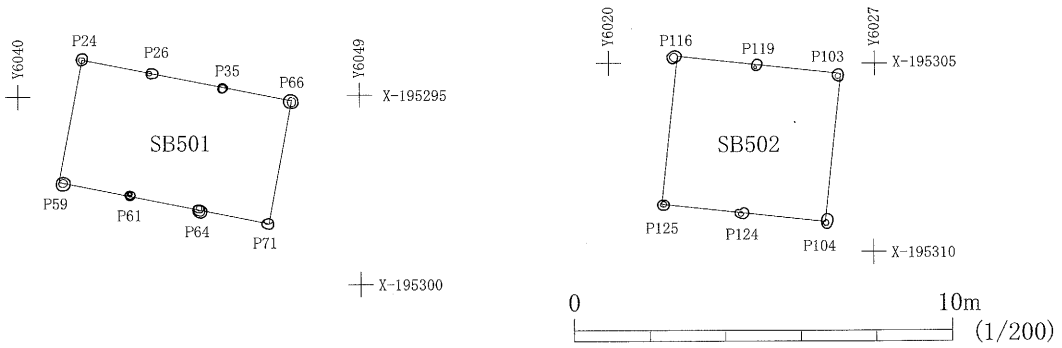
(4) 2002－2区の調査

検出遺構は掘立柱建物跡２棟、柱列跡１条、土坑13基、溝跡２条、竪穴住居跡４軒、柱穴・ピット多数である。基本層位は西壁部で大別で３層確認した。壁面確認ではあるがⅡb層確認の遺構もあるが大半の遺構はⅢ層が遺構確認面となる。

１）建物跡

SB501掘立柱建物跡　D・E－９・10区に位置する。梁行１間、桁行３間の東西棟の建物跡である。建物方向は西側梁部でN－11°－Eを測る。柱穴は北側柱列に４基（P24・P26・P35・P66）、南側柱列に４基（P59・P61・P64・P71）となる。柱穴は径30～45cm前後の円形を基調とする。柱痕跡はP61で確認され径13cm程を測る。柱間寸法は西妻で3.3m、東妻で3.28m、桁北側は西から1.8＋1.98＋1.84mで総長5.62m、桁南側は西から1.79＋1.88＋1.85mで総長5.52mを測る。土師器が出土している。P59からは扁平な礫が出土しており礎板の可能性がある。

SB502掘立柱建物跡　G－５・６区に位置する。梁行１間、桁行２間の東西棟の建物跡である。建物方向は西側梁部でN－5°－Eを測る。柱穴は北側柱列に３基（P116・P119・P103）、南側柱列に３基（P125・P124・P104）となる。柱穴は径30～40cm前後の円形を基調とする。柱痕跡はP103で確認され径14cm程である。柱間寸法は西妻で3.92m、東妻で3.9m、桁北側は西から2.18＋2.21mで総長4.39m、桁南側は西から2.07＋2.24mで総長4.31mを測る。SI502、SK511・512と建物範囲内での重複関係をもつ。P116がSK512を切っている。土師器が出土している。



第79図　SB501・502掘立柱建物跡

２）柱列跡

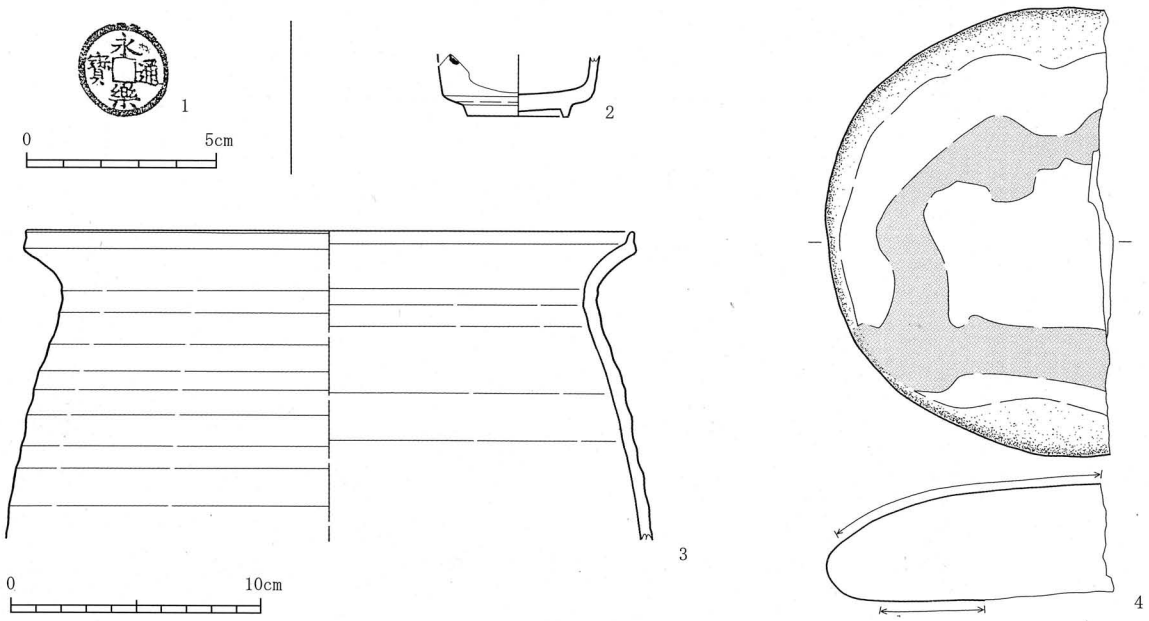
SA501柱列跡　D－９・10区に位置する。４基（P20・P21・P28・P30）の柱穴で構成される。SI503を切っている。SB501の北側に位置するが軸方向は建物跡とはややずれるがおおきく並行関係である。柱列方向はE－4°－Sを測る。柱穴は径30～35cmの円形及び方形を呈する。確認長は6.68mで西から2.15＋2.2＋2.33mとなる。P30から永楽通宝が出土している。

３）土坑

SK504土坑　B－10区に位置する。平面形は不整な円形である。東西軸1.66mまで確認、南北軸1.6m、深さ34cmを測る。壁はややきつい立ち上がりで底面は凹凸面となる。断面形はややきつい皿形である。堆積土は２層確認した。ゆるいレンズ状堆積である。土器片、赤漆の膜が出土している。

SK505土坑　F－９・10に位置する。平面形は長円形である。東西軸1.65m、南北軸１mまで確認、深さ1.88mを測る。壁はきつい立ち上がりで底面はほぼ平坦である。断面形は矩形である。堆積土は大別で３層まで確認した。ゆるいレンズ状堆積である。形状等から井戸跡と判断される。土師器、須恵器、中世陶器、古銭が出土している。

SK506土坑　H－９区に位置する。平面形は円形と判断される。東西軸80cmまで確認、南北軸1.58m、深さ1.1mを測る。壁はきつい立ち上がりで底面がすぼまる形状となる。断面形は逆三角形でロート形となる。堆積土は４層確認した。レンズ状堆積である。形状等から井戸跡と判断される。瓦質土器擂鉢、石製品が出土している。



	地点・層位	種　別	特　　徴	登録	写真
1	SA501-P30　埋土	古銭	永楽通宝、明　永楽6年(1408)	N196	
2	P158　埋土	磁器　碗	上部欠損、底径40mm、産地不明	J1741	
3	P174　埋土	土師器　甕	ロクロ成形、内傾気味に立ち上がり、口縁部はゆるく外反し口唇部は上方に三角形状に突出、口径242mm	C88	
4	SB501-P59　埋土	礫	扁平の円礫、欠損、上下面に磨面、被熱、煤付着、残存長178mm、残存幅106mm、厚さ46mm	K193	

第80図　2002－2区　柱穴・ピット出土遺物

SK507土坑　G－８区に位置する。平面形は不整な方形である。長軸73cm、短軸69cm、深さ10cmを測る。壁はきつい立ち上がりで底面は平坦である。断面形はきつい皿形である。堆積土は１層の確認である。出土遺物はない。

SK508土坑　D－９区に位置する。平面形は円形を基調とする不整形である。長軸２m、短軸1.35m、深さ42cmを測る。壁はややきつい立ち上がりで底面は皿状となる。断面形はきつい皿形である。堆積土は４層確認した。ゆるいレンズ状堆積である。土器片が出土している。

SK509土坑　C･D－９区に位置する。平面形は方形を基調とする不整形である。東西軸1.16m、南北軸1.28m、深さ28cmを測る。壁はきつい立ち上がりで底面は凹凸面となる。断面形は不整な矩形である。堆積土は１層の確認である。壁面から底面に径40cm程のピットがみられる。出土遺物はない。

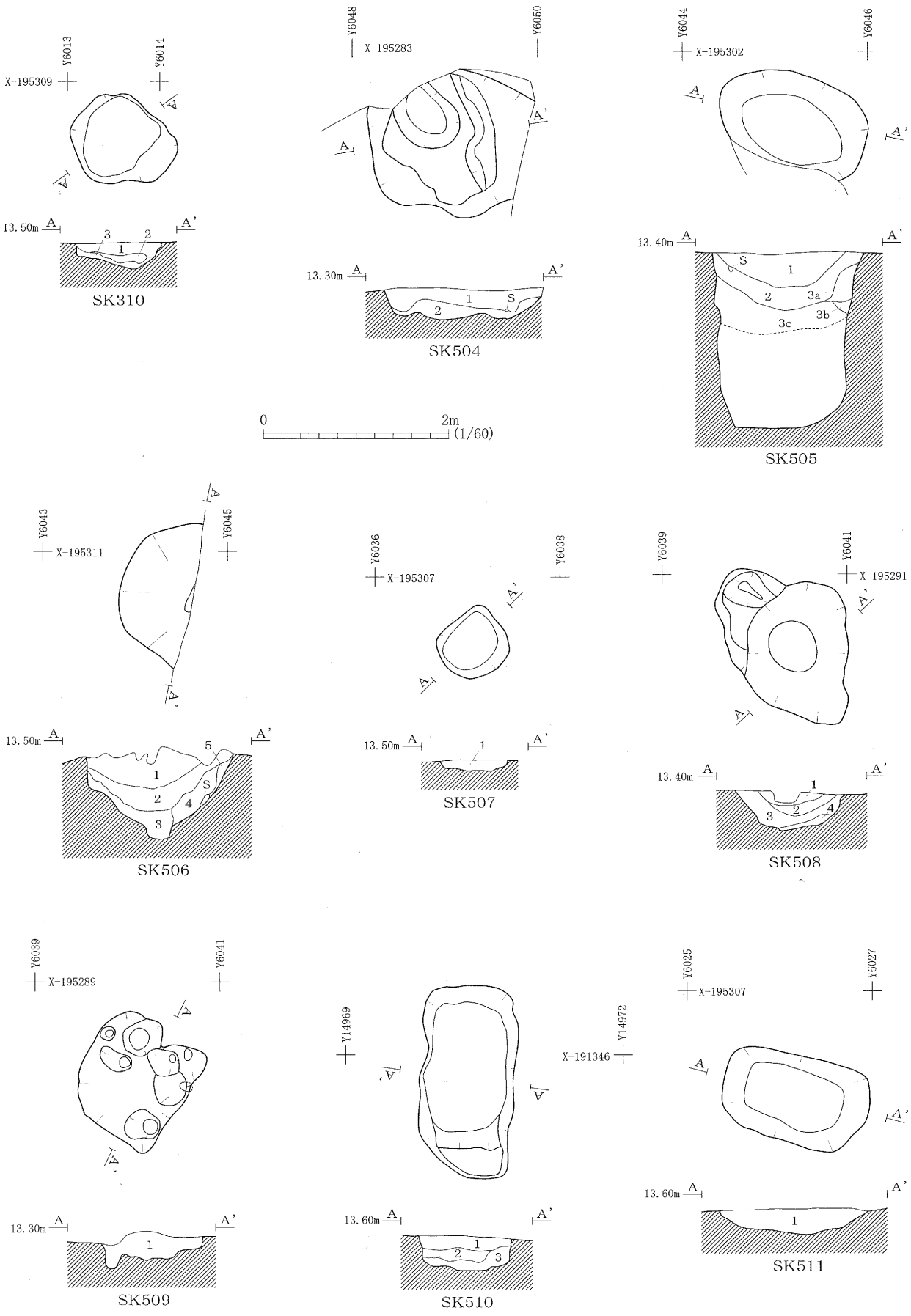
SK510土坑　G－３区に位置する。平面形は長方形である。長軸2.09m、短軸1.01m、深さ37cmを測る。壁はきつい立ち上がりで底面はほぼ平坦である。断面形は矩形である。堆積土は3層確認した。３層とも混成層で人為堆積と判断される。出土遺物はない。

SK511土坑　G－６区に位置する。平面形は長方形である。長軸1.6m、短軸93cm、深さ28cmを測る。壁はゆるい立ち上がりで底面は皿状となる。断面形は皿形である。堆積土は１層の確認である。土器片が出土している。

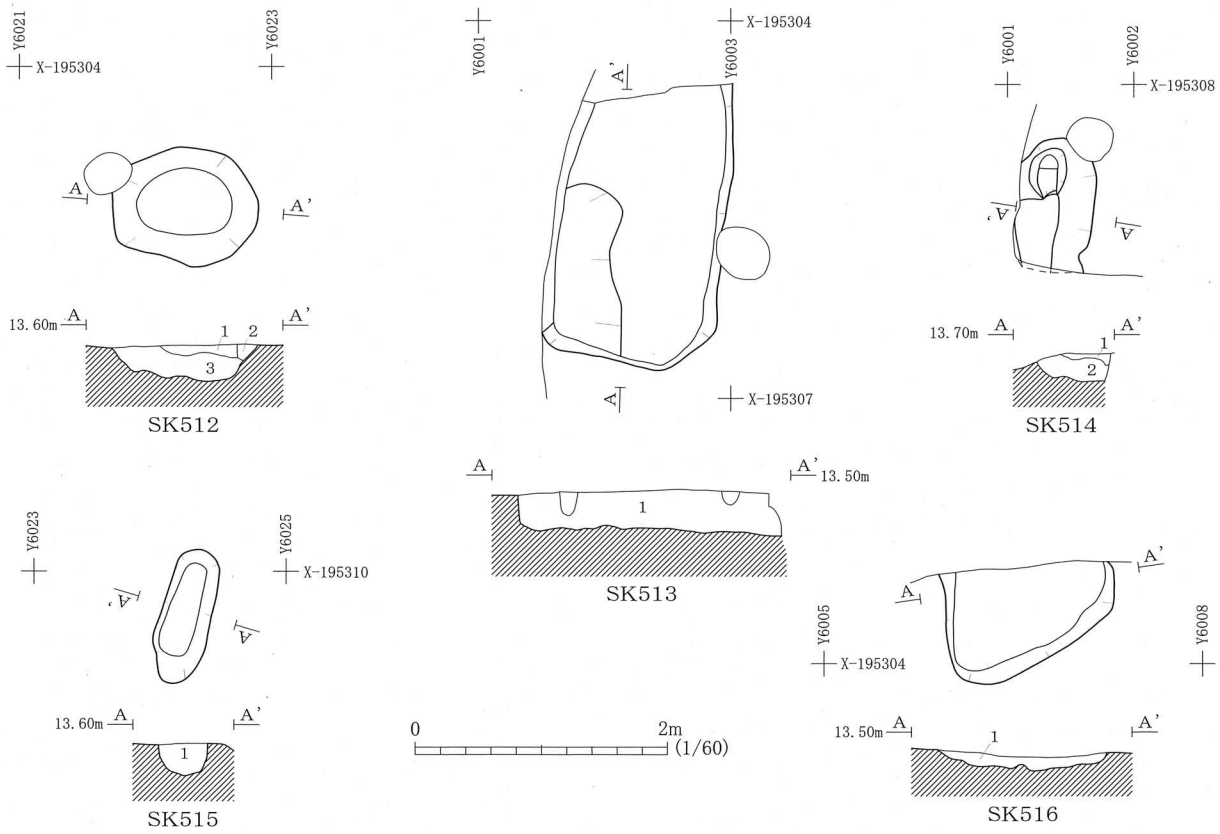
SK512土坑　F･G－５区に位置する。平面形は長円形である。長軸1.16m、短軸92cm、深さ92cmを測る。壁はややきつい立ち上がりで底面はゆるい凹凸面である。断面形はやや歪んだ逆台形形である。堆積土は３層確認した。土器片が出土している。

SK513土坑　F･G－１区に位置する。平面形は長方形と判断される。長軸2.33mまで確認、短軸1.55m、深さ29cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。断面形は矩形である。堆積土は１層の確認である。フイゴの羽口、土製品が出土している。

SK514土坑　G－１区に位置する。平面形は長円形様と判断される。東西軸60cmまで確認、南北軸1.05mまで確



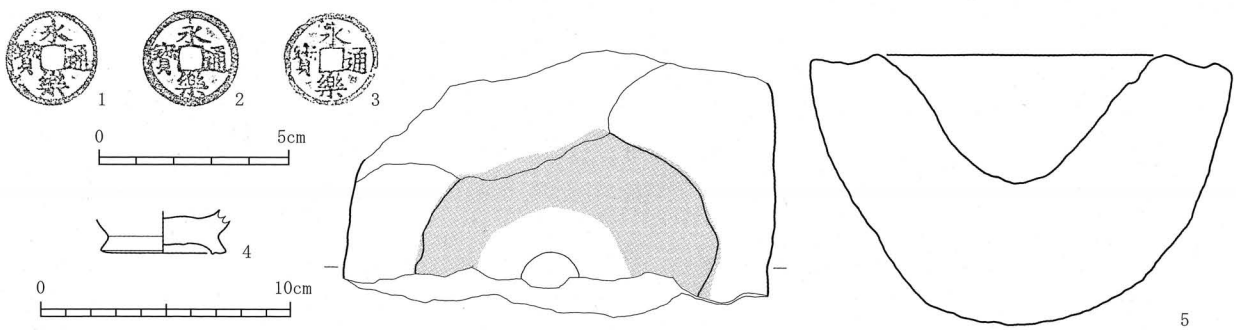
第81図　99－2区・2002－2区土坑1



	層位	色　調	性　質	備　考
SK310	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	2	黄褐色 10YR5/6	粘土	
	3	黄褐色 10YR5/6	粘土	ややグライ化
SK504	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物粒・焼土粒を含む
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	斑の層、焼土粒・炭化物粒を含む
		明黄褐色 10YR6/8	粘土	
SK505	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	炭化物を少量含む
	2	暗褐色 10YR3/4	粘土	炭化物粒・焼土粒をまばらに含む
	3a	暗褐色 10YR3/3	粘土	
	3b	黄褐色 10YR5/8	粘土質シルト	
	3c	暗褐色 10YR3/3	粘土	炭化物粒を少量含む
SK506	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物粒を斑に含む
	2	黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む
	3	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	層下部がややグライ化
	4	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	
	5	褐色 10YR4/6	砂質シルト	壁崩壊土
SK507	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	砂を斑に含む
SK508	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	焼土粒をまばらに含む
	2	褐色 10YR4/4	シルト	
	3	暗褐色 10YR3/4	シルト	焼土ブロック・炭化物粒を含む

	層位	色　調	性　質	備　考
SK508	4	暗褐色 10YR3/3	シルト	焼土粒を含む
SK509	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土をスジ状及び斑に含む
SK510	1	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	混成層
		にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	混成層
		にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	3	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	混成層
		にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
SK511	1	黒褐色 10YR2/3	シルト	混成層
		黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	
SK512	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	焼土粒・炭化物粒を斑に含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	斑の層
		黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	
	3	暗褐色 10YR3/3	シルト	
SK513	1	黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒をまばらに含む
SK514	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	2	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	鋳型片を含む
SK515	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化物粒を少量含む
SK516	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	

第82図　2002－2区土坑２



	地点・層位	種　別	特　徴	登録	写真
1	SK505　埋土	古銭	永楽通宝、明　永楽6年(1408)	N197	
2	SK505　埋土	古銭	永楽通宝、明　永楽6年(1408)	N198A	19-8
3	SK505　埋土	古銭	永楽通宝、明　永楽6年(1408)	N198B	
4	SK505　埋土	須恵器　壺？	底部片、ハの字状に高台がつく、高台径50mm	E71	
5	SK506　埋土	石製品	平面は方形？、断面は半円形、中央が窪み煤が付着、径168mm、高さ109mm	K192	

第83図　2002－2区　土坑出土遺物

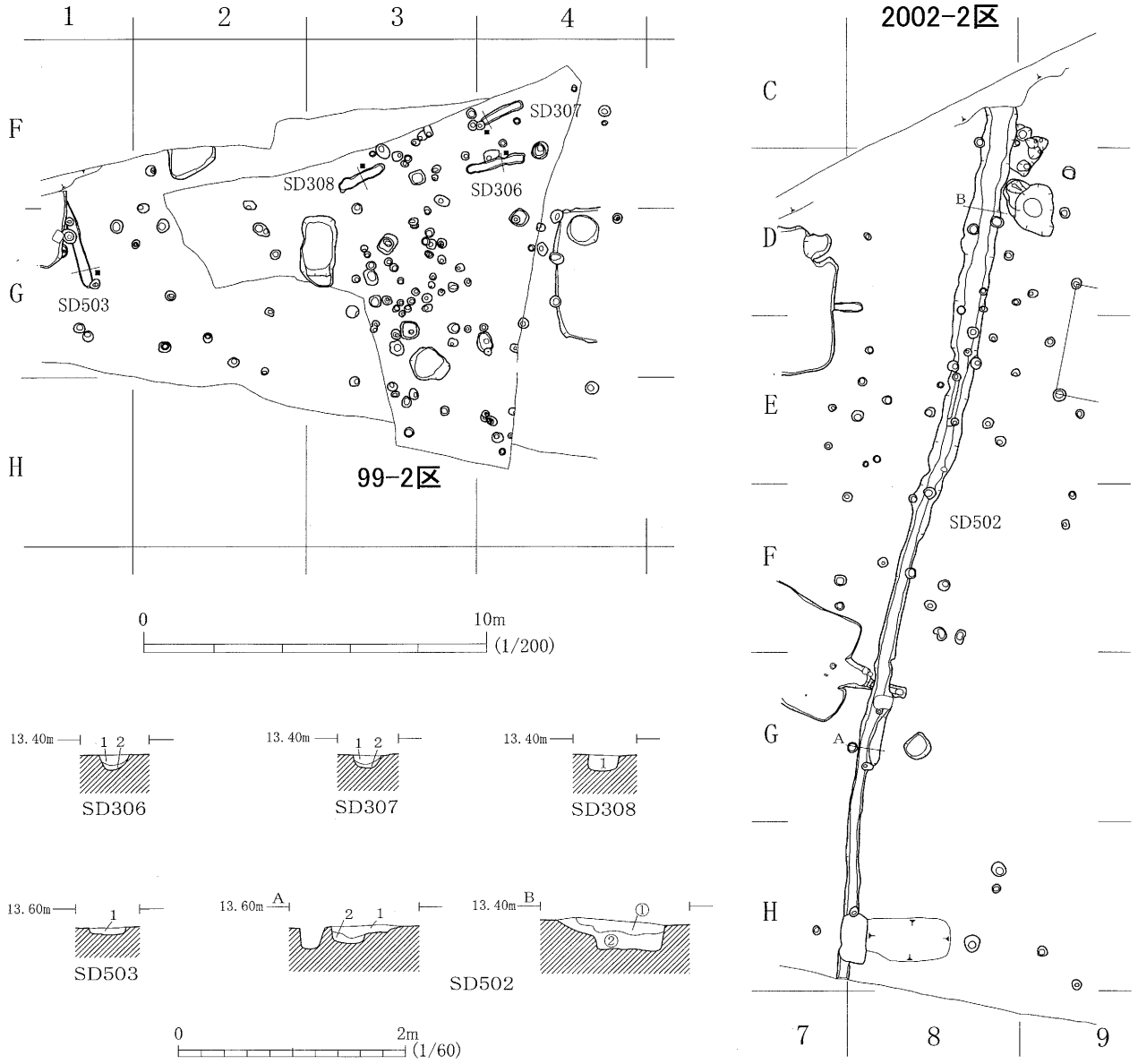
認、深さ21cmを測る。壁はややきつい立ち上がりで底面は平坦である。断面形は皿形と判断される。堆積土は２層確認した。ゆるいレンズ状堆積である。陶器、フイゴの羽口、炉壁、鋳型が出土している。

SK515土坑　H－５区に位置する。平面形は長円形である。長軸1.1m、短軸39cm、深さ25cmを測る。壁はきつい立ち上がりで断面形はU字形である。堆積土は１層の確認である。土器片、釘が出土している。

SK516土坑　F－２区に位置する。平面形は不整な方形と判断した。東西軸1.35m、南北軸91cm、深さ10cmを測る。壁はゆるい立ち上がりで断面形は皿形である。堆積土は１層の確認である。出土遺物はない。

４）溝跡

SD502溝跡　C～H－８区に位置する。ピット群に切られSK508・SK509・SI502を切る。ゆるい蛇行はみるがほぼ直線的に延び確認長は26.2mを測る。軸方向はN－10°－Wである。南側は削平のためか細くなるが、北側の上端幅



	層位	色　調		性　質	備　考
SD306	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色土ブロックを含む
	2	褐色	10YR4/6	粘土	
SD307	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色土ブロックを含む
	2	黄褐色	10YR5/6	粘土	
SD308	1	黄褐色	10YR5/6	粘土	暗褐色土を斑に含む
SD503	1	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	

	層位	色　調		性　質	備　考
SD502	1	黄褐色	10YR5/6	シルト	斑の層
		暗褐色	10YR3/4	シルト	
	2	黄褐色	10YR5/6	シルト	
	①	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	
	②	暗褐色	10YR3/4	シルト	

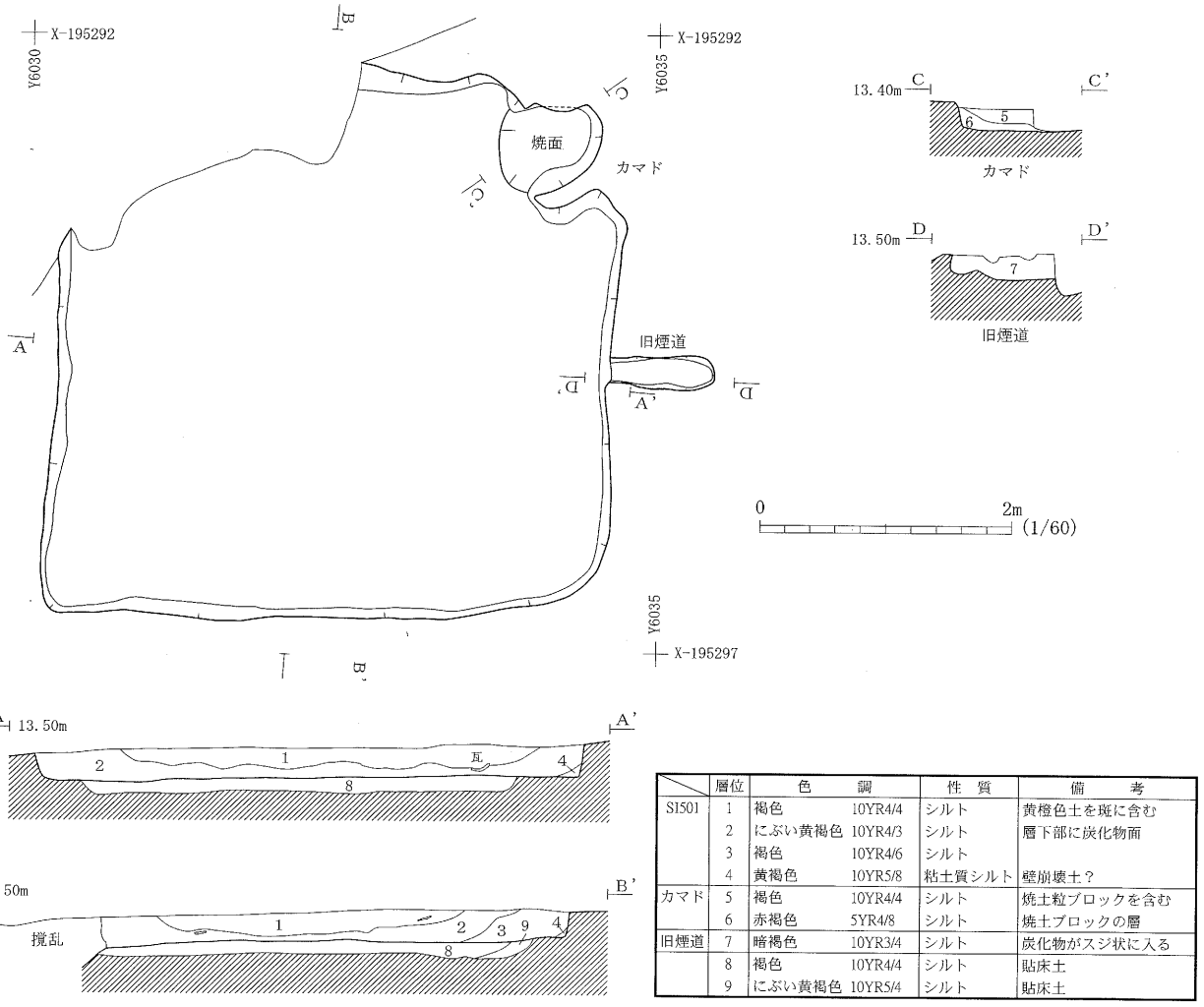
第84図　99－2・2002－2区溝跡

は１ｍ前後、下端幅50cm程、深さ24cm程を測る。壁面は底面から短くきつく立ち上がりさらにゆるく外方へひらいている。断面形はやや歪んだ逆台形となる。底面はほぼ平坦であるが南北間ではゆるい凹凸となる。堆積土は２層確認した。土師器、須恵器、金箔様の薄片が出土している。

SD503溝跡　G－１区に位置する。ピット及びSK513に切られる。直線的に延び確認長2.75ｍを測る。軸方向はＮ－17°－Ｗである。上端幅30cm、下端幅25cm、深さ６cm程を測る。壁面はややきつく立ち上がり断面は矩形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は１層の確認である。土器片が出土している。

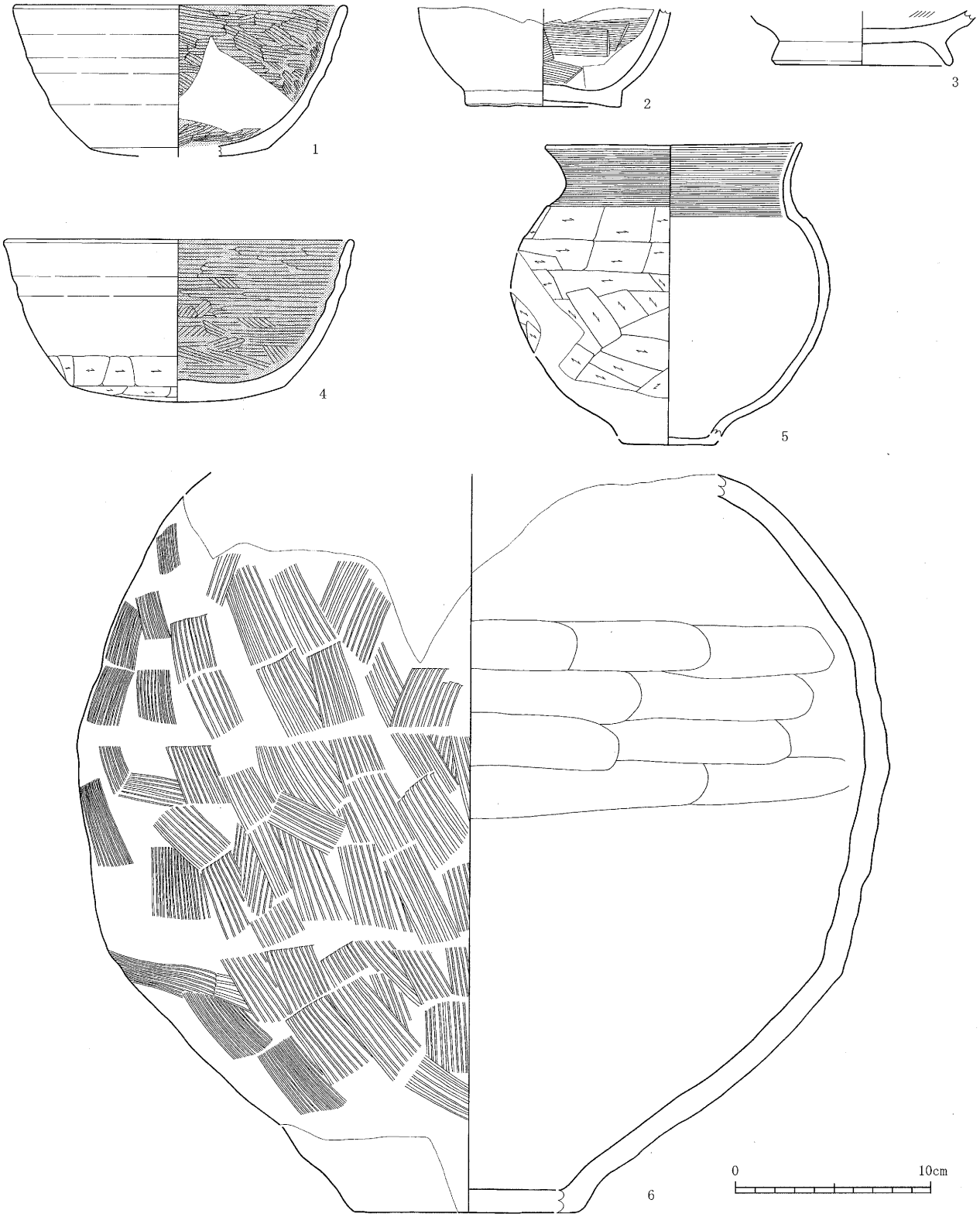
５）竪穴跡

SI501竪穴住居跡　D・E－７区に位置する。住居北西側部が削平されるが平面形は隅丸方形である。西辺方向はＮ－3°－Ｅである。大きさは南北長が4.5ｍ、東西長4.4ｍを測りほぼ正方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ25cm程の残存である。堆積土は９層確認した。堆積土状況から自然堆積と判断した。床面はほぼ平坦で基本層と下部遺構の堆積土となる８・９層で構成される。柱穴・周溝は確認されない。北東隅部と東辺中央部でカマドを２基確認した。東辺部のカマドは煙道部のみの残存となり新旧２時期が判断された。新のカマドは燃焼部のみで煙道部は確認されない。燃焼部左側の側壁が消失するが右側の側壁は下端幅最大45cm、袖長55cm程を測る。燃焼部の大きさは奥行き88cm、幅60cm程を測る。底面は硬化面となっている。旧のカマドの煙道は長さ95cm、上端幅25cm、深さ20cmを測る。床面下に住居プランを一回り小さくした形のやや不整形となる落ち込みを確認している。南北長最大3.95ｍ、東西長最大3.3ｍを測る。住居掘り方とも判断したが北辺中央に焼面が確認され、住居の作り替えと判断した。堆積土は２層確認したが新の住居の貼床と判断される。床面及び堆積土中から多量の土師器・須恵



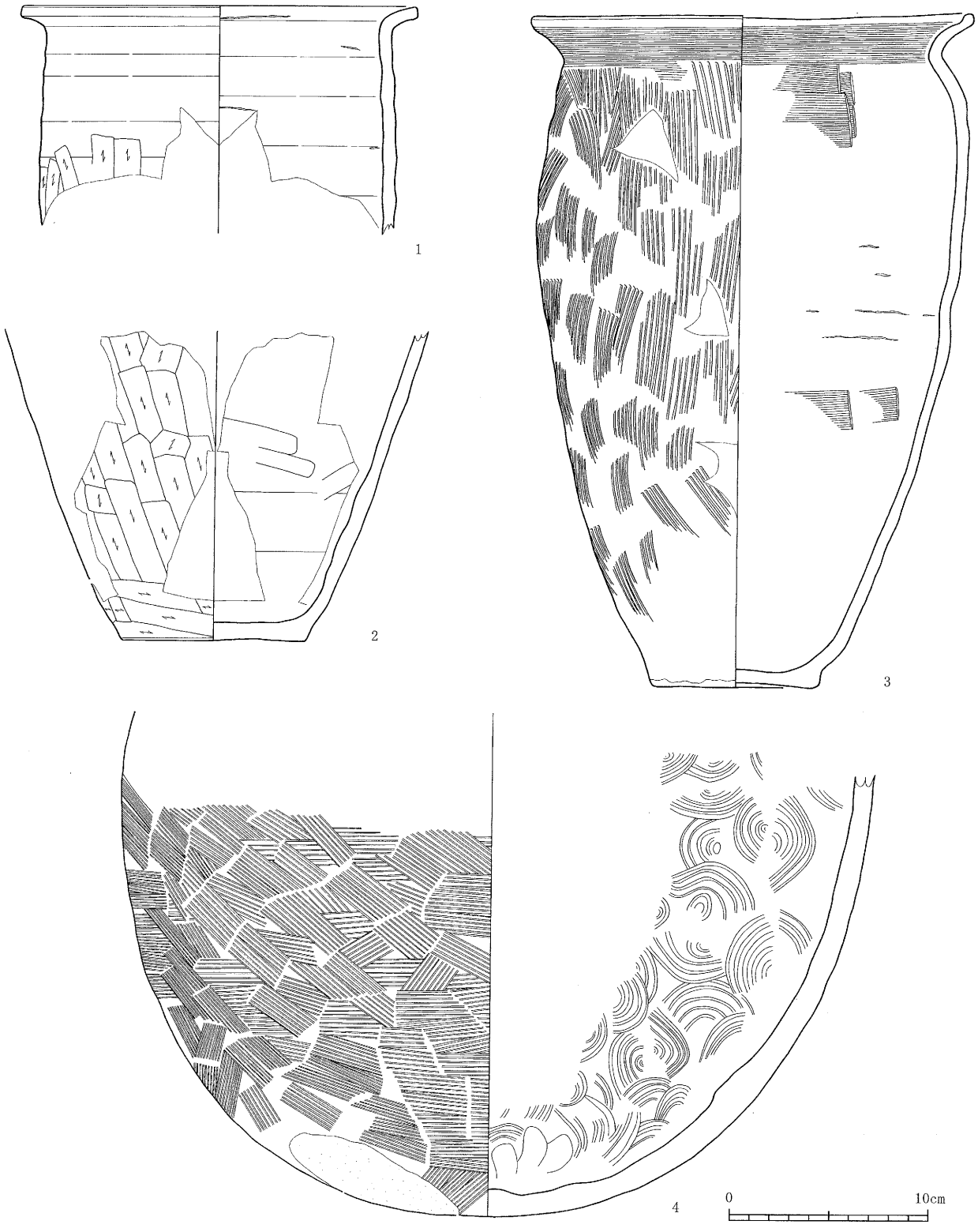
	層位	色調	性質	備考
SI501	1	褐色 10YR4/4	シルト	黄橙色土を斑に含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	層下部に炭化物面
	3	褐色 10YR4/6	シルト	
	4	黄褐色 10YR5/8	粘土質シルト	壁崩壊土？
カマド	5	褐色 10YR4/4	シルト	焼土粒ブロックを含む
	6	赤褐色 5YR4/8	シルト	焼土ブロックの層
旧煙道	7	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化物がスジ状に入る
	8	褐色 10YR4/4	シルト	貼床土
	9	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	貼床土

第85図　SI501竪穴住居跡



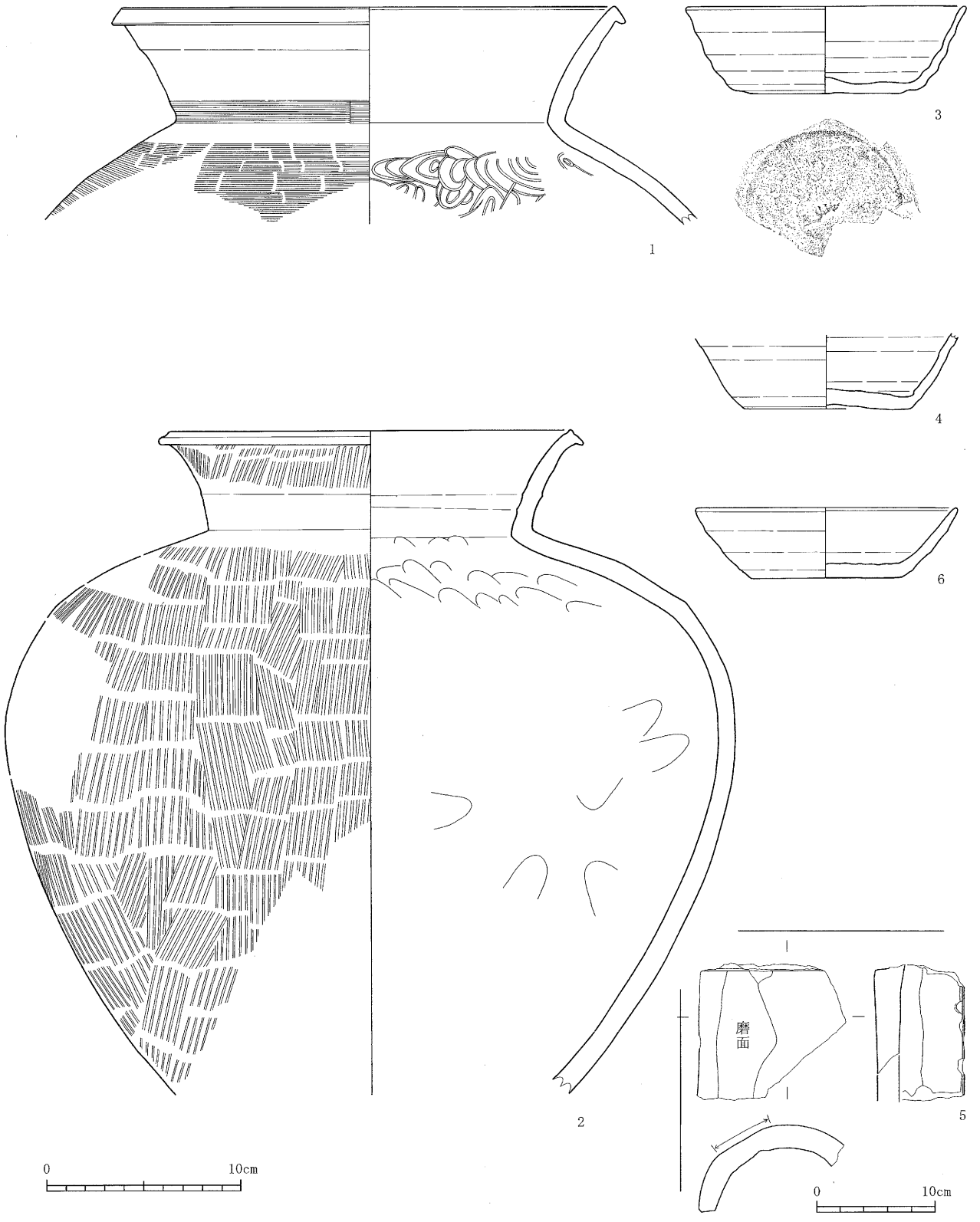
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土師器　坏	床面	ロクロ成形、平底風丸底、体部下端から底部に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(169)mm, 底径(91)mm、器高75mm	C63	18-8
2	土師器　甕	床面	底部片、外面調整不明、内面は浅いヘラナデ、底部に木葉痕、底径80mm、被熱	C62	
3	土師器　台付坏	2層	ロクロ成形、底部～高台部片、高台はハの字状に外方に強く張り出す、内面はヘラミガキ・黒色処理、高台径92mm、高台高12mm	C61	
4	土師器　坏	埋土	ロクロ成形、平底風丸底、体部下端から底部に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径174mm, 底径108mm、器高83mm	C89	18-9
5	土師器　甕	埋土	内弯気味に立ち口縁部との境に浅い段、外面は口縁部がヨコナデで体部はヘラケズリ、内面は口縁部がヨコナデ、口径129mm, 残存高150mm	C60	18-10
6	土師器　甕	埋土	内弯気味に立ち倒卵形となる、外面はハケメ、内面はナデ、体部中央部最大幅400mm、残存高380mm	C58	

第86図　SI501竪穴住居跡出土遺物1



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師器　甕	埋土	ロクロ成形、体部は直立気味に立つ、口縁部はきつく外方へ屈曲、体部外面下部にヘラケズリ、口径198mm	C57a	
2	土師器　甕	埋土	ロクロ成形、きつく外傾気味に立つ、体部外面はヘラケズリ、内面はナデ、底径90mm	C57b	
3	土師器　甕	埋土	長胴、きつく立ち口縁部はきつく外方へ屈曲、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメ、内面はヘラナデ、底部に木葉痕、口径214mm、底径84mm、器高338mm、被熱	C59	18-11
4	須恵器　甕	床面	体部～底部、丸底、外面は平行叩き、内面は同心円文のオサエ、体部最大幅373mm、残存高253mm	E66	

第87図　SI501竪穴住居跡出土遺物２

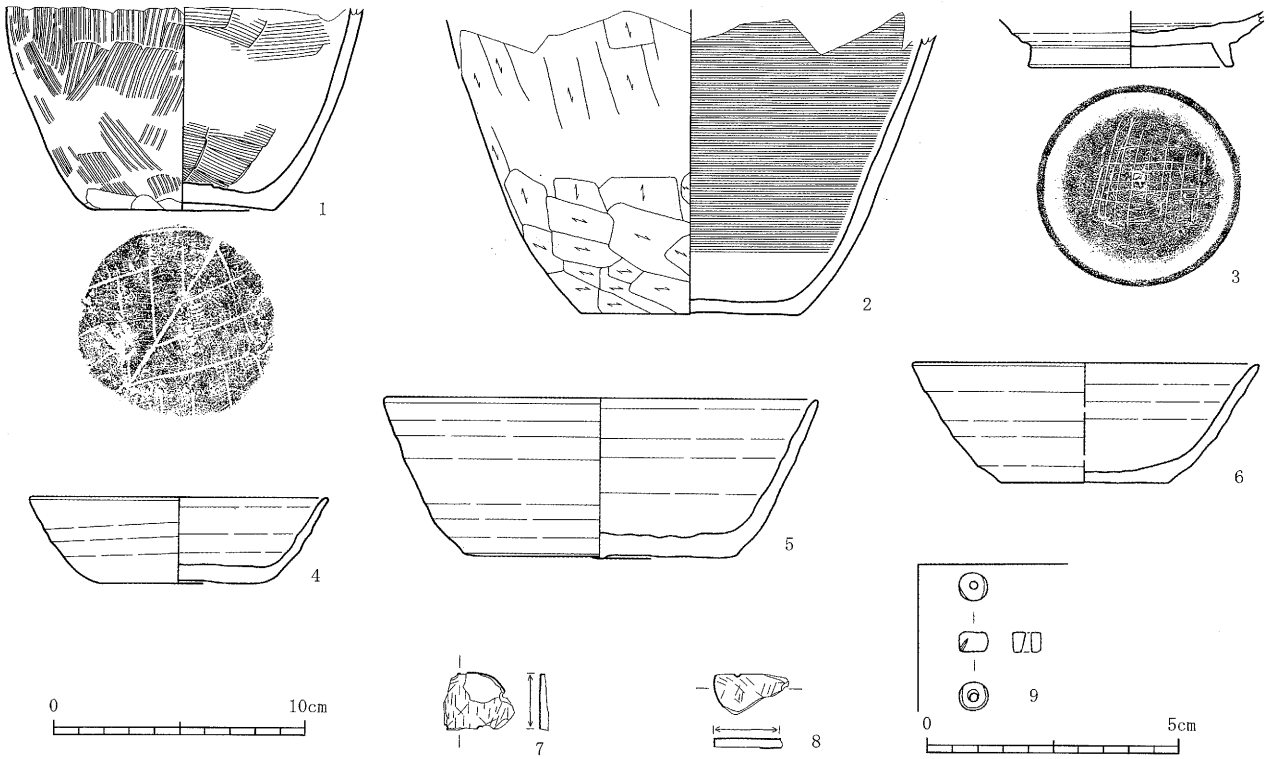


	種別	地点・層位	特徴	登録	写真
1	須恵器 甕	床面	口縁部はくの字状に屈曲、口唇端部は上方と外方下部が三角形状、外面は横方向の平行叩き、内面は同心円文のオサエ、口径262mm	E64	
2	須恵器 甕	床面	口縁部はくの字状に屈曲、口唇端部は上方と外方下部が三角形状、外面は平行叩き、内面はナデ、口径218mm、	E65	18-19
3	須恵器 坏	埋土	外傾気味に立つ、底部は回転ヘラ切りで無調整、口径144mm、底径76mm、器高45mm	E62	
4	須恵器 坏	1層	外傾気味に立つ、底部は回転ヘラ切りで無調整、底径85mm	E63	
5	古代瓦 丸瓦	2層	凸面頂部に幅40mmの磨り面あり、玉縁付、凸面はロクロナデ、縄叩き、凹面に粘土紐痕、布目痕、厚さ17～20mm、	F28	
6	須恵器 坏	9層	外傾気味に立ちやや内弯気味、底部は回転ヘラ切りで無調整、口径133mm、底径78mm、器高37mm	E67	

第88図　SI501竪穴住居跡出土遺物３

器類が出土している。

SI502竪穴住居跡　F・G－7・8区に位置する。SD502に切られている。平面形は隅丸の長方形である。南辺方向はE－26°－Sである。大きさは最大東西長5.13m、南北長3.15mを測る。遺存がやや不良であるが壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ11cm程の残存である。堆積土は6層確認した。堆積土状況から自然堆積と判断される。床面はほぼ全域が貼床となり凹凸面はみられるがほぼ平坦面である。柱穴・周溝は確認されない。カマドを東辺中央部で確認した。燃焼部が壁奥に袋状となるものでさらに煙道が続く形態をもつ。燃焼部は奥行き90cm、幅80cmを測る。焼面がみられ部分的に硬化面も確認された。煙道は長さ114cm、上端幅23cmを測る。煙道先端部はピット状となり深くなっており奥壁はきつく立ち上がっている。掘り方底面はゆるい凹凸面となる。底面でピットを5基確認している。住居跡の各隅部で計4基、やや内側に1基となる。ピットはすべて浅いもので最も深いものでも15cm程である。焼土や炭化物が含まれており廃棄穴の可能性がある。底面での確認であり床面を中心とした改修が考えられた。床面及び堆積土中から絶対量は少ないが土師器、須恵器が出土している。破片となる石製模造品（鏡）や臼玉も出

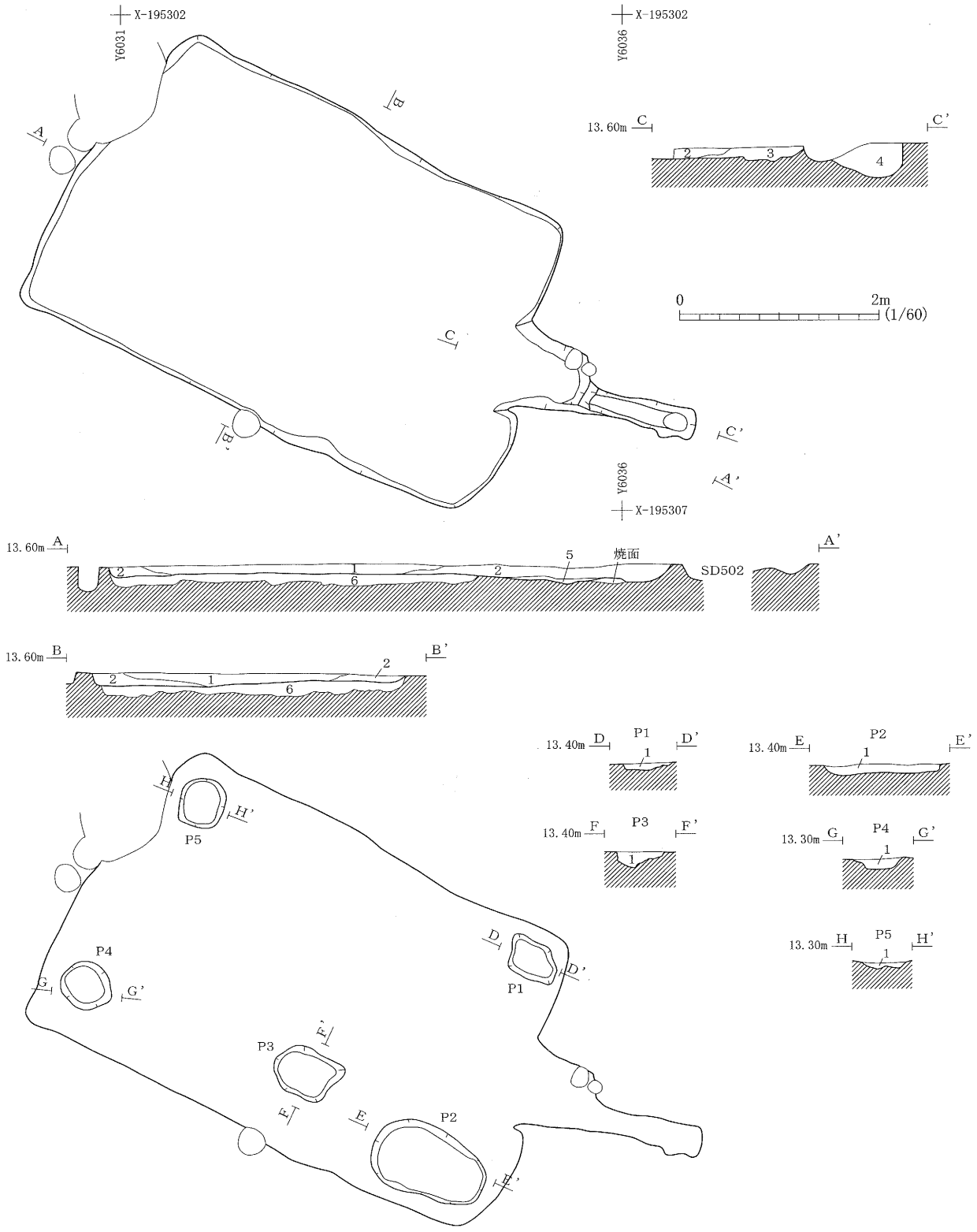


	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師器　甕	6層	外傾気味に立つ、外面はハケメ、内面はヘラナデ、底部に木葉痕、底径80mm	C65	
2	土師器　甕	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立つ、外面はヘラケズリ、内面は回転ヘラナデ、底径86mm	C64	
3	須恵器　台付坏	埋土	高台はハの字状、高台径81mm、高台高9mm、坏部底面に朱を確認、転用硯と判断される	E69	18-21
4	須恵器　坏	床面	外傾気味に立つ、回転ヘラ切り？、やや小振り、口径118mm、底径63mm、器高34mm	E68	18-22
5	須恵器　坏	床面	外傾気味に立つ、回転ヘラ切りで無調整、大型品、口径170mm、底径108mm、器高63mm	E70	18-23
6	須恵器　坏	埋土	やや内弯気味に立つ、回転ヘラ切りで無調整、口径(136)mm、底径(67)mm、器高47mm	E81	
7	石製模造品	埋土	石製模造品(鏡)、長さ（23）mm、幅(28)mm、厚さ3.5mm、径2mm程の孔が2ヶあり、粘板岩	K190	
8	石製模造品	埋土	石製模造品(鏡)、長さ（16）mm、幅(29)mm、厚さ3mm、径2mm程の孔を1ヶ確認、粘板岩	K195	
9	石製品　臼玉	埋土	径6mm、高さ4mm、中央に径1mmの孔、重さ2g、粘板岩？	K189	

第89図　SI502竪穴住居跡出土遺物

土している。

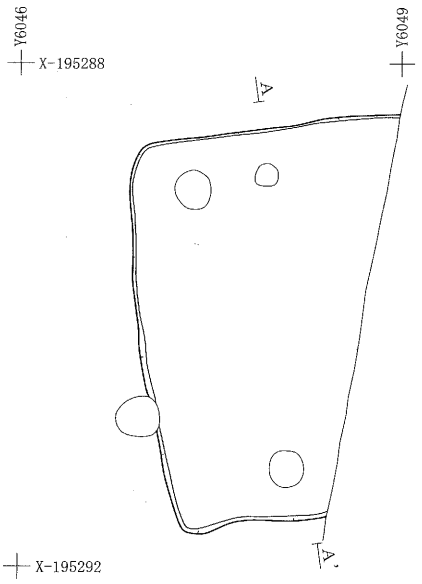
SI503竪穴住居跡　C・D－10区に位置する。SA501に切られている。調査区東壁側に位置しており全体形は不明となるが隅丸の方形と判断される。西辺方向はN－8°－Wである。大きさは南北長3.1m、最大東西長2.25mを測る。遺存が全体的に不良である。壁はやや開き気味の立ち上がりとなり、深さ9cm程の残存である。堆積土は1層のみの確認である。床面が平坦面とはなるが掘り方底面の可能性もある。柱穴・周溝等の施設は一切確認されない。ロ

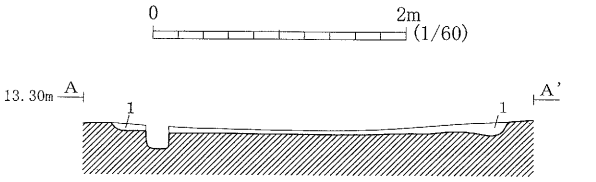


	層位	色調	性質	備考
SI502	1	褐色 10YR4/6	シルト	暗褐色土を斑に含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	褐色土・焼土粒を少量含む
	3	橙色 7.5YR6/8	シルト	粒状の焼土の層
	4	暗褐色 10YR3/4	シルト	黒色土を粒状に斑に含む
	5	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	6	褐色 10YR4/4	砂質シルト	貼床土

	層位	色調	性質	備考
P1	1	褐色 10YR4/4	シルト	焼土粒をまばらに含む
P2	1	褐色 10YR4/4	シルト	暗褐色土・焼土粒をまばらに含む
P3	1	褐色 10YR4/4	シルト	
P4	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物粒を含む
P5	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	

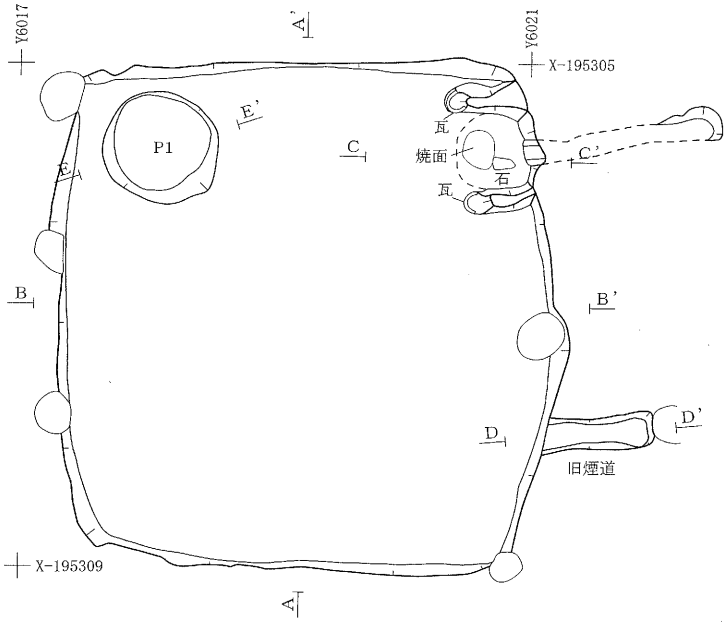
第90図　SI502竪穴住居跡

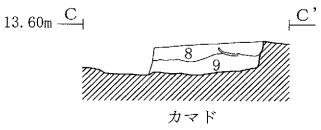


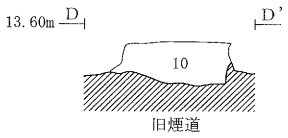


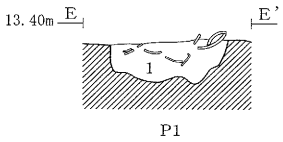
層位	色　調	性　質	備　考
1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	炭化物粒・黄褐色土を含む

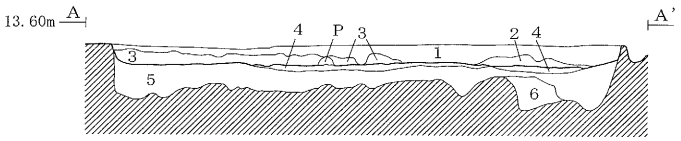
第91図　SI503竪穴住居跡

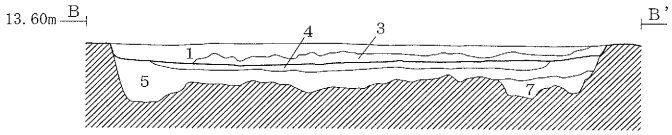








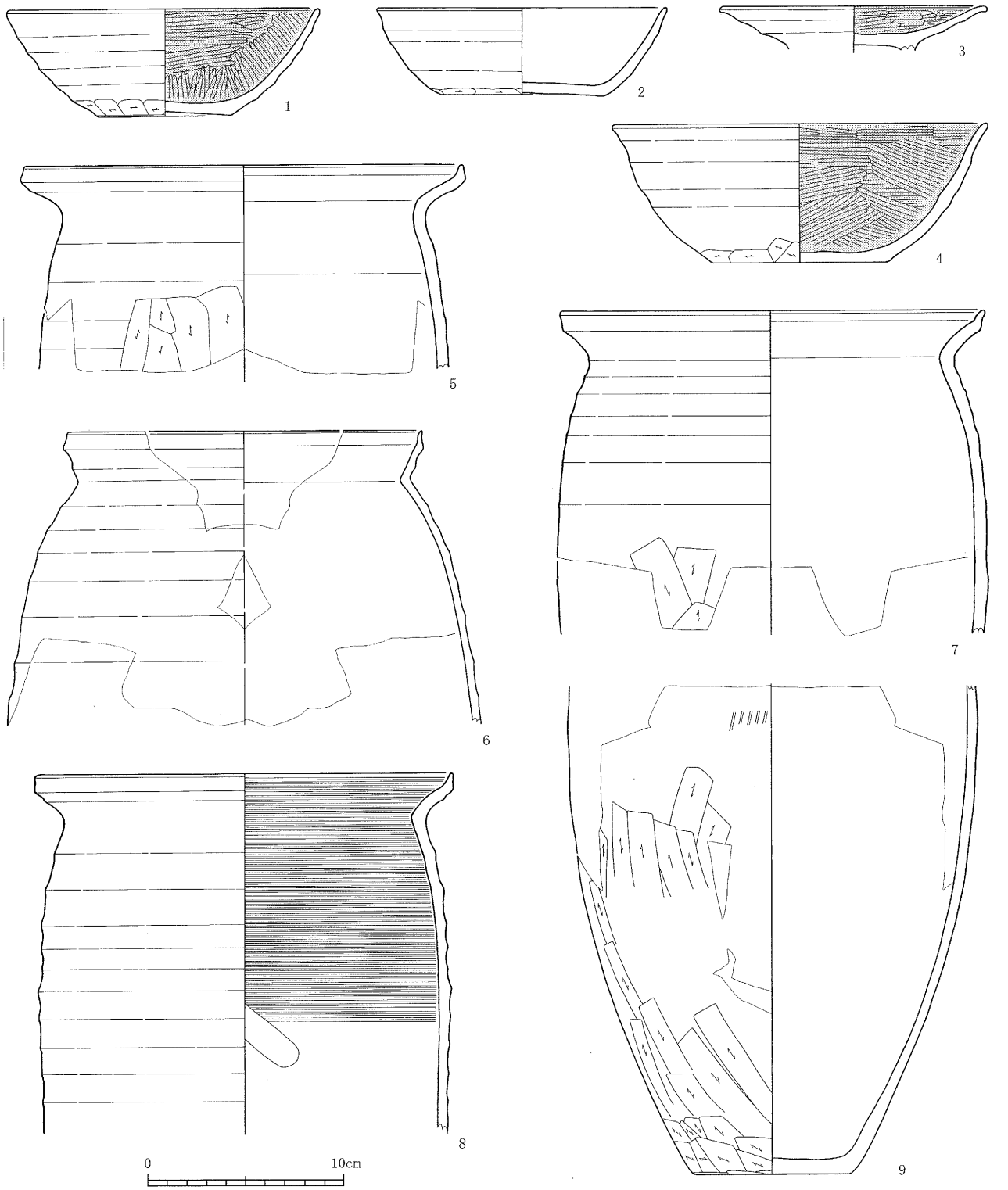




	層位	色　調	性　質	備　考
SI504	1	褐色 10YR4/4	シルト	
	2	暗褐色 10YR3/4	シルト	炭化物粒を少量含む
	3	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む
	4	灰黄褐色 10YR5/2	粘土質シルト	貼床
	5	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	掘り方埋土
	6	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	掘り方埋土

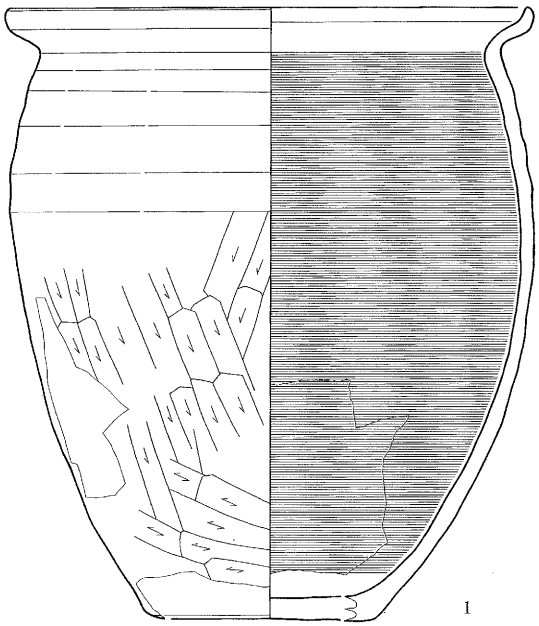
	層位	色　調	性　質	備　考
	7	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	掘り方埋土
カマド	8	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	焼土粒少量含む
	9	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒を多量に含む
旧煙道	10	暗褐色 10YR3/3	シルト	焼土粒・炭化物粒を斑に含む
P1	1	暗褐色 10YR4/3	粘土質シルト	

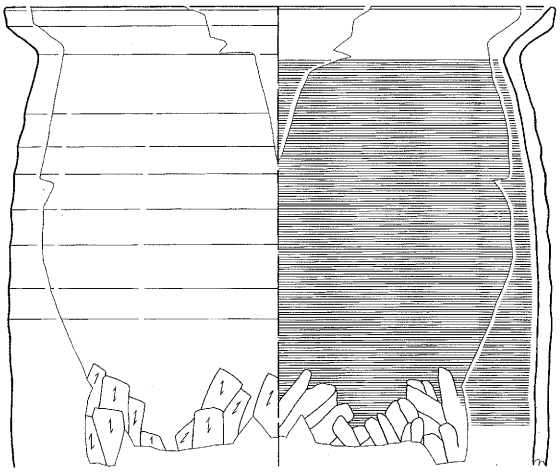
第92図　SI504竪穴住居跡

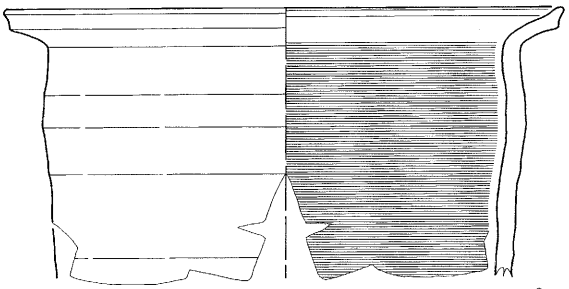


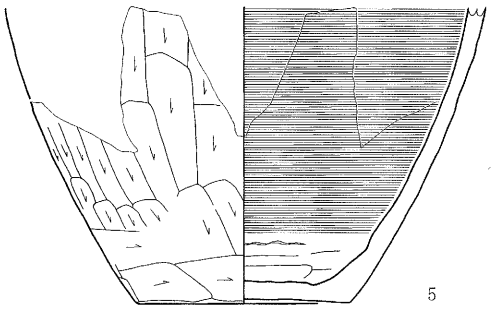
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土師器　坏	床面	内弯気味に立つ、回転糸切りで体部下端に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径156mm、底径68mm、器高55mm	C84	18-12
2	土師器　坏	床面	内弯気味に立つ、回転糸切りで体部下端に手持ちヘラケズリ、口径146mm、底径81mm、器高44mm,被熱	C85	18-13
3	土師器　台付皿	3層	高台部欠損、ゆるく外傾気味に立つ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径134mm	C78	18-14
4	土師器　坏	P1	内弯気味に立つ、体部下端から底部に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径190mm、底径88mm、器高70mm	C86	18-15
5	土師器　甕	カマド	口縁部はゆるく外反し口唇部は上方に三角形状に立つ、外面にヘラケズリ、口径222mm	C70	
6	土師器　甕	カマド	口縁部はきつく外傾気味に立ち口唇部も直線状、口径(178)mm	C80	
7	土師器　甕	床面	口縁部はゆるく外反し口唇部は上方に三角形状に立つ、外面にヘラケズリ、口径212mm	C71	
8	土師器　甕	P1	口縁部はきつく外反気味に立ち口唇部は三角形状に上方を向く、内面は回転ヘラナデ、口径(183)mm	C87	
9	土師器　甕	P1	外面は平行叩きの後にヘラケズリ、底径78mm	C72	

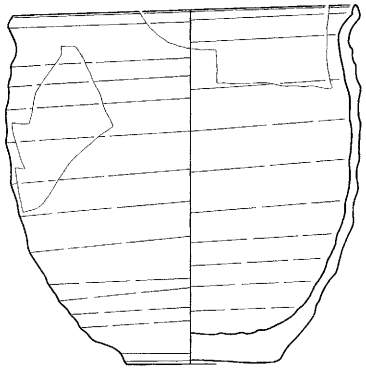
第93図　SI504住居跡出土遺物1

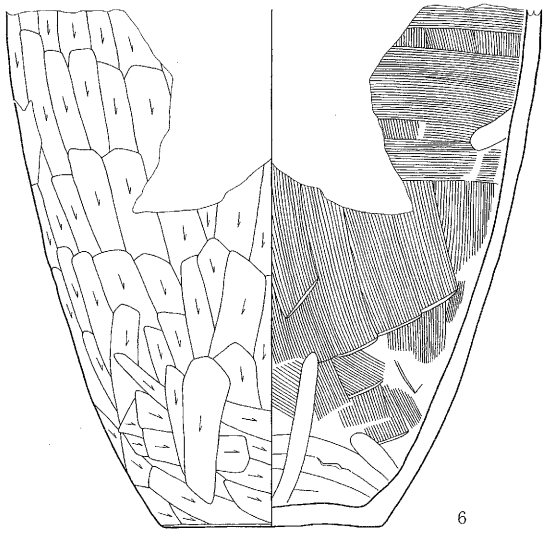


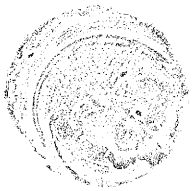


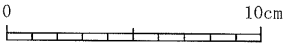






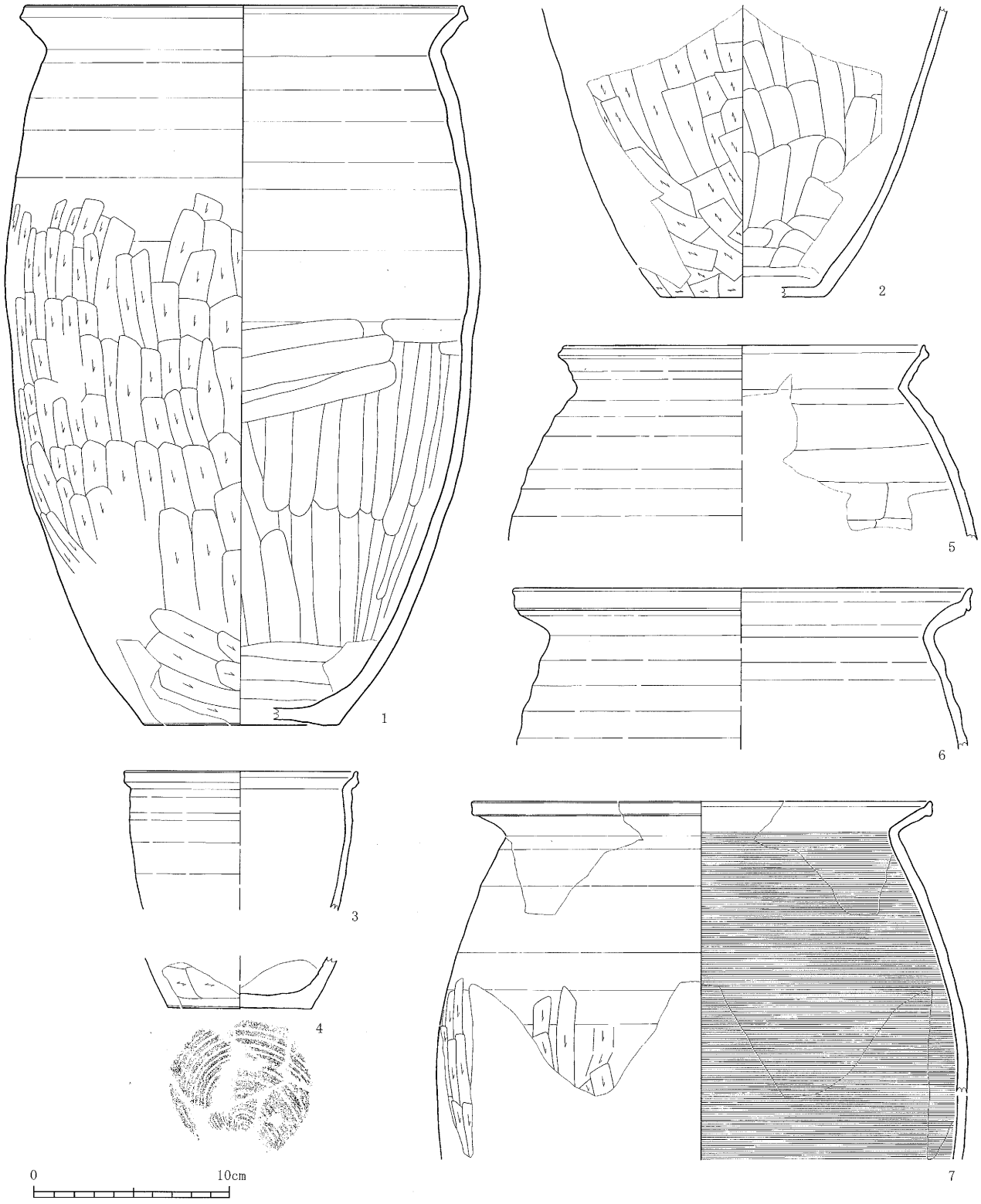






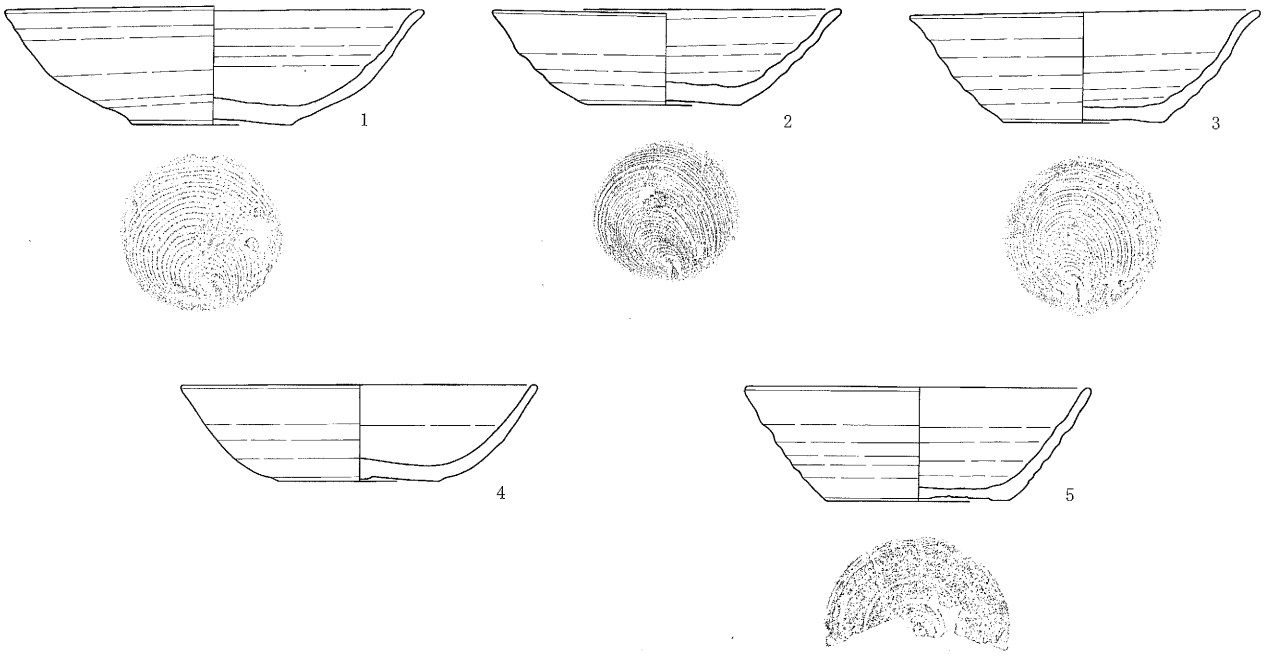
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師器　甕	3層	内弯気味に立ち口縁部は外傾し上方に立つ、外面はヘラケズリ、内面は回転ヘラナデ、口径206mm、底径86mm、器高245mm	C75	18-16
2	土師器　甕	3層	直立気味に立ち口縁部はきつく外傾し口唇部は三角形状に上方を向く、内面は回転ヘラナデ、口径（220）mm	C76	
3	土師器　甕	3層	やや内弯気味に立つ、口縁部は短く外反し口唇部はやや内傾し立つ、回転糸切り、口径138mm、底径62mm、器高140mm	C69	18-17
4	土師器　甕	3層	直立気味に立ち口縁部はきつく外傾し口唇部は上方に立つ、外面はヘラケズリ、内面は回転ヘラナデ・ナデ、口径(215)mm、底径(118)mm	C77	
5	土師器　甕	3層	外面はヘラケズリ、内面は回転ヘラナデ・ナデ、底径(118)mm	C67	
6	土師器　甕	3層	外面は全面にヘラケズリ、内面は全面にヘラナデ、底面はナデ、底径86mm	C74	

第94図　SI504住居跡出土遺物２



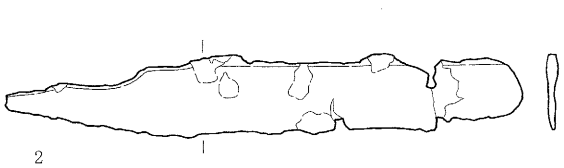
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土師器　甕	3層	内弯気味に立ち口縁部は外傾し口唇部はやや内傾し立つ、外面はヘラケズリ、内面はナデ、口径220mm、底径100mm、器高369mm	C73	18-18
2	土師器　甕	3層	外面はヘラケズリ、内面はナデ、底径84mm	C68	
3	土師器　甕	埋土	小型、直立気味に立ち口縁部は短く外傾し口唇部は三角形状に上方に立つ、口径(120)mm	C81	
4	土師器　甕	埋土	外面はヘラケズリ、内面摩滅、回転糸切り、底径74mm	C79	
5	土師器　甕	床面下	内弯気味に立ち口縁部は外傾し口唇部はやや内傾し立つ、口径(188)mm	C83	
6	土師器　甕	床面下	内傾気味に立ち口縁部は外傾し端部は周縁帯状となる、口径(234)mm	C82	
7	土師器　甕	床面下	内弯気味に立ち口縁部は外傾し口唇部はやや丸みをもつ、外面はヘラケズリ、内面は回転ヘラナデ、口径235mm	C66	

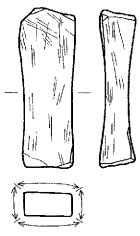
第95図　SI504住居跡出土遺物３



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	須恵器　坏	P1	内弯気味に立つ、底部は回転糸切りで無調整、口径164mm、底径64mm、器高47mm	E80	18-24
2	須恵器　坏	3層	やや外傾気味に立つ、底部は回転糸切りで無調整、口径138mm、底径60mm、器高36mm	E78	18-25
3	須恵器　坏	床面下	内弯気味に立つ、底部は回転糸切りで無調整、底部に墨書あり、口径140mm、底径64mm、器高43mm	E76	19-1
4	須恵器　坏	掘り方	内弯気味に立つ、底部は回転ヘラ切りで無調整、口径140mm、底径63mm、器高38mm	E74	
5	須恵器　坏	掘り方	外傾気味に立つ、底部は回転ヘラ切りで無調整、口径136mm、底径72mm、器高45mm	E75	
6	須恵器　甕	カマド	外面は平行叩き、内面は剥落で不明、体部最大幅412mm、被熱？	E79	

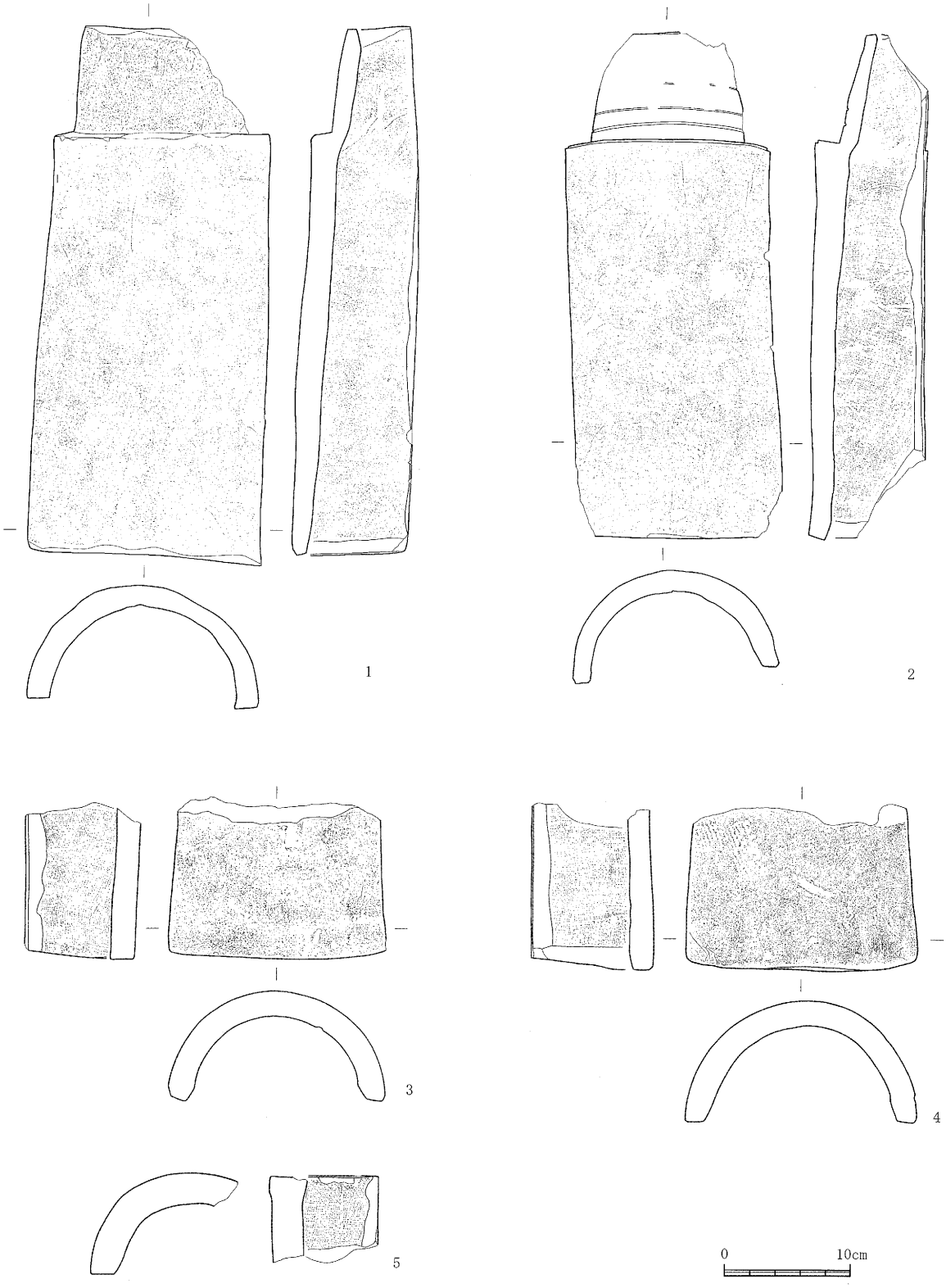
第96図　SI504住居跡出土遺物４





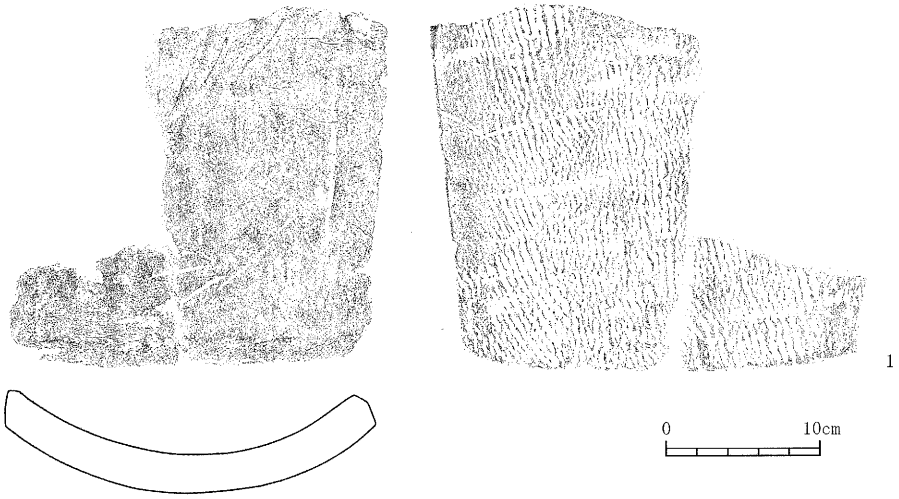
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	須恵器　甕	3層	丸底、外面は平行叩き、内面はハケメ状のナデでオサエは確認されない、残存高485mm、体部最大幅493mm	E77	
2	小刀	床面	刀身は平棟平造り？、長さ204mm、幅30mm、厚さ2～5mm	N228	19-11
3	鉄製品	埋土	錆のため形状不明、両端部折れ曲がる、長さ101mm、中央部幅27mm、厚さ5mm前後	N227	19-12
4	砥石	床面下	平面は長方形、砥面は4面、長さ63mm、幅22mm、厚さ9mm、重さ26g、凝灰岩	K191	

第97図　SI504住居跡出土遺物５



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	古代瓦　丸瓦	P1	玉縁付、凸面:縄叩き・ロクロナデ、凹面:粘土紐痕・布目痕、端部にヘラケズリ、長さ425mm、玉縁長83mm、広端部幅187mm、厚さ14～20mm	F33	19-4
2	古代瓦　丸瓦	P1	玉縁付、凸面:縄叩き・ロクロナデ、凹面:粘土紐痕・布目痕、端部にヘラケズリ、長さ409mm、玉縁長87mm、広端部幅164mm、厚さ15～19mm	F34	19-3
3	古代瓦　丸瓦	カマド北袖	凸面：縄叩き・ロクロナデ、凹面：粘土紐痕・布目痕、端部にヘラケズリ、広端部幅173mm、厚さ20mm	F31	
4	古代瓦　丸瓦	カマド南袖	凸面：縄叩き・ロクロナデ、凹面：粘土紐痕・布目痕、端部にヘラケズリ、広端部幅183mm、厚さ20～22mm	F32	
5	古代瓦　丸瓦	埋土	凸面：縄叩き・ロクロナデ、凹面：粘土紐痕・布目痕、端部にヘラケズリ、厚さ25mm	F29	

第98図　SI504住居跡出土遺物６



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	古代瓦　平瓦	埋土	一枚作り、凸面：縄叩き（縦位）、凹面：布目痕・ナデ、端部にヘラケズリ、狭端部幅238mm、厚さ25～27mm	F30	

第99図　SI504住居跡出土遺物７

クロ使用の土師器片が出土している。

SI504竪穴住居跡　G－４・５区に位置する。SK512に切られている。平面形は隅丸の方形である。西辺方向はN－1°－Wとほぼ真北である。大きさは南北長4.03m、東西長3.86mを測る。壁はきつく立ち上がり、深さ16cm程の残存である。堆積土はカマド部も含めて10層確認した。堆積土状況から自然堆積と判断される。床面はほぼ全域貼床となり平坦面である。灰黄褐色の粘土質土で固く締められていた。厚さは最大で６cm程である。柱穴・周溝は確認されない。東辺北側と南側でカマドを２基、北西隅側でやや大型のピットを確認している。南側のカマドは煙道部のみの残存で新旧２時期が判断された。新のカマドは燃焼部袖先に丸瓦を使用している。燃焼部内法は奥行き65cm、幅59cmを測る。底面は硬化面には至らないが炭化物及び焼面が広がる。煙道は天井部が残っておりトンネルとなっていた。長さ1.41m、上端幅16cm程を測る。旧のカマドの煙道は長さ83cm、上端幅25cm、深さ35cmを測る。ピットは径90cm程の円形である。大量となる土器類が出土しているが、床面確認時には土器類や瓦が先に検出されており住居廃絶時に廃棄穴として使用された可能性も考えられる。掘り方は深めで壁下部に方形周溝状に巡っており強い凹凸面として確認される。

(5)　小結

掘立柱建物跡　７棟の確認である。東西棟の建物跡５棟、南北棟の建物跡２棟となる。柱間は１×３間のものが４棟、１×２間が１棟、１×２間以上が２棟である。建物跡間の重複もなく散在した配置状況がみられる。建物跡方向は大きく同方向と判断され一連のものと思われる。同時期での存在は不明であるが配置の規格性が窺われる。中央調査区でも確認されているが当調査区の建物跡はすべて梁間一間型となる。中央調査区の建物跡と較べると桁行が最大で３間と全体的に小振りとはなるが、梁行は最小でも3.28mを測り大きな差はない。出土遺物が殆どなく時期不明となるが、柱列跡や井戸跡から大窯期の陶器が出土しており関連遺構と判断するならば、大きく戦国期のものと判断され、中央調査区の3b期に該当すると思われる。

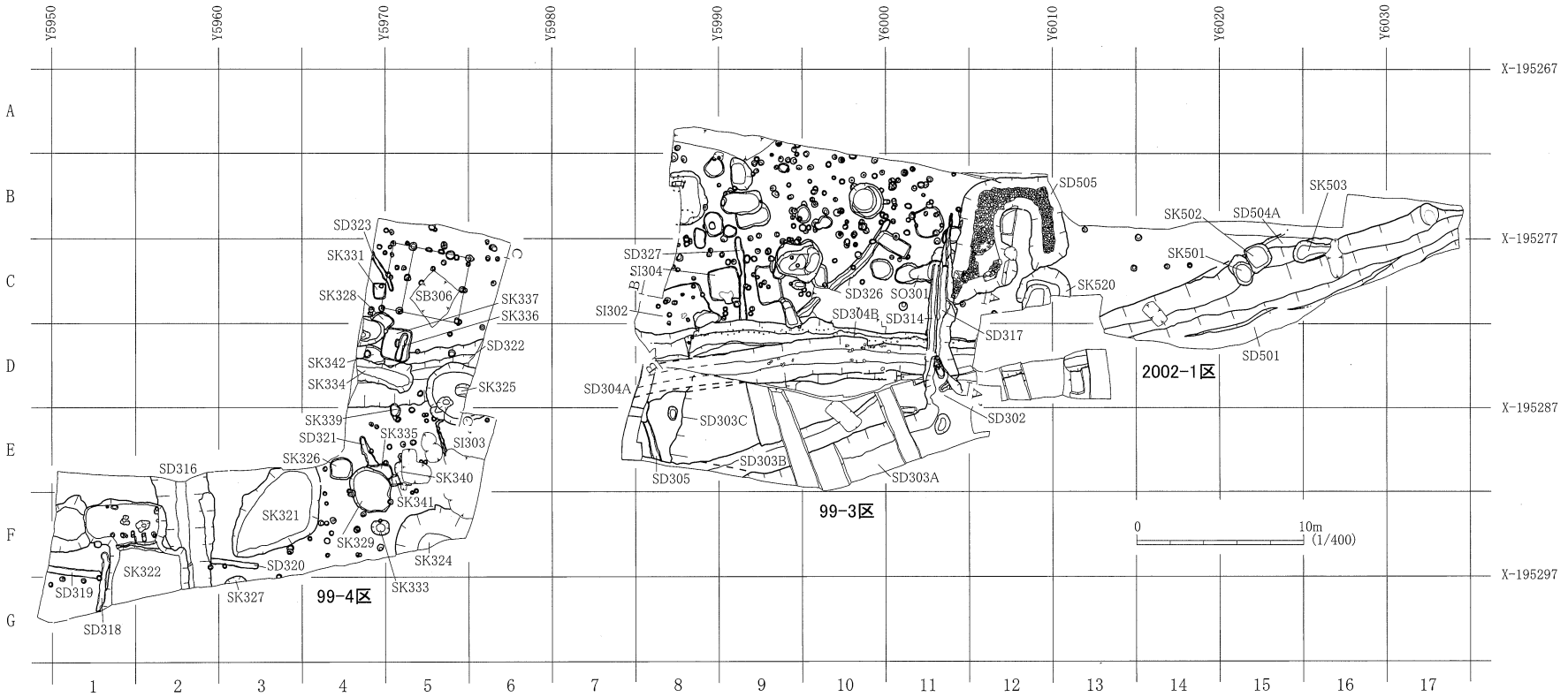
柱列跡　４条の確認である。柱穴が一直線に並びほぼ同間隔のものに限定している。建物跡の脇に位置しており塀跡等のものと考えた。建物跡と一連の遺構と判断している。SA302－P400からは天目茶碗、SA501－P30からは永楽通宝が出土している。

土坑　29基の確認である。平面形が円形・長円形となるものが多い。出土遺物が全体的に少なく、性格・時期が不明となるものが多い。SK301・302・505・506は井戸跡と判断した。４基の井戸跡は近接しており、さらに建物跡

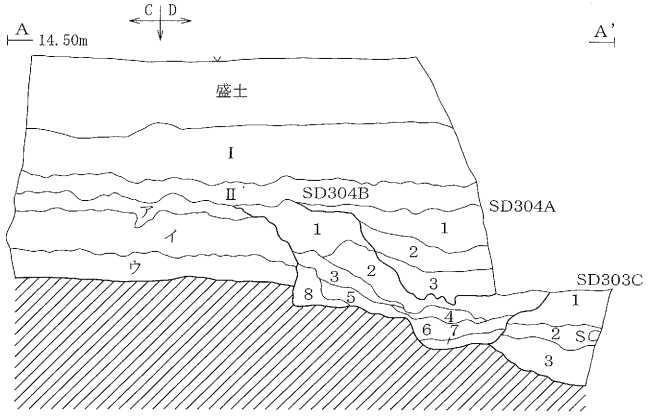
群に囲まれる配置が確認される。出土遺物から大きく戦国期（3b期）のものと判断した。SK320は長円形を呈する長軸４ｍ以上を測る大型のものである。形状から土倉と判断したが、最終的には廃棄穴となっている。SK513・514も廃棄穴と判断され、特にこの３遺構からは製鉄・鋳造に関わる遺物が大量に出土している。時期は大きく中世（３期）としておきたい。SK317・510は平面形が長方形のもので人為堆積と判断したものである。中央調査区で土坑墓と判断したものに類するが、墓跡の可能性は否定できないが、ほぼ単体で存在しており性格は不明となる。土坑類は大きく中世に属するものと判断される。

溝跡　11条の確認である。SD306・307・308及びSD503は小溝と称される一群となるが、前者は性格・時期とも不明である。後者はSK513に切られ、性格は不明であるが時期は戦国期以前となる。SD315・502はやや形状に違いがみられるが南北方向に直線的に延びる溝跡でほぼ同方向を向く。中央調査区でも同様のものがあり区画溝とした一連の溝跡である。２条の溝跡の間隔は37m程で、一連の溝跡と考えた中央調査区のSD207とSD301の間隔は74m程を測る。時期は出土遺物等から判断し大きく戦国期（3b期頃）としたい。SD301は南辺の部分的な確認に留まり、西隣の2002－２区では同様の遺構は確認されないことから、西側部はつよい屈曲となり北側へ貫けているものと考えられる。堀跡ないし河川跡となるものか不明である。時期は中世頃と思われる。SD401は部分的な確認に留まるが、江戸期の七郷堀と判断される。北辺が未確認となるが下端から推定すると上端幅は８ｍ程となる。各種の遺物とともに高級品とされる陶器類が出土している。廃棄品とはなるが、若林城・城下という位置関係を含め特徴的である。SD404はSD401南辺に取り付く溝跡で、排水用の樋遺構と思われる。なお、仙台藩が作製した絵図をみると「奥州仙台城并城下絵図」（天和２年:1682）や「仙台城下五釐掛絵図」（推定 元禄４・５年:1691・1692）に保春院と書かれた文字下に二又に別れ北側と東側へ流れる七郷堀が描かれている。「仙台城下絵図（その２）」（推定 天和２年:1682）では同様の絵図が描かれるが、下方の東側に流れる七郷堀が墨でぼかされている。SD401は上記したように埋め戻され機能停止となっている。絵図はこのことを表しているものと思われ、SD401は下方の東側に流れる七郷堀の一部分と判断されよう。４期に属する遺構である。

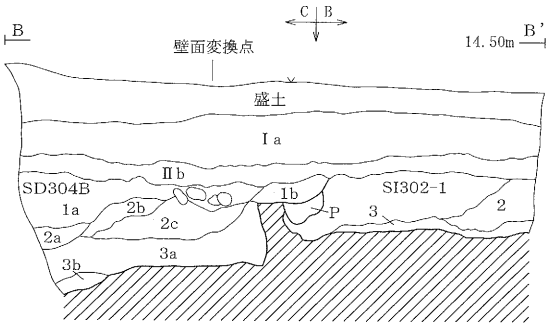
竪穴住居跡　５軒の確認である。出土した土師器坏類はすべてロクロ使用のもので平安時代、表杉ノ入式期となる。平面形は正方形に近いものが4軒、長方形となるものが１軒である。正方形の住居跡（SI301・501・502・503・504）は一辺が３～4.5m程と全体的に規模が小さい。長方形の住居跡（SI502）は長軸が５ｍ程を測るが短軸は３ｍ程となり同様に規模が小さい。柱穴及び貯蔵穴はすべてで確認されない。カマドは４軒で確認され、北辺に設置されるものが１軒（SI301）、東辺につくものが４軒（SI501・502・504）である。SI501出土の土師器坏は平底風の丸底となり、甕の中にはロクロ不使用のものが含まれる。SI502では土師器坏類が小片となり特徴が不明となるが甕にはロクロ不使用のものが含まれている。須恵器坏はすべて回転ヘラ切りである。これらから２軒の住居跡は9c代初頭頃と判断される。SI301・503は出土遺物が少なく不明な点が多いが9c代前半頃と判断したい。SI504は他の住居跡と較べ瓦類の出土が特徴的である。多量の遺物が出土しているが土師器坏は回転糸切りとなり、瓦類は多賀城跡、期に属するものと判断される。9c代後半以降のものと判断される。2b期と分類しておきたい。



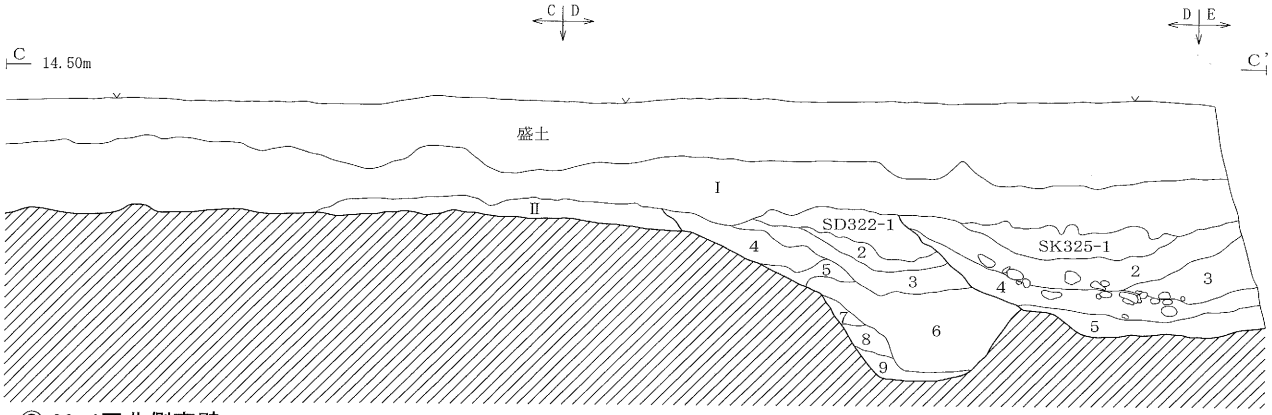
第100図　西側西調査区全体図



① 99-3区東壁



② 99-3区西壁



③ 99-4区北側東壁

	層位	色調	性質	備考
①	I	褐色 10YR4/6	シルト	旧耕作土
	II	褐色 10YR4/4	シルト	炭化物粒・黄褐色土粒を少量含む
	ア	褐色 10YR4/4	シルト	ア・イ・ウともSD504Bの堆積土の可
	イ	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	能性あり
	ウ	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	
SD304A	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	暗褐色土粒を斑に多く含む
	2	褐色 10YR4/4	シルト	黄褐色粒粒を斑に多く含む
	3	灰黄褐色 10YR6/2	砂質シルト	互層
		明黄褐色 10YR6/6	砂	
SD304B	1	褐色 10YR4/4	シルト	炭化物粒・暗褐色土粒を斑に含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	砂をブロックで含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	
	4	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂	
	5	にぶい黄橙色 10YR6/3	砂質シルト	
	6	明黄褐色 10YR6/6	砂	小礫を含む
	7	にぶい黄橙色 10YR6/3	砂質シルト	砂を層的にうすく含む
	8	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	にぶい黄橙色土を斑に含む
SD303C	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	砂を層的に含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	砂を層的に含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	互層状
		黄褐色 10YR5/6	砂	
②	I	褐色 10YR4/4	シルト	旧耕作土
SD304B	II	褐色 10YR4/4	シルト	旧耕作土
	1a	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	暗褐色土を斑に含む混成層
	1b	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	
	2a	褐色 10YR4/4	シルト	砂を含む

	層位	色調	性質	備考
	2b	褐色 10YR4/4	シルト	
	2c	褐色 10YR4/4	シルト	
	3a	黄褐色 10YR5/6	シルト	砂をスジ状に含む
	3b	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	
SI302	1	褐色 10YR4/4	シルト	
	2	明黄褐色 10YR7/6	シルト	
	3	褐色 10YR4/4	シルト	互層状
		褐灰色 10YR4/1	シルト	
③	I	褐色 10YR4/6	シルト	旧耕作土
	II	暗褐色 10YR3/4	シルト	
SK325	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物粒をまばらに含む
	2	褐色 10YR4/6	シルト	礫・炭化物を層的に含む
	3	褐灰色 10YR4/1	シルト	礫・炭化物を層的に含む
	4	暗褐色 10YR3/4	シルト	礫を多量に含む
	5	暗褐色 10YR3/4	シルト	褐色土をまばらに含む
SD322	1	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト	混成層
		黄褐色 10YR5/8	砂質シルト	
	2	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	暗褐色土を含む
	3	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	
	4	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト	炭化物粒・黄褐色土粒をまばらに含む
	5	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	
	6	黄褐色 10YR5/6	砂	褐灰色土を層的に含む
	7	黄褐色 10YR5/8	砂	互層状
		褐灰色 10YR5/1	砂	
	8	黄褐色 10YR5/8	砂	
	9	褐灰色 10YR5/1	砂質シルト	

第101図　西側西調査区壁断面

3．西側西調査区

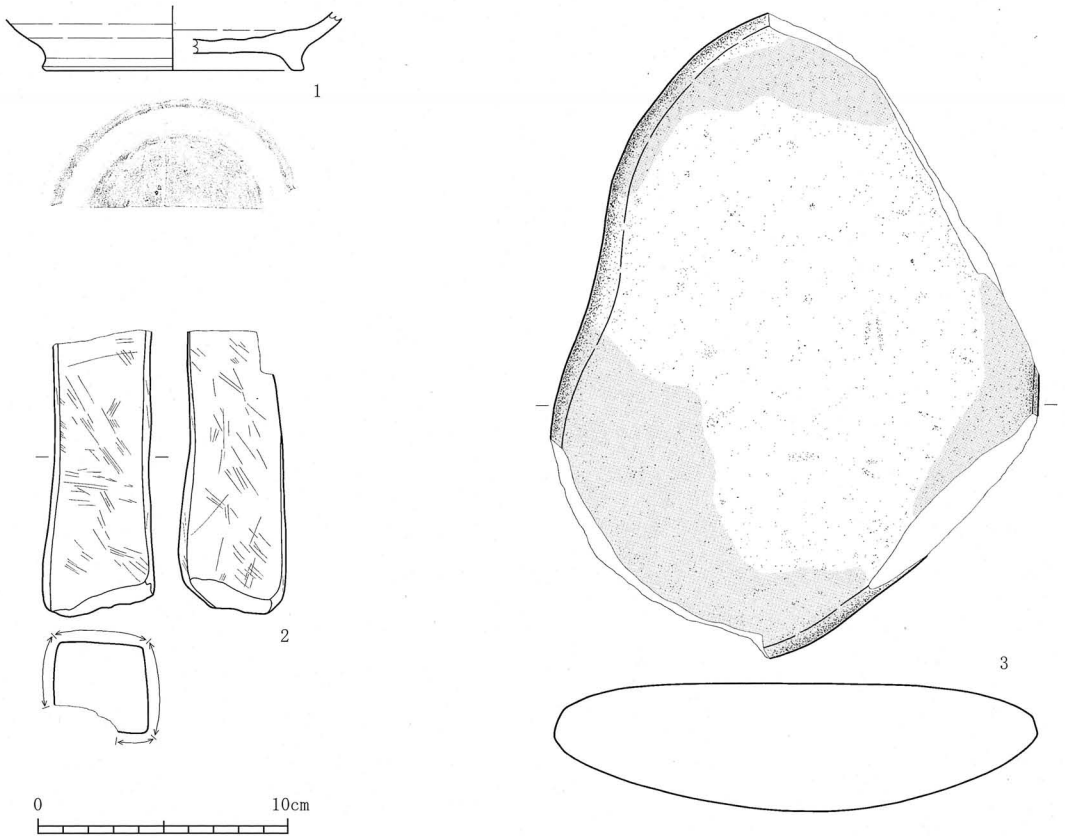
99年３区、2002年１区、99年４区からなる。七郷堀の北側に位置し、保春院前遺跡の範囲内となる。発見遺構には建物跡、土坑、溝跡、石敷遺構、窯跡、竪穴跡がある。仙台城下南端の街割り内に位置し、他の３地点の調査区に較べ近世の遺構・遺物が突出している。調査面積は約837㎡（99－３区405㎡、2002－１区153㎡、99－４区279㎡）である。

(1) 99－３区の調査

検出遺構は柱穴・ピット多数、土坑26基、溝跡11条、窯跡１基、竪穴跡２軒である。

１）柱穴・ピット

東西に延びる溝跡の北側で大小のピット類を数多く確認している。柱穴と判断されるものもあるが土坑を初めとする遺構が密集しており、建物跡や塀跡とする積極的なものもなく不定となる。縄文土器、弥生土器、中世陶器、磁器等が出土している。



	地点・層位	種　別	特　　徴	登録	写真
1	P523　埋土	須恵器高台付坏	上部欠損、高台部は付高台、切り離しは回転ヘラ切り、坏部底面が磨られており再利用の可能性あり、高台径(104)mm	E9	
2	P631　埋土	砥石	平面は長方形、下部は切断面で上部は欠損、断面正方形、４面の砥面確認、残存長113mm、幅44mm、厚さ37mm、凝灰岩	K84	
3	P580　埋土	礫	扁平な自然礫、上面の平坦面に煤がうすく付着、長さ256mm、幅192mm、厚さ50mm、安山岩	K83	

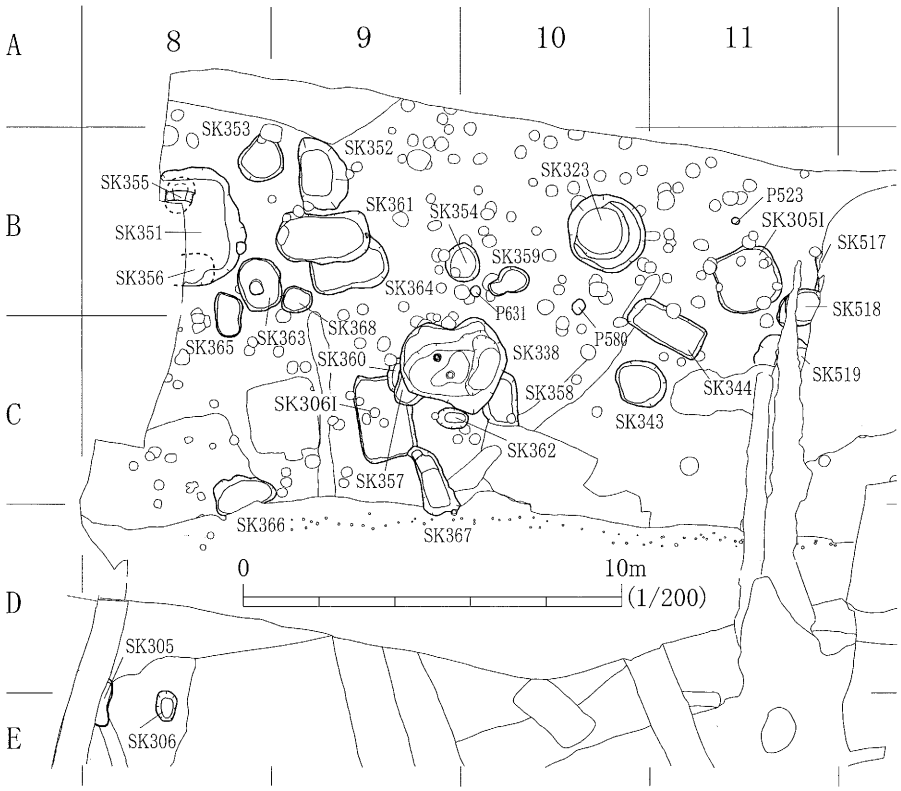
第102図　99－3区柱穴・ピット出土遺物

２）土坑

SK305土坑　D・E－８区に位置する。平面形は方形と判断される。南北軸127cm、東西軸34cmまで確認、深さ12cm程を測る。底面はほぼ平坦で断面形は矩形と判断される。堆積土は１層確認した。出土遺物はない。

SK306土坑　E－８区に位置する。平面形は長円形である。長軸は南北方向で80cm、短軸52cm、深さ22cm程を測る。底面は平坦で断面形は逆台形である。堆積土は１層確認した。出土遺物はない。

SK323土坑　B－10区に位置する。平面形は円形である。南北軸206cm、東西軸203cm、深さ最大58cmを測る。底



第103図　99－3区・2002－1区西側土坑

面はゆるい凹凸面がみられるがほぼ平坦である。壁はややきつく立ち上がり壁中央に段が巡る。断面形は段がみられるが大きく逆台形である。土器片が出土している。

SK338土坑　C－9・10区に位置する。SK357・358・360を切る。平面形は円形と方形がまじりあった不整形となる。東西軸283cm、南北軸最大で252cm、深さ最大54cmを測る。断面形は各ラインで違いがみられ方形を基調とする不定形となる。堆積土は3層確認された。1・2層から鋳型片が多量に出土し、他には縄文土器、土師器、須恵器、石器、古代瓦、瓦質土器がある。遺物の出土状況から廃棄穴と判断される。

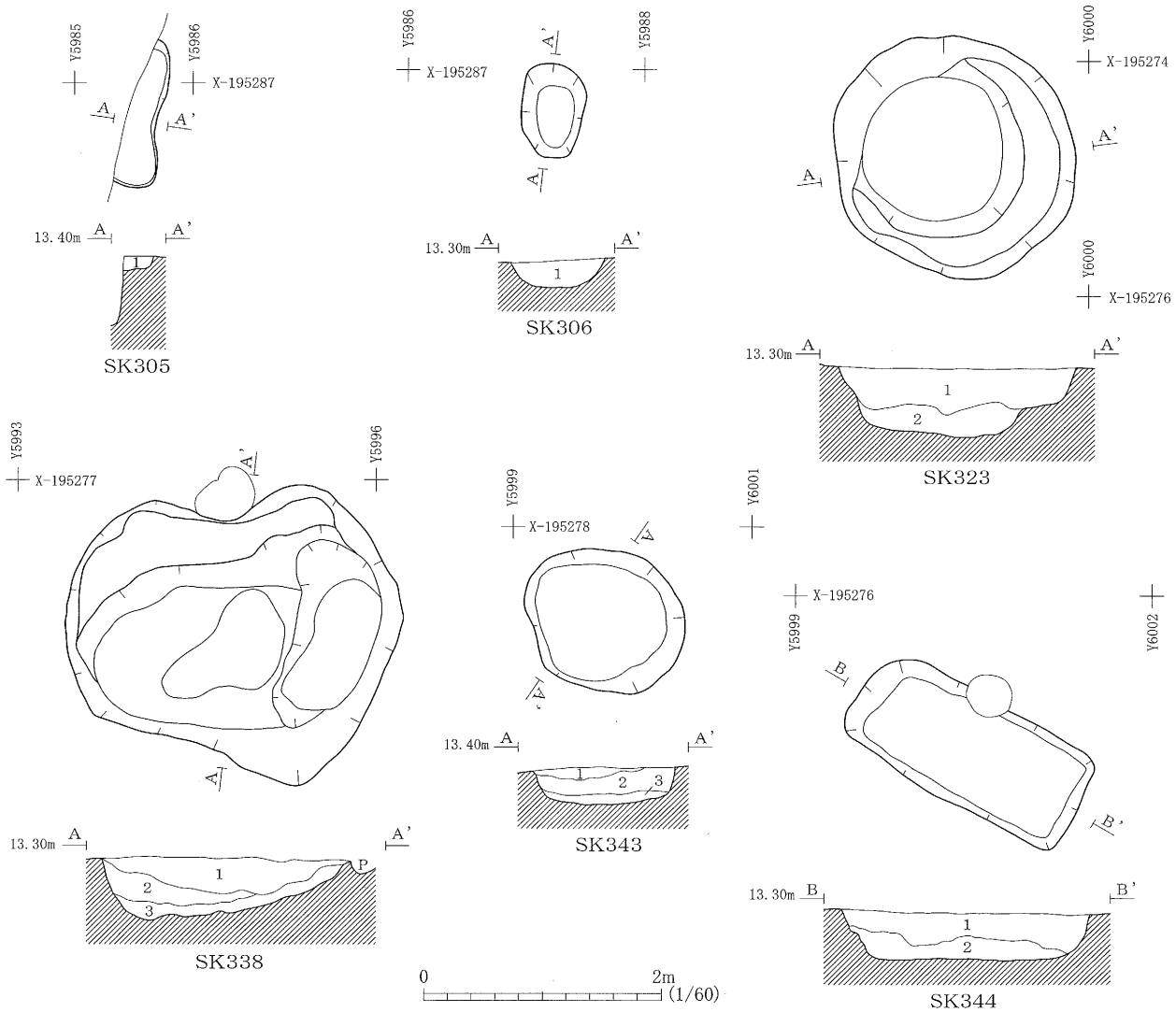
SK343土坑　C－10・11区に位置する。平面形は不整な円形である。南北軸120cm、東西軸131cm、深さ36cm程を測る。底面がやや丸みをもつが断面形は大きく矩形である。堆積土は3層確認した。堆積土状況から判断して人為堆積の可能性がある。土師器が出土している。

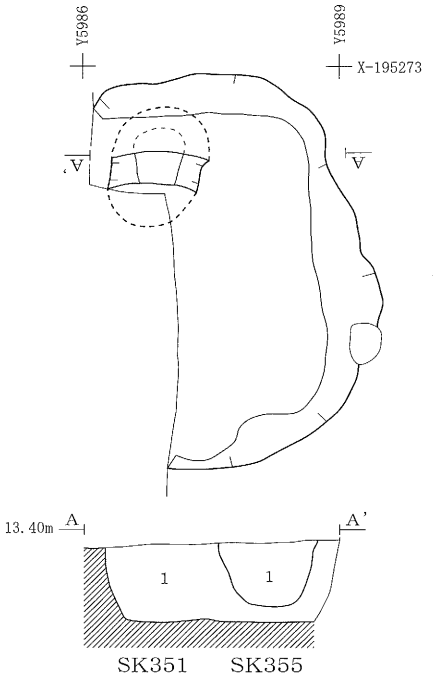
SK344土坑　B・C－10・11区に位置する。SD326を切る。平面形は長方形である。長軸は東西方向で209cm、短軸90cm、深さ38cmを測る。底面はほぼ平坦である。断面形はややゆるい逆台形である。堆積土は2層確認した。状況から人為堆積と判断される。土師器、須恵器、古代瓦、瓦質土器が出土している。

SK351土坑　B－8区に位置する。SK355・356に切られる。調査区西壁に位置するが平面形は長方形と判断される。長軸は南北方向で3.13m、短軸最大184cm、深さ64cm程を測る。底面は平坦である。断面形は矩形となる。堆積土は1層の確認である。人為堆積とも判断されるが不明である。土師器、須恵器が出土している。

SK352土坑　B－9区に位置する。平面形は不整な方形である。長軸は南北方向で186cm、短軸125cm、深さ82cmを測る。底面はほぼ平坦である。断面形は段が巡り屈曲部もあるが大きく逆台形と判断される。堆積土は4層確認した。石器、土師器、須恵器、陶器が出土している。

SK353土坑　B－8・9区に位置する。平面形は不整な円形である。南北軸125cm、東西軸115cm、深さ最大23cmを測る。底面はゆるい凹凸面となる。断面形は不整な皿形である。堆積土は3層確認した。縄文土器、土師器が出





	層位	色調		性質	備考
SK305	1	褐色	10YR4/6	シルト	黄褐色土粒を斑に含む
SK306	1	褐色	10YR4/6	シルト	黄褐色土ブロック・小礫を含む
SK323	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	黒褐色土を斑に含む
	2	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	
SK338	1	暗褐色	7.5YR3/3	粘土質シルト	鋳型片を含む
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	鋳型片を含む
	3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	
SK343	1	褐色	10YR4/4	砂質シルト	焼土、炭化物粒をまばらに含む
	2	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	斑の層
		明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	
	3	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	斑の層
		明黄褐色	10YR6/8	粘土質シルト	
SK344	1	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	斑の層
		黄褐色	10YR5/6	シルト	
	2	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	暗褐色土粒を含む
SK351	1	暗褐色	10YR3/4	シルト	
SK355	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	

第104図　99－3区土坑1

土している。

SK354土坑　B－9・10区に位置する。平面形は円形である。南北軸102cm、東西軸92cm、深さ15cm程を測る。底面はほぼ平坦である。断面形は皿形となる。堆積土は1層の確認である。土師器、須恵器が出土している。

SK355土坑　B－8区に位置する。SK351堆積土内に位置し削平のため平面形は不明である。残存上端幅77cm、下端幅35cm程、深さ51cmを測る。断面形はやや丸みをもつ逆台形である。堆積土は1層確認した。土師器、須恵器が出土している。

SK356土坑　B－8区に位置する。SK351南側に位置し切っている。掘り上げてしまい壁断面での確認である。残存上端幅90cm、下端幅55cm、深さ54cmを測る。断面形は矩形形である。堆積土は1層確認した。黒褐色のシルト質土である。

SK357土坑　C－9区に位置する。SK338に切られSK360・306Iを切る。平面形は不整な方形と判断される。南北軸残存長47cm、最大東西幅90cm、深さ31cm程を測る。底面はやや凹凸面となる。断面形はやや不整な逆台形である。堆積土は1層確認した。人為堆積と判断された。縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器が出土している。

SK358土坑　C－10区に位置する。SK338に切られSD326を切る。平面形は方形と判断される。南北軸残存長146cm、東西軸長92cm、深さ39cmを測る。底面はやや東側に傾斜をみるがほぼ平坦である。断面形は逆台形である。堆積土は1層確認した。人為堆積と判断した。土師器、須恵器が出土している。

SK359土坑　B－10区に位置する。平面形は不整な長円形を呈し瓢箪形となっている。南北軸108cm、短軸最大で74cm、深さ最大9cmを測る。底面は凹凸面となる。断面形は不整な皿形である。堆積土は1層確認した。焼土粒が多量に含まれている。

SK360土坑　C－9区に位置する。SK338・357に切られSK306Iを切る。平面形は方形である。南北軸90cm、東西軸82cm、深さ59cmを測る。底面は平坦である。断面形は矩形となる。堆積土は1層確認した。人為堆積と判断される。土師器、須恵器が出土している。

SK361土坑　B－9区に位置する。SK364を切る。平面形は長円形である。長軸は南北方向で246cm、短軸129cm、深さ31cmを測る。底面はやや丸みをもち、断面形は皿形となる。堆積土は2層確認した。縄文土器、土師器、須恵器、古代瓦、鋳型が出土している。

SK362土坑　C－9区に位置する。平面形は長円形である。東西軸81cm、南北軸54cm、深さ27cmを測る。底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形状である。堆積土は1層確認した。人為堆積の可能性もあるが不明である。出土遺物はない。

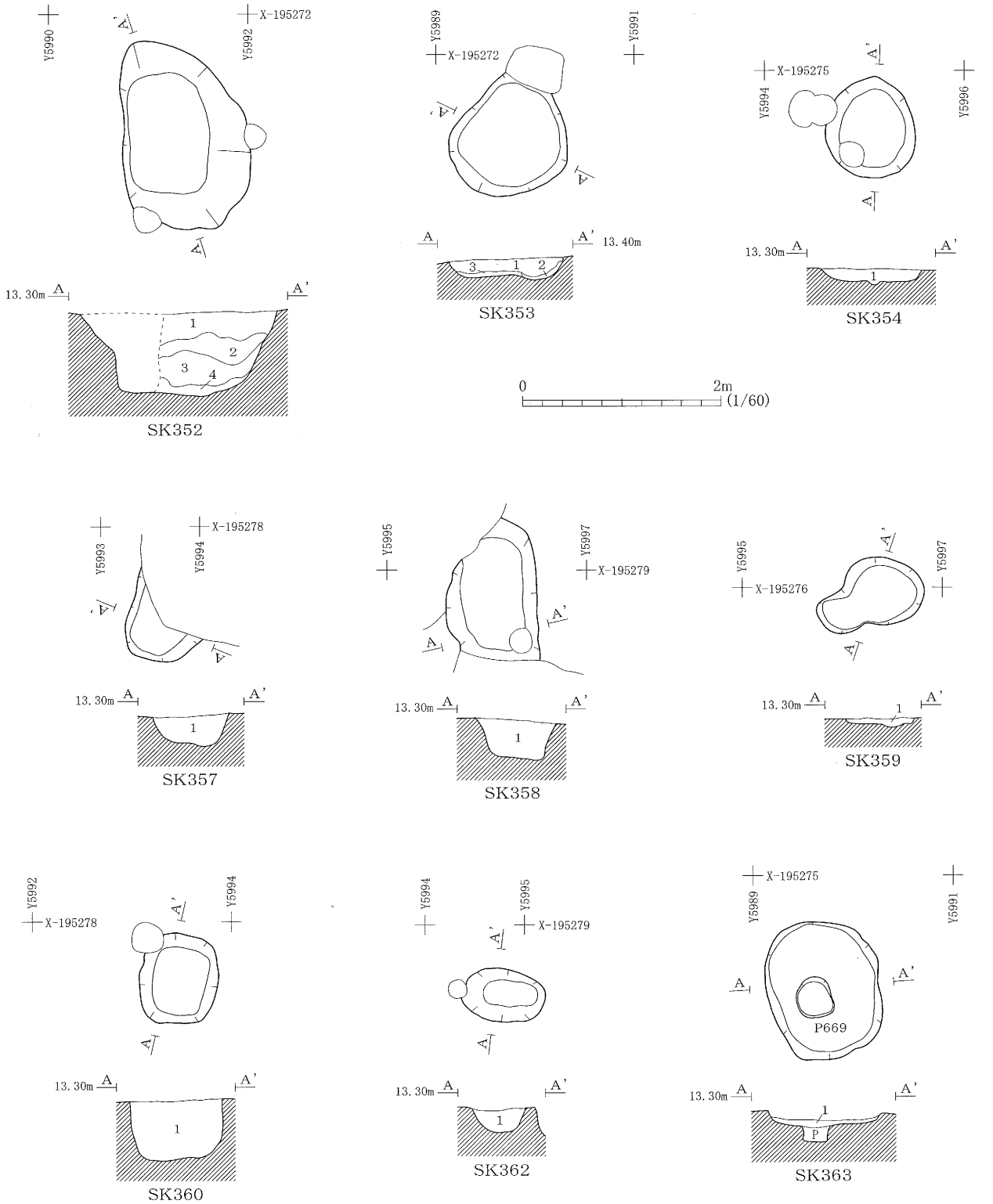
SK363土坑　B－8・9区に位置する。平面形は長円形である。南北軸141cm、東西軸114cm、深さ15cm程を測る。底面はゆるく丸みをもち断面形は皿形となる。堆積土は1層確認した。底面でピット（P669）を確認している。土師器、須恵器、陶器が出土している。

SK364土坑　B－9区に位置する。SK361に切られる。平面形はやや不整な方形である。東西軸206cm、南北軸最大で120cm、深さ35cm程を測る。底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形状である。堆積土は2層確認した。土師器、須恵器が出土している。

SK365土坑　B・C－8区に位置する。平面形はやや不整な方形である。南北軸115cm程、東西軸66cm、深さ15cm程を測る。底面は平坦でやや北側へ傾斜をみる。断面形は矩形である。土器片が出土している。

SK366土坑　C・D－8区に位置する。SD304Bに切られる。平面形は不整な長円形である。東西軸165cm、南北軸99cm程、深さ最大45cmを測る。底面は凹凸面となり断面形は不整な矩形となる。堆積土は6層確認した。焼土粒が多量に含まれている。

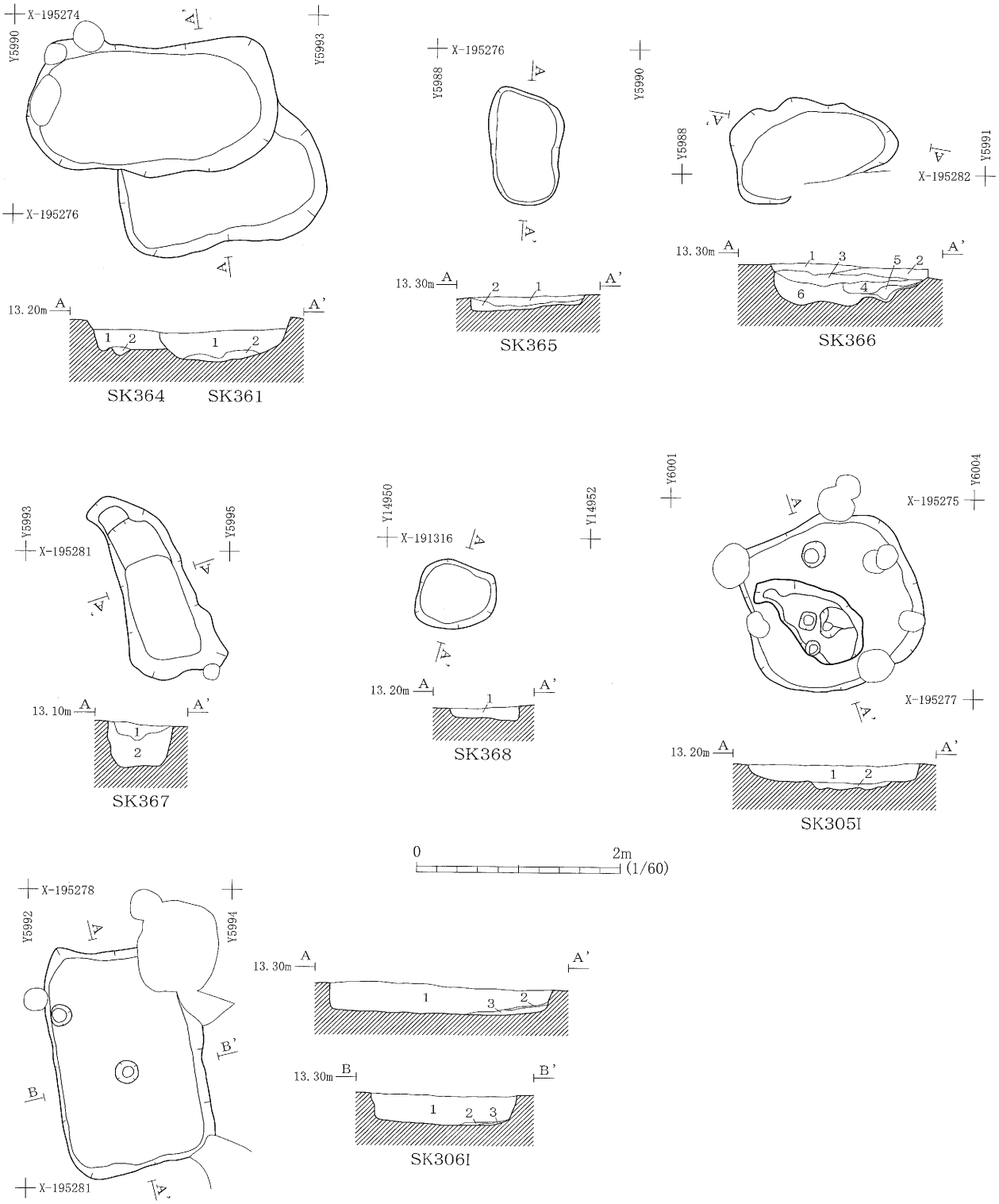
SK367土坑　C－9区に位置する。SK306Iを切りSD304Bに切られる。平面形は不整な長方形である。南北軸



	層位	色調		性質	備考
SK352	1	黒褐色	10YR3/2	シルト	にぶい黄褐色土・炭化物を含む
	2	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘土質シルト	暗褐色土を粒状に含む
	3	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	黒色土ブロックを含む
	4	褐灰色	10YR4/1	粘土	にぶい黄橙色のグライ土を含む
SK353	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	砂を斑に含む
	2	黒褐色	10YR2/2	粘土	砂をブロックで含む
	3	黄褐色	10YR5/6	粘土質砂	黒色土を粒状に含む
SK354	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	砂・焼土粒を含む

	層位	色調		性質	備考
SK357	1	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	人為堆積、にぶい黄橙色土を斑に含む
SK358	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	人為堆積、褐色土を斑に含む
SK359	1	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	焼土を多量に含む
SK360	1	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	
SK362	1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	黄褐色土を多量に含む、混成層状態
SK363	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	炭化物・焼土を斑に含む
P669	1	褐色	10YR4/4	砂質粘土	

第105図　99－3区土坑2



	層位	色調	性質	備考
SK361	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土・黒褐色土を斑に含む
	2	褐色 10YR4/4	砂質粘土	黄褐色土を斑に含む
SK364	1	褐色 10YR4/4	砂質粘土	黒褐色土・黄褐色土を斑に含む
	2	黒褐色 10YR3/2	粘土	
SK365	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	暗褐色土を斑に含む
	2	褐色 10YR4/6	粘土質砂	
SK366	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	焼土粒を含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	
	3	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	灰白色土を粒状に含む
	4	暗褐色 10YR3/3	粘土	焼土を多量に含む
	5	黒褐色 10YR3/2	粘土	にぶい黄褐色土・焼土を含む
	6	褐色 10YR4/6	シルト質粘土	焼土を含む
SK367	1	暗褐色 10YR3/3	粘土	炭化物を含む
	2	褐色 10YR4/4	粘土	炭化物・暗褐色土を含む
SK368	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	炭化物・黒褐色土を含む
SK305I	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物を多量に含む
	2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を含む
SK306I	1	褐色 10YR4/6	粘土質シルト	混成層、人為堆積
		暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	
	2	黒褐色 10YR2/2		炭化物の層
	3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	

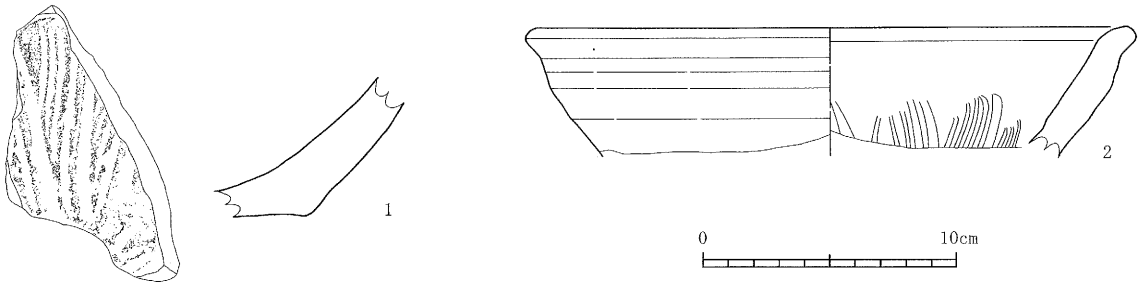
第106図　99－3区土坑3

194cm、東西軸最大で89cm、深さ41cmを測る。底面はほぼ平坦であるが北側へスロープ状に高くなっている。断面形は大きく矩形と判断される。堆積土は2層確認した。土師器、須恵器が出土している。

SK368土坑　B－9区に位置する。平面形は不整な円形である。東西軸78cm、南北軸70cm、深さ最大で16cmを測る。底面は南側へゆるく傾斜をみる。断面形は矩形と判断される。堆積土は1層確認した。縄文土器、土師器、須恵器が出土している。

SK305I土坑　B－11区に位置する。平面形は隅丸の方形である。南北軸169cm、東西軸172cm、深さ最大で24cmを測る。底面にはやや不整形な落ち込みがあり凹凸面状となっている。断面形は大きくみて皿形である。堆積土は2層確認した。土師器、古代瓦が出土している。

SK306I土坑　C－9区に位置する。SK357・360・367に切られる。平面形は長方形である。南北軸2.2m、東西軸149cm、深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦面となり小ピットが確認される。断面形は矩形である。堆積土は3層確認した。堆積状況から人為堆積と判断される。剥片石器、土師器、須恵器、古代瓦が出土している。



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	瓦質土器　擂鉢	2層	底部～体部の破片、幅広の櫛目	H51	
2	瓦質土器　擂鉢	2層	底部～体部が欠損、口縁上部は丸く短く外反、縦方向の幅広の櫛目、口径(120)mm	H50	20-12

第107図　SK338土坑出土遺物1

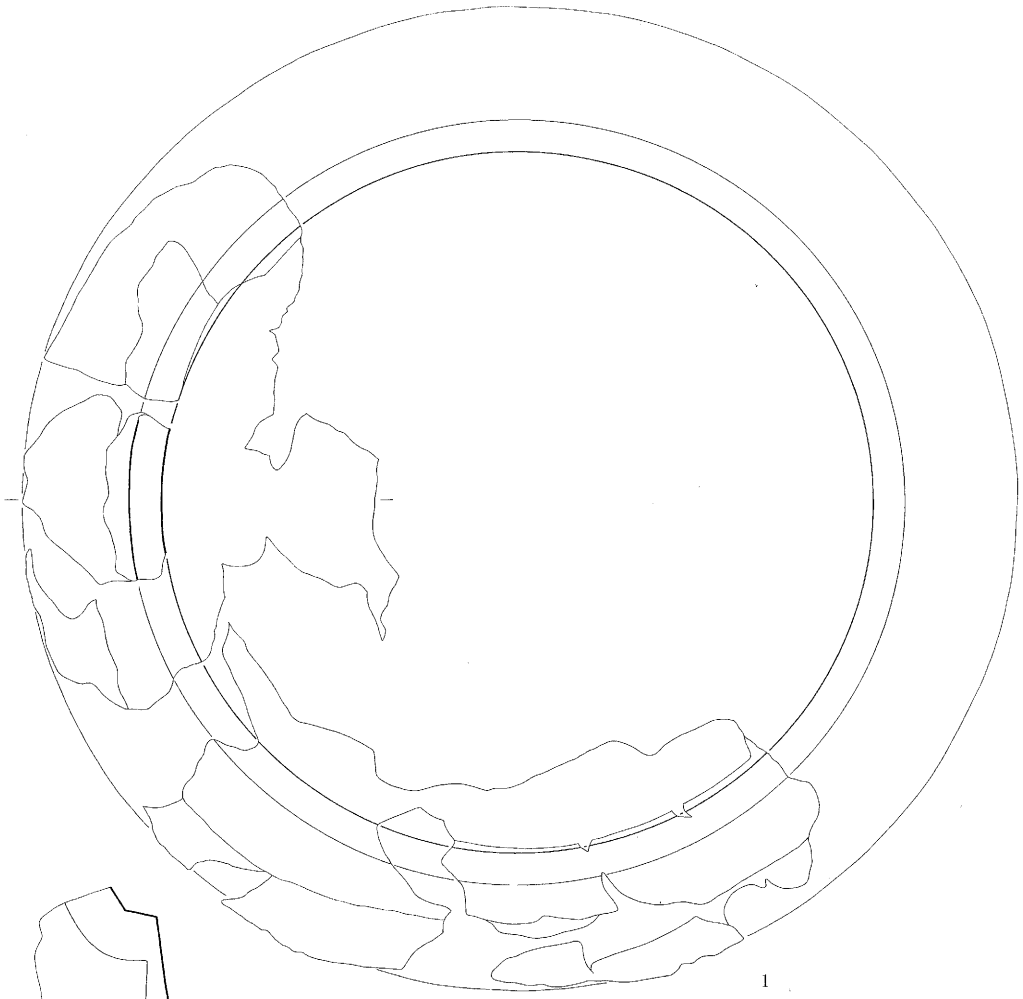
3）溝跡

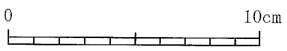
SD302溝跡　D－11区に位置する。北側から下りSD303Aに取り付く溝跡である。取り付き部は平面形がラッパ状となり開口している。先端の開口部幅1.5m程、奥行き3mまで確認した。堆積土は1層の確認となるが下部に向かい遺物の量が多くなっている。調査区の制約上部分的な確認に留まっていたが、その後の調査で北側に同方向に延びるSD317を確認し、同一の溝跡の可能性が考えられた。取り付き部はやや窪んでおり多量の遺物が出土している。北側上部からの流れ込みや廃棄が考えられる。土師器、須恵器、中世陶器（常滑・白石系）、土師質土器、瓦質土器、近世瓦、陶器類（小野相馬・大堀相馬・岸窯・瀬戸美濃・唐津・肥前系・中国）、磁器類（肥前）、ルツボ、鋳造関係土製品、鉄製品等が出土している。

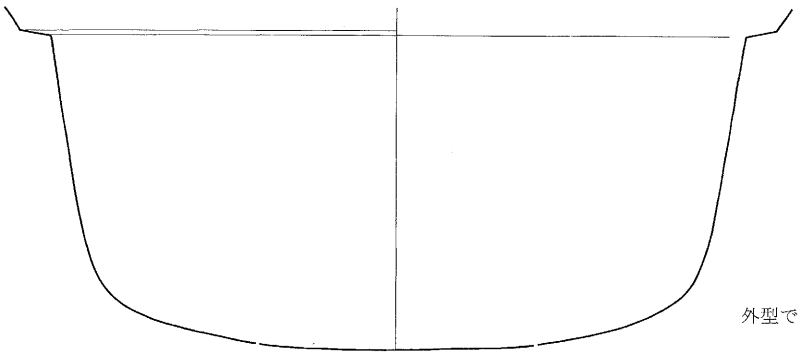
SD303A溝跡　D・E－8～11区に位置する。SD303Bを切る。北辺部のみの確認である。北東方向に直線的に延びており、北辺方向はN－65°－Eである。確認長15.2m、残存上端幅2.8m、深さ最大で53cmを測る。壁面は南側へゆるく傾斜し、底面は凹凸面である。堆積土は4層確認した。下層に向かい遺物量が多くなっている。東側に位置するSD302・317は一連のものと判断される。堆積土は4層確認した。土師器、須恵器、中世陶器（白石）、土師質土器、瓦質土器、近世瓦、古代瓦、陶器（大堀相馬・岸窯・堤？・古瀬戸・美濃・瀬戸美濃・唐津・丹波）、磁器（肥前・中国）、炉体、鋳型、鉄片、鎌？、古銭、石臼、砥石、鋳造関連土製品等が出土している。

SD303B溝跡　D・E－8～11区に位置する。SB303Aの北側に位置し切られる。北辺はやや屈曲するがほぼ並行である。確認長18.9m、残存上端幅2m、深さ最大で48cmを測る。堆積土は3層確認した。土師器、須恵器、中世陶器（白石）、近世瓦、陶器（大堀相馬・岸窯・志野・瀬戸・美濃・瀬戸美濃）、磁器（肥前）、石器等が出土している。

SD303C溝跡　D・E－8～13区に位置するが東側部の詳細は不明である。SD303B・304Bに切られる。西辺と北辺







外型での鍋復元

	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	鋳型（外型）	1・2層	鍋の鋳型、口縁部残存径308mm、推定高136mm、口縁部は頸部から短くきつく外傾しさらにきつく立ち上がる、底部はゆるい丸底、底部周辺の厚さ52mm程、体部周辺は39mm、内面には7～17mmの厚さ」に塗られた真土がみられる	P55	22-1

第108図　SK338土坑出土遺物２

の一部を確認している。西辺は南北方向にほぼ直線的に延びており方向はN－12°－Eである。残存長4.7mを測る。壁面は凹凸面となりゆるやかに立ち上がる。北辺は東西方向に延びるが西側部が南側へ屈曲している。方向はN－88°－Wである。確認長3mを測る。底面が確認され平坦である。壁面はきつく立ち上がっている。壁面に沿うように木杭及び杭の痕跡が確認されている。残存状況から台形ないし方形の平面形をもつものと判断される。東側の小トレンチ東壁でも堆積土が確認されており東西幅は25m以上となる。堆積土は南側で7層まで確認した。下層は砂となるが1層はシルト質の粘土層で整地層と判断される。縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、中世陶器（白石系・常滑・渥美）、陶器（大堀相馬・堤？・唐津）、磁器（肥前・伊万里・中国）、鋳型、炉壁、鋳造関連土製品、砥石、木杭、飾り玉？等が出土している。

SD304A溝跡　D－8～11区に位置する。すべてがSD304Bの堆積土内に位置する。東西方向にほぼ直線的に延びているがやや南側へ屈曲する。軸方向はN－82～85°－Eである。西側部を掘り上げてしまったが残存確認長20.2mを測る。上端幅2.15m程、下端幅60～80cm、深さ最大81cmを測る。断面形は底面が丸みをもつ逆台形である。堆積土は3層確認した。1層は混成層となり人為堆積と判断される。土器類、鋳型、鋳造関連土製品、石製品、礫が出土している。

SD304B溝跡　D－8～13区に位置する。SK366・SD303Cを切りSK367及びSD303A・304A・314・317に切られる。東西方向にほぼ直線的に延びており、軸方向はN－1°－Wである。確認長27.3m、上端幅最大4.95m、下端幅40cm程、深さ1.3m程を測る。断面形は逆台形を基調とし底面中央が一段低くなる。底面の北側と南側はテラス状となり杭痕が列状に並んでいる。特に北側の壁直下に多くみられる。北部壁面はゆるく立ち上がる部分も見られるが全体的にはきつい立ち上がりである。堆積土は8層確認した。1層は混成層となり人為堆積と判断される。縄文土器、古代瓦、中世陶器（白石）、瓦質土器、陶器（瀬戸美濃・唐津系）、磁器（肥前・漳州窯、中国）、鋳型、炉体、炉壁、フイゴの羽口、鋳造関連土製品、鉄製品、砥石、硯、石臼、石器が出土している。

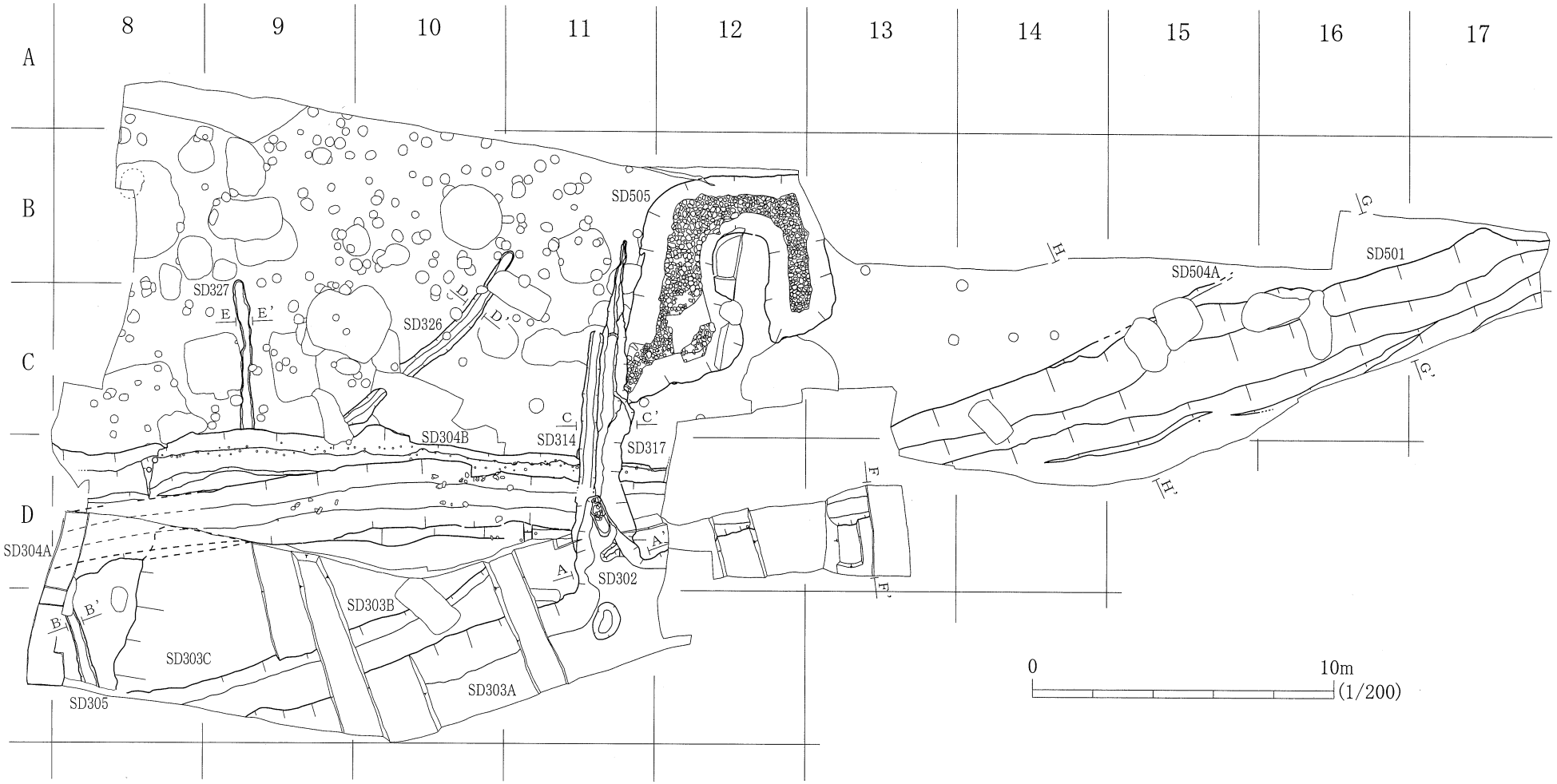
SD305溝跡　D･E－8区に位置する。SK305に切られる。北西方向に直線的に延びており、軸方向はN－17°－Wである。確認長2.74m、上端幅35cm、下端幅24cm、深さ13cm程を測る。断面は矩形である。堆積土は1層確認した。土器類が出土している。

SD314溝跡　C・D－11区に位置する。SD302・304・317、SO301を切る。南北方向に直線的に延びており、軸方向はN－4°－Eである。確認長5.15m、上端幅49cm、下端幅22cm、深さ14cm程を測る。断面は皿形である。堆積土は1層確認した。土器片、陶器類（大堀相馬・瀬戸美濃）、磁器類（肥前）、近世軒丸瓦が出土している。

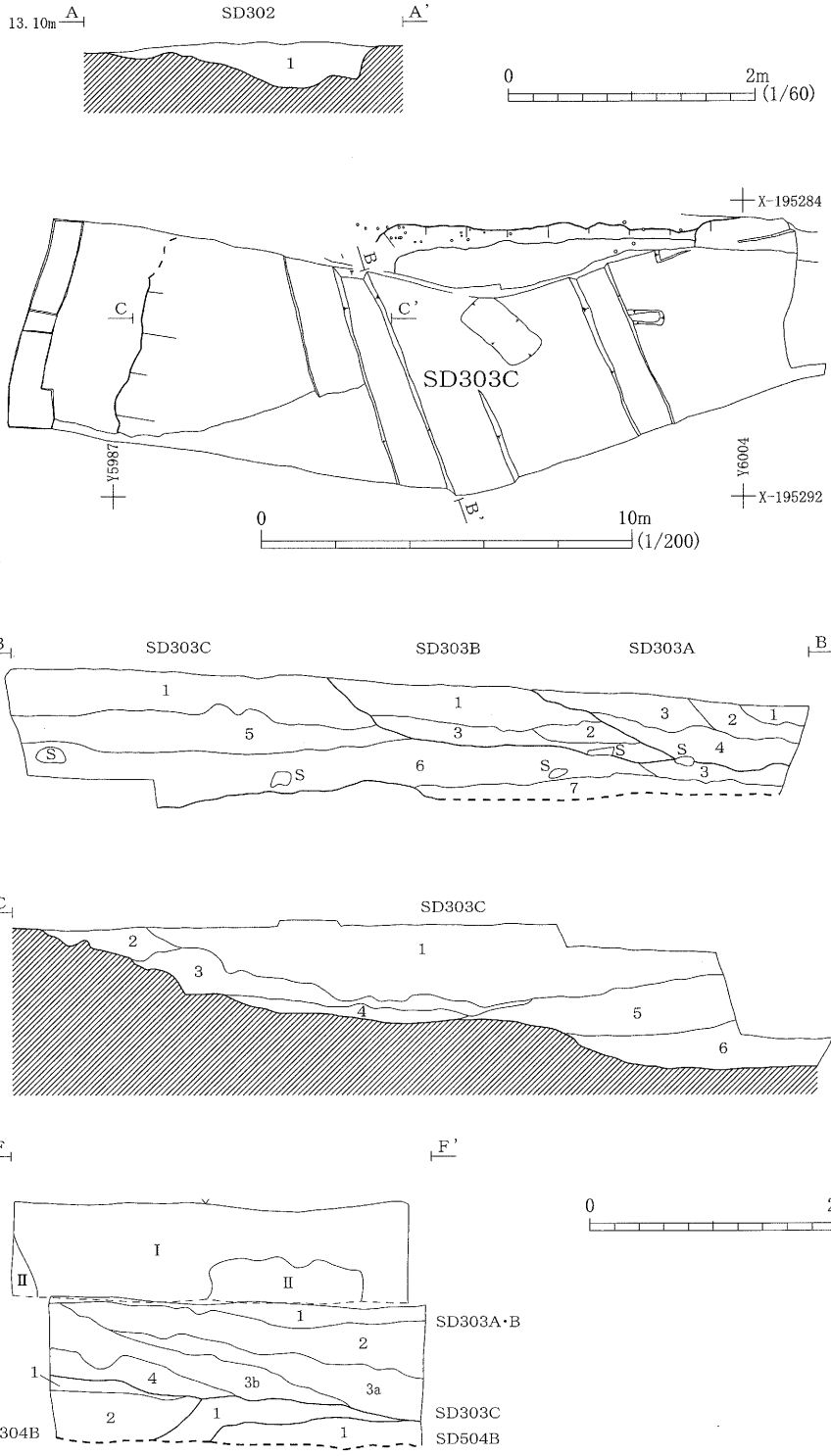
SD317溝跡　B・C・D－11区に位置する。SD314に切られSD304・505及びSK518・519を切る。SD302の北側部と判断される。南北方向に直線的に延びており、軸方向はN－6°－Eである。溝跡の先端部は細くなり消滅しているが南側に向かい幅広となり、底面も中央部付近が幅広となっている。確認長10.89m、南端部上端部1.88m、下端幅26cm、深さ16cmを測る。溝跡中央部付近では深さ42cm程を測る。断面は逆台形である。底面高は端部間で17cm程の差である。堆積土は2層確認した。土器類、近世瓦（軒丸瓦九曜文？・面戸瓦）、陶器類（大堀相馬・小野相馬・岸窯・志野・美濃・瀬戸美濃・唐津・京・信楽系・備前？）、磁器（肥前・漳州窯系・中国）、キセル、古銭、鋳型？、釘？、砥石、礫が出土している。

SD326溝跡　B・C－10区に位置する。SK344・358・367に切られる。やや屈曲をみるが北東方向にほぼ直線的に延びる。軸方向はN－45°－Eである。確認長7.99m、上端幅52cm、下端幅19cm、深さ20cm程を測る。断面は逆台形である。堆積土は2層確認した。土器類が出土している。

SD327溝跡　C－9区に位置する。SI304を切りSD304Bに切られる。南北方向に直線的に延びており、軸方向はN－4°－Wである。確認長4.95m、上端幅49cm、下端幅45cm、深さ18cm程を測る。断面形は矩形となる。堆積土は2層確認した。土器類が出土している。

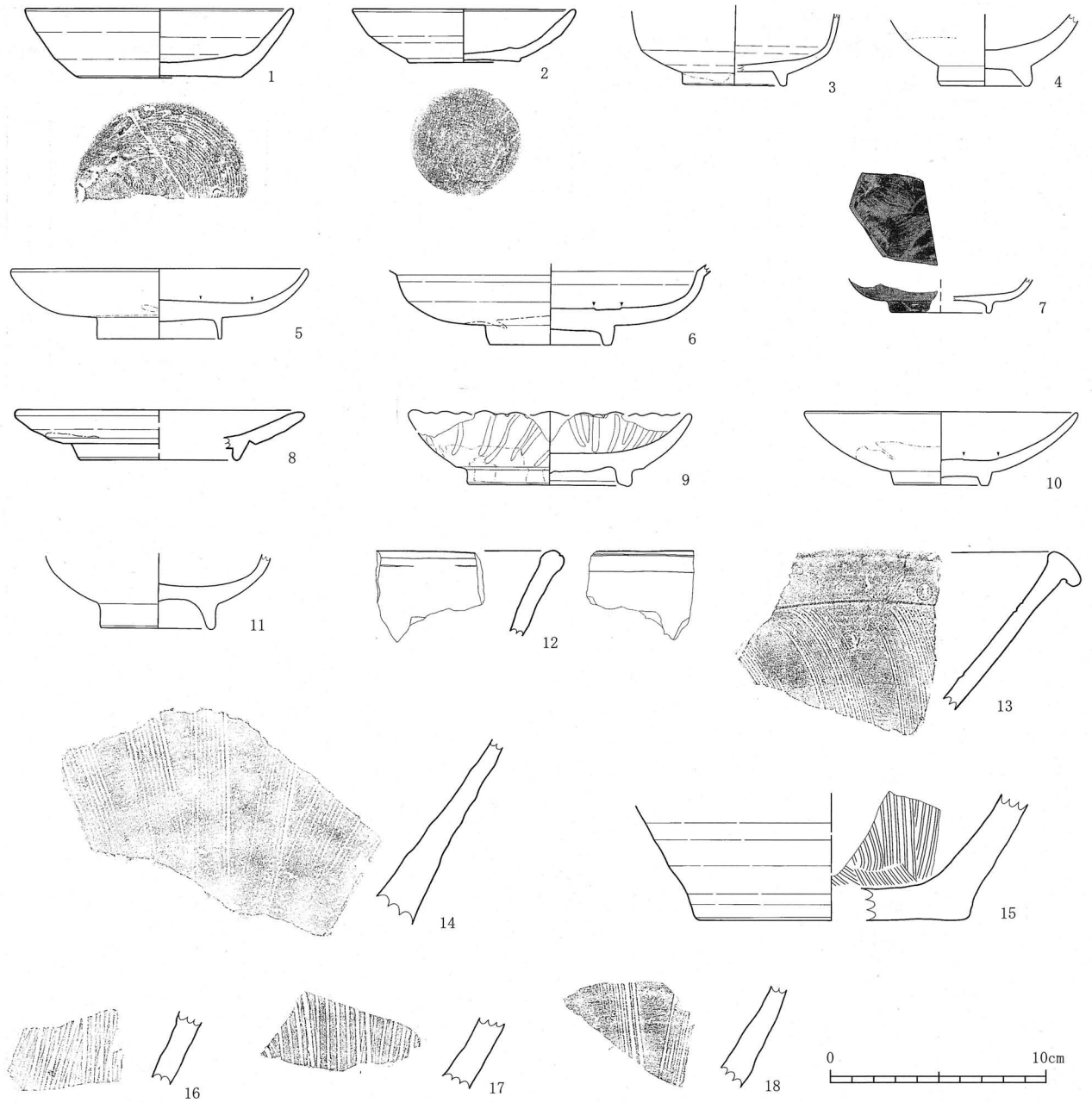


第109図　99－3区・2002－1区溝跡



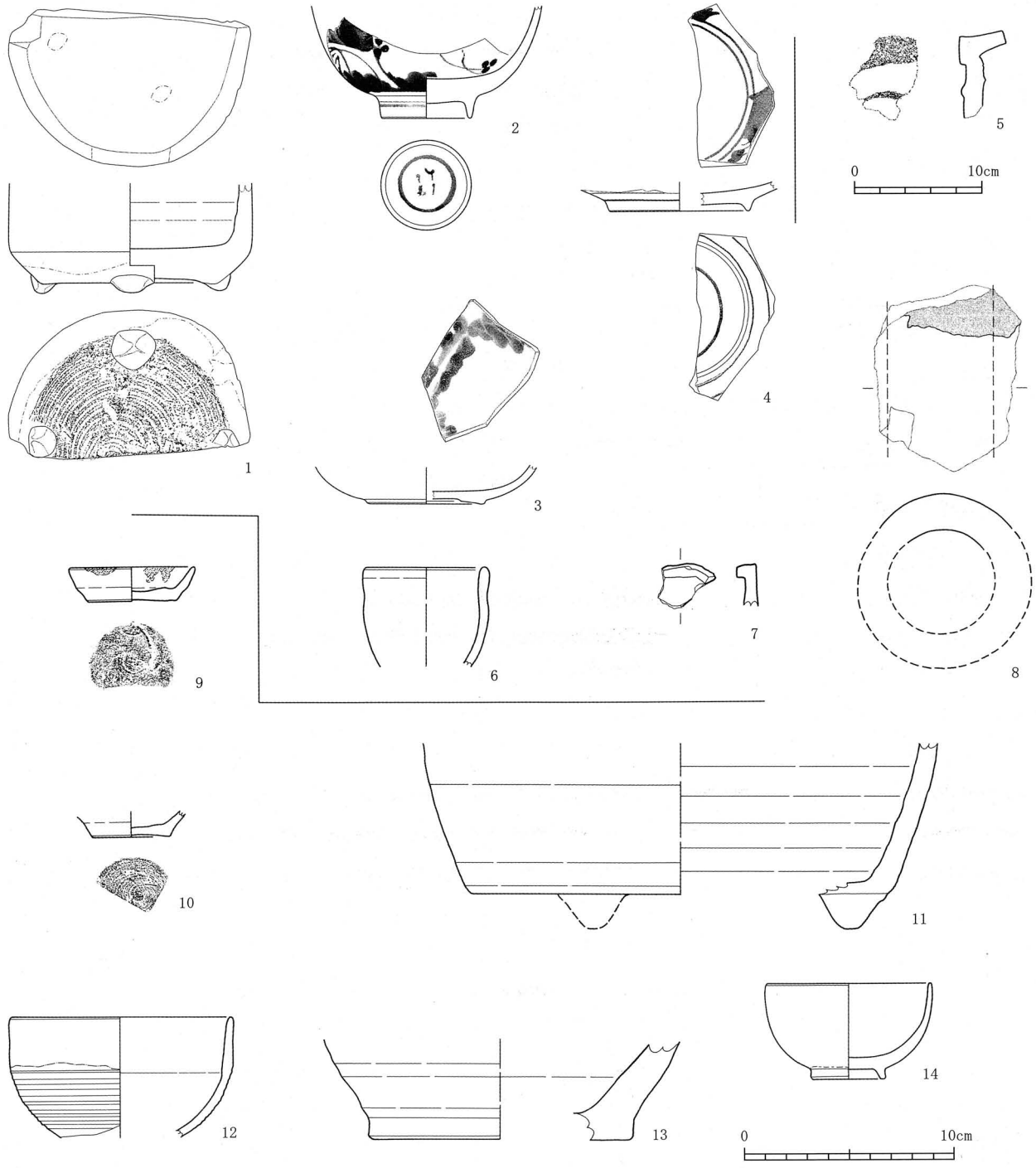
	層位	色調		性質	備考
SD302	1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	小礫をまばらに含む
SD303A	1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	焼土粒・小礫を含む
	2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	炭化物粒・黄褐色土粒を含む
	3	褐色	10YR4/6	シルト	
	4	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	炭化物粒をまばらに含む
SD303B	1	褐色	10YR4/4	シルト	
	2	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	褐灰色土をブロック及びスジで含む
	3	褐色	10YR4/4	シルト	下部に細砂を含む
SD303C	1	黄褐色	10YR5/6	シルト質粘土	整地層
	2	褐色	10YR4/6	砂	
	3	暗褐色	10YR3/3	シルト質粘土	砂をスジ状に含む
	4	褐灰色	10YR4/1	砂	グライ化
	5	褐灰色	10YR5/1	砂	
	6	褐灰色	10YR4/1	砂	
	7	褐灰色	10YR5/1	砂	
小トレ	I				盛土
東壁	II	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	耕作土
SD303	1	褐色	10YR4/4	シルト	
A・B	2	暗褐色	10YR3/4	シルト	小礫を含む
	3a	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	粗砂を含む
	3b	褐灰色	10YR4/1	粘土	粗砂を含む
	4	灰黄褐色	10YR5/2	粘土	粗砂を含む
SD304B	1	明黄褐色	10YR6/6	砂質粘土	褐灰色土と互層状
	2	褐灰色	10YR4/1	砂質粘土	
SD303C	1	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	細砂を含む
SD504B	1	灰白	10YR7/1	粘土	下部に酸化鉄集積

第110図　SD302溝跡及びSD303A・B・C溝跡平断面



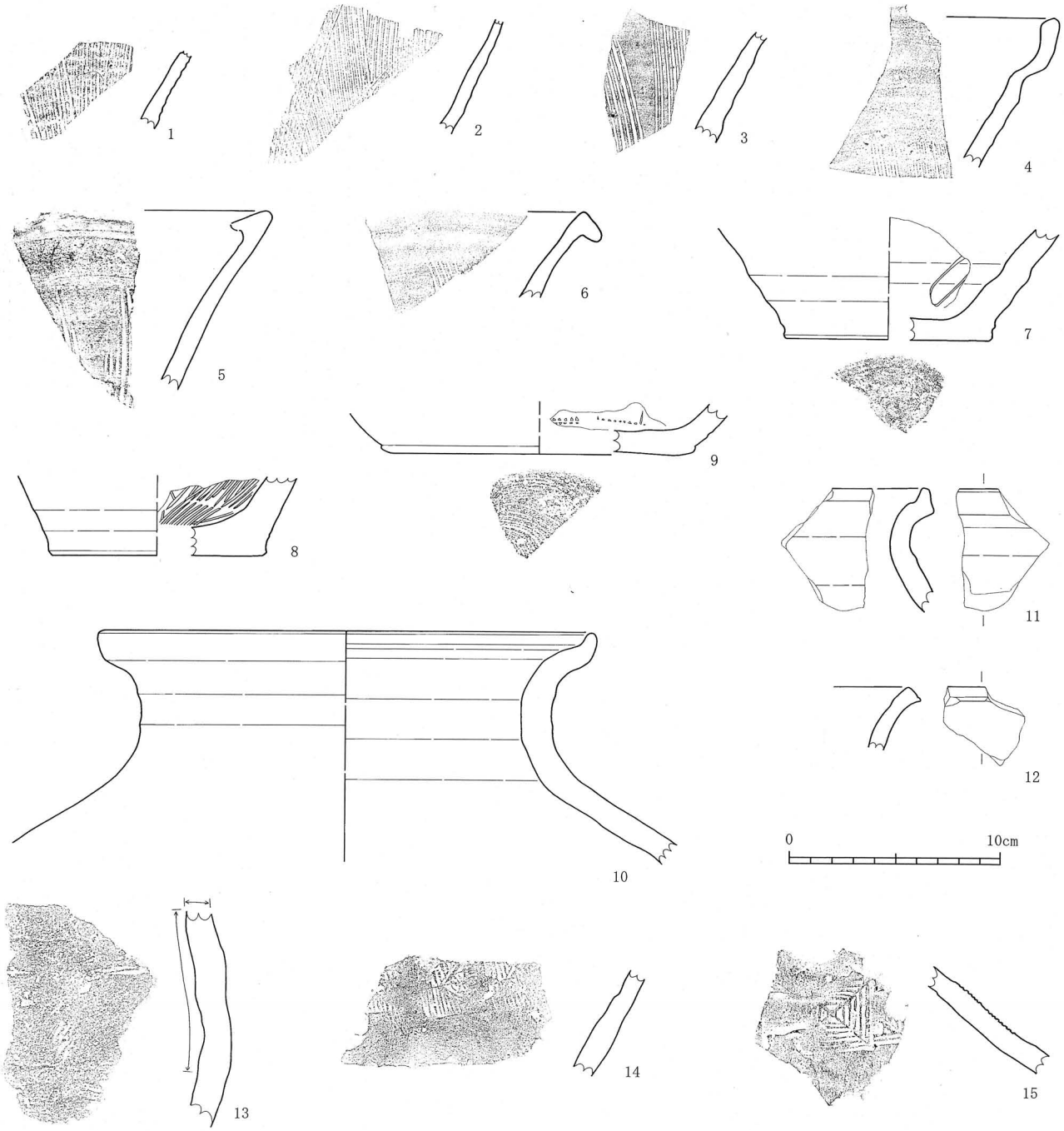
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師質土器　皿	1層	ロクロ成形、外傾気味にきつく立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径123mm、底径74mm、器高32mm	D36	
2	土師質土器　皿	1層	ロクロ成形、外傾気味にゆるく立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径102mm、底径50mm、器高25mm	D37	20-5
3	陶器　碗	1層	鉄釉、底径45mm、大堀相馬、18c後半	I869	
4	陶器　碗	1層	青緑釉、底径40mm、唐津、17c後半	I862	
5	陶器　皿	1層	蛇ノ目釉ハギ、口径137mm、底径58mm、器高33mm、小野相馬、18c前半以降	I847	
6	陶器　折縁皿	1層	蛇ノ目釉ハギ、底径56mm、唐津系、17c後半	I848	
7	陶器　皿	1層	刷毛目文、底径(45)mm、唐津系、18c	I866	
8	陶器　丸皿	1層	灰釉、口径(134)mm、底径(70)mm、器高22mm、美濃、登窯5	I851	
9	陶器　菊皿	1層	黄瀬戸、口径(128)mm、底径(72)mm、器高34mm、美濃、登窯4	I849	
10	陶器　皿	1層	蛇ノ目釉ハギ、口径126mm、底径43mm、器高34mm、小野相馬、18c	I846	22-20
11	陶器　碗	1層	底径52mm、唐津、17c	I861	
12	陶器　鉢	1層	口縁部片、口縁端部は丸くおさまる、厚さ7mm程、常滑？	I913	
13	陶器　擂鉢	1層	口縁部片、外傾気味に立ち上がり口縁部は上下方に突出し丸くおさまる、縦位の櫛目、岸窯、17c前半～末	I895	
14	陶器　擂鉢	1層	体部片、間隔をもった縦位の櫛目、堤？	I900	
15	陶器　擂鉢	1層	底部片、縦位の櫛目、底径(123)mm、岸窯、17c前半～末	I896	
16	陶器　擂鉢	1層	体部片、縦位の櫛目、岸窯、17c前半～末	I890	
17	陶器　擂鉢	1層	体部片、幅広の縦位の櫛目、産地不明、近世	I901	
18	陶器　擂鉢	1層	体部片、間隔をもった縦位の櫛目、岸窯、17c後半～	I894	

第111図　SD302溝跡出土遺物1



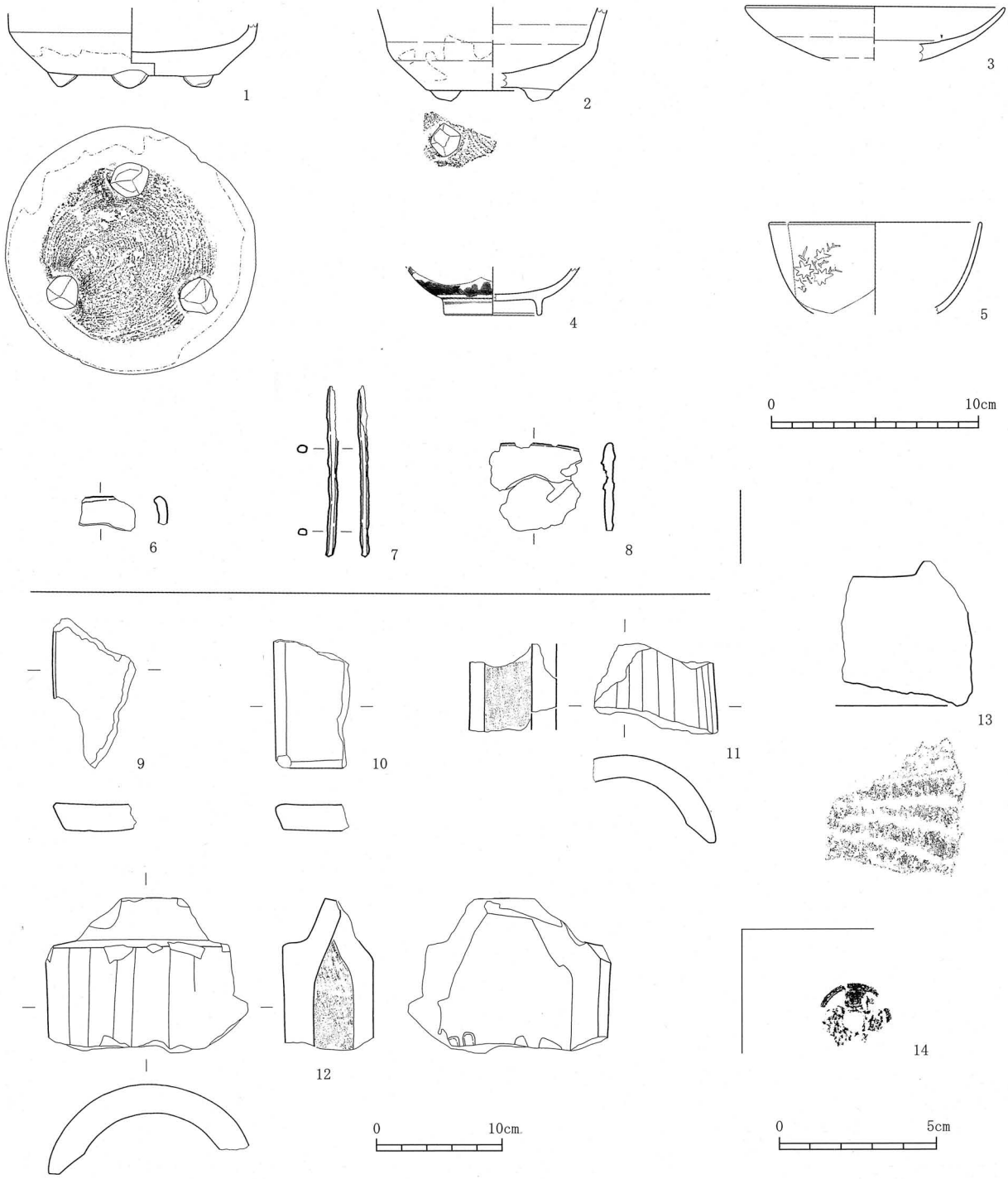
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　香炉	SD302　1層	脚は4ヶ、とちん2ヶ確認、底径90mm、残存高51mm、岸窯、17c中以降	I897	
2	磁器　碗	SD302　1層	くらわんか手、底径43mm、肥前、17c末～18c前半	J457	24-1
3	磁器　碗	SD302　1層	墨弾き、蛇ノ目高台、底径56mm、肥前、17c中	J456	
4	磁器　皿	SD302　1層	砂目、底径67mm、肥前、17c末	J461	
5	近世瓦　軒丸瓦	SD302　1層	鳥伏間、瓦当は巴文、厚さ15mm	G39	
6	とりべ?	SD302　1層	底部欠損、ロクロ成形?、直立気味に立ち上がる、口縁端部は丸くおさまる、口径(58)mm、残存高47mm	R39	
7	土製品	SD302　1層	鋳造関係土製品と判断、厚さ6mm程で一方が折れ曲がり3mm程突出、全体形は不明	P164	
8	フイゴの羽口	SD302　1層	推定内径50mm、厚さ17mm、残存長90mm、外面は融解	P47	
9	土師質土器　皿	SD303A　埋土	ロクロ成形、外傾気味にきつく立ち上がる、口縁部内外面にタール付着、切り離しは回転糸切り、口径59mm、底径41mm、器高16mm	D41	
10	土師質土器　皿	SD303A　埋土	ロクロ成形、外傾気味にきつく立ち上がる、切り離しは回転糸切り、底径36mm	D42	
11	瓦質土器　鉢	SD303A　埋土	口縁部欠損、円錐形の脚3ヶ、底径(195)mm	H46	
12	陶器　碗	SD303B　埋土	掛け分け、飴釉流し、口径104mm、大堀相馬、18c	I1013	
13	陶器　鉢	SD303A　埋土	底部片、内面に磨面、底径(125)mm、白石、13c中～14c前半	I1025	
14	陶器　碗	SD303A　埋土	口径76mm、底径33mm、器高46mm、大堀相馬、18c	I951	22-21

第112図　SD302溝跡出土遺物２・SD303溝跡出土遺物１



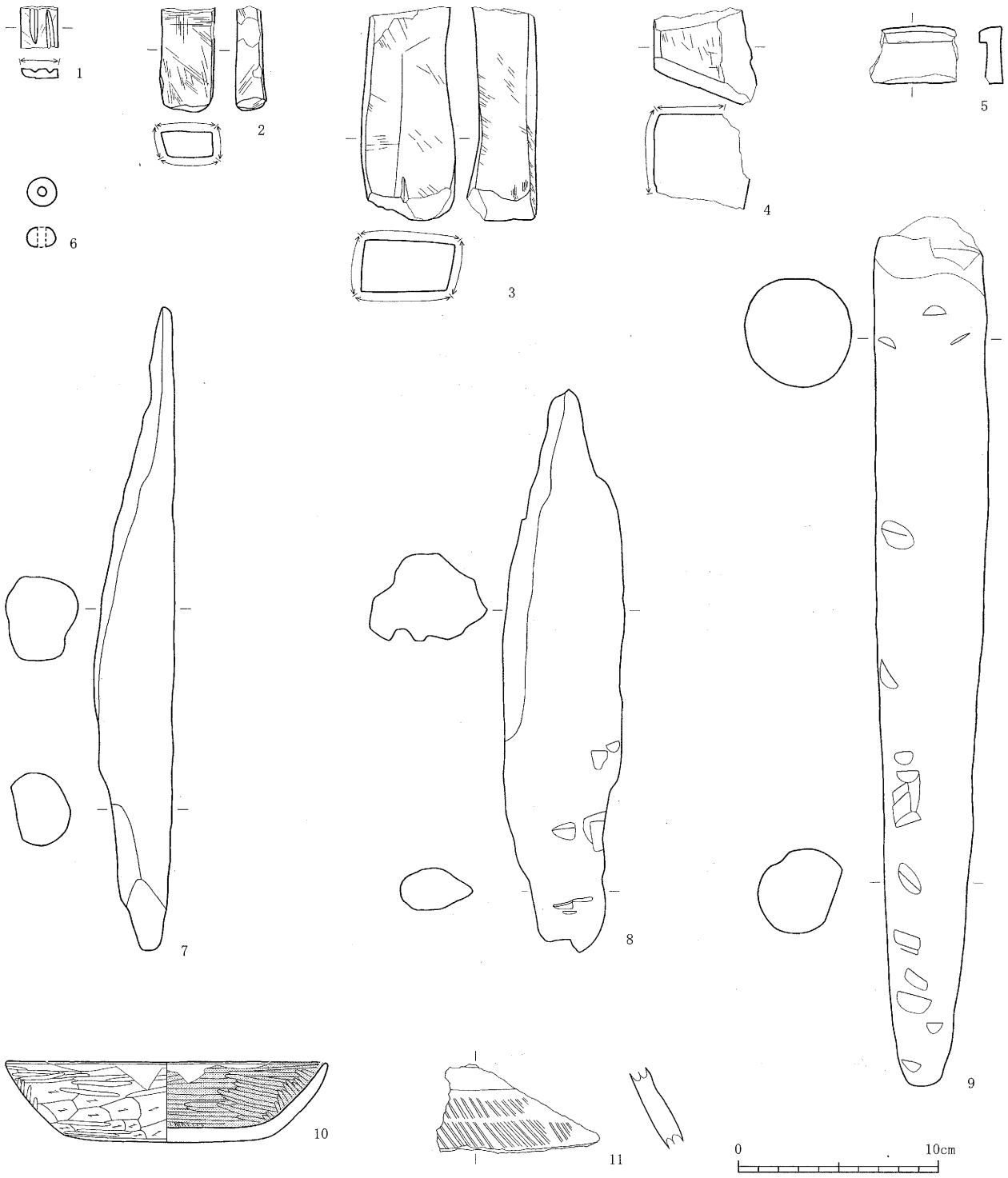
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　擂鉢	SD303A　埋土	体部片、縦位の櫛目、焼締、丹波、17c	I973	
2	陶器　擂鉢	SD303A　埋土	体部片、縦位の櫛目、産地不明	I975	
3	陶器　擂鉢	SD303A　埋土	体部片、間隔をもった幅広の縦位の櫛目、岸窯、17c後半	I977	
4	陶器　擂鉢	SD303B　埋土	口縁部片、口縁部は短く外傾しきつく立ち上がり丸くおさまる、縦位の櫛目、瀬戸、登窯7	I1006	
5	陶器　擂鉢	SD303B　埋土	口縁部片、口縁部内側端部が三角形状に突出、幅広の縦位の櫛目、岸窯、17c	I1002	
6	陶器　擂鉢	SD303A　埋土	口縁部片、口縁端部は外方へきつく短く折れ曲がり断面は三角形状、幅広の縦位の櫛目、岸窯、17c	I991	
7	陶器　擂鉢	SD303B　埋土	底部片、底径(99)mm、岸窯、17c前半末	I1003	
8	陶器　擂鉢	SD303A　埋土	底部片、幅広の櫛目、底径(103)mm、岸窯、17c	I978	
9	陶器　甕	SD303B　埋土	底部片、内面に擦り痕、底径(146)mm、岸窯？17c	I1004	
10	陶器　甕	SD303C　埋土	体部からゆるく立ち上がり頚部はほぼ垂直気味、口縁端部は上方にまるく突出し受け口状、口径(232)mm、白石、13c中～14c前	I1045	
11	陶器　甕	SD303C　埋土	口縁部片、頚部はきつく立ち上がり口縁部は上方にきつく短く立つ、常滑、13c	I1050	
12	陶器　甕	SD303C　埋土	口縁部片、頚部からゆるく立ち上がり口縁部は三角形状におさまる、常滑	I1054	
13	陶器　甕	SD303C　埋土	体部片、断面に漆継きの痕跡、白石系、13c～14c	I1037	
14	陶器　甕	SD303C　埋土	体部片、長方形の押印あり、白石系、13c～14c	I1039	
15	陶器　甕	SD303C　埋土	体部片、正方形の押印あり、白石系、13c～14c	I1043	

第113図　SD303溝跡出土遺物２



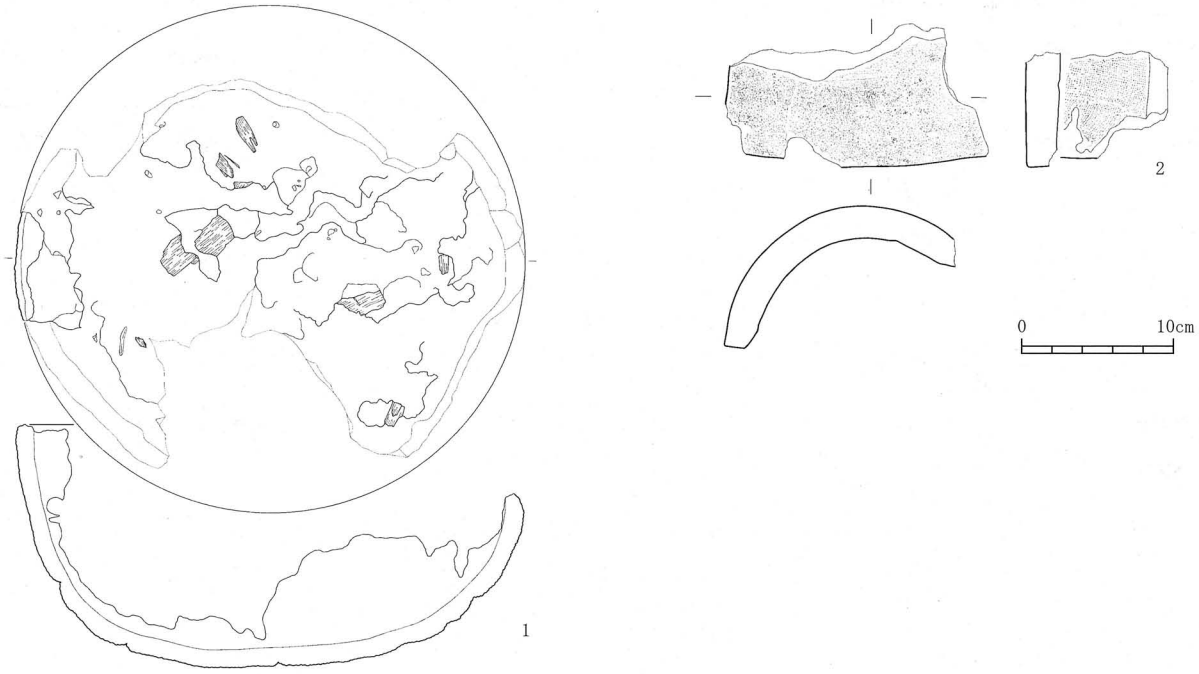
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	陶器　香炉	SD303A　埋土	四角錐状の脚3ヶ、底部に回転糸切り痕、底部径80mm、岸窯、17c中～	I989	
2	陶器　香炉	SD303A　埋土	四角錐状の脚3ヶ？、底部に回転糸切り痕、底部径(62)mm、岸窯、17c～18c	I981	
3	磁器　皿	SD303B　埋土	染付け、口径(126)mm、肥前、17c～18c	J558	
4	磁器　碗	SD303A　埋土	染付け、底径47mm、肥前、18c	J513	
5	白磁　碗	SD303B　埋土	口径(112)mm、肥前、17c～18c	J559	
6	鉄片	SD303A　確認	残存長27mm、幅14mm、厚さ4mm	N29	
7	棒状鉄製品	SD303A　埋土	断面は円形、残存長82mm、径3～4mm	N32	21-14
8	鉄片	SD303A　埋土	上部が丸くおさまる、残存長43mm、幅45mm、厚さ6mm	N31	
9	近世瓦　平瓦	SD303A　埋土	凸面：ナデ、凹面：ナデ、厚さ21mm	G48	
10	近世瓦　平瓦	SD303A　埋土	凸面：ナデ、凹面：ナデ、厚さ21mm	G46	
11	近世瓦　丸瓦	SD303A　埋土	凸面：縦位のつよいナデ、凹面：布目痕、厚さ18mm	G49	
12	近世瓦　丸瓦	SD303B　埋土	凸面：縦位のつよいナデ、凹面：布目痕、厚さ24mm、玉縁部長33mm	G44	
13	石臼	SD303A　埋土	粉挽き臼の上臼、残存高117mm、安山岩	K78	
14	古銭	SD303A　埋土	判読不能	N37	

第114図　SD303溝跡出土遺物3



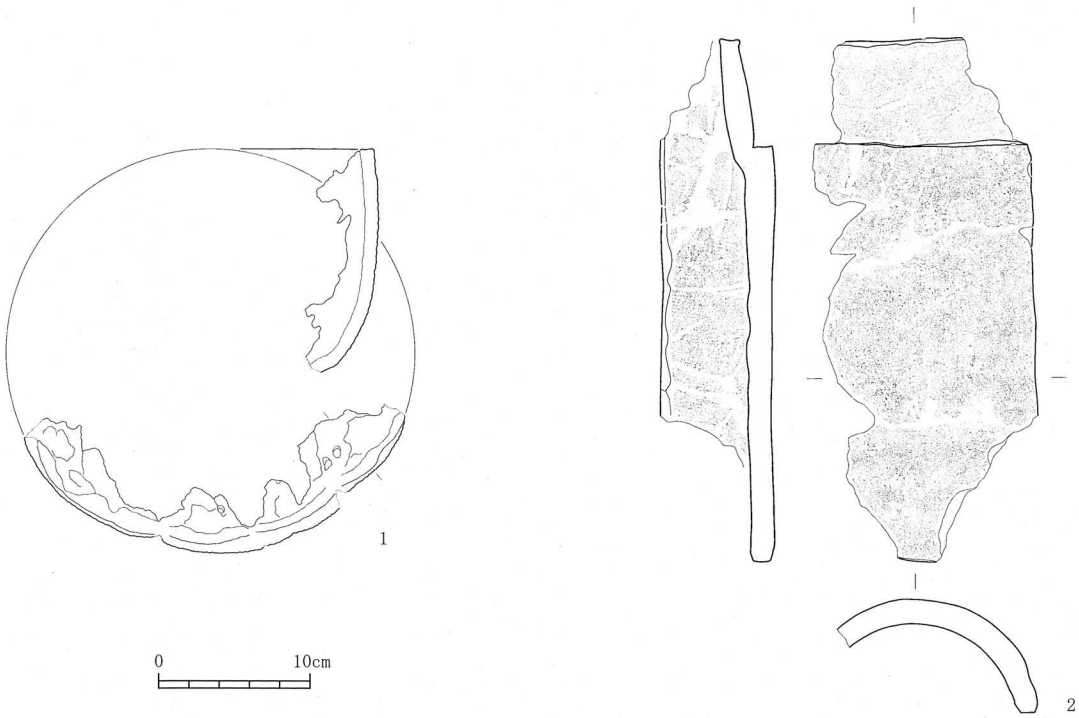
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	砥石	SD303A　埋土	上下端部欠損、平面は長方形、断面は長方形で薄板状、砥面は1面で2条の深いミゾあり、残存長21mm、幅18mm、厚さ5mm、凝灰岩	K80	
2	砥石	SD303A　埋土	上部欠損、平面・断面は長方形、砥面は4面、残存長52mm、幅27mm、厚さ13mm、凝灰岩	K79	
3	砥石	SD303C　埋土	上部欠損、平面・断面は長方形、砥面は4面、残存長105mm、幅47mm、厚さ26mm、凝灰岩	K81	
4	砥石	SD303C　埋土	上下端部欠損、平面は長方形？、断面は正方形状、砥面は3面、残存長47mm、幅48mm、厚さ45mm、凝灰岩	K82	
5	土製品	SD303C　埋土	鋳造関連土製品、薄板状で上部が直角に折れ曲がる、長さ28mm、残存幅43mm、厚さ7mm	P163	
6	石製品	SD303C　埋土	飾り玉？、径14mm程のやや扁平の球形、中央に径4mm程の孔が貫通、滑石製	R1	22-19
7	木杭	SD303C　埋土	先端部に粗い削り、残存長320mm、断面は円形状で径37～41mm、芯材	L16	
8	木杭	SD303C　埋土	残存長280mm、断面は円形状、最大径60mm、芯材	L17	
9	木杭	SD303C　埋土	先端部に粗い削り、残存長432mm、断面は円形状で径54～55mm、コナラ節、芯材	L15	
10	土師器　坏	SD303A　埋土	ロクロ不使用、平底風の丸底、外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径161mm、器高40mm	C10	19-21
11	須恵器　甕	SD303C　埋土	体部片、外面は平行叩き、内面はナデ、内外面が磨られている	E12	

第115図　SD303溝跡出土遺物４



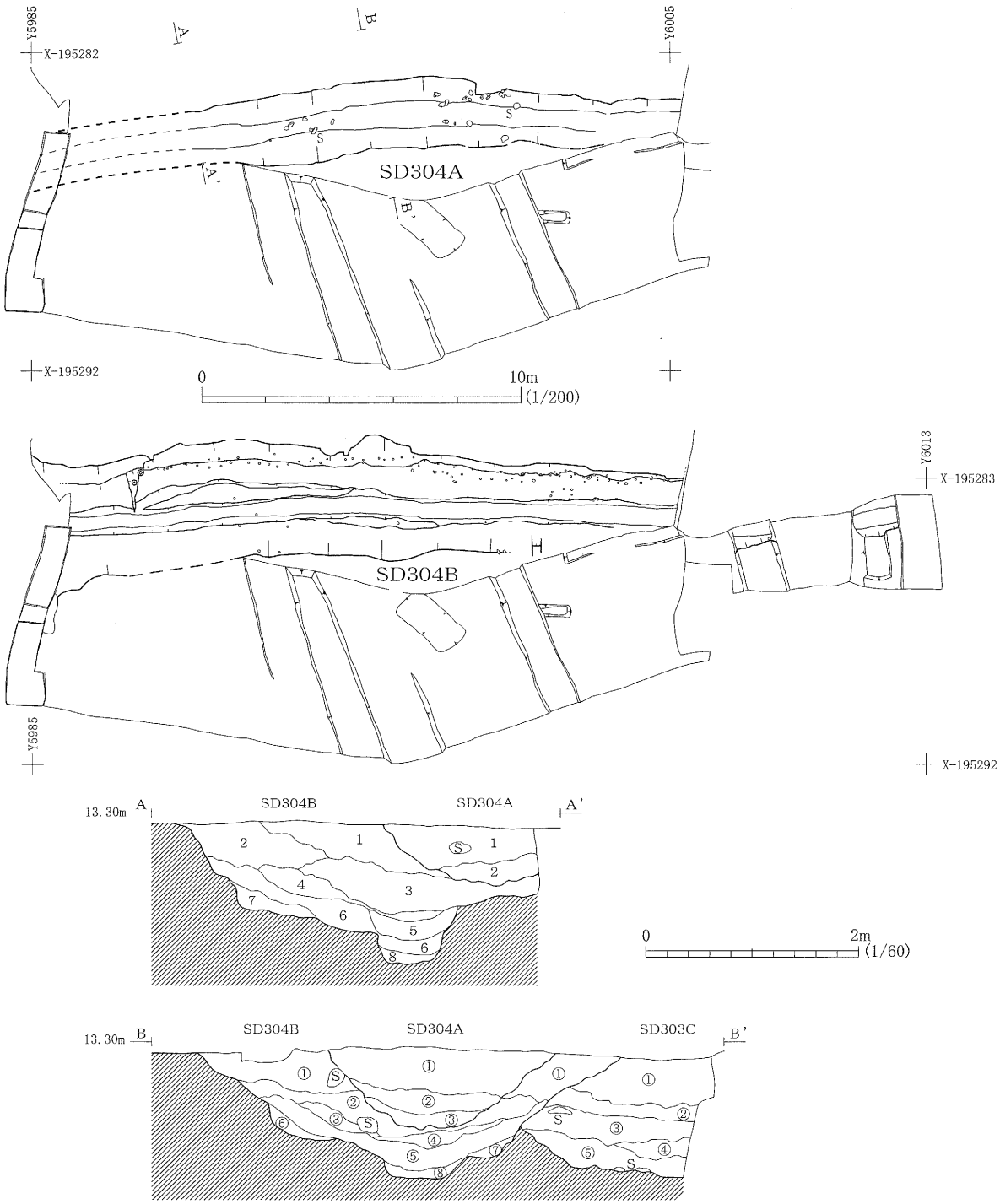
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	炉体	SD303A　埋土	炉体の下部、U字形(鍋底状)の断面、外面は砂の固まり、内面は鉱滓が融解し下方に垂れている、炭化物片混じる、上部径(340)mm、残存高160mm	P191	
2	古代瓦　丸瓦	SD303A　埋土	凸面：ロクロナデ、凹面：布目痕、残存長95mm、厚さ21mm	F9	

第116図　SD303溝跡出土遺物５



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	炉体	SD304B　埋土	炉体の下部、U字形の断面、外面は砂の固まり、内面は鉱滓が融解し下方に垂れている、上部径(271)mm、残存高148mm	P192	
2	古代瓦　丸瓦	SD304B　埋土	玉縁付、凸面：縄叩き・ロクロナデ、凹面：粘土紐痕、布目痕、端部にヘラケズリ、厚さ16mm、全長347mm、玉縁長72mm	F7	

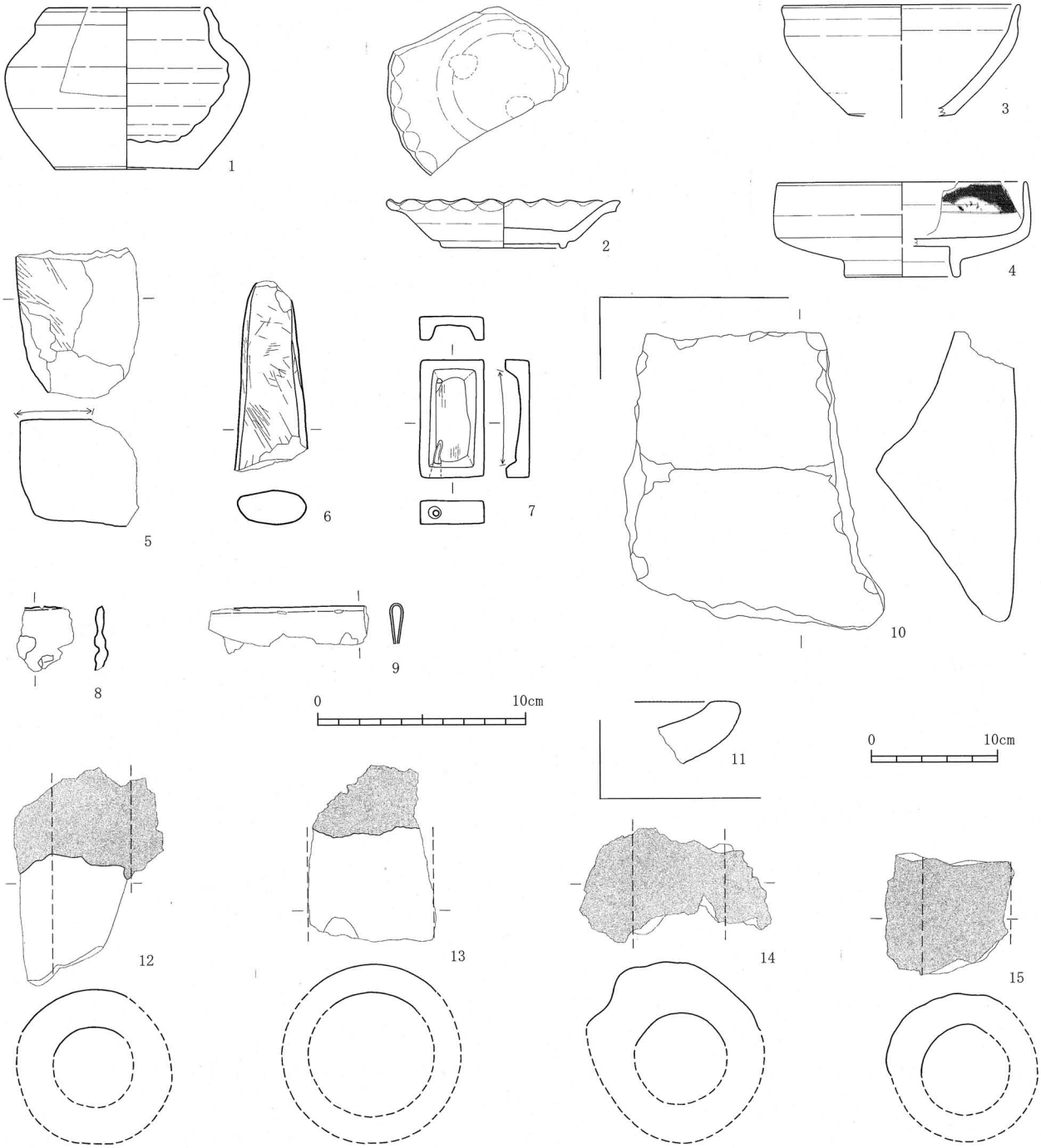
第117図　SD304B溝跡出土遺物１



	層位	色調	性質	備考
SD304A	1	暗褐色	10YR3/3	シルト	混成層
		黄褐色	10YR5/6	粘土	
	2	褐灰色	10YR5/1	粘土	粗砂を含む
SD304B	1	褐灰色	10YR5/1	砂質粘土	褐色土を斑に含む、混成層
	2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	礫を含む
	3	褐灰色	10YR5/1	砂質粘土	粗砂を含む
	4	褐色	10YR4/4	砂	粗砂
	5	褐灰色	10YR6/1	砂質粘土	下部はグライ化
	6	褐灰色	10YR5/1	粘土質砂	細砂、粗砂を層的に含む
	7	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	8	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	底面に酸化鉄集積
SD304A	①	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	混成層
		黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	
	②	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	黄褐色土を少量含む
	③	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	砂を層及びブロックで含む

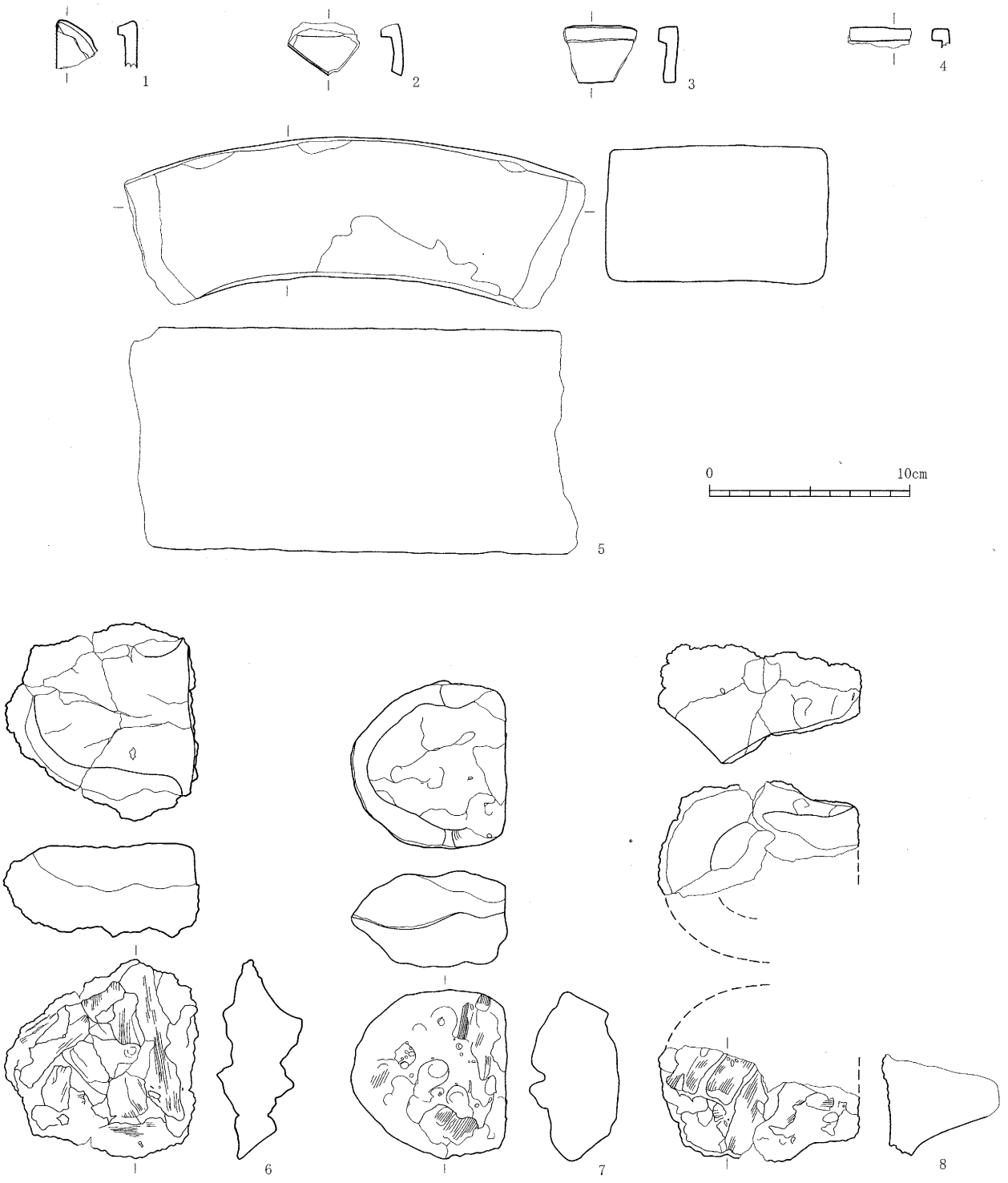
	層位	色調	性質	備考
SD304B	①	暗褐色	10YR3/4	シルト	砂を含む
	②	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	砂・礫を含む
	③	褐灰色	10YR5/1	砂質粘土	
	④	褐色	10YR4/4	砂	粗砂、褐灰色土を層的に含む
	⑤	褐灰色	10YR4/1	粘土	互層
		灰黄褐色	10YR4/2	砂	
	⑥	褐灰色	10YR4/1	粘土	
	⑦	にぶい黄橙色	10YR7/2	砂質粘土	部分的にグライ化
	⑧	暗青灰色	5GB4/1	砂質粘土	グライ化
SD303C	①	黄褐色	10YR5/8	粘土質シルト	混成層
		にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	
		褐灰色	10YR6/1	シルト	
	②	褐灰色	10YR5/1	粘土質砂	酸化鉄粒を斑に含む
	③	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	砂をうすく含む
	④	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	
	⑤	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	砂を多量に含む、下部はグライ化

第118図　SD304A・B溝跡



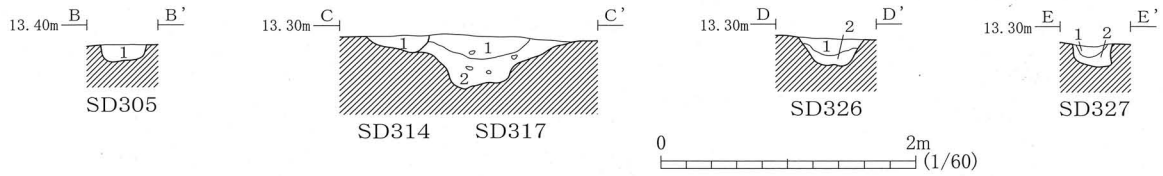
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	瓦質土器　壺	埋土	算盤玉型の体部、口縁部は内傾気味におさまる、底部にナデ・ケズリ、切り離しは不明、口径77mm、底径69mm、器高77mm	H43	20-13
2	陶器　反り皿	埋土	鉄釉、輪花、見込みに目跡、高台内溶着痕、口径112mm、底径56mm、器高24mm、瀬戸美濃、大窯3後	I915	
3	陶器　天目茶碗	埋土	露胎部に鉄化粧、口径(112)mm、底径(50)mm、器高54mm、瀬戸美濃、大窯2	I916	
4	磁器　皿	確認面	口径(120)mm、底径(55)mm、器高46mm、瀬戸、19c～	J507	
5	砥石	埋土	上下端部欠損、平面は長方形、断面は正方形状、砥面は1面、残存長69mm、幅57mm、厚さ49mm、凝灰岩	K61	
6	砥石	埋土	石斧の転用、片面に擦痕、断面は楕円形、残存長91mm、最大幅35mm、安山岩質凝灰岩	K56	
7	硯	埋土	平面は長方形、一端部に径5mm程の孔が貫通、長さ56mm、幅31m、高さ11mm、底面厚4mm、重さ26g、粘板岩	K57	
8	鉄製品	埋土	鉄片、上部が縁となる、残存長26mm、残存幅31mm、厚さ最大5mm	N40	
9	鉄製品	埋土	鉄板を折り曲げU字状、上部はまるくおさまる、残存長19mm、残存幅77mm、厚さ0.6mm	N41	
10	石製品	埋土	石造物の上部物？、断面三角形状、最大高110mm、残存長176mm、残存幅235mm、安山岩	K64	
11	石臼	埋土	茶臼、下臼の鍔部、推定径400mm、厚さ31mm、安山岩	K62	
12	フイゴの羽口	埋土	上部に融解がみられる、推定外径73mm、内径38mm、残存長104mm	P36	
13	フイゴの羽口	埋土	下部に融解がみられる、推定外径86mm、内径60mm、残存長84mm	P37	22-2
14	フイゴの羽口	埋土	外面は融解、推定外径79mm、内径44mm、残存長55mm	P39	
15	フイゴの羽口	埋土	外面は融解、推定外径71mm、内径42mm、残存長60mm	P43	

第119図　SD304B溝跡出土遺物２



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土製品	埋土	鋳造関連土製品、上部形が丸みをもち断面は四角形に肥厚、残存長22mm、残存幅20mm、上部厚10mm、下部厚6mm	P160	
2	土製品	埋土	鋳造関連土製品、平面形は四角形で上部が断面四角形に肥厚、長さ24mm、残存幅35mm、上部厚10mm、下部厚5mm	P158	22-3
3	土製品	埋土	鋳造関連土製品、平面形は四角形で上部が断面四角形に肥厚、長さ27mm、残存幅36mm、上部厚10mm、下部厚5mm	P161	22-4
4	土製品	埋土	鋳造関連土製品、平面形は四角形で上部が断面四角形に肥厚、残存長9mm、残存幅32mm、上部厚8mm	P159	
5	土製品　ジョウ	埋土	鋳造関連土製品、両端部欠損、ゆるい屈曲(R)をもつ、レンガ状で硬質、下部内面が赤変、断面長方形、残存長228mm、厚さ70mm、高さ110mm	P31	
6	土製品	埋土	鋳造関連不明土製品、片面には鉱滓と炭化物が融解付着、裏面はレンガ状で硬質な平滑面、92×99×42mm、	P197	22-5
7	土製品	埋土	鋳造関連不明土製品、片面には鉱滓と炭化物が融解付着、裏面はレンガ状で硬質な平滑面、76×83×45mm、	P198	22-6
8	土製品	埋土	鋳造関連不明土製品、片面には鉱滓と炭化物が融解付着、裏面はレンガ状で硬質な平滑面、99×(50)×58mm、	P199	

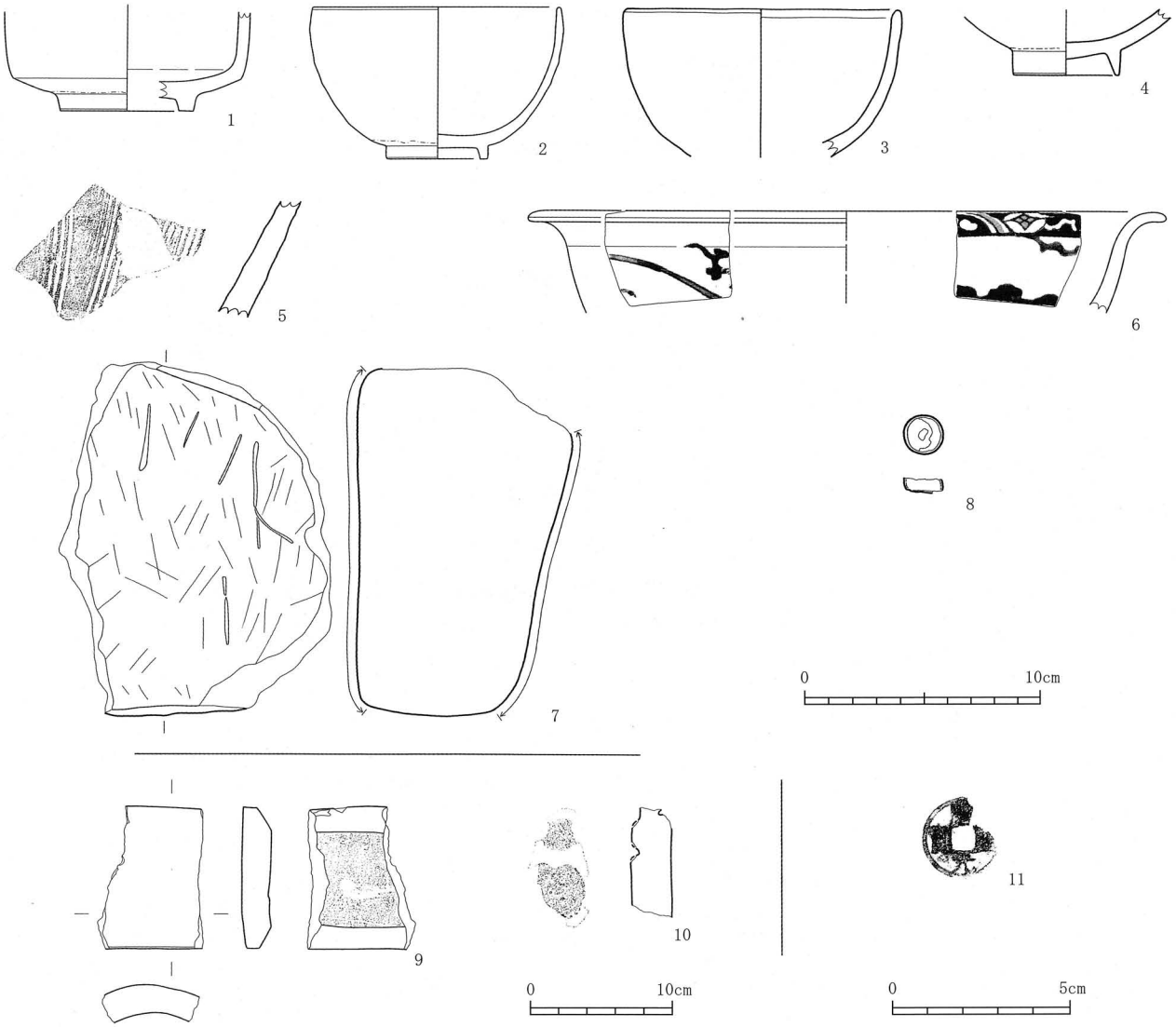
第120図　SD304B溝跡出土遺物３



	層位	色調	性質	備考
SD305	1	褐色 10YR4/6	シルト	混成層
		明黄褐色 10YR6/6	シルト	
SD314	1	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	
SD317	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	小礫を含む
	2	黒褐色 10YR2/2	シルト	粗砂・礫・黄褐色土を含む

	層位	色調	性質	備考
SD326	1	黒褐色 10YR3/2	シルト	黄褐色土粒を含む
	2	黄褐色 10YR5/6	粘土	黒褐色土を斑に含む
SD327	1	褐色 10YR4/4	砂質粘土	黒褐色土を斑に含む
	2	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質粘土	黒褐色土粒を少量含む

第121図　99－3区各溝跡断面

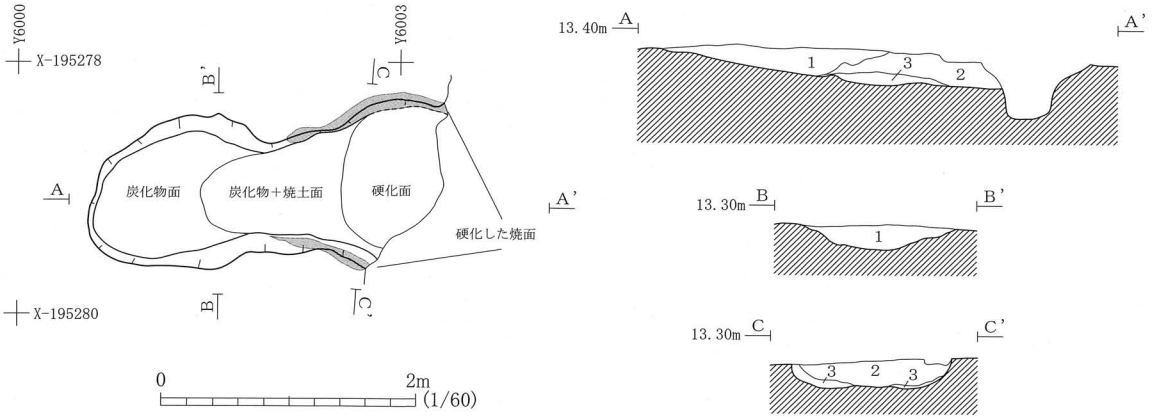


	種別	地点・層位	特徴	登録	写真
1	陶器　香炉	2層	灰釉、底径56mm、体部上部幅104mm、肥前、17c～18c	I827	
2	陶器　碗	2層	灰釉、口径104mm、底径42mm、器高64mm、大堀相馬、18c、被熱	I844	22-22
3	陶器　碗	2層	灰釉、口径116mm、小野相馬、18c、被熱	I845	
4	陶器　碗	2層	灰釉、底径(44)mm、小野相馬、18c、底部に墨塗り	I843	
5	陶器　擂鉢	2層	縦位の幅広の櫛目、岸窯、17c	I837	
6	磁器　皿	2層	染付け、端反、口径(269)mm、肥前、18c	J492	
7	砥石	2層	上下2面が砥面、長さ115mm、幅150mm、最大厚90mm、荒砥、砂岩	K66	
8	キセル	2層	火皿、径16mm程、厚さ0.5mm、部分的に緑青がみられる	N192	
9	近世瓦　面戸瓦	2層	凸面：ナデ、凹面：布目痕、周囲は面取り、残存長75mm、幅102mm、厚さ21mm	G41	
10	近世瓦　軒丸瓦	2層	九曜文？、瓦当厚28mm	G40	
11	古銭	2層	口元通宝	N44	

第122図　SD317溝跡出土遺物

4）窯跡

SO301窯跡　C－11区に位置する。SK519、SD314・317を切る。平面形は中央部がすぼまり瓢箪形となる。残存長2.76m、西側最大幅1.22m、中央部幅88cm、東側残存最大幅1.42m、深さ20cm程を測る。底面はゆるい傾斜面となり東側から西側へ高くなっている。断面形は皿形である。底面には炭化物及び焼土が面となり広がり、東側は熱変で硬化面となっている、東側部の壁も赤変し硬化している。堆積土は3層確認した。焼成遺構と判断されるが形状等から窯跡と判断した。土師器、須恵器、陶磁器、金属製品が出土している。

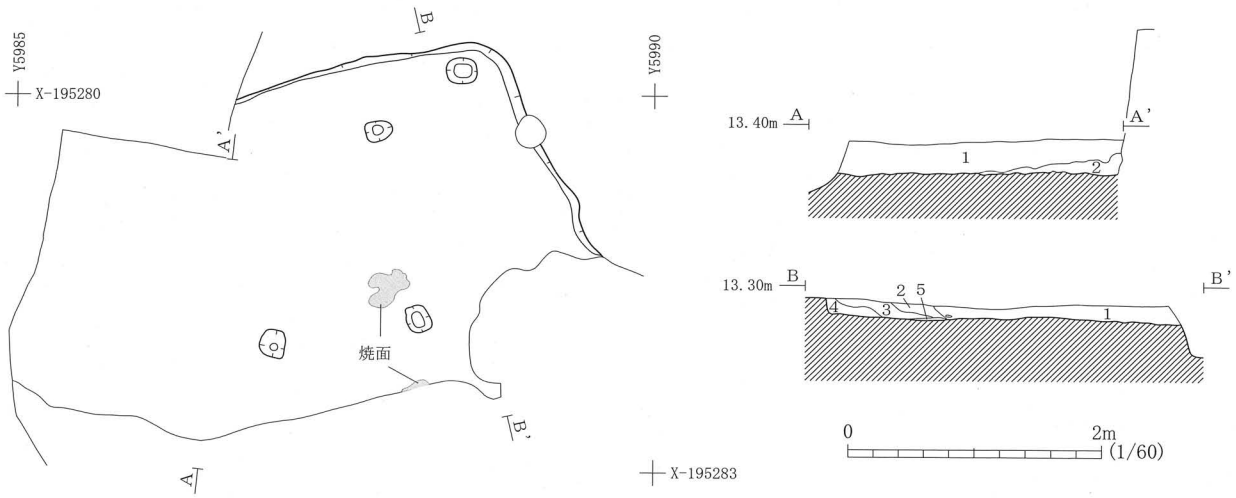


層位	色　調	性　質	備　考
1	褐色　10YR4/4	シルト	炭化物粒・焼土粒をまばらに少量含む
2	褐色　10YR4/6	シルト	焼土ブロック（壁部？）を含む
3	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土粒、灰を多量に含む

第123図　SO301窯跡

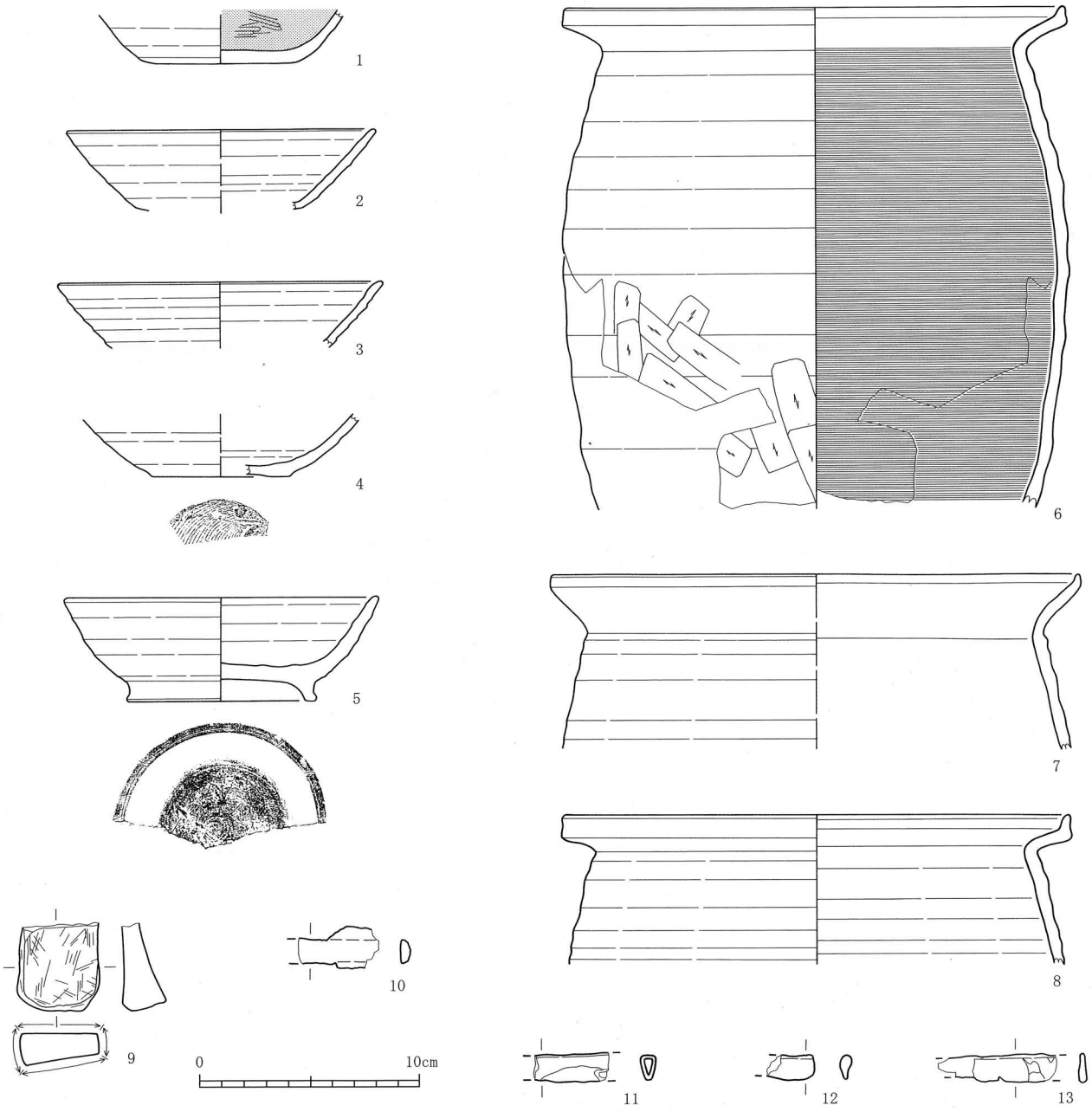
5）竪穴跡

SI302竪穴住居跡　C・D－8区に位置する。調査区東壁部に位置し、SK366及びSD304Bに切られる。平面形は隅丸の方形と判断される。東辺方向はN－25°－Wである。大きさは残存東西長4.57m、残存南北長2.88mを測る。壁はきつく立ち上がり深さ最大26cmの残存である。堆積土は5層確認した。堆積状況から自然堆積と判断される。床面はほぼ平坦で貼床が部分的に確認される。床面上で焼面及びピットが確認されるのみでカマド・周溝等の施設は確認されない。焼面は2地点で確認されるが薄い残存で性格は不明である。ピットも浅いものである。ロクロ使用の土師器坏・甕、須恵器坏類、砥石、鉄製品が出土している。



層位	色　調	性　質	備　考
1	暗褐色　10YR3/4	シルト	黄褐色土粒を斑に含む
2	暗褐色　10YR3/4	砂質シルト	
3	暗褐色　10YR3/3	砂質シルト	褐色土粒を含む
4	褐色　10YR4/4	砂質シルト	
5	灰白色　10YR7/1	シルト	貼床土

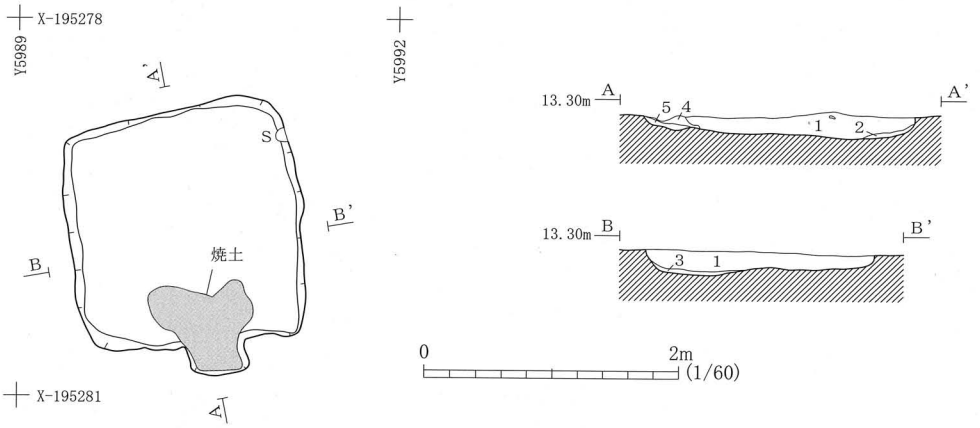
第124図　SI302竪穴住居跡



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師器　坏	1層	口縁部欠損、切り離し不明、体部下端から底部に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、底径(72)mm	C11	
2	須恵器　坏	1層	底部欠損、外傾気味に立ち上がる、口径(140)mm	E2	
3	須恵器　坏	1層	底部欠損、外傾気味に立ち上がる、口径(145)mm	E3	
4	須恵器　坏	1層	口縁部欠損、やや内弯気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、底径(62)mm	E4	
5	須恵器高台付坏	1層	ややきつく外傾気味に立ち上がる、回転糸切り、高台はハの字状、口径141mm、底径85mm、器高48mm	E5	
6	土師器　甕	1層	底部欠損､口縁部はきつく外傾し端部が上方に三角形状に立つ､外面はロクロナデ､手持ちヘラケズリ､内面は回転ヘラナデ､口径(226)mm	C9	19-20
7	土師器　甕	1層	下半部欠損、口縁部はややゆるく立ち上がり端部が上方に三角形状に立つ、内外面ともロクロナデ、口径(240)mm	C15	
8	土師器　甕	1層	下半部欠損、口縁部はきつく短く立ち上がり端部が上方に三角形状に立つ、内外面ともロクロナデ、口径(229)mm	C16	
9	砥石	埋土	上部欠損、平面形は長方形、断面は長方形でやや分銅形、砥面3面、残存長40mm、幅38mm、最大厚15mm、凝灰岩	K85	
10	刀子	埋土	錆化が著しい、断面形は楕円形を呈す、残存長36mm、幅11mm、厚さ4mm	N48	
11	刀子	埋土	平棟平造、残存長34mm、幅13mm、上部の厚さ6mm、	N45	
12	刀子	埋土	残存長22mm、幅11mm、厚さ5mm、断面歪んだ三角形	N46	
13	刀子	埋土	残存長54mm、幅12mm、厚さ2～3mm、断面四角形	N47	

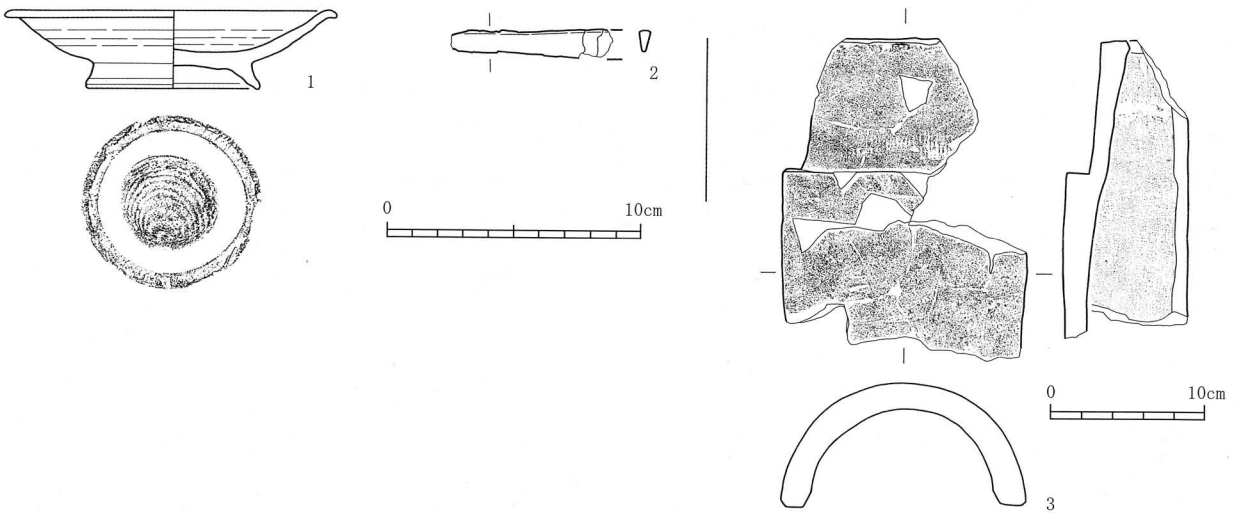
第125図　SI302竪穴住居跡出土遺物

SI304竪穴住居跡　C－8・9区に位置する。SD327に切られる。平面形は隅丸の正方形である。西辺方向はN－7°－Wである。東西軸長1.88m、南北軸長1.87mを測る。極めて小型のものである。壁はややゆるく立ち上がり、深さ17cm程の残存である。堆積土は5層確認した。自然堆積と判断される。床面はやや凹凸面となる。南辺にカマドが設置されるが柱穴・周溝は確認されない。カマドは奥壁に突出する形のもので側壁等は残存しない。焼土が一面に広がり、丸瓦が潰れた状態で確認されている。土師器、須恵器、丸瓦、刀子が出土している。



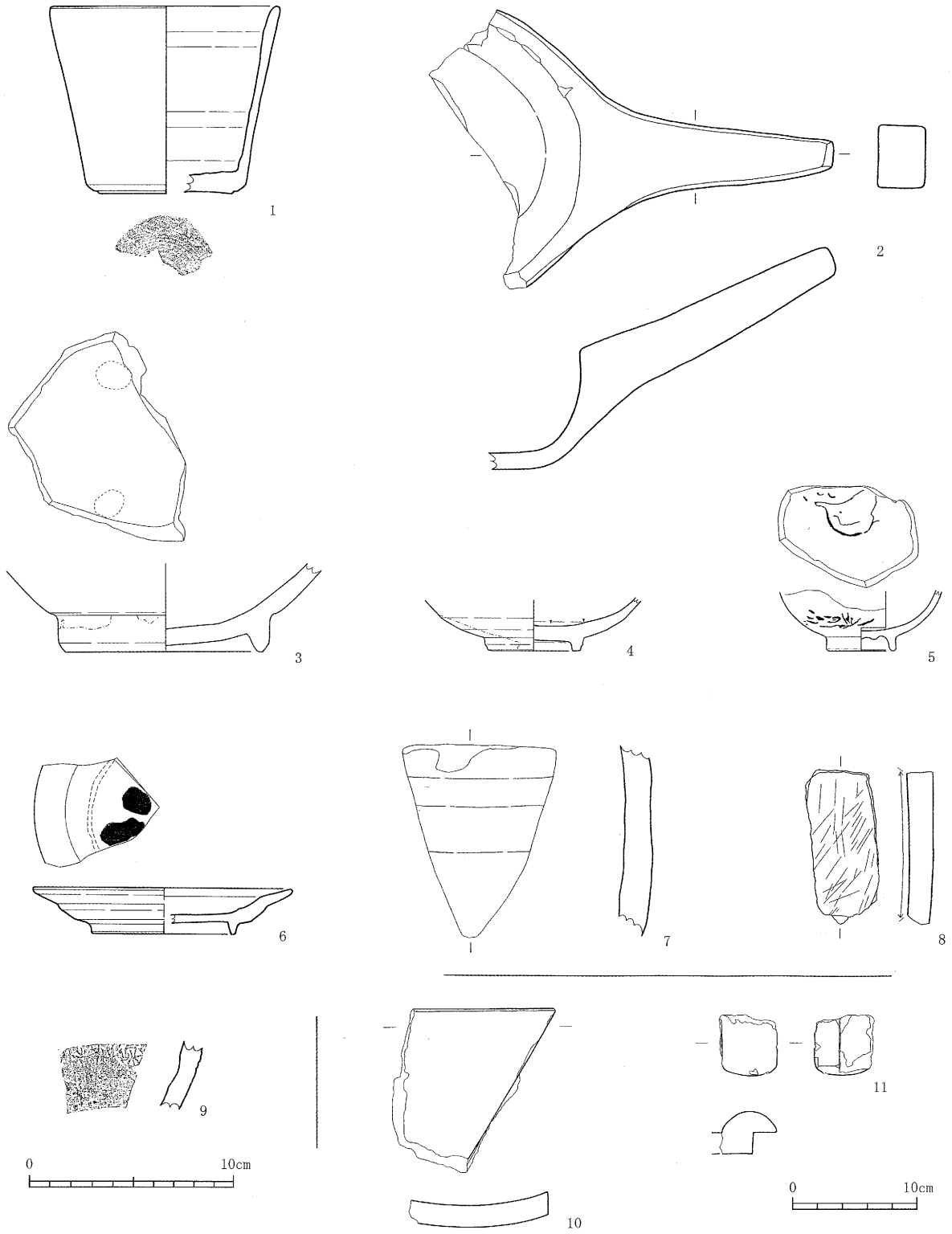
	層位	色　調	性　質	備　考
SI304	1	灰黄褐色　10YR4/2	シルト	ややグライ化
	2	黄褐色　10YR5/6	粘土質砂	
	3	にぶい黄褐色　10YR5/4	粘土質シルト	
カマド	4	暗褐色　10YR3/3	シルト質粘土	炭化物、焼土を多量に含む
	5	褐色　10YR4/4	シルト	カマド、焼土、炭化物を多量に含む

第126図　SI304竪穴住居跡



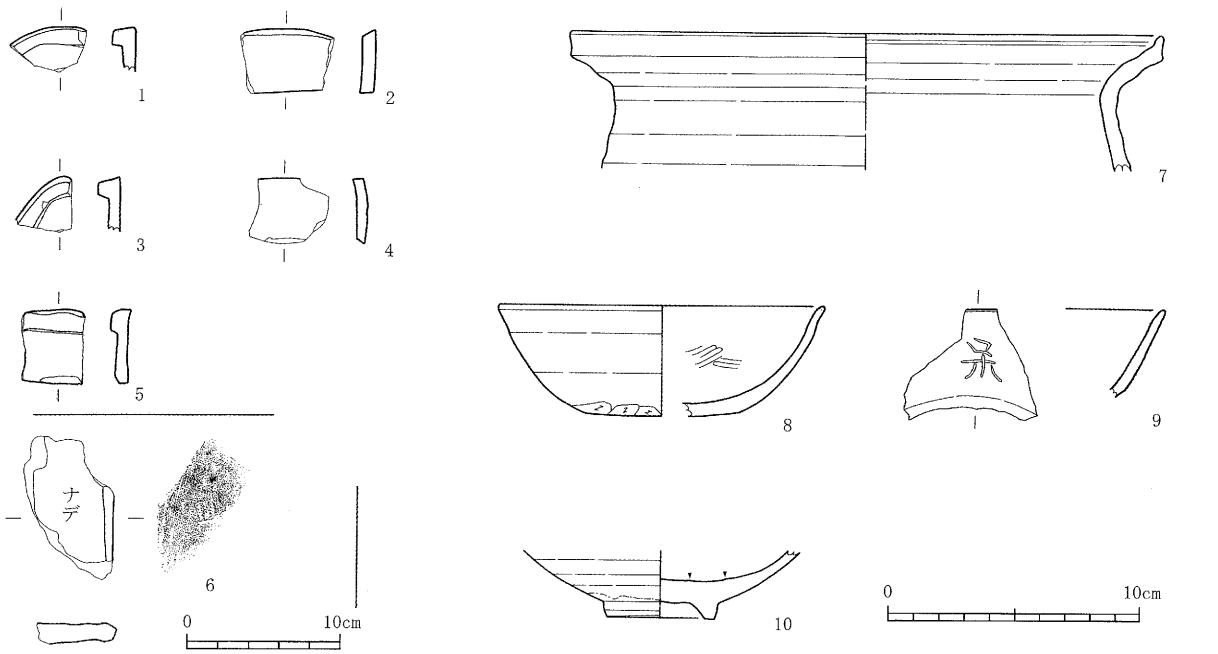
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	須恵器　高台付皿	床面	ゆるく内弯気味に立ち上がり口唇部外反、回転糸切り、高台部はハの字状で断面は三角形状、口径130mm、高台形68mm、器高31mm	E8	19-26
2	刀子	埋土	平棟平造、残存長63mm、幅9～12mm、上部の厚さ4mm	N49	21-15
3	古代瓦　丸瓦	埋土	玉縁付、凸面：縄叩き、ロクロナデ、凹面：布目痕、端部はヘラケズリ、残存長197mm、厚さ17mm、玉縁長88mm	F10	

第127図　SI304竪穴住居跡出土遺物



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	瓦質土器　鉢	粗掘	火入れ？、口径(112)mm、底径(64)mm、器高92mm、底部に回転糸切り痕	H41	20-14
2	瓦質土器　十能	粗掘	先端鍬部欠損、残存長197mm、柄部は長さ131mmで断面四角形	H42	20-15
3	陶器　鉢	粗掘	底径96mm、見込みに目跡、瀬戸美濃？、18c	I803	
4	陶器　碗	粗掘	銅緑釉、蛇ノ目釉ハギ、底径44mm、唐津系、17c後半	I804	
5	陶器　碗	粗掘	底径32mm、産地不明、19c	I810	
6	陶器　皿	粗掘	青織部、折縁皿、笹文、口径(122)mm、底径(70)mm、器高23mm、17c後半、被熱	I806	
7	陶器　甕	粗掘	中世陶器、両側断面に磨り面あり	I1065	
8	陶器　甕	粗掘	中世陶器、平面形は長方形、片面に擦り痕、砥石に転用？	I801	
9	陶器　甕	粗掘	小片、外面に押印、白石系、13～14c	I1062	
10	近世瓦　平瓦	粗掘	一方が斜めに切断されている、厚さ19mm	G43	
11	近世瓦	粗掘	桟瓦？、端部が半円形状に盛り上がる、下部は直角に切り取られる、45×50×35mmの小片	G42	

第128図　99－3区遺構外出土遺物1



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土製品	粗掘	鋳造関連土製品、上部形が丸みをもち断面は四角形に肥厚、残存長18mm、残存幅32mm、上部厚10mm、下部厚5mm	P153	
2	土製品	粗掘	鋳造関連土製品、平面は四角形、長さ23mm、残存幅34mm、厚さ5mm	P156	
3	土製品	粗掘	鋳造関連土製品、上部形が丸みをもち断面は四角形に肥厚、残存長22mm、残存幅29mm、上部厚9mm、下部厚5mm	P152	
4	土製品	粗掘	鋳造関連土製品、平面は四角形、長さ26mm、残存幅33mm、厚さ4mm	P157	
5	土製品	粗掘	鋳造関連土製品、平面形は四角形で上部が断面四角形に肥厚、長さ30mm、残存幅25mm、上部厚7mm、下部厚4mm	P155	22-7
6	古代瓦　熨斗瓦	粗掘	凸面：ナデ、凹面：布目痕、ナデ、端部はヘラケズリ、残存長93mm、厚さ12mm	F8	
7	土師器　甕	粗掘	口縁部はややゆるく立ち上がり端部は上方に三角形状に立つ、内外面ともロクロナデ、口径(234)mm、	C13	
8	土師器　坏	粗掘	内弯気味に立ち上がる、外面の体部下端から底部に手持ちヘラケズリ、内面は黒色処理・ヘラミガキ、口径130mm、底径62mm、器高44mm	C12	
9	須恵器　坏	粗掘	底部欠損、体部外面に線刻文字？あり	E11	19-27
10	磁器　皿	粗掘	染付け、蛇ノ目釉ハギ、底径40mm、肥前、17c末～18c中	J454	

第129図　99－3区遺構外出土遺物2

(2) 2002－1区の調査

検出遺構は土坑7基、溝跡3条、石敷遺構1基、柱穴・ピット少数である。

1）土坑

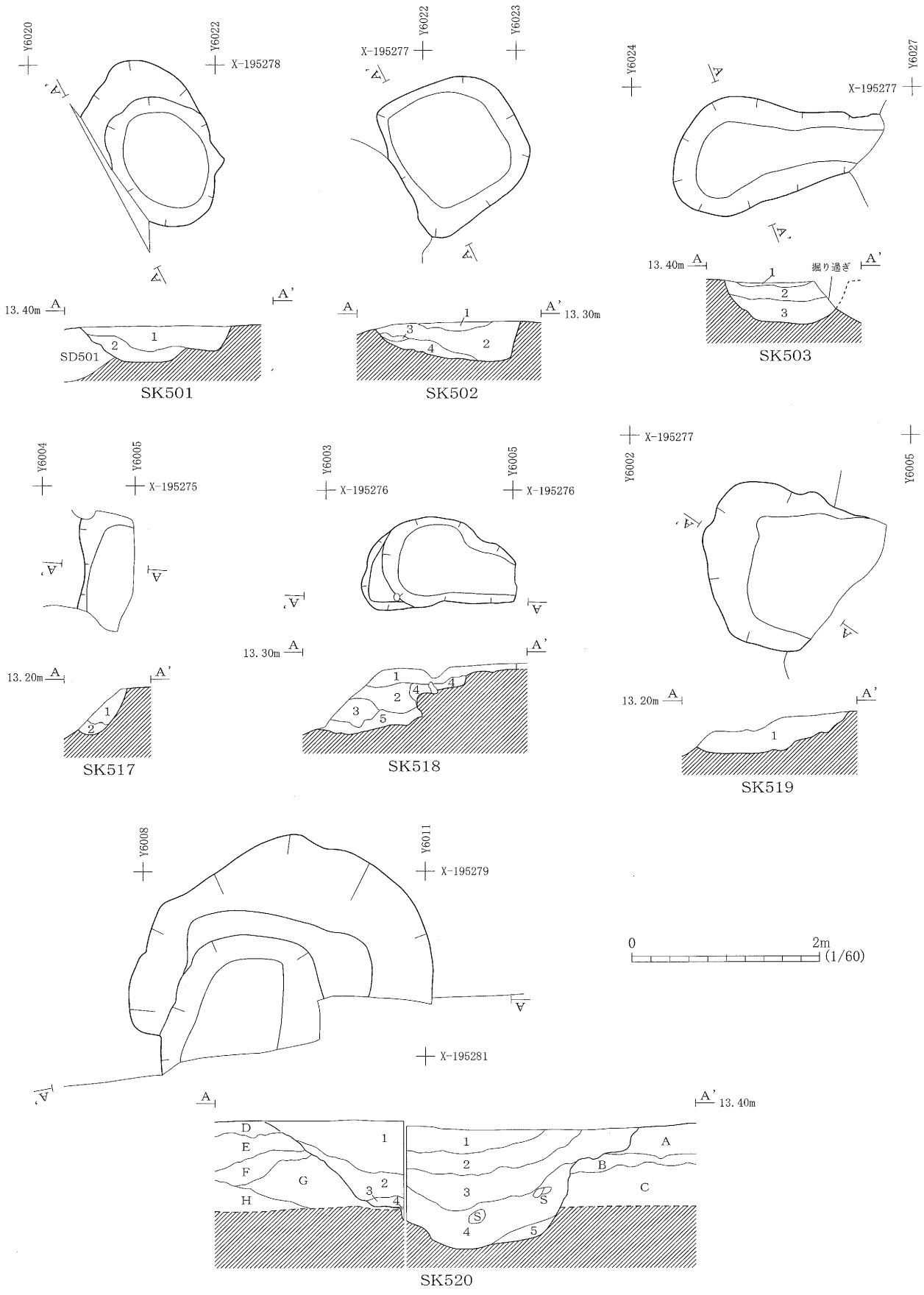
SK501土坑　C－15区に位置する。平面形はやや不整な長円形である。長軸は南北方向で1.89m、短軸1.13m、まで確認、深さ39cmを測る。壁面はきつい立ち上がりとなり、底面は北側に段がみられ階段状となるが面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認した。瓦質土器火鉢、陶器（碗・蓋・鉢）、磁器が出土している。

SK502土坑　C－15区に位置する。平面形はやや不整な方形である。長軸は南北方向で1.49m、短軸1.4m、深さ41cmを測る。北壁はきつく立ち上がるが南壁周辺ではゆるやかな立ち上がりとなり底面は傾斜面となる。断面形は歪んだ三角形状となる。堆積土は4層確認した。陶器（皿・碗）、鋳型が出土している。

SK503土坑　C－15・16区に位置する。東側が削平されるが平面形はやや不整な長円形と判断される。長軸は東西方向で2.26m、短軸最大1.27m、深さ43cmを測る。壁はきつく立ち上がり底面はやや丸みをもつ。断面形はやや深い皿形である。堆積土は3層確認した。土器片が出土している。

SK517土坑　B－11区に位置する。SD505・518に切られる。平面形は長円形のものと判断される。長軸は南北方向で残存長1.2m、短軸残存長53cm、深さ48cmを測る。壁はきつく立ち上がり底面は丸みをもつ。断面形はきついU字状となる。堆積土は2層確認した。土師質土器皿が出土している。

SK518土坑　B・C－11区に位置する。SD317・505に切られる。平面形は不整な長円形と判断される。長軸は東西方向で残存長1.65m、短軸99cm、深さ62cmを測る。壁は凹凸面となりゆるく立ち上がる。断面形はゆるい皿形である。堆積土は5層確認した。土器片が出土している。



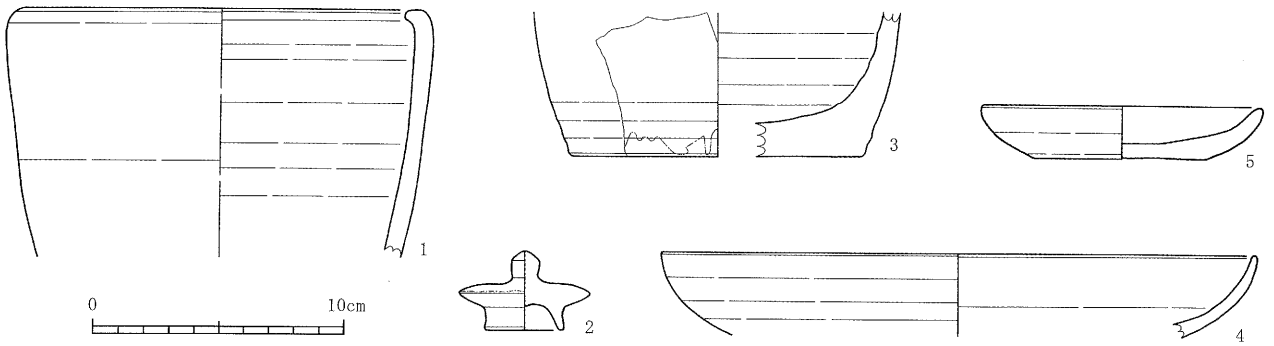
第130図　2002－1区土坑

	層位	色調	性質	備考
SK501	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	小礫、炭化物をまばらに含む
	2	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
SK502	1	褐色 10YR4/4	砂質シルト	炭化物粒を含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・焼土粒を含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	
	4	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒・黄褐色土ブロックを含む
SK503	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	灰白土の砂を層的にうすく含む
	2	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	褐色土の砂を層的にうすく含む
	3	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	褐灰色土の砂を層的にうすく含む
SK517	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	黒褐色土を斑に含む
	2	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	
SK518	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	にぶい黄橙色土をまばらに含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土をブロックで含む
	3	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土を互層状に含む
	4	黄褐色 10YR5/6	粘土	暗褐色土ブロックを含む
	5	黄褐色 10YR5/6	粘土	暗褐色土をスジ状に含む
SK519	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	黄褐色土をスジ状に含む
SK520	1	褐色 10YR4/4	シルト	黄褐色土をスジ及びブロックで含む
	2	暗褐色 10YR3/4	シルト	黄褐色土・炭化物粒を含む
	3	黄褐色 10YR5/6	シルト	暗褐色土ブロックを含む
	4	暗褐色 10YR3/3	シルト	底面付近はグライ化
	5	黄褐色 10YR6/8	砂質シルト	褐灰色土をスジ状に含む
SD504B	A	黄褐色 10YR3/4	シルト	
	B	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	C	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	
	D	褐色 10YR4/4	シルト	
	E	黒褐色 10YR3/2	シルト	
	F	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	
	G	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	
	H	灰白色 10YR7/1	砂質シルト	

第130図の土層註記

SK519土坑　C－11区に位置する。SD317・505、SO301に切られる。平面形は不整方形と判断される。長軸は東西方向で残存長1.91m、短軸1.76m、深さ42cmを測る。壁はゆるく立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。土器片が出土している。

SK520土坑　C－12・13区に位置する。SK505を切る。調査区南壁に位置し南半部が不明となるが、平面形は不整な長円形と判断される。南北残存長2.36m、東西長3.11m、深さ1.28mを測る。壁は全体としてきつく立ち上がり底面はやや丸みをもつ。断面形は逆台形状である。堆積土は5層確認しゆるいレンズ状堆積である。瓦質土器擂鉢、陶器、磁器が出土している。



	地点・層位	種別	特徴	登録	写真
1	SK501 埋土	瓦質土器 火鉢	下部欠損、口縁端部短く丸く内側におさまる、口径(166)mm	H102	
2	SK501 埋土	陶器 蓋	小型品、乳頭状のツマミ、口径51mm、器高31mm、下部径30mm、鉄釉、瀬戸美濃？、18c	I1373	22-23
3	SK501 埋土	陶器 鉢	口径117mm、内外面に自然釉、底部に回転糸切り痕、産地不明	I1379	
4	SK502 埋土	陶器 皿	灰釉、口径(232)mm、大堀相馬、18c後半	I1390	
5	SK517 埋土	土師質土器 皿	ロクロ成形、ややゆるく立ち上がる、全体的に摩滅、口径(111)mm、底径(69)mm、器高21mm	D85	

第131図　2002－1区土坑出土遺物

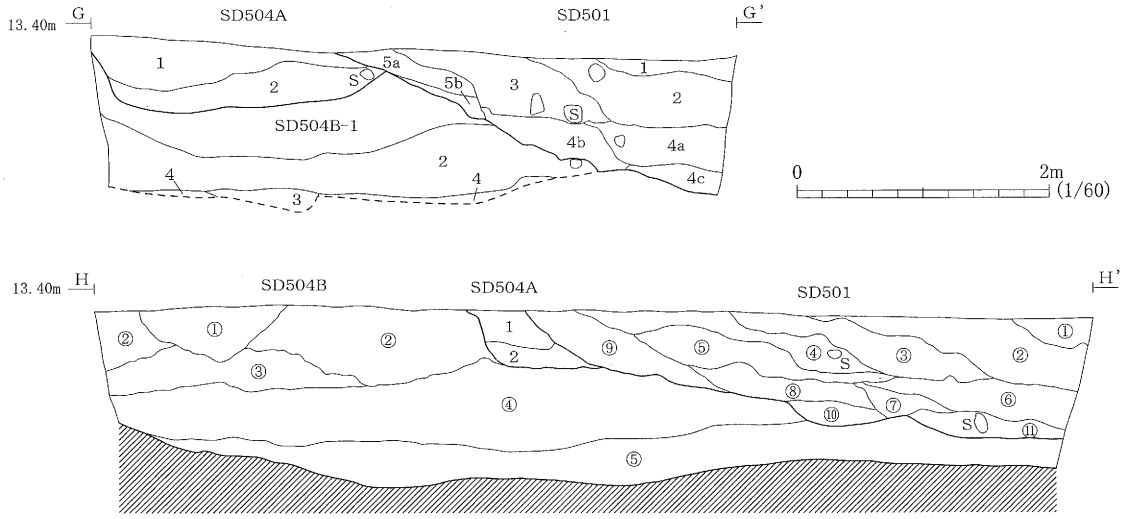
2）溝跡

SD501溝跡　B～D－13～17区に位置する。SK501・502・503に切られ、SD504A・504Bを切る。北辺のみの確認となる。北東方向に直線的に延びている。位置等から西側に位置するSD303Aの東側部分と判断される。確認長22.6m、残存最大上端幅4.75m、深さ最大1.08mを測る。壁面はゆるく北側へ立ち上がっている。底面は凹凸面となる。堆積土は西側部で11層確認した。上部はシルト層となるが下部は砂層となる。土器類、中世陶器（白石）、土師質土器（皿・香炉・灯明具・火鉢・焜炉）、瓦質土器（鉢・火鉢・擂鉢）、近世瓦（熨斗瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦）、陶器（大堀相馬・堤？・岸窯・瀬戸美濃・丹波・肥前）、磁器（肥前）、とりべ？、るつぼ、フイゴの羽口、鋳型、鋳造関連土製品、炉壁、土製品（鈴）、ヘギ板、竹製品、箸、古銭、キセル、釘、砥石、石臼、硯、石器が出土している。

SD504A溝跡　B・C－14～17区に位置する。SD501に切られSD504Bを切る。ほぼSD501の下部に位置する。北東方向に直線的に延びている。残存確認長5.14m、上端幅2.24m、深さ56cmを測る。壁はややきつく立ち上がり、底面はゆるい凹凸面となるがほぼ平坦である。断面形は逆台形である。堆積土は2層確認した。土師質土器皿、磁器が出

土している。

SD504B溝跡　B～D－12～17区の全域に位置する。最下層に位置しすべての遺構に切られる。北側に向かいゆるく傾斜している壁面の確認のみで詳細は不明となる。破片とはなるが大量の遺物が出している。土師器、須恵器、古代瓦、中世陶器、土師質土器、瓦質土器、磁器、砥石、石鉢、土玉、フイゴの羽口、釘等がある。



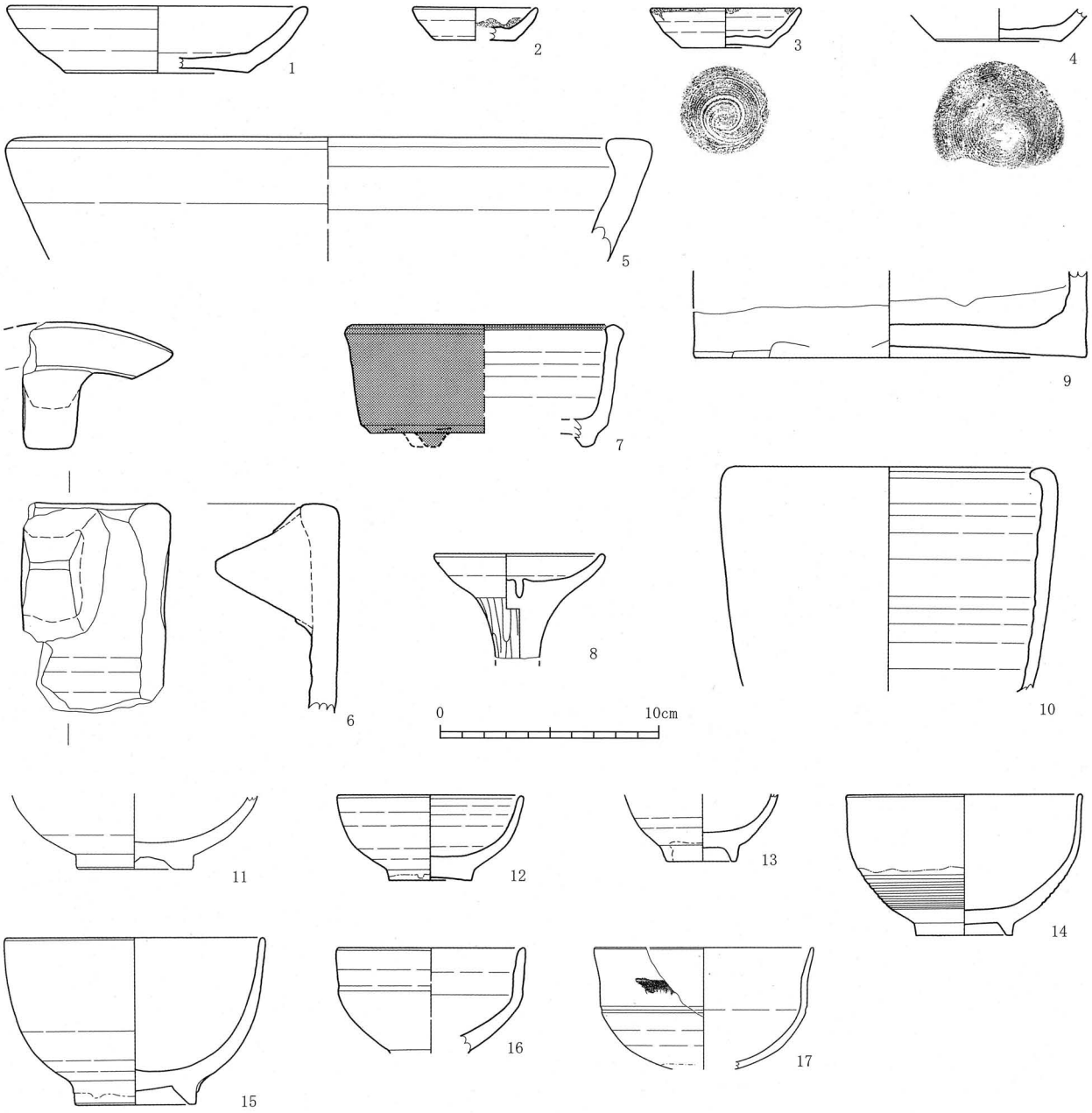
	層位	色調	性質	備考
SD501	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	炭化物粒を細かく含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物粒を少量含む
	3	暗褐色 10YR3/4	シルト	礫、炭化物を含む
	4a	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
	4b	暗褐色 10YR3/3	シルト	
	4c	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	層上面に酸化鉄集積
	5a	褐色 10YR4/4	シルト	炭化物をまばらに含む
	5b	褐色 10YR4/4	シルト	
SD504A	1	褐色 10YR4/4	シルト	混成層、整地層？
		明黄褐色 10YR6/6	シルト	
	2	黒褐色 10YR3/2	シルト	
SD504B	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	砂をスジ状に含む
	2	灰黄褐色 10YR5/2	砂	粗砂、小礫を含む
	3	黄灰色 10YR5/1	粘土	グライ化
	4	明黄褐色 10YR7/6	砂質シルト	
SD501	①	褐色 10YR4/4	シルト	暗褐色土をうすく含む

	層位	色調	性質	備考
SD501	②	褐色 10YR4/4	シルト	
	③	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物・褐色土をまばらに含む
	④	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物をまばらに含む
	⑤	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	砂・炭化物をまばらに含む
	⑥	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物をまばらに含む
	⑦	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	褐灰色土を含む
	⑧	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	炭化物をまばらに含む
	⑨	褐色 10YR4/4	砂	灰黄褐色土を含む
	⑩	灰黄褐色 10YR5/2	砂	小礫を含む
	⑪	褐灰色 10YR4/1	砂	小・中礫を含む
SD504B	①	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	砂・にぶい黄褐色土ブロックを含む
	②	褐灰色 10YR5/1	シルト	暗褐色土・明黄褐色土を斑に含む
	③	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	
	④	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂	層下部に土器類が多量にみられる
	⑤	灰黄褐色 10YR5/2	砂	層下部に酸化鉄集積面あり

第132図　SD501・SD504A・B溝跡断面

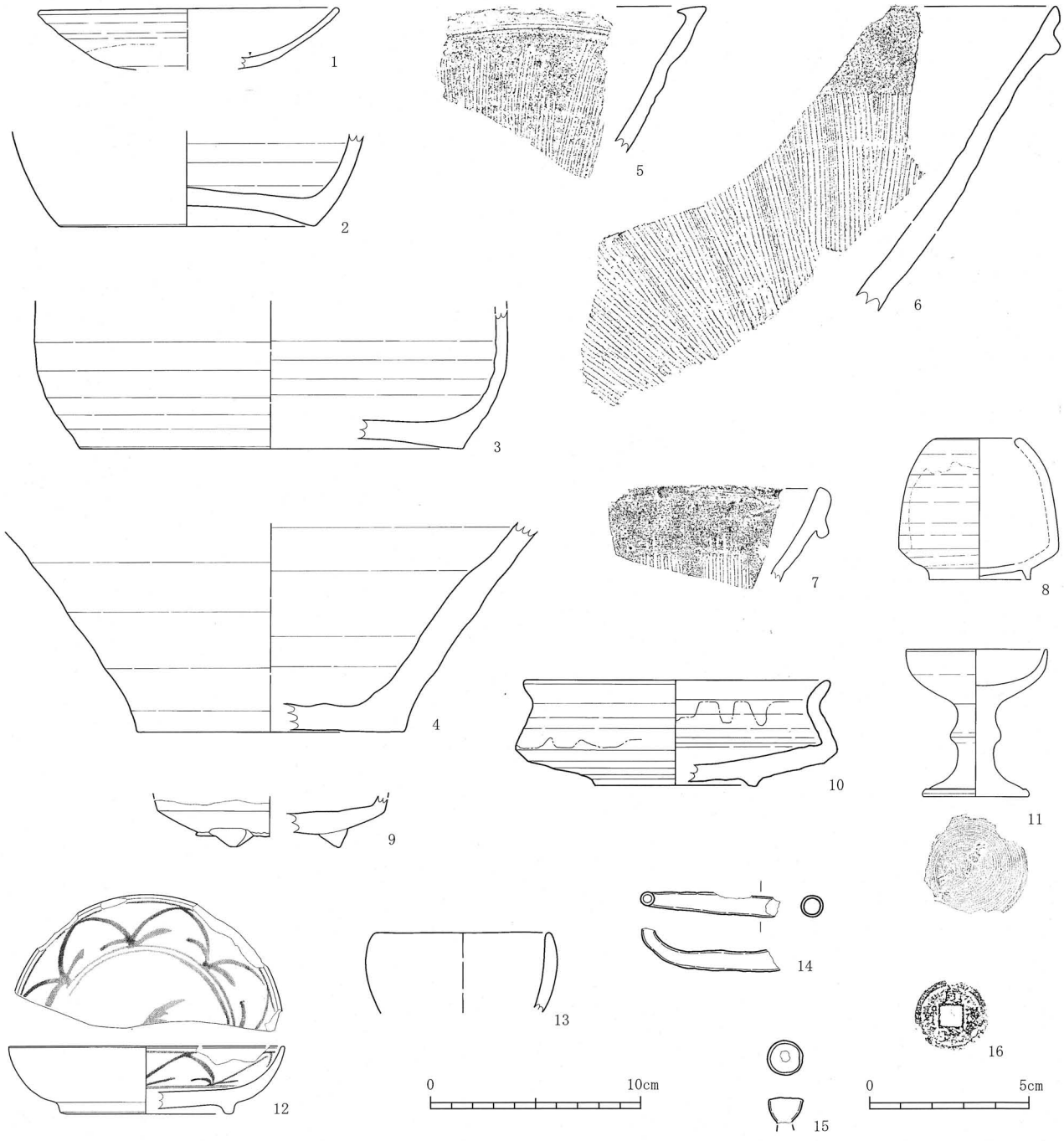
3）石敷遺構

SD505石敷遺構　B・C－11～13区に位置する。SD314・317・303A・303B及びSK520に切られ、SD304A・304B及びSK517・518・519を切る。平面形は方形を基調とする菱形を呈する。さらにSD325とした溝跡が南東端部から南西側へ長細く延びている。方形内部には積土された舌状形の張り出しが南側から延びている。底面には拳大の礫が敷き詰められ、舌状部の北西側には人頭大の礫が部分的とはなるが配置されている。舌状部を中心にみると南北長5.8m、東西長6.2mを測る。石敷部は溝状となり断面形は逆台形状となり深さは69cm程を測る。堆積土は4層確認した。砂質シルト土でレンズ状堆積を呈している。舌状部は褐灰色土と暗褐色土の混成層を積み上げている。南東端部側はゆるく南側へ高くなっている。堆積土は2層確認した。堆積土中からは土師器、須恵器、中世陶器、土師質土器、瓦質土器、陶器（堤）、硯、石鉢、釘、土鈴が出土し、舌状部の積土からは土師質土器皿、陶器向付（御深井釉・赤織部）、古銭、フイゴの羽口、鋳型、釘が出土している。なお、石敷下部で大小の土坑を10基確認している。石敷遺構内部に納まっており関連遺構と思われたが出土遺物等から判断しSD505に削平された土坑の残存部と考えられた。土師器、古代瓦、陶器皿（志野）が出土している。



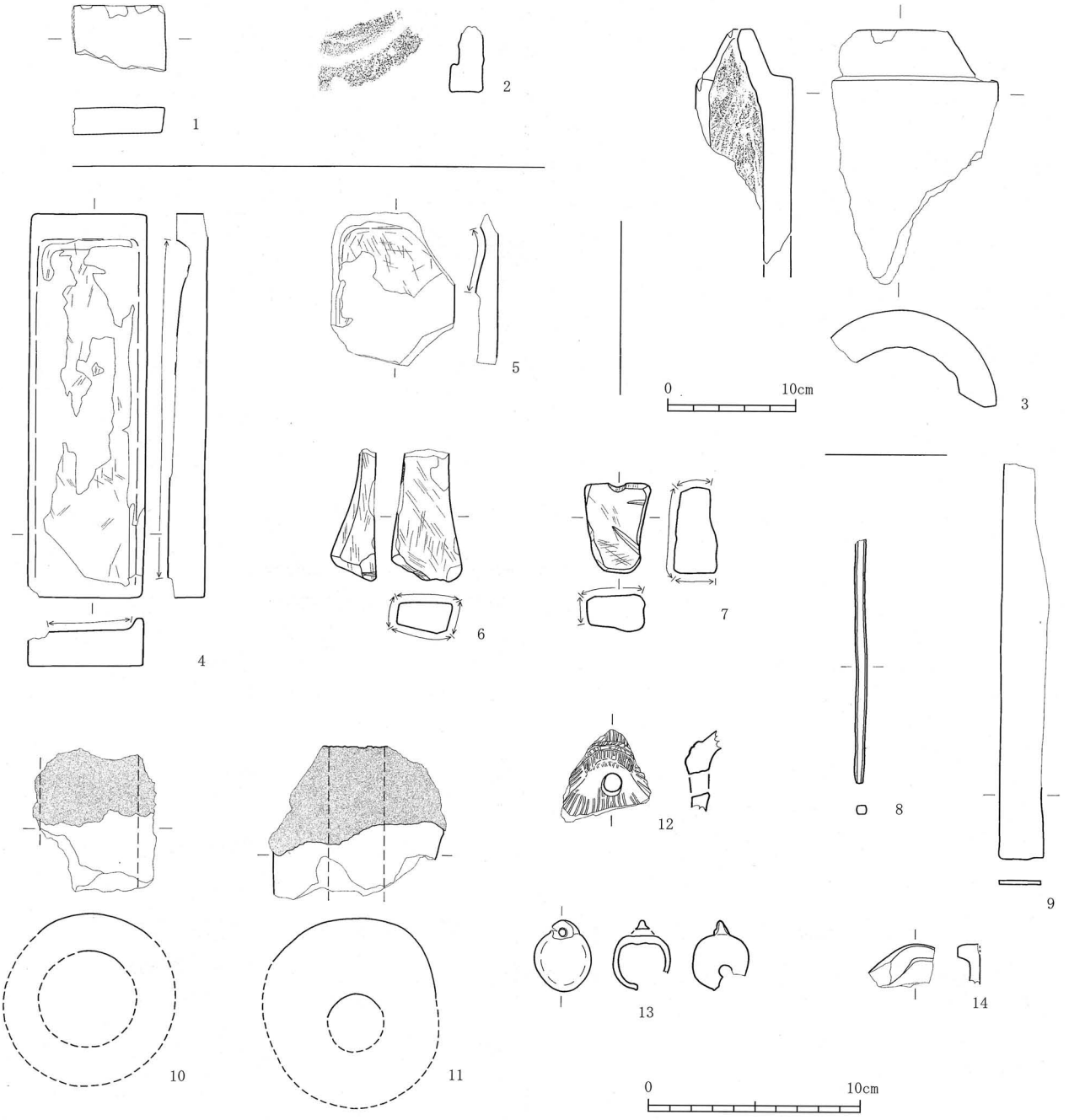
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径(138)mm、底径(84)mm、器高30mm	D75	
2	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、小型品、外傾気味に立ち上がる、切り離し不明、口径(58)mm、底径(36)mm、器高15mm、内外面にタール付着	D73	
3	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、小型品、外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径69mm、底径40mm、器高18mm、口縁部内外面にタール付着	D74	20-6
4	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、口縁部欠損、外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、底径60mm、底面にタール付着	D77	
5	土師質土器　火鉢	埋土	口縁部内側が三角形状にまるく肥厚、外面はヘラミガキ、口径(296)mm	D72	
6	土師質土器　焜炉	埋土	口縁部内側に断面三角形状の支えが付く、直立気味、	D70	
7	土師質土器　香炉	埋土	直立気味に立ち上がり口縁端部丸くおさまる、底部下端にヘラケズリ、脚は3ヶ?、外面に赤漆、口径(128)mm、底径(112)mm、器高56mm	D76	
8	土師質土器　灯明具	埋土	下部欠損、皿に脚が取りつく形状、皿底に径4mm、深さ8mm程の孔あり、脚外面に縦位のヘラミガキ、口径70mm、残存高48mm	D71	
9	瓦質土器　鉢	埋土	体部は垂直に立つ、底部に回転糸切り痕、外面はやや幅広のヘラミガキ、底径180mm	H94	
10	瓦質土器　火鉢	埋土	口唇部が短く丸く内側におさまる、外面はヘラミガキ、口径(146)mm	H95	20-16
11	陶器　碗	3層	灰釉、底径52mm、肥前、17c前半	I1597	
12	陶器　碗	4層	鉄釉、口径85mm、底径37mm、器高39mm、産地不明、18c	I1415	22-24
13	陶器　碗	4層	鉄釉、底径31mm、肥前、17c後半	I1502	
14	陶器　碗	4層	灰釉、口径(108)mm、底径(44)mm、器高64mm、大堀相馬、18c前半	I1481	
15	陶器　碗	3層	緑釉、見込みに目跡、口径118mm、底径54mm、器高76mm、瀬戸美濃、18c	I1405	
16	陶器　碗	5層	灰釉、口径(84)mm、大堀相馬、18c後半	I1516	
17	陶器　碗	埋土	灰釉、口径(100)mm、大堀相馬、18c	I1636	

第133図　SD501溝跡出土遺物1



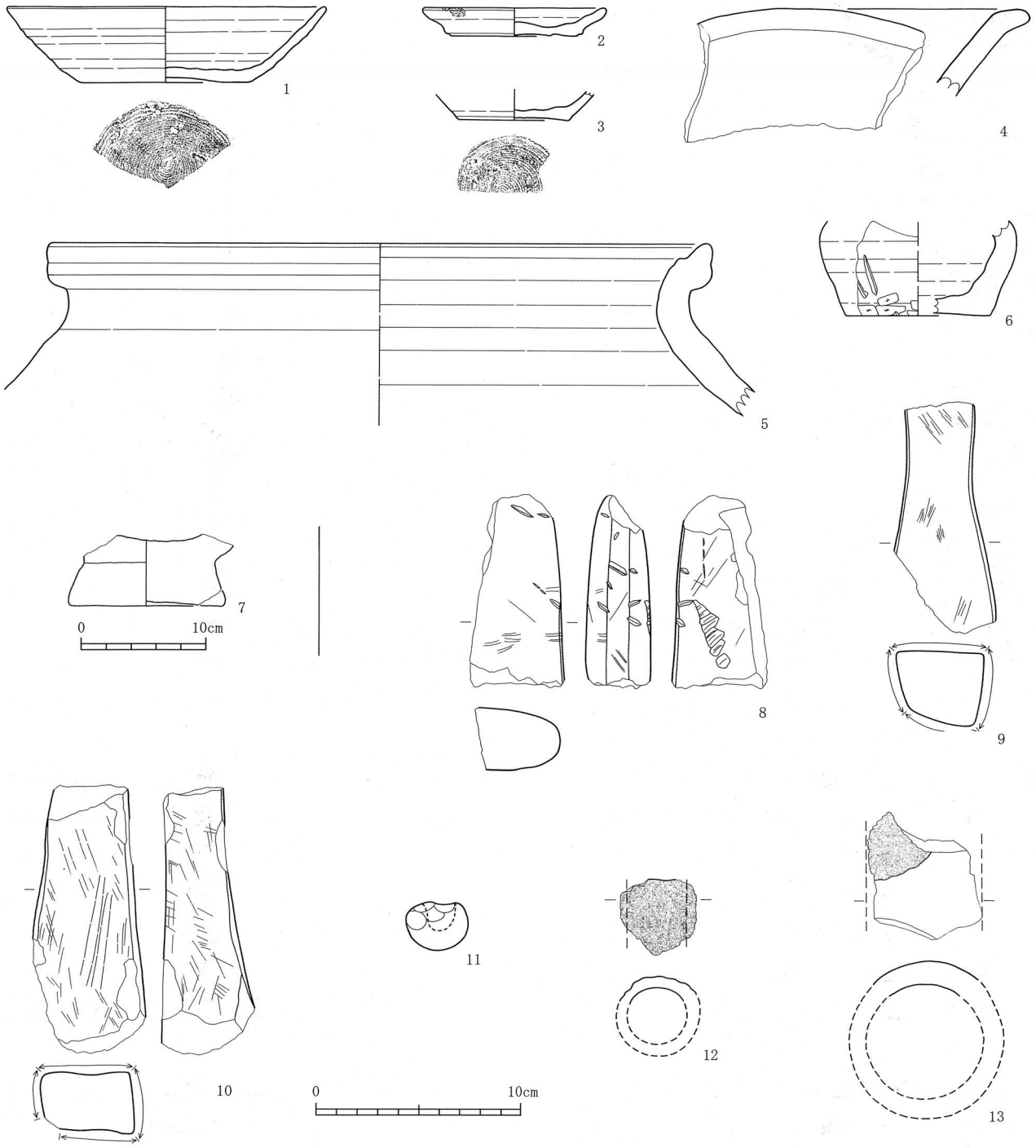
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　皿	④層	灰釉、口径(140)mm、肥前、18c	I1546	
2	陶器　甕？	②層	底部径120mm、産地不明	I1394	
3	陶器　甕？	④層	底部径180mm、産地不明	I1416	
4	陶器　鉢	④層	底部径126mm、白石？、13c～14c	I1325	
5	陶器　擂鉢	③層	鉄釉、口縁端部は平縁で内側に断面三角形状に肥厚、縦位のやや幅広の櫛目、丹波、17c後半	I1587	22-25
6	陶器　擂鉢	③層	鉄釉、密な縦位の櫛目、堤？、18c	I1588	
7	陶器　擂鉢	④層	鉄釉、やや間隔をもった櫛目、堤？、18c	I1557	
8	陶器　灰落とし？	③層	灰釉、内弯気味に立ち上がり丸くおさまる、口径39mm、底径48mm、器高67mm、完形品、大堀相馬？、18c後半	I1411	23-1
9	陶器　香炉	埋土	四角錐状の脚3ヶ？、底部に回転糸切り痕、底部径70mm、岸窯、17c中～	I1623	
10	陶器　香炉	④層	鉄釉、口径(144)mm、底径(77)mm、器高50mm、瀬戸美濃、17c	I1435	
11	陶器　仏飯器	④層	灰釉、口径66mm、底径50mm、器高70mm、大堀相馬、18c後半	I1558	23-2
12	磁器　皿	④層	染付け、口径130mm、底径80mm、器高32mm、肥前、18c	J790	24-5
13	とりべ？	埋土	内弯気味に立ち上がり丸くおさまる、口径(84)mm	R38	
14	キセル	埋土	雁首、残存長65mm、羅宇側径10mm	N209	21-4
15	キセル	埋土	火皿、径16mm	N206	
16	古銭	埋土	寛永通宝（江戸、新寛永 18c以降）	N202	21-2

第134図　SD501溝跡出土遺物２



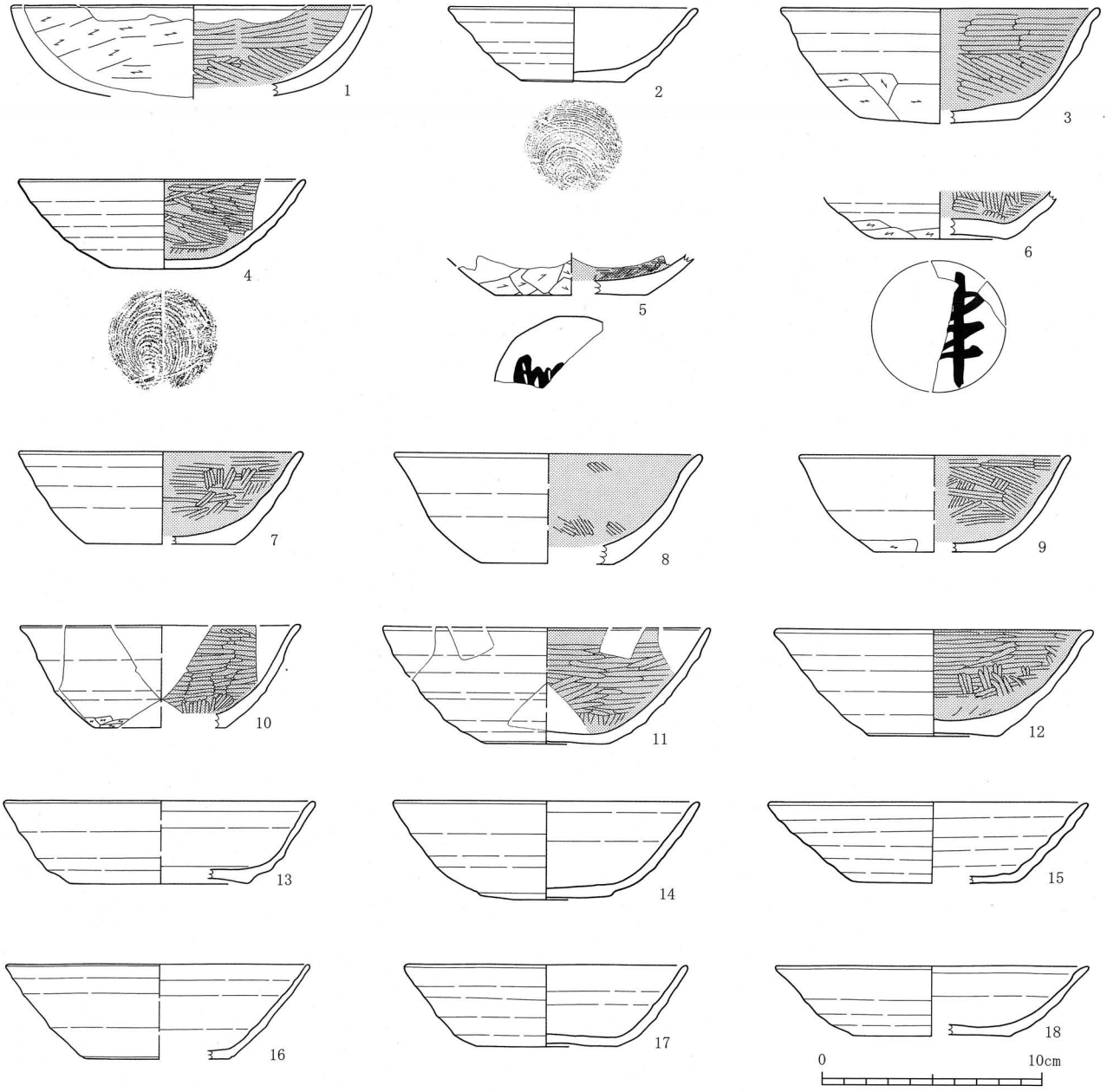
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	近世瓦　熨斗瓦	埋土	小片、残存長50mm、残存幅70mm、厚さ21mm	G199	
2	近世瓦　軒丸瓦	④層	三巴文(左巻)、厚さ18mm	G201	20-20
3	近世瓦　丸瓦	④層	凸面：縦位のナデ、凹面：布目痕、厚さ28mm、玉縁部長35mm	G202	
4	硯	④層	縁ほぼ欠損、上方に海部、長さ180mm、幅54mm、最大厚22mm、縁高5mm、粘板岩	K175	
5	硯	④層	欠損品、上部に海部、残存長72mm、残存幅58mm、最大厚10mm、粘板岩	K174	
6	砥石	④層	上部欠損、平面形は長方形、中央部がやや凹み分銅形、砥面は4面、断面四角形、残存長61mm、最大幅33mm、厚さ14mm、凝灰岩	K171	
7	砥石	④層	平面形は長方形、砥面は3面、断面四角形、上部に径9mm程の孔の残存あり、残存長43mm、最大幅30mm、厚さ20mm、凝灰岩	K172	
8	木製品　箸	④層	上部欠損、断面四角形、残存長115mm、幅4～5mm	L34	
9	木製品　ヘギ板	④層	上部欠損、断面四角形で薄板状、残存長186mm、幅21mm、厚さ2mm、柾目材	L29	
10	フイゴの羽口	④層	外面は融解、推定外径80mm、内径45mm、残存長68mm	P85	
11	フイゴの羽口	埋土	外面は融解、推定外径85mm程、内径28mm、残存長70mm	P83	
12	土製品	④層	種類不明、細い沈線と隆帯で装飾される、中央に径10mmの孔が1ヶ、厚さ8mm程	P142	
13	土製品　鈴	埋土	縦長の楕円形を呈する、上部に径3mm程の紐穴、下部に径5mmの孔が1ヶ、長さ33mm、幅26mm、厚さ2mm	P143	
14	土製品	⑤層	鋳造関連土製品、上部形が丸みをもち断面は四角形に肥厚、残存長20mm、残存幅33mm、上部厚10mm、下部厚4mm	P127	

第135図　SD501溝跡出土遺物３



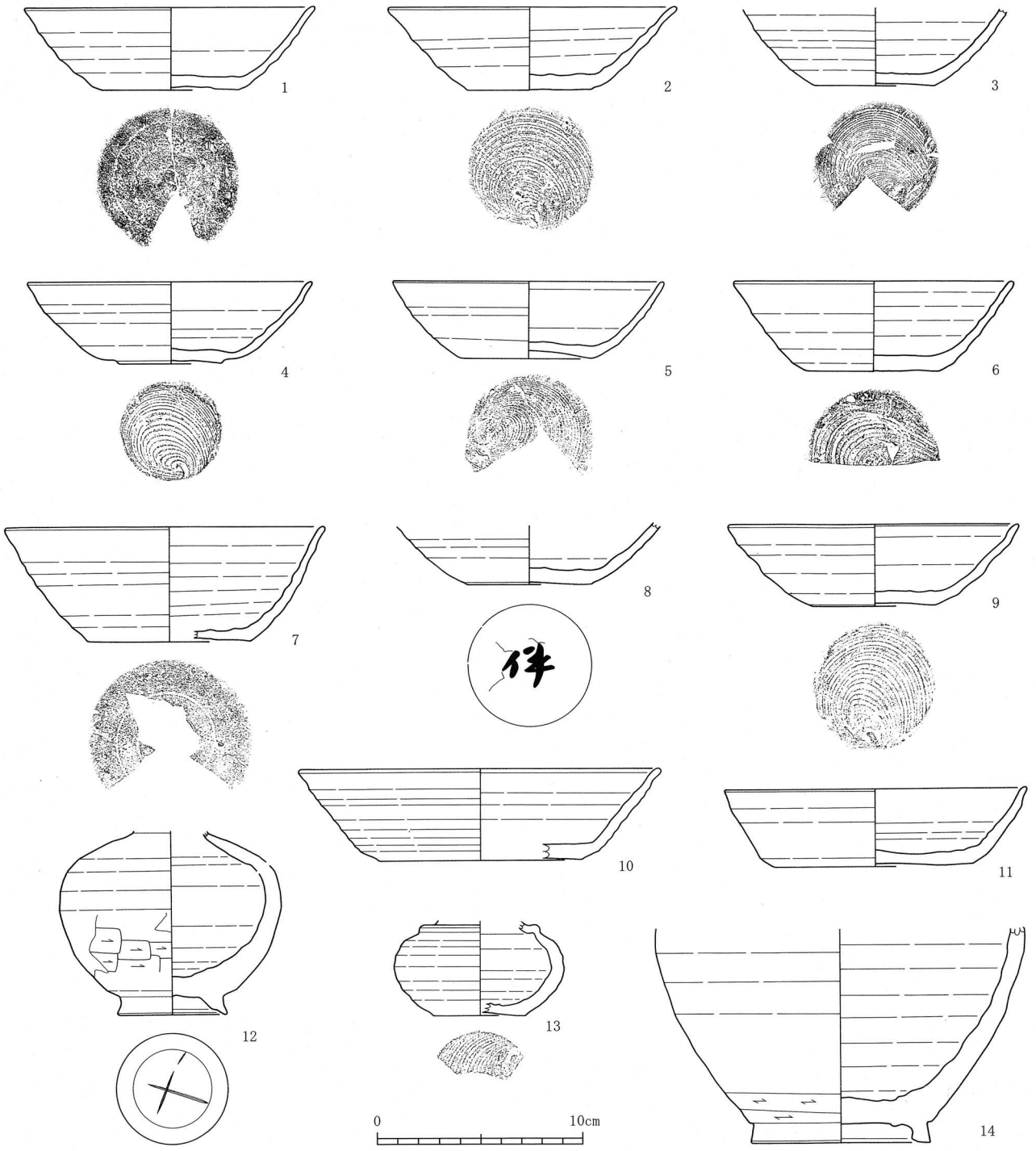
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径(153)mm、底径(80)mm、器高37mm	D90	
2	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、短く外傾気味に立ち上がる、切り離し不明、底部に粗いケズリ、口径(90)mm、底径(68)mm、器高13mm、口縁部にカーボン付着	D84	
3	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、口縁部欠損、外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、底径（53）mm	D80	
4	瓦質土器　擂鉢	埋土	口縁部片、端部短く外傾し丸くおさまる	H99	
5	陶器　甕	埋土	口縁部はきつく短く立ち上がり端部は上方に丸くおさまる、口径(320)mm、中世陶器、在地	I1359	
6	陶器　小壺	埋土	口縁部欠損、底径70mm、残存高46mm、中世陶器、在地	I1336	
7	石鉢	埋土	上部欠損、台付の石鉢、鉢部の底面は磨られている、台部径125mm、台部高35mm、凝灰岩質安山岩	K177	
8	砥石	埋土	石斧転用、上下端部欠損、全面に擦痕とV字状のスジ、断面は長円形、残存長92mm、最大幅45mm、厚さ30mm、安山岩	K181	
9	砥石	埋土	上下部欠損、平面形は長方形、中央部がやや凹み分銅形、砥面は4面、断面四角形、残存長111mm、最大幅44mm、厚さ37mm、凝灰岩	K178	
10	砥石	埋土	上下部欠損、平面形は長方形、砥面は4面、断面長方形、残存長130mm、最大幅51mm、厚さ44mm、凝灰岩	K176	
11	土玉	埋土	球形状で径15mm程で奥行き13mm程の凹みあり、径30mm、高さ23mm	P146	
12	フイゴの羽口	埋土	外面は融解、推定外径39mm、内径28mm、残存長36mm	P94a	
13	フイゴの羽口	埋土	上部に融解がみられる、推定外径77mm、内径56mm、残存長63mm	P94b	

第136図　SD504B溝跡出土遺物１



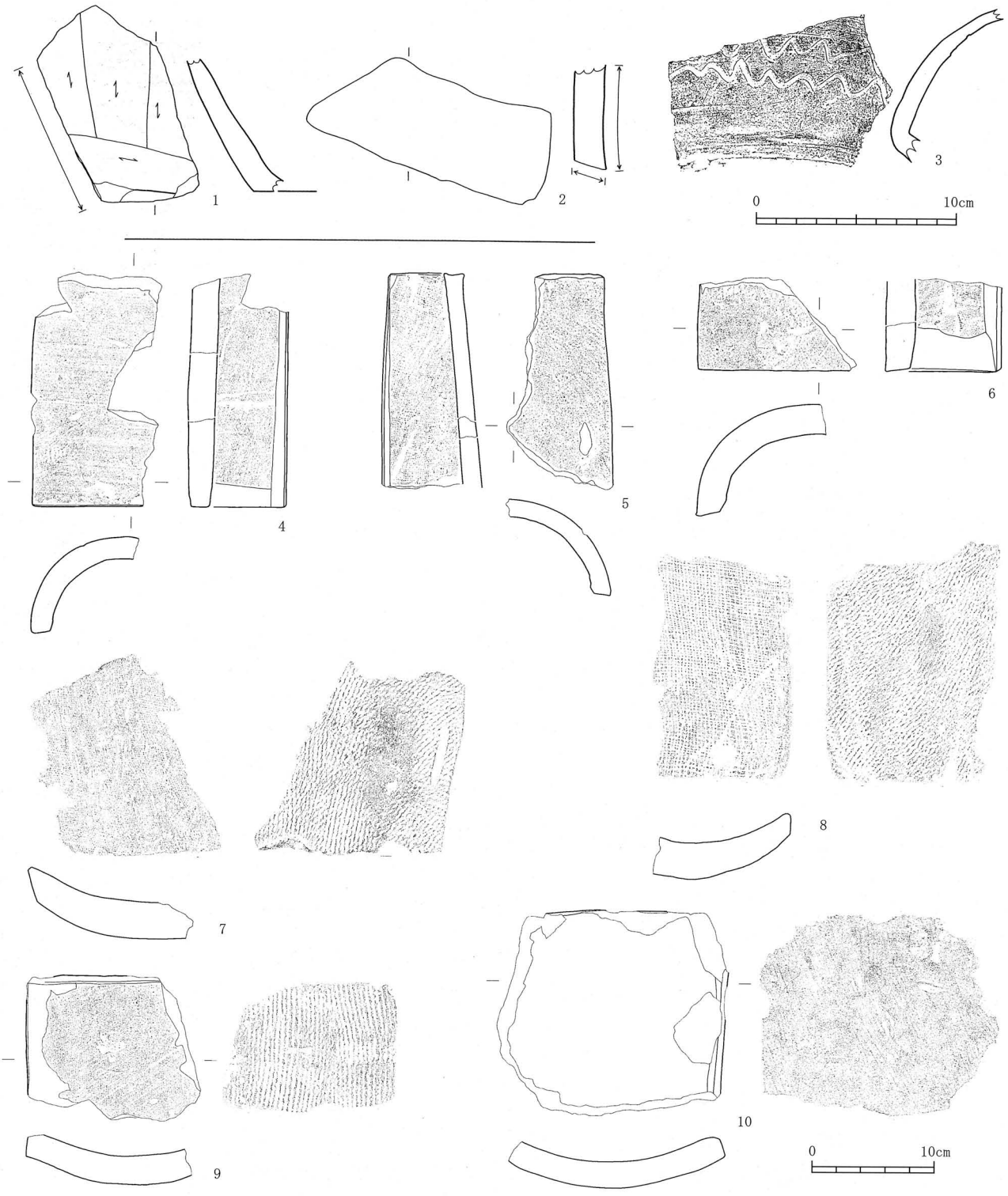
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師器　坏	埋土	ロクロ不使用、底部欠損、内弯気味に立ち上がる、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(163)mm	C51	
2	土師器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径(112)mm、底径(46)mm、器高34mm、内面摩滅、赤焼土器？	C91	
3	土師器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで体部下半から底部に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径144mm、底径72mm、器高53mm	C55	
4	土師器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(129)mm、底径(50)mm、器高41mm	C56	
5	土師器　坏	埋土	底部資料、切り離し不明、体部下端から底部に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、底径68mm、底部に墨書(判読不能)	C53	
6	土師器　坏	埋土	底部周辺資料、回転糸切りで体部下端に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、底径60mm、底部に「伴」？の墨書	C54	
7	土師器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、切り離し不明、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(128)mm、底径(68)mm、器高42mm、底部全面が研磨、再利用？	C46	
8	土師器　坏	埋土	内弯気味に立ち上がる、切り離し不明、底部にあさいヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(140)mm、底径(60)mm、器高50mm	C45	
9	土師器　坏	埋土	内弯気味に立ち上がる、回転糸切りで体部下端に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径122mm、底径54mm、器高44mm	C49	
10	土師器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで体部下半から底部に手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(126)mm、底径(59)mm、器高47mm	C52	
11	土師器　坏	埋土	内弯気味に立ち上がる、切り離し不明、底部全面手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(148)mm、底径(54)mm、器高53mm	C47	
12	土師器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径144mm、底径58mm、器高48mm	C44	19-22
13	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、底部にあさいナデ、切り離し不明、口径140mm、底径80mm、器高38mm	E40	
14	須恵器　坏	埋土	やや内弯気味に立ち上がる、回転ヘラ切りで無調整、口径138mm、底径59mm、器高45mm	E44	
15	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、底部にあさいナデ、切り離し不明、口径139mm、底径72mm、器高37mm	E46	
16	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、切り離し不明、口径(137)mm、底径(65)mm、器高44mm	E35	
17	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転ヘラ切りで無調整、口径128mm、底径63mm、器高37mm	E43	19-28
18	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、口縁部周辺ややゆるく外反、回転ヘラ切り、口径142mm、底径70mm、器高32mm	E49	

第137図　SD504B溝跡出土遺物２



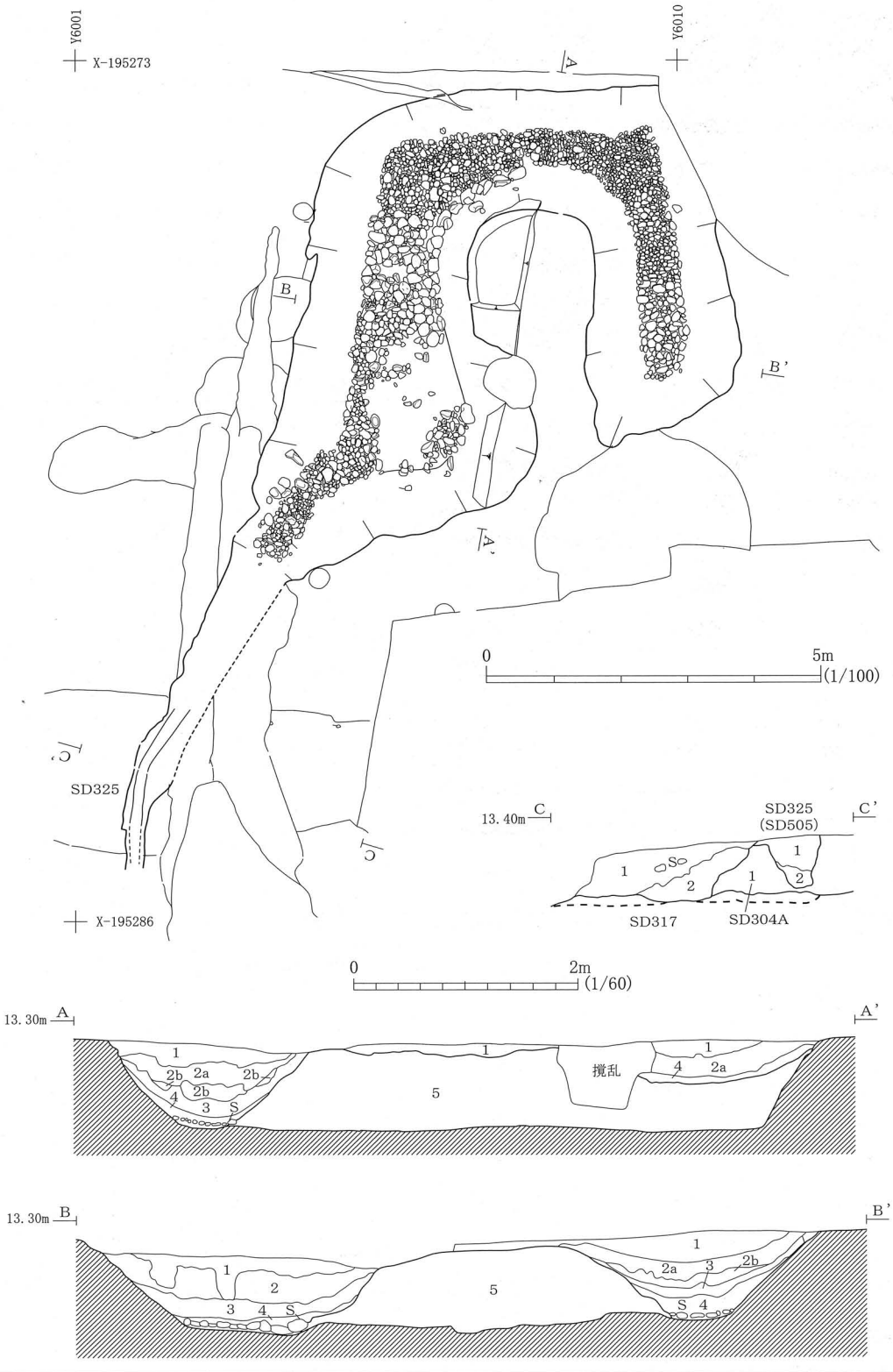
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転ヘラ切りで無調整、口径140mm、底径68mm、器高40mm	E41	
2	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径140mm、底径60mm、器高41mm	E42	19-29
3	須恵器　坏	埋土	口縁部欠損、外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、底径59mm	E61	
4	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径138mm、底径50mm、器高40mm	E45	19-30
5	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径132mm、底径64mm、器高38mm	E47	
6	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径136mm、底径64mm、器高44mm	E48	
7	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、回転ヘラ切りで無調整、口径155mm、底径80mm、器高56mm	E50	20-1
8	須恵器　坏	埋土	口縁部欠損、ゆるく外傾気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、底径62mm、底部に「伴」の墨書あり	E53	
9	須恵器　坏	埋土	やや内弯気味に立ち上がる、回転糸切りで無調整、口径140mm、底径60mm、器高50mm、底部に墨書あり（判読不能）	E37	20-2
10	須恵器　坏	埋土	外傾気味に立ち上がる、底部全面に回転ヘラケズリで切り離し不明、口径(176)mm、底径(98)mm、器高45mm	E38	
11	須恵器　坏	埋土	外傾気味にきつく立ち上がる、回転ヘラ切りの後手持ちヘラケズリ、口径148mm、底径98mm、器高38mm、底部に「+」の刻線	E36	20-3
12	須恵器　壺	埋土	小型品、口縁部欠損、体部下部に横位のヘラケズリ、高台部断面が三角形状、高台部径54mm、体部最大幅108mm、底部に「+」の刻線	E33	20-4
13	須恵器　壺	埋土	小型品、口縁部欠損、体部は算盤形、回転糸切りで無調整、体部上部が隆帯状に折れ曲がる、底径44mm、体部最大幅82mm	E51	
14	須恵器　壺	埋土	高台部からきつく立ち上がる、体部下部は回転ヘラケズリ、高台部径86mm	E34	

第138図　SD504B溝跡出土遺物３



	種　別	地点・層位		登録	写真
1	須恵器　甕	埋土	体部下部の小破片、外面は縦横位のヘラケズリ、破片断面の一面に磨面あり	E55	
2	須恵器　甕	埋土	体部小破片、外面と破片断面の一面に磨面あり	E56	
3	須恵器　甕	埋土	口縁部破片、外反気味に立ち上がる、外面に2条のやや崩れた波状沈線が巡る	E58	
4	古代瓦　丸瓦	埋土	凸面：ロクロナデ、丸瓦部に縄叩き、端部にヘラケズリ、凹面：布目痕、厚さ19mm	F20	
5	古代瓦　丸瓦	埋土	凸面：丸瓦部に縄叩き、端部にヘラケズリ、凹面：布目痕、行基式、厚さ15mm	F24	
6	古代瓦　丸瓦	埋土	凸面：ロクロナデ、丸瓦部に縄叩き、端部にヘラケズリ、凹面：布目痕、厚さ24mm	F27	
7	古代瓦　平瓦	埋土	凸面：やや粗目の縄叩き、端部にヘラケズリ、凹面：布目痕、ナデ、厚さ28mm	F25	
8	古代瓦　平瓦	埋土	凸面：斜行方向の縄叩き、端部にヘラケズリ、凹面：粗目の布目痕、ナデ、厚さ31mm	F21	
9	古代瓦　平瓦	埋土	凸面：縦位方向の縄叩き、端部にヘラケズリ、凹面：糸切り痕、布目痕、厚さ24mm	F23	
10	古代瓦　平瓦	埋土	凸面：平行叩き、端部にヘラケズリ、凹面：ナデ、摩滅、厚さ22mm	F26	

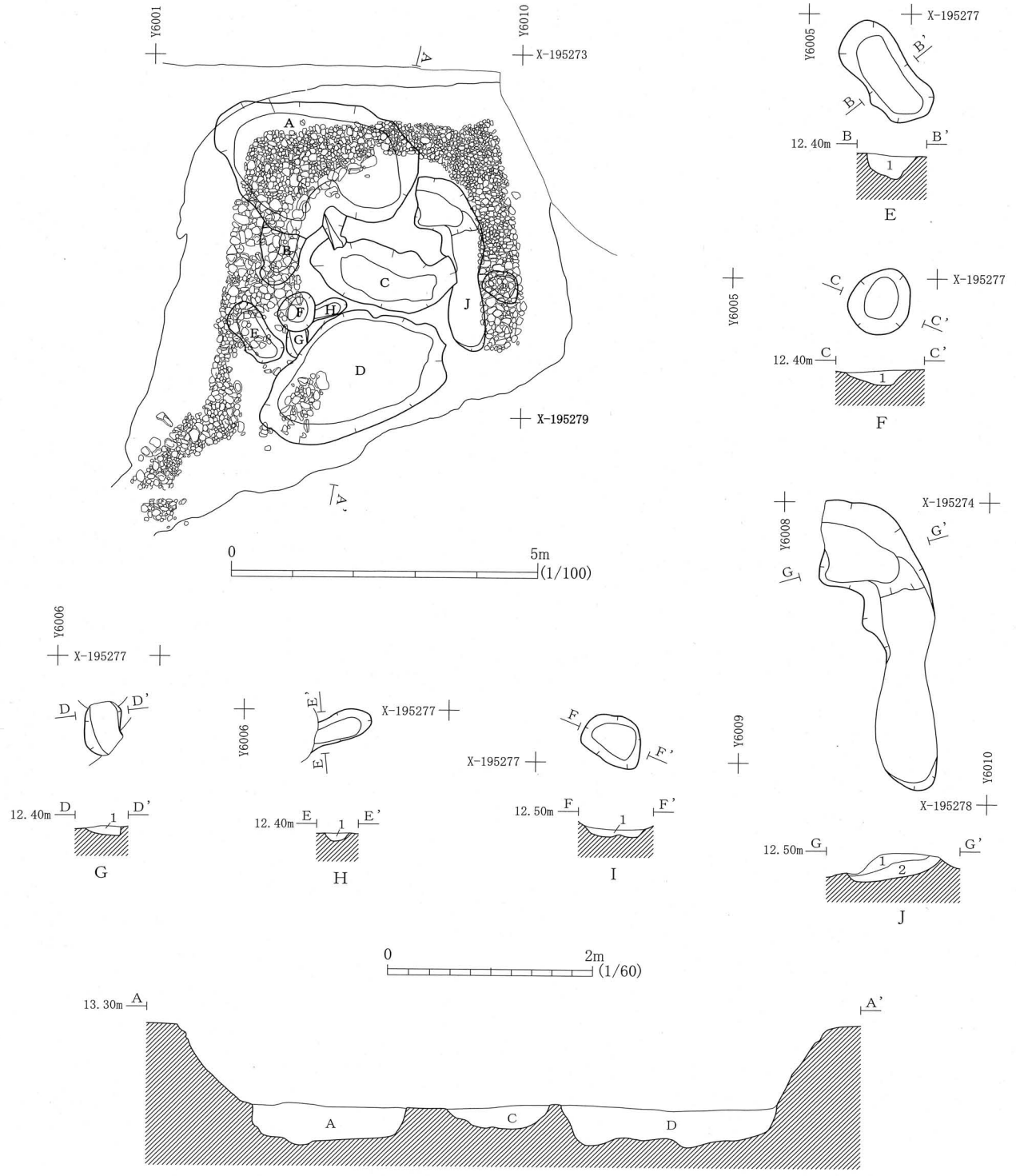
第139図　SD504B溝跡出土遺物４



	層位	色　調	性　質	備　考
SD505	1	褐色　10YR4/4	砂質シルト	黄橙色土粒を斑に含む
	2a	黄褐色　2.5Y5/3	砂質シルト	褐色土をブロック及び層的に含む
	2b	黄褐色　10YR5/6	砂質シルト	
	3	褐色　10YR4/6	砂	細砂、黄褐色土をスジ状に含む
	4	灰黄褐色　10YR4/2	粘土質シルト	層下部に礫
	5	褐灰色　10YR4/1	粘土質シルト	混成層
		暗灰色　10YR3/3	粘土	

	層位	色　調	性　質	備　考
SD325	1	灰黄褐色　10YR4/2	砂質シルト	
	2	にぶい黄褐色　10YR5/3	砂質粘土	
SD304A	1	黒褐色　10YR3/2	シルト	混成層
		黄褐色　10YR5/6	粘土質シルト	
SD317	1	暗褐色　10YR3/3	シルト	小礫を含む
	2	黒褐色　10YR3/2	シルト	粗砂を含む

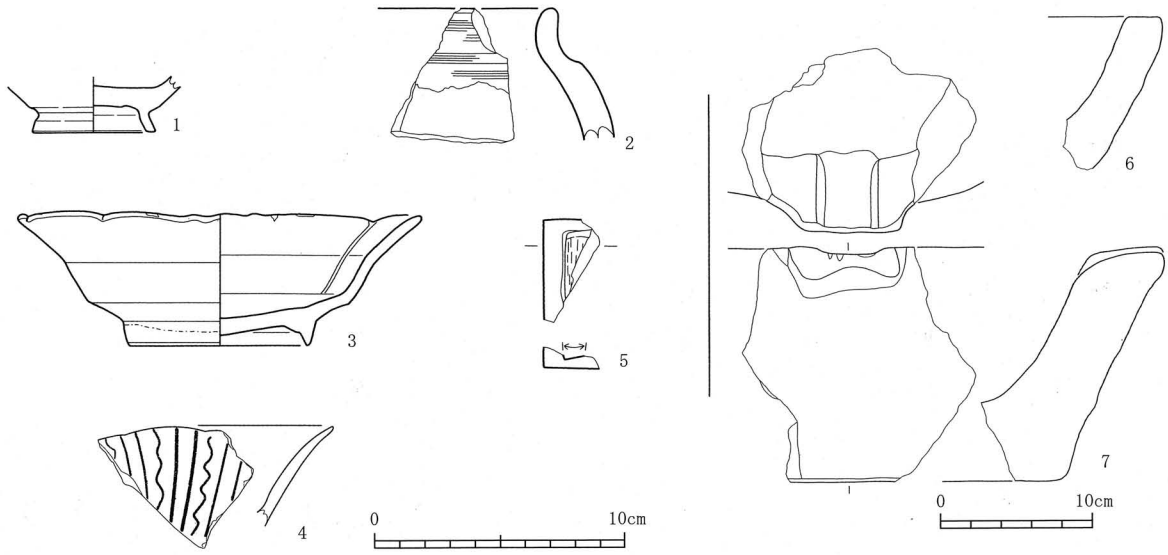
第140図　SD505石敷遺構



	層位	色　調	性　質	備　考
A	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	グライ化
C	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	グライ化
D	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	グライ化
E	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	グライ化、スジ状に入る斑の層
		褐色 10YR4/6	粘土質シルト	グライ化
F	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	グライ化

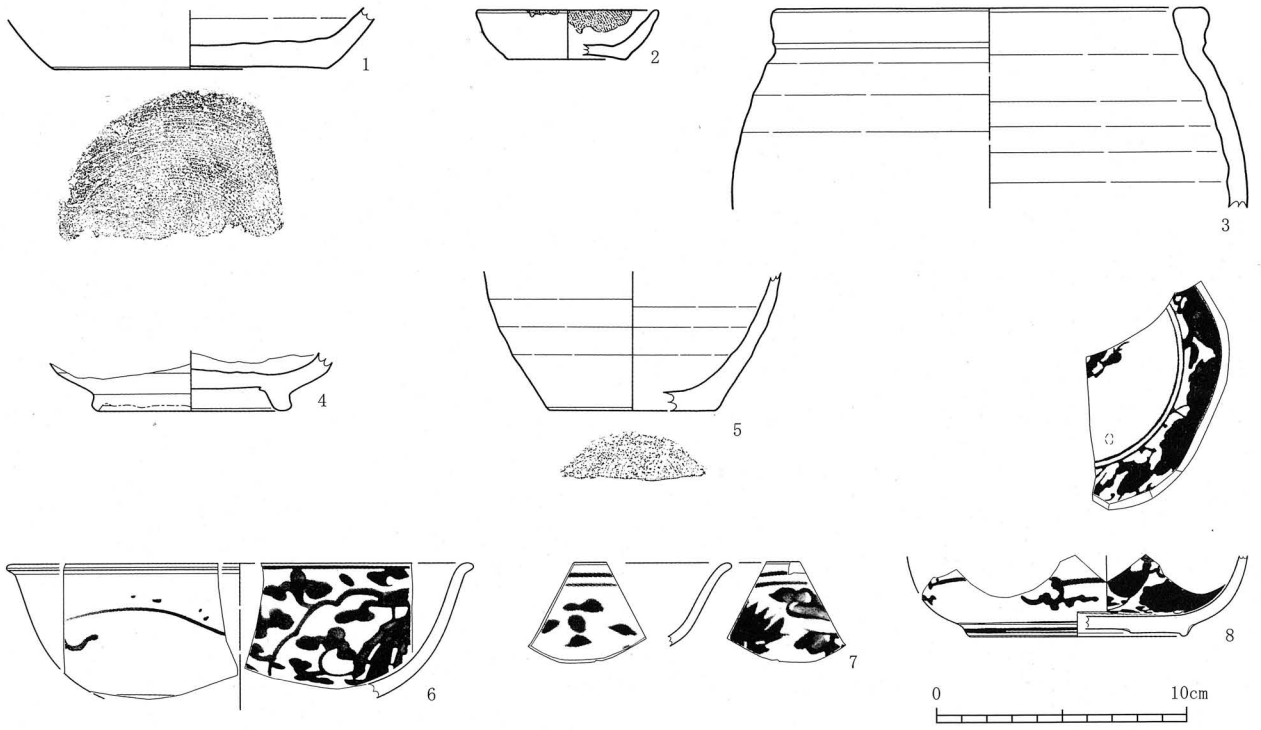
	層位	色　調	性　質	備　考
G	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	グライ化
H	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	グライ化
I	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	グライ化
J	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	グライ化
	2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	グライ化、暗褐色土を含む

第141図　SD505石敷遺構底面検出土坑



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	須恵器　壺	埋土	小壺、高台径(48)mm、高台高8mm	E39	
2	瓦質土器　壺	埋土	口縁部は内傾し丸くおさまる	H10	
3	陶器　向付	積土	御深井釉、口縁部は輪花、口径162mm、底径71mm、器高52mm、瀬戸美濃、登窯2	I1747	23-3
4	陶器　向付	積土	赤織部、内面に波状と直線の文、瀬戸美濃、登窯1	I1745	23-4
5	硯	埋土	小片、平面形は長方形？、残存長41mm、残存幅22mm、残存高8mm、中央に磨り面、粘板岩	K185	
6	石鉢	埋土	小片、口縁上部は平縁、厚さ30mm、安山岩	K184	
7	石鉢	埋土	片口、口縁部はやや丸くおさまり断面三角形状、高さ155mm、安山岩	K183	

第142図　SD505石敷遺構出土遺物



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師質土器　皿	粗掘	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、底面に煤付着、切り離しは回転糸切り、底径108mm	D88	
2	土師質土器　皿	粗掘	ロクロ成形、外傾気味にきつく立ち上がる、口縁部内外面にタール付着、切り離しは回転糸切り、口径(72)mm、底径(46)mm、器高21mm	D86	
3	瓦質土器　甕	粗掘	下半部欠損、口縁部は平縁でやや外側に肥厚、口径(174)mm	H90	
4	陶器　皿	粗掘	灰釉、底径(80)mm、産地不明、19c	I1676	
5	陶器　壺	粗掘	鉄釉、底部に回転糸切り痕、底径(66)mm、堤？、19c	I1643	
6	磁器　碗	粗掘	染付け、端反、口径(185)mm、肥前、18c後半	J714	24-2
7	磁器　皿	粗掘	色絵、肥前、18c	J607	24-3
8	磁器　皿	粗掘	染付け、底径(87)mm、肥前、18c後半	J710	24-4

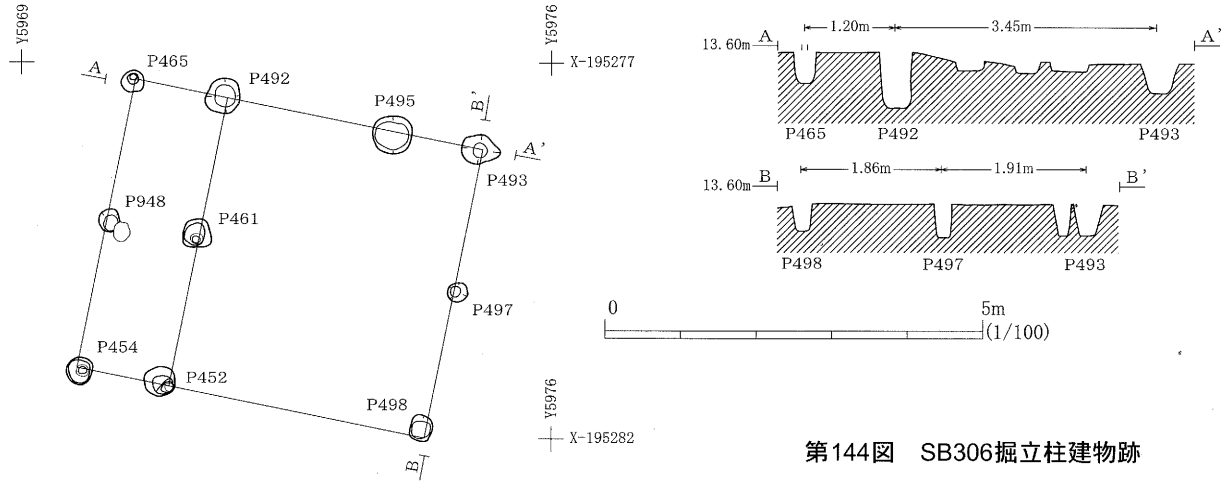
第143図　2002－1区遺構外出土遺物

(3) 99－4区の調査

検出遺構は建物跡1棟、土坑18基、溝跡7条、竪穴跡1軒である。

1）建物跡

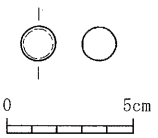
SB306掘立柱建物跡　C－5区に位置する。SD323を切り、SK331が建物内に位置するが新旧は不明である。桁行2間、梁行1間で西側に庇ないし縁が付く南北棟の建物跡である。建物方向は身舎西側でN－11°－Eである。柱穴の平面形は円形を基調とする。大きさは径28～49cmを測る。深さはまばらで最も深いP492が72cmを測る。柱痕跡は4基で確認され径12～16cmの円形である。柱間はほぼ同間隔に並び柱筋は直線的に通る。柱間寸法は北側柱列（P465・P942・P493）で西側から1.2m＋3.45mの計4.65m、東側柱列（P493・P497・P498）で北側から1.86m＋1.91mの計3.77mを測る。柱穴からは土器片が出土している。北側へ桁が延びる可能性も考えられたが2間とした。



第144図　SB306掘立柱建物跡

2）土坑

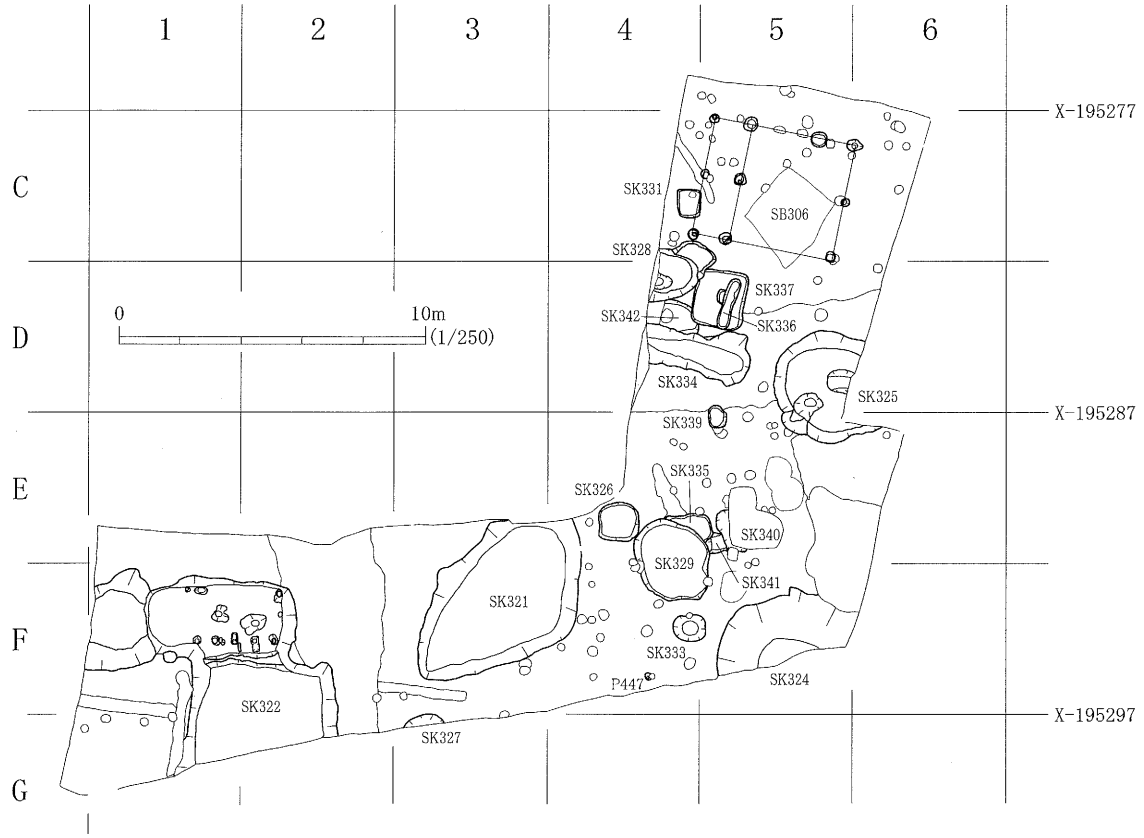
SK321土坑　E・F－3・4区に位置する。平面形は長円形を基調とする不整三角形となる。北側が壁に接するが長軸は南北方向7.17m、短軸4.36m、深さ最大で93cmを測る。底面はゆるやかな凹凸面となる。壁は全体としてはきつく立ち上がり断面形は逆台形である。堆積土は大別で5層確認した。土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、近世瓦、陶器（岸窯・瀬戸美濃・唐津）、磁器（瀬戸美濃・肥前・中国）、漆器椀、キセル、古銭、鉄製品、フイゴの羽口、炉壁、鉱滓が出土している。



	地点・層位	種　別	特　徴	登録	写真
1	P447　埋土	土玉	球形、径14mm	P20	22-8

第145図　99－4区柱穴・ピット出土遺物

SK322土坑　F・G－1・2区に位置する。SD316・318を切る。平面形は3基の土坑（A・B・C）が逆L字形に連結した形状をもつ。Aは長円形状で残存東西長1.83m、上端幅最大3.33m、深さ54cmを測る。底面はほぼ平坦で断面形はゆるい皿形となる。BはAの東側に位置し一段低く底面高差60cm程を測る。平面形は隅丸の長方形で、東西軸4.98m、南北軸2.66m、深さ87cmを測る。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり断面形は矩形となる。底面で10基のピットを確認している。平面形が円形・方形・不整形と様々となるが、その内P2・3・8・10の4基で礎板と判断される石を確認した。CはBの南側に位置するが高さ20cm程、幅35～55cmの畝状の高まりで仕切られる。底面高に違いがありCが10cm程低い。平面形は方形で南側が壁に接している。東西軸上端幅5.03m、深さ最大1.18mを測る。底面はほぼ平坦となるが、中央に東西2.5m、南北2m程の方形の落ち込みに14層とした砂質粘土で極めて硬い貼床がみられる。堆積土は14層確認した。堆積状況からA・B・Cとも同時期であることが確認されている。Aの底面規模は南北長1.95m、東西確認長1.95m、Bは東西長4.37m、南北長西側で1.95m、中央で2.26m、Cは東西長4.17m、南北確認長3.18mである。堆積土内から大量の礫とともに多くの遺物が出土した。縄文土器、石斧、土師



第146図　99－4区掘立柱建物跡及び土坑

器、須恵器、古代瓦、中世陶器（常滑・在地）、土師質土器、瓦質土器、陶器（大堀相馬・小野相馬・堤・岸窯・美濃・瀬戸美濃・京信楽系・唐津・肥前）、磁器（肥前・瀬戸美濃・中国）、近世瓦、砥石、硯、カマド石？、石臼、古銭、キセル、鉛玉、釘、鎌、金属製品類、漆膜、土製品（人形類・鈴）、フイゴの羽口、炉壁、鉱滓がある。

SK324土坑　F－5区に位置する。南壁及東壁に接しており平面形は円形と思われる。径5m程と判断され、深さ1.28mを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形と思われる。堆積土は7層確認した。縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、中世陶器（在地）、陶器（大堀相馬・岸窯系・古瀬戸・志野・美濃・瀬戸美濃・唐津・肥前系）、磁器（瀬戸美濃・肥前・中国）、金属製品（釘・銅製品）、石製品（砥石）、土製品、近世瓦、漆膜、炉壁、鉱滓が出土している。

SK325土坑　D・E－5・6区に位置する。SI303・SD322を切る。平面形は円形である。南北軸3.71m、深さ82cmを測る。底面はやや丸みをもち、壁はややきつい立ち上がりで断面形は皿形である。堆積土は細別で4層確認した。大量の礫とともに縄文土器、土師器、須恵器、古代瓦、土師質土器、瓦質土器、近世瓦、陶器（大堀相馬・小野相馬・岸窯・堤・志野・美濃・瀬戸美濃・京信楽系）、磁器（肥前・瀬戸美濃・中国）、石製品（砥石・硯？・カマド石？）、フイゴの羽口、炉壁、鉱滓が出土している。

SK326土坑　E－4区に位置する。平面形は隅丸の正方形である。南北軸1.29m、東西軸1.34m、深さ26cmを測る。底面はやや凹地状となる。壁はきつく立ち上がり断面形は矩形となる。堆積土は1層確認した。縄文土器、土師器、須恵器が、土師質土器、瓦質土器、陶器（大堀相馬・小野相馬・岸窯系・肥前系・唐津系）、磁器（肥前）、釘、鉄製品が出土している。

SK327土坑　G－3区に位置する。南壁に接し部分的な確認であるが平面形は円形と判断される。径1.5m程と思われる。壁はきつく立ち上がる。底面・断面形は不明である。堆積土は1層確認している。古代瓦、縄文土器、陶

器（大堀相馬・堤・岸窯・唐津系）、磁器（肥前・中国）、炉壁、鉱滓が出土している。

SK328土坑　C・D－４・５区に位置する。SK337・342を切る。東壁に接し長円形と方形の土坑が合体した形となり平面形は不整形である。長軸は北東方向で残存長2.05m、短軸1.72m、深さ最大で48cmを測る。底面はほぼ平坦で壁面に向かいゆるく立ち上がる。堆積土は３層確認した。縄文土器、土師器、須恵器、陶器（大堀相馬・志野・瀬戸美濃）、磁器（中国？）、炉壁が出土している。

SK329土坑　E・F－４・５区に位置する。SK332・335・341を切りピットに切られる。平面形は不整円形である。南北軸3m、東西軸2.43m、深さ18cmを測る。底面はほぼ平坦で壁面はややゆるく立ち上がり断面形は逆台形状である。堆積土は１層確認した。縄文土器、土師器、瓦質土器、陶器（唐津）、炉壁、鉱滓が出土している。

SK331土坑　C－４・５区に位置する。直接的な重複はないがSB306範囲と重なる。平面形は正方形である。南北軸88cm、東西軸77cm、深さ９cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁はゆるく立ち上がり断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。縄文土器、土師器が出土している。

SK332土坑　E・F－４・５区に位置する。平面形はやや不整な長円形である。SK329の下部に位置しほぼ中に納まる。東西軸2.12m、南北軸1.29m、深さ31cmを測る。底面はほぼ平坦で壁面はゆるく立ち上がる。断面形は皿形である。堆積土は１層確認した。縄文土器、土師器、須恵器、炉壁が出土している。

SK333土坑　F－４・５区に位置する。ピットに切られる。平面形はやや不整な円形である。東西径1.06m、南北径92cm、深さ40cmを測る。底面からゆるく立ち上がり断面形は椀形となる。堆積土は３層確認した。土師器、陶器（岸窯？）、磁器（肥前）が出土している。

SK334土坑　D－４・５区に位置する。SD322・SK342を切る。平面形は長円形と判断される。残存東西軸3.22m、、南北軸1.23m、深さ最大53cmを測る。底面はやや凹凸面となるがほぼ平坦である。壁はきつく立ち上がり断面形は矩形となる。堆積土は３層確認した。土師器、須恵器、古代瓦、陶器（古瀬戸・志野）、磁器（肥前）、鉄片、銅製品、フイゴの羽口、炉壁、鉱滓が出土している。

SK335土坑　E－４・５区に位置する。SD321・SK341を切りSK329・ピットに切られる。平面形は不整な長方形である。東西軸1.46m、南北軸91cm、深さ22cm程を測る。底面はやや凹凸面となり壁はきつく立ち上がる。断面形は皿形となる。堆積土は1層確認した。磁器（中国）が出土している。

SK336土坑　D－５区に位置する。SK337を切る。平面形は長円形で溝状である。南北軸1.74m、東西軸43cm程、深さ13cmを測る。底面はほぼ平坦である。断面形は皿形である。堆積土は１層確認した。土師器、金箔の塗られた漆膜、炉壁、鉱滓が出土している。

SK337土坑　D－４・５区に位置する。SK328・337に切られSD322・SK342を切る。平面形は方形である。南北軸1.89m、東西軸1.69m、深さ24cmを測る。底面はゆるい凹凸面となるがほぼ平坦面である。壁はきつく立ち上がるが断面形は皿形である。堆積土は４層確認した。土師器、古代瓦、土師質土器、近世瓦、陶器（大堀相馬・小野相馬・岸窯・志野織部・瀬戸美濃・唐津）、磁器（肥前・中国）、漆膜、古銭、キセル、釘、鉱滓、礫が出土している。

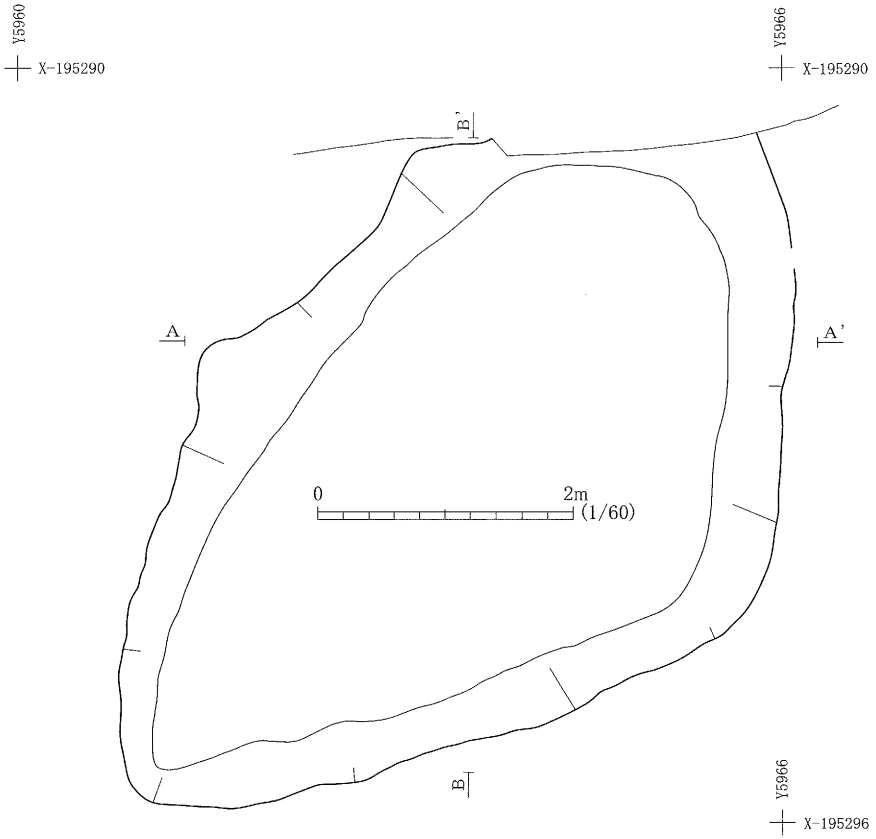
SK339土坑　E－５区に位置する。SD322・ピットを切る。平面形は不整な方形である。南北軸73cm、東西軸63cm、深さ26cmを測る。壁は底面からややきつく立ち上がり断面形は皿形である。堆積土は１層確認した。炉壁、礫が出土している。

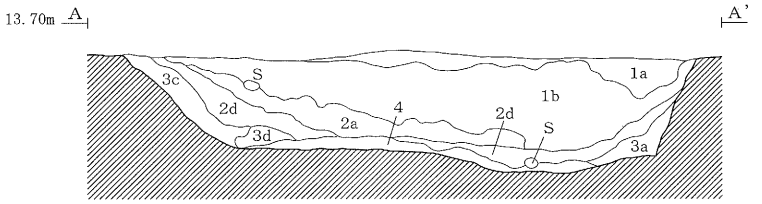
SK340土坑　E－５区に位置する。SK341を切る。東側部が削平され平面形は不整な長円形と判断される。南北軸1.5m、深さ11cmを測る。壁はゆるい立ち上がりで断面形は皿形と思われる。堆積土は１層確認した。土器片が出土している。

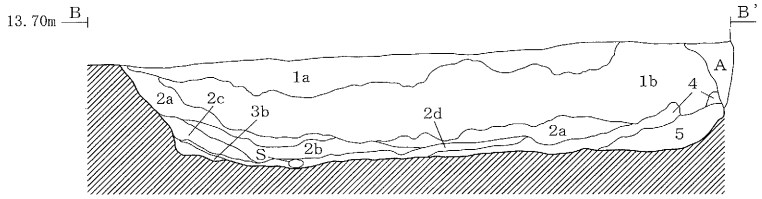
SK341土坑　E－５区に位置する。SK329・335・340に切られる。平面形は長円形を基調とする不整形である。東西長1.66m、南北軸68cm、深さ19cmを測る。底面には段がみられ凹凸面である。壁はゆるく立ち上がり断面形は皿

形である。堆積土は1層確認した。出土遺物はない。

SK342土坑　D－4区に位置する。SK328・334・337に切られ部分的な残存である。平面形は円形と判断され径2.2m程と思われる。深さ18cmを測る。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は皿形である。堆積土は2層確認した。土器片が出土している。

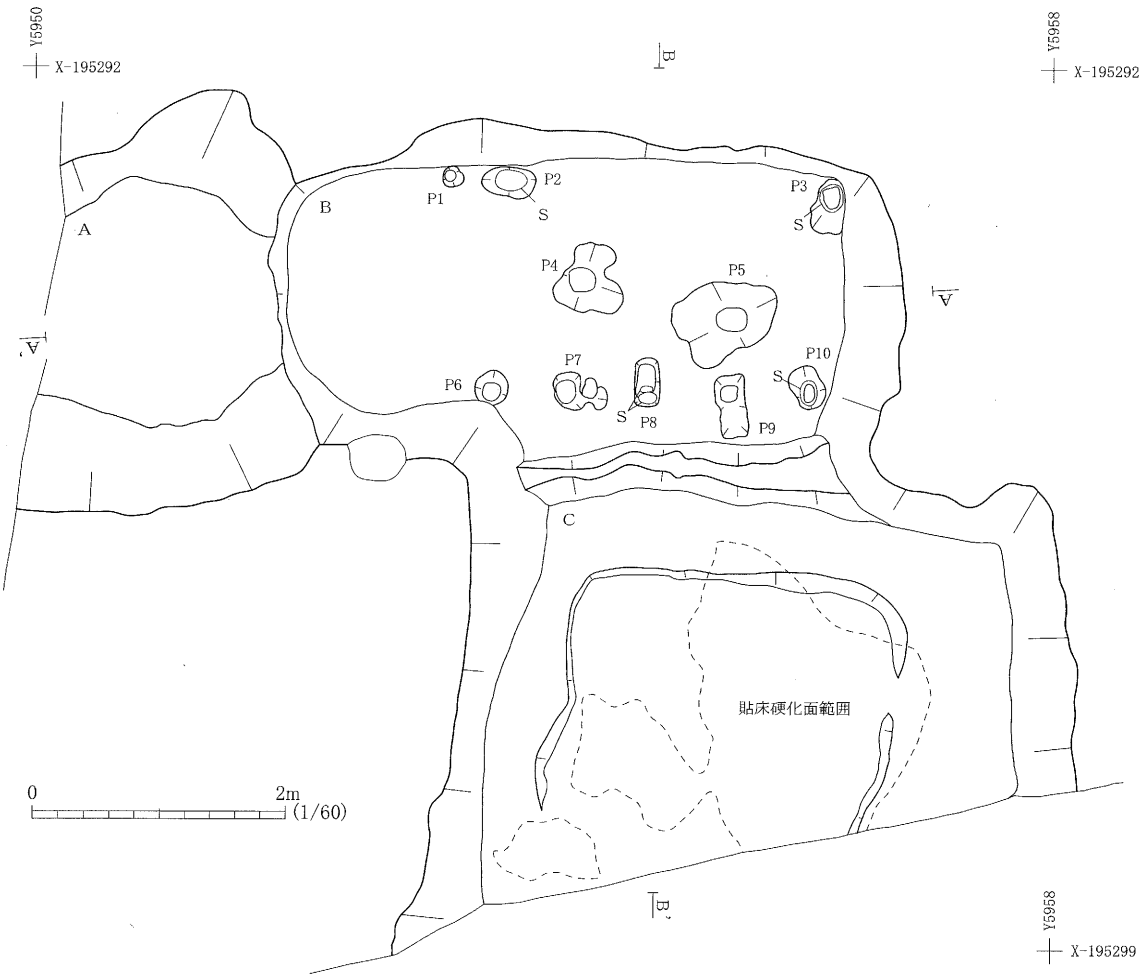


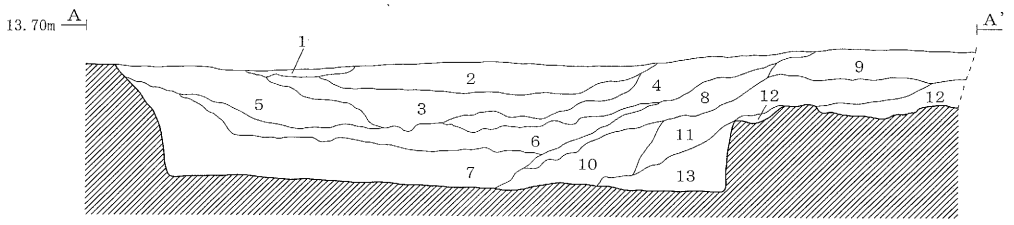


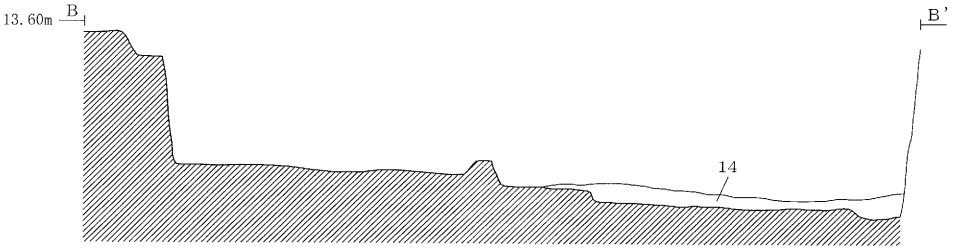


層位	色調		性質	備考	層位	色調		性質	備考
1a	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	細砂を含む	3a	黄褐色	10YR5/6	粘土	褐灰色土を斑に含む
1b	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	黄橙色土を斑に含む	3b	暗灰黄色	2.5Y5/2	粘土	
2a	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	混成層	3c	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	
	褐灰色	10YR5/1	粘土		3d	褐灰色	10YR4/1	粘土	混成層
	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト			にぶい黄褐色	10YR5/4	粘土質シルト	
2b	黒褐色	2.5Y3/2	砂質粘土	ややグライ化	4	褐灰色	10YR5/1	粘土質シルト	
2c	暗灰黄色	2.5Y5/2	粘土	褐灰色土を斑に含む	5	褐色	10YR4/6	砂	
2d	褐灰色	10YR5/1	シルト		A	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	SK321を切る落ち込みの堆積土

第147図　99－4区土坑1（SK321）



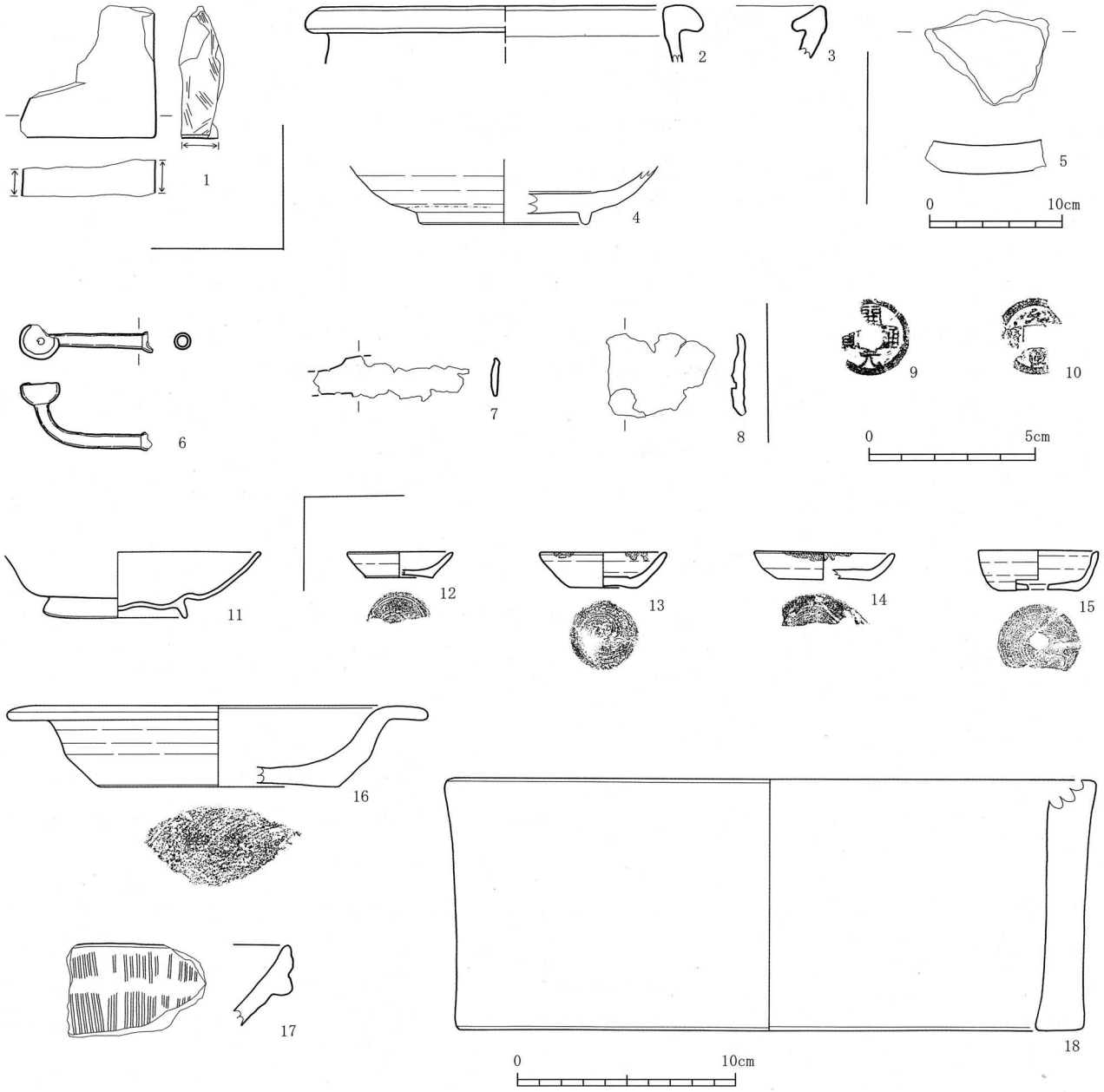




層位	色調		性質	備考
1	褐色	10YR4/4	砂	細砂、炭化物を含む
2	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	細砂、焼土、炭化物を含む
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	焼土、炭化物、礫を含む
4	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	焼土、炭化物を含む
5	褐色	10YR4/4	シルト	礫を含む
6	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	炭化物、焼土を含む
7	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	混成層、礫を多量に含む
	黄褐色	10YR5/6	砂	
8	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	粗砂、炭化物、焼土を含む

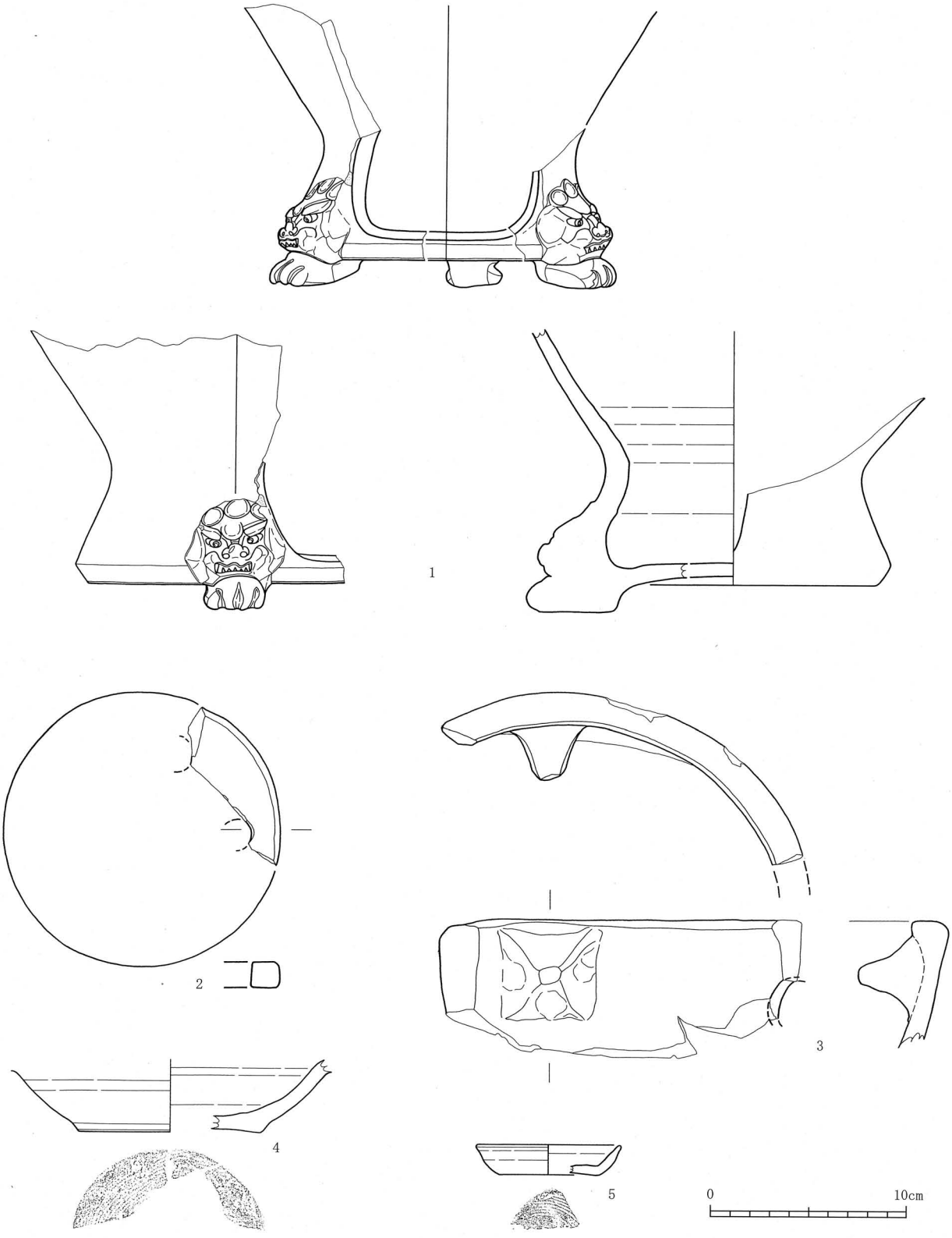
層位	色調		性質	備考
9	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	炭化物、焼土を含む
10	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	混成層
	黄褐色	10YR5/6	砂	
11	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物、焼土を含む
12	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	混成層、焼土を含む
	黄褐色	10YR5/6	砂	
13	黒褐色	10YR3/2	シルト質粘土	砂をブロック状に含む
14	褐灰色	10YR5/1	砂質粘土	貼床

第148図　99－4区土坑２（SK322）



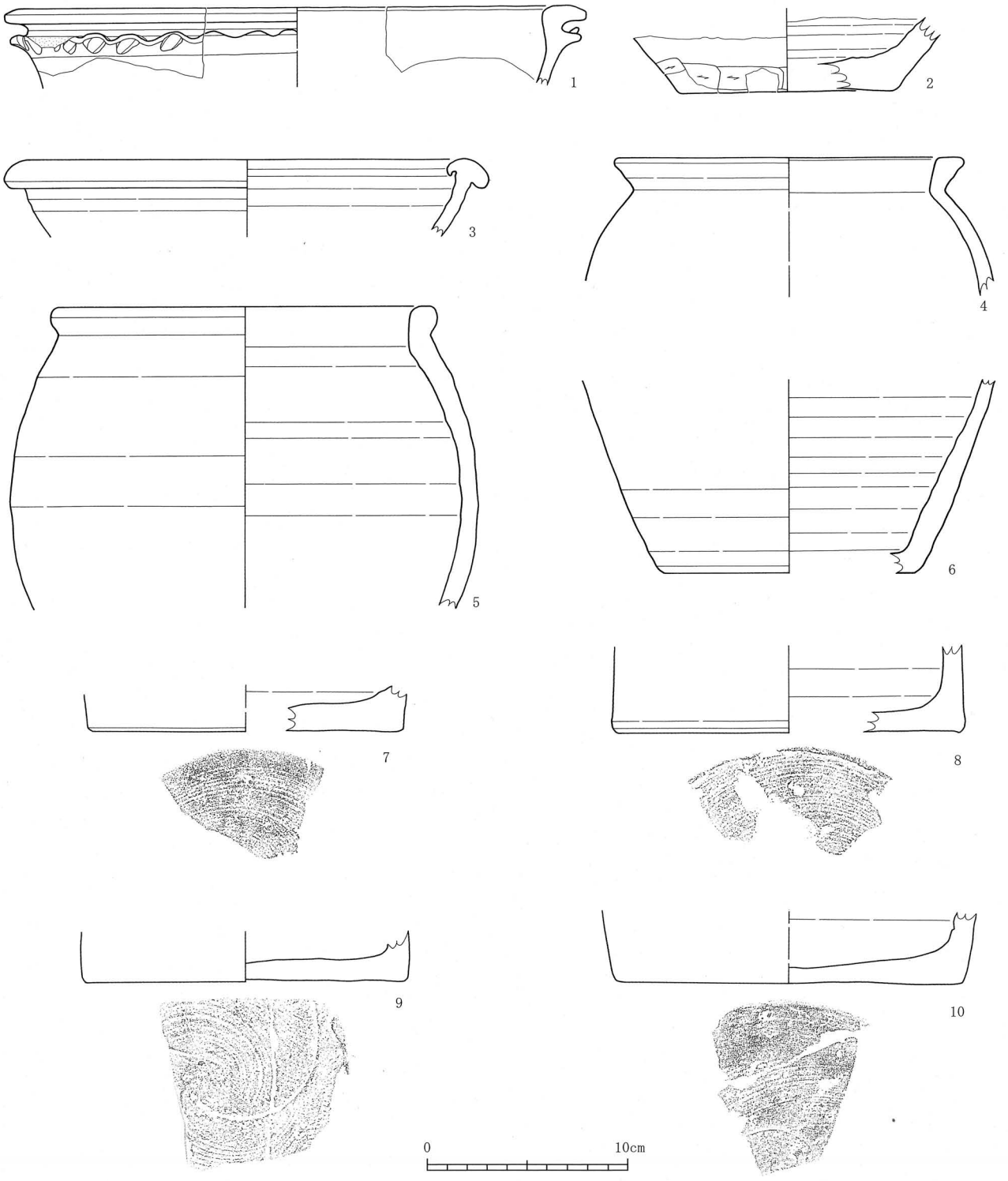
	地点・層位	種　別	特　　徴	登録	写真
1	SK321　1層	砥石	周辺部欠損、側面3面に砥面残存、残存長60mm、最大幅62mm、残存高21mm、凝灰岩	K43	
2	SK321　1層	陶器　甕	鉄釉、口縁部丸くきつく外反、口径(180)mm、瀬戸美濃、19c	I744	
3	SK321　1層	陶器　擂鉢	口縁部片、口唇部は飴釉、体部は鉄化粧、岸窯、17c中	I743	
4	SK321　1層	陶器　皿	鉄釉、底径(76)mm、瀬戸美濃、18c	I738	
5	SK321　1層	近世瓦　平瓦	小片、凹凸面：ナデ、厚さ23mm	G32	
6	SK321　2層	キセル	雁首は大きくゆるく立ち上がり火皿部へ取り付く、残存長59mm、筒径7mm、火皿径17mm、	N13	21-5
7	SK321　1層	鉄製品	板状、残存長70mm、残存幅19mm、厚さ3mm	N90	
8	SK321　1層	鉄製品	板状、下部は折れ曲がり二重になる、残存長49mm、残存幅38mm、厚さ6mm	N88	
9	SK321　1層	古銭	開元通宝、唐　武徳4年(621)	N14	
10	SK321　1層	古銭	元□□宝、〈元祐通宝？〉	N15	
11	SK321　2層	木製品　椀	黒漆の上に赤漆、推定口径130mm程、残存高30mm、底径65mm、厚さ2mm程	L13	
12	SK322　埋土	土師質土器　皿	ロクロ成形、小型品、切り離しは回転糸切り、口径47mm、底径30mm、器高12mm	D3	
13	SK322　埋土	土師質土器　皿	ロクロ成形、小型品、内外面にタール付着、切り離しは回転糸切り、口径57mm、底径32mm、器高16mm	D5	
14	SK322　埋土	土師質土器　皿	ロクロ成形、小型品、内外面にタール付着、切り離しは回転糸切り、口径63mm、底径41mm、器高13mm	D6	
15	SK322　埋土	土師質土器　皿	ロクロ成形、小型品、底部中央に径9mmの孔あり、切り離しは回転糸切り、口径54mm、底径36mm、器高18mm	D7	
16	SK322　埋土	土師質土器　蓋	火消壺の蓋、底部に回転糸切り痕、口径(188)mm、底径(108)mm、器高37mm	D21	
17	SK322　埋土	土師質土器　擂鉢	口縁部片、縦位の幅広の櫛目、櫛目の単位5本	D8	
18	SK322　埋土	土師質土器　上置き？	焜炉の上置き？、筒形、径(284～294)mm、器高114mm、厚さ18mm程、部分的に被熱	D24	

第149図　99－4区土坑（SK321・SK322）出土遺物1



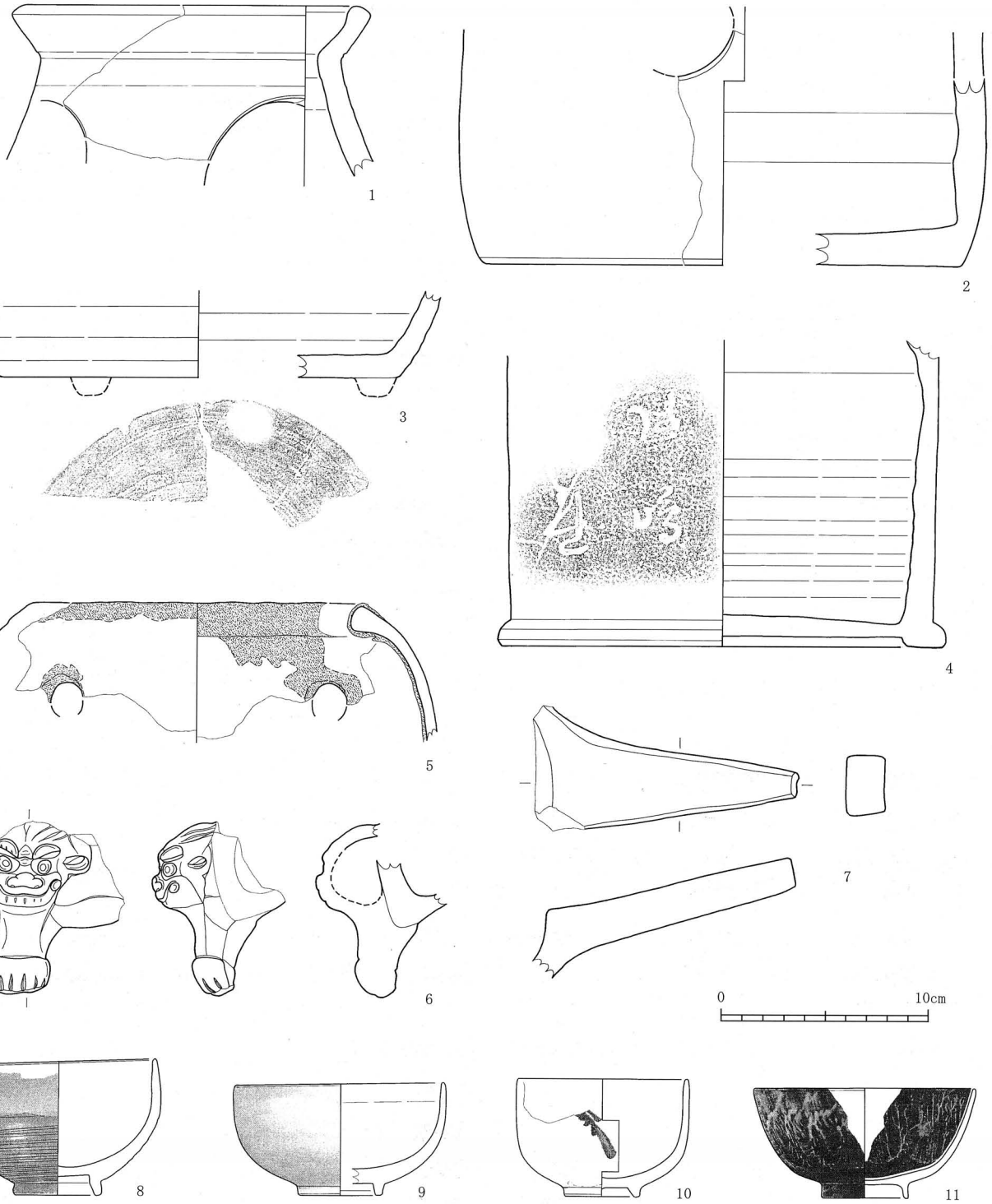
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土師質土器　蚊遣	埋土	上部欠損、キャリパー型、脚は獅子頭を乗せた獣足3ヶ、表裏に長方形の窓1対、残存高143mm、底径174mm	D23	20-7
2	土師質土器　目皿	埋土	円盤状、内側に径15mm程の孔2ヶ残存、推定径139mm、厚さ13mm	D25	
3	土師質土器　焜炉	埋土	口縁部片、口縁部は平縁で直下に四角錐の支えが1ヶ残存、径30mm程の円窓1ヶ残存、推定口径250mm、残存高70mm	D26	
4	瓦質土器　鉢	埋土	上部欠損、ややゆるく立ち上がる、底部に回転糸切り痕、底径92mm	H15	
5	瓦質土器　皿	埋土	ロクロ成形、小型品、底部に回転糸切り痕、口径(72)mm、底径(50)mm、器高15mm	H106	

第150図　SK322土坑出土遺物2



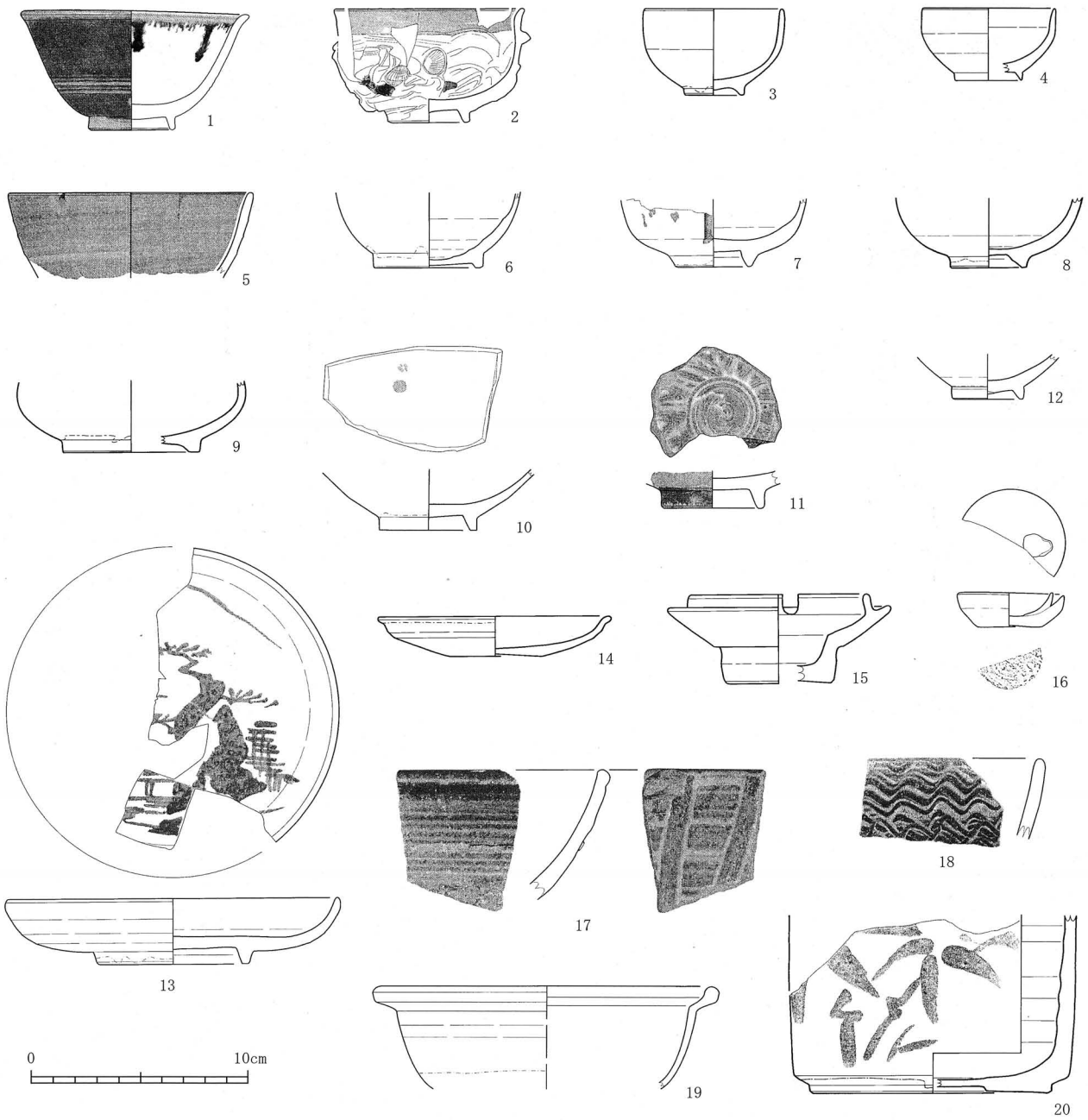
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	瓦質土器　火鉢	埋土	口縁部片、口縁部きつく折れ曲がりやや丸い平縁、口縁部直下外面に波状の粘土紐が巡る、口径(290)mm	H19	
2	瓦質土器　甕	埋土	底部片、体部下端にヘラケズリ、底径106mm	H24	
3	瓦質土器　火鉢	埋土	口縁部片、口縁部内外に丸く垂れ下がり球面状、口径(240)mm	H22	
4	瓦質土器　甕	埋土	口縁部逆三角形状となり上部は平縁、口径(174)mm	H20	
5	瓦質土器　甕	埋土	体部は丸く立ち上がり口縁部は短く丸くおさまる、口径(192)mm	H23	20-17
6	瓦質土器　鉢	埋土	体部下端にヘラケズリ、底径(104)mm	H16	
7	瓦質土器　鉢	埋土	底部片、ほぼ垂直に立ち上がる、底部に回転糸切り痕、底径(160)mm	H14	
8	瓦質土器　鉢	埋土	底部片、ほぼ垂直に立ち上がる、底部に回転糸切り痕、底径(176)mm	H13	
9	瓦質土器　鉢	埋土	底部片、ほぼ垂直に立ち上がる、底部に回転糸切り痕、底径(158)mm	H12	
10	瓦質土器　鉢	埋土	底部片、ほぼ垂直に立ち上がる、底部に回転糸切り痕、底径(172)mm	H11	

第151図　SK322土坑出土遺物３



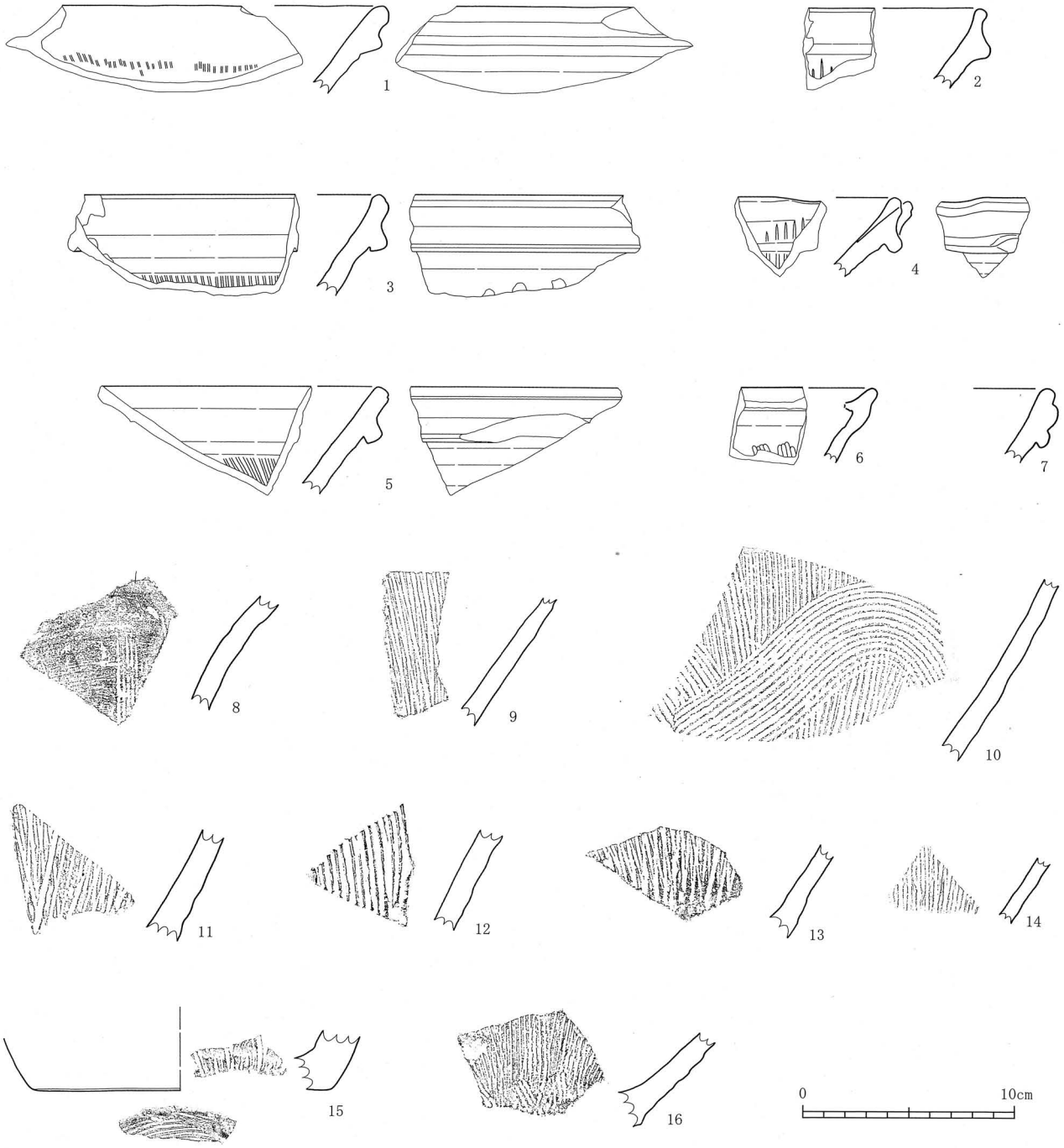
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	瓦質土器　焜炉？	埋土	口縁部はくの字状に外傾、体部に大きな円形の窓を2ヶ確認、口径(155)mm、残存高82mm	H18	
2	瓦質土器　焜炉？	埋土	体部はほぼ垂直に立ち上がる、体部に円形の窓を1ヶ確認、底径(228)mm、残存高113mm	H2	20-18
3	瓦質土器　火鉢？	埋土	底面に脚部の貼り付け痕あり、底径(188)mm	H4	
4	瓦質土器　鉢	埋土	ほぼ垂直に立ち上がる、底面は高台状、外面に草書体の刻み文字あり、底径(148)、残存高148mm	H26	20-19
5	瓦質土器　蚊遣	埋土	口縁部片、口縁部は内弯し丸くおさまる、径15mm程の円窓あり、上部内外面にタール付着、口径(160)mm、残存高66mm	H25	
6	瓦質土器　脚	埋土	蚊遣の脚部と判断、獅子頭をもつ獣脚	H17	
7	瓦質土器　十能	埋土	十能の取手部分、平面は三角形状、断面は四角形、取手の長さ117mm	H3	
8	陶器　碗	埋土	灰釉・鉄釉の掛け分け、口径100mm、底径40mm、器高64mm、大堀相馬、18c	I59	23-5
9	陶器　碗	埋土	灰釉、口径100mm、底径38mm、器高54mm、大堀相馬、18c	I357	23-6
10	陶器　碗	埋土	灰釉、口径80mm、底径36mm、器高57mm、大堀相馬、18c	I449	23-7
11	陶器　碗	埋土	鉄釉、口径106mm、底径41mm、器高53mm、肥前、18c	I53	23-8

第152図　SK322土坑出土遺物4



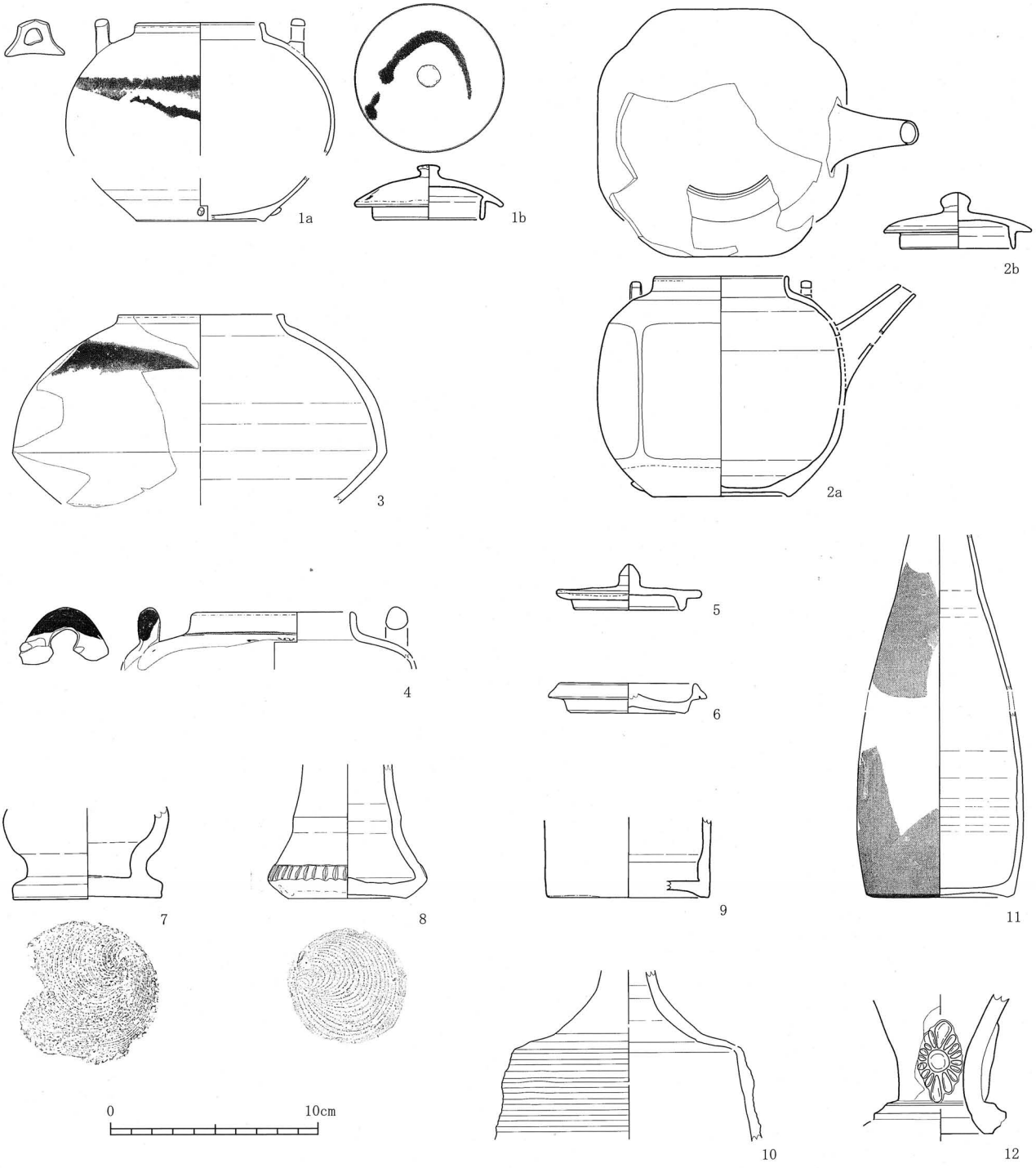
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　碗	埋土	鉄釉、口径104mm、底径38mm、器高55mm、大堀相馬、19c	I63	23-9
2	陶器　碗	埋土	灰釉、器面に粘土紐を貼り付け二枚貝・巻き貝の文様、部分に鉄釉、口径86mm、底径37mm、器高53mm、大堀相馬、19c ？	I67	23-10
3	陶器　碗	埋土	灰釉、口径64mm、底径26mm、器高40mm、大堀相馬、18c後半	I62	23-11
4	陶器　碗	埋土	灰釉、口径(70)mm、底径(40)mm、器高33mm、大堀相馬？、18c	I416	
5	陶器　碗	埋土	刷毛目文、口径(112)mm、唐津、17c後半～18c前半	I83	
6	陶器　碗	埋土	鉄釉、底径(48)mm、大堀相馬、18c～19c	I424	
7	陶器　碗	埋土	灰釉、底径36mm、大堀相馬、18c後半	I428	
8	陶器　碗	埋土	灰釉、底径(34)mm、大堀相馬、18c末	I419	
9	陶器　碗	埋土	鉄釉、底径(62)mm、大堀相馬、18c～19c	I473	
10	陶器　碗	埋土	灰釉、底径43mm、瀬戸美濃、19c	I667	
11	陶器　碗	埋土	刷毛目文、底径45mm、周縁を打ち欠いている、蓋に転用？、唐津、17c後半	I76	
12	陶器　小碗？	埋土	灰釉、底径32mm、瀬戸美濃、登窯8 ？	I239	
13	陶器　皿	埋土	灰釉、内面に鉄絵、口径152mm、底径68mm、器高30mm、大堀相馬、18c後半	I66	
14	陶器　皿	埋土	灰釉、口径(94)mm、底径38mm、器高18mm、大堀相馬、18c後半	I484	
15	陶器　灯明具	埋土	鉄釉、口径83mm、底径50mm、器高43mm、産地不明、19c?	I68	23-12
16	陶器　灯明具	埋土	鉄釉、皿、芯受けあり、口径48mm、底径28mm、器高16mm、堤、19c	I128	
17	陶器　鉢	埋土	刷毛目文、肥前系、18c	I290	
18	陶器　鉢	埋土	刷毛目文、肥前系、18c	I289	
19	陶器　鍋	埋土	鉄釉、口径(157)mm、瀬戸美濃、19c	I635	
20	陶器　瓶	埋土	灰釉、笹文、底径107mm、瀬戸美濃、18c～19c	I50	

第153図　SK322土坑出土遺物５



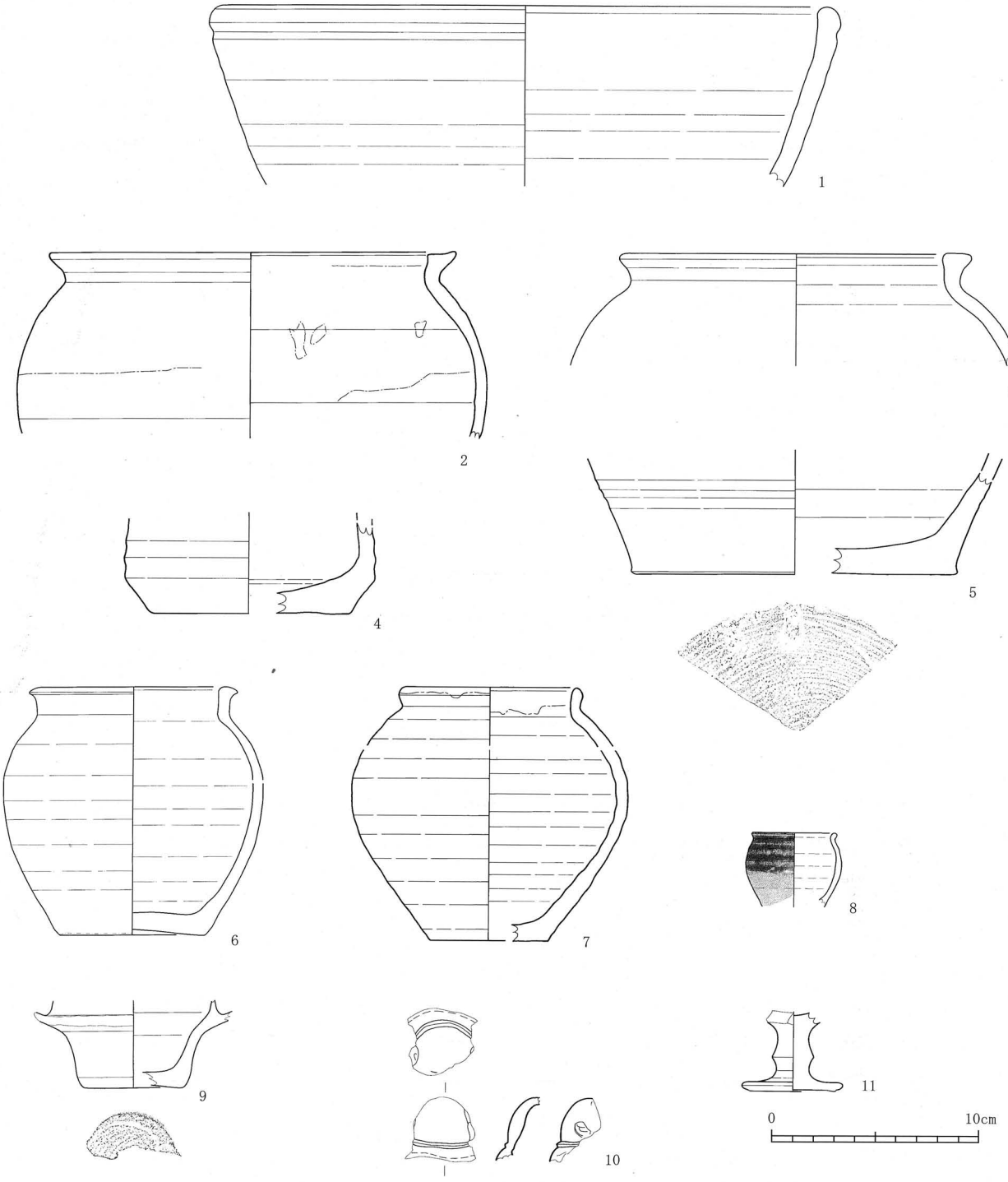
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、岸窯、近世	I191	
2	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、堤、18c	I171	
3	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、岸窯、近世	I192	
4	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、片口、堤、18c	I167	
5	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、岸窯、近世	I189	
6	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁部片、口縁内側断面三角形状に肥厚、縦位の櫛目、岸窯、17c	I185	
7	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁部片、堤、18c	I168	
8	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、体部片、間隔をもった櫛目、岸窯、17c	I180	
9	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、体部片、縦位の櫛目、堤、18c	I172	
10	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、体部片、縦位の櫛目の上に波状の横方向の櫛目、岸窯、17c	I190	
11	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、体部片、幅広の縦位の櫛目、岸窯、17c	I178	
12	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、体部片、幅広の縦位の櫛目、堤、18c	I173	
13	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、体部片、縦位の櫛目、岸窯、17c	I179	
14	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、体部片、縦位の櫛目、産地不明	I188	
15	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、底部片、底面に回転糸切り痕、縦位の櫛目、岸窯、17c	I177	
16	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、底部片、縦位の櫛目、岸窯、17c	I187	

第154図　SK322土坑出土遺物6



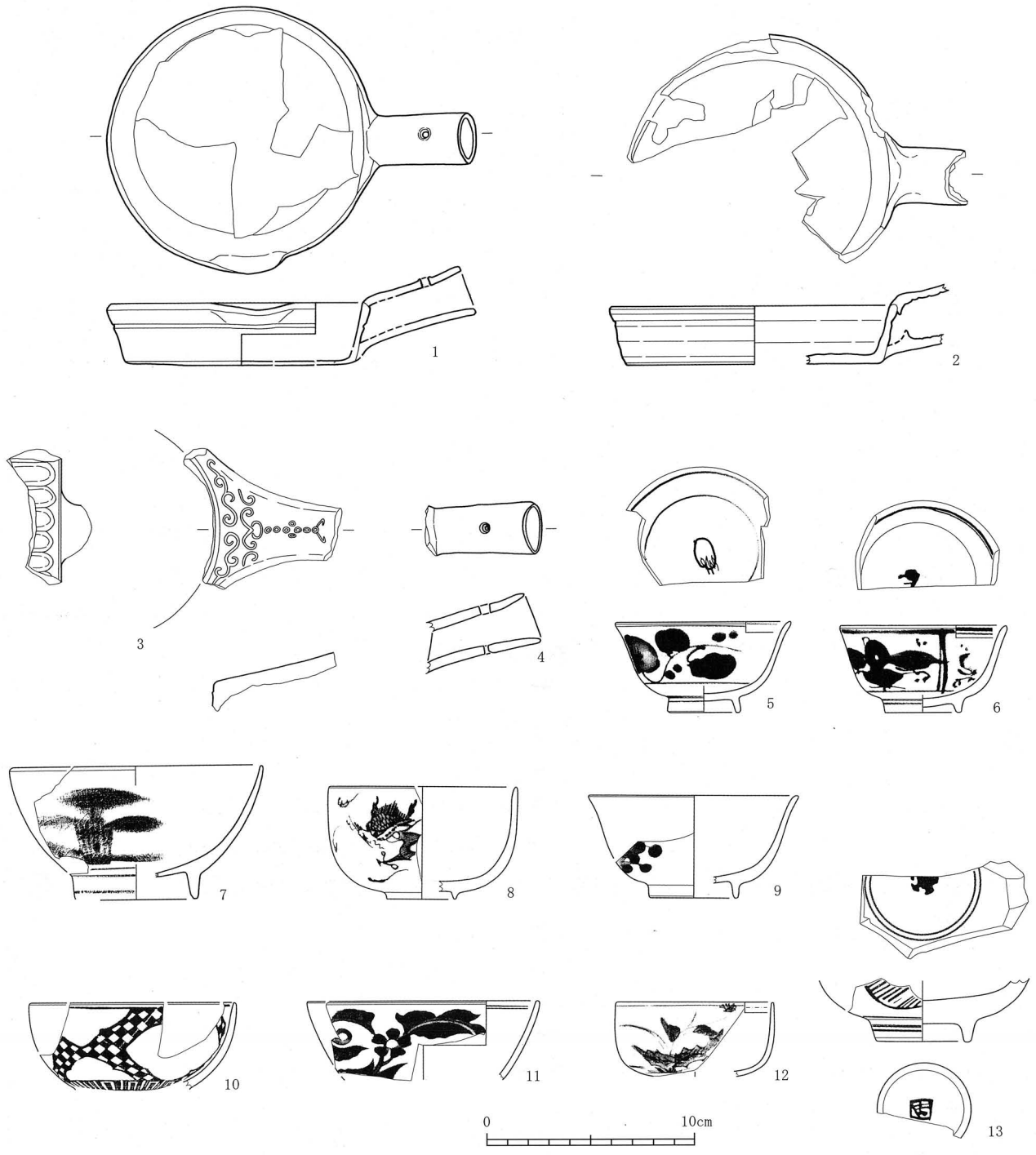
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1a	陶器　土瓶	埋土	青釉流し、口径(60)mm、底径(61)mm、推定器高96mm、大堀相馬、19c前半	I60a	
1b	陶器　蓋	埋土	青釉流し、口径72mm、底径54mm、器高27mm、大堀相馬、19c前半	I60b	23-13
2a	陶器　土瓶	埋土	灰釉、面が形作られ六角形となる、口径(66)mm、底径(67)mm、器高107mm、大堀相馬、19c前半	I61a	
2b	陶器　蓋	埋土	灰釉、口径70mm、底径55mm、器高27mm、大堀相馬、19c前半	I61b	23-14
3	陶器　土瓶	埋土	青釉流し、口径(80)mm、残存高92mm、大堀相馬、18c～19c	I513	
4	陶器　土瓶	埋土	灰釉、口径(76)mm、大堀相馬、19c前半	I501	
5	陶器　蓋	埋土	飴釉、口径68mm、底径54mm、産地不明、19c	I64	23-15
6	陶器　蓋	埋土	灰釉、口径74mm、底径55mm、器高15mm、大堀相馬？、19c ？	I564	
7	陶器　灯明具	埋土	鉄釉、底部に回転糸切り痕底径70mm、残存高45mm、堤？、19c ？	I131	23-16
8	陶器　瓶	埋土	鉄釉、底部下端に縦位の刻み（沈線）が巡る、底部に回転糸切り痕、底径58mm、残存高65mm、岸窯、17c	I55	23-17
9	陶器　瓶	埋土	白濁釉、底径(78)mm、大堀相馬、18c後半	I549	
10	陶器　瓶	埋土	鉄釉、体部に粗めの沈線が巡る、残存高83mm、大堀相馬、19c	I631	
11	陶器　瓶	埋土	飛びカンナ、底径70mm、残存高176mm、大堀相馬？、19c ？	I65	
12	陶器　仏花器	埋土	灰釉・鉄釉の掛か分け、菊花文、大堀相馬、18c以降	I536	23-18

第155図　SK322土坑出土遺物７



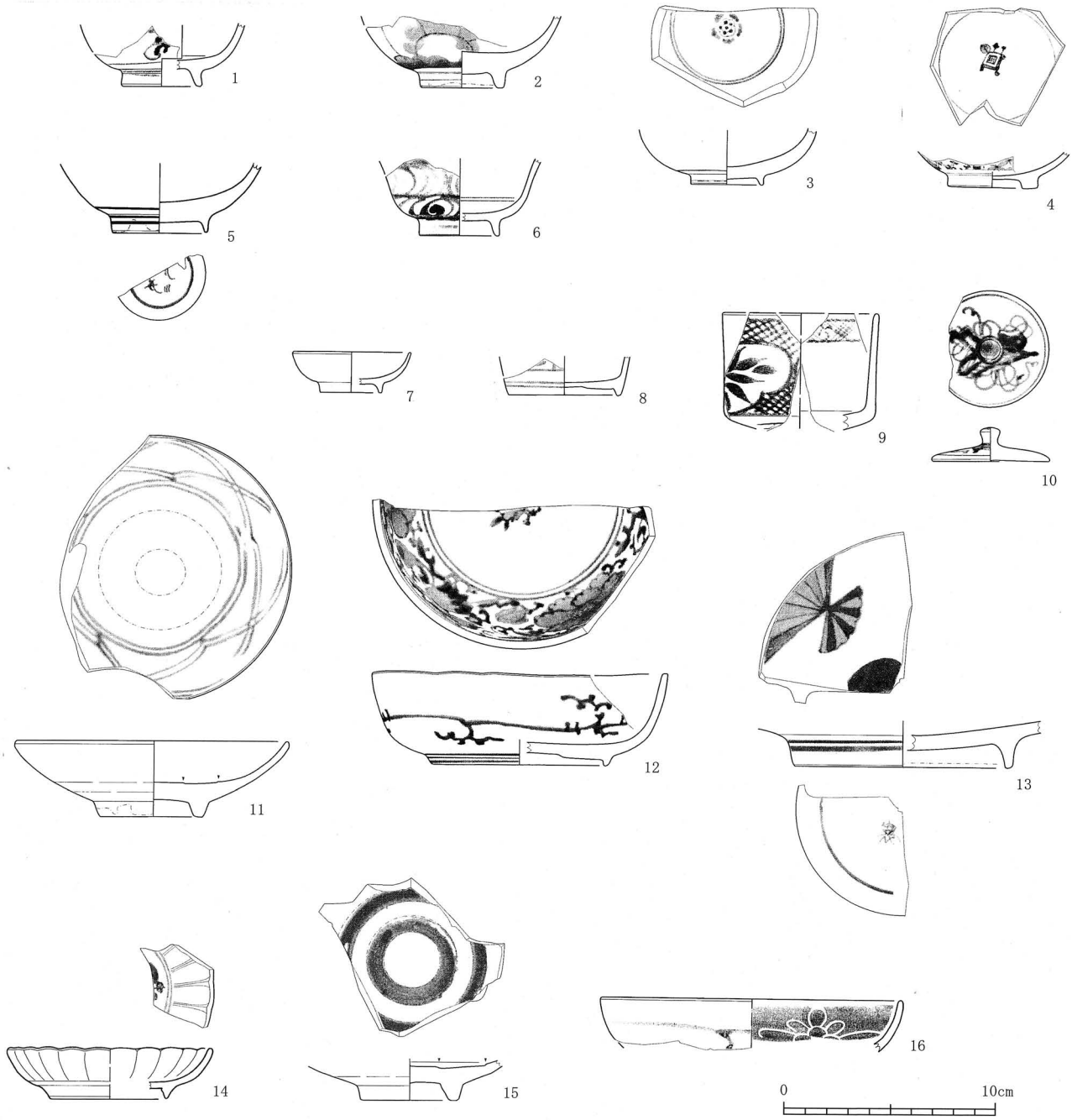
	種　別	地点・層位	特	徴	登録	写真
1	陶器　鉢	埋土	飴釉、口径300mm、残存高87mm、瀬戸美濃？、19c		I52	
2	陶器　甕	埋土	口径(192)mm、残存高88mm、瀬戸美濃？、19c ？		I628	
3	陶器　甕	埋土	口径(168)mm、残存高54mm、岸窯、17c		I149	
4	陶器　小甕	埋土	底径94mm、残存高44mm、岸窯、17c		I160	
5	陶器　甕	埋土	底径(155)mm、底面に回転糸切り痕、岸窯?、17c ？		I153	
6	陶器　甕	埋土	口径(100)mm、底径(70)mm、器高120mm程、岸窯、17c		I57	
7	陶器　甕	埋土	口径(82)mm、底径(56)mm、器高122mm程、岸窯、17c		I56	23-19
8	陶器　豆甕	埋土	口径(35)mm、残存高35mm、瀬戸美濃、19c		I250	
9	陶器　灯明具	埋土	底径(47)mm、残存高42mm、堤？、18c		I130	
10	陶器　水滴	埋土	布袋型の頭部片、瀬戸美濃、登窯8～		I251	
11	陶器　仏飯器	埋土	上部欠損、底径42mm、残存高38mm、大堀相馬、18c		I570	

第156図　SK322土坑出土遺物８



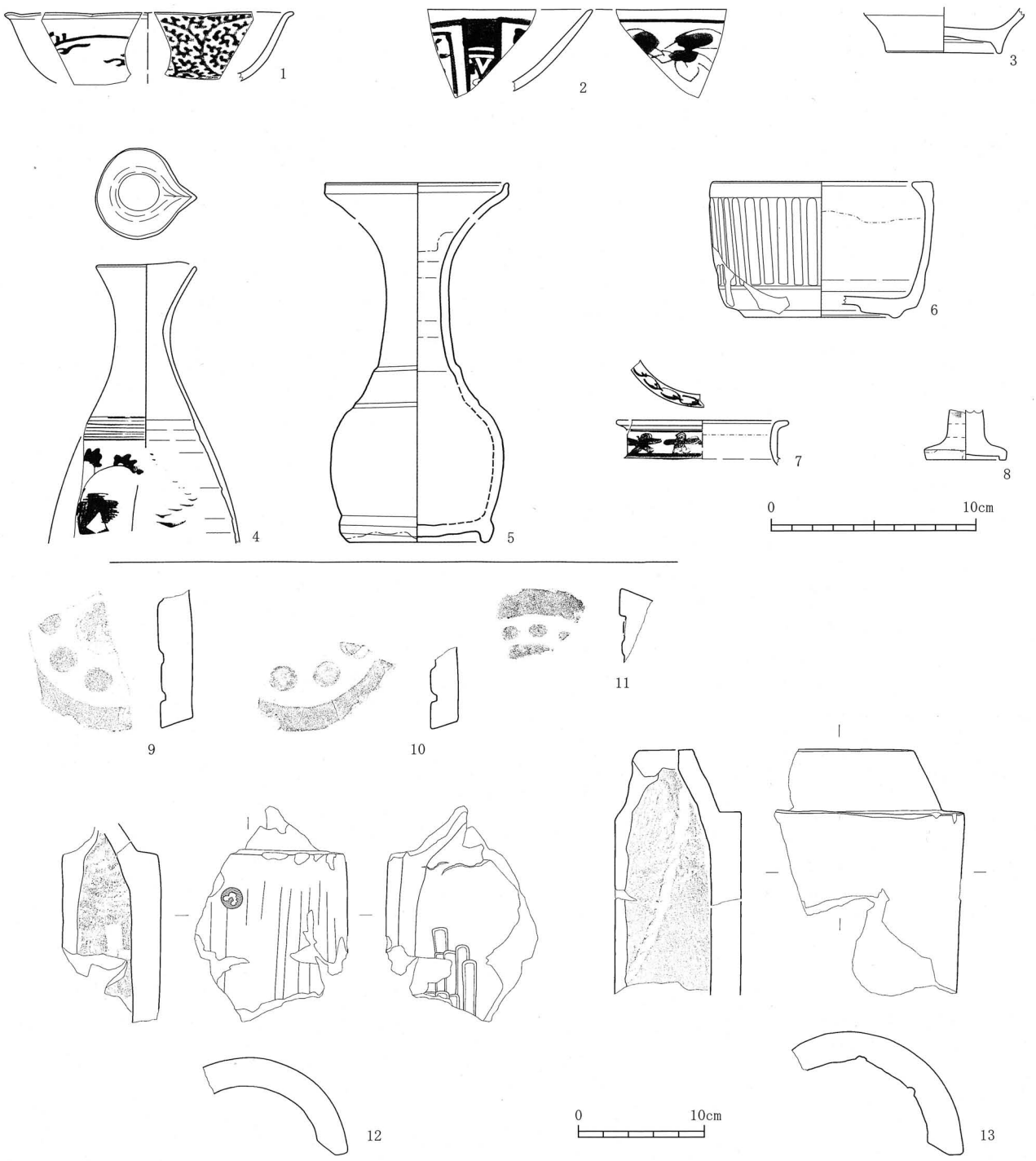
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	陶器　焙烙	埋土	透明釉、鍋部は片口、口径126mm、底径110mm、器高30mm、取っ手部は筒状で上部に留穴1ヶあり、上部長50mm、径25mm程、堤、19c前半	I70	23-20
2	陶器　焙烙	埋土	透明釉、鍋部は口径138mm、底径122mm、器高28mm、取っ手部は筒状、端部欠損、径25mm程、堤、19c前半	I69	
3	陶器　焙烙	埋土	透明釉、中実の取っ手部、下部欠損、中実、幅広となり鍋部に取り付く、唐草様の文様が描かれる、中央残存長60mm、堤、19c前半	I145	
4	陶器　焙烙	埋土	透明釉、筒状の取っ手部、上下部に留め孔1ヶづつあり、残存上部長50mm、径23mm程、堤、19c前半	I103	
5	磁器　碗	埋土	染付け、端反、焼継ぎ、口径84mm、底径35mm、器高44mm、肥前、19c前半	J52	24-6
6	磁器　碗	埋土	染付け、口径80mm、底径37mm、器高42mm、肥前、19c前半	J53	24-7
7	磁器　碗	埋土	染付け、口径121mm、底径59mm、器高64mm、肥前、19c初	J54	24-8
8	磁器　碗	埋土	染付け、龍文、口径92mm、底径34mm、器高54mm、肥前、18c	J57	
9	磁器　碗	埋土	染付け、焼継ぎ、口径(100)mm、底径(40)mm、器高50mm、肥前、19c前～中	J331	
10	磁器　碗	埋土	染付け、市松文、口径(100)mm、残存高42mm、肥前、17c以降	J61	
11	磁器　碗	埋土	染付け、口径(112)mm、残存高38mm、肥前、17c～18c	J194	24-9
12	磁器　碗	埋土	染付け、口径(76)mm、残存高36mm、肥前、17c～18c	J150	
13	磁器　碗	埋土	染付け、くらわんか手、丸文印版五弁花、底径44mm、残存高31mm、肥前、18c後半	J72	

第157図　SK322土坑出土遺物９



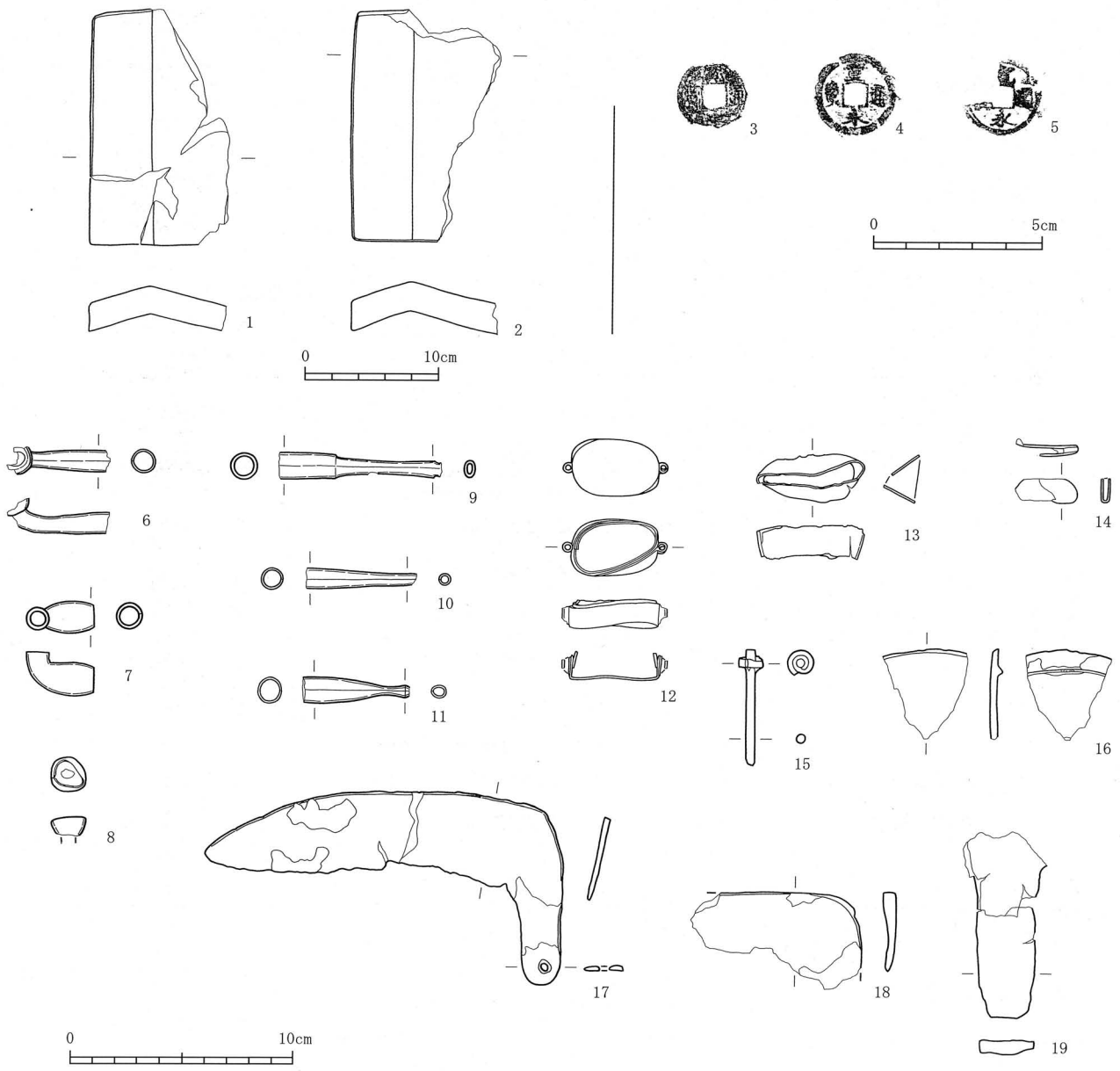
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	磁器　碗	埋土	染付け、底径36mm、残存高30mm、肥前、18c前半	J251	
2	磁器　碗	埋土	染付け、くらわんか手、梅樹文、底径38mm、残存高34mm、肥前、18c	J233	24-10
3	磁器　碗	埋土	染付け、手描き五弁花、底径34mm、残存高26mm、肥前、17c末～18c	J77	24-11
4	磁器　碗	埋土	染付け、蛇ノ目高台、底径42mm、残存高18mm、肥前、19c	J249	24-12
5	磁器　碗	埋土	染付け、くらわんか手、高台内に「大明年製」銘、底径44mm、残存高32mm、肥前、18c	J73	
6	磁器　碗	埋土	染付け、底径38mm、残存高36mm、瀬戸美濃、19c前～中	J337	
7	磁器　碗	埋土	染付け、猪口？、口径(54)、底径28mm、器高19mm、肥前、18c	J228	
8	磁器　筒形碗	埋土	染付け、底径53mm、残存高19mm、肥前、18c	J101	
9	磁器　筒形碗	埋土	染付け、口径(72)mm、残存高54mm、肥前、18c	J170	
10	磁器　蓋	埋土	染付け、口径56mm、器高16mm、肥前、19c	J234	
11	磁器　皿	埋土	染付け、蛇ノ目釉ハギ、口径129mm、底径46mm、器高36mm、肥前、18c前半	J55	
12	磁器　皿	埋土	染付け、蛇ノ目高台、牡丹唐草文、口径139mm、底径84mm、器高43mm、肥前、17c～18c	J56	
13	磁器　皿	埋土	染付け、底径(100)mm、残存高23mm、肥前、17c	J131	
14	磁器　皿	埋土	染付け、菊皿？、口径(96)mm、底径(66)mm、器高26mm、肥前、17c	J152	
15	磁器　皿	埋土	染付け、見込み部に鉄化粧、底径45mm、残存高20mm、肥前、17c前半	J227	
16	磁器　皿	埋土	染付け、墨弾き、口径(141)mm、残存高24mm、肥前、17c中	J114	

第158図　SK322土坑出土遺物10



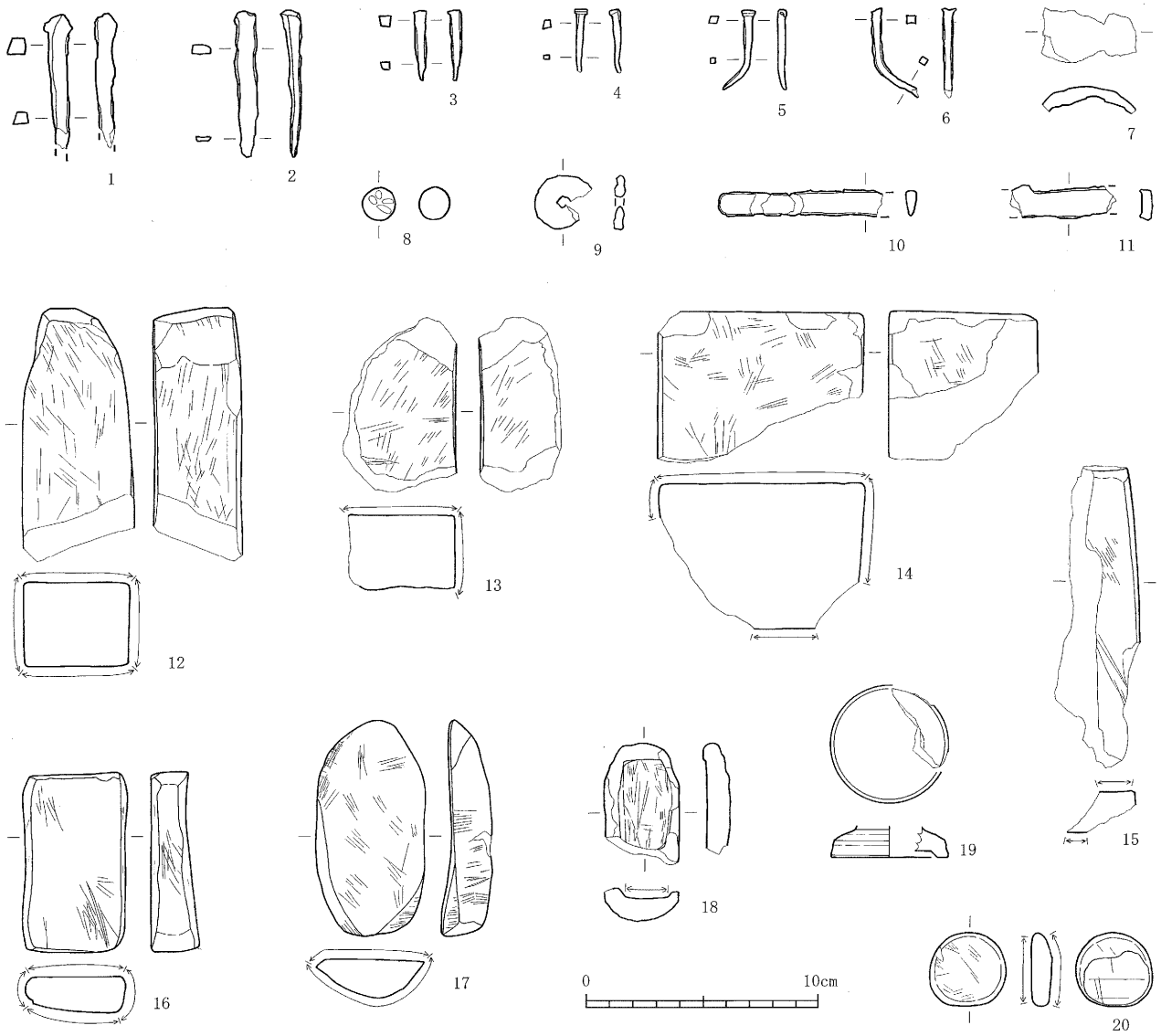
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	磁器　碗	埋土	染付け、内側に蛸唐草文、口径(140)mm、残存高34mm、肥前、17c～18c	J185	
2	磁器　碗	埋土	青花、芙蓉手、中国、17c前	J338	
3	磁器　碗？	埋土	底径56mm、残存高22mm、肥前、18c	J348	
4	磁器　徳利	埋土	染付け、片口、残存高136mm、肥前、18c～19c	J59	
5	青磁　仏花器	埋土	口径84mm、底径64mm、器高168mm、肥前、17c ？	J60	24-13
6	青磁　香炉	埋土	口径106mm、底径74mm、器高66mm、肥前、17c	J58	
7	磁器　香炉	埋土	色絵、口径(82)mm、残存高18mm、肥前、18c後半	J180	
8	磁器　仏飯器	埋土	底径38mm、残存高24mm、肥前、18c以降	J230	
9	近世瓦　軒丸瓦	埋土	九曜文、瓦当厚26mm	G2	20-21
10	近世瓦　軒丸瓦	埋土	九曜文、瓦当厚22mm	G3	20-22
11	近世瓦　軒丸瓦	埋土	連珠三巴文、	G1	20-23
12	近世瓦　丸瓦	埋土	凸面:縦位方向のナデ、玉縁付近に鬼瓦を刻んだ径17mmの円形スタンプ、凹面:布目痕、縦位方向のヘラ状圧痕、残存長175mm、厚さ23mm	G13	20-24
13	近世瓦　丸瓦	埋土	凸面：ナデ、凹面：布目痕、紐痕、残存長200mm、厚さ25mm、玉縁長49mm	G14	20-25

第159図　SK322土坑出土遺物11



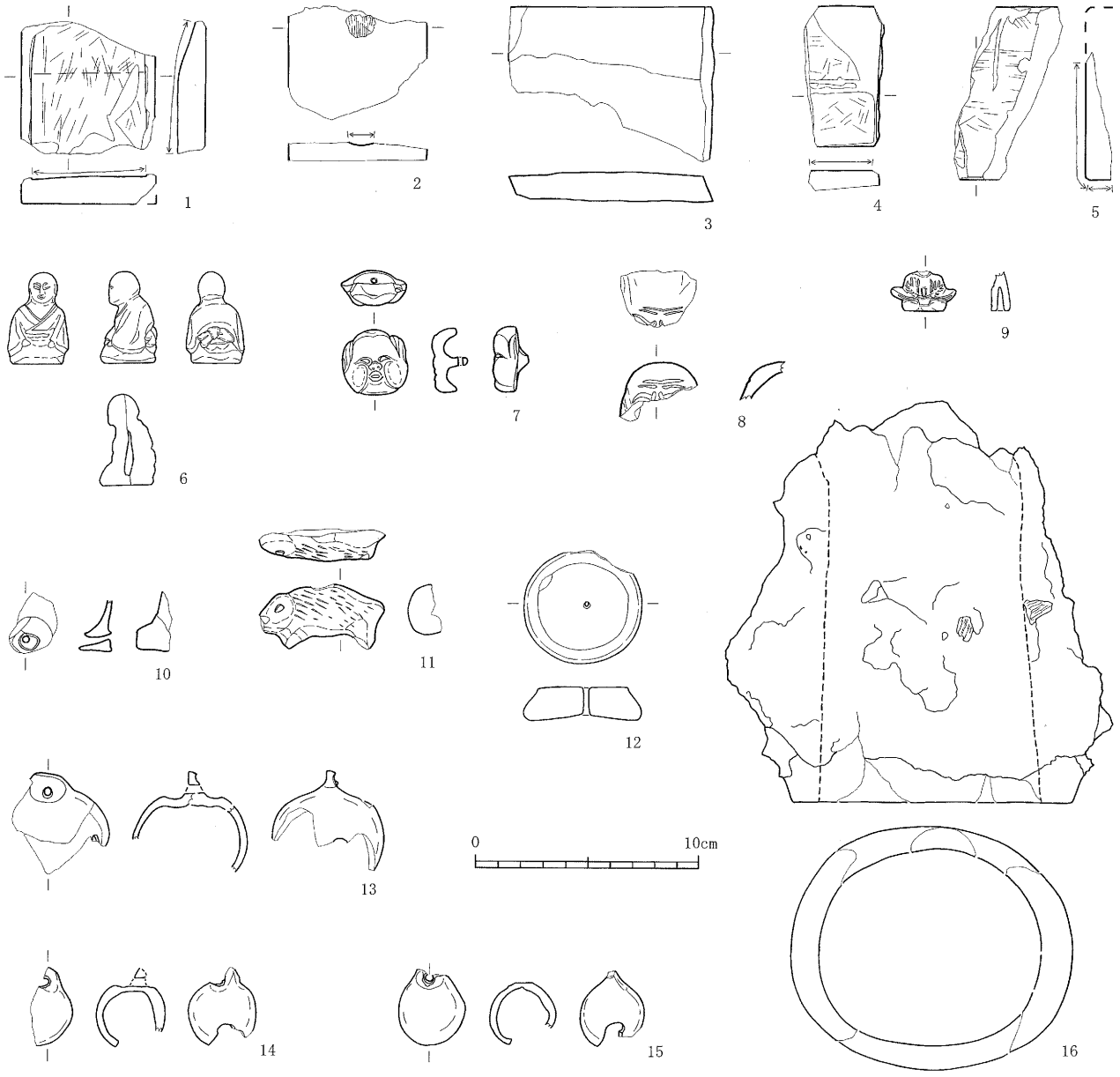
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	近世瓦　桟瓦？	埋土	凹面・凸面ともナデ、桟瓦の形態を呈する、長さ177mm、厚さ20mm	G27	
2	近世瓦　桟瓦？	埋土	凹面・凸面ともナデ、桟瓦の形態を呈する、長さ175mm、厚さ22mm	G28	
3	古銭	埋土	□□通宝	N1	
4	古銭	埋土	寛永通宝(新寛永 18c以降)	N2	
5	古銭	埋土	寛永通宝(新寛永 18c以降)	N3	
6	キセル	埋土	雁首はゆるく立ち上がり火皿部へ取り付く、残存長46mm、筒径10mm、火皿推径15mm	N9	
7	キセル	埋土	太めで短い雁首で吸い口と一体物となる、残存長30mm、筒端部径11mm、中央肥厚最大径15mm、火皿径10mm	N23	21-6
8	キセル	埋土	火皿、逆台形状、上部径15mm、下部径9mm、	N11	
9	キセル	埋土	吸い口、肩があり段がつく、口先が潰れてる、残存長73mm、筒径12mm、吸い口先5×7mmの楕円形	N8	21-7
10	キセル	埋土	吸い口、吸い口先に向かい細くなる、残存長50mm、筒径10mm、吸い口先径5mm程	N5	
11	キセル	埋土	吸い口、吸い口先に向かい大きくしぼみ細くなる、残存長50mm、筒径10mm、吸い口先径5mm程	N4	21-8
12	銅製品　鐶？	埋土	楕円形状で両端に径2mm程の通し穴あり、片方が面となり尻部となる、長径46mm、短径25mm、筒幅12mm、厚さ0.8mm	N6	21-16
13	不明銅製品	埋土	潰れてちぎれているが楕円形の筒状と判断、長径48mm、短径22mm、幅13mm、厚さ0.9mm、12と同類のものか	N7	
14	不明銅製品	埋土	鉄錆が銅板に挟み込まれている、残存長27mm、幅11mm、板の厚さ0.8mm	N24	
15	不明銅製品	埋土	棒状、上部に螺旋に巻かれた円形の突起あり、残存長52mm、径4mm、突起部径12mm	N10	21-17
16	不明鉄製品	埋土	板状、上部が縁となる、縁下部に高さ2mm程の帯が延びる、残存長41mm、最大幅39mm、厚さ3mm	N70	21-18
17	鉄製品　鎌	埋土	鎌先、L字形、鎌部長160mm、幅36mm程、厚さ0.5～2mm、柄との取り付け部に径3mm程の留め穴1ヶあり	N85	21-19
18	鉄製品　鎌	埋土	鎌先端部、残存長74mm、幅43mm、上部厚5mm、下部2mm程	N77	
19	不明鉄製品	埋土	板状、鎌先の破片？、残存長84mm、幅36mm、厚さ6mm、	N86	

第160図　SK322土坑出土遺物12



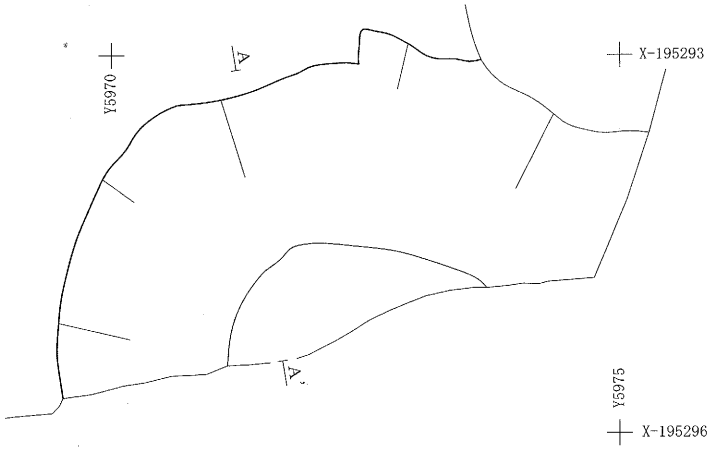
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	鉄製品　釘	埋土	上下部欠損、断面四角形、残存長59mm、径は上部7×7mm、下部5×5mm	N69	
2	鉄製品　釘	埋土	上下部欠損、断面四角形、残存長63mm、径は上部8×4mm、下部6×2mm	N79	
3	鉄製品　釘	埋土	上部欠損、断面四角形、残存長30mm、径は上部4×4mm、下部3×3mm	N73	
4	鉄製品　釘	埋土	釘頭屈曲、下部欠損、断面四角形、残存長27mm、径は上部3×3mm、下部2×2mm	N67	21-10
5	鉄製品　釘	埋土	釘頭屈曲、長さ34mm、断面四角形、径は上部3×3mm、下部2×1mm	N80	21-11
6	鉄製品　釘	埋土	上下部欠損、断面四角形、径は上部4×3mm、下部3×3mm	N75	
7	不明鉄製品	埋土	鉄片、丸みをもつ、残存長41mm、残存幅33mm、厚さ最大6mm	N81	
8	鉛製品	底面	鉛玉（鉄砲玉）、外面に白い粉をふく、14×13mmのほぼ球形、重さ13g	N12	21-20
9	不明鉄製品	埋土	中央に穴をもつ円盤状、径22×23mm、厚さ4mm	N87	
10	鉄製品　刀子？	埋土	断面が逆三角形、両端部欠損、残存長71mm、幅10mm、上部幅4mm	N78	
11	不明鉄製品	埋土	棒状、断面四角形、残存長45mm、幅14mm、厚さ4mm	N82	
12	砥石	埋土	下部欠損、平面形は長方形、砥面は4面、断面長方形、残存長110mm、幅48mm、厚さ37mm、凝灰岩	K5	21-23
13	砥石	埋土	上下部及び側面欠損、平面形は長方形と判断、砥面2面確認、断面長方形、残存長75mm、幅49mm、厚さ33mm、凝灰岩	K1	
14	砥石	埋土	下部欠損、平面形は長方形?、砥面は4面、断面長方形、残存長64mm、幅88mm、厚さ63mm、凝灰岩	K4	
15	砥石	埋土	欠損品、平面形は長方形、砥面2面確認、断面長方形、残存長131mm、幅33mm、厚さ18mm、凝灰岩	K2	
16	砥石	埋土	平面形は長方形、砥面は4面、断面長方形、長さ77mm、幅43mm、厚さ21mm、重さ117g、凝灰岩	K3	21-24
17	砥石	埋土	平面形は楕円形状、全面砥面、断面三角形状、長さ114mm、幅47mm、厚さ16mm、重さ97g、凝灰岩	K22	
18	砥石？	埋土	下部欠損、平面は長円形状、断面は半円形状、平面部に幅20mm・深さ4mm程の擦り面を形成、残存長48mm、幅32mm、厚さ最大14mm、凝灰岩	K8	
19	不明石製品	埋土	仏飯器の脚部に似る、底部は削り出しで台部を形成、径51mm、凝灰岩	K6	
20	不明石製品	埋土	両面が擦られた円盤形、径32mm程、厚さ8mm、重さ8.5g	K7	

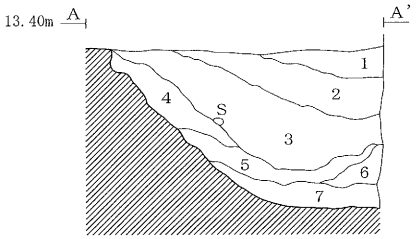
第161図　SK322土坑出土遺物13



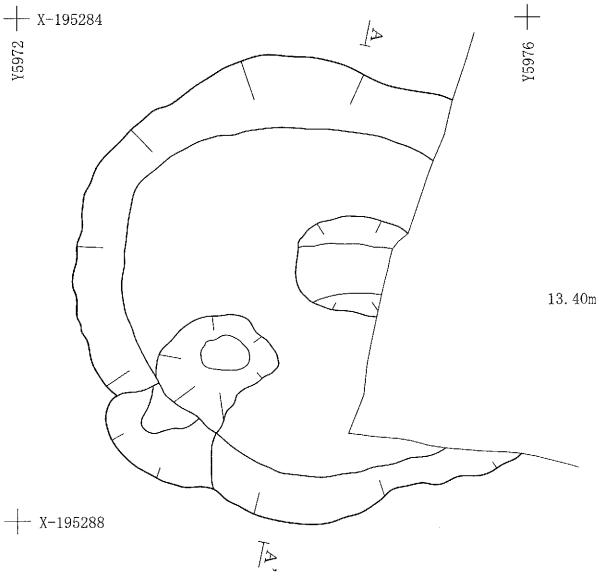
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	硯	埋土	縁部欠損、上方に海部、長さ60mm、幅58mm、厚さ13mm、粘板岩	K10	21-25
2	硯	埋土	節理面で上部剥離、中央部に擦り面が円形に残存、残存長51mm、幅62mm、最大厚8mm、粘板岩	K30	
3	硯	埋土	剥離片、残存長91mm、残存幅70mm、残存厚13mm、粘板岩	K35	
4	硯	埋土	剥離片、長さ63mm、残存幅32mm、残存厚9mm、粘板岩	K24	
5	硯	埋土	剥離片、長さ33mm、残存幅78mm、残存厚19mm、粘板岩	K25	
6	土人形	埋土	人物、着座、中空、高さ41mm、幅26mm、厚さ25mm	P22	22-9
7	土人形	埋土	芥子面、童子？、高さ29mm、幅29mm、厚さ16mm	P6	22-10
8	土人形	埋土	四行？、中空、頭部片、残存高25mm、残存幅34mm、残存厚25mm	P4	22-11
9	土人形	埋土	天神、頭部欠損、中空、残存高18mm、幅29mm、厚さ9mm	P5	22-12
10	土製品	埋土	貫通穴をもつ、中空、残存高27mm、残存幅21mm、残存厚17mm	P14	
11	土製品	埋土	猪、剥離欠損、中実、残存長56mm、高さ30mm、残存幅15mm	P3	22-13
12	土製品	埋土	有孔円盤、径52mm、厚さ15mm、	P18	22-14
13	土製品　鈴	埋土	上部に紐穴、体部に孔1ヶ、残存長45mm、最大幅49mm、	P8	
14	土製品　鈴	埋土	上部に紐穴、体部に孔1ヶ、残存長35mm、最大幅31mm、	P7	22-15
15	土製品　鈴	埋土	上部に紐穴、体部に孔1ヶ、残存長34mm、最大幅29mm、	P10	22-16
16	フイゴの羽口	埋土	下部は端部となり接合部、上部は融解し鉱滓が多量に付着、残存長180mm、外径110×125mm、内径89×98mm	P22	22-17

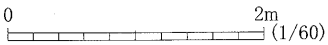
第162図　SK322土坑出土遺物14

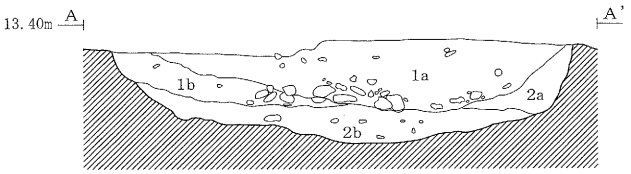




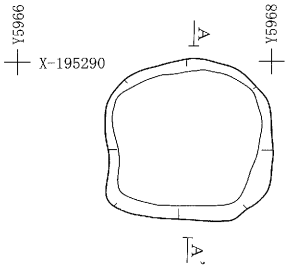
SK324

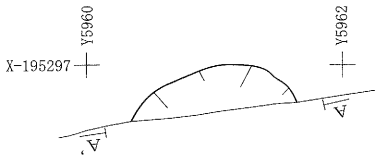


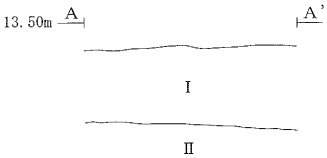


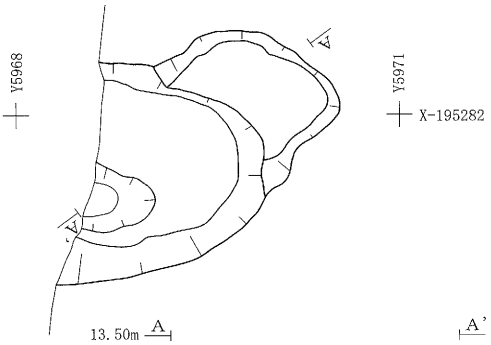


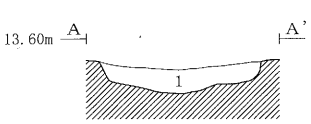
SK325



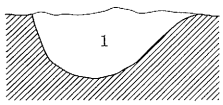




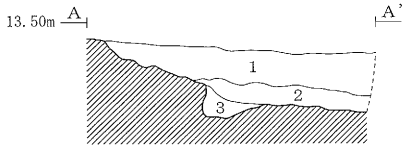




SK326



SK327

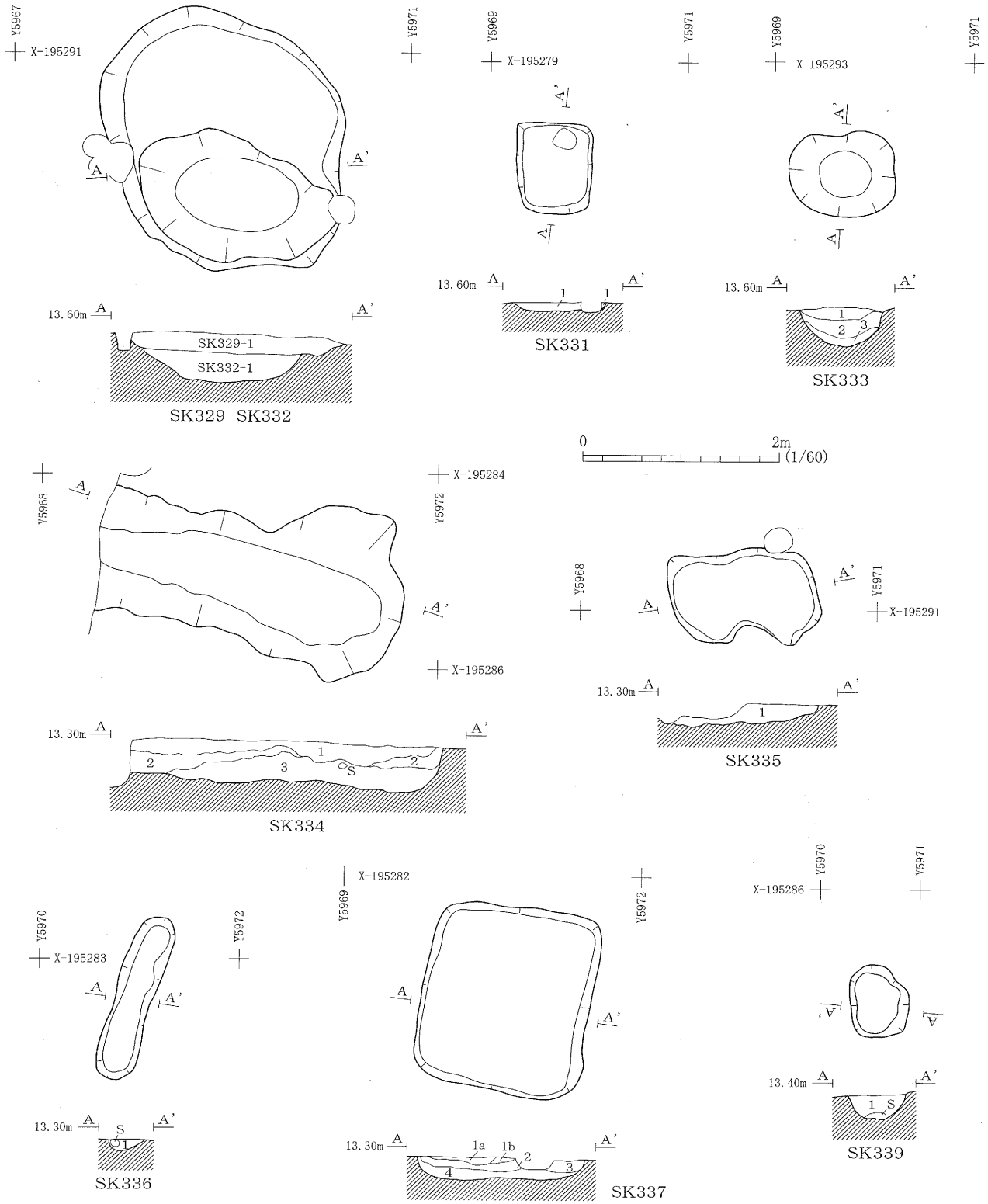


SK328

	層位	色調	性質	備考
SK324	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	褐灰色土・暗褐色土を斑に含む
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土質シルト	下部に砂礫を含む
	3	褐灰色 10YR4/1	粘土質砂	小礫を含む
	4	褐灰色 10YR4/1	粘土	混成層
		暗褐色 10YR3/3	粘土	
	5	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	粗砂を含む
	6	黒褐色 10YR3/2	粘土	混成層
		にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質粘土	
	7	灰黄褐色 10YR5/2	粘土	底面に酸化鉄集積
SK325	1a	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	炭化物、焼土を含む

	層位	色調	性質	備考
SK325	1b	褐色 10YR4/4	シルト	礫を多量に含む
	2a	褐色 10YR4/4	シルト	混成層
		明黄褐色 10YR6/6	シルト	
	2b	褐色 10YR4/4	シルト	混成層、砂・礫を含む
		明黄褐色 10YR6/6	シルト	
SK326	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	褐灰色土ブロックを含む
SK327	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質粘土	
SK328	1	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	暗褐色土を斑に含む
	3	褐色 10YR4/6	砂質粘土	にぶい黄褐色土を斑に含む

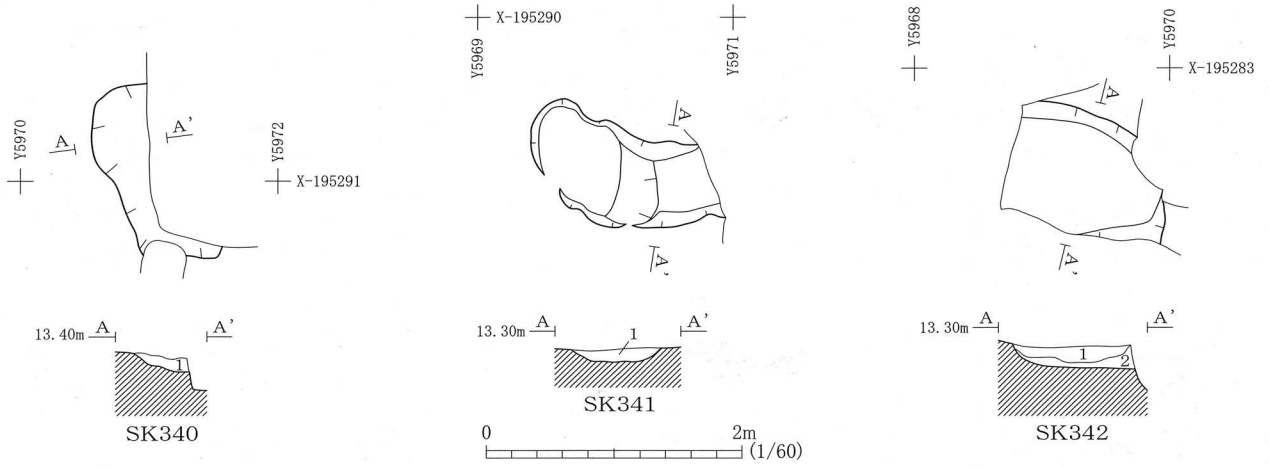
第163図　99－4区土坑3



	層位	色　調	性　質	備　考
SK329	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	
SK332	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土ブロックを含む
SK331	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土粒を含む
SK333	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土を斑に含む
	2	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	焼土・炭化物を含む
	3	灰黄褐色 10YR6/2	砂質粘土	ややグライ化、焼土・炭化物を含む
SK334	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	焼土・炭化物を多量に含む
	2	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	暗褐色土を斑に含む
	3	褐灰色 10YR4/1	粘土質砂	暗褐色土・礫を含む

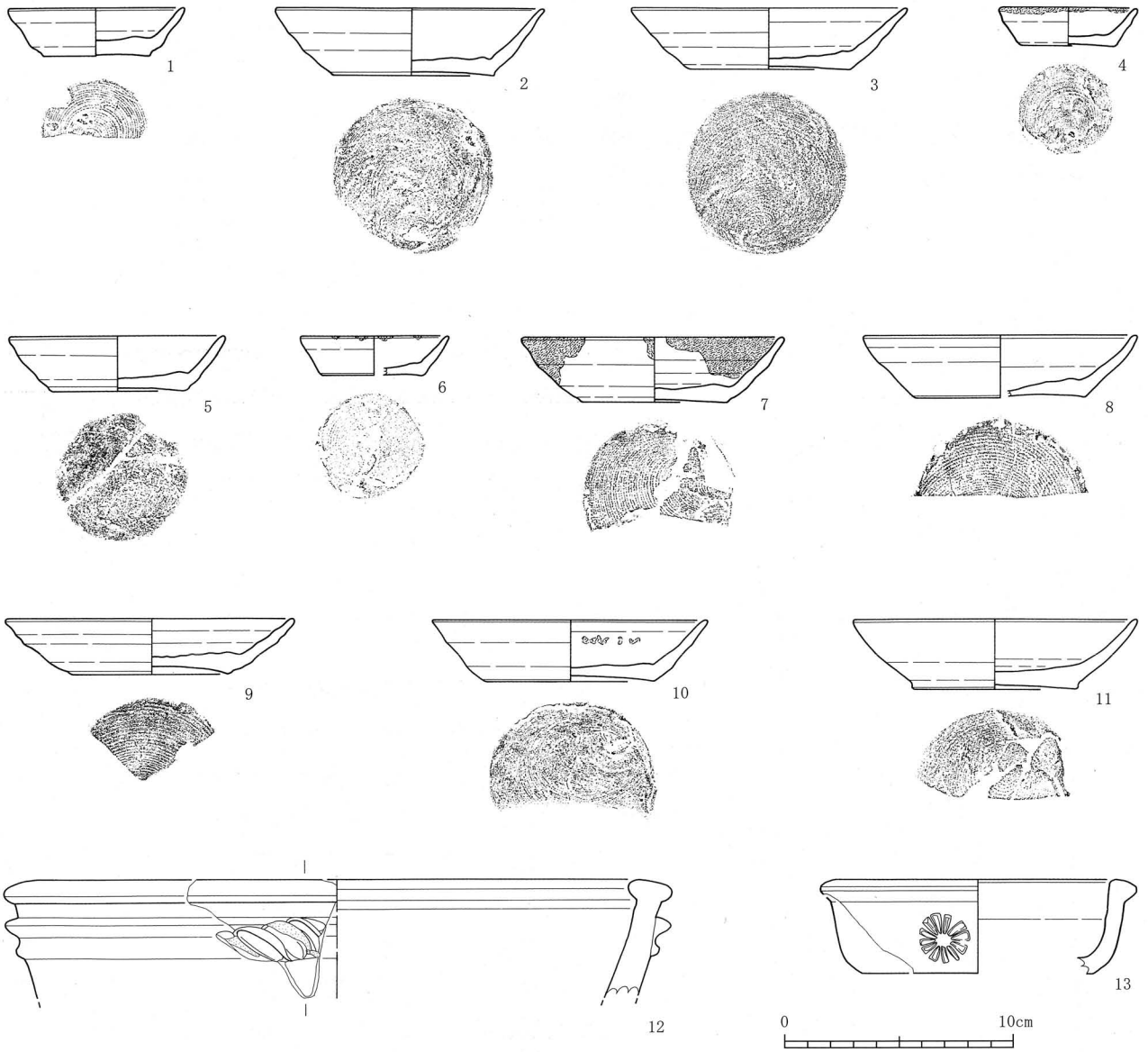
	層位	色　調	性　質	備　考
SK335	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	
SK336	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	焼土・礫を多量に含む
SK337	1a	暗褐色 10YR3/3	シルト	小礫を含む
	1b	暗褐色 10YR3/3	シルト	粗砂を含む
	2	暗褐色 10YR3/4	シルト質粘土	灰黄褐色・炭化物を含む
	3	にぶい黄褐色 10YR5/4	粘土質シルト	黒褐色土・焼土を斑に含む
	4	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	黒褐色土を斑に含む
SK339	1	暗褐色 10YR/3	粘土	礫を少量含む

第164図　99－4区土坑4

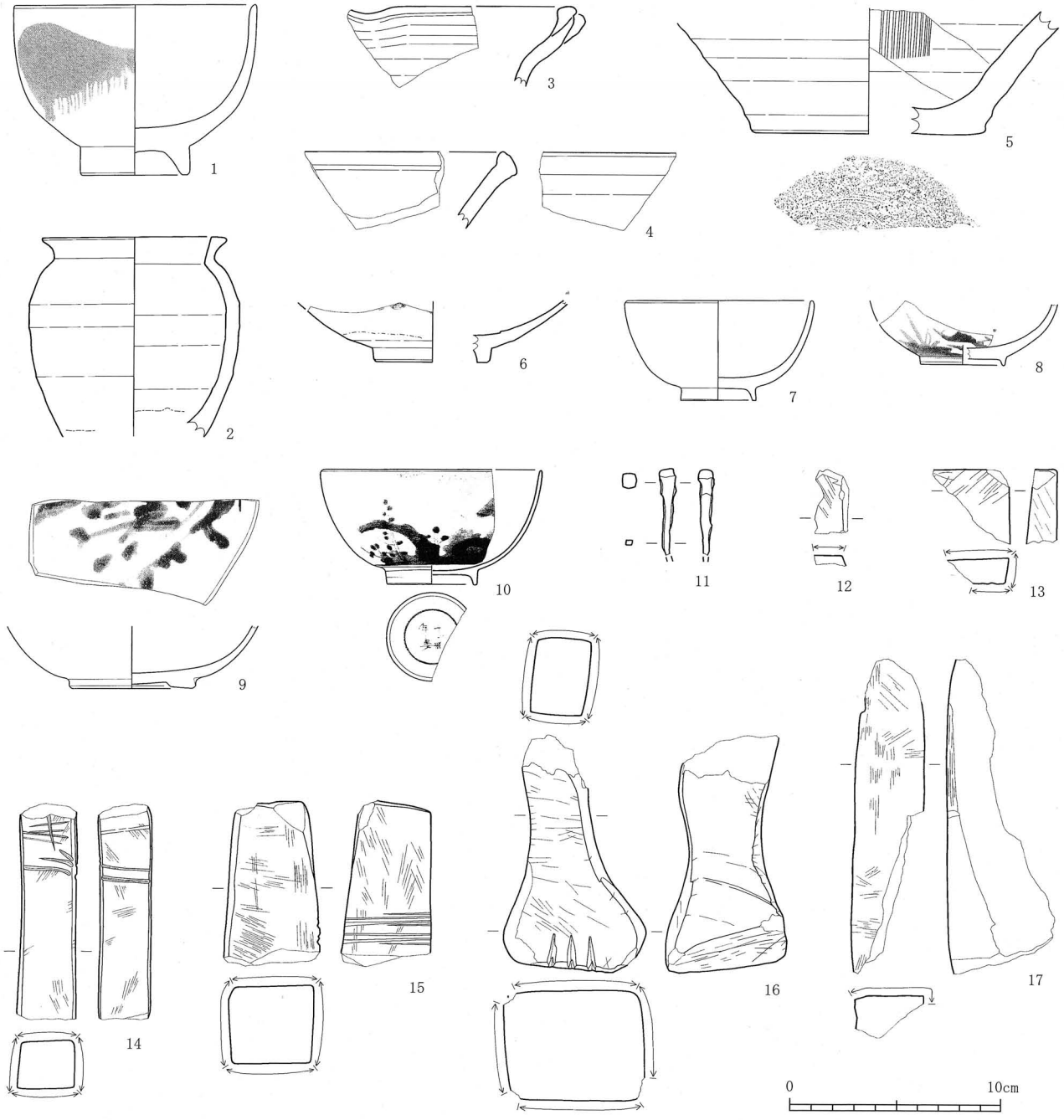


	層位	色　調	性　質	備　考		層位	色　調	性　質	備　考
SK340	1	暗褐色　10YR3/3	シルト		SK342	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	褐灰色土ブロックを含む
SK341	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト			2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	

第165図　99－4区土坑５

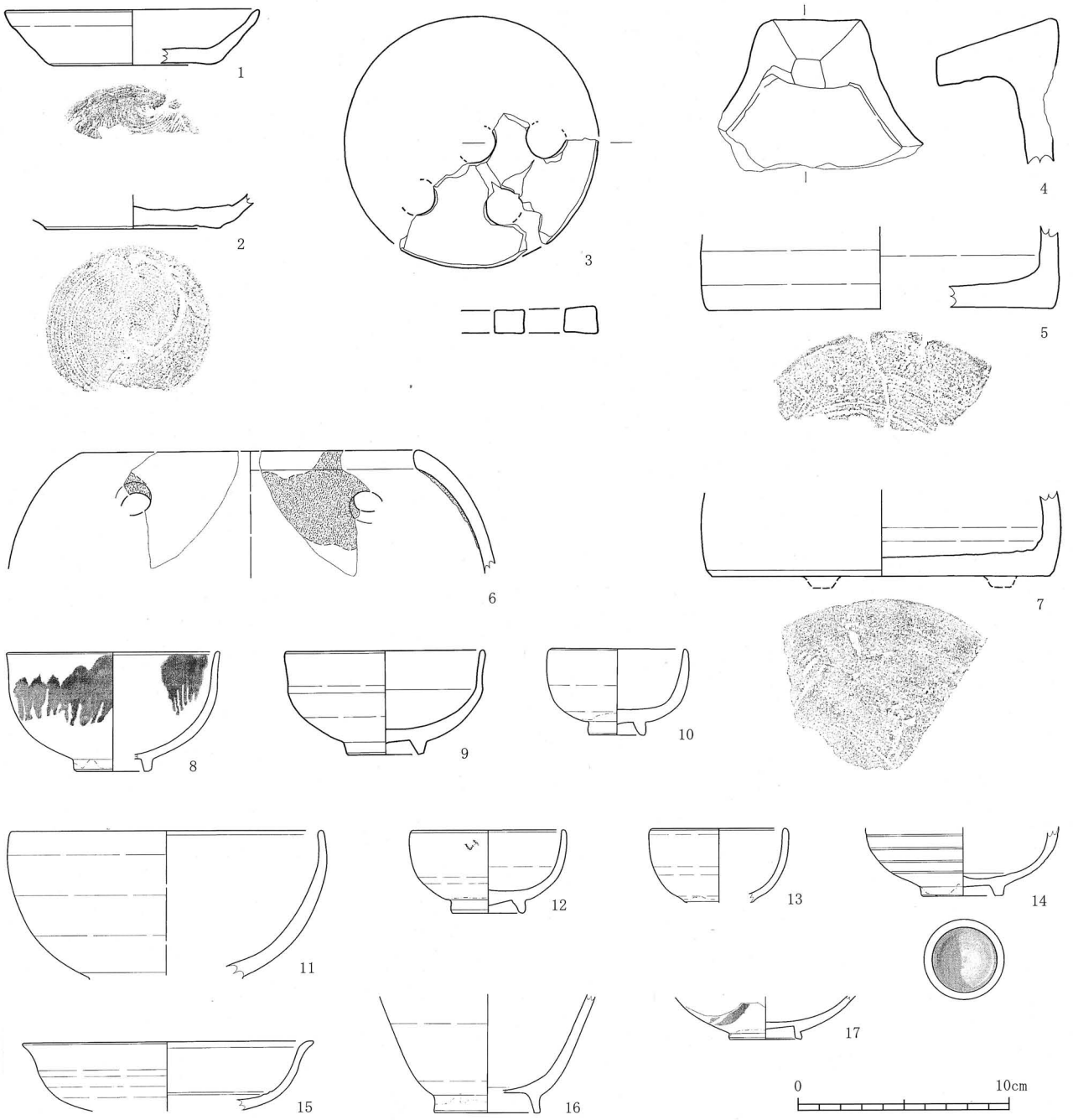


第166図　SK324土坑出土遺物１



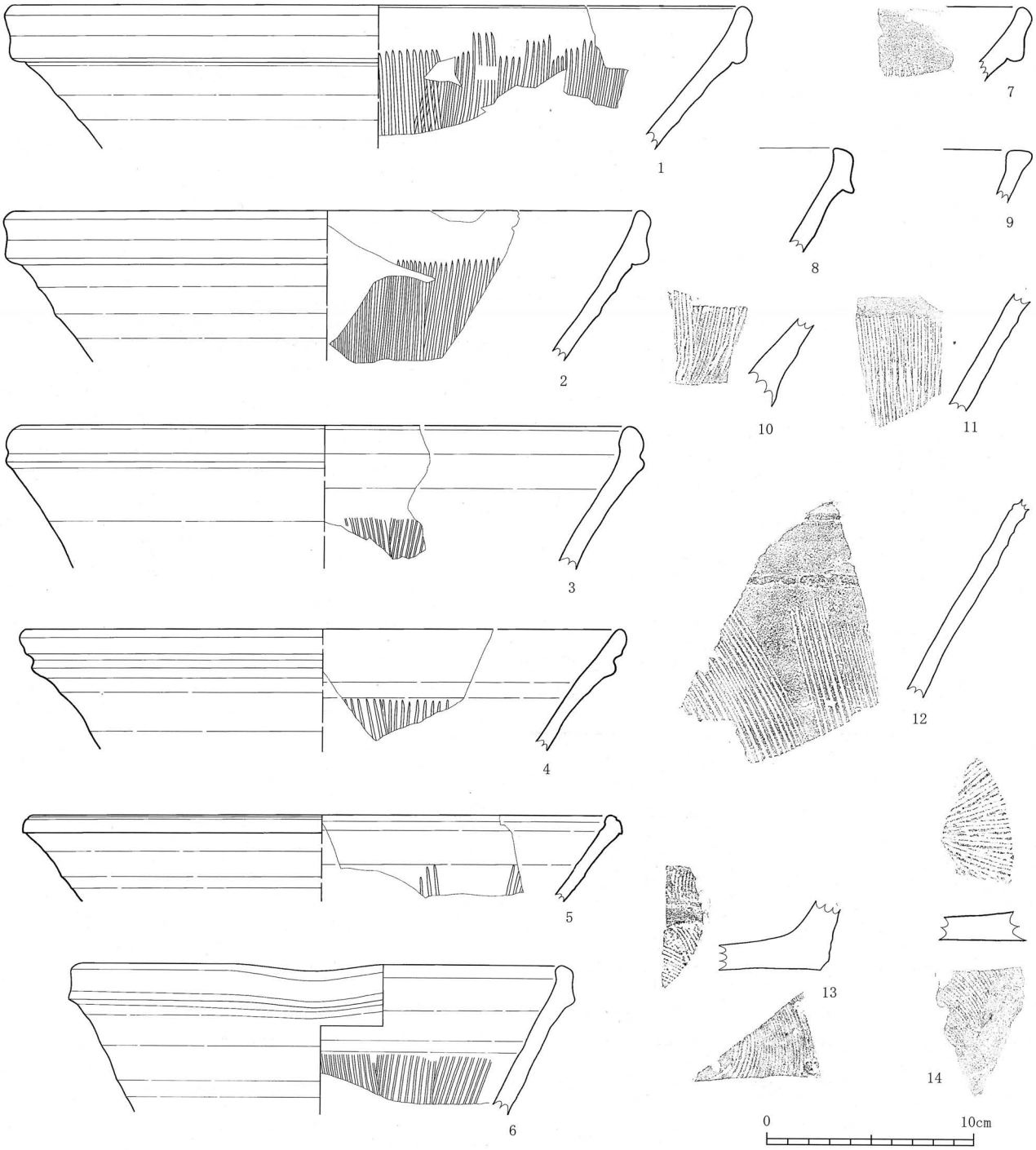
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	陶器　碗	7層	灰釉、口径114mm、底径50mm、器高80mm、唐津、18c	I1	23-21
2	陶器　壺	埋土	鉄釉、口縁部断面三角形状、縁部平坦、口径(86)mm、残存高97mm、岸窯、17c ？	I2	
3	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁端部平縁、片口、岸窯系、17c	I10	
4	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、口縁端部丸くおさまる、頂部三角形状に尖る、岸窯系、17c	I7	
5	陶器　擂鉢	埋土	鉄釉、底部片、縦位の櫛目、単位10本、底径110mm、岸窯系、17c中	I5	
6	陶器　皿	埋土	青緑釉、蛇ノ目釉ハギ、底径(60)mm、唐津、17c後半	I23	
7	磁器　碗	埋土	口径88mm、底径35mm、器高47mm、肥前、17c末～18c初	J1	
8	磁器　碗	埋土	染付け、底径(40)mm、肥前、17c後半	J3	
9	磁器　碗	埋土	染付け、蛇ノ目高台、墨弾き、底径(60)mm、肥前、17c後半	J34	
10	磁器	埋土	染付け、口径103mm、底径42mm、器高54mm、肥前、17c～18c	J2	24-14
11	鉄製品　釘	埋土	上下部欠損、断面四角形、残存長41mm、径は上部7×7mm、下部2×3mm	N92	
12	砥石	埋土	欠損、平面形は方形、砥面1面確認、残存長31mm、残存幅15mm、残存高5mm、凝灰岩	K17	
13	砥石	埋土	欠損、平面形は方形、砥面3面確認、断面長方形、残存長35mm、残存幅33mm、残存高12mm、凝灰岩	K16	
14	砥石	埋土	上下部欠損、平面形は長方形、砥面は4面、断面正方形、残存長103mm、幅28mm、厚さ23mm、凝灰岩	K14	21-26
15	砥石	埋土	下部欠損、平面形は長方形、砥面は4面、断面正方形、残存長78mm、幅45mm、厚さ37mm、凝灰岩	K15	
16	砥石	埋土	下部欠損、平面形は台形状の分銅形、砥面は4面、断面長方形、残存長110mm、幅67mm、厚さ52mm、凝灰岩	K12	21-27
17	砥石	埋土	上下・側面欠損、平面形は長方形、砥面2面確認、断面方形、残存長149mm、幅33mm、厚さ48mm、凝灰岩	K13	

第167図　SK324土坑出土遺物２



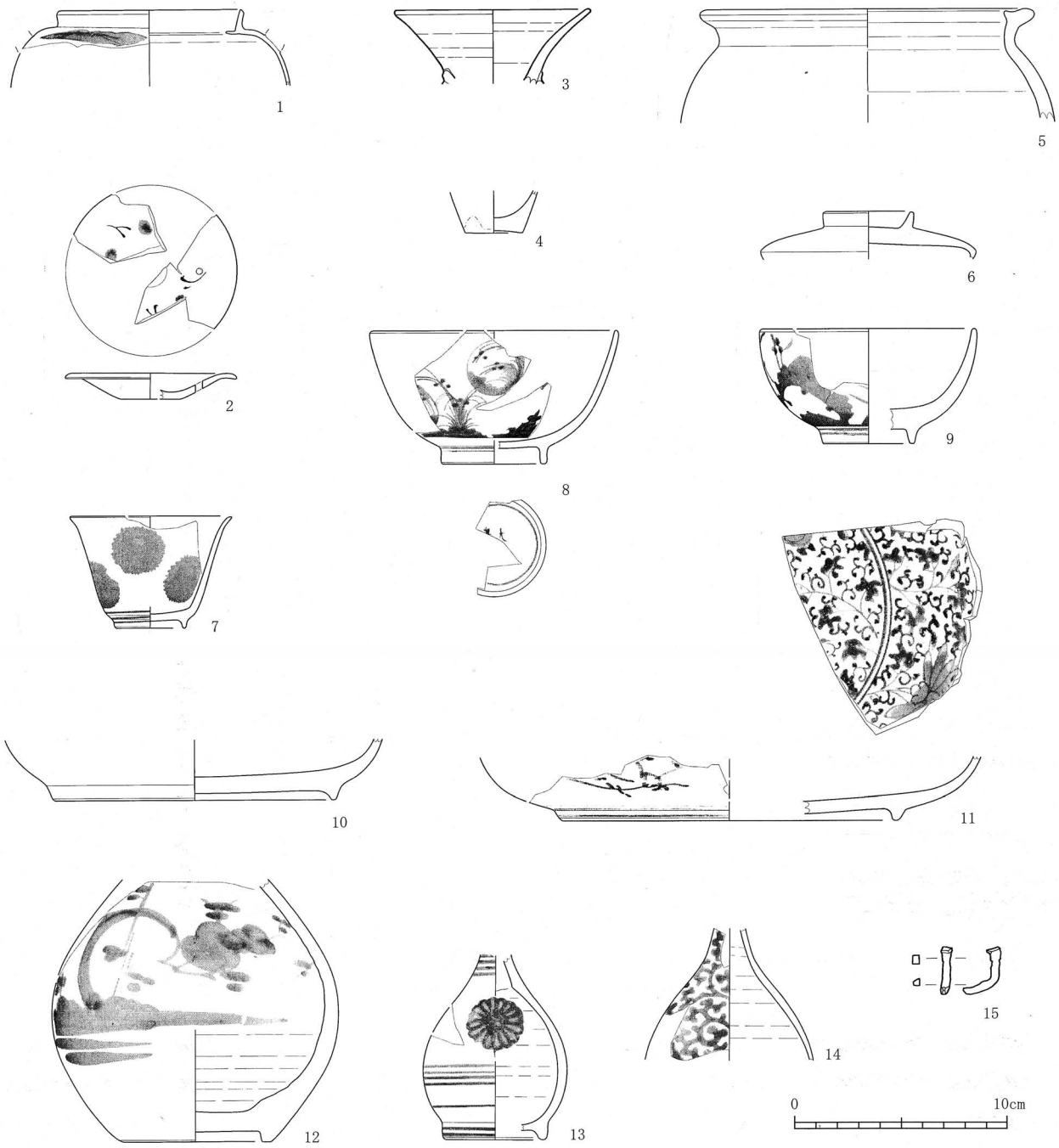
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土師質土器　皿	1層	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径120mm、底径80mm、器高26mm	D30	
2	土師質土器　皿	1層	ロクロ成形、切り離しは回転糸切り、底径82mm	D31	
3	土師質土器　目皿	1層	径120mm、厚さ11mm程の円盤状、4ヶの孔確認、孔は中央に1、周辺6の7ヶと判断	D29	
4	瓦質土器　五徳？	1層	口縁部片?、鉤状に内側に折れ曲がる	H29	
5	瓦質土器　鉢	1層	体部はほぼ垂直に立ち上がる、底部に回転糸切り痕、底径	H36	
6	瓦質土器　蚊遣	1層	口縁部片、内弯気味にまるく立ち上がり丸くおさまる、口縁下部に径15mm程の孔、内面にタール付着、口径155mm	H34	
7	瓦質土器　火鉢	1層	底部片、内弯気味に立ち上がる、剥離痕から脚は3足、底径158mm	H35	
8	陶器　碗	1層	灰釉、飴釉流し、口径100mm、底径34mm、器高56mm、大堀相馬、18c前半	I662	
9	陶器　碗	1層	灰釉、口径92mm、底径36mm、器高49mm、大堀相馬、18c後半	I657	23-22
10	陶器　碗	1層	灰釉、口径64mm、底径26mm、器高41mm、大堀相馬、18c後半～19c前半	I660	
11	陶器　碗	1層	口径(146)mm、被熱、近世	I716	
12	陶器　小碗	1層	灰釉、口径73mm、底径33mm、器高39mm、美濃、登窯8	I699	
13	陶器　小碗	1層	灰釉、口径(63)mm、美濃、登窯8	I701	
14	陶器　碗	1層	掛け分け、底径39mm、美濃？ 18c以降	I705	
15	陶器　皿	1層	白濁釉、口径(137)mm、大堀相馬、18c後半	I679	
16	陶器　碗	1層	白濁釉、底径(50)mm、残存高さ56mm、大堀相馬、18c後半～19c前半	I680	
17	陶器　碗	1層	丸腰、底径34mm、残存高20mm、京・信楽系、18c	I708	

第168図　SK325土坑出土遺物1



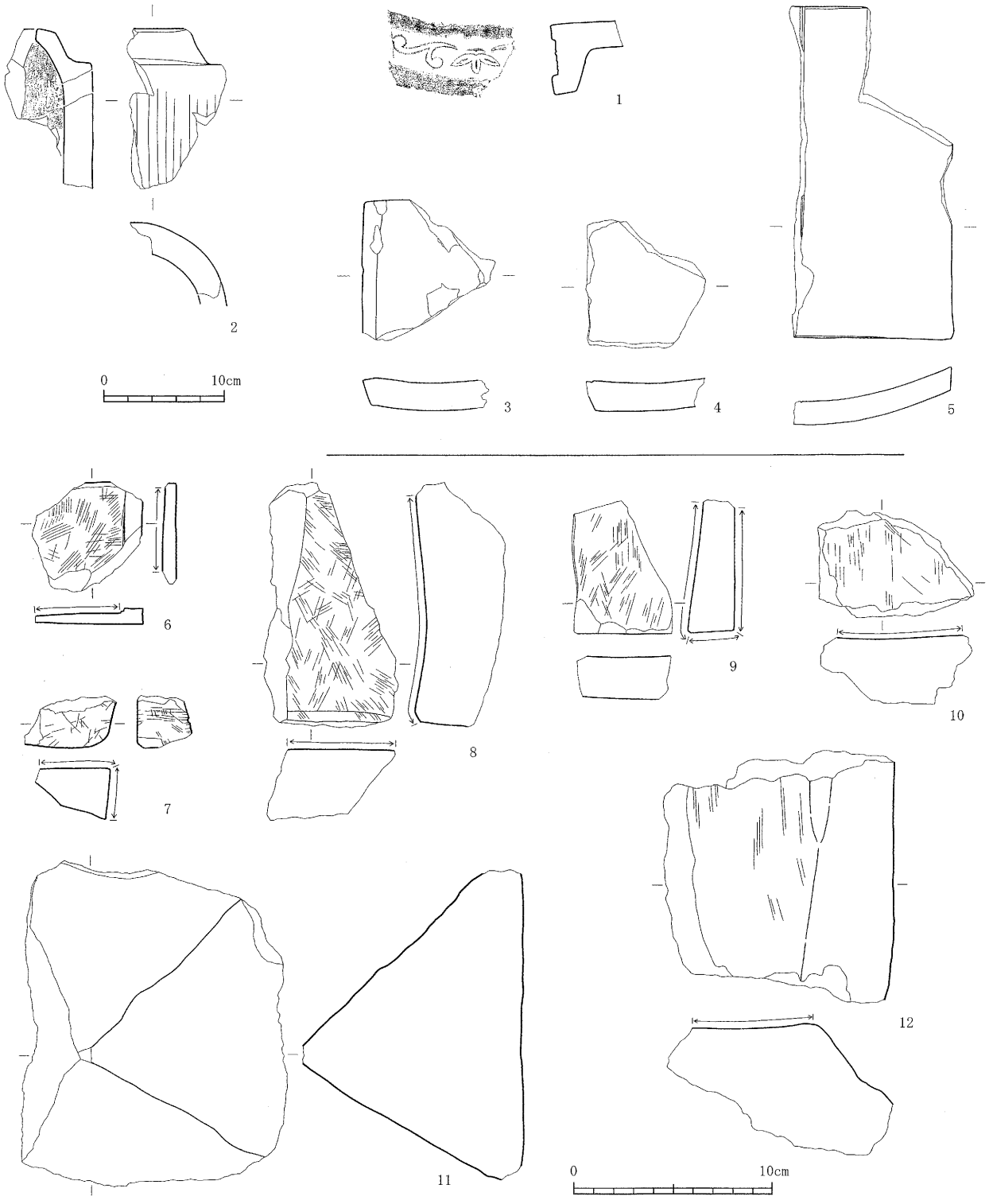
	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、口径(360)mm、産地不明、近世	I733	
2	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、口径(311)mm、産地不明、近世	I655	
3	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、口縁やや内傾する、縦位の櫛目、口径(308)mm、産地不明、近世	I731	
4	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、口径(294)mm、産地不明、近世	I729	
5	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、口縁端部丸くおさまる、縦位の櫛目、口径(289)mm、産地不明、近世	I736	
6	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、片口、口縁直立気味、縦位の櫛目、単位11条、口径(242)mm、産地不明、近世	I732	
7	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、縦位の櫛目、産地不明、近世	I735	
8	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、産地不明、近世	I734	
9	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、口縁部片、口縁端部平坦、産地不明、近世	I737	
10	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、体部片、縦位の櫛目、産地不明、近世	I728	
11	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、体部片、縦位の櫛目、岸窯、17c	I726	
12	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、体部片、縦位の櫛目、瀬戸美濃、登窯1～4	I653	
13	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、底部片、縦位の櫛目、底部に回転糸切り痕、岸窯、17c	I727	
14	陶器　擂鉢	1層	鉄釉、底部片、櫛目、底部に回転糸切り痕、産地不明、近世	I730	

第169図　SK325土坑出土遺物2



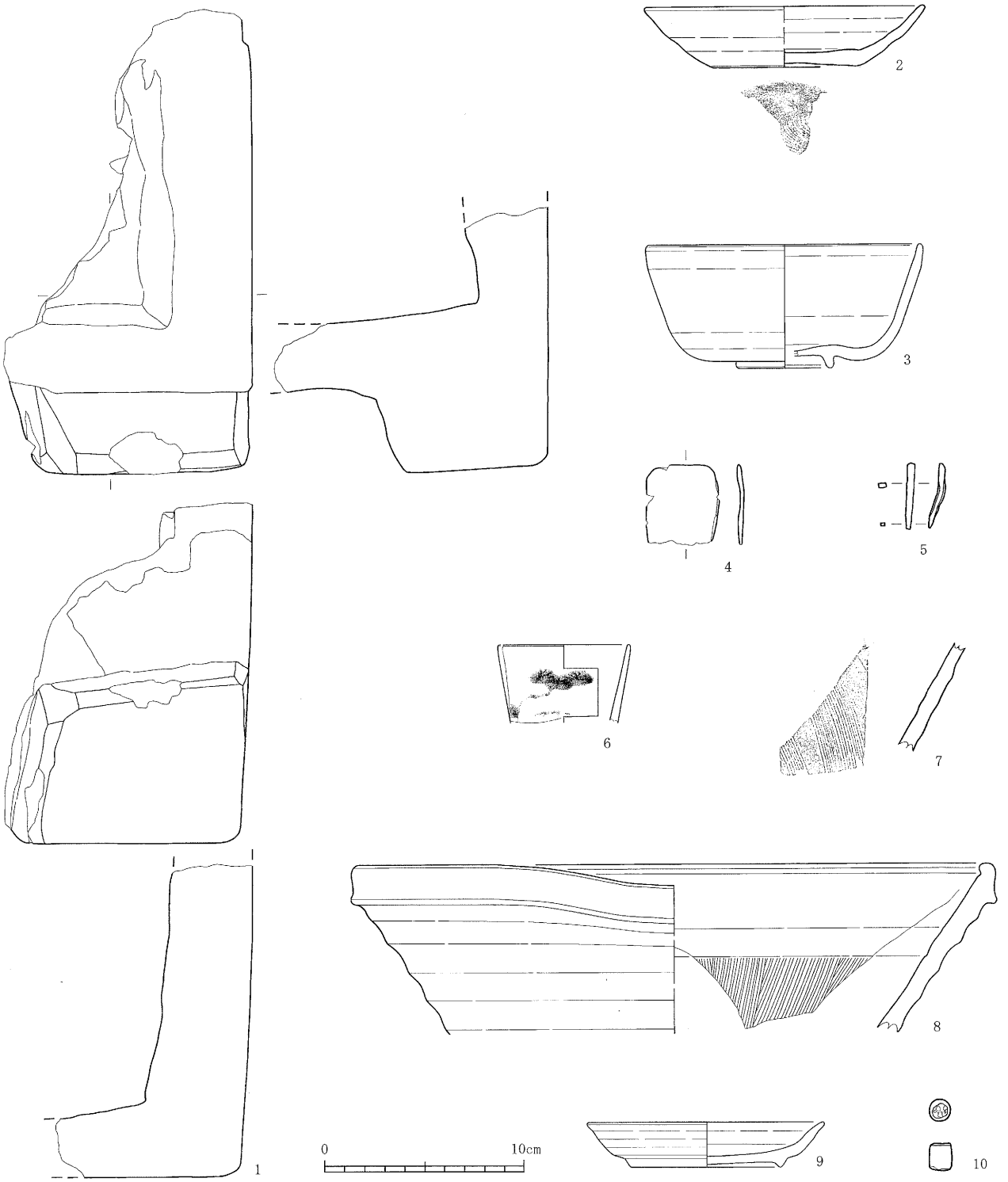
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　土瓶	1層	灰釉、山水文、口径84mm、大堀相馬、19c	I692a	
2	陶器　蓋	1層	灰釉、口径(80)mm、底径(28)mm、器高12mm、大堀相馬、19c	I692b	
3	陶器　仏花器	1層	灰釉、口径(92)mm、大堀相馬、18c～19c	I532	
4	陶器　瓶	1層	鉛釉、玩具、底径27mm、堤、19c	I712	
5	陶器　甕	1層	鉄釉、口縁端部平坦、口径(156)mm、大堀相馬、18c	I690	
6	磁器　蓋	1層	ツマミ径42mm、口径101mm、器高22mm、肥前、18c	J385	
7	磁器　小坏	1層	コンニャク印判、口径76mm、底径32mm、器高52mm、肥前、17c末～18c前半	J387	
8	磁器　碗	1層	染付け、口径114mm、底径48mm、器高62mm、肥前、18c前半	J399	
9	磁器　碗	1層	染付け、くらわんか手、口径(101)mm、底径(43)mm、器高54mm、肥前、18c	J386	
10	磁器　皿	1層	瑠璃釉、底部に目跡、底径132mm、肥前、17c後半	J392	
11	磁器　皿	1層	染付け、唐草文、底径(156)mm、肥前、17c末～18c前半	J391	24-15
12	磁器　瓶	1層	染付け、くらわんか手、底径(70)mm、残存高122mm、肥前、18c	J372	24-16
13	磁器　瓶	1層	印判菊花文、底径(48)mm、残存高87mm、肥前、18c	J393	
14	磁器　瓶	1層	蛸唐草、肥前、18c	J382	
15	鉄製品　釘	1層	釘頭屈曲、断面四角形、残存長34mm、径3×4mm	N93	

第170図　SK325土坑出土遺物3



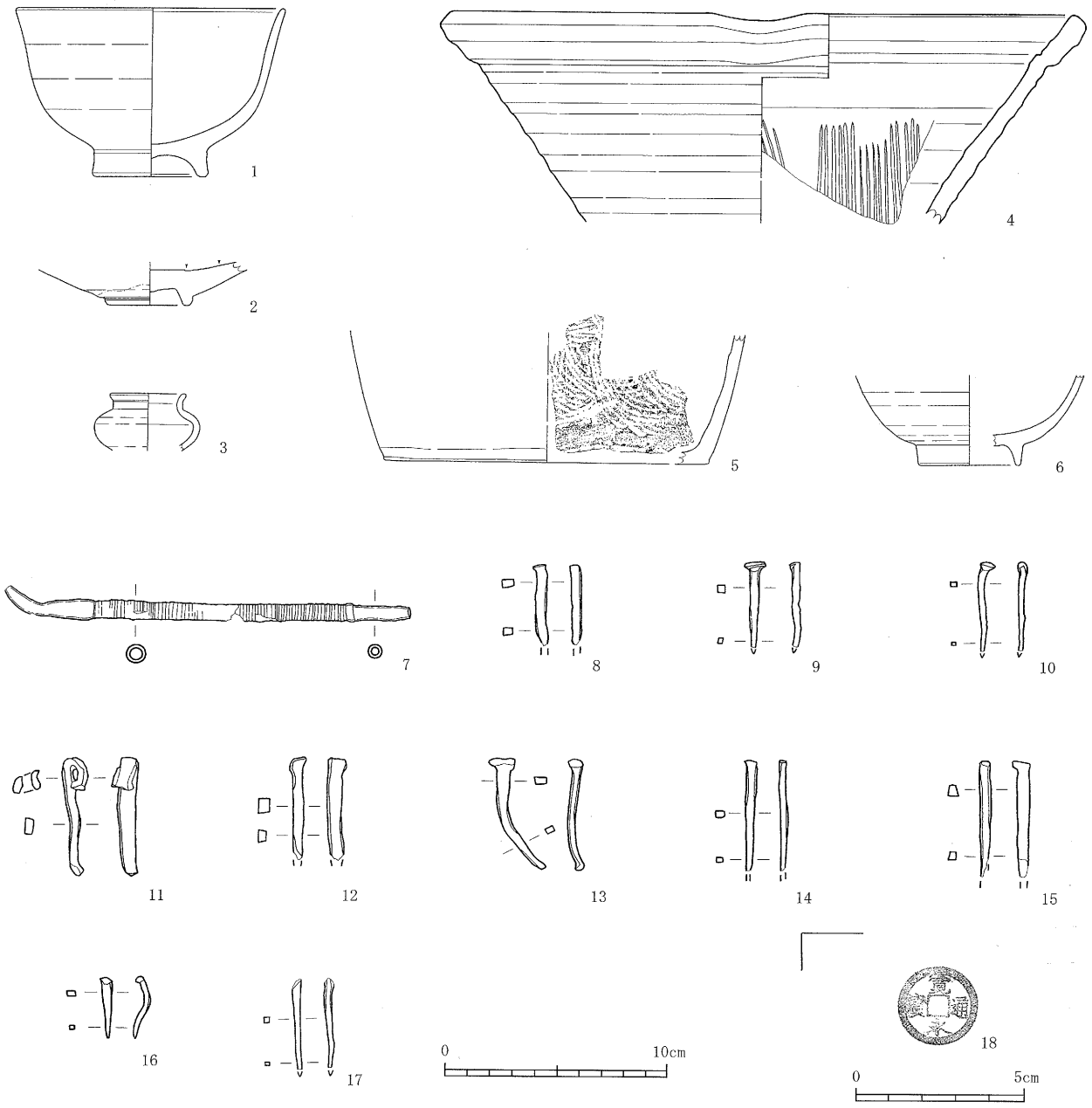
	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	近世瓦　軒平瓦	1層	雪持笹文、凹凸面ともナデ、瓦当面幅58mm、厚さ22mm	G37	20-26
2	近世瓦　丸瓦	1層	凸面：縦位方向のつよいナデ、凹面：布目痕、玉縁長30mm、残存長134mm、厚さ23mm	G38	
3	近世瓦　平瓦	1層	凹凸面ともナデ、厚さ23mm	G36	
4	近世瓦　平瓦	1層	凹凸面ともナデ、厚さ23mm	G34	
5	近世瓦　平瓦	1層	凹凸面ともナデ、長軸断面はゆるい屈曲面、凹面に縦位方向の分割のスジ線がのこる、長軸275mm、短軸130mm、厚さ23mm	G35	21-1
6	硯？	1層	上下側面欠損、浅い縁部残存、上面のみに磨り面、残存長54mm、残存幅55mm、厚さ3～8mm、粘板岩	K49	21-28
7	砥石	1層	上部側面欠損、平面形は長方形？、砥面2面確認、断面方形、残存長26mm、残存幅41mm、残存厚26mm、凝灰岩	K46	
8	砥石	1層	上部側面欠損、平面形は長方形？、砥面1面確認、断面方形、残存長122mm、残存幅66mm、残存厚42mm、凝灰岩	K45	
9	砥石	1層	上部側面欠損、平面形は長方形、砥面1面確認、断面長方形、残存長66mm、残存幅49mm、残存厚23mm、凝灰岩	K44	
10	礫	1層	欠損品、上部に磨面あり、安山岩	K47	
11	石製品	1層	形状は四角錐、頂部と端部が欠損、残存高110mm、長軸残存長155mm、短軸残存長125mm、安山岩	K54	
12	礫	1層	欠損品、上部が平坦面となり磨られている．安山岩	K55	

第171図　SK325土坑出土遺物４



	地点・層位	種　別	特　　徴	登録	写真
1	SK325　1層	石製カマド？	欠損品、方形状、脚付、残存高さ233mm、凝灰岩、煤と赤変あり	K52	
2	SK326　1層	土師質土器　皿	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径140mm、底径72mm、器高30mm	D33	
3	SK326　1層	陶器　碗	楽焼模倣？口径(136)mm、底径(46)mm、器高62mm、在地？	I745	23-23
4	SK326　1層	鉄製品	板状、下部欠損、角が丸い長方形状、残存長39mm、幅36mm、厚さ2～3mm	N96	
5	SK326　1層	鉄製品　釘	上下部欠損、断面四角形、残存長33mm、上部径4×2mm、下部径1×2mm	N94	
6	SK327　1層	磁器　猪口	染付け、松文、口径(65)mm、肥前18c	J416	
7	SK327　1層	陶器　擂鉢	鉄釉、体部片、間隔をもった縦位の櫛目、岸窯、17c	I757	
8	SK327　1層	陶器　擂鉢	鉄釉、片口、縦位の櫛目、口径(325)mm、堤、19c前半	I758	
9	SK328　1層	陶器　皿	志野丸皿、高台内胎土目、見込目跡、口径116mm、底径74mm、器高22mm、登窯1	I765	23-24
10	SK334　埋土	銅製品	不明銅製品、円筒状、長さ14mm、径11mm	N17	

第172図　99－4区内土坑出土遺物1



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	陶器　碗	4層	御本手写し、口径120mm、底径50mm、器高76mm、産地不明、17c後半	I772	23-25
2	陶器　皿	4層	蛇ノ目釉ハギ、底径36mm、肥前？、17c後半	I773	
3	陶器　小壺	4層	灰釉、口径34mm、残存高26mm、玩具？、大堀相馬、18c前半	I777	23-26
4	陶器　擂鉢	4層		I783	
5	陶器　瓶	4層	内面にオサエ痕、底径(146)mm、唐津、17c初	I774	
6	磁器　碗	4層	底径(46)mm、肥前、17c～18c	J429	
7	キセル	4層	鉄製、火皿と吸い口端部が欠損、羅宇部に針金が巻かれる、残存長182mm、吸い口部径5mm程、羅宇部径8mm程	N19	21-9
8	鉄製品　釘	4層	上下部欠損、断面四角形、残存長37mm、径は上部4×5mm、下部3×4mm	N101	
9	鉄製品　釘	4層	釘頭屈曲、下部欠損、断面四角形、残存長39mm、径は上部4×4mm、下部2×3mm	N104	21-12
10	鉄製品　釘	4層	釘頭屈曲、断面四角形、長さ41mm、径は上部2×3mm、下部1×1mm	N106	
11	鉄製品　釘？	4層	頭部折曲がる、下部欠損、断面四角形、残存長53mm、厚さ4×7mm、金具の可能性あり	N98	
12	鉄製品　釘	4層	上下部欠損、断面四角形、残存長47mm、径は上部6×6mm、下部3×5mm	N99	
13	鉄製品　釘	4層	釘頭屈曲、断面四角形、長さ50mm、径は上部3×5mm、下部2×4mm	N100	21-13
14	鉄製品　釘	4層	上下部欠損、断面四角形、残存長50mm、径は上部3×5mm、下部2×3mm	N102	
15	鉄製品　釘	4層	釘頭屈曲、下部欠損、断面四角形、残存長52mm、径は上部3×5mm、下部3×4mm	N103	
16	鉄製品　釘	4層	釘頭屈曲、断面四角形、長さ28mm、径は上部2×4mm、下部1×1mm	N107	
17	鉄製品　釘	4層	上部欠損、断面四角形、残存長41mm、径は上部2×3mm、下部1×2mm	N105	
18	古銭	4層	寛永通宝(江戸、新寛永 18c以降)	N18	21-3

第173図　99－4区内土坑出土遺物２（SK337）

	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、小型品、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径76mm、底径45mm、器高21mm	D10	
2	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径117mm、底径71mm、器高29mm	D15	20-8
3	土師質土器　皿	3層	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径122mm、底径70mm、器高27mm	D17	20-9
4	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、小型品、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口縁部内外面にタール付着、口径60mm、底径44mm、器高17mm	D11	20-10
5	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径94mm、底径56mm、器高24mm	D14	
6	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、小型品、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口縁部内外面にタール付着、口径65mm、底径45mm、器高22mm	D9	20-11
7	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口縁部内外面の広範囲にタール付着、口径114mm、底径64mm、器高28mm	D16	
8	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径119mm、底径73mm、器高27mm	D12	
9	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径126mm、底径68mm、器高24mm	D13	
10	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、外傾気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、内面に部分的にタール付着、口径120mm、底径72mm、器高27mm	D18	
11	土師質土器　皿	埋土	ロクロ成形、やや内弯気味に立ち上がる、切り離しは回転糸切り、口径123mm、底径72mm、器高31mm	D19	
12	土師質土器　火鉢	埋土	口縁上部丸くおさまり球形状、口縁部直下に縄状の紐が巡る、口径(145)mm	D20	
13	瓦質土器　香炉	埋土	底部欠損、きつく立ち上がり口縁端部が三角形状に外方へ突出、外面に菊花の刻印、口径(138)mm、底部径(100)mm	H1	

第166図の観察表

3）溝跡

SD316溝跡　E～G－2区に位置する。SD320を切りSK322及びピットに切られる。南北方向に直線的に延び確認長6.75mを測る。軸方向はN－6°－Wである。上端幅3.4m、下端幅70cm程、深さ1.3m程を測る。底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形である。堆積土は6層確認した。1層はしまりがつよく、人為堆積の可能性が考えられた。位置や断面形状からSD322は一連の溝跡の可能性がある。中世陶器（在地）、陶器（大堀相馬・瀬戸美濃）、磁器（肥前）、フイゴの羽口、炉壁、古銭が出土している。

SD318溝跡　F・G－1区に位置する。SD319を切り、SK322・ピットに切られる。南北方向に直線的に延び確認長3.52mを測る。軸方向はN－8°－Eである。上端幅36cm、下端幅29cm、深さ最大で5cmを測る。底面は凹凸面となる。壁はゆるい立ち上がりで断面形は不整な皿形である。堆積土は1層確認した。出土遺物はない。

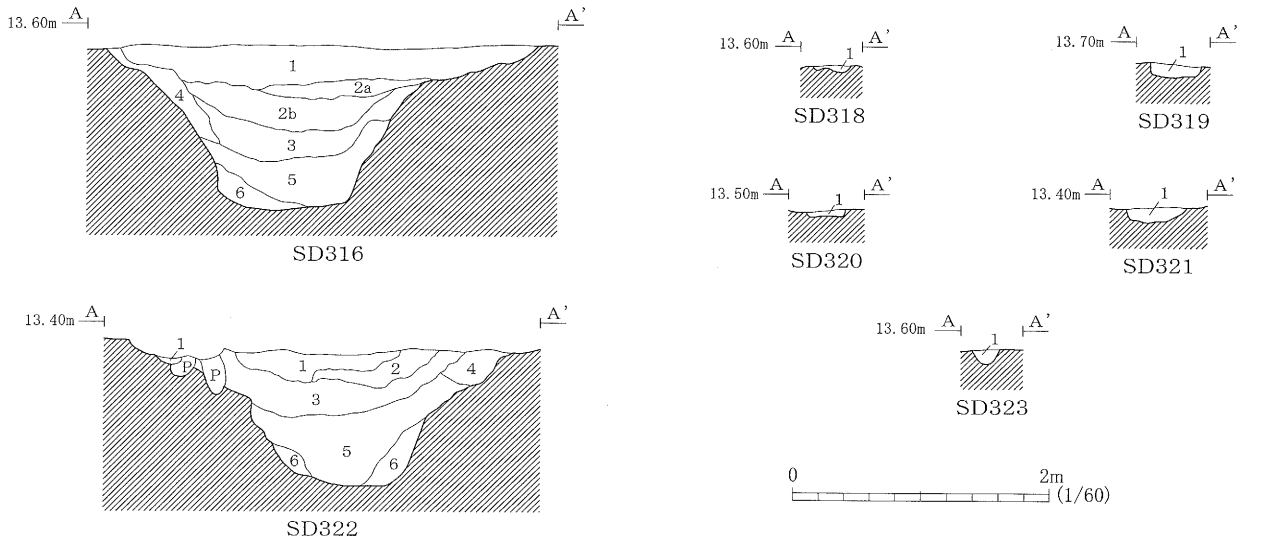
SD319溝跡　F・G－1区に位置する。SD318・ピットに切られる。東西方向に直線的に延び確認長3.26mを測る。軸方向はE－8°－Sである。上端幅38cm、深さ10cm程を測る。底面はほぼ平坦である。壁はきつく立ち上がり断面形は矩形である。堆積土は1層確認した。土師器、古銭が出土している。

SD320溝跡　F－2・3区に位置する。SD316・ピットに切られる。東西方向に直線的に延び確認長2.9mを測る。軸方向はE－7°－Sである。上端幅35cm、深さ最大8cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁はきつく立ち上がり断面形は矩形である。堆積土は1層確認した。土師器が出土している。

SD321溝跡　E－4区に位置する。SK335・ピットに切られる。北西方向に延び確認長1.88mを測る。軸方向はN－20°－Wである。上端幅最大56cm、下端幅28～40cm、深さ最大11cmを測る。底面はほぼ平坦であるが北側に向かい傾斜をもち高くなる。壁はややゆるい立ち上がりとなり断面形は皿形である。堆積土は1層確認した。土師器、須恵器、美濃の菊皿が出土している。

SD322溝跡　D－4～6区に位置する。SK325・334・337・339・342、ピットに切られる。東西方向に直線的に延び確認長7.74mを測る。軸方向はN－82°－Eである。上端幅最大3.18m、下端幅41～68cm、深さ最大108cmを測る。底面はやや凹凸面となるが大きく平坦面である。断面形は逆台形である。堆積土は6層確認したが、上層の1～3層と下層の堆積状況に違いが観察され、下端が北側に寄っていることも含め、1～3層は東からやや蛇行気味に延びるSD304Aの可能性がつよい。1層は混成層で、下層は自然堆積と判断される。土師器、須恵器、中世陶器（常滑甕）、フイゴの羽口、炉壁、鉱滓が出土している。

SD323溝跡　C－4・5区に位置する。SB306の柱穴に切られる。北西方向に直線的に延び確認長2.63mを測る。軸方向はN－31°－Wである。上端幅27cm、下端幅18cm、深さ最大15cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁はきつく立ち上がり、底面はやや丸くなり断面形はU字形である。堆積土は1層確認した。須恵器が出土している。



	層位	色調	性質	備考
SD316	1	褐灰色 10YR4/1	シルト	しまり強し、層下部に酸化鉄集積
	2a	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	砂を含む
	2b	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	褐灰色土を斑に含む
	3	褐灰色 10YR4/1	粘土	砂を斑及び層状に含む
	4	暗褐色 10YR3/3	シルト	混成層、炭化物・焼土を含む
		褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
	5	褐灰色 10YR5/1	粘土	粗砂を層状に含む
	6	灰黄褐色 10YR6/2	粘土	底面に酸化鉄集積
SD322	1	褐色 10YR4/6	シルト	混成層
		暗褐色 10YR3/4	シルト	
	2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	

	層位	色調	性質	備考
SD322	3	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	層上部ややグライ化
	4	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	
	5	黄褐色 10YR5/8	砂	互層状
		褐灰色 10YR4/1	砂質シルト	
	6	にぶい黄褐色 10YR5/3	シルト	ややグライ化
SD318	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	褐色土を斑に含む
SD319	1	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	暗褐色土を斑に含む
SD320	1	褐色 10YR4/4	シルト	
SD321	1	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む
SD323	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土ブロックを含む

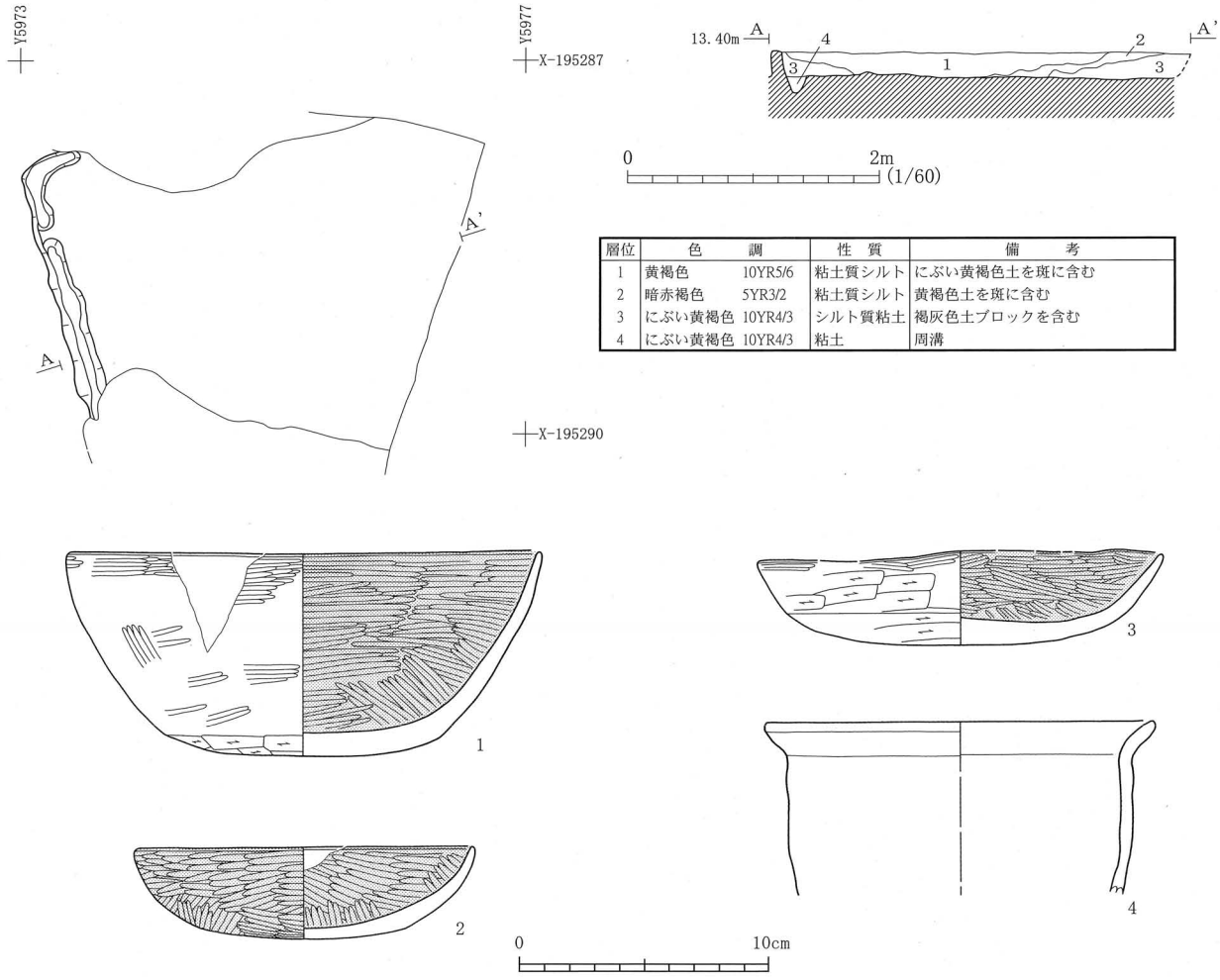
第174図　99－4区溝跡

	地点・層位	種　別	特　　徴	登録	写真
1	SD316　埋土	古銭	判読不能	N21	
2	SD316　埋土	古銭	永楽通宝、明、永楽6年(1408)	N20	
3	SD319　1層	古銭	永楽通宝？	N22	

第175図　SD316・SD319溝跡出土遺物

4）竪穴跡

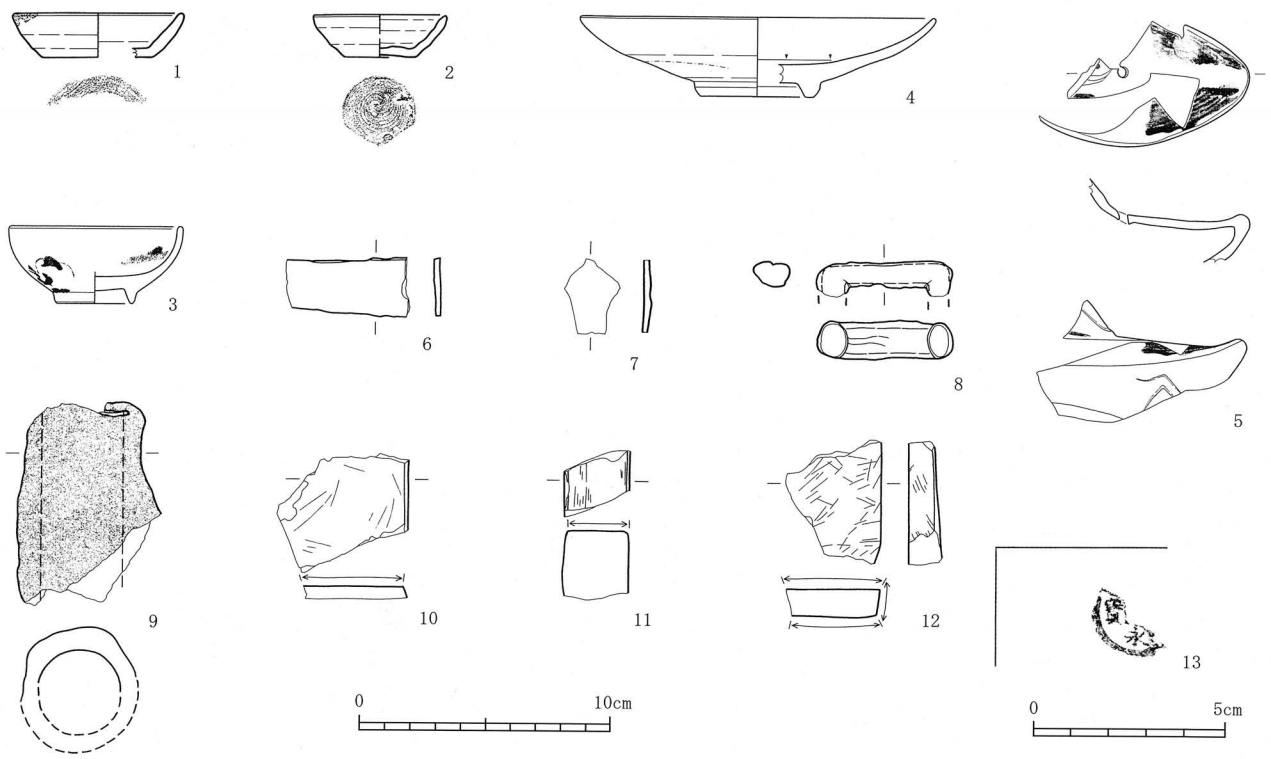
SI303竪穴住居跡　E－5・6区に位置する。SK325に切られ南側を撹乱坑に削平されており部分的な確認である。西辺と北辺の一部が残存しており、大きさは東西軸長3.62m、南北軸長3.08mの残存である。壁は深さ19cm程の残存でほぼ垂直に立ち上がる。西辺方向はN－15°－Wである。堆積土は周溝部を含めて4層確認した。自然堆積と判断される。床面は平坦である。周溝は幅20cm・深さ14cm程を測る。カマド・柱穴等の施設は確認されない。土師器坏・甕、須恵器が出土している。



層位	色　　調	性　質	備　　考
1	黄褐色　10YR5/6	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を斑に含む
2	暗赤褐色　5YR3/2	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む
3	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト質粘土	褐灰色土ブロックを含む
4	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土	周溝

	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師器　坏	埋土	平底風丸底、外面は底部がヘラケズリ、口縁部から体部にヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径188mm、器高81mm	C1	19-23
2	土師器　坏	床面直上	丸底、内外面ともヘラミガキ・黒色処理、口径135mm、器高37mm	C3	19-24
3	土師器　坏	埋土	平底風丸底、外面は体部～底部にヘラケズリ、口縁部にヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径160mm、器高37mm	C2	19-25
4	土師器　甕	埋土	口縁部はゆるく短く外反、内外面とも摩滅、口径（152）mm、	C6	

第176図　SI303竪穴住居跡



	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	土師質土器　皿	粗掘	ロクロ成形、小型品、口縁部にタール付着、底部に回転糸切り痕、口径(67)mm、底径(43)mm、器高23mm	D1	
2	土師質土器　皿	粗掘	ロクロ成形、小型品、底部に回転糸切り痕、口径(52)mm、底径(28)mm、器高17mm	D2	
3	陶器　小碗	粗掘	灰釉、口径66mm、底径30mm、器高30mm、肥前？、18c	I795	23-27
4	磁器　皿	粗掘	灰釉、蛇ノ目釉ハギ、口径(140)mm、底径(44)mm、器高31mm、肥前、18c前半	J363	
5	磁器　水滴	粗掘	染付け、上部に小穴あり、端部三角錐状に尖る、産地不明、19c	J365	
6	鉄製品	粗掘	板状、残存長47mm、残存幅23mm、厚さ2mm	N108	
7	鉄製品	粗掘	板状、残存長30mm、残存幅22mm、厚さ2mm	N109	
8	鉄製品	粗掘	鏃？、端部が同方向に折れ曲がる、断面円形、幅54mm、径11～14mm	N111	21-22
9	フイゴの羽口	粗掘	外面は融解、残存長79mm、外径47mm程、内径32mm程	P30	22-18
10	石製品	粗掘	裏面剥離、側面に切断面、平面形は方形？断面方形、上面に擦面、残存長41mm、残存幅51mm、残存厚5mm、粘板岩	K36	
11	石製品	粗掘	両側面に切断面、平面は長方形、断面方形、擦面1面確認、残存長27mm、幅27mm、厚さ27mm、粘板岩	K38	
12	石製品	粗掘	平面形は方形？、断面は長方形、擦面3面確認、残存長49mm、残存幅37mm、厚さ11mm、粘板岩	K37	
13	古銭	粗掘	寛永通宝(江戸、新寛永 18c以降)	N25	

第177図　99－4区遺構外出土遺物

(4) 小結

掘立柱建物跡　1棟の確認である。桁行2間・梁行1間で西側に庇ないし縁の付く建物跡と判断したが、調査区北側に位置しており北側へ建物跡が延びる可能性は考えられた。東側の調査区で確認されている建物跡と同様に梁行が1間となり柱間が3ｍを超える。各柱穴は大きさがまばらでやや粗雑な柱穴の組み合わせとなる。現状では単体の存在となり時期等不明となるが、99－4区の大半の遺構が江戸期のものであり、大きく江戸時代、4期のものと考えておきたい。

土坑　51基の確認である。平面形は円形・方形・不整形と様々である。壁もきつく立ち上がり整然とした土坑もみられ、人為堆積を示す方形の土坑もあるが、多くは廃棄穴と判断される。中世（3期）及び江戸時代（4期）のものと判断されるが判然としない。SK338は円形及び方形をもとにする不整形のもので廃棄穴と判断した。鋳型の外型が破片となり出土している。復元の結果、口径30cm・深さ14cm程の鍋の鋳型であることが判明した。瓦質土器擂鉢が出土しており、中世（3期）のものと判断される。SK321・SK322・SK324・SK325・SK337は江戸時代（4期）の廃棄穴となり大量の遺物が出土している。平面形が円形・方形・不整三角形となるが、形状等からSK321及びSK322は再利用が考えられた。SK321は不整三角形を呈するが底面はほぼ平坦で壁もきつく立ち上がる。性格は不明であるが南辺がほぼ直線的に延びており、2002－1区のSD505同様に南側の七郷堀に規制を受けている可能性がある。

SK322も性格は不明となるが、A・Bとした方形部が主要部分となる。Aには礎板となる石が確認されており、上屋の支えないし底面の基礎部となる可能性が考えられた。Cには極めて硬化した貼床がみられた。鋳造に関する遺構との指摘もあるが積極的な確証は見いだせなかった。

溝跡　21条の確認である。小溝状で規模の小さい溝跡群は時期・性格等不明となるが、大型の溝跡はすべて江戸期（4期）に属し、現七郷堀の古い段階のものと判断される。SD303AとSD501は同一の溝跡と判断され、SD303Bとともに現七郷堀とほぼ並行している。SD302とSD317も同一のものでSD303Aの北側に取り付く溝跡となる。SD304Aは東側部が不明となるが99－4区に蛇行気味に延びている。SD304BとSD322は位置・形状から同一のものと考えられ、さらにSD316も一連と判断した。3条の溝跡を併せるとコの字状となり、北側に張り出す溝跡と判断した。「仙台城下絵図（その2）」（推定 天和2年：1682）には同地点の七郷堀北側に澱み状の方形の範囲が描かれている。断定は難しいが当溝跡群が表されていると判断した。当溝跡群はSD303A（SD501）・303Bより古く、方向にも違いがあることから前段階の七郷堀に取り付くものと判断される。さらにSD304Bの底面壁際には杭痕が列状に確認されており七郷堀に関わる何らかの施設と考えられる。なお、SD304AとSD304Bは最終的には埋め戻されている。SD303Cは最古の段階の遺構となる。西辺・北辺が確認され方形状のものと思われる。底面はゆるい皿形を呈し南側へゆるく傾斜している。北側部にはSD304B同様に杭列が確認される。方形を呈する施設と判断される。最終的には埋め戻され整地面が確認されている。この整地面を切り込み、SD303A・B及びSD304A・Bが作られており、同地点に継続した施設群の存在が確認された。七郷堀は東側に開けた水田地帯に水を引く堀とされているが、確認された遺構からはそれだけに留まらず、水運利用の可能性が十分に考えられる。SD504Bは最下層の遺構となるが性格等不明である。

石敷遺構　1基確認した。底面に石を敷き詰め、中島状の張り出しがあり、南西端部が細い溝となり南側へ傾斜をもち延びていることから、池跡の性格をもつものではと考えられる。SD317に切られSD304を切っており、出土遺物も含めて江戸期（4期）のものと判断される。SD303Aよりは古く、SD303Bとの関係は時期も含めて不明である。なお、池跡の南辺が直線状となり平面形が不整な菱形となるが、南側を東流する七郷堀に形状が規制されている可能性がある。七郷堀に関わるものであるのか、北側に位置する武士の屋敷に関わるものか遺構の性格も含めて今後の課題である。

窯跡　1基確認した。平面形は瓢箪形である。底面に傾斜があり、燃焼部と判断した東側部が火熱で硬く焼き締まり奥へ向かい炭化物面が広がること、遺存状況から天井部の存在が考えられることから窯跡と判断した。残存長2.76m・最大幅1.42mと全体的に小振りである。酸化焔焼成の窯と思われるが焼成物は不明ではある。SD314・317に切られており江戸時代（4期）のものと判断される。

竪穴住居跡　3軒の確認である。国分寺下層式期の住居跡1軒（SI303）、表杉ノ入式期の住居跡2軒（SI302・304）を確認した。SI303は重複および撹乱坑で削平され平面形・規模等不明である。時期は奈良時代（2期）となるが、同時期の遺構は中央調査区で竪穴住居跡を1軒確認したのみで散在した遺構分布である。SI302とSI304は平安時代（2b期とする）の住居跡となる。SI302は重複等で規模等不明となるが、SI304は一辺2mを切る極めて小型のものである。床面積が小さく、住居跡と認定し得るものか判断が難しいが南側にカマドが設置されており住居跡とした。南側に位置する2002－2区の住居跡との関連を考えたい。

当調査区は七郷堀の北側に位置し、江戸時代の絵図をみると城下町の街割りの縁にあたる。描かれた時期により違いはあるが、調査区東側では武士の屋敷地に隣接し、西側では御足軽衆及び御小人衆と描かれた地点に位置する。極めて七郷堀に近接しており街割り地に含まれるものかは判然としない。遺構の確認はないが製鉄に関する遺物が多量に出土している。SK322からは内径9～10cmを測るフイゴの羽口が出土しており、巨大な鍛冶施設の存在が窺われる。当地点は下級武士層の居住域となっており、製鉄との関わり留意される。

4．東側調査区

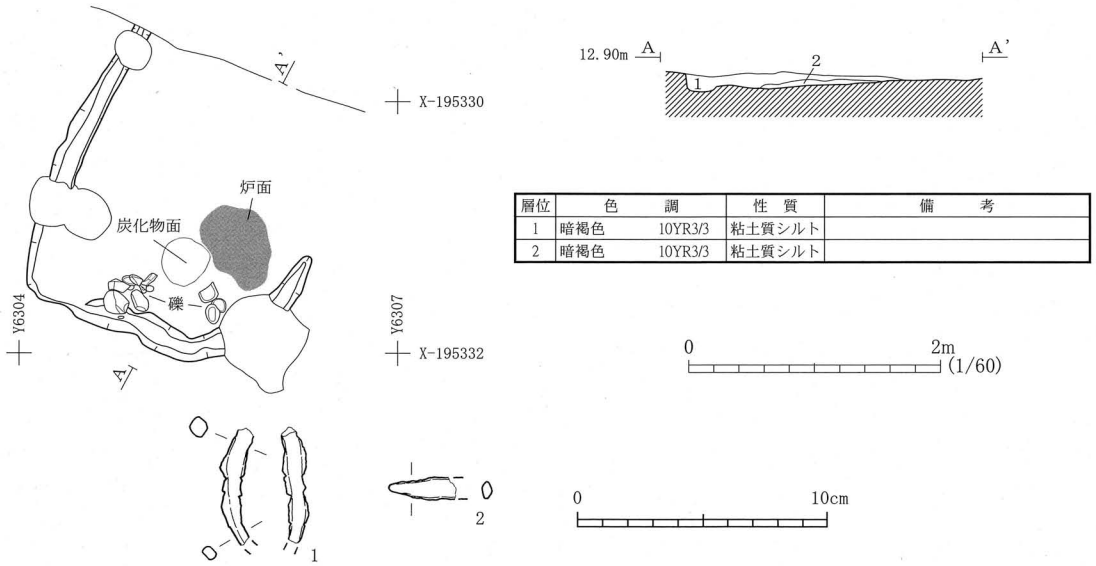
2000－5区・8区からなる。東流する七郷堀（仙台堀）と養種園1次Ⅳ区・Ⅶ区の間に位置する。発見遺構には竪穴遺構、炉跡、井戸跡、土坑、溝跡等がある。2000－5区は1～8区まで、2000－8区は9～15区までの範囲となる。聖ウルスラ学院構内及び養種園遺跡東端の仙台堀南側に6区及び7区を設定したが、調査区全域が撹乱坑の中となり本調査は実施していない。基本層位は2000－5区で5層確認した。壁面観察となるがⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層の3面が遺構確認面となるが、多くの遺構はⅤ層面での確認である。調査面積は約658㎡である。

(1) 2000－5区・8区の調査

検出遺構は竪穴遺構1軒、炉跡3基、井戸跡1基、土坑5基、溝跡5条、柱穴・ピット多数である。

1）竪穴跡

SI402竪穴遺構　A・B－3・4区に位置する。Ⅳ層上面検出である。北壁に接しており平面形は隅丸の長方形と判断される。SD413･SK410･ピットに切られSD414を切る。大きさは南北軸中央で2.33mまで確認、東西軸南側で2.22m、深さ10cm程を測る。床面はゆるく南側へ傾斜している。コの字状に周溝が残存しており、幅20cm前後・深さ最大11cmを測る。西辺方向はN－25°－E前後である。堆積土は2層確認した。床面上で焼面・炭化物面・礫を確認している。焼面は炉面と判断した。炉面は不整な長円形で長軸70cm、短軸50cmを測る。全体的に硬化面となり、深さ10cm程まで皿状に赤変範囲が確認される。鍛造剥片、鉱滓、鉄製品（釘・刀子？）、古銭、土師器、須恵器、灰、炭化物、骨片が出土している。



層位	色　調	性　質	備　考
1	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	
2	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	

	種　別	地点・層位	特　徴	登録	写真
1	鉄製品　釘	確認面	長さ46mm、断面四角形、上部径6×7mm、下部径4×5mm、湾曲し錆が著しい	N122	
2	鉄製品　刀子？	1層	刀子の茎？、残存長27mm、幅8mm、厚さ最大4mm	N124	

第178図　SI402竪穴遺構

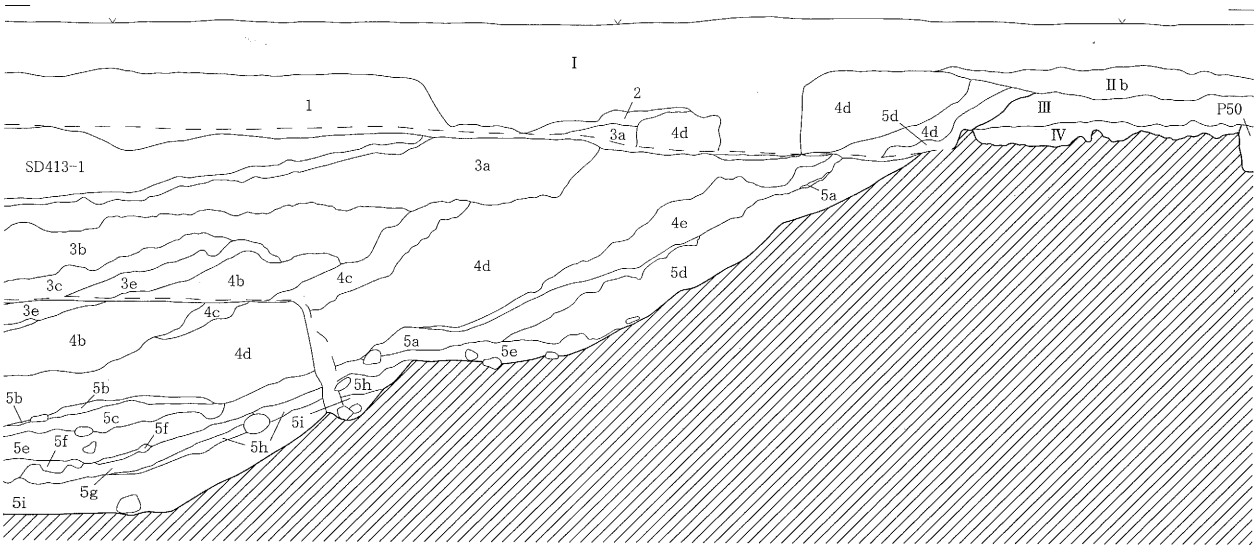
2）炉跡

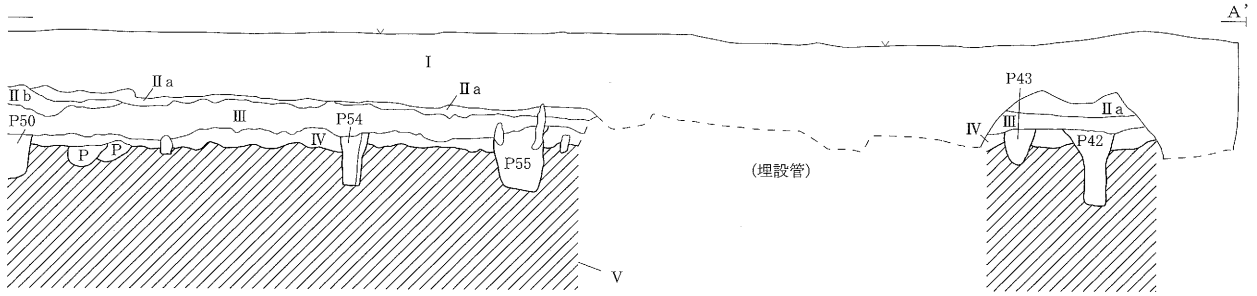
1号炉跡　B－3区に位置する。ピットに切られ北側が欠損するが、不整な円形の焼面である。長軸78cm、短軸55cmを測る。焼面は3層に別れ厚さ7cm程である。全体的に硬化面で上部は赤変するが下部は還元色となる。周辺から鍛造剥片、土師器片が出土している。

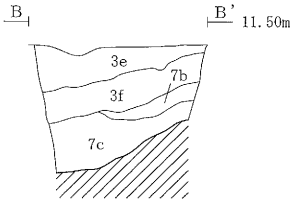
2号炉跡　B－3区に位置する。1号炉跡南側50cm程に位置する。やや不整な長円形の焼面である。長軸70cm、短軸45cmを測る。焼面は3層に別れ厚さ10cm程である。全体的に硬化面で上部は赤変し下部は還元色となる。周辺から鍛造剥片、中世陶器甕が出土している。

3号炉跡　A－2区に位置する。Ⅳ層上面検出である。撹乱坑に壊され部分的な確認であるが、円形の焼面と判

第179図　東側調査区全体図





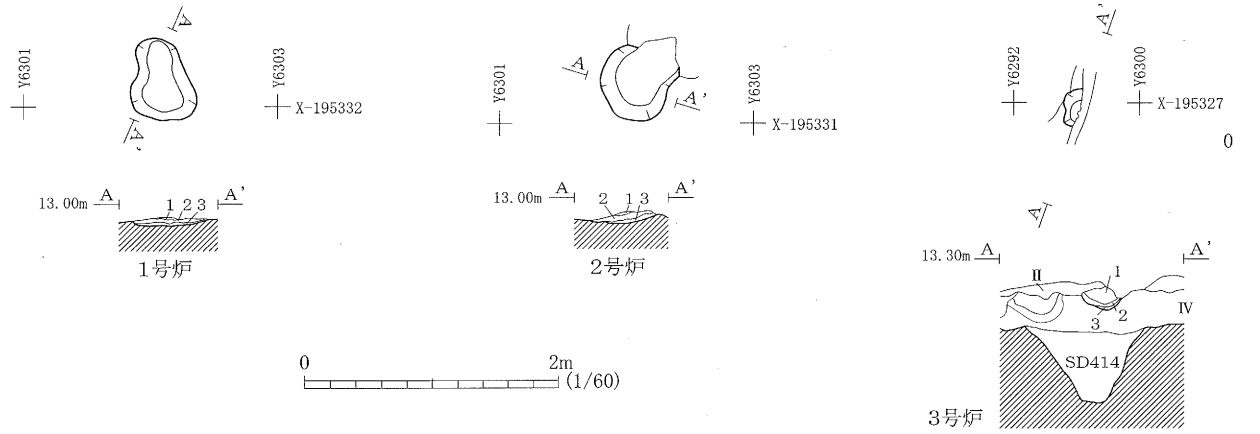


	層位	色調		性質	備考
	I				盛土
	IIa	褐灰色	10YR4/1	シルト	炭化物・焼土を多量に含む
	IIb	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物・焼土を多量に含む
	III	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物・焼土を含む
	IV	暗褐色	10YR3/4	粘土質シルト	
	V	黄褐色	10YR5/6	粘土質シルト	
SD413	1	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	埋め戻し土
	2	黒褐色	10YR2/3	シルト	小礫を含む、凹地状
	3a	褐色	10YR4/4	シルト	小礫・炭化物を含む
	3b	褐色	10YR4/6	シルト	小礫・炭化物を含む
	3c	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	小礫・炭化物を含む、ややグライ化
	3d	黄褐色	10YR5/6	砂	褐灰色の砂との互層状
	3e	黄褐色	10YR5/6	砂	細砂・粗砂
	3f	褐灰色	10YR4/1	シルト質砂	灰白色土をレンズ状に含む
	4a	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト質粘土	部分的に砂を含む
	4b	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂	細砂・粗砂、2～10大の礫を含む
	4c	黄褐色	10YR5/6	シルト	砂ををスジ状に含む
	4d	明黄褐色	10YR7/6	砂質シルト	小礫・黒褐色土ブロックを含む

	層位	色調		性質	備考
	4e	褐色	10YR4/6	砂質シルト	黒褐色土ブロック・砂を含む
	5a	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質シルト	層上部に酸化鉄集積層
	5b	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	砂を層的に含む
	5c	黄褐色	10YR5/6	砂	細砂、褐灰色土ブロックを含む
	5d	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	酸化鉄粒を斑に含む、小礫を含む
	5e	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘土	酸化鉄粒をシマ状に含む
	5f	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂	粗砂、3～5cm大の礫を含む
	5g	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	
	5h	褐灰色	10YR4/1	砂	細砂、礫を含む
	5i	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	薄いレンズ状堆積、植物遺体を含む
	6a	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	砂礫を多量に含む
	6b	褐灰色	10YR5/1	粘土	灰白色がをレンズ状に入る
	6c	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	砂が互層状に入る
	6d	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	礫を含む
	6e	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	砂礫を含む
	7a	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	3～4cm大の礫を多量に含む
	7b	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	
	7c	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	灰白色土をレンズ状に含む

第180図　東側調査区南壁断面

断される。長軸33cm、短軸13cmまで確認、焼面は３層に別れ厚さ20cm程である。２層は極めて固く全体的にも硬化面である。最下部は還元色となる。周辺から鍛造剥片、鉱滓、土師器が出土している。



	層位	色調	性質	備考
1号炉	1	赤褐色 5YR4/8	シルト	
	2	黒褐色 5YR2/1	シルト	
	3	褐色 10YR4/4	粘土質シルト	
2号炉	1	にぶい赤褐色 5YR4/4	シルト	
	2	黒褐色 5YR3/1	シルト	
	3	暗褐色 10YR3/4	粘土質シルト	
3号炉	1	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	
	2	にぶい赤褐色 5YR4/4	シルト	
	3	黒褐色 5YR2/1	粘土質シルト	

第181図　2000－5区炉跡

３）土坑

SK409土坑　B－１区に位置する。調査区西壁に接するが平面形は円形と判断される。南北軸長1.85mcm、東西軸長1.1mcmまで確認、深さは安全確保のため掘り切っておらず1.9mまでの確認である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、部分的にオーバーハングも確認される。堆積土は大別で９層まで確認した。各層で礫が確認される。堆積状況から人為堆積と判断される。形状から井戸跡と判断される。縄文土器、土師器、瓦質土器擂鉢、雲母、古銭、鉄製品、鉱滓、骨片、多量の礫が出土している。

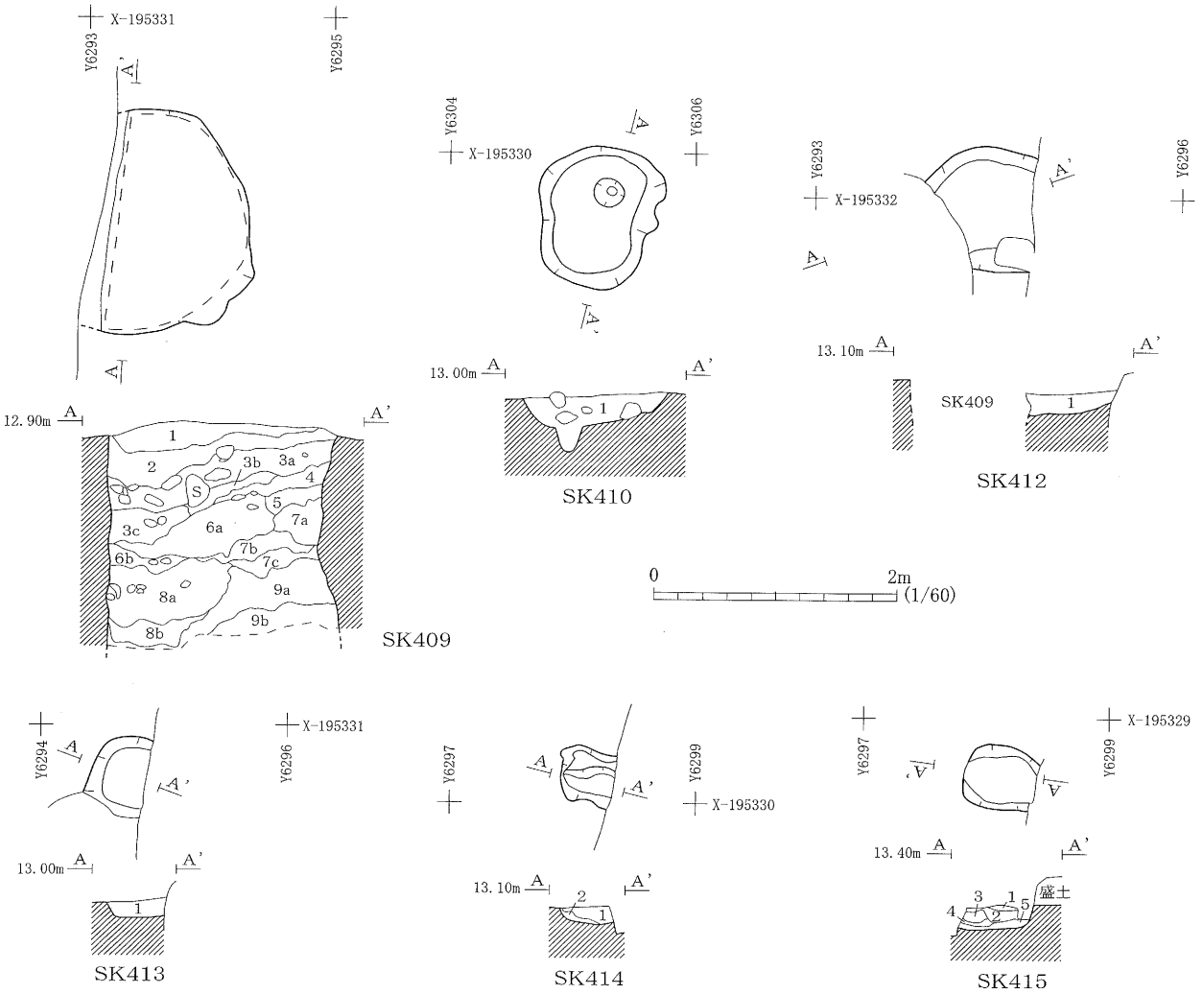
SK410土坑　A・B－３区に位置する。SI402堆積土面での確認である。平面形は不整の長方形である。長軸は南北方向で1.21m、短軸は１m、深さ25cmを測る。底面はゆるい皿状となり北側ではピットを１基確認している。断面形は皿形である。堆積土は１層確認した。10～20cm大の礫が数多く含まれている。土師器、土師質土器、陶器甕（堤？）、鉄製品、鉱滓が出土している。

SK412土坑　B－１区に位置する。SK409・ピット・撹乱坑に切られる。平面形は判然としないが不整な円形と判断した。南北軸104cm、東西軸90cmまで確認、深さ15cmを測る。底面はゆるい皿状で断面形は皿形と判断される。堆積土は1層確認した。出土遺物はない。

SK413土坑　B－１区に位置する。SK412・撹乱坑に切られるが、平面形はやや不整な円形と判断される。南北軸67cmまで確認、東西軸46cmまで確認、深さ15cmを測る。底面はほぼ平坦で断面形は逆台形と判断される。堆積土は１層確認した。骨片が出土している。

SK414土坑　A・B－２区に位置する。撹乱坑に東側が壊されSK415を切っている。平面形は不整な長方形と判断される。東西軸48cmまで確認、南北軸50cmまで確認、深さ14cmを測る。底面に軽い段が見られるが大きく皿状となり断面形は皿形と判断される。堆積土は２層確認した。鍛造剥片が出土している。

SK415土坑　A・B－２区に位置する。撹乱坑に両端を壊され南側でSK414に切られる。平面形は不整な円形と判断した。東西軸55cmまで確認、南北軸56cm、深さ21cmを測る。底面はゆるい皿状で断面形は皿形と判断される。堆積土は５層確認した。鍛造剥片、鉱滓が出土している。



	層位	色調	性質	備考
SK409	1	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	黒褐色土粒を斑に含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物粒・焼土粒を斑に含む
	3a	にぶい黄褐色 10YR5/4	シルト	炭化物粒を斑に含む
	3b	灰黄褐色 10YR5/2	シルト	黄橙色土を小ブロックで含む
	3c	褐灰色 10YR4/1	シルト	黄橙色土・炭化物粒を斑に含む
	4	黄褐色 10YR5/6	シルト	黒褐色土をブロック状に含む
	5	黒褐色 10YR2/2	粘土質シルト	炭化物粒を多量に含む
	6	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	混成層
		にぶい黄橙色 10YR6/3	粘土質シルト	
	7a	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	黒褐色土がスジ状に入る
	7b	黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	黄褐色土・炭化物粒を含む
	7c	黒褐色 10YR2/3	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む
	8a	黒褐色 10YR2/2	シルト	炭化物粒・焼土粒をまばらに含む
	8b	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂質シルト	暗褐色土をスジ状に含む
	9a	黄褐色 10YR5/6	砂	黒褐色土をスジ状に含む
	9b	黄褐色 10YR5/6	砂	
SK410	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	礫・褐灰色土を斑に含む
SK412	1	暗褐色 10YR3/4	シルト	混成層
		黄褐色 10YR5/8	砂質シルト	炭化物粒を斑に含む
SK413	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	黄褐色土・炭化物粒を斑に含む
SK414	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	鍛造剥片を多量に含む
	2	暗褐色 10YR3/3	シルト	
SK415	1	黄褐色 10YR5/6	粘土質シルト	
	2	暗オリーブ褐色 2.5Y3/3	粘土質シルト	鍛造剥片を少量含む
	3	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	鍛造剥片を多量に含む
	4	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	鍛造剥片を少量含む
	5	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物を少量含む

第182図　2000－5区土坑

	地点・層位	種別	特徴	登録	写真
1	SK409　埋土	鉄製品	30×45mm程の板状、厚さ3mm,	N126	
2	SK409　埋土	鉄製品	7×24mmの薄い板状、厚さ2mm	N127	
3	SK409　埋土	鉄製品	一方の端部が曲がっている、長さ36mm、厚さ2mm、断面は扁平な四角形	N128	
4	SK409　埋土	瓦質土器　擂鉢	口縁部はきつく短く外傾し丸くおさまる、櫛目2単位確認、被熱	H69	
5	SK410　1層	陶器　擂鉢	底部片、施釉、堤？	11152	

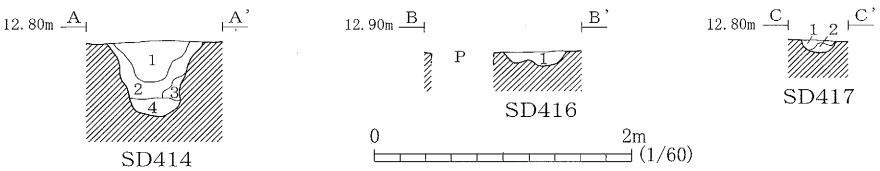
第183図　SK409・SK410土坑出土遺物

4）溝跡

SD414溝跡　A－1区～B－4区に位置する。壁Ⅴ層上面での確認である。調査区西壁から南東側へゆるく屈曲し延びており、確認長は13.8mを測る。上端幅60～80cm、下端幅23～30cm、深さ最大で60cmを測る。壁面はきつく立ち上がり底面はゆるい皿状となるが断面形は逆台形である。堆積土は4層確認した。土師器が出土している。

SD416溝跡　B－2・3区に位置する。ピット群に切られる。南北方向にほぼ直線的に延び確認長は2.57mを測る。上端幅35～63cm、下端幅26～46cm、深さ最大11cmを測る。壁面はゆるい立ち上がりで底面は凹凸面となる。堆積土は1層確認した。土師器が出土している。

SD417溝跡　A－3区に位置する。やや屈曲しながら南北方向に延び確認長は1.47mを測る。上端幅27～32cm、下端幅15cm、深さ8cmを測る。壁はゆるい立ち上がりで断面形は皿形となる。堆積土は2層確認した。土師器、るつぼ、陶器皿（瀬戸美濃）が出土している。

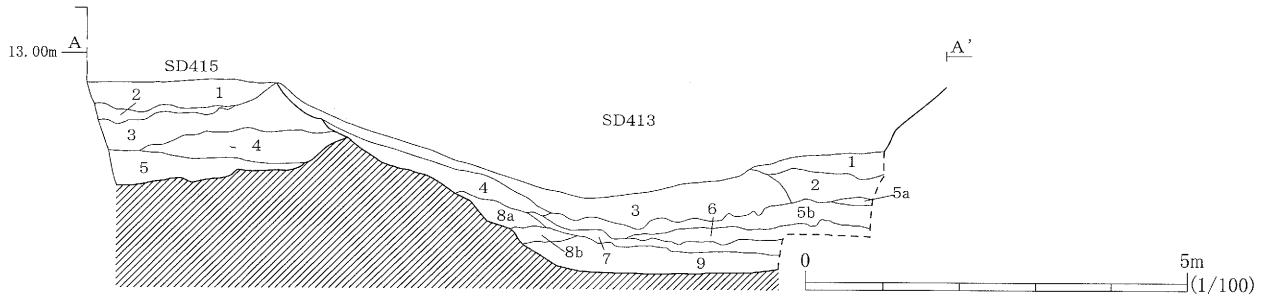


	層位	色　調	性　質	備　考
SD414	1	黒褐色　10YR2/3	粘土質シルト	明黄褐色土粒を斑に含む
	2	黒褐色　10YR3/2	粘土質シルト	明黄褐色土スジ状に入る
	3	褐色　10YR4/6	粘土質シルト	やや砂質
	4	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	やや砂質、褐色土を斑に含む

	層位	色　調	性　質	備　考
SD416	1	明黄褐色　10YR7/6	シルト	炭化物粒少量含む
SD417	1	黒褐色　10YR3/2	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む
	2	黄褐色　10YR5/6	粘土質シルト	黒褐色土を粒状に含む

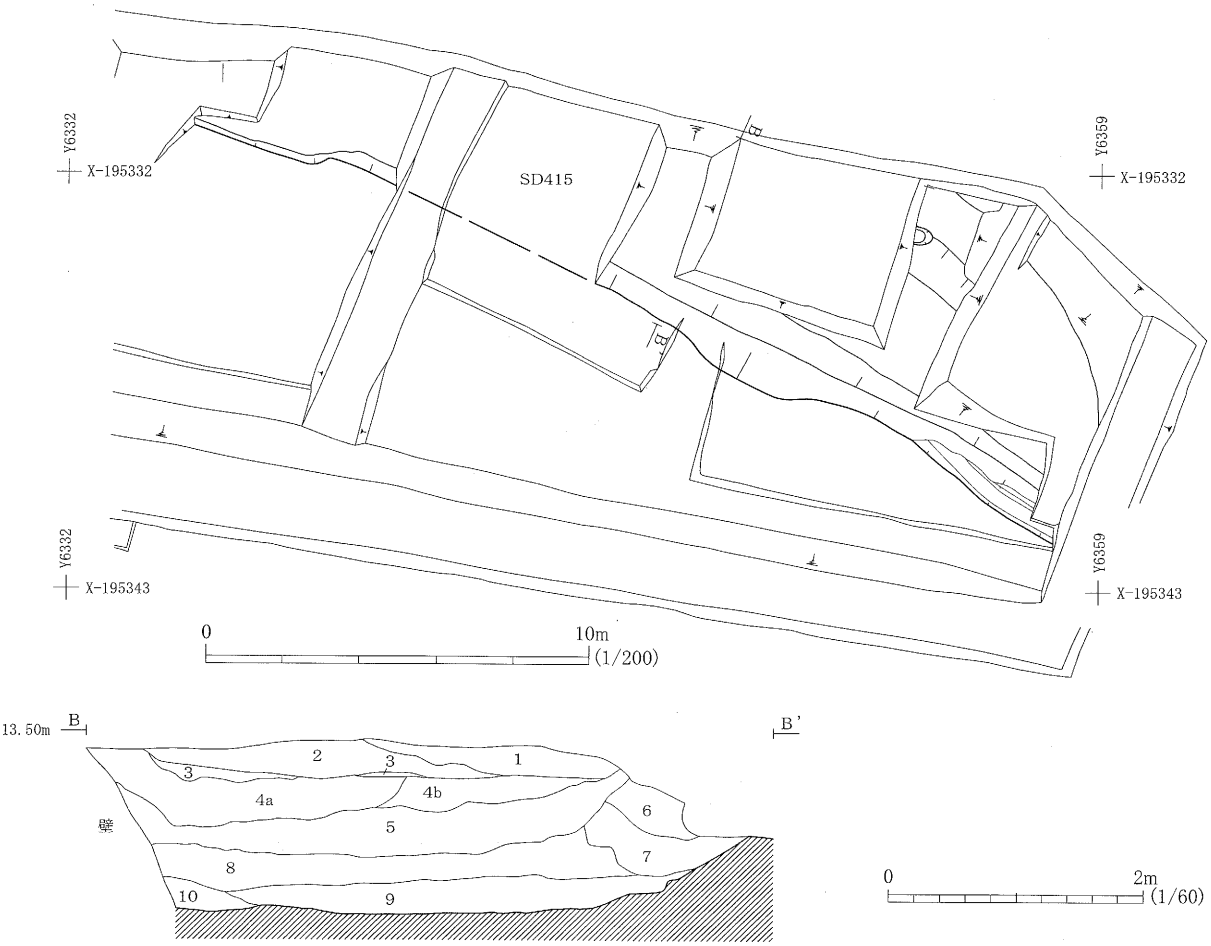
第184図　2000－5区溝跡

SD413溝跡　A～C－3～15区に位置する。壁Ⅲ層上面での確認となる。ピット・SD414・SD415と重複しておりすべてを切っている。極めて大形の溝跡である。5区側では西辺及び底面、北辺の南側下端が確認された。西辺長は7.5mまで確認した。西辺方向はN－26°－Eである。壁はややゆるい立ち上がりとなり壁中央付近で幅1m程のテ



	層位	色調	性質	備考
SD413	1	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	小・中礫を大量に含む
	2	にぶい黄橙色 10YR6/4	シルト	
	3	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂礫	2～10cm 大の礫主体
	4	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	
	5a	にぶい黄橙色 10YR6/3	砂質シルト	
	5b	灰黄褐色 10YR6/2	砂質シルト	にぶい黄橙色土を含む
	6	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	中央に向かいグライ化
	7	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	互層、中央に向かいグライ化
		にぶい黄橙色 10YR6/3	粘土質シルト	
	8a	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	小礫・砂を含む
	8b	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	
	9	黒褐色 2.5Y3/1	粘土	互層
		オリーブ褐色 2.5Y4/3		植物遺体・動物遺体を含む
SD415	1	灰黄褐色 10YR4/2	シルト	明黄褐色土を含む、整地土
	2	褐灰色 10YR5/1	砂質シルト	黒色土ブロックを含む
	3	褐灰色 10YR5/1	砂質シルト	灰白色土をスジ状に含む
	4	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	褐灰色土・黒色土をスジ状に含む
	5	褐灰色 10YR4/1	砂質シルト	小・中礫を多量に含む

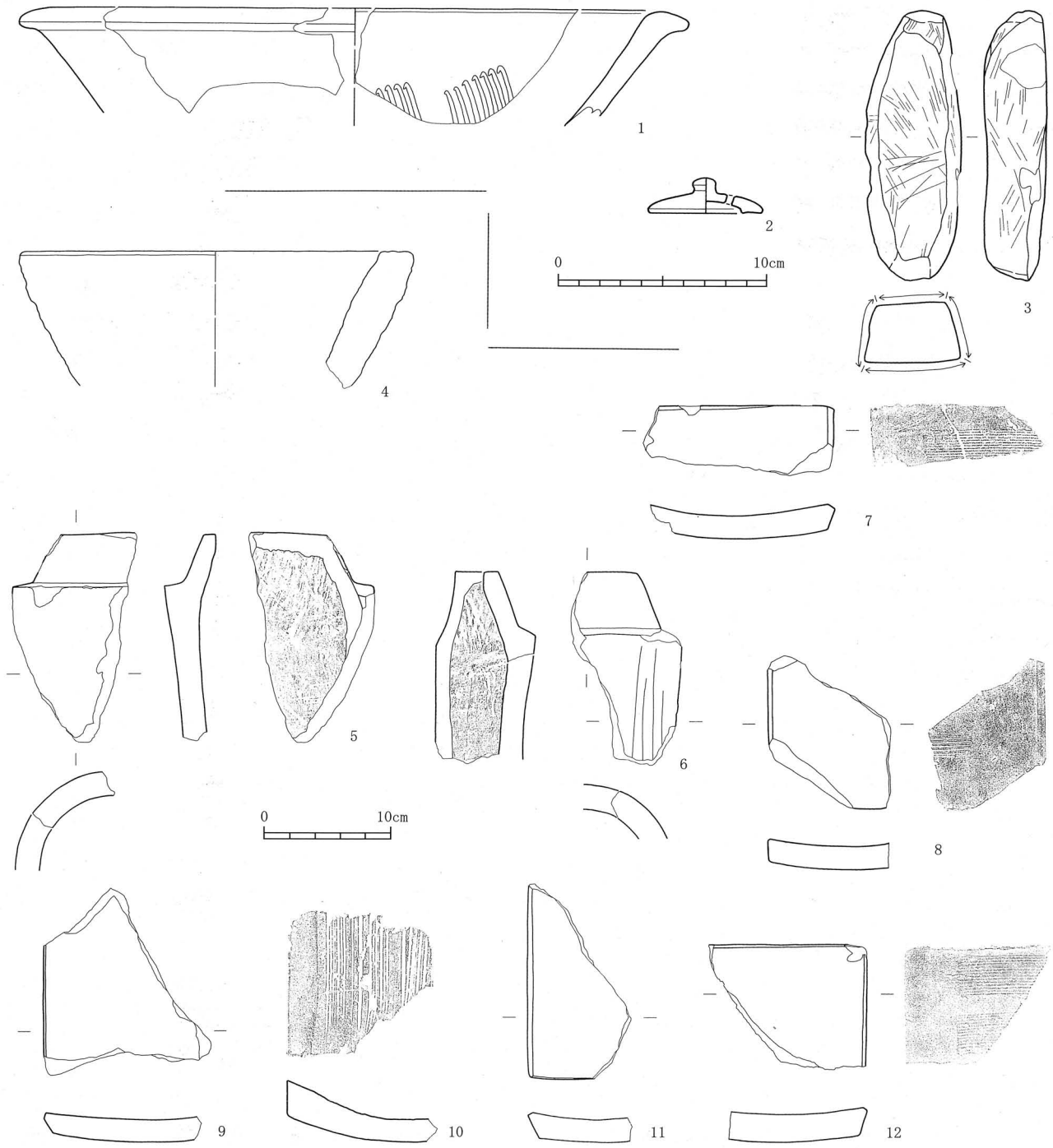
第185図　SD413・SD415溝跡断面



層位	色調	性質	備考
1a	黄橙色 10YR7/8	粘土	混成層、整地土
	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	
1b	灰黄褐色 10YR5/2	砂質シルト	黒色土ブロックを含む
1c	明黄褐色 10YR6/8	粘土	混成層、整地土
	黒褐色 10YR2/2	粘土	
1d	褐灰色 10YR5/1	砂質粘土	混成層、整地土
	黒褐色 10YR2/2	粘土	

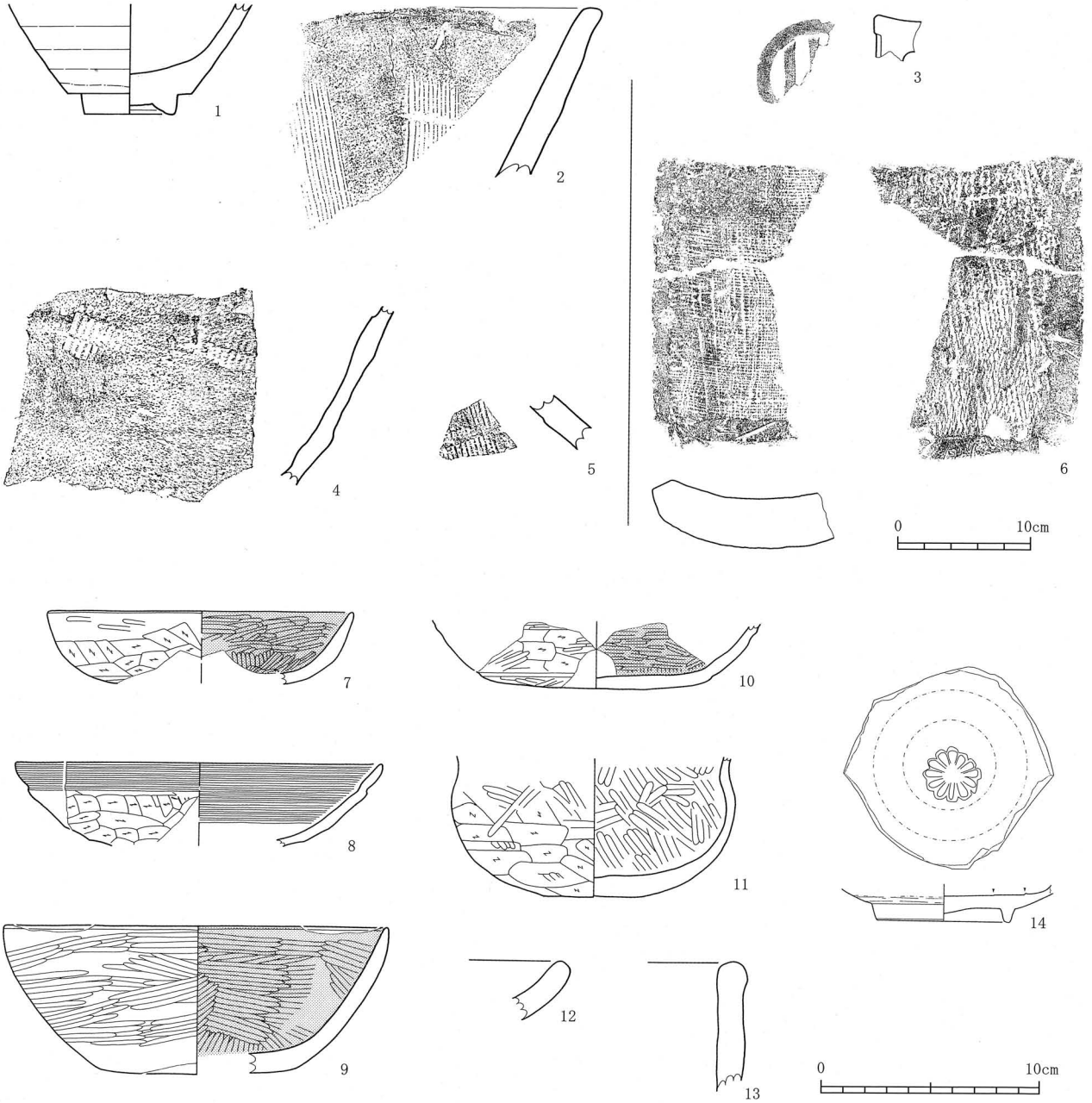
層位	色調	性質	備考
2	黄褐色 10YR5/6	砂	黒色土・褐灰色土がスジ状に入る
3a	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	
3b	にぶい黄褐色 10YR5/3	砂質シルト	
4a	褐色 10YR4/4	砂	粗砂
4b	灰黄褐色 10YR4/2	砂	小・中礫を多量に含む
5	褐灰色 10YR4/1	砂質シルト	黒色土ブロックを含む

第186図　SD415溝跡



	種　別	地点・層位	特　　徴	登録	写真
1	土師質土器擂鉢	5h層	口縁部は短く外傾し丸くおさまる、櫛目は幅広、2単位確認、間隔をもつ、口径(320)mm、被熱	D58	
2	陶器　蓋	1層	乳頭状のつまみ、径2mm程の孔あり、口径53mm、器高17mm、つまみ部径10mm、大堀相馬、18c	I1156	24-18
3	砥石	3層	平面形は長円形、断面四角形、長さ130mm、幅46mm、厚さ29mm、重さ276g、端部を除き4面が砥面、凝灰岩	K100	
4	石鉢	5層	口縁部片、敲打で成形、口径(312)mm	K101	
5	近世瓦　丸瓦	3層	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、コビキ痕、厚さ20mm、玉縁長39mmで厚さ14mm	G88	
6	近世瓦　丸瓦	1層	凸面：縦位のナデ、凹面：面取り、布目痕、コビキ痕、厚さ18mm、玉縁長45mmで厚さ15mm	G83	
7	近世瓦　平瓦	1層	凸面：ナデ、面取り、横位方向に一単位の櫛目、凹面：ナデ、厚さ18mm	G73	
8	近世瓦　平瓦	1層	凸面：ナデ、面取り、横位方向に一単位の櫛目、凹面：ナデ、厚さ18mm、硬質	G67	
9	近世瓦　平瓦	1層	凸面：ナデ、面取り、凹面：ナデ、厚さ18mm	G79	
10	近世瓦　平瓦	1層	凸面：ナデ、面取り、凹面：縦位方向の櫛目の成形、中央部の厚さ18mm、端部が厚くなり27mm、硬質	G70	
11	近世瓦	埋土	凸面：ナデ、面取り、凹面：ナデ、厚さ18mm	G77	
12	近世瓦	埋土	凸面：ナデ、面取り、横位方向に2単位の櫛目、凹面：ナデ、厚さ22mm、硬質	G80	

第187図　SD413溝跡(5区)出土遺物



	地点・層位	種　別	特　　徴	登録	写真
1	SD413　5層	陶器　天目茶碗	上部欠損、鉄釉、高台径44mm、瀬戸美濃、17c中頃	I1165	24-19
2	SD413　埋土	土師質土器　擂鉢	口縁部片、まっすぐ立ち上がり口縁部にいたる、間隔をおいた櫛目(6条)を2単位確認	D90	
3	SD413　埋土	近世瓦　軒桟瓦	三引両文のみ、硬質	G124	
4	SD415　埋土	陶器　甕	中世陶器体部片、格子状の押印あり、厚さ8mm程と薄い、常滑？	I1180	
5	SD415　埋土	陶器　甕	中世陶器体部片、格子状の押印あり、常滑	I1174	
6	SD415　埋土	古代瓦　平瓦	凸面：縦位方向の縄叩き、凹面：布目痕、厚さ37mm、被熱、煤付着	F16	
7	SD415　5層	土師器　坏	丸底、内弯気味に立ち上がる、外面は口縁部がヘラミガキ、体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径(139)mm	C23	
8	SD415　埋土	土師器　坏	丸底、内弯気味に立ち上がり口縁部との境に段、外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ、内面はヨコナデ、口径(166)mm、関東系土器	C25	
9	SD415　5層	土師器　坏	丸底風平底、内弯気味に立ち上がる、外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、口径175mm、底径88mm、器高78mm	C21	24-17
10	SD415　5層	土師器　坏	丸底風平底、体部との境にゆるい稜、外面は底部がヘラケズリ、底部下端から体部がヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理、底径104mm	C22	
11	SD415　確認面	土師器　坏	口縁部欠損、底部中央が平坦、内弯気味に立ち上がり口縁部でゆるく外反、外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ、底径46mm	C24	
12	SD417　1層	るつぼ	口縁部片、内面に黒色膜と赤褐色膜がみられる、	R2	
13	SD417　1層	るつぼ	口縁部片、直立気味に立ち上がる、熱で変色	R36	
14	SD417　1層	陶器　皿	灰釉、見込みに蛇の目釉ハギ、菊文、底径61mm、瀬戸美濃	I1166	

第188図　SD413(8区)・SD415・SD417溝跡出土遺物

ラス状の平坦部が取り付く。西側の底面はテラス状の平坦面とほぼ同じ高さとなるが、壁下部は一段深くなり西側との高低差は1.3m程である。深さは3.05mを測る。８区側では東西方向に直線的に延びる溝北辺部を確認した。東西方向はE－27°－Sである。確認長約26m、下端幅約７m、深さ最大2.5mを測る。壁はゆるい立ち上がりで底面は平坦面である。西辺から北辺東端部までの長さは約50mを測り、北辺から西辺南端部まで約21m分確認した。南壁で堆積土を大別で９層確認した。１層は礫を大量に含む人為堆積層で、礫除去後、溝内は大きな窪地を呈している。底面は砂礫層である。５区西辺の底面は溝が巡り凹凸面となり北辺とは底面状況に違いがみられた。縄文土器、土師器、須恵器、古代瓦、天目茶碗（瀬戸美濃）、陶器（蓋・碗・向付・鉢・瓶・）、磁器（碗・皿・瓶）、土師質土器擂鉢、瓦質土器鉢、焼塩壺、砥石、石鉢、近世瓦(軒桟瓦･丸瓦･平瓦)、植物遺体、動物遺体(昆虫)が出土している。

SD415溝跡　A・B－９～15区に位置する。南辺部分のみの確認でSD413に切られる。東西方向に延びており確認長約24.5mを測る。南辺方向はE－26°－S前後である。深さ最大で1.4mを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、底面はゆるい皿状である。堆積土は大別で６層確認した。最下層の５層は砂礫層で小片となった土器片が多量に出土している。古代瓦、土師器、須恵器、中世陶器、石臼が出土している。

５）柱穴・ピット

ピット類を100余基検出し柱痕跡を有するものも７基程あるが、建物跡等の組み合わせは確認できなかった。土師器、土師質土器、鍛造剥片、鉱滓、礫、骨片が出土している。

(2) 小結

竪穴遺構　１基の確認である。東西長が２m程と小型の竪穴である。東壁中央部側に炉面が、鍛造剥片や鉱滓が出土しており、これらから竪穴の鍛冶工房跡と判断した。周辺にも炉跡が３基確認されているが、単体での確認となっている。時期を特定できる遺物はないがSD413に切られており、大きく中世（３期）としておきたい。３基の炉跡も同時期と判断される。

土坑　６基の確認である。そのうちSK409が井戸跡となる。確認したすべての層が人為堆積土となり埋め戻されている。鉱滓や瓦質土器擂鉢が出土しており、時期は大きく中世(３期)頃と判断される。土坑は５基あるが、SK414･415からは鍛造剥片が出土しており、鍛冶遺構に関わるものと判断される。他のものは時期･性格等不明である。

溝跡　５条の確認である。SD413は江戸期の堀跡と判断される。北と西の二辺が確認された。堀幅は不明であるが底面幅等から推定すると15m前後の大型のものと思われる。養種園遺跡第１次調査では当調査区の南側でSD01とした堀跡を確認し別荘の堀跡としている。位置関係からみて一連のものと判断され、第60図に示した伊達家別荘（小泉屋敷）の北西部分と思われる。SD414は東西方向に延びており当調査区では最古段階の遺構となる。土師器のみが出土しており、平安時代とも考えられたが性格を含めて不明である。SD416・417は遺存が不良で重複等不明となる。SD417からは瀬戸美濃の皿が出土しており、中世（3b期)、戦国期末頃のものかと判断される。SD515からは陶器類とともに多量の古代の土器類が出土している。部分的な確認ではあるが河川跡と判断した。

Ⅲ　まとめ

今回の調査で縄文時代から近世までの各種の遺構・遺物を確認した。縄文及び古墳時代は遺物のみの確認に留まるが、縄文土器・石器類は絶対数は少ないが一定量の出土がみられた。図示は都合で割愛したが後期及び晩期の土器類が主体を占める。確認された遺構は、土器棺墓１基、竪穴住居跡９軒、土坑墓60基、井戸跡５基、土坑117基、掘立柱建物跡15棟、柱列跡４条、溝跡69条、道路跡１条、竪穴建物跡１軒、竪穴遺構１軒、炉跡３基、窯跡１基、石敷遺構１基、柱穴・ピット多数となり、これらの遺構に伴い各種の遺物が出土している。

1．遺構の構成

［弥生時代：1b期］　桝形囲式期の土器棺墓を確認した。南小泉遺跡の霞目飛行場地点で合せ口土器棺が数多く確認され集落等の存在も窺われているが、南小泉周辺での当時期の様相は未だ不明な点が多い。

［奈良時代：2a期］　竪穴住居跡２軒の確認である。両住居跡は距離的にも離れており単体的な配置で散在状況となる。土坑、溝跡、柱穴・ピットで土師器・須恵器のみが出土する遺構もあるが、主体を占める中世・近世の遺構と区別がつかない面があり不定としている。

［平安時代：2b期］　竪穴住居跡7軒の確認である。やや集中した配置もみられるが出土土器の特徴から判断して時期差が存在し、散在した分布状況と思われる。瓦が一定量出土する住居跡があり国分寺との関わりが考慮される。

［中世：3a・3b期］　土坑墓60基、井戸跡５基、掘立柱建物跡14棟、柱列跡４条、道路跡１条、竪穴建物跡１軒、竪穴遺構１軒、炉跡３基、土坑、溝跡の確認である。七郷堀以南で主体的に確認され、特に中央調査区では各遺構が密集しており重複状況からも各遺構間の時期変遷が認められる。土坑墓群が最古段階となり堀跡に区画された掘立柱建物跡群が新段階となる。建物跡には庇をもつ極めて大型のものがあり有力者層の屋敷と判断される。なお、区画の堀跡からは鉄生産・鍛冶に関わる遺物が多量に出土し、他の地点からも鋳型をはじめ同様の遺物や遺構が確認され特徴的である。

［近世：４期］　掘立柱建物跡１棟、窯跡１基、石敷遺構１基、土坑、溝跡の確認である。七郷堀以北の西側西調査区（保春院前遺跡）・西側東調査区（2000－1区）・調査区東側での確認となる。西側調査区の大型の溝跡は旧七郷堀となるもので、流路の変遷及び船着場様の施設が確認された。土坑からは大量の陶器類とともに製鉄・鍛冶に関わる遺物が数多く出土している。鉄生産に関わる遺構の確認はないが、当地点は下級武士層の居住域部となり、内職的な生産活動との関わり注意される。東側の溝跡は伊達家の屋敷となる別荘及び御仮屋の堀跡と判断される。

2．まとめ

養種園遺跡・保春院前遺跡は広瀬川が形成した標高14m前後の自然堤防に位置する。南小泉遺跡の北西端に位置し縄文時代から近世までの遺構・遺物が発見された。１～４までの時期区分を行ったが古代以前の遺構は散見される状況で、中心は３・４期となる中世後半から近世前半の遺構群である。国分領から伊達領への遷り変わりとともに遺構の変遷も確認されたことになる。七郷堀の以南では別荘遺構を除いて近世遺構が一切確認されない。絵図では畑と別荘が描かれるのみで当然の帰結とはなるが七郷堀の北と南では場の使われ方に違いがみられた。

参考文献

高倉　淳：「史料よりみた小泉屋敷」『市史せんだい』Vol.１(1992)
田中則和：「一地域における中世から近世へ―南小泉遺跡と養種園遺跡―（一）」『六軒丁中世史研究』第六号(1999)
：「一地域における中世から近世へ―南小泉遺跡と養種園遺跡―（二）」『六軒丁中世史研究』第七号(2000)
藤澤良祐：「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要第10輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター(2002)
鋳物の科学技術史研究部会：『鋳物の技術史』社団法人鋳物工学会(1997)
東北中世考古学会：『掘立と竪穴』東北中世考古学叢書２　高志書院(2001)
東北大学埋蔵文化財調査研究センター：『東北大学埋蔵文化財調査年報６』(1993)
東北大学埋蔵文化財調査研究センター：『東北大学埋蔵文化財調査年報９』(1998)
仙台市史編纂委員会：『仙台市史　通史編２　古代中世』(2000)
仙台市史編纂委員会：『仙台市史　通史編３　近世１』(2001)
仙台市教育委員会：『養種園遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第214集(1997)
仙台市教育委員会：『保春院前遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第274集(2004)
仙台市教育委員会：『南小泉遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第325集(2008)
仙台市教育委員会：『仙台城下絵図の魅力』仙台市文化財パンフレット第45集(2001)

Ⅳ　同定・分析

養種園遺跡・保春院前遺跡出土の金属類分析

ＪＦＥテクノリサーチ株式会社
分析・評価事業部　埋蔵文化財調査研究室

１．はじめに

宮城県仙台市若林区に所在する養種園遺跡・保春院前遺跡から出土した鉄製品関連遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析・顕微鏡組織観察を含む自然科学的観点からの分析・調査を依頼された。鉄関連遺物の組成分析、マクロ的特徴観察、ミクロ組織観察などにもとづき材質、用途、履歴、出発原料、製造工程上の位置づけなどを中心に調査した。以下にその結果について報告する。

２．調査項目および試験・観察方法

(1) 調査項目

調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表１に示す。資料番号は整理の都合で通し番号としたが資料受け入れ時の番号も併記した。

(2)　調査方法

(i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は0.1ｇまで測定可能な電子天秤を使用した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・稍強・中・稍弱・弱」の５ランクで、個別調査結果を表示した。遺物内の残存金属の有無を金属探知機（MC：metal checker）を用いて調査した。

(ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するＪＩＳ分析法に準じて行っている。

・全鉄(T.Fe)：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法。
・金属鉄(M.Fe)：臭素メタノール分解－EDTA滴定法。
・酸化第一鉄(FeO)：二クロム酸カリウム滴定法。
・酸化第二鉄(Fe_2O_3)：計算。　・化合水(C.W.)：カールフィッシャー法。
・炭素(C)、イオウ(S)：燃焼－赤外線吸収法。
・ライム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、酸化ナトリウム(Na_2O)、珪素(Si)、マンガン(Mn)、リン(P)、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、アルミニウム(Al)、ヴァナジュム(V)、チタン(Ti)：ICP発光分光分析法。
・シリカ(SiO_2)、アルミナ(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化リン(P_2O_5)、酸化カリウム(K_2O)：ガラスビード蛍光Ｘ線分析法。
但しCaO, MgO, MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光Ｘ線分析法を選択。
・酸化ナトリウム(Na_2O)：原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe_2O_3、シリカSiO_2、アルミナ

Al_2O_3、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa_2O、酸化カリウムK_2O、二酸化チタンTiO_2、酸化マンガンMnO、酸化リンP_2O_5、コバルトCo、化合水C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。鉄製品中成分の化学分析は、13成分（炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg）を化学分析している。

(iii) 顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性資料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。滓関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製・精錬工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイタール（５％硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて低倍率の顕微鏡観察（５倍～20倍）、写真撮影もする。

(iv) エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析：（ＥＤＸ元素分析）

原理はＸ線管で発生させたＸ線を試料にあてることによって、試料に含まれる元素固有のエネルギーを持った特性Ｘ線を発生させ、このＸ線をSi半導体検出器で検出し、試料中の構成元素を定性・定量分析するものである。蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製、MESA-500）を使って遺物の元素分析（測定元素：^{11}Na～^{92}U。）を行う。測定条件は以下の通りである。（Ｘ線管ターゲット：Ｒｈ（ロジウム）、Ｘ線管電圧：１～500μＡ(15ｋＶ)、１～240μＡ(50ｋＶ)（全自動２段切り換え）、検出器：高純度シリコン検出器）。

３．調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて200頁～201頁に示す。表１に調査資料と調査項目をまとめた。表２は鉄滓等の化学成分分析結果を、209頁～211頁に坩堝、鉄砲玉、古銭のEDX分析結果を示す。図１、２、３は滓の化学成分的特徴から各製鉄工程における滓の生成位置（工程）を解析・検討する図である。全資料の外観写真を202頁～203頁に、鉄滓等の顕微鏡ミクロ組織を204頁～208頁に、それぞれ示す。

資料番号No.1（N230） 鍛造剥片、着磁度：やや強、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。提供された資料は約360ｇの土壌混じりの大小の剥片とその破砕した屑および粒状滓の混合物である。この中から調査に必要な量として7.5ｇの鍛造剥片を採取した。採取した剥片はいずれも板状である。数ｍｍ～６mm大の薄い鍛造剥片で表面は光沢がなく、濃い茶色である。剥離した面は光沢のある金属的な灰色を呈している。120μ～200μの厚みの３片の剥片を顕微鏡観察に供した。全体にやや強い着磁があるものの、ＭＣ（金属検知反応）はない。

滓の顕微鏡組織：断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を204頁に示した。いずれの試料も緻密なウスタイトになっている。写真の視野にはないが試料の端に繭玉状のウスタイトも少量であるが観察されている。試料の片面側に偏って虫食い状に残存金属鉄が溶出したとみられる孔が多数みられる。また、平滑な面の側には非常に薄く、白く輝くような一見金属鉄のように思われる組織が部分的に観察される。光沢のある金属的な灰色と関連していると思われる。しかし、微小部分析をしていないのでこの組織の性格は明らかにできていない。

化学成分：分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：67.6%、FeO：60.2%、Fe_2O_3：29.4%、SiO_2：6.69%、Al_2O_3：1.24%である。TiO_2は0.1%と低い。僅かではあるが金属鉄が0.22%含まれている。造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は９％と比較的少ない。FeO- Fe_2O_3-SiO_2の３元系とみなして199頁の平衡状態図でみるとウスタイト-マグネタイトの境界に近いウスタイト領域にあり平衡状態としてはウスタイトとマグネタイトが存在しうることがわかる。顕微鏡

観察と一致する成分である。ウスタイトは磁性を持たないが着磁が認められたのはマグネタイトの存在によると思われる。図１、図２、図３は本来は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図である。しかし、この図に分析結果をプロットすれば成分的な特徴を把握することは可能である。本資料の分析結果はいずれも砂鉄を原料とする鍛錬鍛冶滓グループの範囲にある。

以上から本資料は鍛錬鍛冶工程で鉄表面の酸化鉄皮膜が剥離して飛散した鍛造剥片と推察される。始発原料は砂鉄の可能性が考えられる。

資料番号No.2（N236） 鍛造剥片、着磁度：やや強、ＭＣ：無

外観:外観写真を202頁に示す。約55ｇの大小さまざまな鍛造剥片と粒状滓の混合物である。この中から３ｇ強の鍛造剥片を選び出した。採取した剥片は大きさが比較的そろっており３～６mm大である。大部分の試料に着磁が認められる。250μ程度の厚みの３片を組織観察し、残りを化学分析に供した。

滓の顕微鏡組織：断面の100倍と400倍の顕微鏡組織を204頁に示す。2-1の組織はほとんど試料１の組織と同一で、緻密なウスタイトと思われる。2-2の組織は2-1と同様であるが反応は両側から進行したように見え、剥離後に酸化が進行した試料と思われる。一方、2-3の試料は繭玉状の凝集ウスタイトとガラス質から構成されている。鍛造剥片のミクロ組織である。

化学成分：分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：67.9%、FeO:60.0%、Fe_2O_3:29.8%、SiO_2:6.87%、Al_2O_3：0.48%である。TiO_2は0.07%と低い。僅かではあるが金属鉄が0.44%含まれている。造滓成分(SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O)は8.6%と比較的少ない。化学成分としては試料１とほとんど同じである。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３元系とみなして199頁の平衡状態図でみると試料１と重なり、ウスタイト-マグネタイト境界に近いウスタイト領域にあり平衡状態としてはウスタイトとマグネタイトが存在しうることがわかる。顕微鏡観察と一致する成分である。ウスタイトは磁性を持たないが着磁が認められたのはマグネタイトの存在によると思われる。P_2O_5は0.282%と高くK_2Oも0.6%と高い。草木灰が酸化防止用塗布材として使用された可能性が考えられる。図１、図２、図３は本来は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図である。しかし、この図に分析結果をプロットすれば成分的な特徴を把握することは可能である。本資料の分析結果はいずれも砂鉄を原料とする鍛錬鍛冶滓グループの範囲にある。以上から本資料は鍛錬鍛冶工程で鉄表面の酸化鉄皮膜が剥離して飛散した鍛造剥片と推察される。始発原料は砂鉄の可能性が考えられる。

資料番号No.3（N238） 鍛造剥片、着磁度：やや強、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。約37ｇの小さな鍛造剥片とその破砕屑、および少量の粒状滓を含む資料である。この中から5.4ｇの鍛造剥片を採取した。余り大きなものはなく、最大でも５mm大である。通常の剥片と同じで、剥離した面は金属光沢を持つ銀灰色をしており、表面側はさび色の暗褐色である。平均的な200μ～300μ厚さのものを顕微鏡観察した。

顕微鏡組織：断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を205頁に示した。3-1、3-2、3-3の試料ともに試料１，試料２と同じ緻密なウスタイト組織となっている。3-2の400倍の写真にはやや濃淡に差のある組織が観察されるが個々には判別が付けられない。また、3-3の100倍の写真には滑らかな側に非常に薄く表面に沿って白く輝くに見える金属鉄と思われる組織が観察されるが、光沢のある金属的な灰色と関連していると思われる。しかし、微小部分析をしていないのでこの組織の性格は明らかにできていない。

化学成分：化学成分分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：65.2%、FeO：48.8%、Fe_2O_3：37.6%、SiO_2：7.60%、Al_2O_3：0.96%である。TiO_2は0.36%で、金属鉄は0.94%含まれている。造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O)は10.2%である。資料１、資料２と比べると化学成分としてはFeOが少なくその分Fe_2O_3が高くなっており、酸化がやや進んでいるように思われる。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３元系とみなして199頁の平衡状態図でみるとマグネタイトの領域にあり、ウスタイト-マグネタイト境界に近い位置にある。平衡状態としてはウスタイトとマグネタイトが存在し

うることがわかる。顕微鏡観察と一致する成分である。P_2O_5は0.385％と高くK_2Oも0.5％と高い。草木灰が酸化防止用塗布材として使用された可能性が考えられる。図１、図２、図３は本来は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図である。しかし、この図に分析結果をプロットすれば成分的な特徴を把握することは可能である。本資料の分析結果はいずれも砂鉄を原料とする鍛錬鍛冶滓グループの範囲にある。以上から本資料は鍛錬鍛冶工程で鉄表面の酸化鉄皮膜が剥離して飛散した鍛造剥片と推察される。始発原料は砂鉄の可能性が考えられる。

資料番号No.4（N250）　鍛造剥片、着磁度：やや強、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。約330ｇの鍛造剥片とその粉および少量の粒状滓を含む資料である。この中から6.5ｇの鍛造剥片を選び出した。比較的大きなものが採取でき最大のものは10mm大である。外観は通常の鍛造剥片と変わりない。300μ～700μの厚さのものを顕微鏡観察した。

滓の顕微鏡組織：断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を205頁に示した。4-1の写真では白色のウスタイトが観察され、残存した金属鉄が溶解流出した跡と思われる孔が多量に観察される。資料No.1-3、3-3の酸化がさらに進んだものに相当すると思われる。4-2の写真では厚さが450μ程度あり、緻密なウスタイトと繭玉状のウスタイトが観察される。資料4-3の写真では緻密なウスタイトと亀裂の多いウスタイトとが観察される。厚み方向の中央には小さな空隙が連続して多量に存在している。厚み方向で酸化の仕方が変わっていた可能性を示唆するが詳細は不明である。また、400倍の写真にみられるように中央の空隙に沿って白く輝く小さな組織が観察される。

化学成分：化学成分分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：65.0％、FeO：61.1％、Fe_2O_3：24.5％、SiO_2：8.73％、Al_2O_3：1.15％である。TiO_2は0.62％である。造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は11.6％である。化学成分としては資料３と比べるとFeOが高く、Fe_2O_3が低いが資料３に類似した成分構成である。資料３よりも酸化が少ない資料と思われる。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３元系とみなして199頁の平衡状態図でみるとウスタイト-マグネタイトの境界に近いマグネタイト領域にある。平衡状態としてはウスタイトとマグネタイトが存在しうることがわかる。顕微鏡観察と一致する成分である。P_2O_5は0.317％と高くK_2Oも0.64％と高い。草木灰が酸化防止用塗布材として使用された可能性が考えられる。図１、図２、図３は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図であるが成分的な特徴を把握することは可能である。これにプロットしてみるといずれも砂鉄を原料とする鍛錬鍛冶滓グループの範囲にある。以上から本資料は鍛錬鍛冶工程で鉄表面の酸化鉄皮膜が剥離して飛散した鍛造剥片と推察される。始発原料は砂鉄の可能性が考えられる。

資料番号No.5（N251）　鍛造剥片、着磁度：稍強、ＭＣ：なし

外観：外観写真を202頁に示す。約430ｇの鍛造剥片とその破砕粉、及び少量の粒状滓を含む資料である。この中から19ｇの鍛造剥片と約２ｇの粒状滓を採取した。選び出した粒状滓は資料No.７として調査する。平均的な大きさのものを組織観察した。

金属鉄の顕微鏡組織：試料中の鉄部分を顕微鏡観察したミクロ組織写真を206頁に示した。いずれも資料全面に白色のウスタイトが観察される。厚さが200μ～350μの資料で、冷却過程で生成したとみられる空洞が資料5-3にはみられ、ガラス質滓も含まれている。

化学成分：化学成分分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：67.8％、FeO：51.7％、Fe_2O_3：39.0％、SiO_2：5.67％、Al_2O_3：0.63％である。TiO_2は0.19％と低く、0.33％の金属鉄が含まれている。造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は7.4％である。化学成分としては資料３と比べるとFeO /Fe_2O_3の比はほぼ同じでSiO_2が２％ほど低く主要成分はよく似ている。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３元系とみなして199頁の平衡状態図でみるとマグネタイト-ウスタイトの境界に近マグネタイト領域にある。平衡状態としてはウスタイトとマグネタイトが存在しうることがわかる。顕微鏡観察と一致する成分である。P_2O_5は0.285％と高くK_2Oも0.41％と高い。草木灰が酸化防止用塗布材として使用された可能性が考えられる。図１、図２、図３は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図であるが成分的な特徴を把握することは

可能である。これにプロットしてみるといずれも砂鉄を原料とする鍛錬鍛冶滓グループの範囲にある。以上から本資料は鍛錬鍛冶工程で鉄表面の酸化鉄皮膜が剥離して飛散した鍛造剥片と推察される。

資料番号No.6（N253） 鍛造剥片、着磁度：やや強、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。約645ｇの鍛造剥片とその粉、及び少量の粒状滓を含む資料である。この中から9.1ｇの鍛造剥片と約6.0ｇの粒状滓を採取した。粒状滓はNo.８として調査に供した。鍛造剥片は平均的な大きさの物について顕微鏡観察した。

顕微鏡組織：断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を206頁に示した。資料6-1は資料全面に緻密なウスタイトが観察される。厚さは450μ程度で 冷却過程で発生したと見られる空洞がある。ガラス質滓が僅かに含まれる。資料6-2は全面が繭玉状のウスタイトの凝集組織になっている。その間に僅かなガラス質が観察される。資料6-3は厚さが800μくらいの厚い鍛造剥片で組織はウスタイトで資料中央には大きな亀裂が走っている。資料の両側から酸化が進んだ結果と思われる。

化学成分：化学成分分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：65.3%、FeO：63.5%、Fe_2O_3：22.2%、SiO_2：9.92%、Al_2O_3：0.72%である。TiO_2は0.09%と低い。造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は12.4%である。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３元系とみなして199頁の平衡状態図でみるとウスタイト-マグネタイト境界に近いウスタイト領域にある。平衡状態としてはウスタイトとマグネタイトが存在しうることがわかる。顕微鏡観察と一致する成分である。P_2O_5は0.416%と高くK_2Oも0.87%と高い。草木灰が酸化防止用塗布材として使用された可能性が考えられる。図１、図２、図３は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図であるが成分的な特徴を把握することは可能である。これにプロットしてみるといずれも砂鉄を原料とする鍛錬鍛冶滓グループの範囲にある。

以上から本資料は鍛錬鍛冶工程で鉄表面の酸化鉄皮膜が剥離して飛散した鍛造剥片と推察される。

資料番号No.7（N251） 粒状滓、着磁度：中、ＭＣ：無

外観:外観写真を202頁に示す。資料５と同じ母資料（N251）から採取した約２ｇの粒状滓である。２mm～３mm大のものが多い濃い灰色をしており、表面に光沢はない。3/4程度は磁石に付くがMC反応はない。組織観察は中間サイズの粒状滓を用いた。

顕微鏡組織:顕微鏡組織写真を207頁に示した。7-1の資料は中央に大きな空洞があり、充填部においても小さな丸い気孔が観察される。鉱物組織は樹脂状と繭玉状のウスタイトとその間を埋めるガラス質から構成されている。7-2の資料は基本的に資料7-1と同じであるが小さな気孔が多くウスタイトは圧倒的に樹脂状のものが多い。微細な金属鉄粒子が白く輝いて観察される。7-3の資料は凝集ウスタイトとなっており、ガラス質の中に小さな板状のファイヤライトも観察される。

化学成分：化学成分分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：64.0%、FeO：57.0%、Fe_2O_3：27.6%、SiO_2：10.9%、Al_2O_3：1.04%である。TiO_2は0.22%である。造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は13.4%である。主要成分FeO、Fe_2O_3、SiO_2で見ると資料４とよく似ている。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３元系とみなして199頁の平衡状態図でみるとウスタイト境界に近いマグネタイトの領域にある。平衡状態としてはウスタイトとマグネタイトが存在しうることがわかる。顕微鏡観察と一致する成分である。P_2O_5は0.310%と高くK_2Oも0.54%と高い。草木灰が酸化防止用塗布材として使用された可能性が考えられる。図１、図２、図３は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図であるが成分的な特徴を把握することは可能である。これにプロットしてみるといずれも砂鉄を原料とする鍛錬鍛冶滓グループの範囲にある。以上から本資料は鍛錬鍛冶工程での滓が飛散して生成した粒状滓ではないかと推察される。始発原料として砂鉄が使用された可能性が考えられる。

資料番号No.8（N253） 粒状滓、着磁度：中、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。資料６と同じ母資料から採取した約６ｇの粒状滓である。３～５mm大の比較的

大きな暗灰色の粒状滓である。大部分は着磁するがMC反応はない。組織観察には４mmサイズのものを使用した。

滓の顕微鏡組織：断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を207頁に示したいずれも非常に大きな空隙が資料中央にあり、滓は薄皮状に資料の周辺に存在している。凝固過程で水蒸気等のガスが発生して閉じこめられたものと推察される。資料8-1は微細なウスタイトとファイヤライトからなっており組織の小ささから比較的速い速度で冷却されたものと考えられる。8-3の資料も凝集ウスタイトの組織になっている。ウスタイトの間隙はファイヤライトになっており比率は資料8-1よりも少なくSiO_2は資料8-1より少ないと思われる。資料8-3は8-1、8-2の資料とは基本的に同じ凝集ウスタイトとなっているがその間を埋めているのはガラス質かファイヤライトか必ずしも明瞭でないが薄く褐色を帯びていること、場所によってはファイヤライトが観察される部分もあることからファイヤライトの可能性が高いように思われる。

化学成分：滓の分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：55.9%、FeO：49.5%、Fe_2O_3：24.4%、SiO_2：18.3%、Al_2O_3：2.75%である。TiO_2は0.26%である。SiO_2、Al_2O_3が高い結果、造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は23.4%%と高くなっている。主要成分FeO、Fe_2O_3、SiO_2で見ると資料４とよく似ている。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３元系とみなして199頁の平衡状態図でみるとウスタイト-ファイヤライト-マグネタイト境界に近いマグネタイトの領域にある。平衡状態としてはウスタイトとマグネタイト、ファイヤライトが存在しうることがわかる。顕微鏡観察と一致する成分である。P_2O_5は0.338%と高くK_2Oも0.93%と高い。草木灰が酸化防止用塗布材として使用された可能性が考えられる。図１、図２、図３は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図であるが成分的な特徴を把握することは可能である。これにプロットしてみるといずれも砂鉄を原料とする鍛錬鍛冶滓グループの範囲にある。以上から本資料は鍛錬鍛冶工程での滓が飛散して生成した粒状滓ではないかと推察される。鍛造過程では酸化防止用に草木灰が使用された可能性が考えられる。

資料番号No.9（N231）　鉄滓、着磁度：弱、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。約18.5ｇの袋入の鍛造剥片と17.5ｇの鉄滓資料である。写真左から大きさは重量5.1g、長さ25mm、幅18mm、厚さ14mm、重量5.1g、長さ28mm、幅19mm、厚さ18mm、重量3.4g、長さ20mm、幅20mm、厚さ11mmである。鉄滓資料について調査した。資料は鉄滓というよりも炉壁に鉄滓が付着した炉壁付着滓と思われる資料である。MC反応はなく、炉内側であったと推定される側に弱い着磁があり、反対側には着磁はない。最も明確な着磁があった外観写真左の資料で顕微鏡観察し、他の資料は着磁の強い側を剥ぎ取り分析に供した。

滓の顕微鏡組織：断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を208頁に示した。9-1の写真に見られる錆化鉄の組織が全体の80%位を占めている。錆化鉄の中には薄灰色の板状、あるいは棒状のファイヤライトと思われる組織が観察され、これらを内蔵していた鉄が錆化したものと思われる。また、資料の20%位は写真9-2に示したウスタイトとファイヤライトから構成される組織となっており、精錬滓あるいは鍛冶滓と分離していない状態の鉄が錆化したように思われる。

化学成分：化学成分分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：44.6%、FeO：11.9%、Fe_2O_3：44.6%、SiO_2：20.6%、Al_2O_3：3.86%である。TiO_2は0.17%である。造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は23.4%と高くなっている。SiO_2、Al_2O_3が高いのは外観観察からもわかるように炉壁材の影響と思われる。P_2O_5は0.949%と非常に高い値を示し、K_2Oも1.68%と非常に高い。草木灰が塗布材などとして使用された可能性が考えられる。ＣＷ（結合水）が5.49%含まれ、ゲーサイトなどのオキシ水酸化鉄が相当含まれていることを示している。

以上から鍛冶工程としては精錬工程か鍛錬鍛冶工程で生成した滓を多量に含む鉄が炉壁と反応した、炉壁付着滓が錆化したものと推察される。草木灰の使用が考えられることから鍛錬時の生成物の可能性が高いように思われる。

資料番号No.10（N232）　鉄滓、着磁度：弱、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。鍛造剥片がわずかに混じったほとんどが砂礫である袋入りの資料10.8ｇと大小の

ブロック状の鉄滓資料である。写真は最大の塊で重量は16ｇである。重量16.0g、長さ46mm、幅30mm、厚さ20mm、外面は良く溶けて滑らかであるが割欠面で見ると激しく発泡している。大きく湾曲しており、小さな窪みには多量の泥が付着している。泥などの付着物を良く落とし調査に供した。

顕微鏡組織：断面の100倍と400倍の顕微鏡写真を208頁に示した。10-1の写真に見られるように気泡の非常に多いガラス滓である。資料の窪み部には半溶融状態の炉壁胎土が観察される。褐色に見える部分は炉壁材と思われる。ガラス質の一部には写真10-2に見られる組織があり、400倍の写真で見ると多角形が崩れたような灰白色のウルボスピネルとガラス質の中に棒状のイルメナイトと思われる組織が見られる。高TiO_2組織が確認されることから、始発原料が砂鉄の炉壁付着滓の可能性が高いように思われるが。

化学成分：分析結果を200頁の表２に示した。T.Fe：18.0％と非常に低い。FeO、Fe_2O_3はそれぞれ15.9％、7.71％と低い、SiO_2、Al_2O_3は53.2％、12.1％と非常に高い。TiO_2は0.69％で、本調査資料の中ではもっとも高い値である。顕微鏡観察でウルボスピネルなどの高TiO_2組織が僅かではあるが観察されたことと一致する。造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は75.2％である。図１、図２は鉄滓の製鉄工程における生成工程を検討する図では炉壁付着滓と分類される位置にある。以上から本資料は炉壁と反応した炉壁付着滓で始発原料は砂鉄と考えられる。

資料番号No.11（R-2）　坩堝、着磁度：無、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。重量5.5ｇ、長さ35mm、幅30mm、厚さ12mm。３角形状をした坩堝外縁部の破片である。凹んだ上面には赤褐色の溶解物が付着している。下面側は強熱された形跡が見られる。破断面で見ると灰白色をしており、粒状物などは観察されない。

化学成分：付着物の影響を受けないように破断面を蛍光Ｘ線(EDX)分析した。蛍光Ｘ線分析の結果を分析チャートとともに209頁に示す。分析場所は203頁の写真に示した。主成分はSiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3でそれぞれ61.3％、22.8％、11.2％である。一般的な須恵器、陶器に比べやややFe_2O_3が高い。少量成分としてはP_2O_5、TiO_2は1.8％、1.0％含まれている。本資料は主成分がSiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3からなる通常の坩堝と考えられる。

資料番号No.12（R-6）　坩堝、着磁度：微弱、ＭＣ：無

外観：外観写真を202頁に示す。大小２つに割れた坩堝片で、大は直径100mm、深さ30mm、肉厚10～13mmである。内側には赤褐色の溶解物と発泡した茶褐色の溶解物が付着している。木炭片が２個坩堝内面にかみこんでいる。裏側は非常にきれいで余り強熱された様子はない。破断面で見ると溶かした材料が浸潤した形跡が見られる。資料の背面や割欠面の汚染の少ない部分を非破壊分析する。

化学成分：蛍光Ｘ線分析の結果を分析チャートとともに209頁に示す。付着物の影響を受けないように破断面を蛍光Ｘ線（EDX）分析した。分析場所は203頁の写真に示した。主成分はSiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3でそれぞれ70.7％、17.1％、8.1％である。一般的な須恵器、陶器に比べやややFe_2O_3が高い。少量成分としてはCaO、TiO_2は1.0％、1.2％含まれている。資料No.11と異なりP_2O_5は検出されていない。

本資料は主成分がSiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3からなる通常の坩堝と考えられる。

資料番号No.13（R-8）　坩堝、着磁度：無、ＭＣ：無

外観：外観写真を203頁に示す。重量70.4ｇ、長径73mm、短径70mm、深さ25～28mmの坩堝で、内側中央付近は黒く、溶解物により少し侵食されている。外縁部には赤褐色の溶解物が付着している。この付着物はNo.11、12、13で共通しており、EDX分析した。また、付着物のない下面側も材質調査のため分析した。

化学成分：蛍光Ｘ線分析の結果を分析チャートとともに210頁に示す。材質調査は付着物の影響を受けないように坩堝の下面を分析した。また、赤色の付着物も分析した。分析位置は203頁の写真に示した。材質の主成分はSiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3でそれぞれ70.5％、18.8％、5.5％である。一般的な須恵器、陶器に近い成分構成である。少量成分としてはCaO、TiO_2、K_2Oは1.1％、1.0％、2.6％含まれている。赤色の付着物はSiO_2、Al_2O_3、FeOは63.2％、12.2％、4.8％であるが、

少量成分としてCaO：9.7％、K_2O：4.8％、CuO：3.6％、As_2O_3：0.099％が基質とは大幅に異なっている。この成分から付着物は銅を多量に含んでいたことは明らかで銅の溶解などに使われた可能性が高いように思われる。

資料番号No.14（N-12）　鉄砲玉、着磁度：無、ＭＣ：有

外観：外観写真を203頁に示す。重量13.2ｇ、直径13～14mmの玉で、小さな凹凸も多く、表面は白く粉が付着している。鉛が優先酸化しているものと思われる。着磁はなく、鉄の可能性はない。表面のEDX分析を行い、材質を調査する。

蛍光Ｘ線分析：分析チャート、分析条件、分析結果を211頁に示す。Pbが99.48％を占め、その他の成分は僅かである。Caが0.89％含まれている。この結果から本資料はPb製の鉄砲玉と推察される。

資料番号No.15（N-116）　円盤型金属製品、着磁度：無、ＭＣ：有

外観：外観写真を203頁に示す。重量10.5ｇ、長径24mm、短径22mm、厚さ３ｍｍのコイン状の金属製品である。表面には資料No.14の鉄砲玉と同じ白い粉が付着しているが鉄砲玉に比べると付着は弱くとれ易いように思われる。やや金属光沢を示しているが銭貨のような紋様はない。重量感があり鉛を多く含んでいるように思われる。

蛍光Ｘ線分析：分析チャート、分析条件、分析結果を211頁に示す。Pbが97.79％を占め、その他の成分は僅かである。Snは1.04％、Caが0.89％含まれている。

４．まとめ

（1）遺跡の性格：調査した製鉄関連遺物はいずれも鍛錬鍛冶工程から生成する鍛造剥片、粒状滓、炉壁付着滓であったことから、本遺跡では鍛錬鍛冶が行われていたことは間違いないと思われる。本調査資料には精錬鍛冶を想定させるものは見あたらない。砂鉄由来のウルボスピネルが観察される資料があり、いずれの資料も成分的に砂鉄系鍛錬鍛冶滓グループに属していたことから始発原料は砂鉄であったと思われる。

（2）個別資料のまとめ：

資料No.１、No.２、No.３、No.４、No.５、No.６：鍛錬鍛冶工程で生成した鍛造剥片と推察される。P_2O_5、K_2Oの高さから草木灰使用の可能性が考えられた。

資料No.７、No.８：鍛錬鍛冶工程で生成した粒状滓と推察される。

資料No.９：滓を多量に含む鉄が反応した炉壁付着滓が錆化したものと推察される。

資料No.10：炉壁付着滓と推察された。

資料No.11、No.12、No.13：SiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3を主成分とする坩堝で付着物に銅酸化物が検出され、銅の溶解に使用された可能性が示唆された。

資料No.14：純鉛の鉄砲玉と考えられる。

資料No.15：鉛製のコイン状円盤製品である。種類は特定できない。

（平成17年３月）

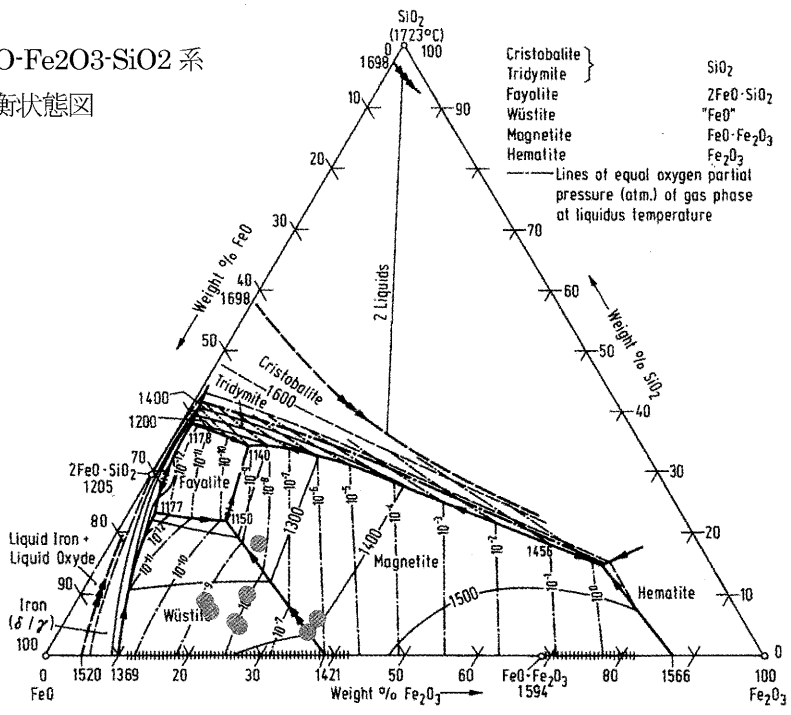
5．参考

（1）鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的に表A1のような鉱物組織がある。酸化鉄（Fe_2O_3、Fe_3O_4、FeO）、二酸化ケイ素（シリカ: SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）および二酸化チタン（TiO_2）を組み合せた化合物（固溶体）が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相（非晶質）を形成することがあり、X線回折では検出されない。

表A1　　鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名（和）	鉱物名（英）	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	α-Fe_2O_3	赤褐色～赤紫色
マーゲマイト	Maghemite	γ-Fe_2O_3	赤紫色～黒紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe_3O_4	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、繭玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	$2FeO \cdot SiO_2$	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
ウルボスピネル	Ulvospinel	$2FeO \cdot TiO_2$	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	$FeO \cdot TiO_2$	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルッカイト	Pseudobrookit	$FeO \cdot 2TiO_2$	白色、針状の結晶
アカゲナイト	Akagenite	β-FeOOH	X線で同定できるが組織は不明
ゲーサイト	Goethite	α-FeOOH	白～黄色、リング状が多い。

（2）FeO-Fe2O3-SiO2系
平衡状態図



FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系状態図（by Osborn and Muan）:Slag Atlas
[ドイツ鉄鋼協会](1981)[Verlag Stahleisen] Düsseldorf, Fig. 106, p,76

6．図表・写真

・調査資料と調査項目

表1　調査資料と調査項目（養種園遺跡・保春院前遺跡　出土資料）

資料No.	出土地点・層位・出土遺構	資料・種別	着磁度	ＭＣ反応	外観写真	化学成分	組織写真
1 (N230)	SD202 98年調査区	鍛造剥片	○	○	○	○	○
2 (N236)	2号炉 2000-5区	鍛造剥片	○	○	○	○	○
3 (N238)	3号炉 2000-5区	鍛造剥片	○	○	○	○	○
4 (N250)	SK414 2000-5区	鍛造剥片	○	○	○	○	○
5 (N251)	SK415 2000-5区	鍛造剥片	○	○	○	○	○
6 (N253)	Pit87 2000-5区	鍛造剥片	○	○	○	○	○
7 (N251)	SK415 2000-5区	粒状滓	○	○	○	○	○
8 (N253)	Pit87 2000-5区	粒状滓	○	○	○	○	○
9 (N231)	SD202 98年調査区	鉄滓	○	○	○	○	○
10 (N232)	SK401 2000-5区	鉄滓	○	○	○	○	○
11 (R-2)	SD417 2000-8区	坩堝	○	○	○	EDX	
12 (R-6)	SD202 98年調査区	坩堝	○	○	○	EDX	
13 (R-8)	SD202 98年調査区	坩堝	○	○	○	EDX	
14 (N12)	SK322 99-4区	鉄砲玉	○	○	○	EDX	
15 (N116)	SD-402 2000-1区	円盤型金属製品	○	○	○	EDX	

・化学成分分析結果

表2　鉄滓等の化学成分分析結果（%）

資料No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	Na_2O	K2O	比率(%)	
											FeO	Fe_2O_3
1	67.6	0.22	60.2	29.4	6.69	1.24	0.34	0.16	0.16	0.38	67.2	32.81
2	67.9	0.44	60.0	29.8	6.87	0.48	0.34	0.18	0.11	0.60	66.8	33.18
3	65.2	0.94	48.8	37.6	7.60	0.96	0.62	0.32	0.16	0.50	56.5	43.52
4	65.0	0.39	61.1	24.5	8.73	1.15	0.56	0.33	0.19	0.64	71.4	28.62
5	67.8	0.33	51.7	39.0	5.67	0.63	0.32	0.20	0.13	0.41	57.0	43.00
6	65.3	0.39	63.5	22.2	9.92	0.72	0.48	0.23	0.15	0.87	74.1	25.90
7	64.0	0.39	57.0	27.6	10.9	1.04	0.43	0.26	0.19	0.54	67.4	32.62
8	55.9	0.39	49.5	24.4	18.3	2.75	0.65	0.35	0.37	0.93	67.0	33.02
9	44.6	4.16	11.9	44.6	20.6	3.86	2.08	0.83	0.26	1.68	21.1	78.94
10	18.0	0.25	15.9	7.71	53.2	12.1	3.59	1.44	1.72	3.18	67.3	32.66

資料No.	TiO_2	MnO	P_2O_5	Co	C.W.	C	V	Cu	TiO_2 / T.Fe	MnO / TiO_2	造滓成分%
1	0.10	0.05	0.159	0.030	0.18	0.07	0.002	0.008	0.0015	0.5000	9.0
2	0.07	0.05	0.282	0.024	0.18	0.06	0.007	0.008	0.0010	0.7143	8.6
3	0.36	0.08	0.385	0.025	0.51	0.11	0.008	0.006	0.0055	0.2222	10.2
4	0.62	0.08	0.317	0.020	0.24	0.06	0.013	0.005	0.0095	0.1290	11.6
5	0.19	0.05	0.285	0.028	0.34	0.08	0.005	0.007	0.0028	0.2632	7.4
6	0.09	0.06	0.416	0.019	0.31	0.12	0.006	0.005	0.0014	0.6667	12.4
7	0.22	0.06	0.310	0.010	0.43	0.14	0.004	0.004	0.0034	0.2727	13.4
8	0.26	0.12	0.338	0.010	0.88	0.23	0.004	0.005	0.0047	0.4615	23.4
9	0.17	0.13	0.949	0.013	5.49	0.53	0.003	0.017	0.0038	0.7647	29.3
10	0.69	0.14	0.301	0.003	0.21	0.03	0.006	0.004	0.0383	0.2029	75.2

C.W.=化合水、造滓成分= SiO_2+ Al_2O_3+ CaO+ MgO+ Na_2O+ K_2O

・鉄滓分類

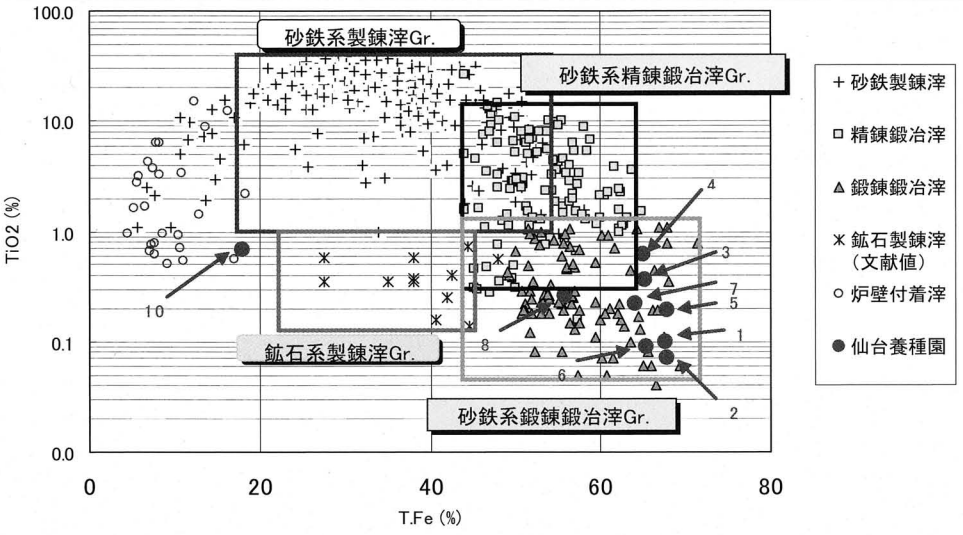


図1　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図

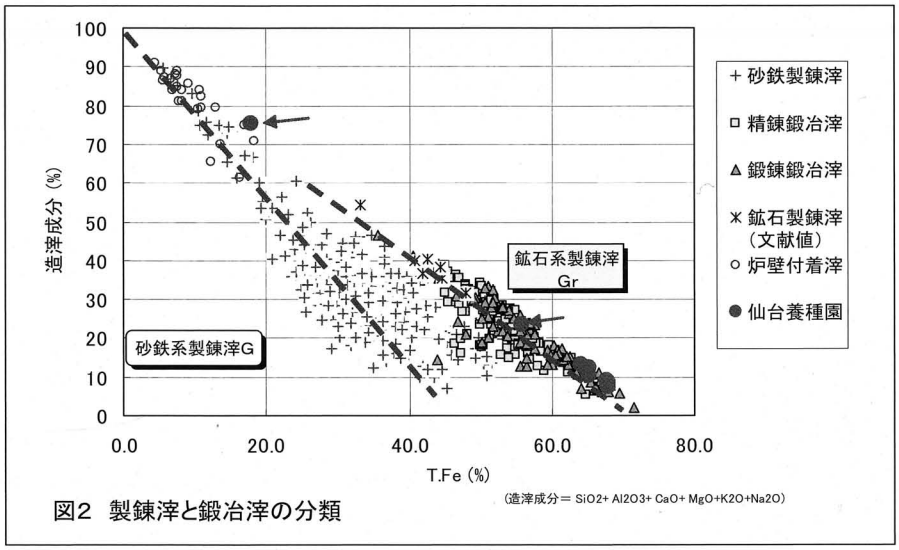


図2　製錬滓と鍛冶滓の分類

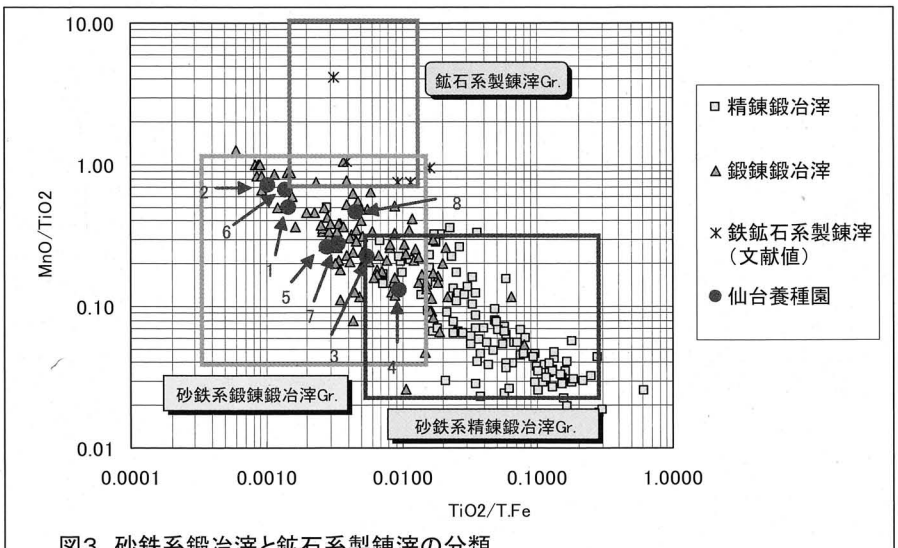
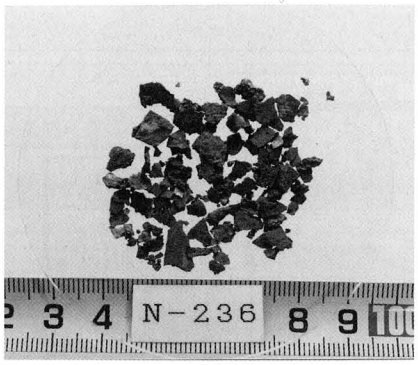
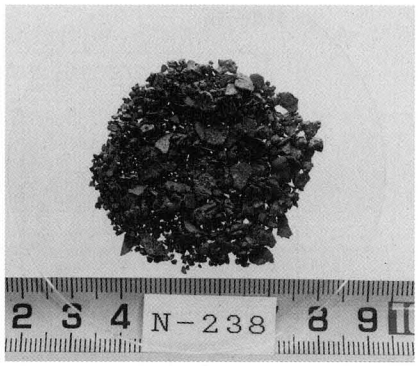


図3　砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類

資料 No.1



資料 No.2



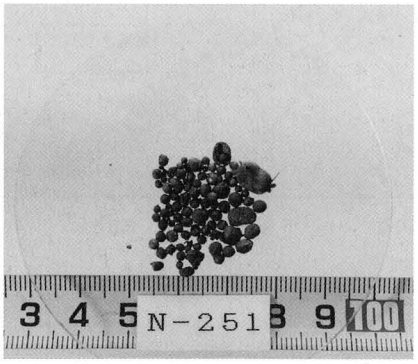
資料 No.3

資料 No.4

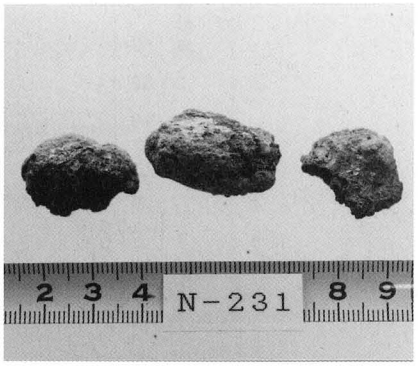
資料 No.5

資料 No.6

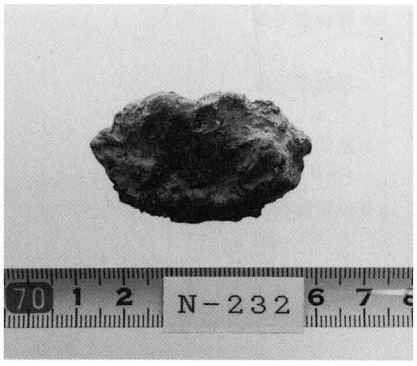
資料 No.7



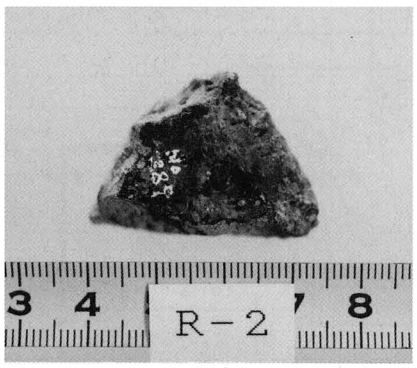
資料 No.8



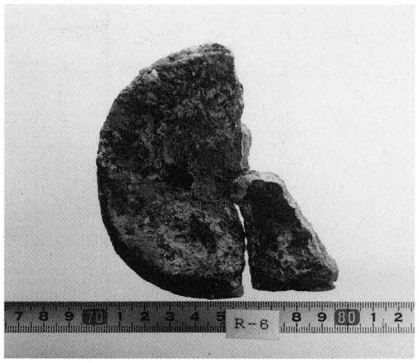
資料 No.9



資料 No.10



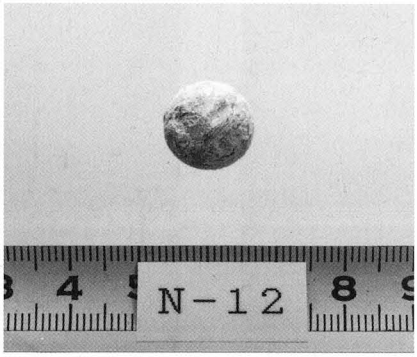
資料 No.11



資料 No.12

外観写真 1

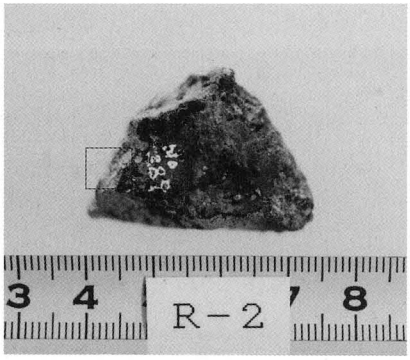
資料 No.13



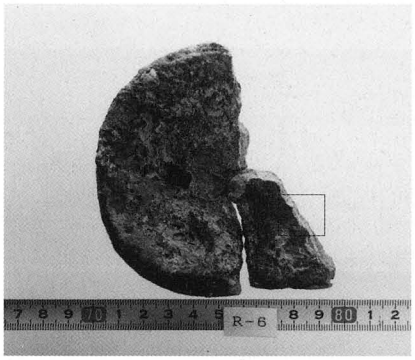
資料 No.14

資料 No.15

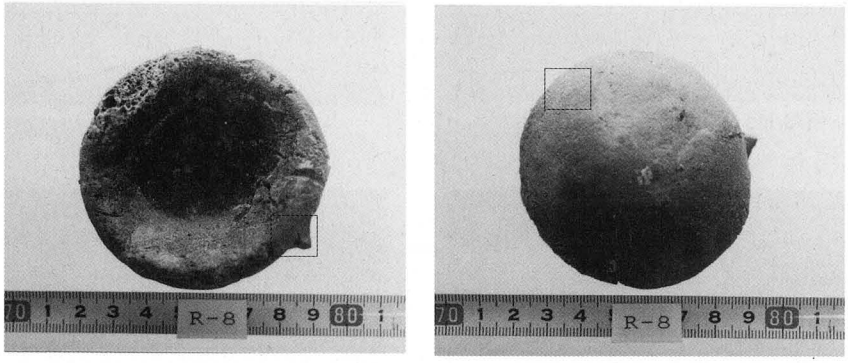
外観写真２



資料 No.11

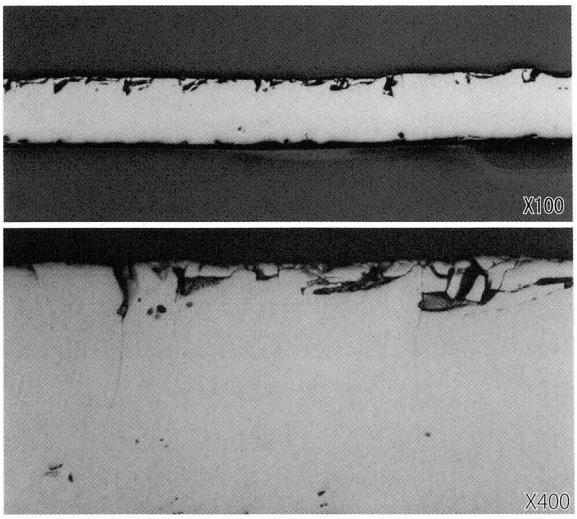


資料 No.12

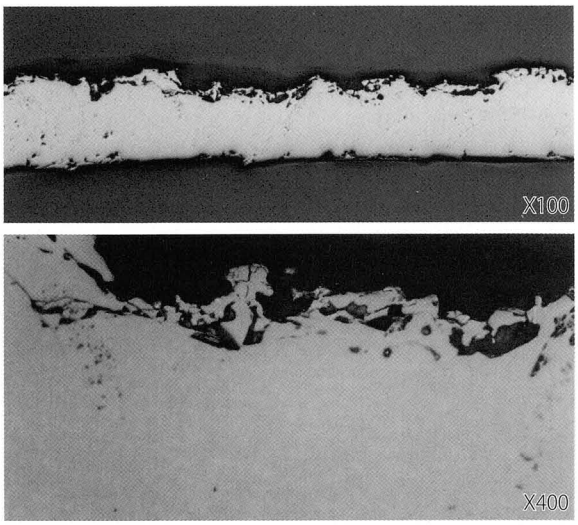


資料 No.13

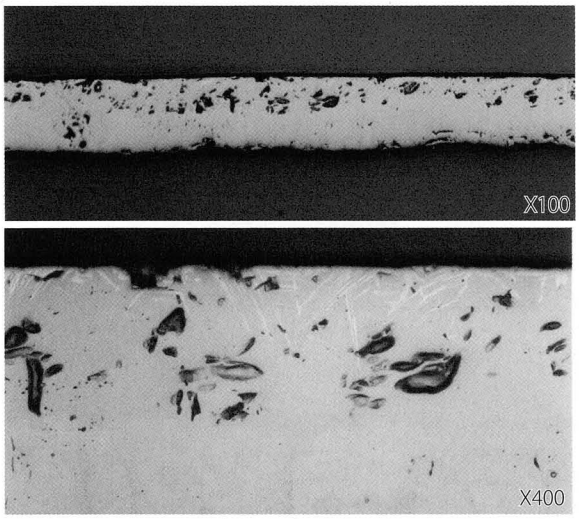
蛍光Ｘ線分析位置



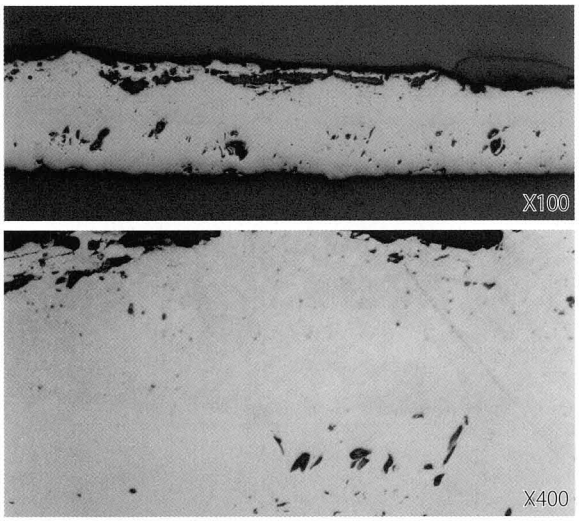
資料 No.1-1(N230)



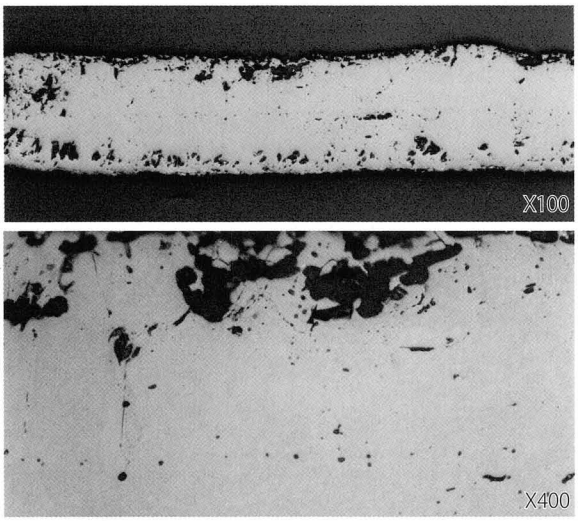
資料 No.1-2(N230)



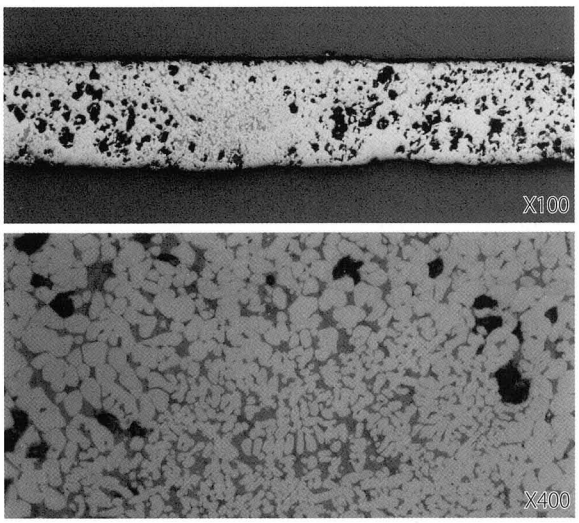
資料 No.1-3(N230)



資料 No.2-1(N236)

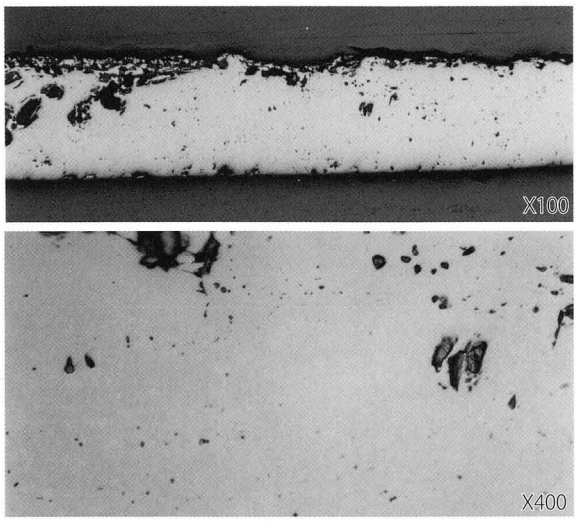


資料 No.2-2(N236)

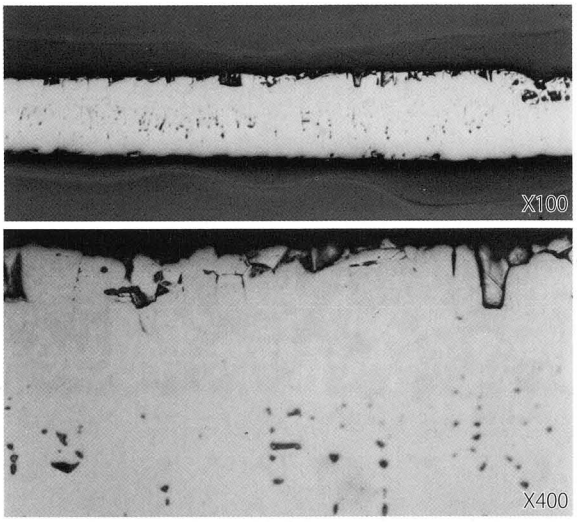


資料 No.2-3(N236)

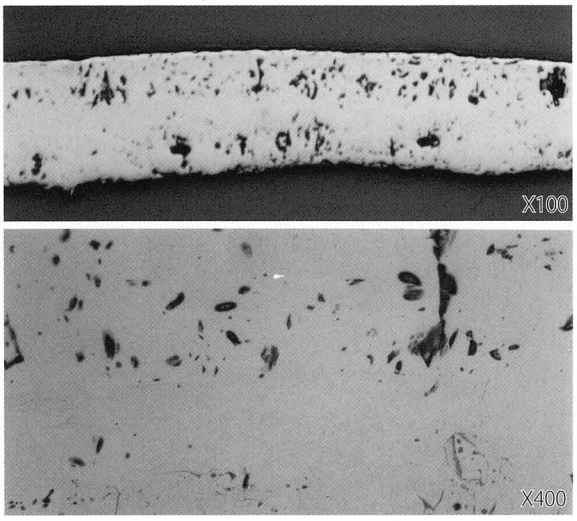
顕微鏡組織 1



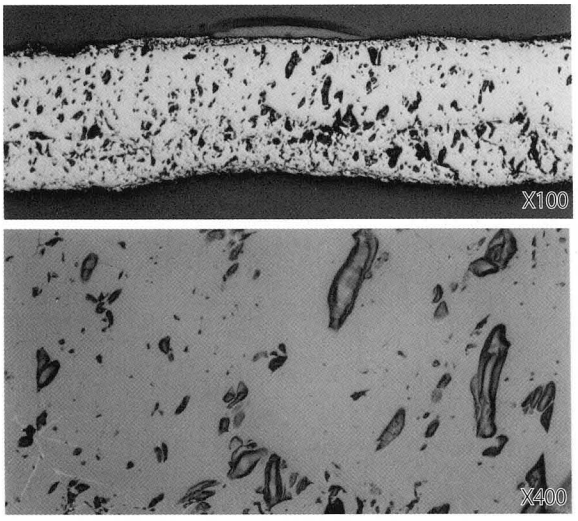
資料 No.3-1(N238)



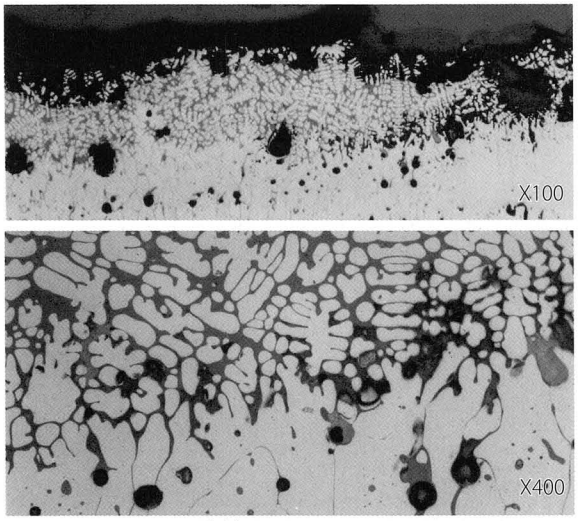
資料 No.3-2(N238)



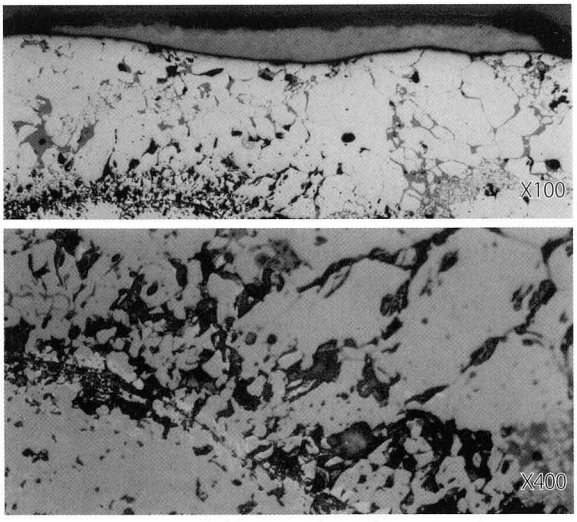
資料 No.3-3(N238)



資料 No.4-1(N250)

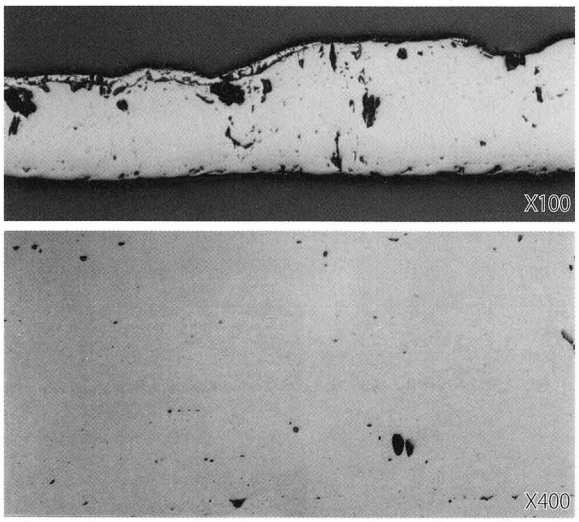


資料 No.4-2(N250)

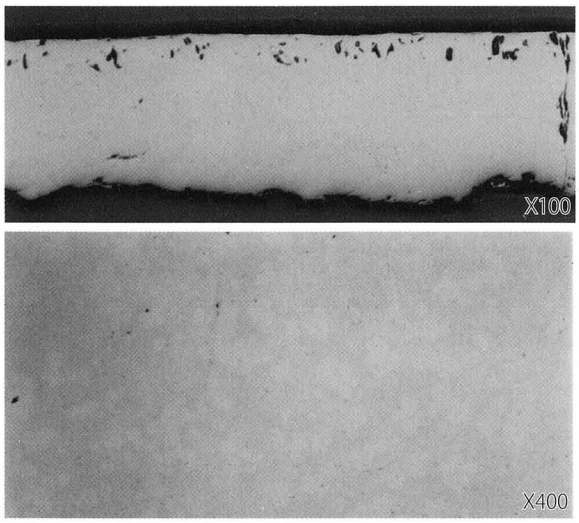


資料 No.4-3(N250)

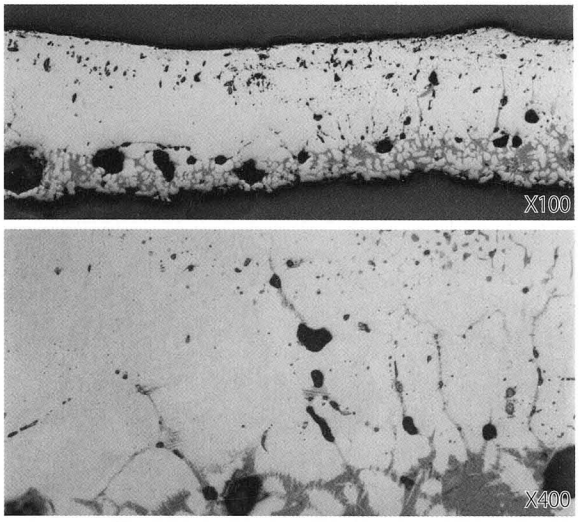
顕微鏡組織 2



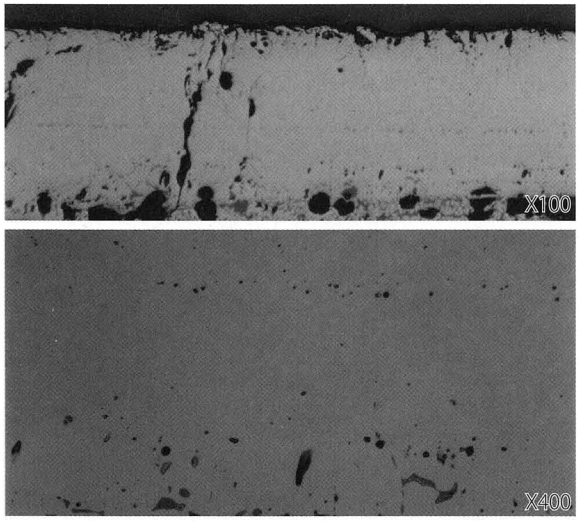
資料 No.5-1(N251)



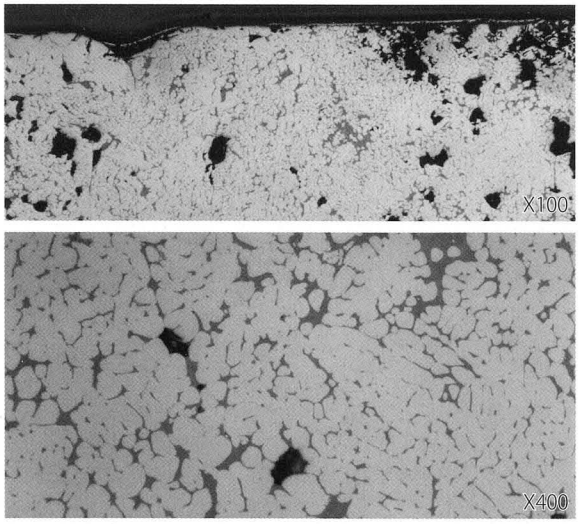
資料 No.5-2(N251)



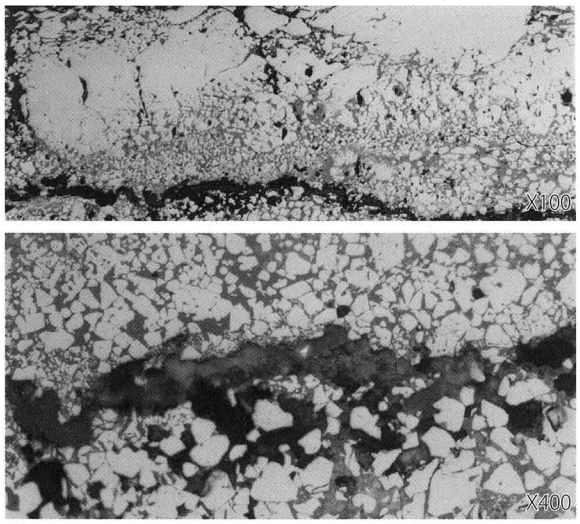
資料 No.5-3(N251)



資料 No.6-1(N253)

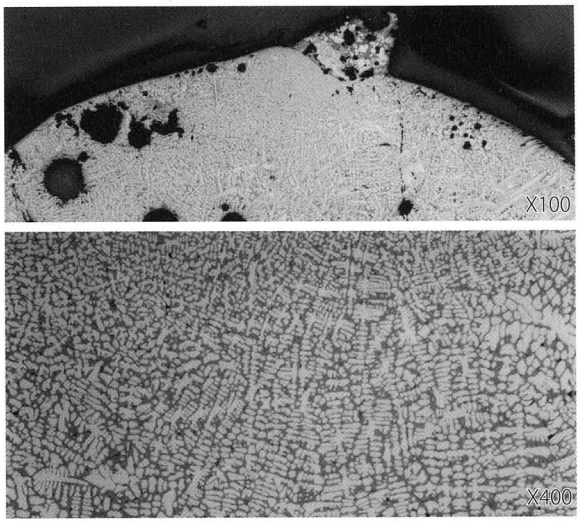


資料 No.6-2(N253)

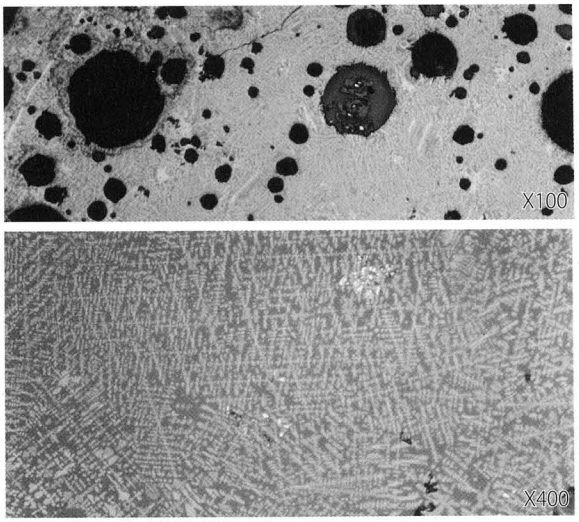


資料 No.6-3(N253)

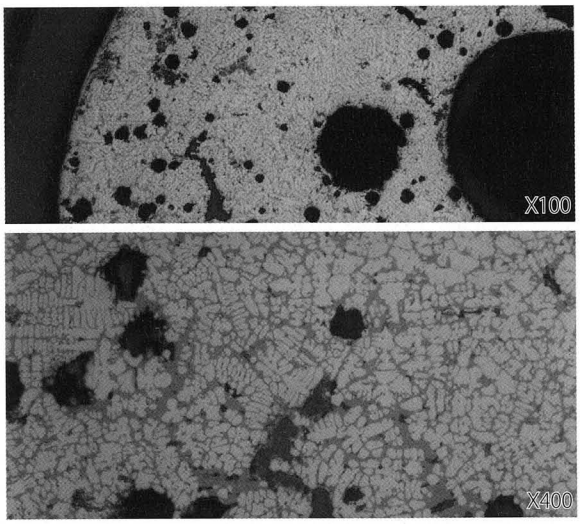
顕微鏡組織 3



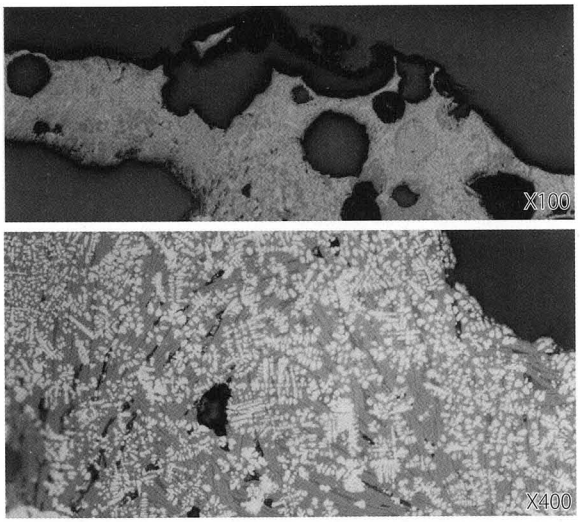
資料 No.7-1(N251)



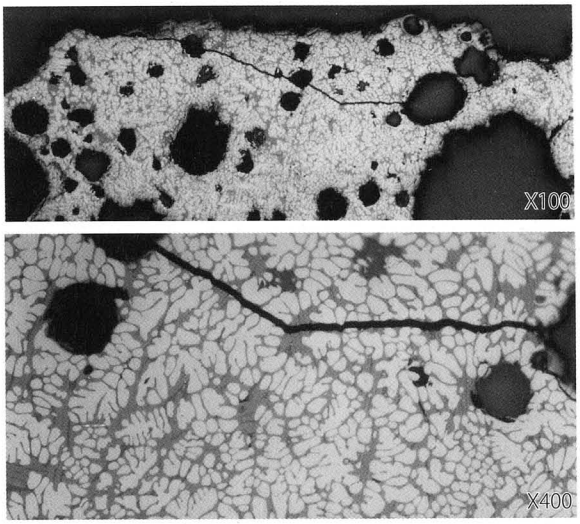
資料 No.7-2(N251)



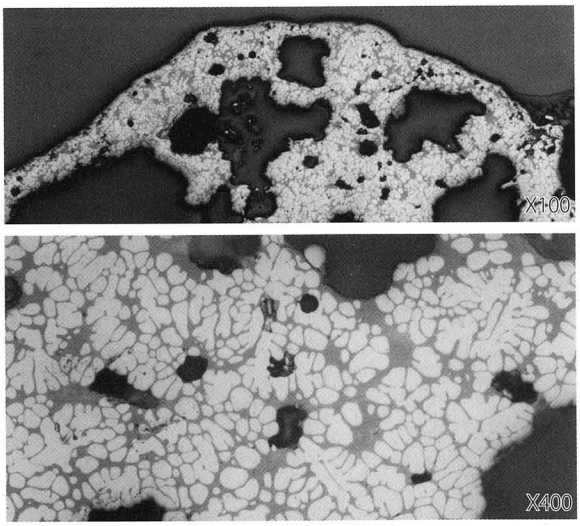
資料 No.7-3(N251)



資料 No.8-1(N253)

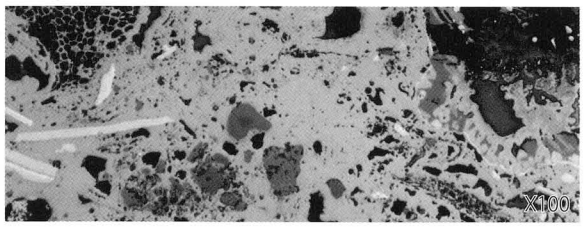


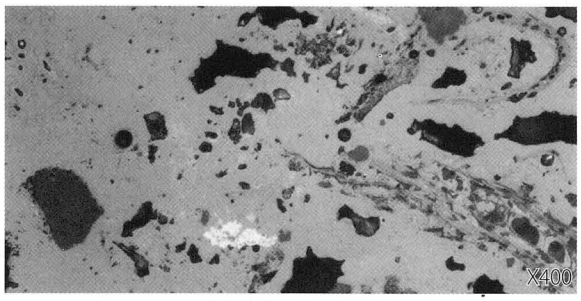
資料 No.8-2(N253)



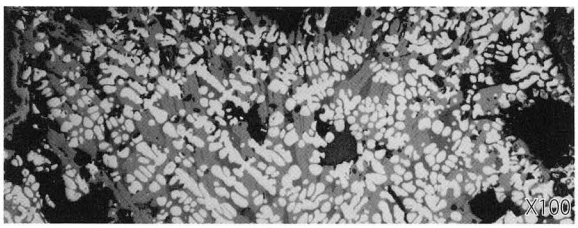
資料 No.8-3(N253)

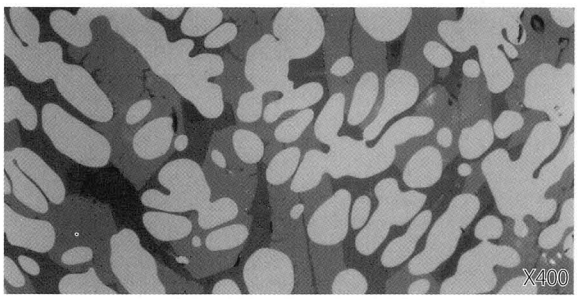
顯微鏡組織 4



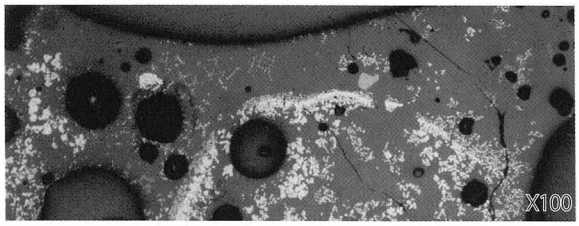


資料 No.9-1(N231)

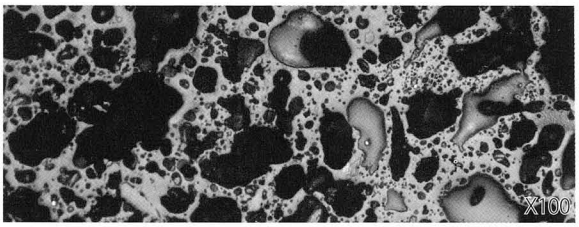


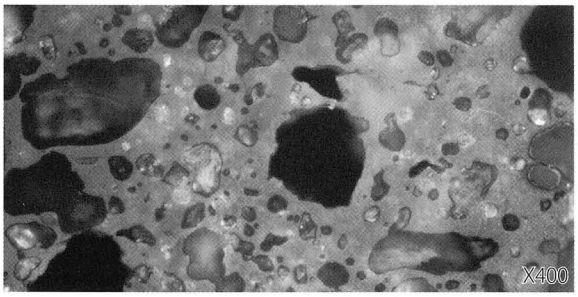


資料 No.9-2(N231)



資料 No.10-1(N232)

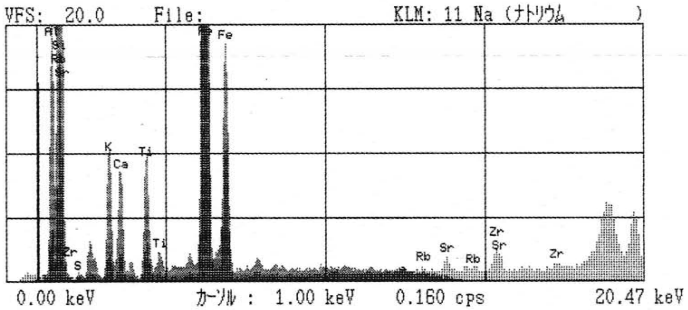




資料 No.10-2(N232)

顕微鏡組織 5

コメント：坩堝 R-6



測定条件

	# 1	# 2
日付	'05/06/20	'05/06/20
時刻	16:26:56	16:26:56
電圧	15 kV	50 kV
電流	260 μA	24 μA
時間	50 秒	50 秒
DT%	25 %	24 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

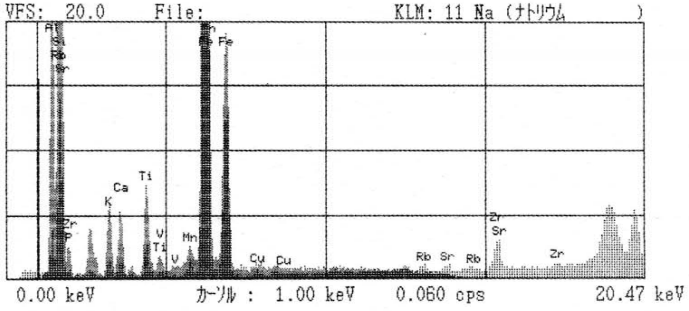
記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
13 Al	アルミニウム	○			
14 Si	けい素	○			
16 S	硫黄	○			
19 K	カリウム	?			
20 Ca	カルシウム	○			
22 Ti	チタン	○			
26 Fe	鉄	○			
37 Rb	ルビジウム	?			
38 Sr	ストロンチウム	○			
40 Zr	ジルコニウム	○			

HORIBA MESA-500 定量結果 '05/06/20 16:31:44

コメント：坩堝 R-6

成分	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/μA)
Al2O3	17.159	0.205	0.955
SiO2	70.764	0.210	5.566
SO3	0.096	0.031	0.017
K2O	1.489	0.040	0.588
CaO	1.062	0.040	0.466
TiO2	1.221	0.061	2.116
Fe2O3	8.134	0.075	49.906
Rb2O	0.009	0.003	0.351
SrO	0.024	0.004	0.927
ZrO2	0.042	0.004	1.737

コメント：坩堝 R-2



測定条件

	# 1	# 2
日付	'05/06/20	'05/06/20
時刻	16:19:17	16:19:17
電圧	15 kV	50 kV
電流	180 μA	18 μA
時間	50 秒	50 秒
DT%	23 %	24 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

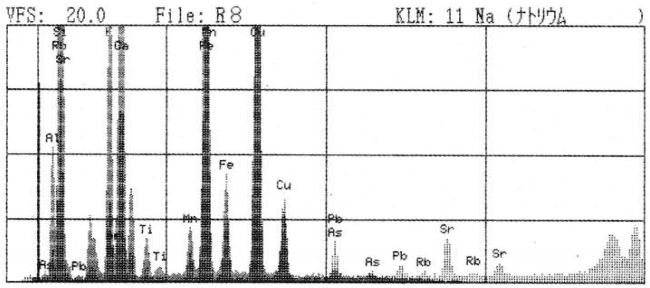
記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
13 Al	アルミニウム	○	37 Rb	ルビジウム	?
14 Si	けい素	○	38 Sr	ストロンチウム	○
15 P	りん	○	40 Zr	ジルコニウム	○
19 K	カリウム	?			
20 Ca	カルシウム	○			
22 Ti	チタン	○			
23 V	バナジウム	?			
25 Mn	マンガン	○			
26 Fe	鉄	○			
29 Cu	銅	?			

HORIBA MESA-500 定量結果 '05/06/20 16:24:29

コメント：坩堝 R-2

成分	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/μA)
Al2O3	22.818	0.228	1.466
SiO2	61.247	0.239	5.389
P2O5	1.844	0.094	0.203
K2O	0.905	0.036	0.430
CaO	0.682	0.035	0.365
TiO2	1.018	0.064	2.174
V2O5	0.000	0.011	0.001
Mn2O3	0.124	0.019	0.714
Fe2O3	11.254	0.096	81.365
CuO	0.015	0.007	0.185
Rb2O	0.012	0.004	0.485
SrO	0.014	0.004	0.558
ZrO2	0.067	0.005	2.945

コメント：坩堝Ｒ８



測定条件

	＃１	＃２
日付	'05/05/13	'05/05/13
時刻	16:36:34	16:36:34
電圧	15 kV	50 kV
電流	160 μA	18 μA
時間	50 秒	50 秒
DT%	22 %	25 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

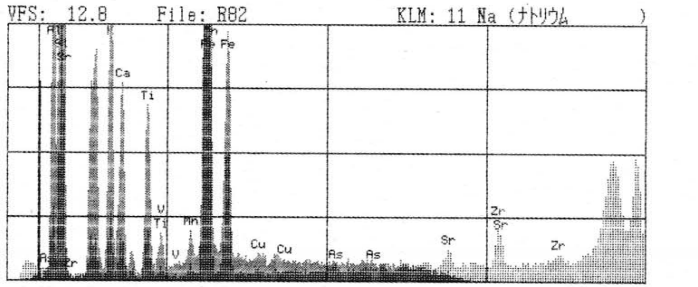
記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
13 Al	アルミニウム	○	38 Sr	ストロンチウム	○
14 Si	けい素	○	50 Sn	すず	?
19 K	カリウム	○	82 Pb	鉛	?
20 Ca	カルシウム	○			
22 Ti	チタン	?			
25 Mn	マンガン	○			
26 Fe	鉄	○			
29 Cu	銅	○			
33 As	ひ素	○			
37 Rb	ルビジウム	?			

HORIBA MESA-500 定量結果 '05/05/13 16:43:00

コメント：坩堝Ｒ８ 赤い付着物

成分	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/μA)
SiO2	63.294	0.233	6.193
Al2O3	12.249	0.215	0.796
CaO	9.725	0.119	4.603
K2O	4.806	0.081	2.261
Fe2O3	4.805	0.068	29.936
CuO	3.622	0.045	43.069
TiO2	0.582	0.067	0.962
Mn2O3	0.414	0.027	2.007
PbO	0.167	0.044	1.355
SrO	0.118	0.007	4.089
SnO2	0.102	0.019	1.114
As2O3	0.099	0.029	1.806
Rb2O	0.017	0.005	0.564

コメント：下地



測定条件

	＃１	＃２
日付	'05/05/17	'05/05/17
時刻	15:58:44	15:58:44
電圧	15 kV	50 kV
電流	200 μA	18 μA
時間	50 秒	50 秒
DT%	22 %	23 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

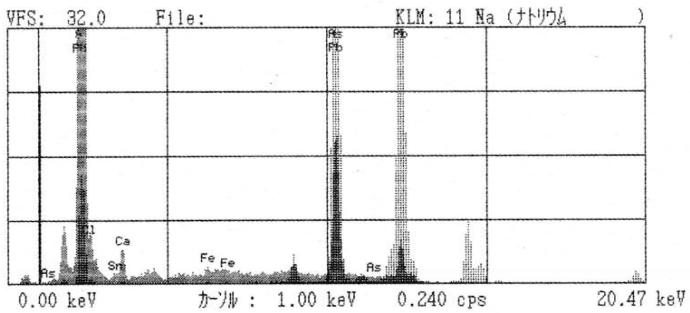
記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
13 Al	アルミニウム	○	38 Sr	ストロンチウム	○
14 Si	けい素	○	40 Zr	ジルコニウム	○
19 K	カリウム	?			
20 Ca	カルシウム	○			
22 Ti	チタン	○			
23 V	バナジウム	?			
25 Mn	マンガン	○			
26 Fe	鉄	○			
29 Cu	銅	?			
33 As	ひ素	?			

HORIBA MESA-500 定量結果 '05/05/17 16:05:40

コメント：下地R8

成分	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/μA)
SiO2	70.568	0.221	6.396
Al2O3	18.789	0.213	1.231
Fe2O3	5.530	0.067	39.287
K2O	2.628	0.054	1.182
CaO	1.175	0.046	0.576
TiO2	1.082	0.071	2.084
Mn2O3	0.078	0.017	0.430
V2O5	0.046	0.025	0.122
ZrO2	0.041	0.004	2.128
CuO	0.024	0.007	0.341
SrO	0.023	0.004	1.093
As2O3	0.013	0.010	0.329

コメント：金属製品 N-16



測定条件

	# 1	# 2
日付	'05/06/20	'05/06/20
時刻	16:47:17	16:47:17
電圧	15 kV	50 kV
電流	160 μA	6 μA
時間	50 秒	50 秒
DT%	22 %	21 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

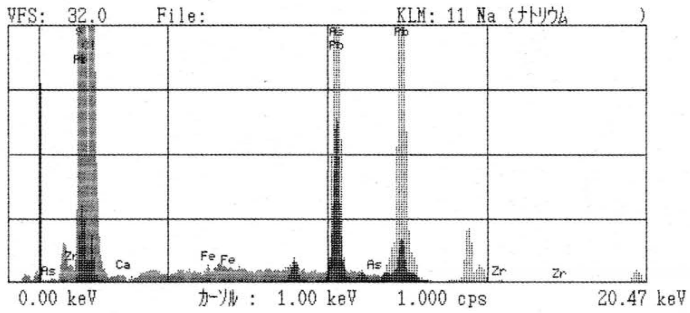
記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
16 S	硫黄	?			
17 Cl	塩素	?			
20 Ca	カルシウム	○			
26 Fe	鉄	?			
33 As	ひ素	?			
50 Sn	すず	?			
82 Pb	鉛	○			

HORIBA MESA-500 定量結果 '05/06/20 16:54:00

コメント：金属製品 N-16

成分	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/μA)
16 S 硫黄	0.00	0.05	0.000
17 Cl 塩素	0.06	0.06	0.021
20 Ca カルシウム	0.89	0.09	0.268
26 Fe 鉄	0.17	0.05	0.670
33 As ひ素	0.06	0.14	0.514
50 Sn すず	1.04	0.14	1.551
82 Pb 鉛	97.79	0.23	247.010

コメント：鉄砲玉 N-12



測定条件

	# 1	# 2
日付	'05/06/20	'05/06/20
時刻	16:35:44	16:35:44
電圧	15 kV	50 kV
電流	260 μA	9 μA
時間	50 秒	50 秒
DT%	25 %	23 %
試料セル	あり	あり
試料室	真空	真空

定性結果

記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
16 S	硫黄	?			
17 Cl	塩素	?			
20 Ca	カルシウム	?			
26 Fe	鉄	?			
33 As	ひ素	?			
40 Zr	ジルコニウム	?			
82 Pb	鉛	○			

HORIBA MESA-500 定量結果 '05/06/20 16:45:09

コメント：鉄砲玉 N-12

成分	濃度(wt%)	標準偏差	強度(cps/μA)
16 S 硫黄	0.00	0.05	0.000
17 Cl 塩素	0.00	0.05	0.000
20 Ca カルシウム	0.22	0.04	0.040
26 Fe 鉄	0.14	0.05	0.337
33 As ひ素	0.00	0.10	0.000
40 Zr ジルコニウム	0.16	0.04	0.600
82 Pb 鉛	99.48	0.14	158.061

養種園遺跡・保春院前遺跡より出土した木製品の樹種

吉川純子　(古代の森研究舎)

1．はじめに

養種園遺跡および保春院前遺跡から出土した木製品の樹種の調査を行った。養種園遺跡の溝跡は江戸時代の伊達家の御仮屋の堀跡と考えられ、保春院前遺跡の溝跡は江戸時代の七郷堀と考えられている。堀内堆積物より出土した木製品８試料の調査を行った。

木製品からはステンレスの剃刀にて横断面、放射断面、接線断面の薄片を切り出し、ガムクロラールを用いてプレパラートを作成した。生物顕微鏡で細胞の配列や構造等を観察し、樹種を同定した。

2．樹種からみた木材利用

同定結果を表１に示す。木製品8試料から６種の樹種が同定された。このうち椀３点はブナ、浅鉢はトチノキ、折敷はモミ属、板はスギ、箸にはヒノキ属を用いていた。また、土木材である杭にはコナラ節が利用されていた。

表1　養種園・保春院前遺跡より出土した木製品の樹種

試料番号	遺跡・地点	時　代	遺物の種類	状　況	分類群
L22	養種園　SD204	江戸前～中期	椀	朱草文破片	ブナ
L23	養種園　SD204	江戸前～中期	椀	底部朱文	ブナ
L24	養種園　SD204	江戸前～中期	椀	幾何模様	ブナ
L25	養種園　SD204	江戸前～中期	浅鉢	朱塗り三つ引き	トチノキ
L26	養種園　SD204	江戸前～中期	折敷		モミ属
L15	保春院前　SD303	江戸前～中期	杭	丸木皮無	コナラ節
L29	保春院前　SD501	江戸前～中期	薄板	板目	スギ
L34	保春院前　SD501	江戸前～中期	箸	丸木皮無	ヒノキ属

仙台城三の丸遺跡の17世紀より出土した木製品には漆器にブナ、トチノキが用いられている（山田、1993)。本遺跡においても同様の樹種が利用されており、江戸時代の仙台地域では鉢や椀の用材としてこれらの広葉樹が選択的に用いられているとみられる。また、本遺跡で出土した箸はヒノキ属であるためヒノキかサワラであるが、仙台城三の丸遺跡では箸13点すべてヒノキアスナロ（アスナロ属）が用いられている。ヒノキ科は殺菌効果があり、細く加工しても折れにくいため、これらの樹種を選択していたと考えられる。折敷に用いられているモミ属は、柔らかく加工が容易であるが、割れやすく保存性も低いため、通常長期に使用する目的では用いられない。宮城県では古代以降山地から平野にかけてモミ属が自生していたとみられ（大山ほか2004)、針葉樹材の中でも容易に入手できる樹種としてモミ属が多用される傾向にあり、近世にいたっても引き続きモミ属が利用されていたと考えられる。東北においては建築材や土木材にクリ、コナラ属などが関東以西よりもやや多く用いられる傾向にあり（山田、1993)、本遺跡の杭材にもコナラ節が使われている。

3．出土した樹種の木材解剖学的記載

モミ属（Abies）：早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅が狭い。分野壁孔はスギ型で、放射柔細胞の壁は厚くじゅず状末端壁を有する。以上の特徴からモミ属と同定した。

スギ（Cryptomeria japonica D.Don）：早材から晩材への移行はやや急で晩材の幅がやや広い。年輪界は明瞭で樹脂細胞が晩材部で接線方向に並ぶ傾向がある。分野壁孔は典型的なスギ型である。放射組織は単列でほぼ10細胞高以下である。

ヒノキ属（Chamaecyparis）：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。晩材部には樹脂細胞が接線方向に散在する。腐敗が激しく分野壁孔は確認できなかったが、同じヒノキ科のクロベ属やアスナロ属と比較すると、細胞の輪郭が大きいため、ヒノキ属と同定した。

ブナ（Fagus crenata Blume）：散孔材で導管はほぼ平等に配列するが、晩材部で急に径が小さく、数も少なくなるため年輪界は明瞭である。列数の広い放射組織が横断面でかなり目立ち、この放射組織の周囲では年輪界が樹皮方向にずれる特徴がある。放射組織は単列、２，３列と広放射組織の３種類がある。以上の特徴からブナと同定した。

コナラ属コナラ節（Quercus sect.Prinus）：環孔材で年輪界に沿って大導管が１から３列並び、孔圏外で急に径が小さくなり、薄壁で角ばった小導管が単独あるいは２，３個集まって火炎状に配列するので、クヌギ節ではなくコナラ節と同定できる。横断面で広放射組織が確認できる。本報告の写真には現れていないが、接線断面で確認すると広放射組織と単列放射組織の２種類しかないことがわかる。

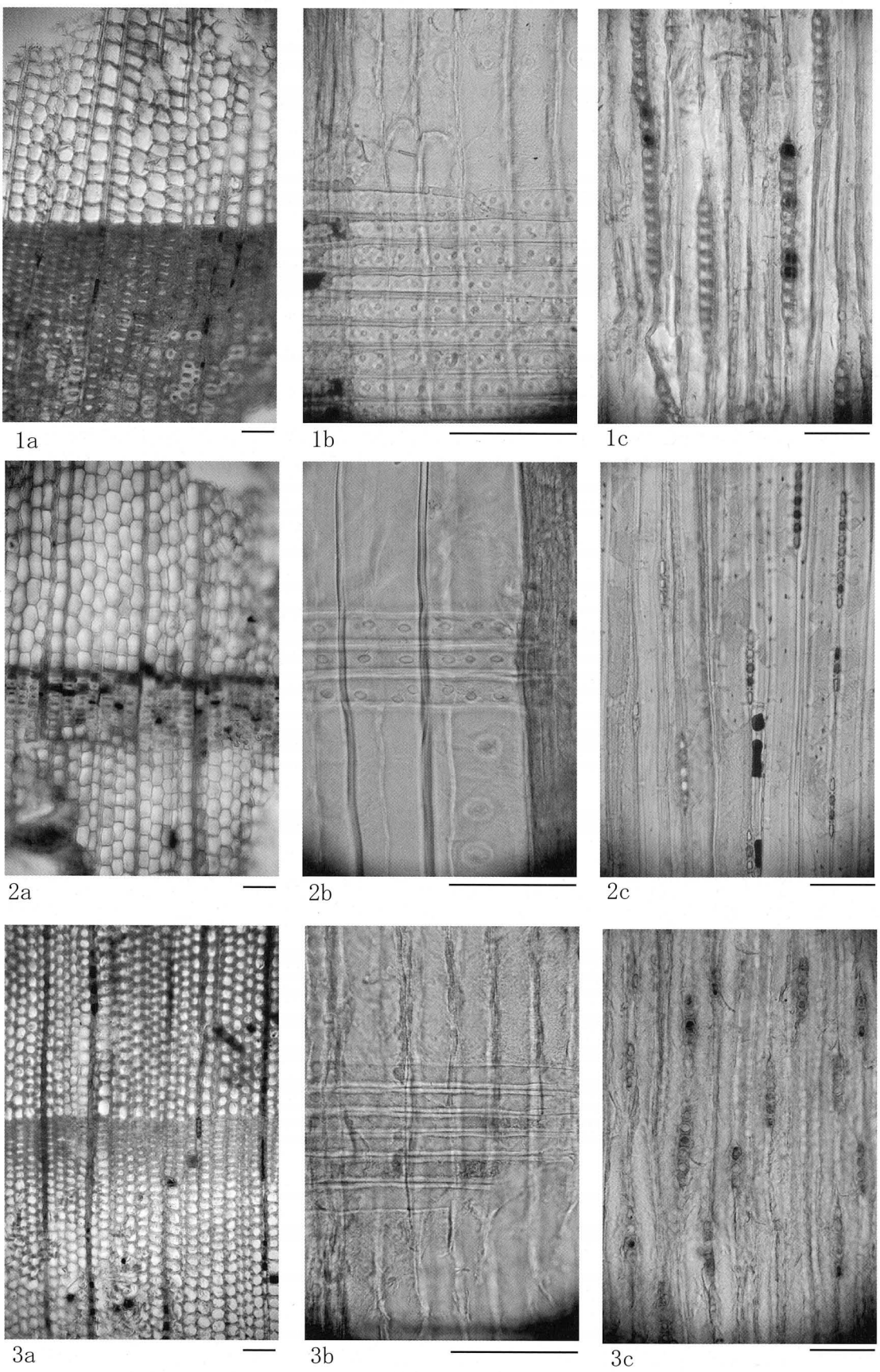
トチノキ（Aesculus turbinata Blume）：単一もしくは放射方向に道管が連結し、年輪界では道管径がやや小さい散孔材である。放射組織は同性単列で６，７細胞高程度、放射組織が層階状構造をなすことが多い。本報告の接線断面写真では方向がずれてやや斜めになっているが、トチノキの特徴である層階状構造が顕著である。穿孔は単一でらせん肥厚があり、道管側壁は交互壁孔である。

（平成17年３月）

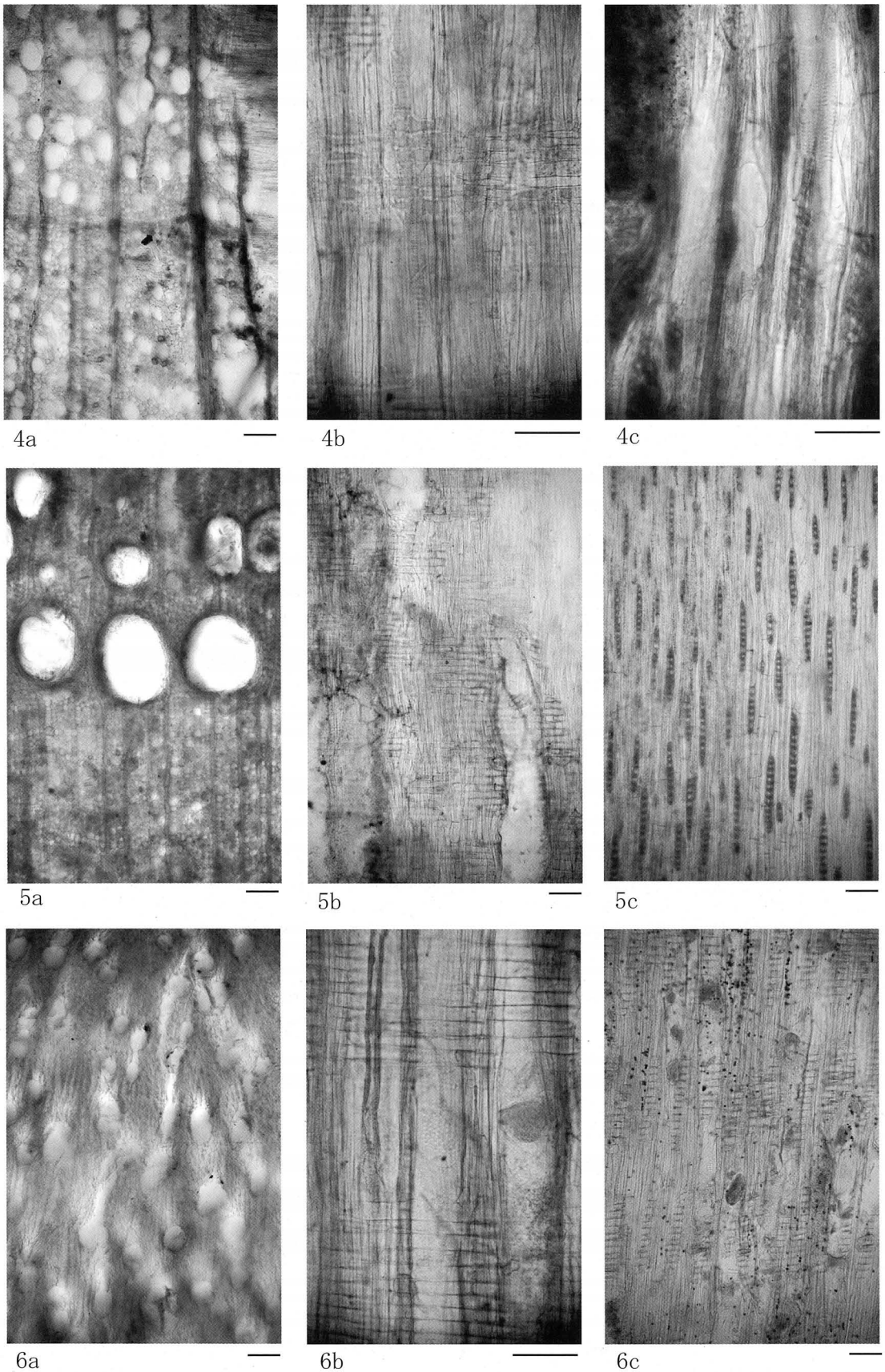
引用文献

大山幹成・小川とみ・鈴木三男.2004.附章１宮城県多賀城市市川橋遺跡出土木製品の樹種.多賀城市文化財調査報告書第75集「市川橋遺跡」－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書」－第三分冊.多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地区画整理組合.1-38p.

山田昌久.1993.日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史.植生史研究,特別第１号,p.1-242.



図版1　養種園保春院前遺跡より出土した木製品の顕微鏡写真1
1:モミ属,2:スギ,3:ヒノキ属 (a:横断面,b:放射断面,c:接線断面)
スケールは0.1mm



図版2　養種園保春院前遺跡より出土した木製品の顕微鏡写真2
4:ブナ,5:コナラ節,6:トチノキ (a:横断面,b:放射断面,c:接線断面)
スケールは0.1mm

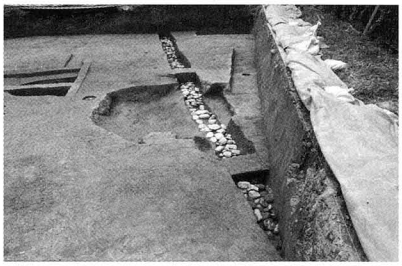
写真図版

写真１　南小泉周辺航空写真

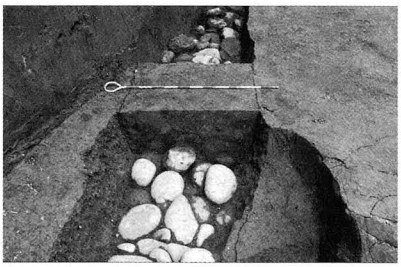
昭和 22 年米軍撮影
4 枚の写真を合成

1　98 年調査区南東側全景　北西→

2　SB201-P425 断面　北→

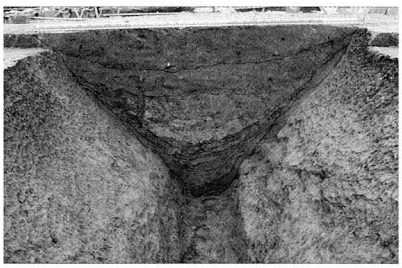


3　SD201 暗渠礫検出　北→

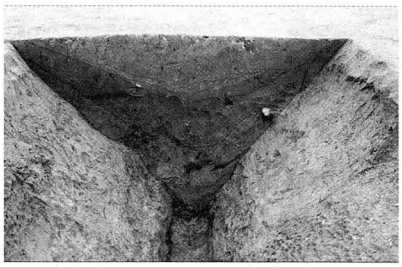


4　SD201 土層断面　南→

5　SD202 全景　東→



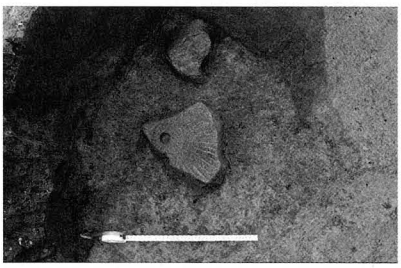
6　SD202 土層断面 1　西→



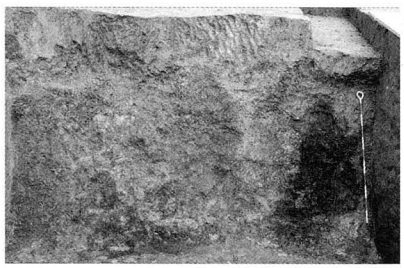
7　SD202 土層断面 2　東→

8　SD202A 全景　北東→

9　SD202 とりべ出土　東→



10　SD202 石臼出土　北西→

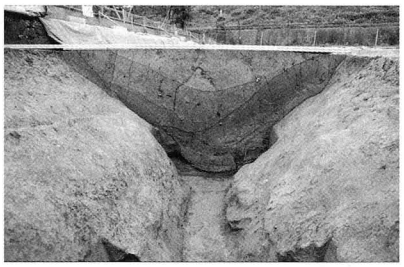


11　SD202 鍛造剥片出土　南→

12　SD203 全景　西→

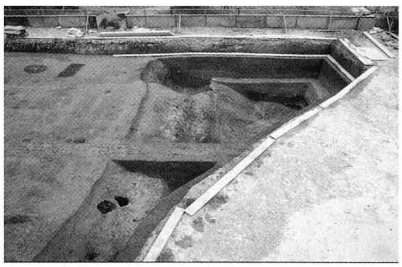
写真 2　中央調査区（98 年調査区）

1　SD203 土層断面　西→



2　SD202・203 重複土層断面　西→

3　SD204 南側全景　南→



4　SD204 北側全景　南→

5　SD204 陶器出土　北東→

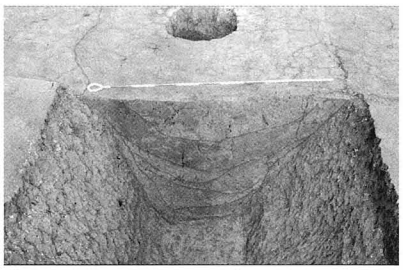
6　SD204 漆器出土　北東→

7　SD204 折敷出土　東→

8　SD204 石臼出土　西→

10　SD207 北側部全景　北→

9　98 年度調査区南側中央部全景　北→



11　SD207 土層断面　南→

12　SD205・206・212 全景　北→

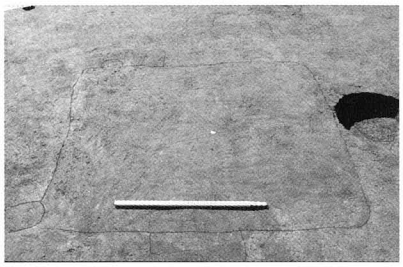
写真 3　中央調査区（98 年調査区）

1　SD217 全景　東→

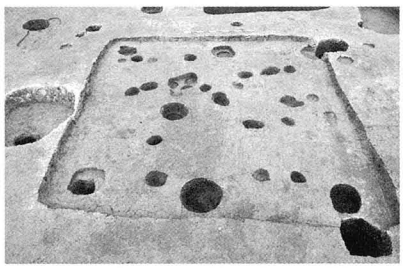
2　SD217 遺物出土　北西→

3　SD218 全景　西→

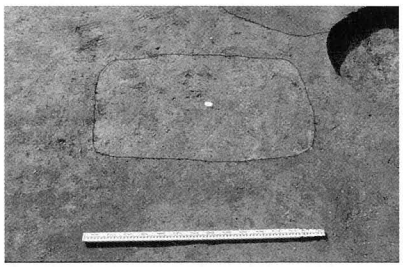
4　98 年調査区南側西全景　北東→



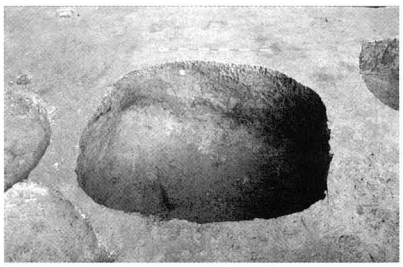
5　SI203 検出　北→



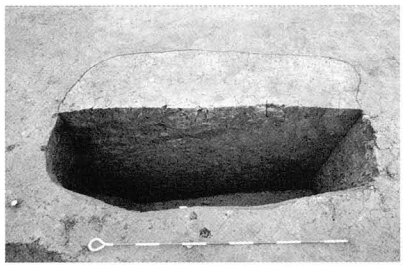
6　SI203 全景　南→



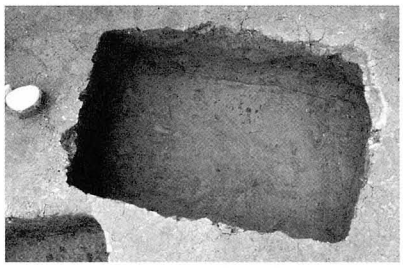
7　SK217 検出　北→



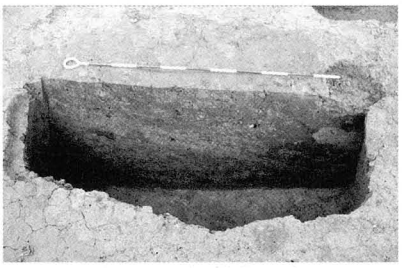
8　SK217 全景　南→



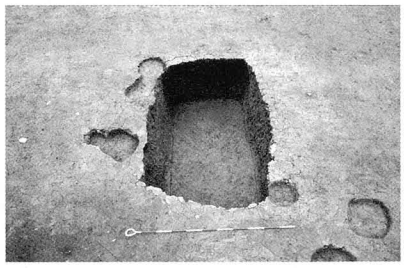
9　SK217 土層断面　南→



10　SK221 全景　北→

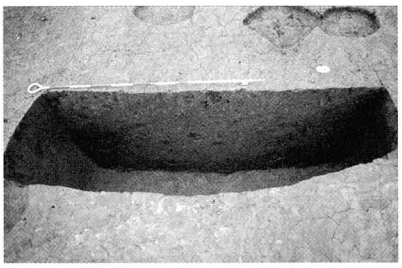


11　SK221 土層断面　南→

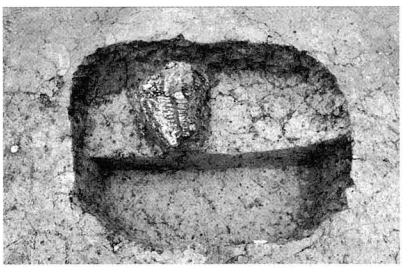


12　SK238 全景　南→

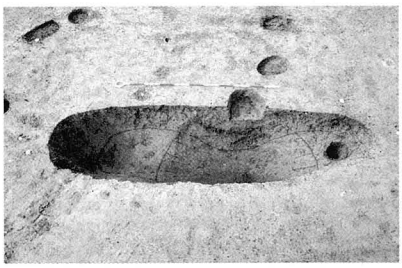
写真４　中央調査区（98 年調査区）



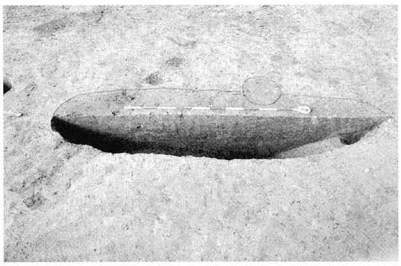
1　SK238 土層断面　東→



2　SK268 馬頭骨出土　西→

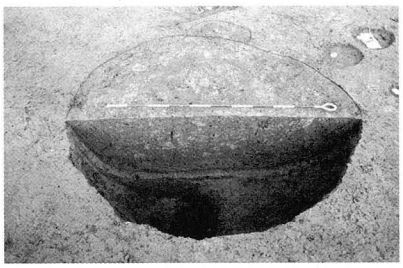


3　SK278 全景　東→

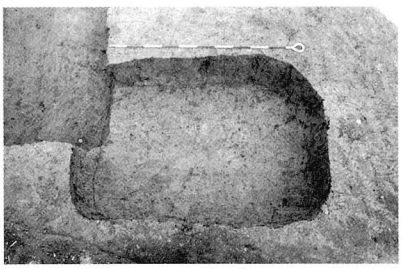


4　SK278 土層断面　東→

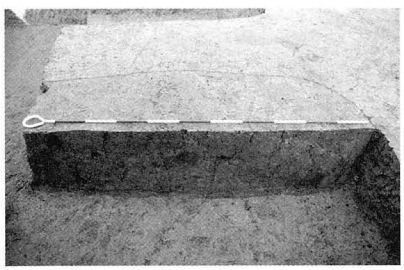
5　SK279 全景　南→



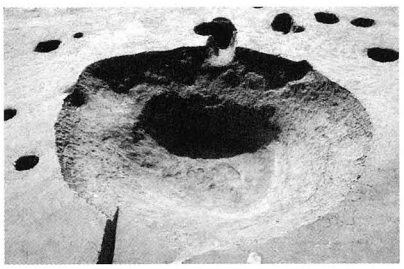
6　SK279 土層断面　南→



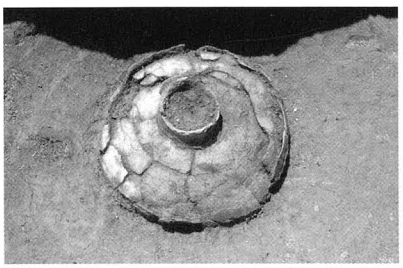
7　SK286 全景　南→



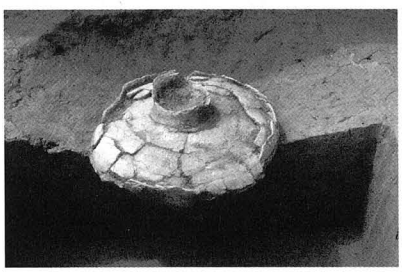
8　SK286 土層断面　南→



9　SK294 全景　北→



10　土器棺墓検出　北→



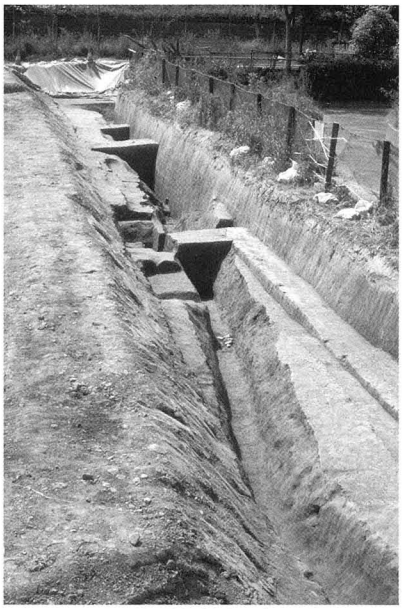
11　土器棺墓埋設断面　北→

12　98 年調査区北側全景　東→

写真 5　中央調査区（98 年調査区）

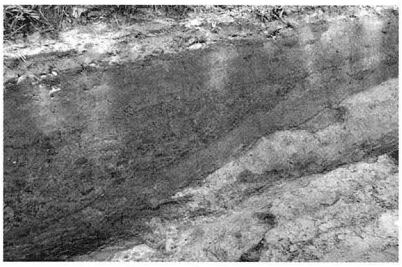
1　2000-2 区西側遺構検出　南西→

2　SD401 上部土層断面　西→



5　SD403 全景　東→

3　2000-2 区西側溝跡壁断面　西→



4　2000-2 区北壁断面　南→

6　SD403 土層断面　東→

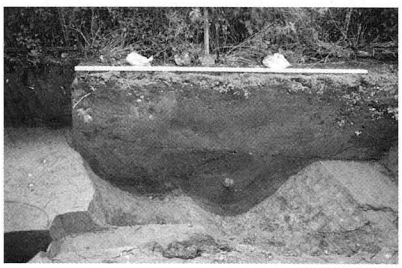
7　SK403 全景　南→

8　2000-3 区全景　西→

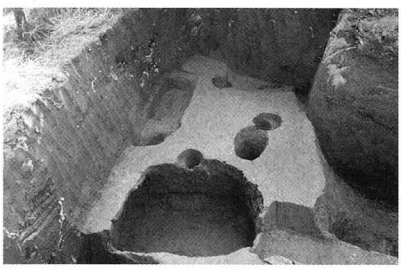
9　2000-3 区 2 トレ全景　南西→

10　2000-3 区 1 トレ壁断面　西→

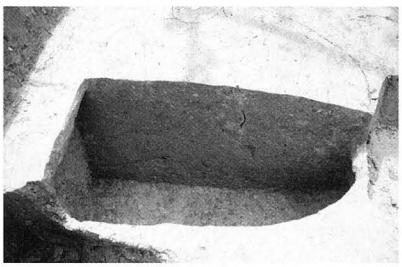
11　2000-4 区全景　東→



12　2000-4 区壁断面　東→



13　2000-4 区南側遺構全景　東→

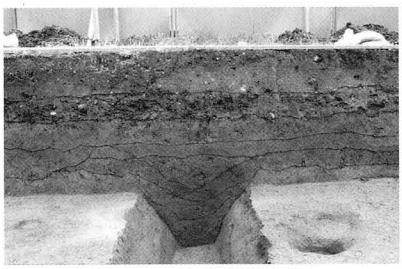


14　SK406 土層断面　東→

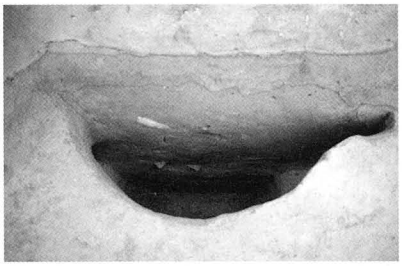
写真 6　中央調査区（2000-2 区・2000-3 区・2000-4 区）

1　99-1 区南側全景　北東→

2　99-1 区北側全景　南→



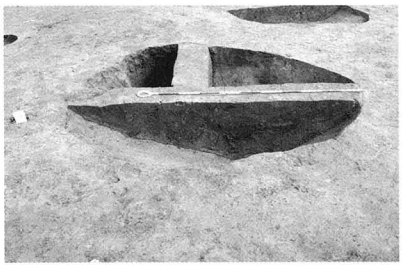
3　99-1 区南壁断面　北→



4　SK301 全景　東→

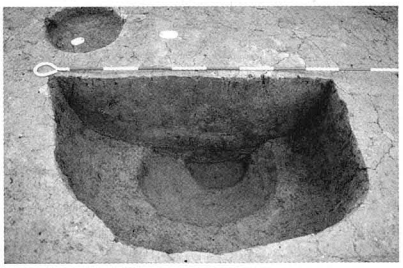
5　SK302 全景　南→

6　SK302 土層断面　南西→

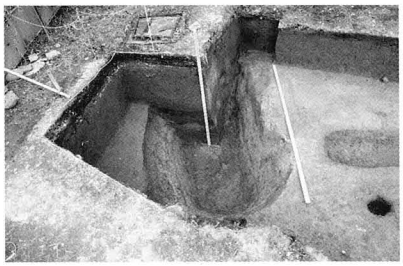


7　SK303 土層断面　南→

8　SK309 土層断面　北→

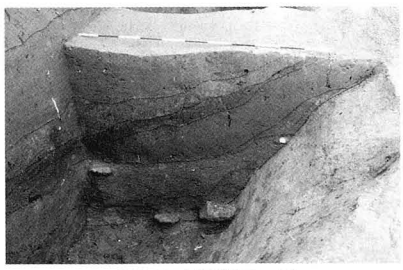


9　SK313 土層断面　東→



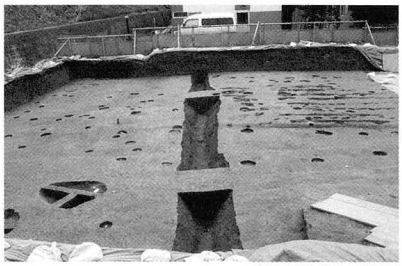
10　SK320 全景　西→

11　SK320 鉱滓出土　北→

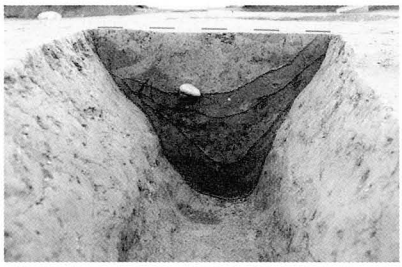


12　SK320 土層断面　西→

写真 7　西側東調査区（99-1 区）

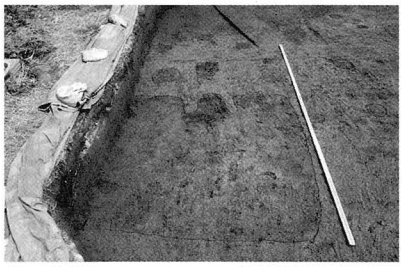


1　SD301 全景　北→



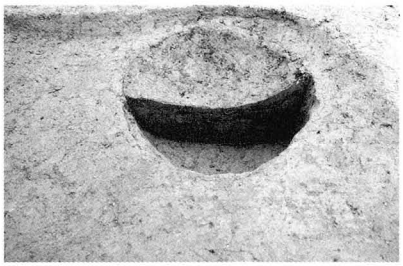
2　SD301 土層断面　北→

3　SD310 土層断面　東→



4　SI301 検出　南→

5　SI301 全景　南→

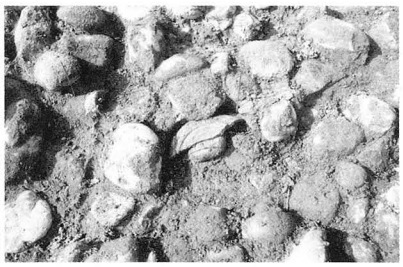


6　SI301-P6 土層断面　南→

7　2000-1 区 SD402 全景　南西→

8　SD402 礫検出　北東→

9　SD402 石臼出土　西→



10　SD402 陶器出土　南→

11　SD404 全景　南→

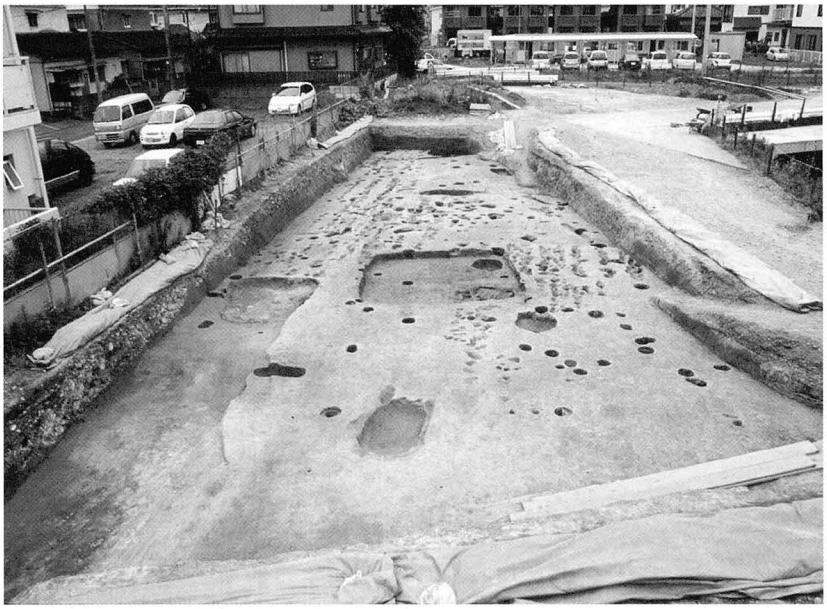
12　99-2 区全景　北東→

写真 8　西側東調査区（99-1 区・2000-1 区・98-2 区）

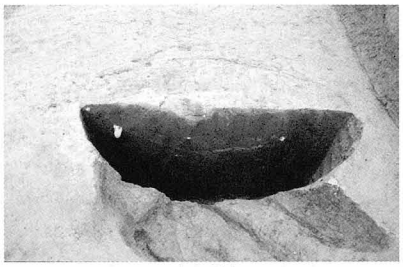
1　2002-2 区東側全景　西→

3　SK504 全景　南→

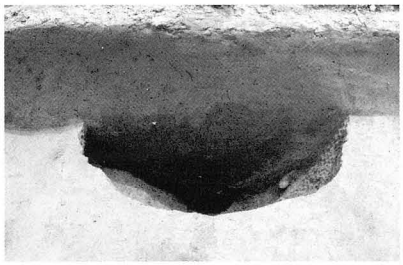
4　SK505 全景　南→



2　2002-2 区西側全景　東→

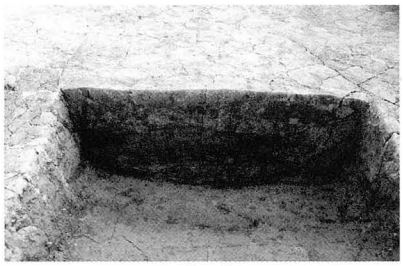


5　SK505 土層断面　南→

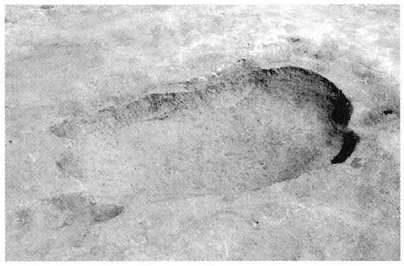


6　SK506 全景　東→

7　SK510 全景　南→

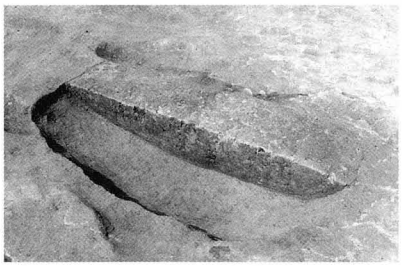


8　SK510 土層断面　南→

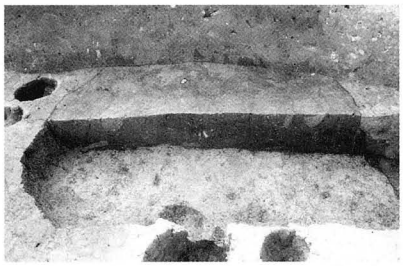


9　SK511 全景　北→

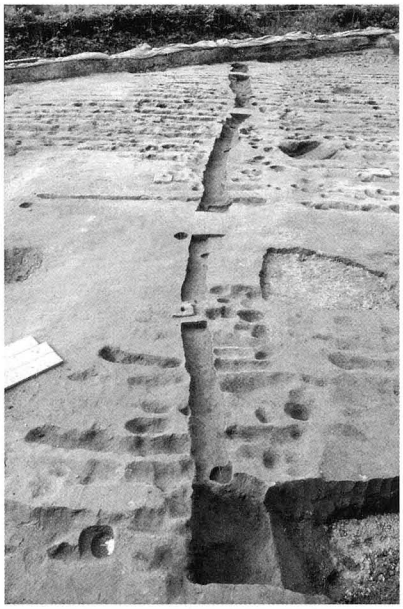
写真 9　西側東調査区（2002-2 区）


1　SK511 土層断面　南東→

2　SK513 全景　北→

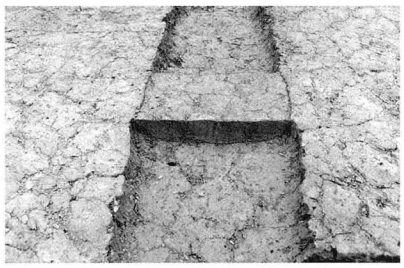

3　SK513 土層断面　東→

4　SK514 全景　北東→

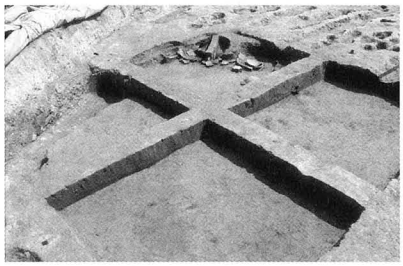

6　SD502 全景　南→

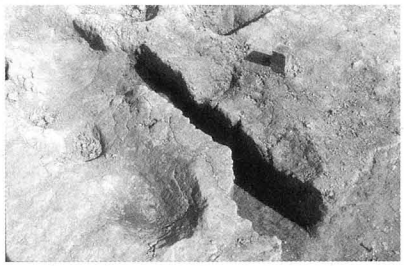
7　SD502 土層断面　南→

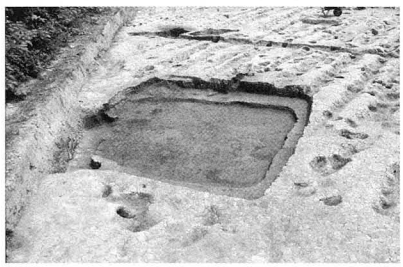
5　SK514 土層断面　北→

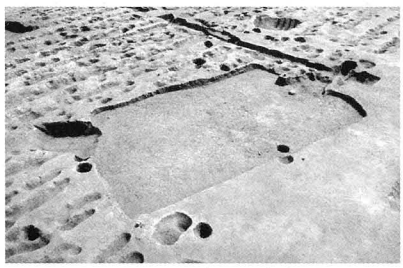

8　SD503 土層断面　南→

9　SI501 全景　南東→


10　SI501 土層断面　南東→


11　SI501 旧煙道土層断面　北→


12　SI501 旧段階全景　西→

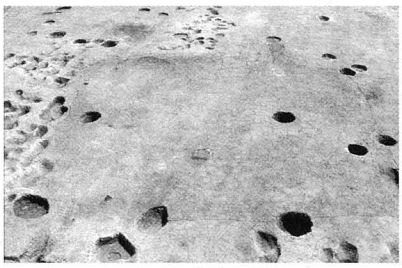

13　SI502 全景　南東→

14　SI502 カマド全景　西→

写真 10　西側東調査区（2002-2 区）

1　SI503 検出　西→

2　SI503 全景　西→

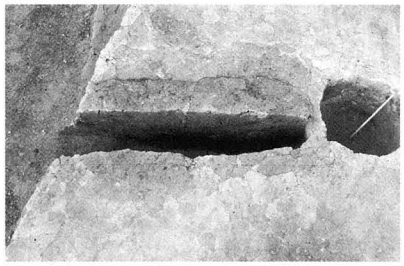


3　SI504 検出　西→

4　SI504 全景　西→

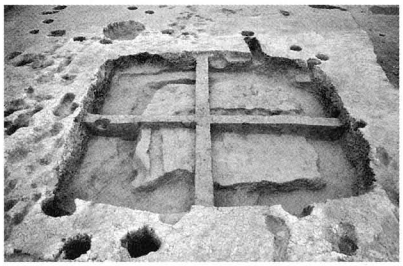
5　SI504 カマド全景　西→

6　SI504 カマド周辺土器類出土　西→



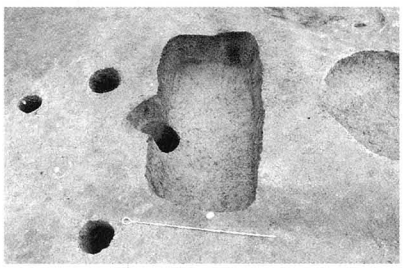
7　SI504 旧煙道土層断面　南→

8　SI504-P1 遺物出土　南西→

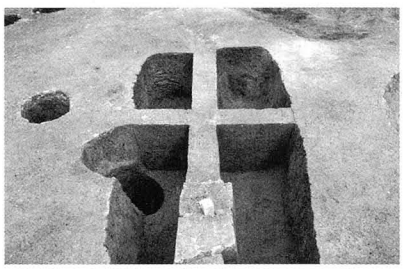


9　SI504 掘り方　西→

10　99-3 区全景　南西→

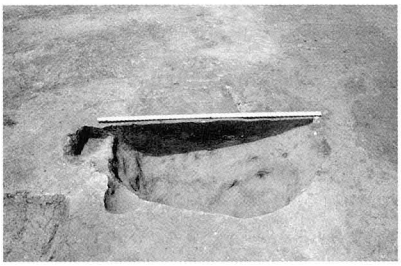


11　SK344 全景　西→

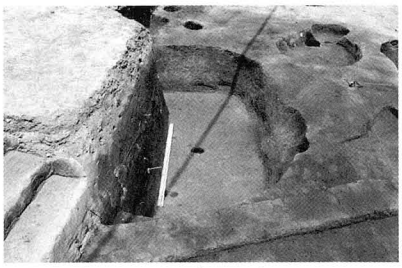


12　SK344 土層断面　西→

写真 11　西側東調査区（2002-2 区）・西側西調査区（99-3 区）


1　SK338 拡張後土層断面　東→

2　SK338 遺物出土　南東→


3　SK351 全景　南→

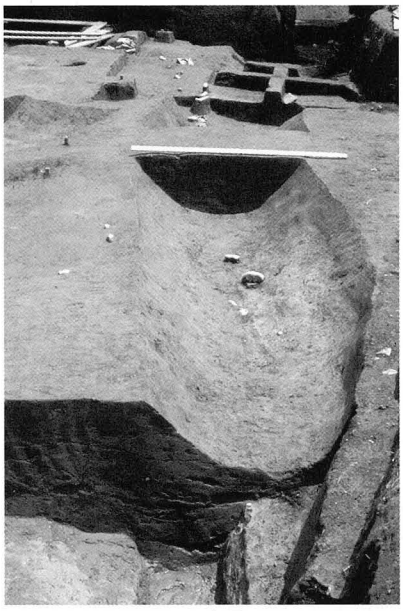
4　SK360 全景　東→

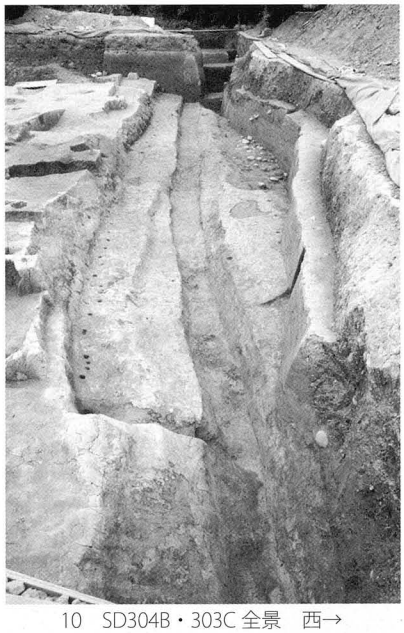
5　SK360 土層断面　東→

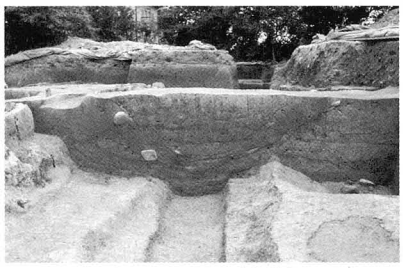
6　SD302 全景　南→

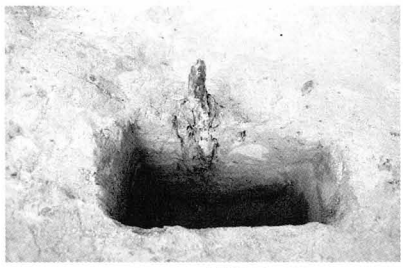
7　SD303A 全景　東→

8　SD303B 全景　東→


9　SD304A 全景　西→


10　SD304B・303C 全景　西→


11　SD304AB・303C 土層断面　西→


12　SD304B 杭断面　西→

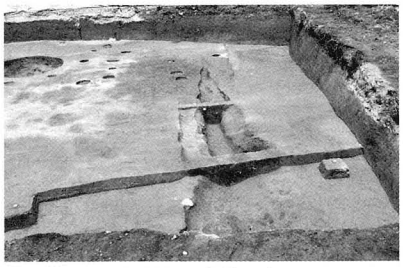
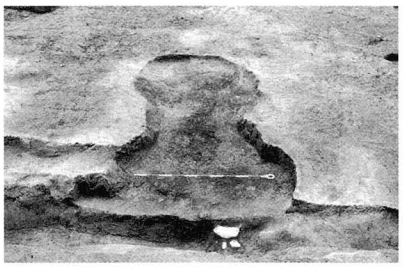
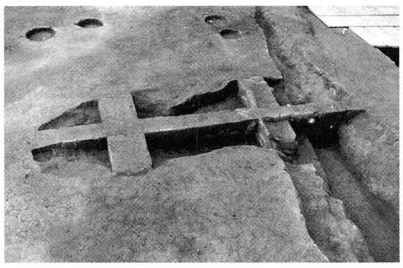

13　SD317 全景　南→

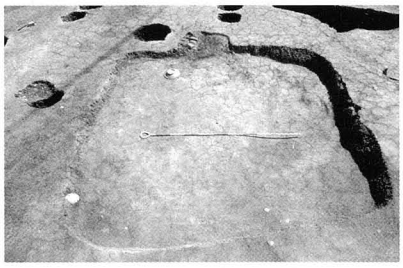
写真 12　西側西調査区（99-3 区）



1　SO301 全景　東→

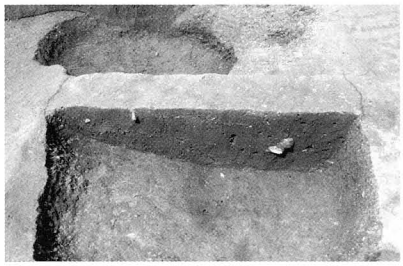


2　SO301 土層断面　南→



3　SI304 全景　北→

4　SK501・502 全景　南西→

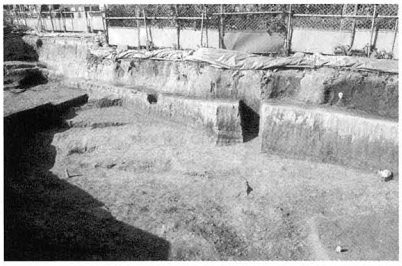


5　SK502 土層断面　東→

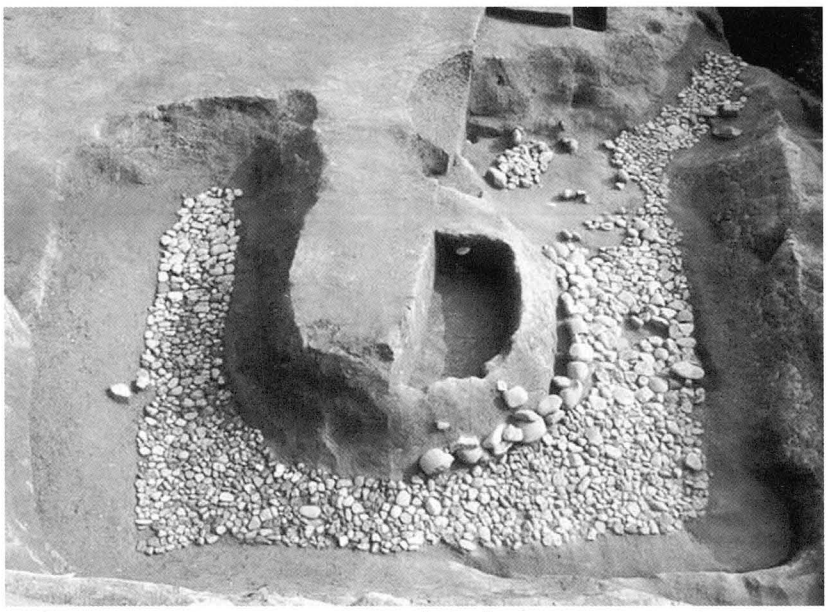
6　SD501 全景　西→

7　SD501 東側土層断面　西→

8　SD504A 全景　西→



9　SD504B 壁・底面　南東→

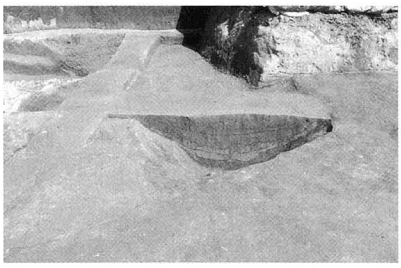


10　SD505 全景　北→

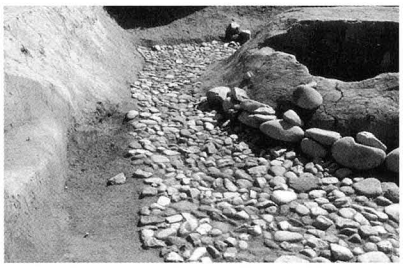
11　SD505 作業状況

12　SD505 再検出　南西→

写真 13　西側西調査区（99-3 区・2002-1 区）



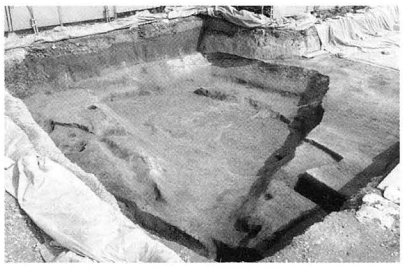
1　SD505 溝東土層断面　南→



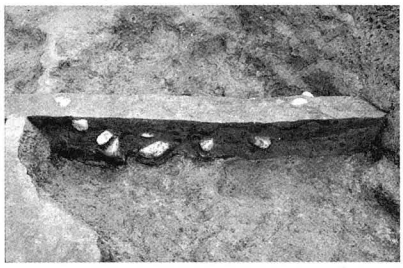
2　SD505 石敷東側部　北→

3　SD505 石敷除去　北西→

4　SD505 積土土層断面　西→



5　SD505 底面検出　南西→



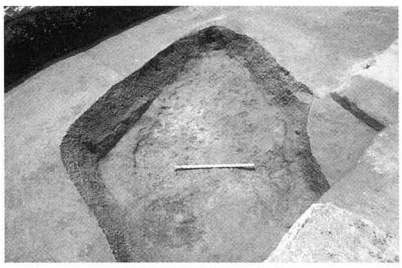
6　SD505 底面下土坑土層断面　南→

7　SD505 底面下土坑全景　南西→

8　99-4 区東側全景　北西→

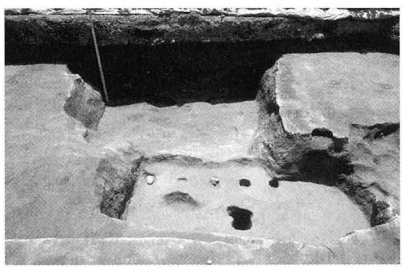
9　99-4 区南側全景 1　西→

10　99-4 区南側全景 2　東→



11　SK321 全景　北東→

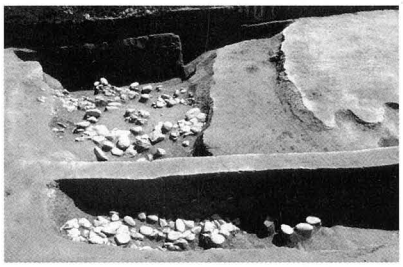
12　SK321 土層断面　南東→



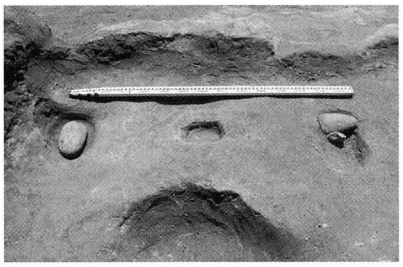
13　SK322 全景　南→

写真 14　西側西調査区（2002-1 区・99-4 区）

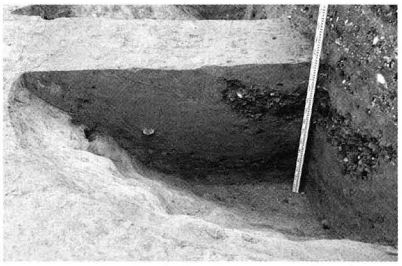
1　SK322 土層断面　北東→



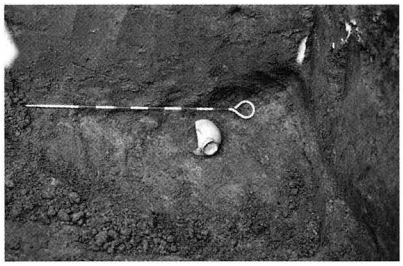
2　SK322 礫等出土　北→



3　SK322 礎板石検出　南→



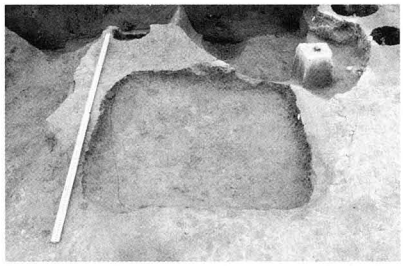
4　SK324 土層断面　西→



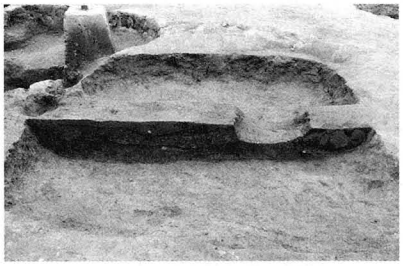
5　SK324 陶器出土　西→

6　SK325 全景　西→

7　SK325 礫類検出　西→



8　SK337 全景　東→



9　SK337 土層断面　南→

10　SD316 全景　南→

11　SD322 全景　東→

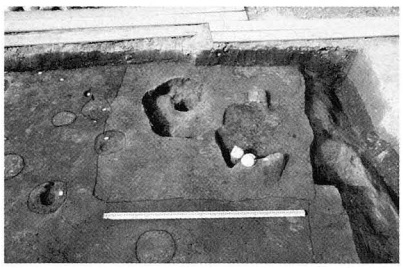
12　SD322 東壁断面　西→

13　SI303 全景　南西→

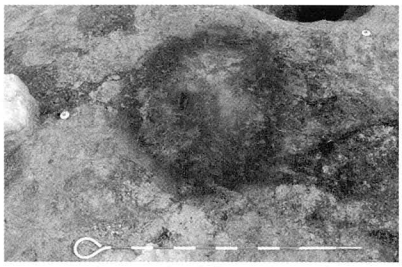
14　2000-5 区西側全景　南→

写真 15　西側西調査区（99-4 区）・東側調査区（2000-5 区）

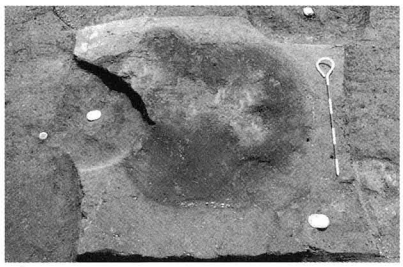
1　2000-5 区西側全景　南西→

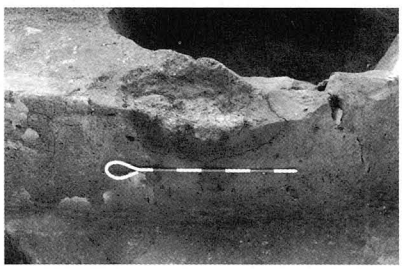

2　SI402 検出　南→

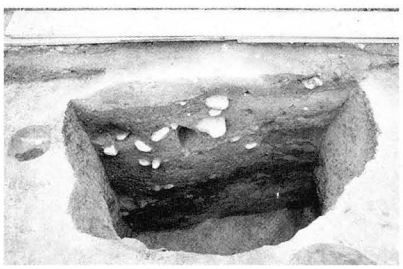
3　SI402 全景　西→


4　SI402 炉跡全景　北西→

5　1 号炉跡全景　北→

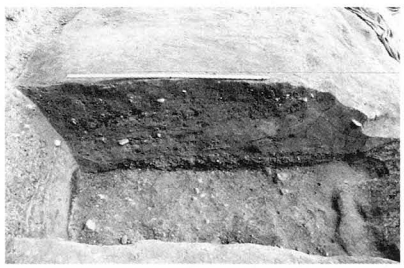

6　2 号炉跡全景　西→


7　3 号炉跡全景　東→


8　SK409 全景　東→

9　2000-5 区南壁断面　北→

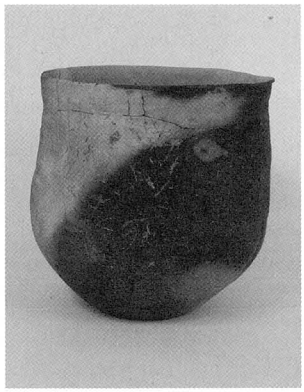
10　SD413 全景　西→

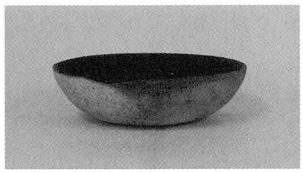

11　SD415 土層断面　西→

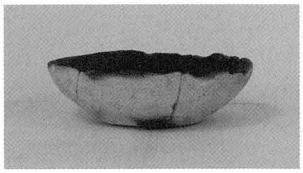
12　2000-8 区全景　西→

写真 16　東側調査区（2000-5・8 区）

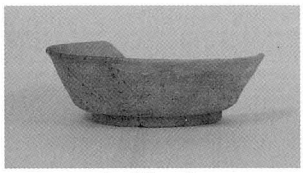
1　50－1


2　21－1


3　32－1


4　32－2

5　32－5

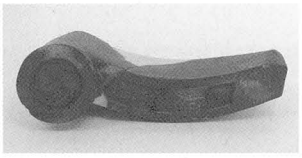

6　33－3

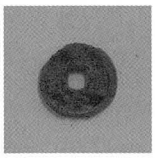
7　22－5

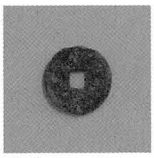
8　26－8

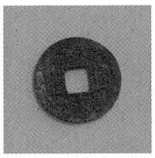
9　56－4

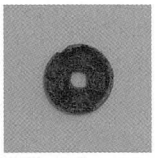
11　57－2

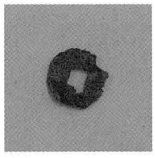

10　57－1

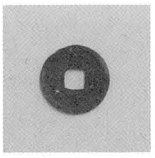

12　10－3

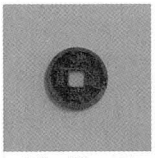

13　18－15

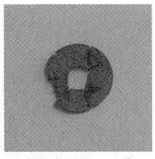

14　18－16


15　28－8


16　51－4

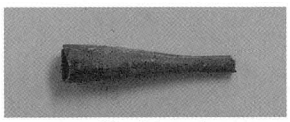

17　51－5


18　51－7

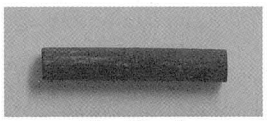

19　51－8

20　28－2

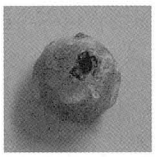
21　28－5


22　28－4

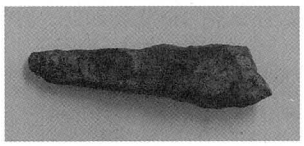
23　51－15

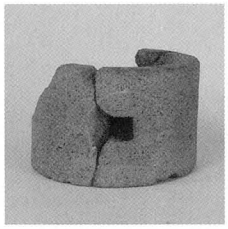

24　10－1

25　28－6


26　28－7

27　48－2


28　51－13


29　16－8

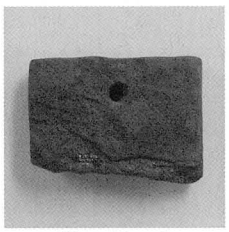
30　18－17

31　20－1

32　20－2

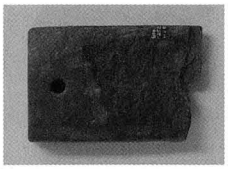
33　20－4

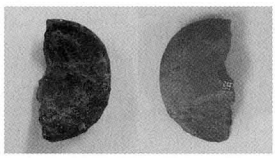
34　22－2

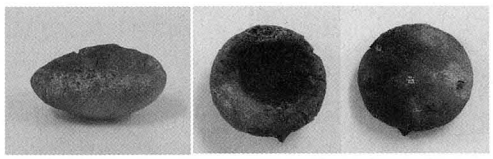

35　48－3

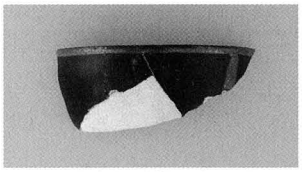
36　48－6

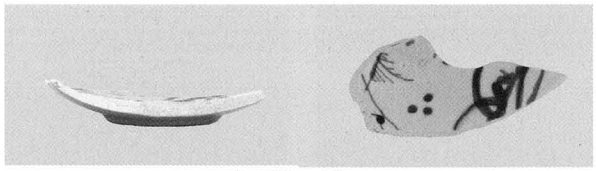
写真 17　出土遺物 1　（中央調査区）

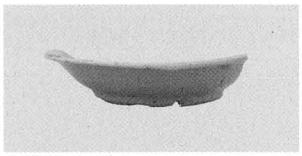

1　51－16

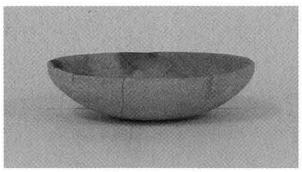

2　19－6

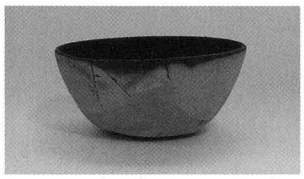

3　19－7

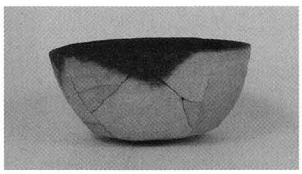

4　18－6


5　25－13


6　25－15

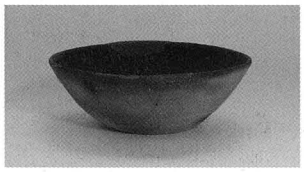

7　74－2

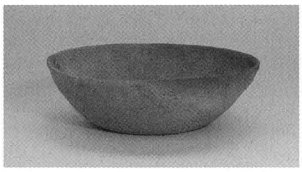

8　86－1


9　86－4

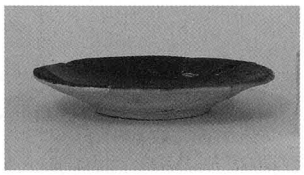
10　86－5

11　87－3

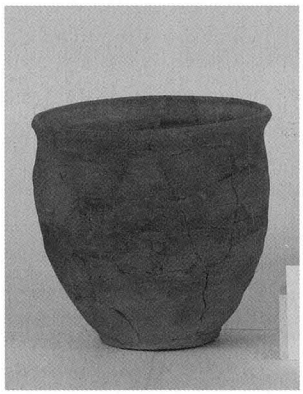

12　93－1


13　93－2

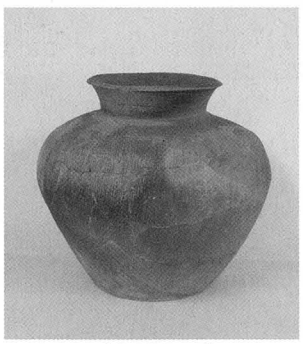
16　94－1


14　93－3

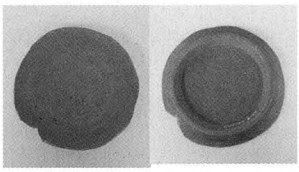
15　93－4

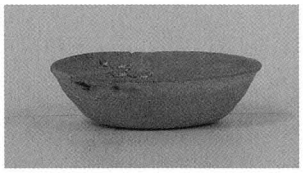

17　94－3

18　95－1

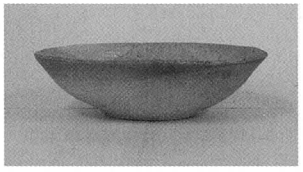

19　88－2

20　73－1


21　89－3

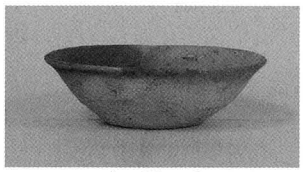

22　89－4

23　89－5


24　96－1

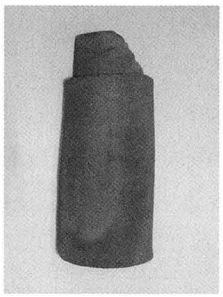
25　96－2

写真 18　出土遺物 2　（中央調査区・西側東調査区）


1　96－3

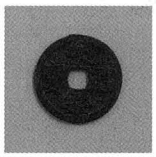
2　76－7

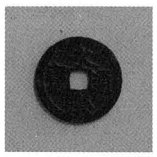
3　98－2

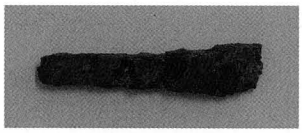

4　98－1

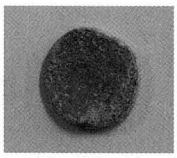
5　69－6

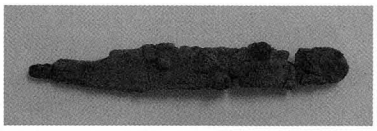
6　69－7


7　74－3

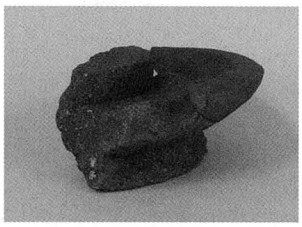

8　83－2

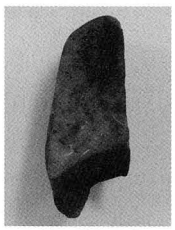

9　72－1

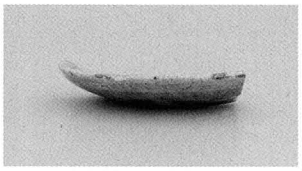

10　77－4

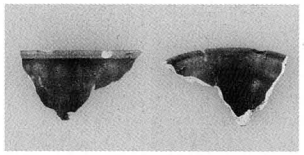

11　97－2

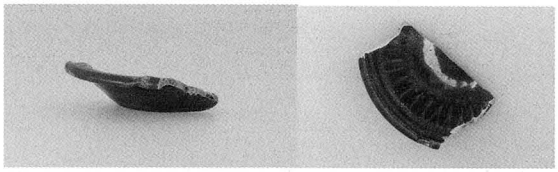
12　97－3

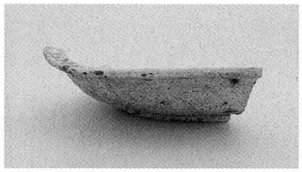

13　77－6

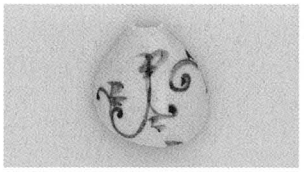

14　77－8


15　69－4

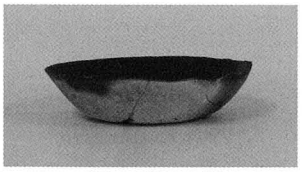

16　69－5

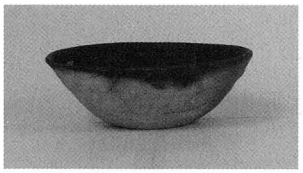

17　76－11

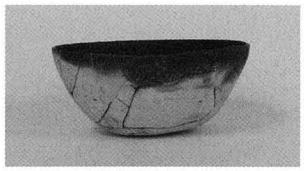

18　76－12

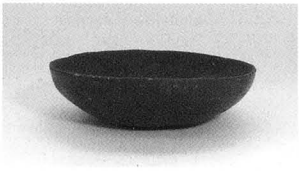

19　76－13

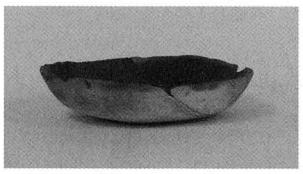
20　125－6

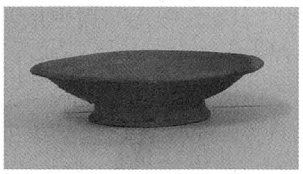

21　115－10

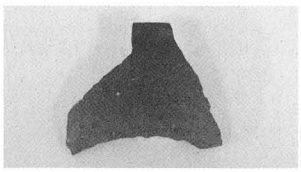

22　137－12


23　176－1

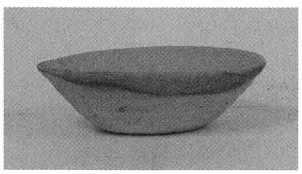

24　176－2


25　176－3


26　127－1


27　129－9

28　137－17


29　138－2

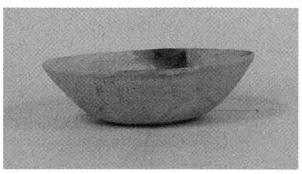
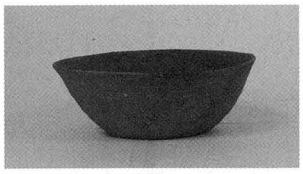
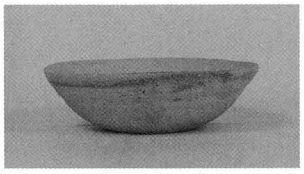
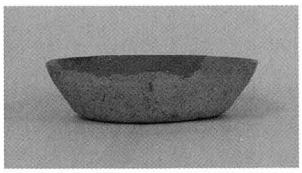
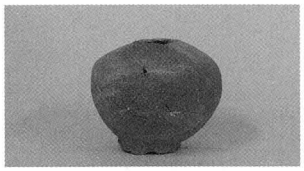

30　138－4

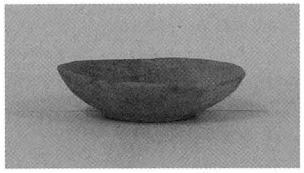
写真 19　出土遺物 3　（西側東調査区・西側西調査区）

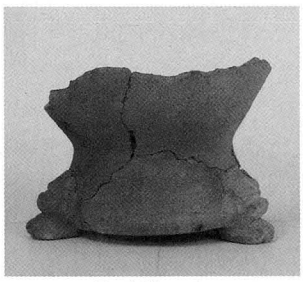

1　138－7


2　138－9


3　138－11


4　138－12

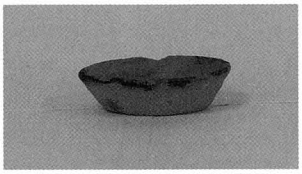

5　111－2

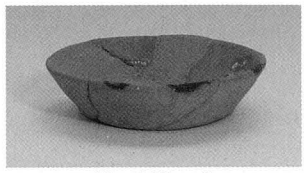

7　150－1

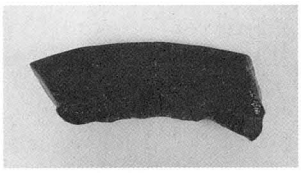
8　166－2

9　166－3

6　133－3

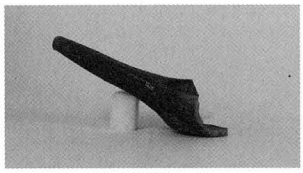

10　166－4

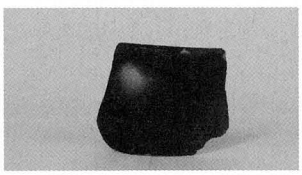

11　166－6


12　107－2

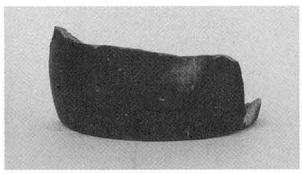
13　119－1

14　128－1

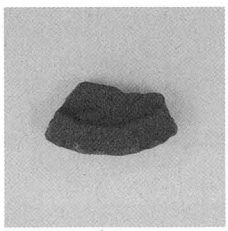

15　128－2


16　133－10

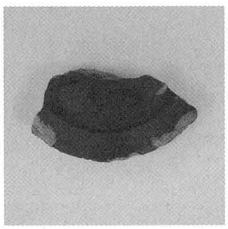
17　151－5


18　152－2

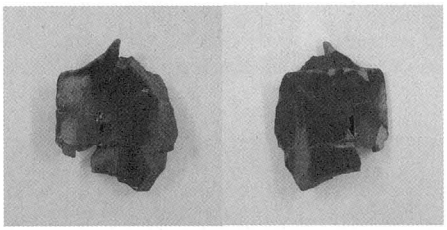
19　152－4

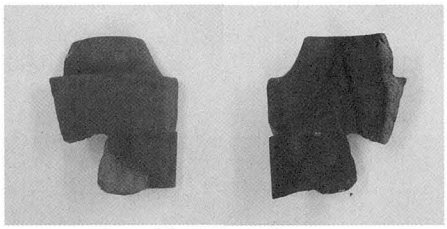

20　135－2

21　159－9


22　159－10

23　159－11


24　159－12


25　159－13

26　171－1

写真 20　出土遺物 4 （西側西調査区）

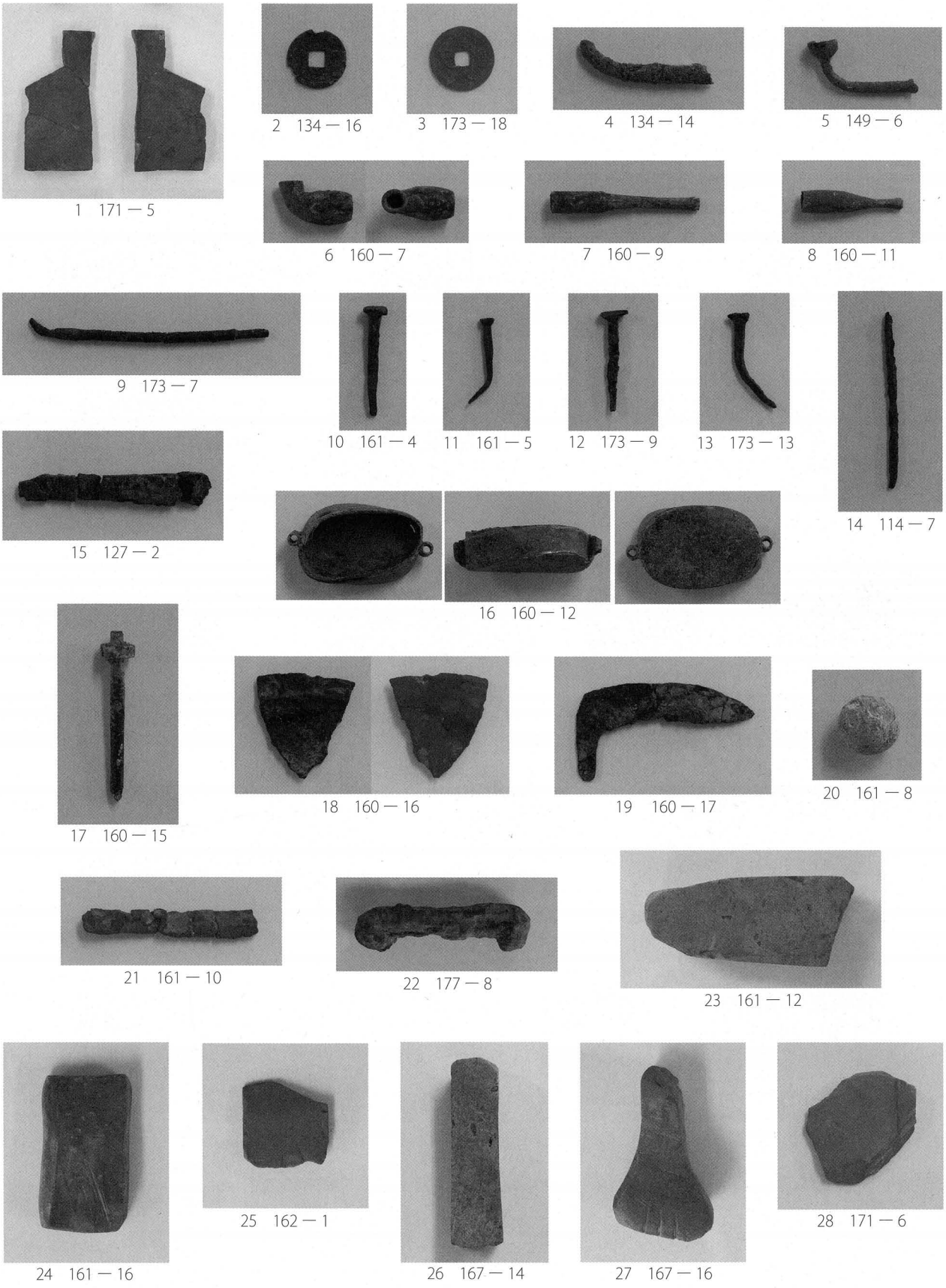
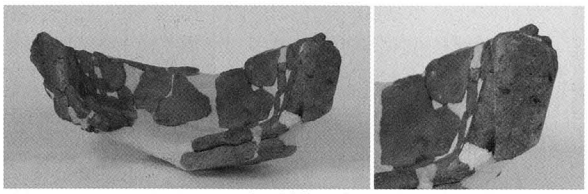
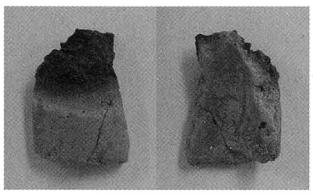


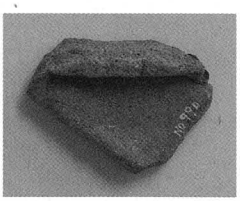
写真 21　出土遺物 5　（西側西調査区）



1　108－1

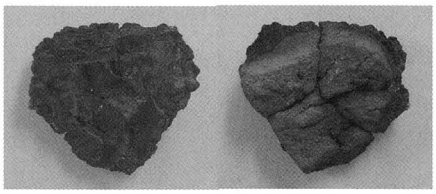


2　119－13

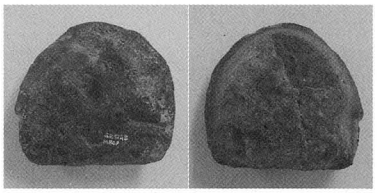


3　120－2

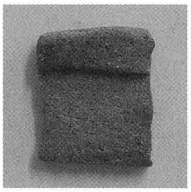
4　120－3



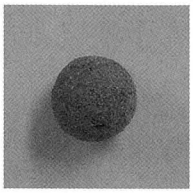
5　120－6



6　120－7

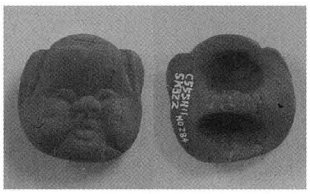


7　129－5

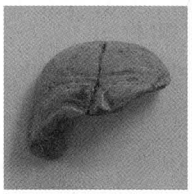


8　145－1

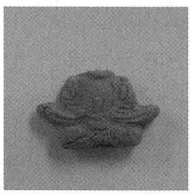
9　162－6



10　162－7

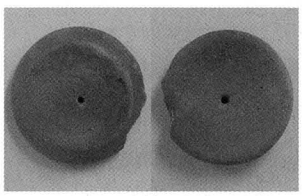


11　162－8

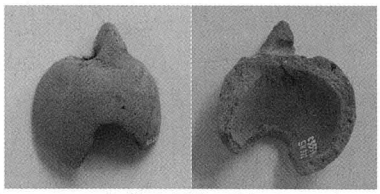


12　162－9

13　162－11

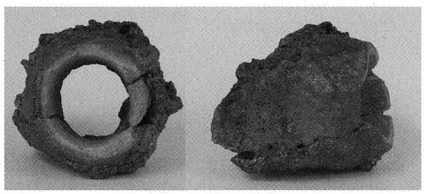


14　162－12

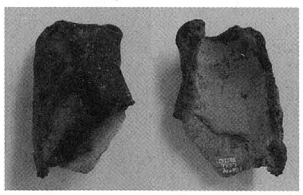


15　162－14

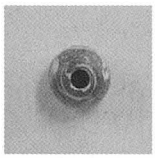
16　162－15



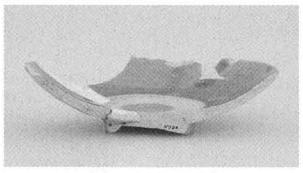
17　162－16



18　177－9

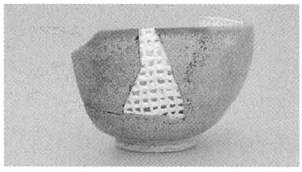


19　115－6

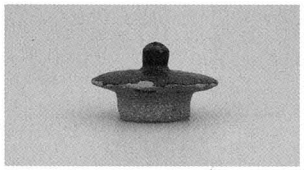


20　111－10

21　112－14

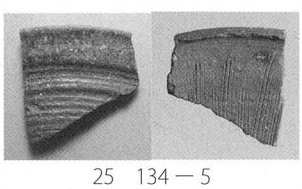


22　122－2



23　131－2

24　133－12



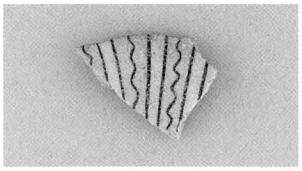
25　134－5

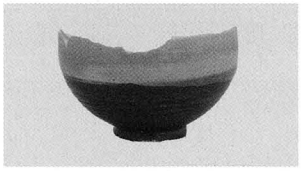
写真 22　出土遺物 6 （西側西調査区）

1　134－8

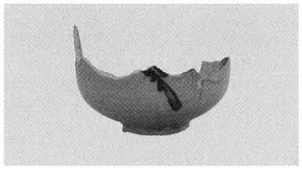
2　134－11

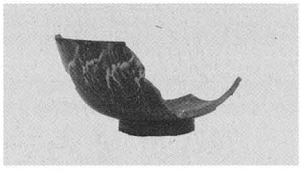
3　142－3

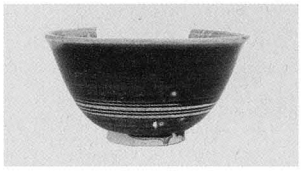

4　142－4


5　152－8

6　152－9


7　152－10

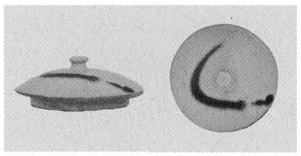

8　152－11


9　153－1

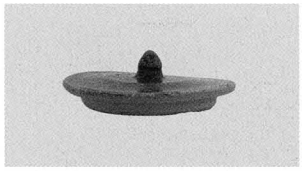
10　153－2

11　153－3

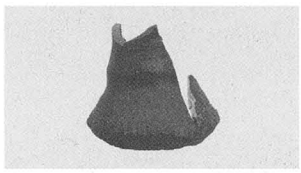
12　153－15


13　155－1

14　155－2

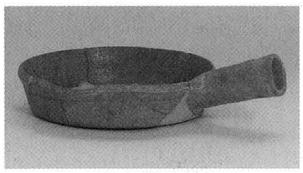

15　155－5

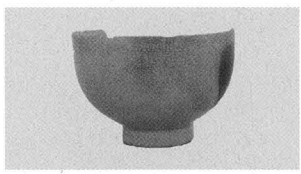
16　155－7

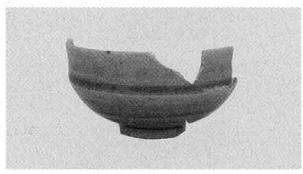

17　155－8

18　155－12

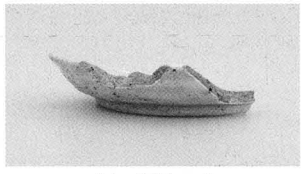
19　156－7

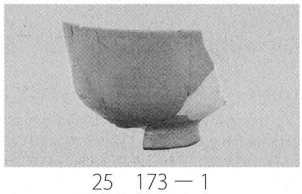

20　157－1

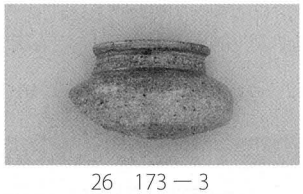

21　167－1


22　168－9

23　172－3

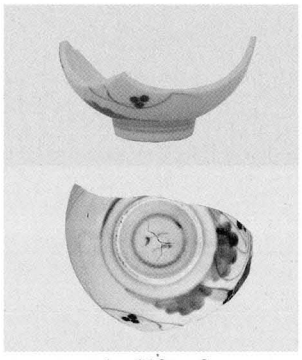

24　172－9

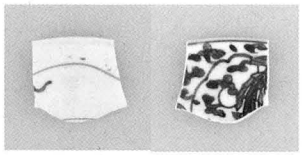

25　173－1

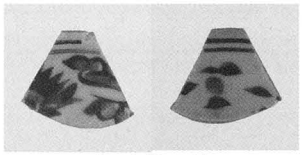

26　173－3

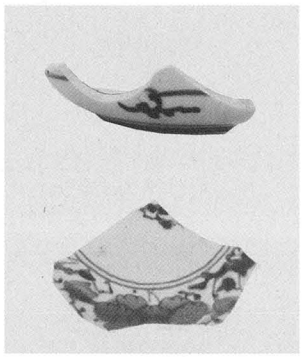
27　177－3

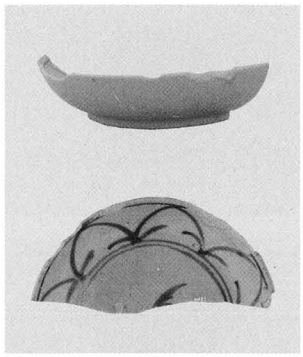
写真 23　出土遺物 7 （西側西調査区）

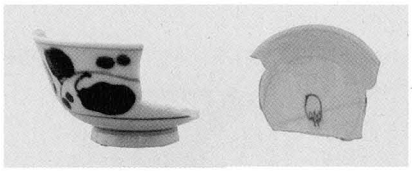

1　112－2

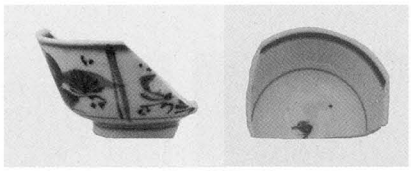

2　143－6

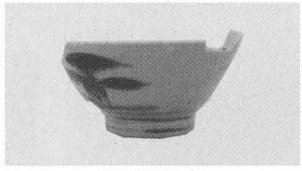

3　143－7

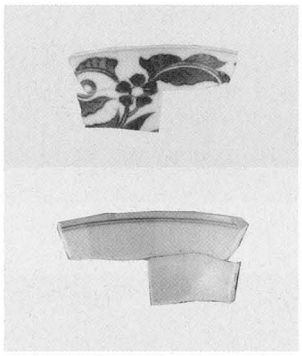

4　143－8

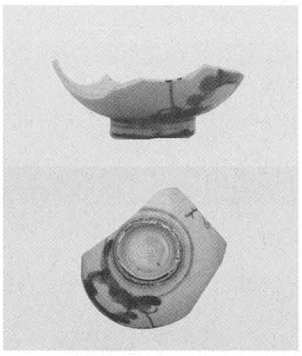

5　143－12

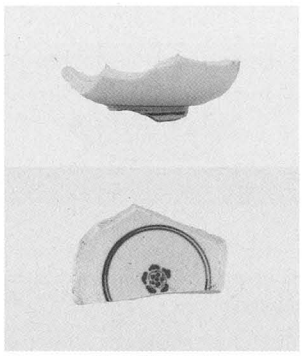

6　157－5

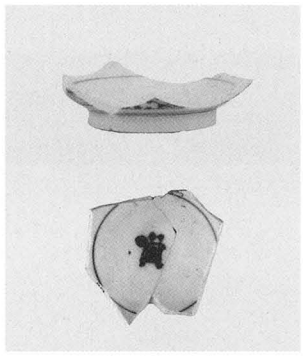

7　157－6

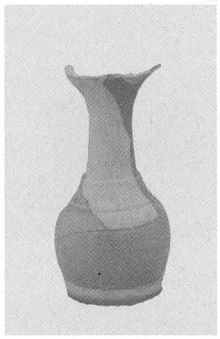

8　157－7


9　157－11

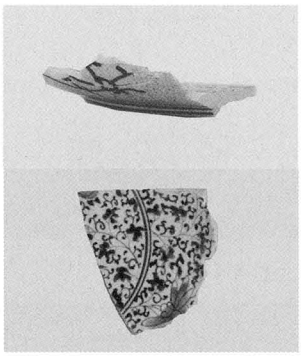

10　158－2

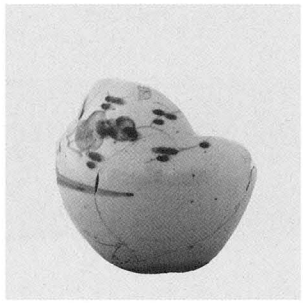

11　158－3


12　158－4

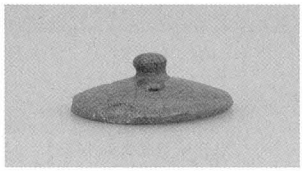

13　159－5

14　167－10


15　170－11


16　170－12

17　188－9


18　187－2

19　188－1

写真 24　出土遺物 8　（西側西調査区・東側調査区）

報告書抄録

ふりがな	ようしゅえんいせきだい２じ・ほしゅんいんまえいせきはっくつちょうさ
書名	養種園遺跡第２次・保春院前遺跡発掘調査
副書名	都市計画道路「南小泉茂庭線」関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第344集
編著者名	渡部弘美
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　仙台市青葉区国分町3丁目7-1　TEL022-214-8894
発行年月日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ようしゅえんいせき 養種園遺跡	せんだいしわかばやしく 仙台市若林区 みなみこいずみいっちょうめ 南小泉１丁目、 ぶんかまち 文化町 地内	04100	01349	38° 14′ 35″	140° 54′ 11″	1996. 7.29 ～ 2002. 10.18	4,630㎡	都市計画道路建設に伴う事前調査
ほしゅんいんまえいせき 保春院前遺跡	せんだいしわかばやしく 仙台市若林区 ほしゅんいんまえちょう 保春院前丁、 ろくじゅうにんまち 六十人町 地内	04100	01555	38° 14′ 36″	140° 54′ 9″		837㎡	都市計画道路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
養種園遺跡	集落跡 屋敷跡	弥生時代	土器棺墓	弥生土器	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡	土師器、須恵器、古瓦	
		中世	土坑墓 道路跡 竪穴建物跡 掘立柱建物跡 堀跡 炉跡	古銭、陶器、炉壁、 鍛造剥片、鋳型	
		近世	堀跡 土坑 池跡？	陶器、磁器、近世瓦、 土師質土器、瓦質土器	
保春院前遺跡	集落跡 屋敷跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡	土師器、須恵器、古瓦	
		中世	土坑	鋳型、瓦質土器	
		近世	堀跡 掘立柱建物跡 土坑 窯跡 池跡？	陶器、磁器、瓦質土器、 土師質土器、炉壁、 フイゴの羽口、古銭	

仙台市文化財調査報告書第344集

養種園遺跡第２次 保春院前遺跡発掘調査報告書

都市計画道路「南小泉茂庭線」関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ

2009年３月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目７－１

文化財課　022（214）8894

印刷　株式会社 建設プレス

仙台市青葉区折立三丁目2－10

TEL 022（302）0177